

上  
罐  
子  
遺  
跡  
—  
第  
4  
次  
調  
査  
—  
谷  
部  
編  
—

糸  
島  
市  
文  
化  
財  
調  
査  
報  
告  
書  
第  
28  
集  
2  
0  
2  
2

糸  
島  
市  
教  
育  
委  
員  
会

# 上罐子遺跡

— 第4次調査 谷部編 —

福岡県糸島市有田字上罐子所在遺跡の発掘調査報告書

糸島市文化財調査報告書

第28集

2022

糸島市教育委員会

# 上 罐 子 遺 跡

— 第4次調査 谷部編 —

福岡県糸島市有田字上罐子所在遺跡の発掘調査報告書

糸島市文化財調査報告書

第28集



2022

糸島市教育委員会



斧柄



鍬・鋤



組み合わせ式ヤス (W239)



杓子



片口・容器



背負梯子・背負梯子状木製品



同左 (解体状況)





舟材 (W262)



容器 (W323)



容器 (W322)



琴 (W361)



琴 (W362)



臼と豎杵



作業台と横槌



貨泉



人物線刻板 (W366)





動物形 (W367)



動物形 (W368・W369)



盾形 (W373)



鼠返し



扉板 (古墳時代)

## 序

弥生時代の木器が大量に出土したことで話題となった上籙子遺跡の発掘調査が行われたのは平成6（1994）年度の事です。発掘現場では、集落近くの谷底から弥生時代の人々の暮らしを髣髴させる遺物が次々と発見されましたが、とりわけ木器は伊都国の成立・隆盛期とされる弥生時代中期後半の生活用具が多くを占め、これまで謎とされてきた伊都国びとの暮らしぶりを知るうえで大きな成果として注目されました。

出土した木器の中には、わが国で初めの出土となった弥生時代の背負梯子をはじめ、動物を象った彫物、人物や動物などが描かれた板などもあり、研究者のみならず市民のみなさまからも高い関心を集めました。

これらは、各地の文化財展や普及図書などでも広くご紹介いただき、まさに本市を代表する文化財の一つとして高く評価され、平成11年5月には、一括して市の文化財に指定されました。

懸案となっていた保存処理についても、主だった資料についてはほぼ作業を終え、合わせて実測等の記録も進められたことで、ようやく報告書刊行の運びとなりました。

今後、本報告書の刊行を契機として、糸島地方における弥生時代の歴史研究がますます活性化し、ひいては広く文化財保護思想の高揚、学術研究資料として活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にわたり30度を超える炎天下の日が続く酷暑のなか、また、雪の降る極寒の現場における発掘作業、また、整理や保存処理作業に従事いただいた作業員のみなさん、ならびに本発掘調査に暖かいご理解、御支援を賜りました関係各位に深く感謝する次第です。

令和4年3月31日

糸島市教育委員会  
教育長 家宇治正幸

# 例 言

1. 本書は福岡県糸島市字有田746番地1他一帯に所在する上籬子遺跡において平成6年度に実施した発掘調査のうち、谷部の調査成果の報告書である。
2. 発掘調査は住宅建設事業計画に伴う事前調査として実施した。
3. 現地の調査は、平成6年6月1日から翌7年3月31日まで実施し、資料整理、報告書作成は令和3年度まで実施した。
4. 現地の調査は岡部裕俊、野田純子が担当した。
5. 出土遺物の実測は、土器・土製品を平尾和久（福岡大学）、岡部、川上辰子、木器は島影やよい、野田、岡部、大庭孝夫（奈良大学）、斎藤由美（奈良大学）が、石器、ガラスを、岡部、島影、山崎賀代子が行った。なお、遺物の観察表作成は岡部指導のもと島影、米倉法子、友池真由美が行った。
6. 本書に使用した記録類の製図は、主に岡部、藤野さゆりが担当したが、遺構図、土器については脇谷（旧姓牟田）華代子の協力を得た。
7. 貨泉のX線透過写真の撮影については西原歯科医院（西原義一院長）にご協力を賜った。また、貨泉の保存処理、黒色顔料付着土器の赤外線撮影については、福岡市埋蔵文化財センターにご高配を賜った。
8. 遺構写真撮影は岡部、野田が行い、航空写真の撮影は、(有) 空中写真企画に委託した。遺物写真はフォトハウスおか、(有) システム・レコが行ったが、一部は岡部が撮影した。
9. 木器の保存処理は（公財）元興寺文化財研究所、(株)京都科学に委託した他、本市教育委員会が直営で実施した。個々の処理方法等については、遺物観察表中に記している。
10. 木器の樹種同定は環境考古研究所、文化財科学研究センターが実施したが、一部に保存処理業者等が実施したものもある。
11. 本書に掲載した資料・記録は、伊都国歴史博物館で収蔵保管している。
12. 本書の編集は、岡部が行った。
13. 本書の作成にあたり、多くの皆様にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。  
池邊元明 織野英史 片多雅樹 金原明 金原正明 金原正子 金原美奈子 金原裕美子  
上角智希 神谷義則 久々忠義 久保伸洋 黒須亜希子 小池史哲 五代雄資  
塩見恭平 設楽博巳 柴田剛 梶山林継 田崎博之 谷口肇 塚本敏夫 常松幹雄  
寺沢薫 中川正人 馬場聖美 春成秀爾 比佐陽一郎 藤田三郎 細川金也 穂積裕昌  
本田光子 増田啓 水ノ江和同 森浩一 吉田晶 渡部芳久 以上50音順
14. 平成8年30日・31日（土・日）には、上籬子遺跡から出土した木器をテーマに第2回出土木器研究会が開催され、各地からご参集いただいた研究者各位から多くの指導・助言を賜った。記して感謝の意を表したい。  
荒井格 飯塚武司 石井扶美子 伊藤健司 植田直見 上原真人 扇崎由 大橋隆司  
笠原潔 川崎志乃 川端正夫 木村直之 工楽善通 末永崇 高谷和生 中川律子  
樋上昇 藤井裕之 古野徳久 別府洋二 村上由美子 山口譲治 安川満 山崎和文  
山下平重 山口史朗 山田昌久 吉村佐紀恵 吉本健一 以上50音順

# 本 文 目 次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織と作業の流れ	1
II. 位置と環境	
1. 上籬子遺跡の位置的環境と周辺の古代遺跡	2
2. 上籬子遺跡の調査経過	5
III. 第4次調査の記録	
1. 調査の概要	7
2. 資料の整理から報告まで	7
3. 調査区の設定	7
4. 調査地点の基本層位と遺構・遺物の概要	8
5. 弥生中期後半～中期末の遺構と包含層出土遺物	12
(1) テラス状遺構	12
(2) 木器溜まり	20
6. 弥生時代中期後半～末の遺物	20
(1) 概要	20
(2) 土器	22
(3) 木器	25
1) 工具	25
2) 農具	27
3) 狩猟具	34
4) 漁労具	34
5) 紡織具	35
6) 運搬具	36
7) 食事具	37
8) 容器	38
9) 楽器	42
10) 祭祀具	45
11) 雑具	47
12) 建築材	48
13) その他の木製品	49
14) 補遺 葛東	51
7. 弥生時代後期の遺構、遺物	135
(1) 概要	135
(2) 4層出土土器	136



# 図版目次

発掘調査中の上籬子遺跡越しに可也山をのぞむ  
(南東から)

1	第4次調査地点全景 (北から)
2 - a	谷部1～4区 (北から)
- b	同左 (南から)
- c	谷部5～10区 (南から)
3 - a	1区北壁土層 (南から)
- b	2区東壁土層 (西から)
- c	5区北壁土層 (南から)
- d	2区東壁南側落込み土層 (西から)
4 - a	4区1号木器溜まり近景 (東から)
- b	4区2号木器溜まり近景 (東から)
- c	4区5層土器出土状況
- d	4区5層大型広口壺出土状況
- e	4区5層P18出土状況
- f	4区遺物出土状況
5 - a	4区北W395他出土状況 (西から)
- b	4区北木器出土状況
- c	4区W8,W264他出土状況
- d	4区中央W406他出土状況 (南から)
- e	4区南西W403,W431出土状況 (南東から)
- f	3区W131他出土状況 (北から)
6 - a	4区W3他出土状況
- b	7区W16出土状況
- c	7区W145出土状況
- d	3区W132出土状況
- e	4区W84出土状況
- f	6区W107出土状況
- g	4区W120出土状況
- h	3区W202出土状況
7 - a	3区W186出土状況
- b	4区W767出土状況
- c	6区W262出土状況
- d	4区W259出土状況
- e	4区W275出土状況
- f	3区W277出土状況
- g	2区W294出土状況
- h	9区W312出土状況

8 - a	7区W298出土状況
- b	3区W239出土状況
- c	3区W323出土状況
- d	5区W330出土状況
- e	4区W340他出土状況
- f	7区W341出土状況
- g	3区W338出土状況
- h	5区W335出土状況
9 - a	4区W357出土状況
- b	7区W356出土状況
- c	4区W360出土状況
- d	3区W355出土状況
- e	4区W384出土状況
- f	6区W377出土状況
- g	7区W404出土状況
- h	2区W399出土状況
10 - a	3区W400他出土状況
- b	4区W401出土状況
- c	3区炭化鼠返し出土状況
- d	4区W436出土状況
- e	2区W409他出土状況
- f	3区W427出土状況
- g	2区W440出土状況
- h	4区W431出土状況
11 - a	5区北4層土器出土状況
- b	5区北土器出土状況近景
- c	3区P52出土状況
- d	3区P75他出土状況
- e	4区P71出土状況
- f	3区P52出土状況
- g	5区P53出土状況
12 - a	1区1号土壙下層遺物出土状況 (東から)
- b	同左下層遺物出土状況近景 (南から)
- c	同右上層遺物出土状況
- d	6区2号土壙上層遺物出土状況
- e	同左土器出土状況近景
- f	同左白底部の土器嵌入状況 (東から)
- g	6区2号土壙下層遺物出土状況 (東から)
- h	同上ミニチュア高坏出土状況近景 (東から)
- i	同上完掘状況 (東から)

(3)	3層出土土器	136
(4)	2区東部土器溜り出土土器	139
(5)	遺構	147
1)	1号土壙	147
2)	2号土壙	147
3)	3号土壙	152
4)	4号土壙	152
5)	3号木器溜り	152
6)	4号木器溜り	154
8.	古墳時代の遺構、遺物	162
(1)	概要	162
(2)	貯水遺構	162
(3)	取水遺構・導水遺構	163
(4)	4区杭群	167
(5)	5号土壙	168
(6)	6号土壙	168
9.	包含層出土施文土器・土製品・玉・石器・貨泉・骨角器	173
(1)	施文土器	173
(2)	土製品	173
(3)	玉	174
(4)	石器	174
(5)	貨泉	175
IV.	自然科学的分析結果	
1.	上籬子遺跡第4次調査における環境と植生	180
2.	上籬子遺跡出土木製遺物の樹種同定結果	202
3.	木製品表面塗装膜断面観察結果	215
4.	糸島市上籬子遺跡4次調査出土ガラス資料の保存科学的調査	233
5.	上籬子遺跡出土青色遺物の分析結果	240
V.	まとめ	
1.	谷部における土地利用の変遷	265
2.	出土遺物	267
3.	おわりに	270

# 挿 図 目 次

13-a	6区3号土壙遺物出土状況(南から)	32	5層出土木器16(容器②)	第1図	平成8年の出土木器研究会風景	1
-b	6区4号土壙遺物出土状況(東から)	33	5層出土木器17(容器③)	第2図	伏龍遺跡低墳丘墓群の調査状況	2
-c	7～8区W478. 479背負梯子 出土直後の状況	34	5層出土木器18(容器④)	第3図	上鑑子遺跡の位置と周辺の主要遺跡(1/25,000)	3
-d	W478. 479同左 清掃後	35	5層出土木器19(容器⑤)	第4図	上鑑子遺跡の調査況点(1/2,500)	5
-e	W478近景	36	5層出土木器20(楽器①/琴)	第5図	第3次調査風景	6
-f	W479近景	37	5層出土木器21(楽器②/琴)	第6図	第5次調査風景	6
14-a	4区4号木器溜まり遺物出土状況(東から)	38	5層出土木器22(楽器③/琴板)	第7図	第4次調査地点の区割り(1/800)	9
-b	同上 近景(南東から)	39	5層出土木器23(楽器線刻拡大)	第8図	谷部の土層図①(1/60)	10
-c	同上 近景(南西から)	40	5層出土木器24(祭祀具①)	第9図	谷部の土層図②(1/60)	11
-d	10区遺物出土状況(南から)	41	5層出土木器25(祭祀具②)	第10図	谷部弥生時代中期後半の地形(1/500)	13
-e	2区土師器大型甕出土状況(南から)	42	5層出土木器26(雑具①/鉤・腰掛)	第11図	1区の地形と遺構・木器等の出土状況(1/100)	14
15-a	2区取水・導水遺構全景(東から)	43	5層出土木器27(雑具②/腰掛・火鑽白他)	第12図	2区～3区北部木器等出土状況と取水・導水遺構(古墳時代中期)との関係(1/100)	15
-b	同上(北東から)	44	5層出土木器28(建築材①/刻み梯子・扉・柱)	第13図	3～4区木器等出土状況(1/100)	16
-c	同上(北から)	45	5層出土木器29(建築材②/鼠返し)	第14図	5～6区木器等出土状況(1/100)	17
-d	同上(南から)	46	5層出土木器30(建築材③/柱・扉・他)	第15図	7～8区木器等出土状況(1/100)	18
-e	導水遺構内W503出土状況	47	5層出土木器31(建築材④/板・その他の木製品①)	第16図	9～10区木器等出土状況(1/100)	19
16-a	4区東南杭列検出状況(南から)	48	5層出土木器32(その他の木製品②)	第17図	1号木器溜まり(1/20)と出土土器実測図(1/4)	21
-b	同上(東から)	49	5層出土木器33(その他の木製品③)	第18図	2号木器溜まり実測図(1/20)	21
-c	2区5号土壙検出状況(西から)	50	5層出土木器34(その他の木製品④・狩猟・漁労具)	第19図	P30黒色顔料の展開写真	22
-d	2区6号土壙土器出土状況	51	4層出土土器①	第20図	V層出土土器実測図①(1/4, 1/6)	23
-e	同左完掘状況	52	4層出土土器①	第21図	V層出土土器実測図②(1/4)	24
17	5層出土木器1(工具①斧柄)	53	3層出土土器①	第22図	那珂久平遺跡平鍬着柄状態模式図	29
18	5層出土木器2(工具②斧柄/農具①平鍬他)	54	2区土器溜まり出土土器①	第23図	鹿部東町出土曲柄鍬(1/6)	30
19	5層出土木器3(農具②/平鍬・又鍬)	55	1号土壙出土遺物2号土壙出土遺物	第24図	里田原遺跡出土筒形容器実測図(1/3)	39
20	5層出土木器4(農具③/横鍬・曲柄鍬他)	56	3号土壙・4号土壙出土遺物	第25図	宮ヶ久保遺跡出土高坏形容器実測図(1/4)	40
21	5層出土木器5(農具④/鋤)	57	3号木器溜まり出土W483	第26図	石狩紅葉山遺跡出土石斧カバー実測図(1/3)	50
22	5層出土木器6(農具⑤/臼・竪杵)	58	3号木器溜まり出土W484 1号木器溜まり出土土器	第27図	赤堀茶臼山古墳出土椅子形埴輪	50
23	5層出土木器7(農具⑥/作業台・横槌)	59	1層出土土器	第28図	下稗田遺跡出土弥生時代前期腰掛実測図(1/6)	51
24	5層出土木器8(農具⑦/鎌柄・紡織具)	60	取水・導水遺構・5号土壙出土土器	第29図	包含層出土木器実測図1 工具①(1/4)	52
25	5層出土木器9(漁労具/組み合わせ式ヤス)	61	取水・導水遺構出土木器①	第30図	包含層出土木器実測図2 工具②(1/4)	53
26	5層出土木器10(運搬具/舟・櫂他)	62	取水・導水遺構出土木器②	第31図	包含層出土木器実測図3 工具③(1/4)	54
27	5層出土木器11(食事具①/杓子)	63	谷部出土特殊土器・土製品・玉	第32図	包含層出土木器実測図4 工具④ 雑具①(1/4)	55
28	5層出土木器12(食事具②/杓子)	64	谷部出土石器①	第33図	包含層出土木器実測図5 農具①(1/4)	56
29	5層出土木器13(食事具③/杓子)	65	谷部出土石器②	第34図	包含層出土木器実測図6 農具②(1/4)	57
30	5層出土木器14(食事具④/杓子)	66	谷部出土石器③	第35図	包含層出土木器実測図7 農具③(1/4)	58
31	5層出土木器15(容器①)					



第36図	包含層出土木器実測図8	農具④ (1/4)……………	59	第74図	包含層出土木器実測図46	食事具⑤ (1/4)……………	97
第37図	包含層出土木器実測図9	農具⑤ (1/4)……………	60	第75図	包含層出土木器実測図47	食事具⑥ (1/4)……………	98
第38図	包含層出土木器実測図10	農具⑥ (1/4)……………	61	第76図	包含層出土木器実測図48	食事具⑦ (1/4)……………	99
第39図	包含層出土木器実測図11	農具⑦ (1/4)……………	62	第77図	包含層出土木器実測図49	食事具⑧ (1/4)……………	100
第40図	包含層出土木器実測図12	農具⑧ (1/4)……………	63	第78図	包含層出土木器実測図50	食事具⑨ (1/4)……………	101
第41図	包含層出土木器実測図13	農具⑨ (1/4)……………	64	第79図	包含層出土木器実測図51	容器① (1/2, 1/3) ……	102
第42図	包含層出土木器実測図14	農具⑩ (1/4)……………	65	第80図	包含層出土木器実測図52	容器② (1/4)……………	103
第43図	包含層出土木器実測図15	農具⑪ (1/4)……………	66	第81図	包含層出土木器実測図53	容器③ (1/4)……………	104
第44図	包含層出土木器実測図16	農具⑫ (1/4)……………	67	第82図	包含層出土木器実測図54	容器④ (1/4)……………	105
第45図	包含層出土木器実測図17	農具⑬ (1/4)……………	68	第83図	包含層出土木器実測図55	容器⑤ (1/4)……………	106
第46図	包含層出土木器実測図18	農具⑭ (1/4)……………	69	第84図	包含層出土木器実測図56	容器⑥ (1/4)……………	107
第47図	包含層出土木器実測図19	農具⑮ (1/4)……………	70	第85図	包含層出土木器実測図57	容器⑦ (1/4, 1/2) ……	108
第48図	包含層出土木器実測図20	農具⑯ (1/4)……………	71	第86図	包含層出土木器実測図58	容器⑧ (1/4)……………	109
第49図	包含層出土木器実測図21	農具⑰ (1/6)……………	72	第87図	包含層出土木器実測図59	容器⑨ (1/6)……………	110
第50図	包含層出土木器実測図22	農具⑱ (1/6)……………	73	第88図	包含層出土木器実測図60	容器⑩ (1/6)……………	111
第51図	包含層出土木器実測図23	農具⑲ (1/6)……………	74	第89図	包含層出土木器実測図61	楽器① (1/4)……………	112
第52図	包含層出土木器実測図24	農具⑳ (1/6)……………	75	第90図	包含層出土木器実測図62	楽器② (1/2)……………	113
第53図	包含層出土木器実測図25	農具㉑ (1/6)……………	76	第91図	包含層出土木器実測図63	楽器③ (1/2)……………	114
第54図	包含層出土木器実測図26	農具㉒ (1/6)……………	77	第92図	包含層出土木器実測図64	楽器④ (1/3)……………	115
第55図	包含層出土木器実測図27	農具㉓ (1/6, 1/4) ……	78	第93図	包含層出土木器実測図65	祭祀具① (1/2)……………	116
第56図	包含層出土木器実測図28	農具㉔ (1/8)……………	79	第94図	包含層出土木器実測図66	祭祀具② (1/3)……………	117
第57図	包含層出土木器実測図29	農具㉕ (1/4)……………	80	第95図	包含層出土木器実測図67	祭祀具③ (1/3, 1/4) ……	118
第58図	包含層出土木器実測図30	農具㉖ (1/4)……………	81	第96図	包含層出土木器実測図68	雑具② (1/4)……………	119
第59図	包含層出土木器実測図31	農具㉗ (1/4)……………	82	第97図	包含層出土木器実測図69	雑具③ (1/4)……………	120
第60図	包含層出土木器実測図32	農具㉘ (1/4)……………	83	第98図	包含層出土木器実測図70	雑具④ (1/3, 1/6) ……	121
第61図	包含層出土木器実測図33	農具㉙ (1/4)……………	84	第99図	包含層出土木器実測図71	建築材① (1/10) ……	122
第62図	包含層出土木器実測図34	農具㉚ (1/4)……………	85	第100図	包含層出土木器実測図72	建築材② (1/10)……………	123
第63図	包含層出土木器実測図35	農具㉛ (1/4) 武器・狩猟具 (1/3)……………	86	第101図	包含層出土木器実測図73	建築材③ (1/10)……………	124
第64図	包含層出土木器実測図36	漁労具① (1/3)……………	87	第102図	包含層出土木器実測図74	建築材④ (1/10)……………	125
第65図	包含層出土木器実測図37	漁労具② (1/4)……………	88	第103図	包含層出土木器実測図75	建築材⑤ (1/10)……………	126
第66図	包含層出土木器実測図38	紡織具 (1/4)……………	89	第104図	包含層出土木器実測図76	建築材⑥ (1/10)……………	127
第67図	包含層出土木器実測図39	運搬具① (1/4)……………	90	第105図	包含層出土木器実測図77	建築材⑦ (1/10)……………	128
第68図	包含層出土木器実測図40	運搬具② (1/6)……………	91	第106図	包含層出土木器実測図78	建築材⑧ (1/10)……………	129
第69図	包含層出土木器実測図41	運搬具③ (1/6)……………	92	第107図	包含層出土木器実測図78	建築材⑨ (1/6) ……	130
第70図	包含層出土木器実測図42	食事具① (1/4)……………	93	第108図	包含層出土木器実測図80	その他の木器① (1/4) ……	131
第71図	包含層出土木器実測図43	食事具② (1/4)……………	94	第109図	包含層出土木器実測図81	その他の木器② (1/4) ……	132
第72図	包含層出土木器実測図44	食事具③ (1/4)……………	95	第110図	包含層出土木器実測図82	その他の木器③ (1/4) ……	133
第73図	包含層出土木器実測図45	食事具④ (1/4)……………	96	第111図	包含層出土木器実測図83	その他の木器④ (1/4) ……	134

## 表 目 次

第112図	弥生時代後期の主要遺構等の配置 (1/500) .....	135
第113図	9・10区土器出土状況 (1/30) と主な土器 (1/6) .....	137
第114図	Ⅳ層出土土器実測図① (1/4) .....	140
第115図	Ⅳ層出土土器実測図② (1/4) .....	141
第116図	Ⅳ層出土土器実測図③ (1/4) .....	142
第117図	Ⅲ層出土土器実測図① (1/4) .....	143
第118図	Ⅲ層出土土器実測図② (1/4, 1/6) .....	144
第119図	2区東部土器溜り出土土器実測図1 (1/4) .....	145
第120図	2区東部土器溜り出土土器実測図2 (1/4) .....	146
第121図	1号土壙実測図 (1/40) および出土土器実測図 (1/4) .....	148
第122図	1号土壙出土木器実測図 (1/4) .....	149
第123図	2号土壙実測図 (1/30) および出土石器 (1/2, 1/3) ・土器 (1/4) 実測図 .....	150
第124図	2号土壙出土木器実測図 (1/4, 1/8) .....	151
第125図	3号土壙実測図 (1/20) および出土土器実測図 (1/4) .....	153
第126図	4号土壙実測図 (1/30) .....	155
第127図	3号木器溜り実測図 (1/20) .....	155
第128図	4号土壙出土木器実測図 (1/4) .....	156
第129図	3号木器溜り出土背負梯子・背負梯子状木器実測図 (1/5) .....	157
第130図	W483背負梯子構成部材個別実測図 (1/5) .....	158
第131図	W484背負梯子状木製品および構成部材実測図 (1/5) .....	159
第132図	4号木器溜り遺物出土状況 (1/20) および出土土器実測図 (1/4) .....	161
第133図	古墳時代遺構配置図 (1/500) .....	162
第134図	1層出土土器実測図1 (1/4, 1/6) .....	164
第135図	1層出土土器実測図2 (1/4, 1/6) .....	165
第136図	2区取水・導水遺構実測図 (1/40) .....	166
第137図	4区東杭群実測図 (1/40) .....	167
第138図	取水・導水遺構出土木器実測図1 (1/10) .....	169
第139図	取水・導水遺構出土木器実測図2 (1/6, 1/10) .....	170
第140図	取水・導水遺構出土木器実測図3 (1/10) .....	171
第141図	6号土壙 (1/20) および出土土器 (1/4) 実測図 .....	172
第142図	貸泉実測図および拓影 (1/1) .....	175
第143図	谷部出土特殊土器・土製品・玉類実測図 (1/2, 1/3) .....	176
第144図	谷部出土石器 (石斧・砥石・磨石) 実測図 (1/3) .....	177
第145図	谷部出土打製石器 (紡錘車・石包丁) 実測図 (1/2) .....	178
第146図	谷部出土石器 (漁労具) 実測図 (1/3) .....	179

第1表	上罐子遺跡出土木器器の主要な種構成一覧 .....	26
第2表	玉類の計測値および材質一覧 .....	174
第3表	出土土器・土製品観察表① .....	225
第4表	出土土器・土製品観察表② .....	226
第5表	出土土器・土製品観察表③ .....	227
第6表	木器観察表凡例 .....	228
第7表	出土木器観察表① .....	229
第8表	出土木器観察表② .....	230
第9表	出土木器観察表③ .....	231
第10表	出土木器観察表④ .....	232
第11表	出土木器観察表⑤ .....	233
第12表	出土木器観察表⑥ .....	234
第13表	出土木器観察表⑦ .....	235
第14表	出土木器観察表⑧ .....	236
第15表	出土木器観察表⑨ .....	237
第16表	出土木器観察表⑩ .....	238
第17表	出土木器観察表⑪ .....	239
第18表	出土木器観察表⑫ .....	240
第19表	出土木器観察表⑬ .....	241
第20表	出土木器観察表⑭ .....	242
第21表	出土木器観察表⑮ .....	243
第22表	出土木器観察表⑯ .....	244
第23表	出土木器観察表⑰ .....	245
第24表	出土木器観察表⑱ .....	246
第25表	出土木器観察表⑲ .....	247
第26表	出土石器観察表 .....	248



# I. はじめに

## 1. 調査にいたる経過

上鑑子遺跡は、糸島市前原地区の市街地中心部、JR筑前前原駅から南東に2キロほど離れた洪積台地上に所在する弥生時代から鎌倉時代にかけての複合集落遺跡である。

平成4年に糸島農業協同組合から同遺跡の一角、約18,000㎡の宅地開発計画が提示され、埋蔵文化財包蔵地発掘の届出が提出された。当該地一帯では1970（昭和45）年に国道202号線今宿バイパス建設に伴い、福岡県教育委員会によって埋蔵文化財の詳細確認のために事前の発掘調査が行なわれ遺跡の存在が知られていたことから、その対応についてについて協議した。

事業地の面積は広大で、かつ標高30mを頂とする丘陵部と標高10mほどの谷底にいたる起伏豊かな地形からなり、計画では事業地内での切り盛り工事によって宅地を造成することが基本方針となっていたことから、遺跡保存を前提とした計画の変更は難しいと判断された。その後の数度にわたる協議を経て、開発予定地全体の発掘調査を実施することで双方の合意に達し、平成6年6月から翌年3月にかけて発掘調査を実施した。

## 2. 調査の組織と作業の流れ

平成6年度の発掘調査組織は以下のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会
教育長	樗木昭生
教育部長	中原直国
文化課長	井上 尚
文化課文化財係長	川村 博
調査	主査 岡部裕俊
同	主任主事 野田純子



第1図 平成8年の出土木器研究会風景

調査において大量の木器が出土したため、調査の終了後に木器の保存処理を開始した。当初は委託にて実施したが、平成15～19年度には直営でPEG含浸処理も実施し、主に文化財系の脇谷（旧姓牟田）華代子、三嶋（旧姓檜崎）直子が担当した。

平成8年8月には、当市において第2回出土木器研究会（山口譲治会長）が開催され上鑑子遺跡の出土品を対象とした検討が行われた（第1図）。各地の木器研究者が集い資料の実見を通して活発な意見交換が行われ、その後の整理・報告を進めていくうえでの指針となった。

平成16年10月に伊都国歴史博物館の開館に伴い、整理を終えた市内遺跡出土遺物は順次博物館に収蔵保管されることとなり、保存処理が終了した木器も博物館の管理下となった。

平成22年1月に糸島市へと移行後も資料管理は博物館が担当し現在にいたる。

なお、発掘調査報告書作成業務は、岡部裕俊が担当した。



## II. 位置と環境

### 1. 上籬子遺跡の位置的環境と周辺の古代遺跡

上籬子遺跡は、標高20mほどの洪積台地上に位置する。糸島地方の南を東西に横断する脊振山系の主峰雷山（標高945m）、羽金山（標高900m）を源として流下する川により形成された起伏なだらかな洪積台地は、糸島半島の基部に達すると標高3mほどの低地帯の下に埋没する。この一帯は古代においては、唐津、博多両湾から流れ込んだ深い内海が存在した。

上籬子遺跡は、今でこそ糸島地方の内陸部に位置するが、古代においては遺跡の南を流れる多久川の中途までいにしへの加布里湾が湾入し、海、山、川の恵み豊かな地理的環境下にあった。

糸島地方は古代からの歴史豊かな地として知られ、とりわけ中国の歴史書「魏志倭人伝」（以下「倭人伝」）に記載された伊都国の地であることから、弥生～古墳時代にかけての遺跡は質量ともに豊かで当地の歴史の深さを物語る。

特に、伊都国の国邑であった三雲・井原遺跡では、「倭人伝」に「世有王」と記された歴代王の墓とされる三雲南小路遺跡、井原鍮溝遺跡が著名である。墓からは多数の銅鏡をはじめ豪華な副葬品が発見され、近隣丘陵上に立地する平原遺跡とともに伊都国繁栄の象徴といえる。

糸島地方における調査研究は、長くこれら墳墓の研究を中心に進められてきたが、近年では潤地頭給遺跡、一の町遺跡、石崎遺跡群、深江井牟田遺跡（以上糸島市）、元岡・桑原遺跡、今宿五郎江遺跡（以上福岡市）など伊都国を構成した海浜部の有力集落の発掘調査が相次いで行なわれたことにより、国内外の広範囲な地域との交流の実態が明らかとなるなど、新たな地域像も浮かび上がってきた。福岡平野と比べると古代を彷彿させる山海の豊かな自然や地形が残る当該地方は、現代においてもなお、多くの市民にいにしへの歴史への郷愁を掻き立てる。

上籬子遺跡周辺における弥生時代の遺跡に目を向けると（第3図）、遺跡から西に200mほど離れた丘陵上には弥生時代終末期～古墳時代初頭の2基の低墳丘墓が確認された伏龍遺跡がある。地山整形によって造り出された不正方形の低墳丘墓とその周辺で箱式石棺、甕棺、木棺等が発見された（第2図）。木棺には鉄鎌と鉄刀子が副葬されており、多久川流域を治めた有力層の墳墓と考えられる。上籬子遺跡との関係、また、前方後円墳成立前夜の当該地方の墓制を考えるうえでも重要である。伏龍遺跡南の低丘陵上には弥生中期の甕棺墓が調査された多久高来田遺跡も立地する。



第2図 伏龍遺跡低墳丘墓群の調査状況

遺跡から北西方向に立地する丘陵地帯は笹山と呼ばれる。その東斜面には寺浦遺跡が立地し、弥生中期の竪穴住居跡や掘立柱建物を検出した。谷を挟んで東に対峙する通称、桃山丘陵では、弥生中期前葉の竪穴住居跡が発見された篠原岸田遺跡、甕棺墓や木棺墓群が調査された篠原新建遺跡、阿蘇凝灰岩製石枕を納めた篠原箱式石棺墓など弥生～古墳時代の遺跡が分布する。



1. 上籬子遺跡 2. 伏龍遺跡 3. 寺浦遺跡 4. 多久高来田遺跡 5. 篠原新建遺跡 6. 上町向原遺跡  
 7. 北新地遺跡群 8. 篠原東遺跡群 9. 浦志遺跡群 10. 潤遺跡群 11. 志登遺跡群 12. 平原遺跡  
 13. 多久遺跡群 14. 三坂七尾遺跡 15. 高上石町遺跡 16. 東遺跡群 17. 本遺跡群 18. 萩ノ浦遺跡群  
 19. 大浦遺跡群 20. 坂元古墳群 21. 多久口木古墳群 22. 有田1号墳 23. 香力古墳群 24. 香力天神前古墳群  
 25. 井の浦古墳 26. 東二塚古墳 27. 東真方古墳群 28. 辻ノ田古墳群 29. 波多江遺跡群 30. 領地境石群

第3図 上籬子遺跡の位置と周辺の主要遺跡（1/25,000）



さらにその北端では細形銅剣や全長120cmを測る弥生時代最長の素環頭大刀が出土した上町向原遺跡も立地するなど、弥生時代中期～古墳前期の集落・墳墓遺跡が発見されている。

近年、桃山丘陵の東裾の篠原東遺跡群では、弥生時代前期の遺構、遺物がまとまって出土した。当該期における地域様相はまだ未解明の部分が多く、貴重な成果である。

さて、南側に目を転じると、多久川を挟んで右岸の段丘斜面には、多久柿原遺跡や元多久遺跡など弥生前期後葉～中期前葉の集落遺跡が散見されるが、こちらも集落規模は小さく経営期間も短期で終息している。これらの状況から上罐子遺跡が周辺一帯における弥生中期～古墳前期の拠点的な集落であったことがうかがえる。

多久川をのぞむ丘陵上では、大浦・荻浦古墳群、坂元古墳群、多久口木古墳群、香力古墳群など金銅装馬具、武器、銅鏡などが副葬された6世紀の後期古墳群が分布し、また、立石1号墳（前期）、多久口木3号墳（中期）、砂魚塚1号墳、天神前1号・2号墳（後期）、など5基の前方後円墳も立地する。全長10kmにも満たない狭小で農漁業生産力にも乏しい河川流域にしては極めて密度の濃い分布状態を示し、築造背景が大いに気にかかるところである。

小嶋篤氏は、一帯の横穴式石室の前壁が花崗岩平石を横積みして羨道部と一体的に構築する特徴的な構造（糸島型石室）の中心地域と評価し、同時期に韓半島から渡来した新たな石室構築様式の受容地（勢力基盤）として注目している。

また、この流域では奈良時代の火葬墓の出土が相次ぐことも注目される。北岸の荻浦・大浦丘陵上では、奈良時代の蔵骨器埋納土壙が点々と出土しており、立石遺跡では火葬土壙も発掘された。後期古墳の分布範囲と重複する。さらに南岸の多久遺跡群D地点では方形の石囲いの中から4基の蔵骨器が出土し横穴式石室墳から火葬墓への過渡的な様相を看取でき、併せてこの地の勢力が仏教の受容にも寛容かつ積極的な一面もうかがえる。

桃崎祐輔氏は、「多久」の地名を『和妙抄』に記された「詫社」郷の転訛とみて、嶋郡川邊里の戸籍にも記された渡来氏族の詫社吉氏の拠点であった可能性を指摘する（桃崎氏より御教示）。糸島地方における古代氏族の動向に関する見解としても興味深い。

#### 【参考文献】

- 江野道和2005『多久川流域の遺跡群』前原市教育委員会  
 江野道和2019『国道202号線今宿道路関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』糸島市教育委員会  
 江野道和2017『篠原東遺跡群Ⅰ』糸島市教育委員会  
 江野道和2018『篠原東遺跡群Ⅱ』糸島市教育委員会  
 岡部裕俊1988『前原地区遺跡群Ⅰ』前原町教育委員会  
 岡部裕俊1994『荻浦-墳墓編-』前原市教育委員会  
 岡部裕俊2008『荻浦-集落・生産遺構編-』前原市教育委員会  
 川村博1980『坂元古墳群』前原町教育委員会  
 川村博1981『伏龍遺跡』前原町教育委員会  
 川村博1987『大浦遺跡群発掘調査概要』前原町教育委員会  
 川村博1991『多久高来田遺跡』前原町教育委員会  
 小嶋篤2017「糸島型石室と玄界灘沿岸の古墳づくり」『七隈史学会第19回大会発表資料集』七隈史学会  
 檜崎直子2005『多久遺跡群D地点』前原市教育委員会

角浩行1992『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告1』前原町教育委員会

副島邦明1981『篠原新建遺跡』前原町教育委員会

米倉法子2018「福岡県立糸島高等学校附属郷土博物館所蔵資料紹介」『伊都国歴史博物館紀要13』

林覚1995『篠原岸田遺跡』前原市教育委員会

## 2. 上罐子遺跡の調査経過

上罐子遺跡では、これまで6次にわたる発掘調査が行われている（第4図）。各調査の概要は以下のとおりである。

**第1・2次調査** 1971（昭和46）年に福岡県教育委員会によって実施された第1次調査では、標高30mの円錐形の丘陵北斜面を中心に一辺2mのグリッドを設定し遺構の有無の確認が行われたのに続き、1972（昭和47）年に実施された第2次調査では、弥生～古墳時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟、弥生後期の溝1条、奈良時代の土壙墓2基などが調査された。

溝から丘陵斜面にかけては弥生後期の遺構は確認されていないことから、当該期の集落域を区画する溝と推定された。第4次調査の丘陵0区が当該地点とはほぼ重複する。



第4図 上罐子遺跡の調査地点 (1/2,500)



## 【参考文献】

栗原和彦他1977『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集』福岡県教育委員会

**第3次調査** 昭和55（1980）年に宅地開発に伴い前原町（現糸島市）教育委員会が実施した。

第1・2次調査の南隣に並ぶ丘陵東裾の緩斜面で弥生時代中期～古墳時代後期の計99棟の竪穴住居、5棟の掘立柱建物、柵列、土塋、溝などが調査された。住居群は切り合いながら密に分布するものの、後世の削平が著しく、遺構や集落の詳細把握にはいたらなかった。

弥生時代後期の竪穴住居から出土した舶載の鉄製U字形鋤先、硬玉製の異型勾玉、鋸歯文や同心円文が線刻された肉厚な古墳中期の滑石製紡錘車の出土などが特筆される。

## 【参考文献】

川村博1980『上籬子遺跡群』前原町教育委員会

**第4次調査** 平成6（1994）年に標高30mの低丘陵を中心に、北～東裾に展開した弥生～古墳時代の集落、西斜面のテラス面で検出した奈良時代の鍛冶遺構、また、南斜面で発見した奈良時代の墳墓群、さらに丘陵の西側に南北に連なる谷部の調査を実施した。本書の報告地点である。

**第5次調査** 平成7（1995）年度に宅地開発に伴い宅地内道路部分の発掘調査を行なった。中期の掘立柱建物群、弥生時代中期後半の円形住居1棟、後期の小型方形住居1棟、溝などを調査した。溝は、第2・4次調査で検出した集落の周囲をめぐる区画溝と断面構造などが酷似していて、これと同時期に機能した可能性が高い。集落外部から雨水等の流入を防ぐことが目的であったと推定され、集落の北端を定める上で貴重な成果となった。

**第6次調査** 国道202号線今宿バイパス路線工事に伴い2地点の調査が行なわれた。丘陵先端部（14-3地点）では、作りつけのカマドを設置した古墳後期の方形プランの竪穴住居や溝等が調査された。その東側の谷を隔てた丘陵用上（14-2地点）では、土塋、柱穴、溝などが検出されたが、遺構の性格は不明とされている。この調査を第6次調査とする。

## 【参考文献】

角浩行1991『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概報』前原町教育委員会

これら一連の調査によって、古代の上籬子ムラが標高30mの低丘陵東～北裾部を中心に概ね径200mの範囲に展開する様相を把握することができた。集落は弥生中期後半～古墳時代後期（6世紀）まで継続的に営まれ、その後、奈良時代に丘陵西斜面で営まれた小規模な鍛冶工房の経営を最後に、人々の営みはいったん終息する。



第5図 第3次調査風景（昭和54年度）



第6図 第5次調査風景（平成7年度）

## Ⅲ. 第4次調査の記録

## 1. 調査の概要

調査地点は、標高30mを頂とする勾配緩やかな丘陵部と、その西側に南から深く抉り込んだ標高12～17mの谷部からなる（第4図）。調査は当初、丘陵部のみで行うこととしていたが、谷部の試掘を行ったところ谷底から大量の土器、木器等が出土したため、丘陵部の調査の終了後に続けて谷部の調査を実施することとし、6月から調査を開始した。

丘陵部は裾標高20mほどの北側の緩斜面を中心とする弥生時代～古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物群、西南裾の緩斜面で検出した奈良時代の鍛冶関連遺構群、南斜面の土器棺墓、頂部の木棺墓などを調査し、9月には大方の調査を終えて谷部の調査に移った。

谷部では古墳時代、弥生時代後期、弥生時代中期後半～中期末の遺構、遺物を調査した。弥生時代後期前葉の包含層からは大量の土器が出土し、その下層にあたる弥生中期後半～中期末の遺物包含層からは土器、石器とともに大量の木器が出土した。木製品は多種多様にわたり当該期の生活様式を知るうえで貴重な成果となった。

## 2. 資料の整理から報告まで

調査によって出土した資料は、パンコンテナに換算して総数5000箱ほどで主に谷部からの出土品であった。報告書の作成にあたっては、資料の選別を行って報告の対象土器を約1100点、木器が850点ほどとなることを確認した後、本格的な記録作業に入った。

平成11年度末には、保存処理が完了した木器約100点が「上籬子遺跡出土木器」として市の文化財に指定され、その後の保存処理を加速する原動力となった。平成21年度末には保存処理を完了した木器の点数も800点を越え、一部の大型建築材を除く大半の木器の処置が達成されたことを受けて取り組みの一区切りとした。現在は伊都国歴史博物館で一括保管している。

保管にあたっては、平成22～23年度に厚生労働省の緊急雇用対策事業を活用してデジタル台帳を作成した。収蔵木器は全点登録しておりこれを用いた検索管理が可能となった。

なお、本書では谷部の調査成果のうち、主要遺構と木器の報告に重きを置いたため、その他の遺物については、各遺構や包含層の時期比定や重要資料を優先し一部の報告にとどめた。このため特に土器については図示した資料の構成比は全体のそれを反映したものではない。

## 3. 調査区の設定

丘陵部の調査では頂上を中心に5区に分割してそれぞれⅠ～Ⅴ区とし、1971年の調査地点と重複した北端部は0区とした（第7図）。0区、Ⅰ区では弥生時代中期～古墳時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、溝、土塋、奈良時代の方形周溝墓、Ⅱ区では奈良時代の鍛冶工房群、Ⅲ区では奈良時代の土器棺、木棺墓、Ⅴ区では弥生中期の掘立柱建物や古墳中期の竪穴住居などを調査した。詳細は丘陵編の報告に譲りたい。



さて、2つの丘陵に挟まれ遺物が濃密に堆積する谷底の幅は10～20mほどで、北から南に向かって緩やかな下り勾配をとりながら多久川に向かう（第10図断面E-E'）。谷部一帯は昭和50年頃まで水田が営まれていたが、その後は埋め立てられて隣接するコンクリート工場の敷地に編入された。調査区の南部では埋め立ての深さが2mを超えていたところもあり、調査のために剥いだ土量は予定を大きく上回り、その置き場にも苦慮するようになった。このため調査区を南北に2分割し、10～12月期に北半部（1～4区）、1～3月期に南半部（5～10区）の調査を実施した。

調査は谷部の北端から南に向けて長さ約100mにわたって行い、10mごとに1～10区までの小区画を設けた。1～4区は同時に掘り下げたが、5区以後は上述のとおり土置き場に苦慮するようになったため1～4区を埋め戻した後に、1区ずつ掘り下げ、調査区画を拡張を確保しながら調査を続けることとなった。このため調査区全体の完掘写真を撮影することができなかった。

#### 4. 調査地点の基本層位と遺構・遺物の概要

調査地点における基本的な土壌の堆積層位は概ね以下のとおりである（第8・9図、図版3）。

埋立て土の下に旧水田層の暗灰褐色土層があり、その下に①灰黒色粘層（奈良時代～中世以下1層）、②黒色粘土層（古墳時代前期～後期 以下2層）、③灰黒色粘土層（弥生後期前葉～後葉 以下3層）、④灰黒色砂質粘土層（弥生時代後期初頭～前葉 以下4層）、⑤茶褐色混植物遺体粘質土層（弥生時代中期後半～末 以下5層）、⑥黒色砂質土層（弥生時代中期後半6層）と続き、地山層に到達する。地山は上層では青灰色細砂層、下層では砂礫層となり、この層から豊富な湧水があった。

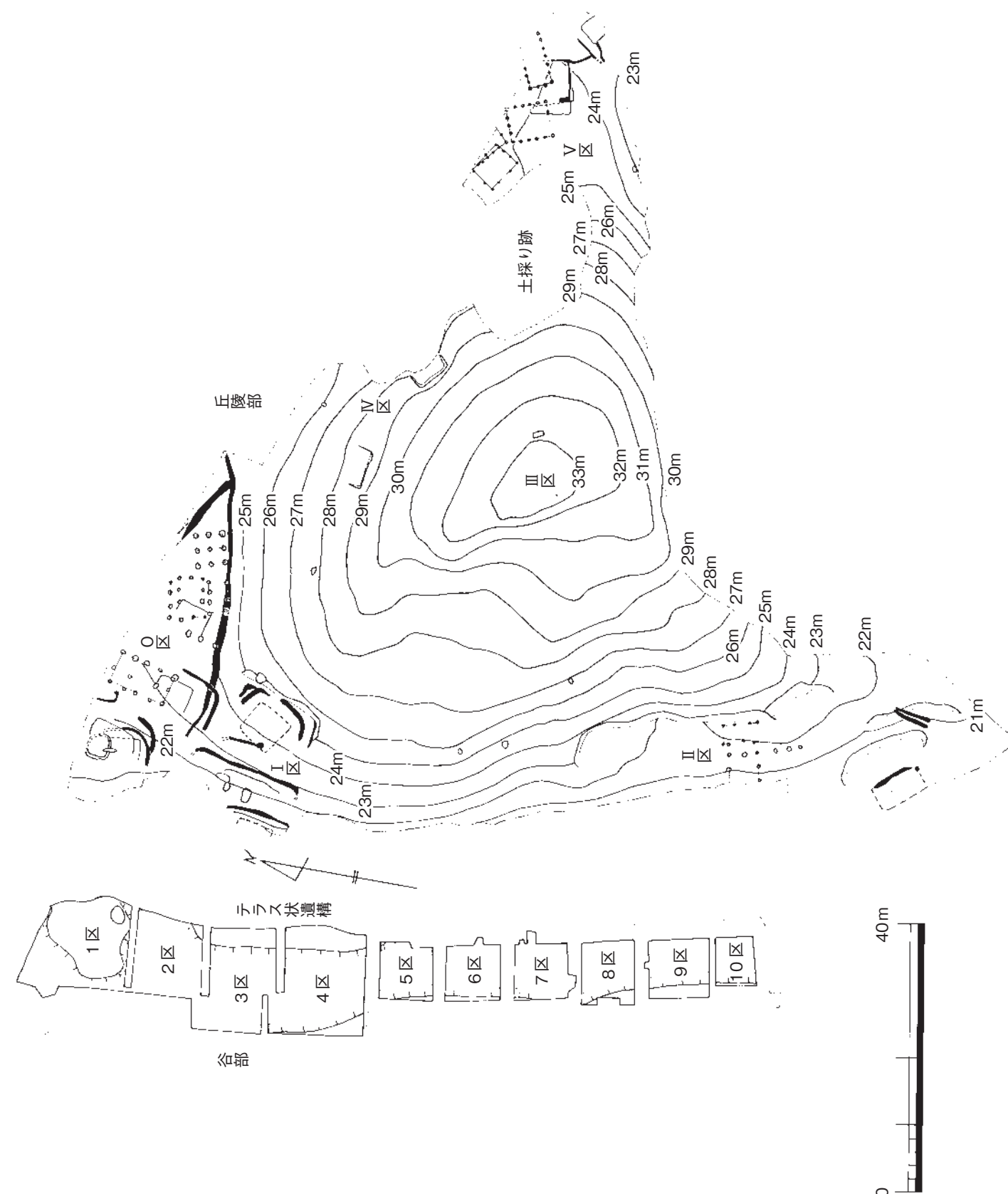
2区中央の1層下で古墳時代中～後期の木組みを検出した。周辺を精査したところ取水・導水遺構であることを確認したが、この時点ですでに調査区全体をかなり掘り下げていたことから、木組みの北側に存在した可能性が高い貯水遺構を面的に確認することができなかった。

しかし、その範囲については、弥生中～後期の遺物の出土範囲と、古墳中期時代中期以後の須恵器、土師器の出土範囲から大略を知ることができた（第12図）。

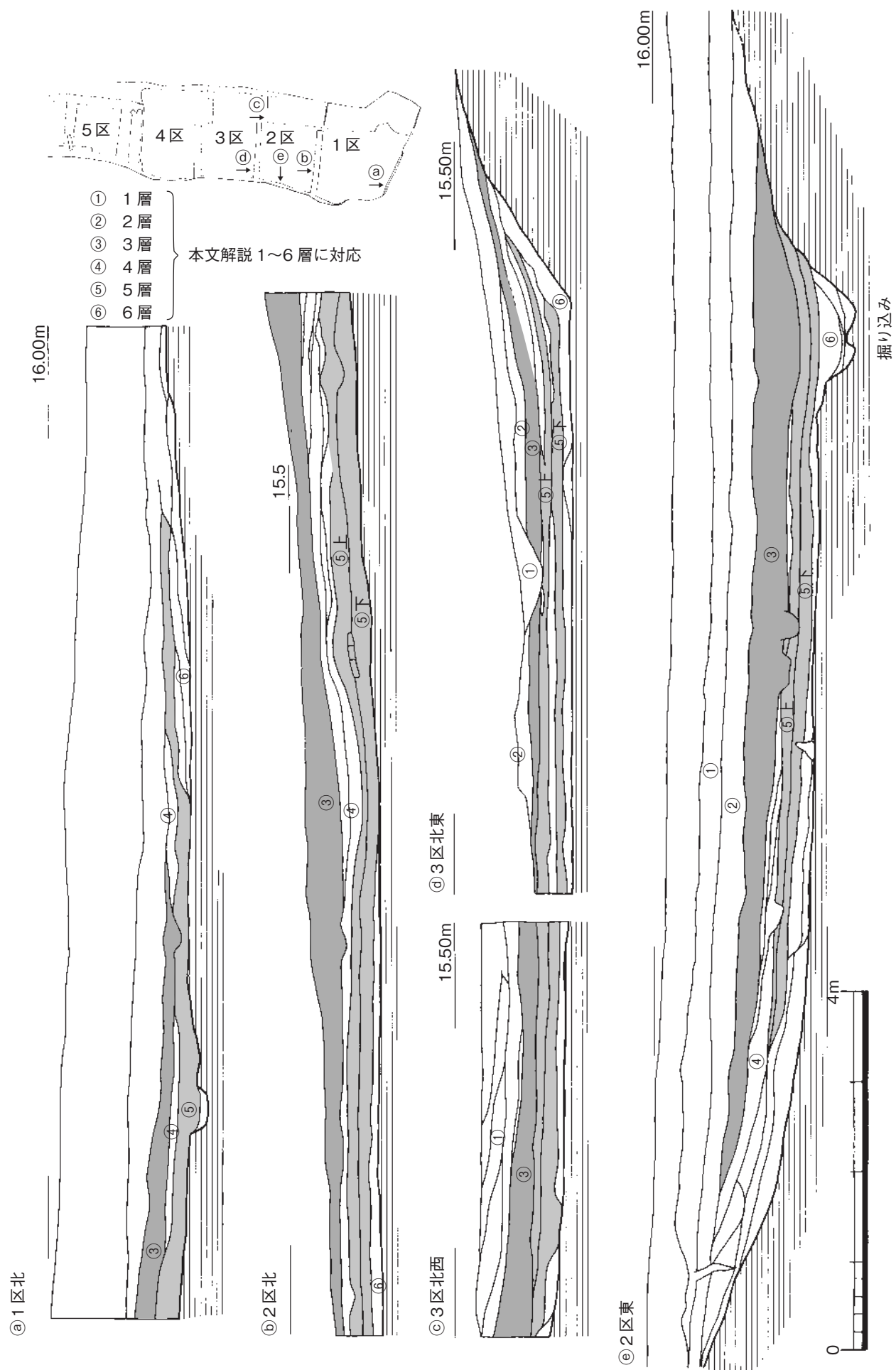
3～4層間で4～6区を中心に弥生時代後期の土壙や土器溜まりを検出した。4層埋土中からも少量の木器が出土したが、地下の滞水層との汀レベルにあったためか残存状態が悪かった。

2区から5区にかけて、東側の丘陵裾から西側の谷に向けてコの字形に張り出した南北幅30mほどの突出部を検出した。緩やかに張り出した丘陵裾を切削造成して人為的に構築された遺構と考えられたため、テラス状遺構と称した（第10図）。

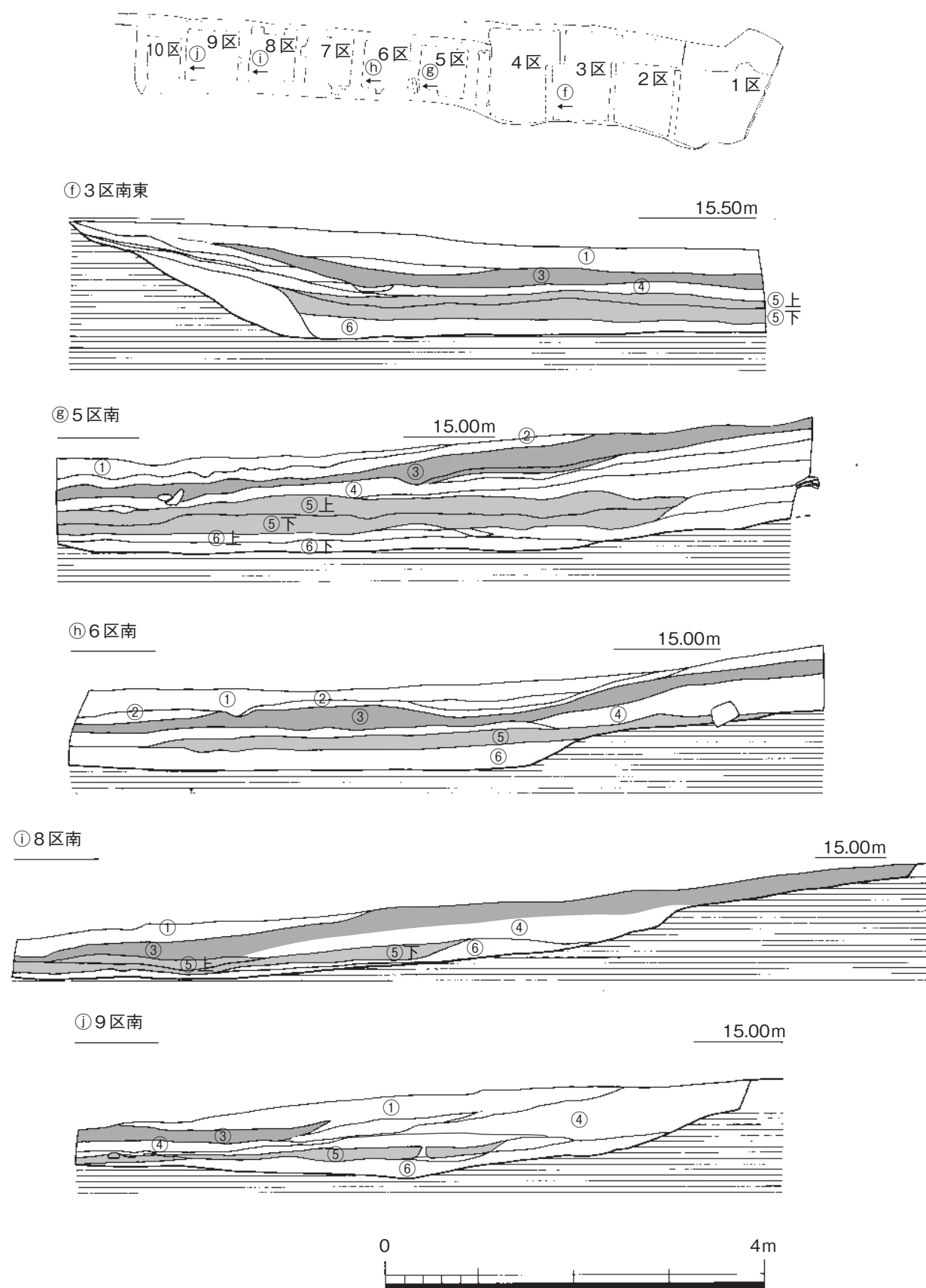
テラス状遺構の周囲は底面が深く掘削され、これにより湧水を伴う砂礫層が谷底に露呈することとなり一帯からの豊富な湧水の源となった。テラス上面との比高差は概ね1mほどで法面の傾斜面は35～40°を測り、明らかに他の地区の傾斜よりも急峻であった。このような状況からテラス状遺構の周囲は滞水しやすい状況が常態化したとみられ、このため茶褐色混植物遺体粘質土層（5層）が厚く、木器の出土量の割合も他地区と比べると極めて高かった。



第7図 第4次調査地点の区割り (1/800)



第8図 谷部の土層図① (1/60)



第9図 谷部の土層図② (1/60)



出土した土器には中期後半～後期初頭の丹塗磨研土器が多く含まれ、木器では祭祀に関連するとみられるものが多く出土していることを合わせて考慮すると、テラス状遺構が祭祀の舞台であったと考えられる。

## 5. 弥生中期後半～中期末の遺構と包含層出土遺物

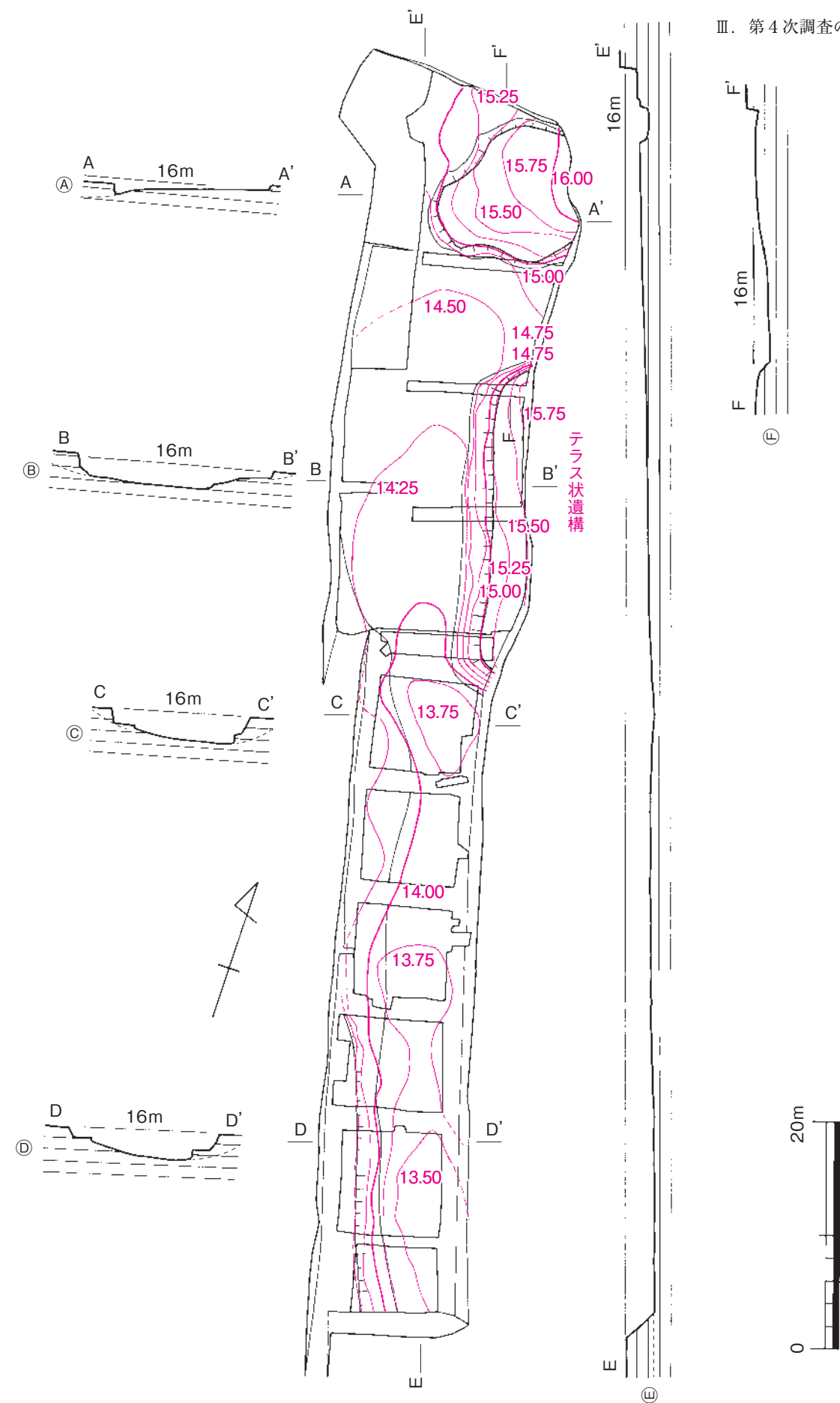
4層下の地山直上で、弥生中期後半に丘陵裾を削り出して造成されたテラス状遺構を検出するとともに、この周縁の埋没過程の堆積土を中心に谷部の広範囲から木器、土器、石器が大量に出土した。まず、以下にテラス状遺構について報告する。

### (1) テラス状遺構 (第8～10図、第12～14図)

2区南東隅から5区にかけて丘陵裾から谷に向かって「コ」の字状に張り出す幅広のテラス状地形を検出した。張り出しの南北幅は30mを測り、奥行は10m以上あるものと推定されるが、丘陵基部について詳しく調査できなかったことは惜まれる。

この地形は、以下の留意点から人為的な造成によると推定された。また、この周囲から出土した遺物には祭祀的性格が認められるものが多く、祭祀空間として機能したものと推定される。

- ① 谷部の埋没土壌には、突帯文土器や石器など弥生時代初頭以前の遺物が少量含まれるものの、当該期の諸活動を示す具体的な資料や顕著な土壌堆積は認められなかった。その傾向は丘陵部の遺構や遺物の出土状況とも符合し、当該遺跡の本格的な集落活動は弥生時代中期後半を起点とすることが確認できた。これ以前の生活痕跡が谷部に残されていたとしても、その頻度は著しく少なく、弥生中期以後の積極的な生活活動によって失われたものと考えられる。
- ② 1区北の土層観察では、東丘陵の裾は谷底に向かって5度ほどの勾配でなだらかに傾斜し、谷底の標高値は15.25mほどを示した(第8図①)。これに対して、3区では谷底に向かって40度ほどの急勾配で直線的に傾斜し、谷底の標高は14.25m(第9図①)を測り、1区よりも1mほど深くなっていて、谷底の形状はフラットであった。2区東部の丘陵に向かって食い込む窪地の断面観察(第8図③)でも、谷底への傾斜は比較的急勾配で直線的で谷底はフラットであった。また、テラスの裾には径1m、深さ50cmほどの不正円形の掘り込み(第8図③)があり、ここから豊富な湧水があった。
- ③ テラス状の突出部の西法面の傾斜は直線的で、谷底への傾斜角度は40度前後(第9図①)を測り、底がフラットで、南北の隅角は隅丸の相似形に造成されている可能性が高い。
- ④ 谷部の完掘時の地形測量図(第10図)では、2～3区の幅は下流の5区～10区より明らかに幅が広く深くテラスの突出に呼応するように西に蛇行しており、あたかもテラスを囲む堀状に造成されたように見える。
- ⑤ 2～5区では、④層下に植物遺体を含んだ黒色砂質土壌が認められ、この区間では谷底を切削した直後から短期間のうちに地下水の湧水とともに噴砂が起こり谷底に堆積したのではないかと考えられる。
- ⑥ 2～5区の土層断面(第8図③～⑤、第9図①、②)では、④層の堆積過程で埋土が浚えられたとみられる不整合な土層堆積が認められた。

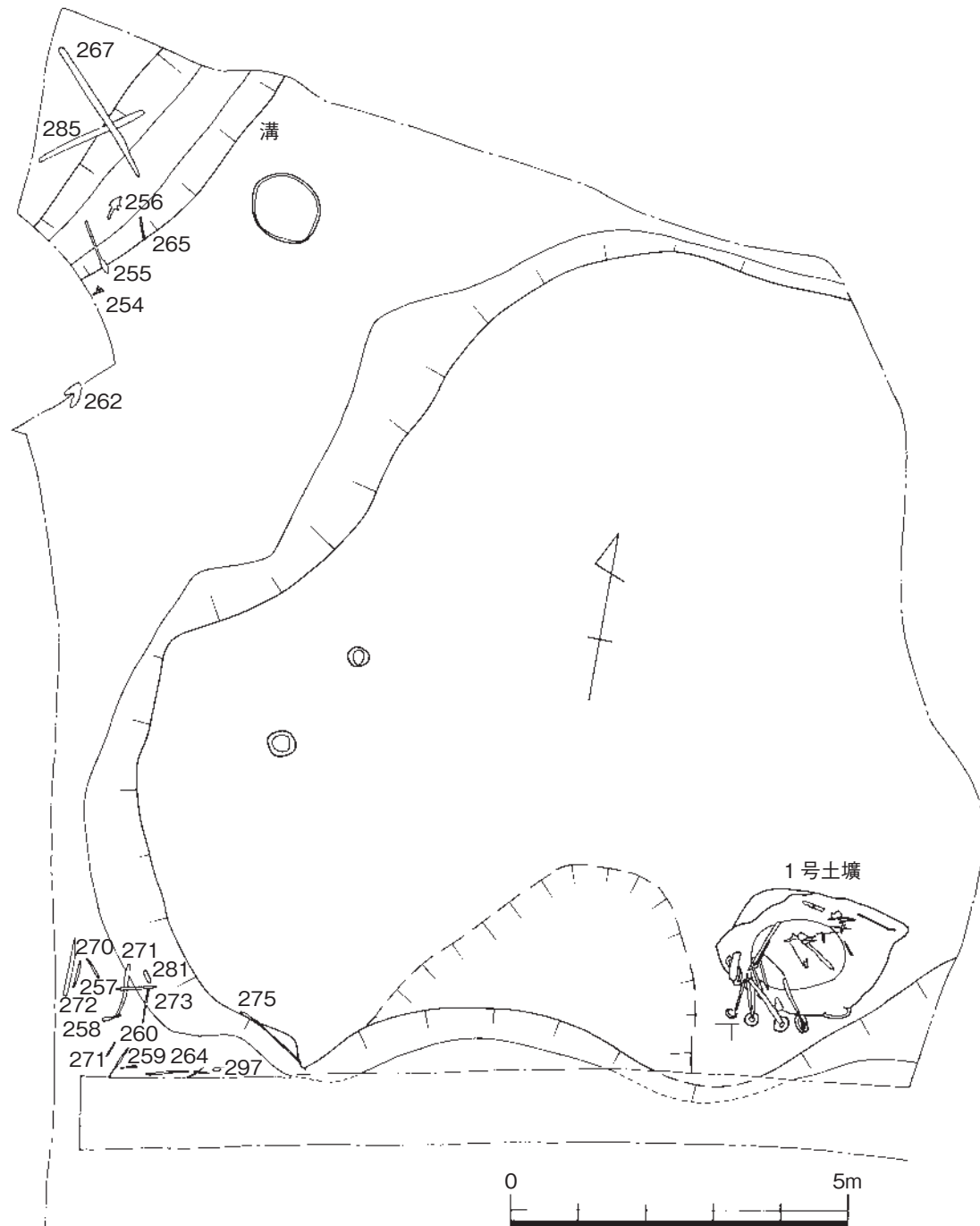


第10図 谷部弥生時代中期後半の地形 (1/500)

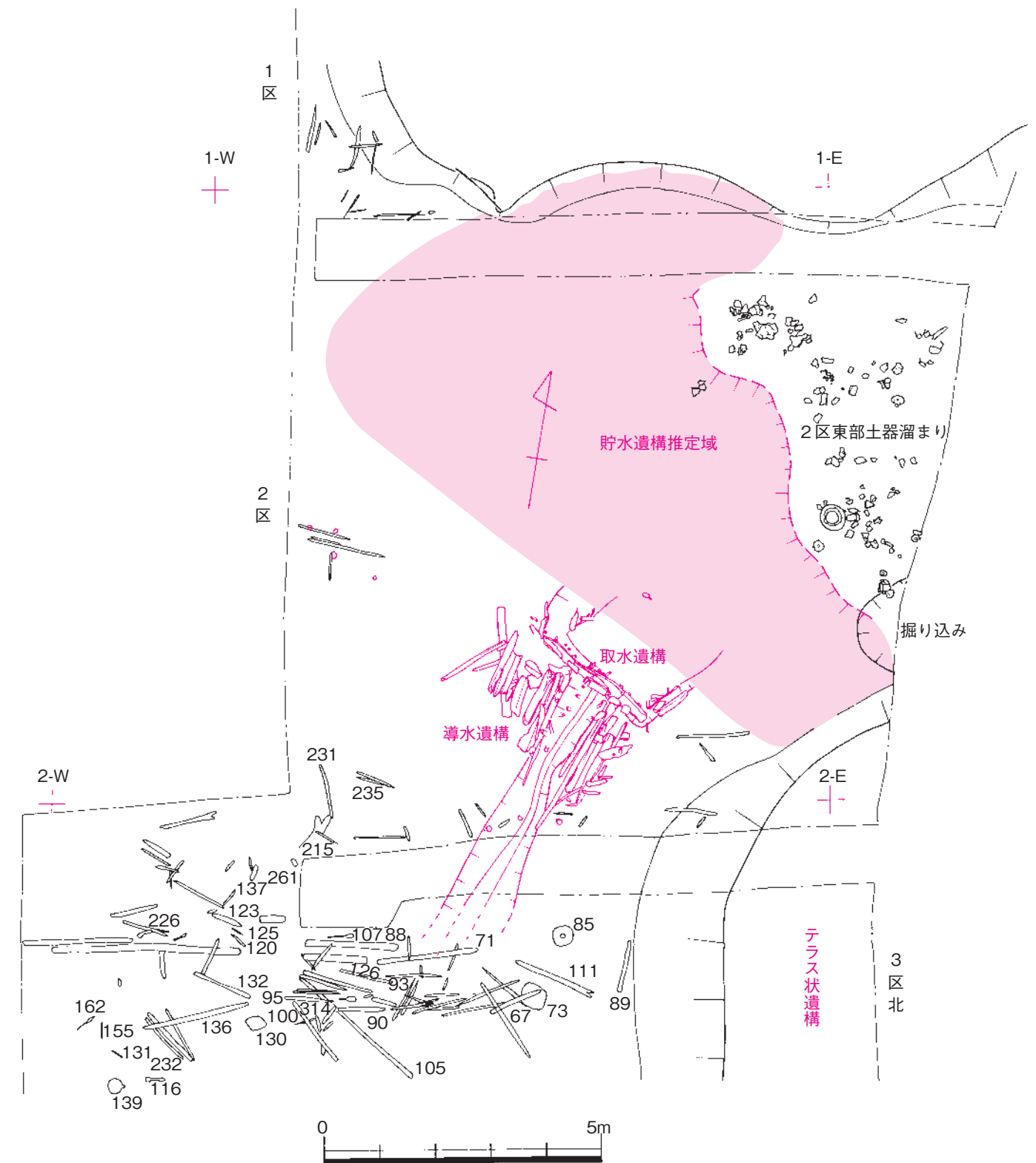
⑦ 3区北東の土層壁面(第8図④)では、上方から標高15.3mまでは勾配は緩やかであるが、そこから谷底に勾配がきつくなり直線的である。法面下層にはテラス面から流下した土砂が堆積しており、土中には破碎した土器片が多く含まれていた。

テラスの周囲には弥生中期後半～後期初頭の丹塗磨研土器が集中して出土し、祭祀具とみられる木器の出土もこの地区を中心に出土している。

⑧ 3～4区では植物遺体層が特に厚く堆積していた(第8～9図)ことから、長期にわたり水が滞水する状態であったことがうかがえる。

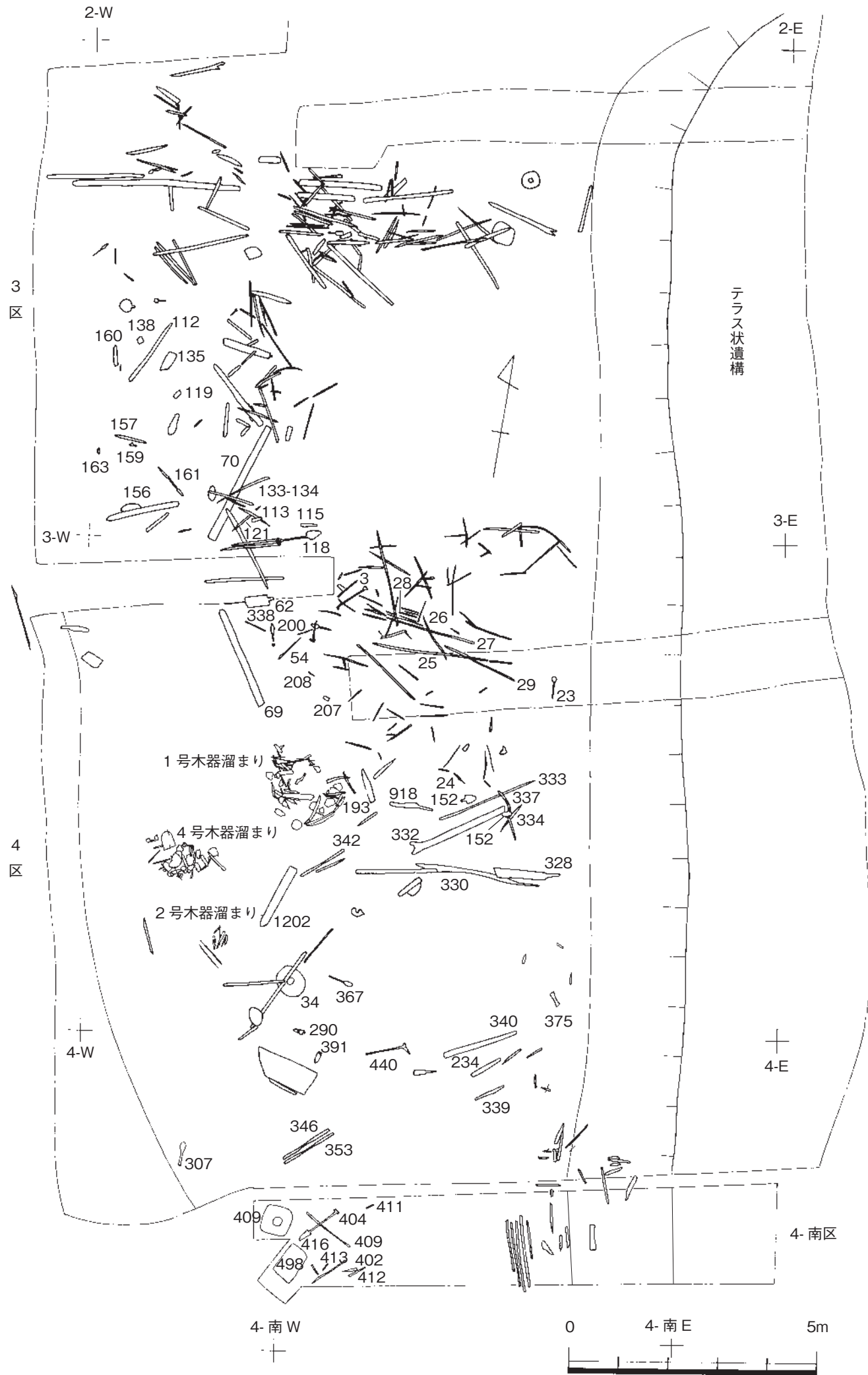


第11図 1区の地形と遺構・木器等の出土状況 (1/100)  
(番号は木器の取上番号を示す)

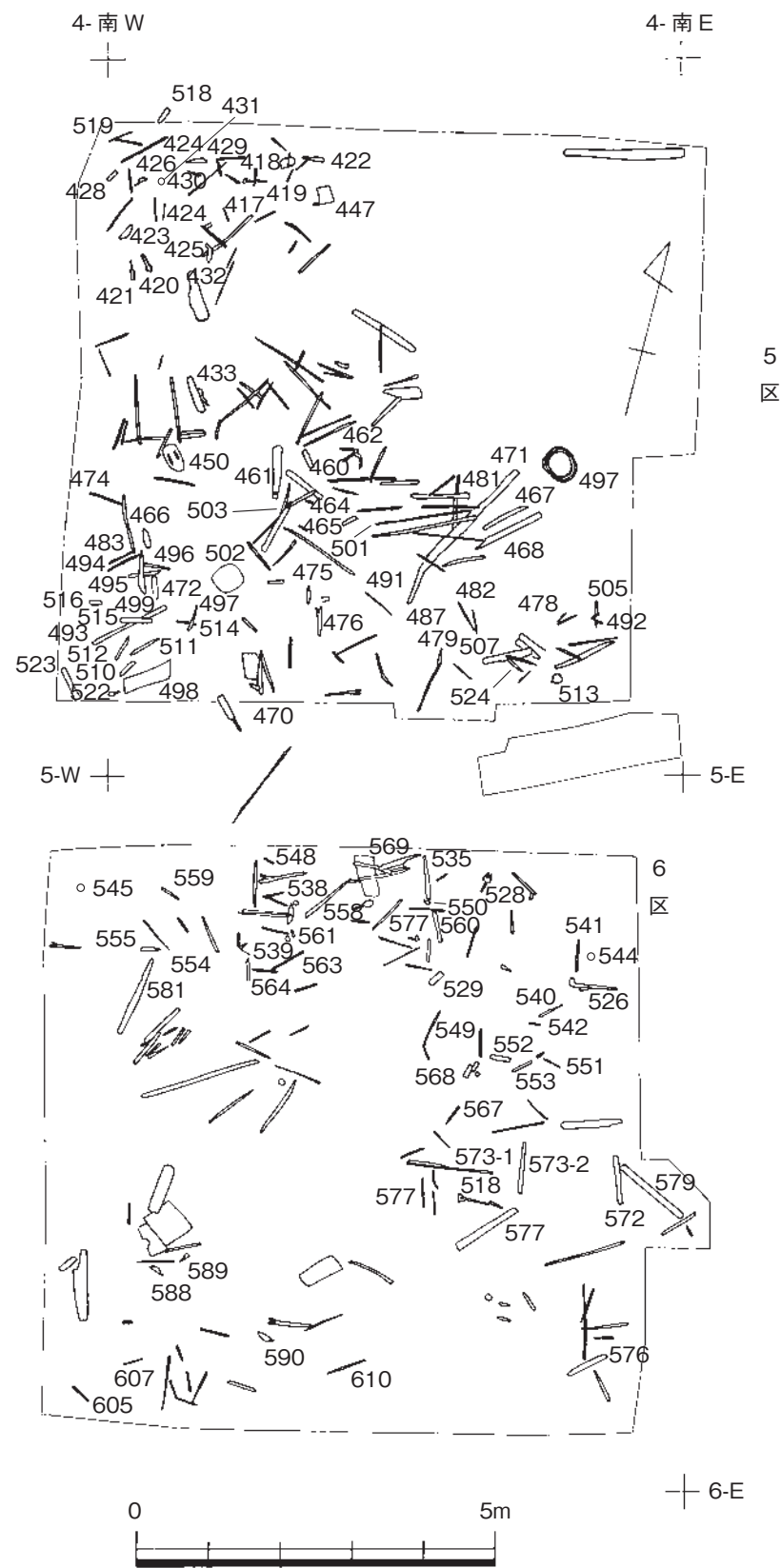


第12図 2区～3区北部木器等出土状況と取水・導水遺構(古墳時代中期)との関係 (1/100)  
(赤線が取水・導水遺構)(番号は木器の取上番号を示す)

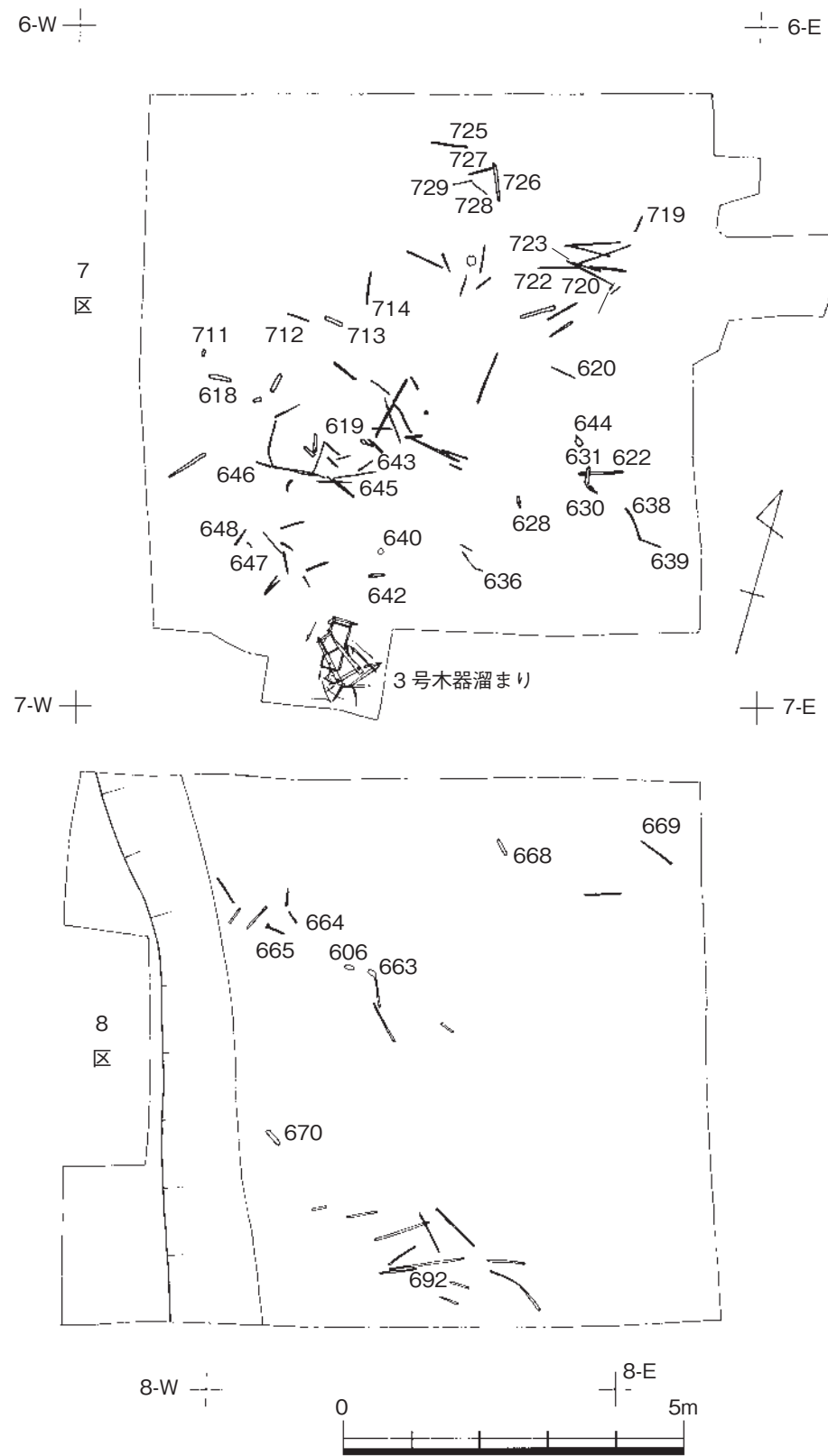




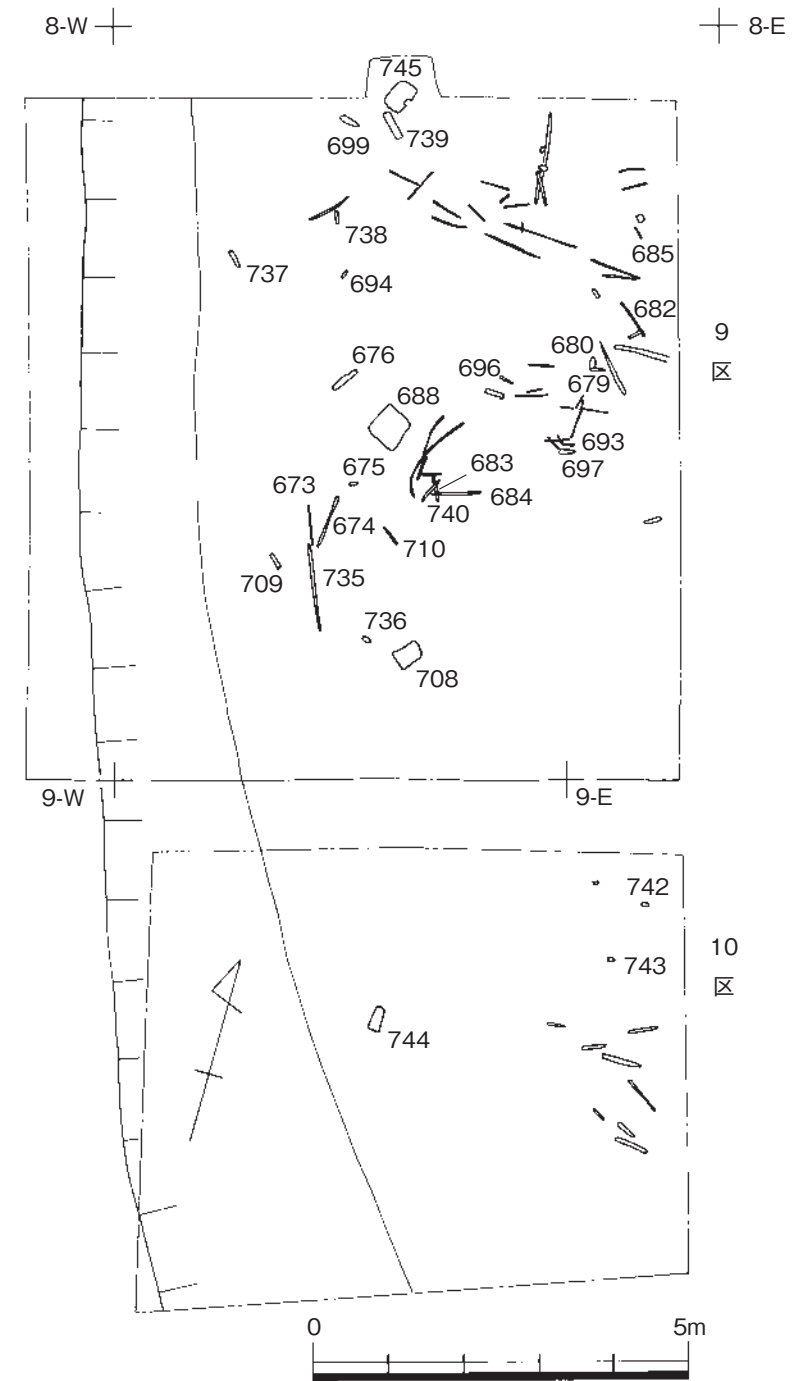
第13図 3～4区木器等出土状況 (1/100)  
(数字は木器の取上番号を示す)



第14図 5～6区木器等出土状況 (1/100)  
(数字は木器の取上番号を示す)



第15図 7～8区木器等出土状況 (1/100)  
(数字は木器の取上番号を示す)



第16図 9～10区木器等出土状況 (1/100)  
(数字は木器の取上番号を示す)

①～④の状況から、このテラス状の地形が谷に向かってせり出した丘陵裾の自然傾斜地形を人為的に切削造成して構築されたものと推定した。⑤、⑥からは、周囲の埋没過程のなかで重ねて浚渫作業が行われていたことがうかがえ、⑥によってテラス状遺構が祭祀の空間として機能しており、さらに⑦、⑧によって滞水状態が意図的に造作されていたものと推定され、祭祀を演出するにあたり水が重要な役割を担っていたものと推定された。

しかし、調査着手当初には丘陵裾が抉られ崖状を呈しており、遺構が残存する見込みは薄いと考え、そこに調査廃土を大量に集積してしまったことから、テラス基部の形状を確認することができなかったことが悔やまれる。

## (2) 木器溜まり

4区では、2か所において小形木製品が集積されたようにまとまって出土した。それぞれを個別に実測したので木器溜まりとして報告する。しかし、出土品は破損品が多く、意図的に集積されたと断定するには決め手に欠け判断が分かれるところで、木製品は5層出土木器のなかで取り扱う。

### 1号木器溜まり (第17図, 図版4-a)

4区北部の中央付近で検出した木器群である。径2mほどの範囲に三又鋤(W161)、横槌(W198)などの木器や加工木、塊石などが出土したが、土器を含めて完形品は少ない。伴出した土器から弥生中期後半～末と推定される。

**土器** P2は、高坏の脚柱～坏部で丹塗磨研が施される。脚部は長脚でM字突帯をめぐらす。

**木器** W161は三又鋤の掬い部片である。W198は小型の縦杵。細身で小口部に使用痕が残る。W315は、杓文字状杓子で掬い部の半分以上が欠損しているが、掬いの部幅が細い薄手の製品とみられる。

### 2号木器溜まり (第18図, 図版4-b)

1号木器溜りの南南西1mで検出した木器群で、諸手鋏(W59)、又鋏(W67)、横槌(W217)、火鑽臼(W388)、鉤(※924,925)が出土したが、鋏と鉤は破損品である。束ねていたものがゆるみ周囲に広がったようにも見えるが推測の域を出ない。5層の埋没最終段階の中期末から後期初頭にかけての資料と考えられる。

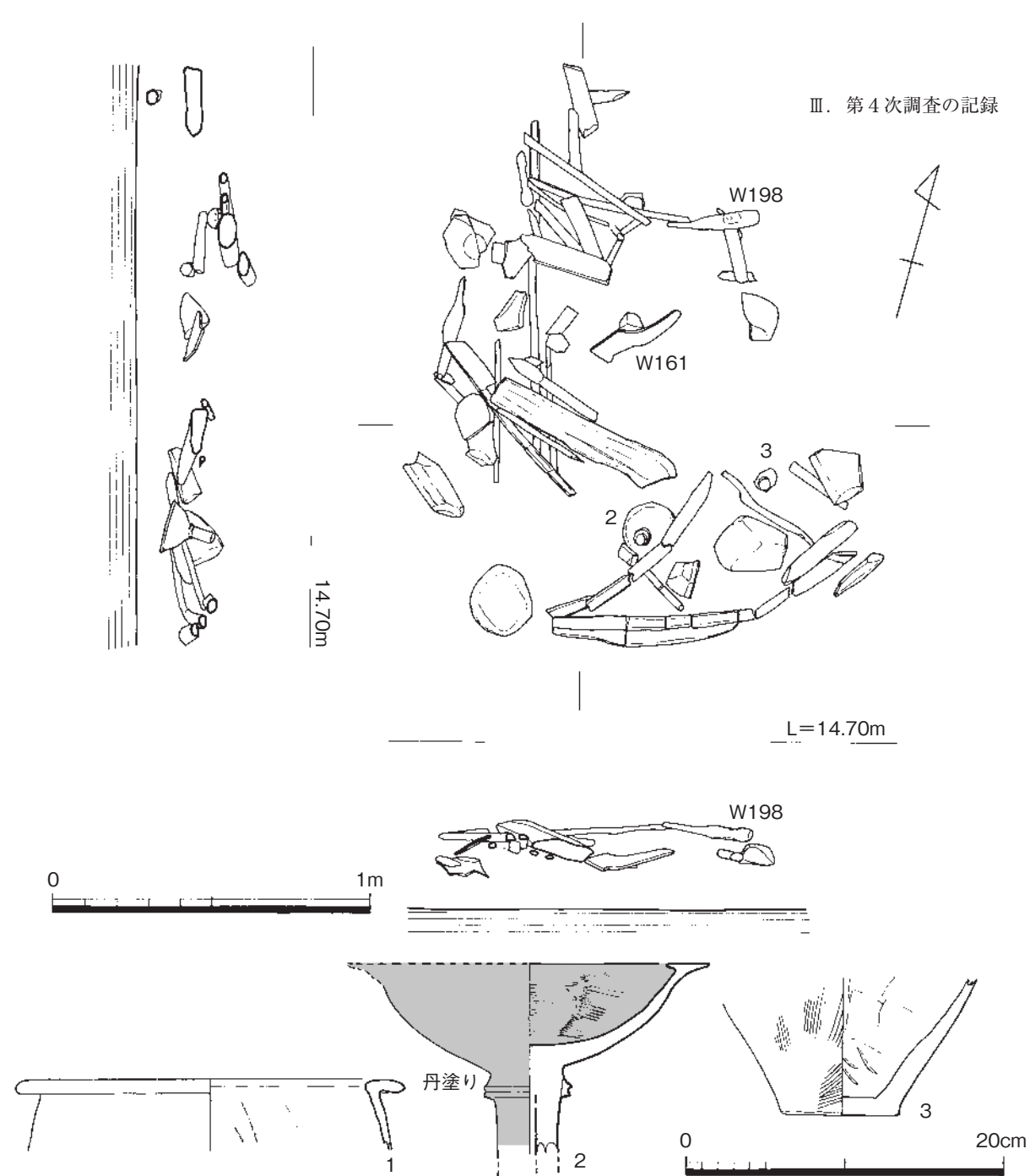
**木器** W59は、鋏身の中央に方形の柄穴がみられ、諸手鋏状を呈するが図の上部には刃部を削り出した痕跡がみられない。W67は、二又鋏で頭部が三角形に加工される。W217は細身の横槌で側面には使用に伴うくぼみが残る。W388は火鑽臼である。火鑽溝まで加工しているものの使用された痕跡はない。

## 6. 弥生時代中期後半～末の遺物

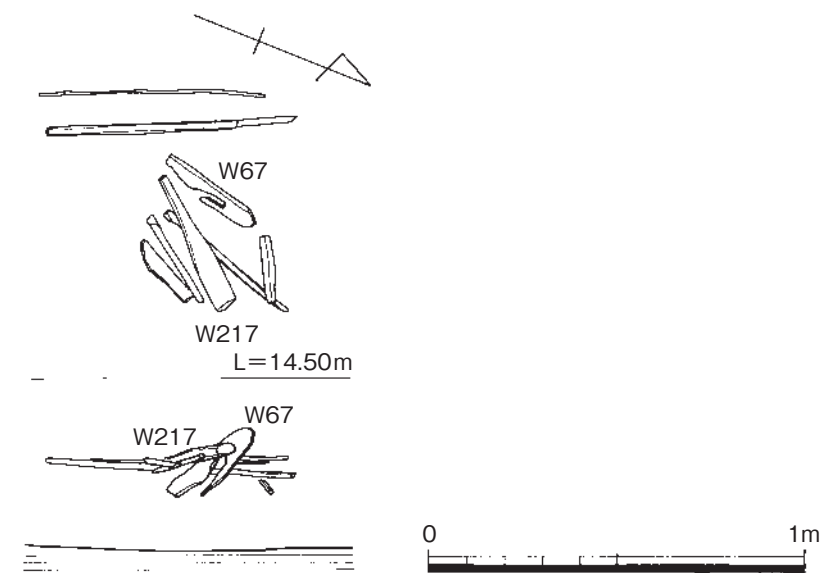
### (1) 概要

5層では、弥生中期後半～末の土器、石器とともに、木器が大量に出土し遺物溜まりの状態を呈し(第11～16図)、とくに3～5区にかけて集中して出土した。

出土傾向を詳細にみると、3区北部および3区から4区にかけての境界付近では柱やネズミ



第17図 1号木器溜まり (1/20) と出土土器実測図 (1/4)



第18図 2号木器溜まりと出土土器実測図 (1/20)



返し、板など大型の建築材が、谷筋に対して直交方向にあたかも水面に並べたような状態で出土した。これらの木製品は一様に岸から2～3mほど岸から離れた中央寄りに集積して出土していることから、谷底の水溜まりの深みを利用して建築材などの大型木材の貯木が行われていた可能性もある。先に述べたように2～5区の東部ではテラス状突出部の造成にあわせて周囲の谷底が深く掘削されているため、水が湧きやすかつ溜まりやすい状況にあったことが第一の要因と考えられる。6区から南側では深い水の溜まりは認められず、したがって徐々に木器の出土量は減少し、また小型製品が主体となっていった状態とは対比的である。

2区でも木器は出土したが、調査区の大半が古墳時代中期に取水遺構によって大きくかく乱を受けたと考えられる。大型建築材は南西隅角付近に集中して出土し、中央部では弥生時代の遺物の出土量は極めて少ない状況であった。

なお、石器、骨角器も出土しているが、上層の資料とともに別項で一括して報告する。

(2) 土器 (第19・20図, 図版54・55)

P4は、突帯文を付した夜臼式甕片で顕著な摩耗は認められない。胴部上方で外反しながら内傾する。口縁外縁下には大きめの刻み目突帯がめぐる。本遺跡で唯一の突帯文土器である。

P5は甕蓋、P6～10は甕である。P7は口縁が内側にも突出しT字を呈する。丹塗磨研が施され、胴部と口縁上面には暗文状にめぐる。P6,8は胴部上半が内傾し、口唇部はわずかに下垂する。P9は口縁部屈曲部で内向きに小さく突出した後、「く」の字状に外反する。P10は、胴部が胴部最大径が下半部にあり上半部に6条の突帯を配する。

P11, 12は、平底の鉢でP14は内外面ともに研磨が施される。

P13, 14は丹塗磨研の広口壺でP13は胴部の縮りは緩いが頸部に向かって細まり、口縁に向けて外反する。P15～18は丹塗磨研の袋状口縁壺で、頸部に突帯をめぐらすものと、突帯がないものがある。P16は大型で頸部の縮りが顕著でない。P19～21は短頸壺で、いずれも器高に比して胴径が大きい扁平ぎみである。P21は胴部に3状のM字突帯を配しており台付土器と推定される。P25～29は小型の鉢で、平底～やや丸底ぎみのものなど多様である。

P22, 23は長脚高坏で口縁部は鋤先状を呈するが、外縁部はやや垂れ気味である。

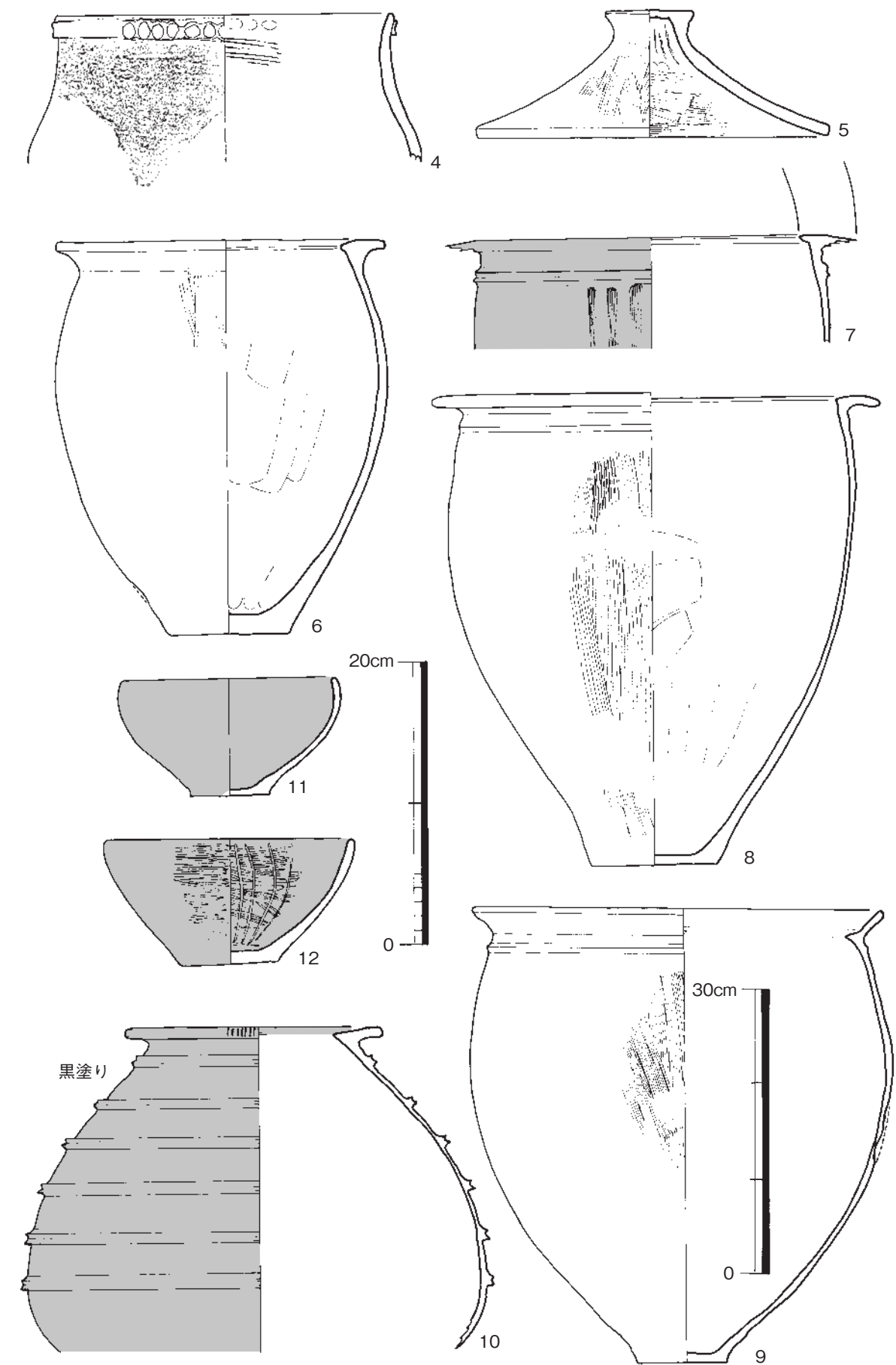
P30も高坏の杯部片とみられるが、この土器だけ胎土が他の土器と異なり、瀬戸内海沿岸域からの外来系土器と考えられるが、搬入元は明らかでない。上層からの混入の可能性もある。

P30は丹塗磨研の柱状土製品である。中ほどでわずかにエンタシス状に膨らむのが特徴で、内面上部には土器を絞りこんでできた皴状の痕跡、その下にへら状工具によるとみられる指ナデや押さえの痕跡が観察される。

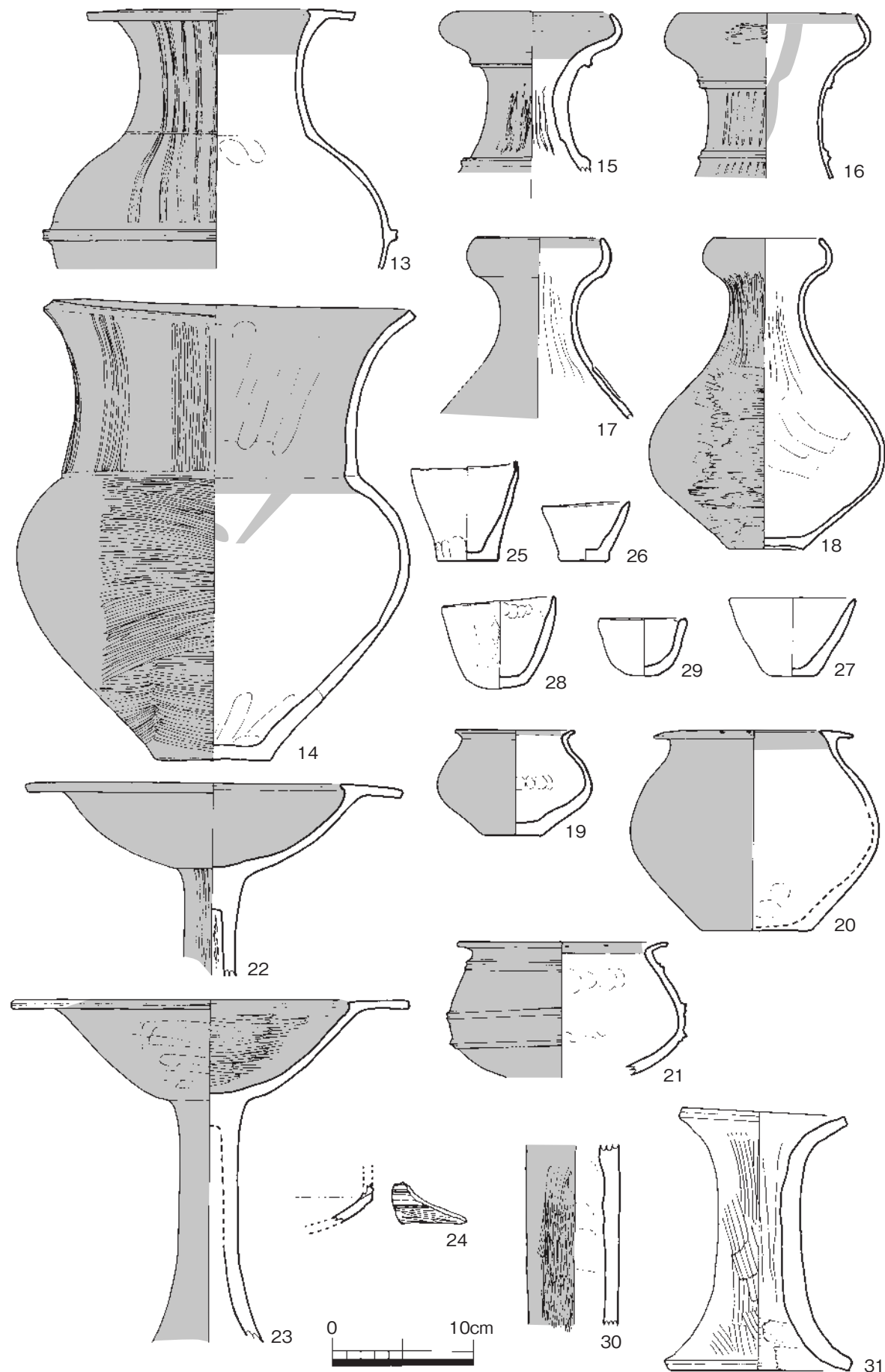
器種について大型高坏の脚柱部や器台が推定される。胴部に膨らみを有する中期後半～後期初頭にかけての在地系土器は類例がなく、吉備、丹後の4～5様式期の土器との関連も想定されるものの、胎土は在地的であり、上記地域の影響を受けて在地で製作されたも



第19図 P30黒色顔料の展開写真



第20図 5層出土土器① (1/4, 1/6)



第21図 5層出土土器② (1/4)

のと考えたい。

この土器のもう一つの特徴は、丹塗磨研の上から墨状の黒色顔料で塗彩、線描が認められることである。上端の破損部下に横方向に延びる長さ9.4cm、幅0.6～1cmほどの太い線が引かれ、両端からはさらに折り返して上に延びる縦線が続くようにも見え、さらにその左右の破断面付近でも黒線らしい顔料の付着が認められる。また、横線の左半部にはこれに上書きされたようにやや薄めの黒色顔料で丸く塗り潰したような痕跡も認められる。

他方、これらの中にはアルファベットの「S」字状に黒線がややにじみがちに認められる。それぞれの線に濃淡の差が認められ、重なって表現されていることから、黒斑とは異なり筆のような用具を用いて描かれているようにもみえるが、具体的に何を表したのかは定かではない。これらを横方向に連続撮影して展開したのが第20図で、また、福岡市埋蔵文化財センターの協力を得て黒色線描料の重なった部位を中心に赤外線透過画像を撮影した(図版51-30-2・3)。

### (3) 木器

#### 概要

谷部層から取り上げた木質資料1,548点のうち、精製加工された製品あるいはその一部と認められる資料を木器とした。対象数は839点で、このうち本書で図示報告できたものは502点。それ以外は計測値のみを報告している。本項では5層中から出土した木器を報告する。

資料の帰属時期について、5層から出土した土器は弥生中期後半から末にかけてのもので、この時間幅のなかで捉えておく必要があるが、出土時に上面で浮いたような状態で出土したものは後期前葉まで下り、また、谷底の黒色砂質土層から出土したものはテラス状遺構が掘削された直後に程なく埋没したと考えられ、中期後半にしほりこむことができ、これらを踏まえて資料の時期を観察表に記載している。

木器は総体的に遺存状態は芳しくはなく、出土当初から表面の劣化が進んでいたものが多かった。重ねて土圧によって圧縮・変形したものも多く、丸木の断面が楕円形を呈するものが多かったが、実測図では現状をそのまま記録した。また、実測してから保存処理までの間に腐朽・劣化が進行し、記録時の形状と現状が合致しないものがあることを付記しておく。

器種の大分類および部分呼称は、原則として木器集成図録近畿原始編(上原真人編 奈良国立文化財研究所刊1994 以下『集成』)に倣い、工具、農具、狩猟具、漁労具、紡織具、運搬具、食事具、容器、楽器、祭祀具、雑具、建築材としたが、『集成』の用途不明品は、「その他の製品」とした。また、中、小分類は当該遺跡の実態にあわせて呼称するものもあり、基本構成は第1表の通りとする。

#### 1) 工具

##### 斧柄 (第29～32図, 図版17～18)

斧柄は24点が出土した。利器の装着方向と装着部の形状から、直柄縦斧柄(A類)、膝柄縦斧柄(B類)、膝柄横斧柄(C類)に大別される。

A類は、W1～4で、柄長が60cmを越える大型品が多く。頭部は比較的薄手で幅8～20mmほどの方形の装着孔が貫通することから、板状の鉄斧を装着した伐採斧の柄である。W1は、頭



大分類	中分類	小分類	細分類			
工具	斧柄	直柄縦斧柄 (A類)	<ul style="list-style-type: none"> <li>膝柄斧柄                             <ul style="list-style-type: none"> <li>膝柄縦斧柄 (B類)</li> <li>膝柄横斧柄 (C類)</li> </ul> </li> </ul>			
		鍬		広鍬 (平鍬)	<ul style="list-style-type: none"> <li>A類 (平面長方形)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>A1類 (柄孔隆起)                                     <ul style="list-style-type: none"> <li>A1a類 (刃部肥厚)</li> <li>A1b類 (刃部薄)</li> </ul> </li> <li>A2類 (隆起なし)</li> </ul> </li> </ul>	
				狭鍬 (平鍬)	<ul style="list-style-type: none"> <li>A類 (長方形)</li> <li>B類 (鐘形)</li> <li>C類 (曲柄)</li> </ul>	
				諸手鍬 (平鍬)	A類 (長方形)	
				二又鍬 (又鍬)	B類 (楔形)	
				三又鍬 (又鍬)	C類 (曲柄)	
				四又鍬 (又鍬)	直柄	
				多又鍬 (又鍬)		曲柄
				柄		
				柄		
農具	横鍬		<ul style="list-style-type: none"> <li>A類 (さらえ)</li> <li>B類 (えぶり)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A1類 (狭く長方形)</li> <li>A2類 (幅広で台形)</li> </ul>		
	縦杵	<ul style="list-style-type: none"> <li>平鋤</li> <li>二又鋤</li> <li>三又鋤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>柄</li> <li>付属具</li> <li>膝柄</li> <li>反柄</li> </ul>			
	鋤					
	田下駄					
	鎌柄					
	白					
	杵					
	作業台					
	横槌					
	わらじ編み?					
織機具	緯打具			<ul style="list-style-type: none"> <li>縦杵子</li> <li>斜杵子</li> <li>横杵子</li> <li>片口</li> </ul>		
食事具	布巻具					
	杵子					
容器	杵文字状杵子	<ul style="list-style-type: none"> <li>箱形</li> <li>脚付</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>動物形</li> <li>双脚</li> <li>四脚形</li> </ul>			
	匙					
	その他の杵子					
楽器	鉢・碗・皿	<ul style="list-style-type: none"> <li>板作り琴</li> <li>槽作り琴</li> </ul>				
	槽・盤					
	列物容器他					
祭祀具	蓋	<ul style="list-style-type: none"> <li>武器形</li> <li>動物形</li> <li>線刻板 (琴・琴板)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>組み合わせ式</li> <li>単体式</li> </ul>			
	琴					
漁労具	琴板	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヤス</li> <li>銚</li> </ul>				
	楽器					
狩猟具	武器形	<ul style="list-style-type: none"> <li>鳥居型 (背負梯子状組製品)</li> <li>舟底材</li> <li>火鑽白</li> </ul>				
	動物形					
運搬具	線刻板 (琴・琴板)	<ul style="list-style-type: none"> <li>弓</li> <li>背負梯子</li> </ul>				
	ヤス					
雑具	銚	<ul style="list-style-type: none"> <li>舟</li> <li>発火具</li> <li>鉤</li> <li>腰掛け</li> </ul>				
	武器形					
建築材	舟	<ul style="list-style-type: none"> <li>梯子</li> <li>扉</li> <li>鼠返し</li> <li>柱</li> <li>栓</li> <li>板・その他</li> </ul>				
	発火具					
	鉤					
	腰掛け					
	武器形					
その他の木製品	梯子	<ul style="list-style-type: none"> <li>板・その他</li> </ul>				
	扉					
加工品	鼠返し	<ul style="list-style-type: none"> <li>柱</li> <li>栓</li> </ul>				
	柱					
加工材	栓	<ul style="list-style-type: none"> <li>板・その他</li> </ul>				
	板・その他					

第1表 上籙子遺跡出土木器の主要な器種構成一覧

端部に、鉄斧装着孔の痕跡があり、これが破損したためにその下部に改めて装着孔を穿孔した再加工品である。樹種はアカガシ亜属、ヤブツバキ、クヌギ節が使用されている。

B類は斧の装着部が断面長方形に削り出されていることから鑄造鉄斧、袋状鉄斧の柄である。柄が長く装着部が肉厚で大型のB1類 (W5,7,10) は鑄造鉄斧を、小型のB2類 (W6,8,18) は、鍛造の袋状鉄斧が装着されたものと推定される。樹種はサカキ、アカガシ亜属、クヌギ節である。

C類のうち、W14,16は斧の装着面が細長く台部との段差も低いことから、板状鉄斧柄と考えられる。W14は、台部の先端を瘤状に削り残した段を有する。W11,12,17は装着部の根本から折れているが、台部の幅が狭く短い工具が推定され、小型の袋状鉄斧柄ではなからうか。W19~22は、台部は丸木のままあるいは粗割りのままであるため未製品と考えられる。

W13は、柄が台部の手前で大きく屈曲し表面も粗加工状態であるため膝柄斧の未成品としたが、明瞭な装着部のつくり出しがなく、柄部の長さが71cmにおよぶため、鍬柄など他の用途に用いられたものかもしれない。

樹種同定を実施した15点の内訳は、クヌギ節5点、アカガシ亜属4点、サカキ3点、その他4点で、特定の樹種に偏ることはなく、既知の斧柄に多用される樹種が用いられている。

## 2) 農具

鍬、鋤、縦杵、白、横槌、鎌、田下駄など計218点が出土し、建築材を除く主要木器群のなかでは最も多い。このうち208点を図示した。

### ① 鍬

鍬身、柄と装着具が出土している。身部の形態により平鍬 (広鍬、狭鍬、諸手鍬)、又鍬 (二又、三又、多又)、横鍬 (さらえ、えぶり) に分かれる。大半は柄孔を有する直柄鍬であるが、柄孔を設けずに身から削り出した軸部に膝柄、反柄の柄を結縛する曲柄鍬と柄も出土しているため、これらは別に一項設けて報告する。

#### 平鍬 (第33~36図, 図版18)

土壌の掘削、土起こし、粉碎、整地等幅広い用途に用いられた鍬で、方形柄孔で柄に装着する直柄鍬である。刃幅が15cm以上のものを広鍬 (A類・W28,32他、21点)、それ未満を狭鍬 (B類・W50,52他・6点) としたが、破損した広鍬を再加工して狭鍬に転用したもの (W30) もある。また、柄孔を身の中央付近に穿ち両端に刃をつくり出した諸手鍬 (C類・W56,57他・6点) には刃幅が10cm前後の狭鍬的な刃部をもつものが多い。

広鍬の平面的な形状は、長方形 (A類)、鐘形 (B類)、諸手形 (C類) に細分した。A類は、石崎大坪遺跡、一の町遺跡や元岡・桑原遺跡など糸島内の近隣遺跡においても出土しており、当該地域の特徴的な農耕具として「糸島型」と称される (註1)。早良平野との境界に立地し後期を主体とする今宿五郎江遺跡 (註2) ではB類が大半を占める。農耕具の分布圏、時期別の変遷、地域間の交流の様相を測るうえで興味深い。

A類は背面に長方形の柄孔隆起を有するA1類 (W28) と、隆起部をつくりださないA2類 (W41) に細分され、A1類はさらに刃縁部を肥厚させて段を設けるA1a類 (W28) (註3) と刃部を薄く削り出すのみのA1b類 (W38) に細分される。W28では柄孔の両脇に泥除具装

着用の小孔を設ける。

A 2類 (W46, 47,48,49,51) は身厚が比較的厚手で、刃部が明確に削り出されていない一方、側面が刃のように鋭く削り出されているのが特徴である。元岡・桑原42次調査でも同様な特徴をもつ鍬が確認されており、横鍬的な使用が想定されている(註2)が、側縁に刃が削り出されているため、土の切削機能が求められるものであり、刃幅が適度に短く柄孔が片側に寄るという特徴から、足場の悪い法面の切削・整地などには効力を発揮しそうである。

B類の確実な資料はW45のみである。柄孔は大きさに比して全体は小型である。刃部の摩耗や破損によって再加工された可能性がある。

なお、今宿五郎江遺跡では、当該タイプにA 1 a類のように刃部を厚手に削り出し段を削り出したり(註3)、刃縁部が弧状をえがくもの、その両方を備えたものなど折衷タイプも出土し多様性に富んでいる。B類を主体とする福岡平野に接している立地的な特性を示すのであろうか。

C類は、弥生前期のように柄孔隆起を削り出したものではなく、狭鍬タイプ(W57)と広鍬タイプ(W60)があるが、平面形は多様である。W57は両側縁が内向きに緩やかに弧を描いており、ツルハシを想起させる。

平鍬の用材はアカガシ亜属が大半を占めるが、狭鍬W45はイスノキを用いる。イスノキの狭鍬は散見され、在来種のなかでは最も硬質な材であるものの、アカガシ亜属ほど大木に育つことはまれで、身幅の狭い広鍬には不向きで、おのずと用途が限定されたのだろう。

(註1) 米倉秀紀 常松幹雄 比嘉えりか2014『元岡・桑原遺跡群23』福岡市教育委員会

(註2) 米倉秀紀 山口譲治 清金良太2015『元岡・桑原遺跡群24』134頁 福岡市教育委員会

(註3) 五郎江タイプにあたる。加藤隆也2010『今宿五郎江8』120頁 福岡市教育委員会

### 又鍬(第37～41図, 図版19)

鍬身に2本～5本の細い刃を削り出したもので、硬い土壌の耕起・掘削、粉碎、ならし作業など多用途に用いられたと考える。刃数で分類すれば、二又鍬、三又鍬、多又鍬(四又以上)となる。鍬頭部は「コ」の字形、三角形、半円形を呈すもの、刃部は「コ」の字形とV字形に整形されるものに大別され、V字形では開く角度が小さく両端の刃が平行に伸びるものから、大きく外側に開くものまで多様である。樹種はすべてにアカガシ亜属が用いられる。

二又鍬は、又部が「コ」の字状を呈するA類(W64)とV字状を呈するB類(W66)があり、後者には刃部長が短い1類(W65)と長刃の2類(W69)が確認される。

三又鍬は又部が「コ」の字形を呈する確実な例は確認できず、V字形のみである。刃幅は短い1類(W83)と長刃の2類(W70)がある。W82の頭部側面に認められる浅い抉りは鍬身の縦割れ破損に対応した緊縛修理の仕口跡と考えられる。

四又鍬(W85,87,88)は、いずれも中央の又部を「コ」の字形に、両端は「V」字形を呈する。同形態の鍬が今宿五郎江2次(第29図参考)や梅白遺跡(唐津市弥生中期前半)でも確認されており、西北九州において広く分布する形態である。福岡平野では、弥生前期～中期にかけて「コ」の字形の又部を有する四又鍬が四箇遺跡群や雀居遺跡から出土し、また、櫛歯状の多又鍬が三筑遺跡から出土していることから、これが先行する又鍬と理解されるが、中期～後期にかけて二又・三又化、又部の「V」字化が進み、弥生後期以後はこれらが主体となる。まさに

又鍬の過渡的様相を示すものといえる。

W84は、横断面において柄孔の長方形隆起の段が観察され、左側縁部には泥除け具の装着孔の痕跡も認められることから、広鍬A 1類を六又の小鍬に再加工したものであることがわかる。

W86は、刃部が全て欠損し又部の形状も明確ではないが、付け根の又部痕跡とその間隔から五又鍬と推定した。

### 直柄鍬柄(第36, 43図, 図版18)

方形柄穴と組み合わせる直柄鍬の柄は9点を確認した。付属具を装着するための切り込みと楔を打ち込むための浅いくぼみ状の半円形の抉りが設けられたものが大半で、使用方法は後述する付属具とともに那珂久平遺跡の着装例(第22図)に準ずる。

組み合わせ具装着用の切り込みは、長さが15cm未満の比較的短いA類(W99他)とそれ以上を測るB類(W105他)に分かれる。B類は、後述する除泥け具を装着するために長めの付属具を嵌め込むことを意図したものと考えられる。用材はアカガシ亜属が最も多く6点を数え、次いでヒサカキが2点出土している。

W99は唯一の完形品でほぼまっすぐに伸びる。アカガシ亜属の柁目材で全長80.5cmを測る。

W23(第32図)、W252(第65図)は、一端が欠失した棒状材で用途の特定にはいたらないが、残存する一端にグリップ状の肥厚がつくり出されることから鍬柄の可能性はある。

W61～63は付属具で、使用方法は那珂久平遺跡出土資料(第22図)(註1)に準じる。W61、62はアカガシ亜属製で作りが丁寧で、長さも25cm前後と似通っているが、W63は、長さが20cm弱と前2点より短くアカガシ亜属以外の広葉樹が用いられており、樹表の凹凸もそのまま残る粗製品の印象を受ける。

W62の裏面には、長さ12.5cmにわたって深さ2～3mmほど浅く削り込みが行なわれており、泥除け具を挟み込むための隙間をつくり出したものと推定される。

註1 力武卓治 大庭康時1987『那珂久平遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会

### 横鍬(第45・46図, 図版19)

平面形は諸手鍬と似るが、身部を横木採りで加工し長辺に刃部を作り出されたものである。整地などで用いる横鍬とした。柄孔が長辺側に向けて傾斜して穿たれたものが多い。接地する刃面がフラットで、さらえと呼ばれることが多い。

身の左右両縁を表向きに緩やかに湾曲させ、刃幅が30～40cm、高さ10cm程度の横長の方形を呈するA類(W107)と、身の湾曲度が小さく、刃幅が25cm未満、高さが15cmほどのいわゆる草カキ板状のB類(W111)が主体である。

W115は、身表に柄孔隆起を有する唯一の例である。また、W117,118は円形の柄孔が穿たれており、W118は推定刃幅が48cmほどの大型品である。

W107は、着柄状態で出土した。柄の先端部は出土時には既に長さ5cmにわたって材質の劣化が進んでいたために取り上げることができなかったが、現地での実測で柄長が90cmほどであ



第22図 那珂久平遺跡平鍬着柄状態模式図(註1文献 Fig.201より作成)



ることを確認できた。現状では柄の断面は楕円形を呈しているが、これは土圧によって変形したもので本来は円形だったと考えられる。着柄角度は概ね120°で鈍角をなす。柄孔は横長の長方形を呈し、身に挿入してから木口から別材の楔を打ち込んで固定しており、このため木口から長さ14cmほどにわたって大きく割けている。身は幅31cm、高さは9cmを測り平面形は横長の台形状を呈しているが、上部側は土圧によって変形し半ば潰れた状態を呈する。身、柄ともにアカガシ亜属製であるが、楔の樹種は同定できなかった。

W114、116はアカガシ亜属で横木採りの板である。平面形は台形を呈し、器厚が薄く、片側に向かって緩やかに湾曲しているため、横鋏の未製品と推定した。

用材は、119が広葉樹で他は全てアカガシ亜属である。

#### 曲柄鋏 (第47図, 図版20)

曲柄鋏は小鋏(W122)を含め3点が出土した。W120,121は平鋏で、身部の中ほどに最大幅があり、計測値はそれぞれ8.0cm、7.2cmを測る狭鋏である。軸部と身部の間に明瞭な段が削り出され軸部が長く伸び先端を丸く納める。W120では、軸の中ほどから先端にかけて段を設けて薄く削り、W121では軸部の手元の片側に斜めに浅い切り込みを入れる。いずれも柄を結縛した際に固く固定できるように工夫を凝らしたものであろう。

W122は、小型の撥鋏である。刃部の幅は9cmほどを測り、身部と軸部の境から一段深く削り段を設ける。W120と同様に使用時の紐ずれを防ぐ工夫であろう。

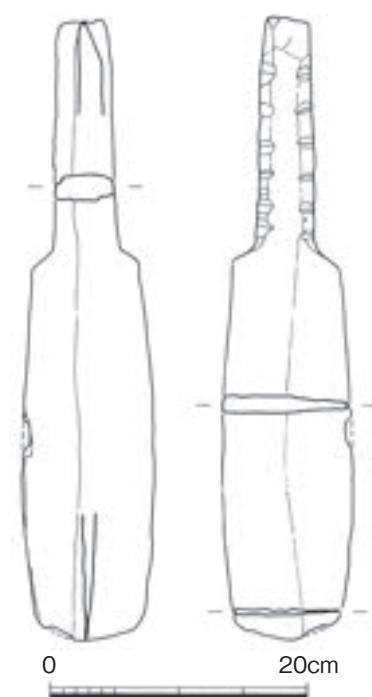
W123は、アカガシ亜属の棒状製品で先端部がネギ坊主状に削り出されており、曲柄鋏の軸頭部の可能性を考えて、ここに掲載したが、類似形態のものが当該地域には認められず、むしろ背負梯子の横棧材(W483)との類似性も指摘できる。用材はアカガシ亜属である。

近年、糸島地方では曲鋏の出土例が増加し、元岡・桑原遺跡42次、今宿五郎江遺跡と合わせて18例ほどが報告されている。大半がアカガシ亜属材であるが元岡42次出土の2点はクスノキ製である(第47図(参考))。身部の幅が10cm未満の平鋏(狭鋏)であること、軸部長が長く身との境に明瞭な段を設ける点などが共通するものの、形状は軸部、身部共に多様で軸部では横への突起を削り出す(第47図(参考資料))のものもあるなど細部では異なる点も多いが、主要な3遺跡から出土していることから曲柄鋏として当該地域で一定の需要を満たしていたと考えられる。弥生時代中期の北部九州は曲柄鋏の空白地帯と考えられていたが(註1)、鹿部東町遺跡(古賀市)では、弥生中期前半に遡る曲柄鋏(第23図・註2)も出土しており、軸部との間に段を有するなど本遺跡例とも類似する。国内における曲柄鋏の出現・展開を考える上でも興味深い資料といえる(註3)。

註1 樋上昇1994『耕作のための道具—ナスビ形農耕具を中心に』『季刊考古学第47号』雄山閣

註2 高倉洋彰1973『鹿部山遺跡』鹿部山遺跡調査会

註3 佐藤浩司2008『西日本の農耕具 光部・東部九州』『季刊考古学第104号』雄山閣



第23図 鹿部東町遺跡出土曲柄鋏 (1/6)

#### 曲柄鋏柄 (第48図, 図版20)

サカキ、ヒサカキ、スダジイの枝分かれ部を加工した膝柄(W124~127)と、反柄(W128)がある。膝柄では台部の先端と基部にネギ坊主状の突起が削り出され縄縛固定に供する。W128は先端部に葱坊主状の小突起を削り出しその基部から15cmほどまで軽く周囲を削って段を設けここに縄縛して身を固定したものと考えられる。

#### ② 鋤

土壌の深耕や運搬に用いる掬い部を持つもので、形状が確認できたものは全て身部と柄部が一体的につくりだされる一木づくりであった。樹種はアカガシ亜属である。

まず柄部に着目すると、握り部が残存するのは20点で、形態的には把手の外形が三角形(A類・W118)、T字形(B類・W131)、半円形(C類・W168)があるが、A類が最も多い。B類は、握り部を別づくりとするB1類(W131)と、一木のB2類(W144)に分かれ、さらにB1類は、柄で繋ぐB1a類(W175)と、蟻溝に差し込むB1b類(W176)が確認される。W459は、アカガシ亜属の棒材で、一端に断面方形の柄が削り出されており、B1a類の鋤である可能性がある。

半円形、三角形の把手のなかには、握り部が矮小化してグリップとしての用をなさないもの(W167, 173)があり、機能に付されて装飾化した可能性もある。

掬い部は平鋤と又鋤に分類されるが、いずれも掬い部が短いスコップ型のみである。

なお、狭い範囲の深掘り用具とされる掘棒も、本項中で報告する。

#### 平鋤 (第49~51図, 図版21)

平鋤は掬い部がスコップ状のA類(W130)、肩部の直下に抉りを入れ中位が膨らむB類(W144)に分けられる。掬い面は平坦面をなすものだけでなく、W144, 146~149のように掬い面を窪ませて薄くするとともに側縁部を厚く削り出したものがみられる。

W142, 147は身幅が狭く、掘り棒に含むべきかもしれない。

#### 又鋤 (第52・53図, 図版21)

又鋤は掬い部が又別れた鋤で、刃端の形状によって二又鋤(W150)、三又鋤(W157)に分類される。いずれも肩部が横に張りその下に抉りを施す。刃が大きく外に開くA類(W150, 157)と、両側の歯が平行してのびるB類(W152, 161)に細分できる。

W168, 155, 156は、他の又鋤に比べて掬い部の外縁がU字形で平鋤A類に近く、又部の形状も「コ」の字に削り出されていることが共通し、これらは平鋤を再加工して二又鋤へと転用された可能性が高い。W156は、柄の途中にも再加工が施されており柄長は極端に短い。柄を継ぎ足して使用されたのであろうか。

#### 掘り棒 (第55図, 図版21)

W177~180は足掛けの肩部がなく、掬い部が柳葉状を呈すること、全形を推定できるW177では握り部がついていない。狭い範囲を突きながら深掘りに適した掘り棒とした。身幅の狭い杓文字状杓子と明確に区別するのは難しいが、身幅が6cm前後と細身であるにも関わらず厚手なつくりで、柄は太く頑丈でアカガシ亜属材を用いるなど強度が重視されていることなどを根拠として分けた。

なお、W179は華奢に見えるが、保管時の生物劣化によって資料が痩せ細ったことによる。

### ③ 田下駄 (第55図132, 図版50)

水田での農作業や湿地での歩行の安定や足の保護などに用いられる。W182は、緒孔が頭部に2孔、踵側に2孔を穿った4孔式の多下駄であるが、頭部の尾穴が近接して穿たれていることから三孔式に近い。2孔間に縄通し用の溝が穿たれているほうが裏面と考えられ、足指の位置からみて左足用と推定される。スギの板目材を用いている。

### ④ 臼 (第56図, 図版22)

穀物の脱稃や製粉などに用いられる。4体が出土したが全て破砕品である。いずれも臼部は深く、使用による摩耗が進んだ状況が見受けられ、底が抜けるなど使用不能に陥ったものと推定される。樹種はクスノキが多いがW184はヤマザクラを用いる。いずれも芯持ち材の縦木取りである。高さは43cm前後が多いが、臼部の径は28～48.2cmと幅があり、最も小径のW186は、残存部の平面形でみると扁円形を呈している可能性がある。外面に把手、持ち手などの付属意匠が施されたものは確認できていない。

W183はクビレの位置が低く台部は裾に向かって鋭く反転し、底面は5cmほどの上げ底となる。W184は唯一のヤマザクラ製で器高も低い。臼部の器壁は10cmほどと厚い。クビレは低い位置にあり張り出すのみで底面の削り込みもなく、どっしりとしている。W185は、クビレが浅く柱状を呈し台部は裾への広がりも小さい。クビレの位置は高い。W186は、スリムな側面観を呈し、クビレも大きく位置も高めである。台部は裾に向かって踏ん張り気味に大きく開き底面は8cmほどの上げ底となる。

### ⑤ 竪杵 (第56・57図, 図版22)

棒材の木口を用いて粉砕などの食材加工に用いるもので、18点が出土した。しかし、次項で紹介するように横槌状を呈しながら木口部に使用された明瞭な痕跡を残すもの(W195, 199)、側面に叩いた痕跡が明瞭に残り明らかに破損した竪杵を横槌へと転用したものやその残片とみられる握り部片(W191, 192)が出土しており、細身で片手で使用したとみられるもの(W200, 201)などが認められ、相互の分類は明確ではない。

全形を把握できるものはW187～189の3点のみである。W187,188は、全長が107cmを測る大型品で、搗き部と握り部の境には稜があり、搗き部は先端に向かって徐々に太くなるところが共通し、W187では握り部の中央に算盤玉形の突起が削り出される。これに対してW189は全長が96cmと短めで、搗き部と握り部の径差が小さな棒状を呈し、搗き部と握り部の境も不明瞭である。W190は、握り部を欠失するが搗き部が細めで棒状を呈することから、189との類似形と推測されるが、出土状況から推定される長さは108cm近くあり前者に近い。

W191, 192は握り部の中央で算盤玉状の突起が削り出されている。

弥生時代の竪杵は算盤玉状の突起を有するタイプが先行して出現することが知られているが、当遺跡では突起が削り出されたタイプと消失した両タイプが混在しており、突起は瘤状に矮小化していることから、算盤玉状の突起が消失に向かう過渡的な様相がみられる。

また、弥生時代前半期では全長130～150cmの大型品が主流であるのに対し、弥生後半期～古墳時代には100cm前後へと短小化する傾向が指摘されており、本遺跡例では105～107cmを測り、短小化への初期段階と考えられる。木取りにおいては弥生時代前期では割材が多く使われるのに対して中期以降に芯持ち材へと移行するとされる(註)が、当遺跡では双方がほぼ同数を数え、これらの研究成果を勘案すると、当該遺跡出土品の時期は概ね弥生中期後半から後期にかけての過渡的な特徴を示しているといえる。

なお、選定樹種については、アカガシ亜属が最も多く、次いでヤブツバキ、クスギ節、イスノキが続く。

また、径は細いが小口部のみに使用痕跡があるW200, 201は、自重で食材を粉砕するのではなく、片手使用の捏ね棒的な使用を想定した方がよいかもしれない。イスノキ、ヤマモモなど、通常の竪杵に用いることの少ない樹種が用いられていることも興味深い。

註 村上由美子1996「杵と臼の変遷について」『滋賀考古』第15号

### ⑥ 作業台 (第59図, 図版23)

W202は、アカガシ亜属の厚めの板目取り材を用いた作業台である。台部の長さ33.4cm、幅27.8cm、厚さ9.0cmで、小口部の一端の樹芯部を棒状に削りだした長さ13.3cm、径3.9cmの把手がつく。近隣出土例としては湯納、那珂久平、元岡・桑原42次調査例(アカガシ亜属)などがある。硬い木芯側を作業面としており、把手近くに認められる径18cm、深さ2.4cmの播鉢状の凹みは、作業による使用痕と考えられる。

### ⑦ 横槌 (第60～62図, 図版23)

円柱または棒状製品の一端を削って握り部(柄)を成形し、側面に打ちつけた痕跡が認められるものを横槌とした。横槌に分類したのは26点であるが、竪杵と同様に木口部にも使用痕跡が認められるものがあり、明確に分類できなかったものもある。

槌部の形状や規格によって使用方法が異なることも想定されるため、槌部の径と全長によって便宜的に4類に分け、さらに形態的な特徴からそれぞれ2～3類に細別した。

A1類：径が8cm超。槌部の径は一定 握り部との境に明瞭な段を有する(W204)

A2類：径が8cm超。槌部の径は一定 握り部との間に段を有さない(W208)

B1類：径が5～8cm 全長35cm超 槌部の径は一定。握り部との境に段がある(W212)

B2類：径が5～8cm 全長35cm超 槌部の径は一定 握り部との境に段がない(W206)

B3類：径が5～8cm 全長35cm超 槌部から握り部に向けて窄まる(W217)

C1類：径が5～8cm。全長35cm未満 槌部の径が一定(W219)

C2類：径が5～8cm。槌部が握り部に向けて窄まる(W226)

D類：径が5cm未満の小型(W229)

樹種は、アカガシ亜属が10点と最も多く、続いてヤブツバキが8点、クスギ節3点、イスノキ2点と続き、硬い樹種が占める割合が高い。芯持ち材と割材の割合がほぼ同数であることは、本遺跡出土の竪杵と似た傾向を示す。



## ⑧ 鎌柄 (第63図232～234, 図版24)

W232は鎌柄である。柄の先端部が削がれているが着装孔の一部が辛うじて残る。孔の幅は6mmほどを測り、板状縦斧柄の可能性もあるが柄長が短いので鉄鎌柄と考えた。柄頭は「L」字に加工される。W234も柄頭が同様の形状を有するが、欠如部が多く斧柄である可能性もある。W233は、着装孔が鈍角に穿たれるもので、装着孔の幅は4～5mmほどで幅が狭いため、これも鉄鎌柄と考えられる。

W231は、全長40.2cm、径2.5cmの二様葉類の棒状製品で、先端は鈍く尖りその下に長さ4.8cm、幅1.0cm、さらにその4cm下にも長さ1.7cm、幅0.7cmの長方形孔が、上部とは直交方向に貫通する。先端から4.7cmまでに柄を周回する12本の平行沈線を刻み、木口にも螺旋状にめぐり、その合間に斜方向の細かい刻みを充填する。柄頭にはグリップが削り出されているが、両側縁はそぎ落とされて現状ではL字状を呈す。鎌柄としたが、グリップの精緻な施文や2個の長方形孔から祭祀具など儀器の可能性もある。

## ⑨ 木鎌状木器 (第63図235, 図版24)

W235はアカガシ亜属製で、図の左縁部が肥厚している。また、下部は刃状に削りだされ、左下隅部は磨耗している。形態と磨耗部の特徴が山陰地方で出土する木鎌に似る。

## 3) 狩猟具

いずれも破損品で全形は明らかでないが、先端部に弓弭と推定される先削ぎ加工が施されている3点を弓として報告する。

## 弓 (第63図, 図版50)

W236は、丸木の下幹側が折損しているが、上端に向かって窄まりその先端では段を付けた先削ぎが施されていることから弓の弓弭部と考えた。しかし、用いられた樹種が軟材とされるキハダであることから弾性は極めて乏しく、弓の形代や別の用途を想定すべきかもしれない。

W237は、ヤマゲワの丸木材が緩やかに弧を描きながら上端に向けて窄まり、先端部下の両側縁に弓弭状の切り込み加工が施されている。中ほどには材に糸を巻き付けたとみられる線条痕が認められ、下端は一方から曲げられてはじけたかのように折損している。

W238は、丸木の先端近くを丸い鏢状に削り出しさらにそこから先端に向かって細い突起を削り出しており矢弭と推定した。そのすぐ下には一方から曲げられてはじけたように折損している。残存部位には黒漆の塗布が確認される。マツ属材を用いる。

## 4) 漁労具

## ヤス (第64・65図, 図版25)

漁労に用いられたとみられる木製のヤス状尖頭器が多く出土しており、葛で結び組み合わせて使用したもの、単品で使用されたものがある。なお、径の太いものは銚の可能性もある。

W239は、組み合わせ式ヤスである。ヒサカキを削いで先端を尖らせた9本の棒状の部材が扇状に束ねられている。束ねた基部付近は個々の材をへら状に薄く削って束ねやすくし、①束ねた基部から先端に向かって6.5cm～19cm間は、蔓を螺旋状に丁寧巻いて留める。続いて②

21～23.5cm間では各ヤス材を縫うように互い違いに蔓を通し、さらに③26～27cm間の中ほどの4本を蔓で束ねた後にさらにその間を螺旋状に巻きつける。製作当初に①の結束で部材を固定したものが、部材の折損により②の結束で残った部材を固定することとなり、さらに左端の欠損を受けて③の結束固定で残存するヤスの補強が試みられたものと推定した。

組合せ状態を保って出土した弥生時代の組み合わせヤスは、本例以外では青谷上寺地例(鳥取市)が知られるが、結束状態が確認できる資料は本例に限られる。

W240, 241は、W239と同様に基部で束ねた組み合わせ式のヤスの部材とみられるが、長さが大きく異なるため別個体の部材と考えられる。どちらもツゲの柁目取り材を棒状に加工しており、先端を傘帽子状に削り出している点が共通し、類似例は今宿五郎江11次調査(6783他)でも確認されている。刺した獲物が抜けにくくなるように工夫されたものであろう。基部のつくりについては、W241は、単に両面からへら状に削いでいるのに対し、W240では片面をへら状に加工するものの、その裏面は断面を蒲鉾状に加工し、根元から3cm、16.5cmのところに段を設ける点異なる。W239の結束方法から推定すると、W241は束ねた時の中間材であるのに対し、W240は外縁材部に用いられたと考えられ、段によって結束部が強固に固定できるように工夫されたものと考えられる。青谷上寺地資料にもよく似た加工が認められる。概報(1994)では「熊手状製品」と報告したが訂正する。

この他、先端を尖らせた串状の製品が10点ほど出土した(第53図W242～251)。W242, 243は径が太く、漁労具であれば銚先的な用途も考えられる。W244, 245はイスノキを用いており、W245は先端近くで折れ曲がっている。これらもヤスの部材である可能性がある。W246もイスノキとみられ、残存材の中ほどに径4mmほどの小孔が貫通している。

これら串状の木器の類似品が元岡遺跡群、今宿五郎江遺跡など旧海岸線に面した低地性集落でも多数の出土が報告されており、同様の用途が推定されている(註)。

註 森本幹彦2019「特論元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流 3.漁具の様相」『元岡・桑原遺跡群34』福岡市教育委員会

## 5) 紡織具

## 紡織具 (第66図, 図版24)

W253, 254は緯打具で、いずれもアカガシ亜属を用いる。W253は、全長69cm、幅5.8cmでほぼ完形を保ち両端を刀の切先状に鋭く成形しており打ち込み部は薄く刃状に尖る刀杼形を呈し、背は比較的厚めである。表面には経糸による摩滅痕などの使用痕跡は確認できない。W254は破損品で、前者に比べて厚手で断面が紡錘形をなし、打ち込み部も厚く鋭さを欠く。

W255～258は丸木の先端部下に断面「レ」の字状に削り込んで紐かけとし、表面の樹皮を剥いで滑らかに仕上げていることから布巻具と推定した。W257の紐かけ部は全周を丁寧に削り込むが、他は簡単に抉りを入れる程度で仕上げる。W258は完形品で全長82cmを測る。樹種はシイ属、マツ属、アワブキ科などが用いられている。

## 6) 運搬具

### ① 背負梯子状製品 (第67図, 図版26)

6区南の3号木器溜まりで出土した背負梯子状木製品(W484-1, 2)に類似する部材品で、3体を報告している。ほぼ完形で出土したのがW259で、外形はアイスホッケーのスティック状を呈し、75cmほどの細長い枝部と柁目取り加工された長さ32cmほどの幹部からなる。基本形はW484-1, 2と同形であるが、屈曲部の下端がヒール状に突出している点が異なる。幹部は先端に向けて幅が狭くかつ薄くなるように加工され、特に先端部の加工は丁寧で、周囲は面取りも行われている。他部材と結合させたものとみられる。また、枝部の先端は周囲を軽く削いで尖り気味に加工しており、こちらも別材と組み合わせた可能性がある。幹部の中央と先端寄りに長方形孔が穿たれており、裏面の屈曲部からやや枝に寄った位置に2.1×1.3cmの長方形孔が穿たれるが、貫通せず深さ2.0cmで止まる。類似するW260, 261の幹部にもW259と同様にそれぞれ2個の長方形孔が認められるが、W260の右孔は貫通しておらず断面「コ」の地形の溝で左孔とつながる。W261は枝別れ部に丁寧に加工した痕跡があり、他用途への転用が試みられたものと考えられる。幹部の先端に向かって徐々に薄くなるように削る。

### ② 舟 (第56図, 図版26)

W1205は、クスノキの半裁材の内側が削られたもので、谷部最下層の黒色砂質土層から出土した。舟体の一部と考えられるが、先端小口は裁断されていることから船尾付近と推定される。舟縁の直下には3cm×2cmの楕円孔が認められる。また底部には深さ1.2cmほどの断面「コ」の字形の切り込みが施される。舟の旧形について、これを丸木舟と想定した場合断面に表れた年輪を基準に外形を復元してみると、幅48cm、深さ20cm、半円形状の断面に復元される。

現状が製作当時のままであるのであれば丸木舟となろうが、現状値では船体が浅すぎる感があり、船体の両端はゴンドラ状にせり上がっていたのかもしれない。材の厚さは船底付近では7.2cmを測るのに対し、船縁の断面は薄く1～2cm程度しかなく強度に乏しいと考えられ、舷側板を足した準構造船であった可能性が高いと考えられ、残存面にも再加工が施された可能性がある。

### ③ 櫂 (第69図, 図版26)

櫂と考えられるものは5点である。水掻き部の形状は多様で厳密には掘り棒、杓子と峻別できないが、杓子などに比べて水掻き部が厚く大きいことや、W264～266では水掻き部が左右非対称で、類似する形状の櫂が青谷上寺地遺跡などでも出土していることを考慮した。アカガシ亜属を用いたものが多い。

W263は、水掻き部のみであるが、平面が柳葉状を呈し長さが30cmほどを測る。W267はタブノキ材を用い、水掻き部が44cmと長いものの、幅は8cmに満たない細形である。両側縁は欠損したのだろう。W264～266は、柄は太くがっしりとしているのに対して水掻き部が小さい。W266は、目立った欠損はなく原形を保ち全長は88cmほどであるが、水掻き部は小さいため掘り棒の可能性もある。

## 7) 食事具

食事具は、破片も含めて77点出土しており、出土数が多いのも本遺跡の特徴といえる。形態的に掬い部が深く椀状を呈する大型品を杓子 小形でスプーン状を呈する匙、柄から掬い部にかけて平面的に造作され掬い部が平坦であるものを杓文字状杓子、片口とした。木器集成では、杓文字状木器を「杓子状」とされるが、本書では「杓文字状」とする。

### 杓子 (第70～75図, 図版27・28)

掬い部が深く大きな杓子が多く出土している。柄の伸長方向が大きく三類に分かれ、上に伸びる縦柄杓子(A類)、斜め方向に伸びる斜柄杓子(B類)と、横方向に伸びる横柄杓子(C類)、に大別される。また、掬い部は平底と丸底がある。丸底の掬い部片は多数出土している。

A類のもっとも残りのよいのがW274である。平底の掬い部の側面から削り出された柄部が垂直方向に立ち上がり、頭部では背後に向けて「へ」の字状に屈曲する。柄頭には、板状の突起が削り出される。突起は外縁が破損しているが、これとは別に出土した突起部片(W268～273)から、卵形と三角形の2種が確認できる。W275は、掬い部だけが良好に残存しており、柄の付け根に山形の稜を削り出す。

B類は、掬い部が丸底で側面観は半球形を呈するW277, W284を代表例とするもので、柄の付け根に山型の小さな稜が削り出される特徴はA類と共通する。柄は掬い部の側面から斜め上方に直線的に伸びるが、柄頭下で弧を描くように下向きに屈曲し鏝状の節帯を削り出すB1類(W278)と、鋭く「く」の字状に鋭く屈曲し、横広の板状をなすB2類(W284)がある。

C類は3点が出土しているが、そのうち2点は未製品である。W290はクスノキ製で柄が直線的に伸びるものの先端付近で緩やかに背面に方向に反る。掬い部に焼痕が認められるが加工の前処理である可能性もある。

W294は、外形の粗削りを終えた段階のものでトネリコ属である。柄部は斜め上方に伸びるが、途中で大きく弧を描いて垂下する。1区1号土壙から出土したW476は、これから掬い部内面を粗削りするなど細部の加工が進んだ段階を示しており、いずれも同種製品の製造工程がうかがえる好資料である。後期前葉に下る資料であろう。

W297は、掬い部から柄にかけて半裁欠失しているが、掬い部が粗削りされた段階の未製品と考えられる。

### 匙 (第73図, 図版30)

W291, 292は小型の匙で掬い部の径は10cmを測る。W291は、柄が掬い部の側面から斜め横方向にのびるのに対し、W292は、サカキ製で掬い部からまっすぐ横方向にのびる。

### 片口 (第75図, 図版29)

5点を片口とした。浅い掬い部から握り部まで樋のような窪みが続き、柄の先端は鏝状あるいはヘタ状の突起がつくり出されるのが特徴であるが、掬い部の形状や大きさはさまざまである。なお、W298は、握り部が幅広で中央を長方形に削り貫いた把手状を呈するが、掬い部から握り部にかけての基本形状はW299に似ている。

掬い部の幅が広く、瓢箪を半裁したようなA類(W299)と狭く小型のB類(W300)に細別が可能である。B類は、マキ、ヤマグワ、イヌガヤを用いた器表面が滑らかな材が用いられており、食用具としての使用が想定される。



**杓文字状杓子**（第76～78図，図版29・30）

掬い部が平坦かつ薄く、粉末や液体などの攪拌や調理に用いられたと考える杓子で、20点ほどが確認された。掬い部が幅広で先端部が丸みをもつA類（W303）と、幅が狭く先端部が尖り気味のB類（W309）、掬い部に段が削り出されたへら状のC類（W319）に大別される。

A類のうち、W304、306、309などでは、掬い部の表裏に渋状の黒色顔料が塗られており、同様の事例は近隣の今宿五郎江、拾六町ツイジ遺跡（以上福岡市）などでも確認されている。柄には塗られた痕跡が認められないものが大半であることから、顔料の生産、使用時の攪拌などに用いられた可能性が指摘される（註1）が、用途に応じて耐久効果の向上のために塗布された可能性も指摘され（註2）、後者の見解を支持したい。

W321は、エノキ製で掬い部と柄の境に明瞭な段を有し、掬い部の中ほどに径1cmほどの円孔が穿たれる。

樹種は、樹種同定数が多いA類に限ればアカガシ亜属、ツバキ、ヒサカキ、ヤマモモなど多様である。W312は、マキ属を柁目取りした薄板を用いたもので、年輪が表面に浮き出る見た目にも美しい優品である。

註1 上原真人1993「食器具」『木器集成図録近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所

註2 工樂善通1994「木工と漆」『季刊考古学第47号』雄山閣

**8) 容器**

破片をふくめて53点が出土し、このうち47点を図示した。容器は刳物が大半を占め、形状は、長方形の箱形、円形や楕円形の皿形・盆形、舟形など多様である。箱型、舟形は一定の深さを有するものが多いが、楕円形、円形のものも深浅両タイプがある。双脚を削り出した容器は長脚のものでは中央に透かしが施されたものが多いが、短脚のものもあり、四脚の単脚容器とともに時期的に後出する傾向にあり、中期末～後期前半の様相を示すものと考えられる。

胴部がエンタシス状を呈する円筒形容器片が3点出土している。胴部に小突帯を削り出したり、糸を巻き付けるなどの装飾技法から、類似例が出土している朝鮮半島に系譜をもつ容器と考えられる。

四脚容器のなかには踏ん張りを表現するなど獣脚を意識したと考えられるものが多い。容器本体の形状にも動物を模したと考えられるものも多く、これらは四足動物を意図的に表現したものと考えられ、祭祀などに用いられる特殊容器の可能性もある。

当遺跡出土容器には精製、外来系など特徴的な資料が多いので、個体ごとに詳細に報告する。

**朝鮮半島系筒形容器**（第79・80図，図版31）

W322は、押し潰された状態で出土した容器の底部片である。残存する容器表面は平坦な面と湾曲面をもつことから、平面形は正円ではなく楕円形を呈していたと考えられる。ヤナギ亜属の柔らかい材を刳って製作されており、器厚は1.5mmほどで、土圧による圧縮変形を考慮してもかなり薄い。外面の下端には細い糸が幅8mmにわたり巻かれ、その上から本体とともに黒漆で塗り固められている。

漆は内面にも塗られているが、底に沿って幅8mmの漆が塗られていない部分が帯状に廻りその境界には漆溜まりが盛り上がっていることから、別材の板を底に嵌めて漆で接着した痕跡と

推定される。外面に巻かれた糸の素材は竹とする報告があった。管見では国内の類例を把握できていない。

類似する装飾がみられる資料として茶戸里遺跡出土の漆塗り蓋付き容器（註1）がある。樽型の容器の口縁部下に糸を帯状に巻き黒漆で固めている。同遺跡からは器壁を薄く仕上げた円筒形の容器の底に別材の底板を接着したとみられる容器（第79図参考）も出土するなどの類似点が認められ注目される。

なお、今宿五郎江遺跡第9次調査においても、外表に帯状に繊維を巻いて漆で固めた容器（註2）の出土が報告されている。まだ実見していないが関連資料として紹介しておく。

W324、325は、カヤ材を用いた筒型容器片で、口縁部を断面コの字形に整形し、胴部中位は樽状に緩やかに膨らむ。外面中ほどから下端にかけて二条一組とする高さ1mmほどの三段の削り出し小突帯を等間隔に削り出し底部の縁辺は斜めに傾斜をつけて削ぎ落とす共通の特徴をもつが、小突帯の間隔が微妙に異なるため、別個体であろうか。底部の内面下端から上向きにそれぞれ幅7.5mm、9mmの浅い削り込みが認められることから、別づくりの底板を下方から嵌め込んだものと考えられ、底板は目釘で固定された可能性があるが、当該資料ではその痕跡は確認できない。

これに類似する資料として里田原遺跡（長崎県平戸市）出土の筒形容器片（中期前半）がある（第24図・註3）。当該例は各段の突帯部の間隔が広く削り出され、底部の縁は斜位に削り出し2条の沈線が刻まれている。また、突帯の各段には縦一列に並ぶ隆起部が削り出され、縦方向に通した紐通し穴が開けられる。前述の茶戸里遺跡出土黒漆塗り容器に共通する精製容器であり、これらが大陸に系譜をたどる容器である証しとなる。

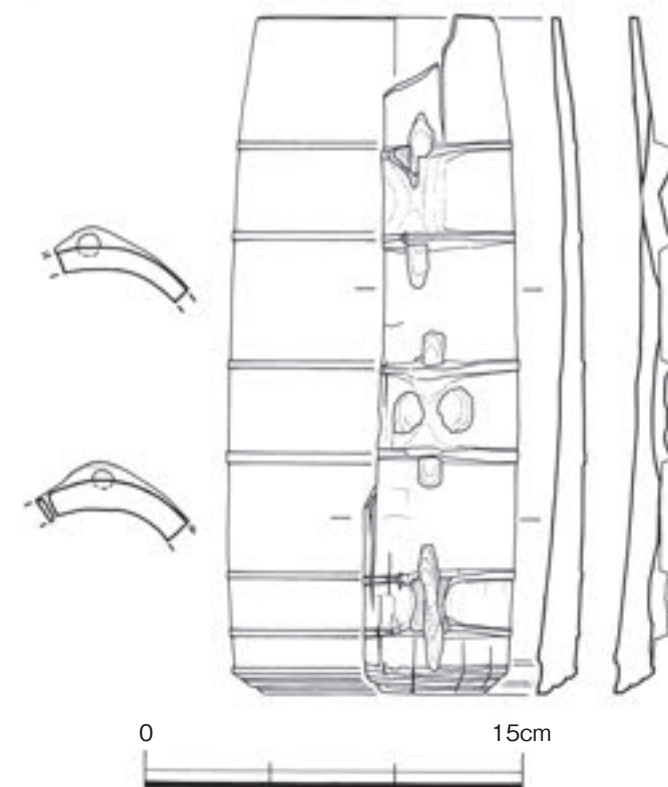
註1 李建茂他1990「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告」『考古学誌第1輯』しこうしゃ

註2 杉山富雄2007『今宿五郎江6』福岡市教育委員会 出土遺物4198

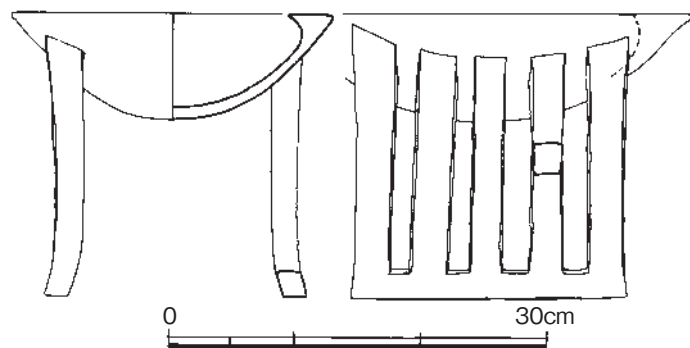
註3 正林護 村川逸朗1978『里田原遺跡』田平町教育委員会

**高坏形容器**（第79図，図版31）

W323は、杯部を鋤先口縁の高杯状に削り出した双脚容器である。杯部は復元径27.3cmで須玖式高坏の標準径に近い。下面に下駄歯状の双脚を削り出し、脚の中央には台形の透し孔が穿



第24図 里田原遺跡出土筒形容器実測図（1/3）



第25図 宮ヶ久保遺跡出土高坏形容器実測図(1/4)

たれる。内外面に黒漆を下地として塗るが、双脚の裏面とこれで隠れる底面には塗られていない。脚部の下部には朱漆が上塗りされている。鋤先口縁の上面には朱漆で丹塗磨研土器に似た放射状の細線が密に施される。同様の細線は脚部の下半部にも認められる。下端が欠失しているため、形状の詳細は明らかではないが、類似する脚付容器の細線の施文例として惣利遺跡（筑前町）出土木器5003～5011、三筑遺跡1次（福岡市）42-2例（註1）が知られ参考となる。いずれも箱形容器の脚部と推定されるが、三～五条を一単位とする朱漆の細線が帯状をなして水平方向に適度の間隔を取りながら配されている。似た施文がW344にも認められる。

器種は異なるが北部九州では弥生時代前期後半から後期にかけて細線を基調とした施文漆器が広範囲で出土しており、当該地方における高い嗜好性が認められるとともに、その系譜は朝鮮半島南部に求められるという（註2）。

近年、福岡平野、佐賀平野において鋤先口縁の坏部を象った木製容器の類例（註3）が増加しているが、これらは円柱形の四脚を削り出したもので成形も粗いことが当遺跡例と異なる。一方、古式の資料としては宮ヶ久保遺跡出土の中期前半資料が知られる（第25図・註4）。こちらは平面形が楕円形を呈する双脚透孔入りの精製品であることから、双脚タイプが先行し、中期後半の四脚容器の広がり契機として四脚化したと考えることもできる。

ちなみに当該資料は4区6層からの出土で、中期後半に属する。

註1 夜須町教育委員会1997『惣利遺跡（県道調査区図版編1）』、山崎純男1981『三筑遺跡・次郎丸高石遺跡』福岡市教育委員会

註2 田崎博之2018「漆工芸の歴史」『伊予の木工芸』愛媛県埋蔵文化財センター

註3 吉野ヶ里遺跡（TD I-II-105）、元岡・桑原遺跡群42次36-145他で出土報告がある。

註4 村岡和雄1998『宮ヶ久保遺跡』阿東町教育委員会 坏部の平面形は楕円径を呈するところが特徴である。

#### 把手付楕円形容器（第81図，図版32）

W331は、楕円形の浅鉢型容器で深さは7.5cm程度と推定される。残存する片側に縦に環状に巡る把手が削り出されたと推定するが、対面の器断面が薄くなるため把手は片側にのみ付されたものと考えられる。把手側の口縁は小さく山形に隆起し外縁の口縁直下に一条の細い沈線をめぐらす。内外面とも黒色顔料が塗られているが漆か渋かは不明である。

W333, 334は、円形の浅鉢形容器の一部で、こちらは欠失した反対側にも同様の把手を付さ

れた諸手容器と推定される。把手は上方に向かって屈曲しながら延びる。把手の形状などにはバリエーションがあるが、吉野ヶ里などにも類似資料（註）がある。

註 渡部芳久2017『吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会

#### 動物型容器（第82・83図，図版33）

W335は、四脚を削り出した長方形容器で、容器中ほどの外側縁の一方が外側に張り出し、底面も下膨れしている。器部の木口の一端は脚端部に合わせて垂直に削り出されるのに対し、もう一端は脚部付け根から斜め上に伸び、脚は若干外向きに踏ん張るように削り出される。側面観は四脚動物の胴体を想起させ、胴部の膨らみは元岡・桑原遺跡42次調査出土の妊娠した動物を模した土製品が想起され、同様に四足動物を模した容器であろう。

W347は、平面形が楕円形を呈する小型容器で、長軸側の一端は口縁が内傾して削り出されておりアワビの殻を想起させる。市内の本田孝田遺跡では土製品に類例がある（註）。

註 角浩行1992『本田孝田遺跡・東ス町遺跡』前原町教育委員会

#### 舟形容器（第87図，図版35）

W348は、ゴンドラ形の舟形容器である。遺存状況が極めて悪く、側板部は破断し接合できないため図上で復元した。全長68.2cm、幅17cm、高さ11cmを測り器壁は厚めである。

舟底は、緩やかに弧状に湾曲し、図の左側底部が薄く先端が斜めに立ち上がることから舳先側、右端は真っすぐに切れているので艫であろう。艫側の小口には長方形孔が設けられ、穴の左右は背面に向けわずかに突出する。

#### その他の容器（第80図～82図，第84～87図，図版31～35）

長方形プランの容器は長さ50cmに満たない中～小型品が多い。形状は多様であり、脚台や把手を付けるものが多い。

W327は、底面が丸みをもつ長方形の箱型容器片で、小口部は断面が逆L字形に突出する。

W328は、センダンをを用いた隅丸長方形の皿状の容器で底の器壁は極めて薄い。

W329は、未成品で内削りの途中である。

W330は長方形プランで片方に隅角が丸みを有す短い把手が削り出された箱形容器でトネリコ属製。類似品が吉野ヶ里遺跡、元岡・桑原遺跡、今宿・五郎江遺跡などからも出土している。

W332は器部が楕円形の扁平な皿状を呈し、長軸の一方に短い把手が削り出される。周縁は厚めに削り出すが底は極めて薄い。

W336は箱型の小型脚付容器の未製品でクスノキ製。四脚が十字形に粗割り成形されている。

W338は、長方形プランの盤形容器で側縁部がやや外に膨らむ。いずれも主軸に沿って中央に長方形透かしが施された下駄歯状の脚部が削り出される。

W339は、双脚容器の脚裾片で長脚の側面に方形の大きな透かし窓を開けている。

W340は、長方形の箱型容器で、中央に仕切りが削り出される。長方形透かしが施された丈高の下駄歯状の脚部がつけられる。

W341は、スギの双脚容器の脚部未製品である。側面に方形の透かし窓をあけるために縦方向に2本の切断溝を刻んだところで作業が中断している。脚部の根本から破損したために製作を断念したのだろうか。

W344は、双脚容器の脚部片であるが、脚中央の長方形透かしが大きく一見すると四脚容器



状を呈する。脚裾を断面方形の棒状に丁寧に削り出して一段と細く加工して底面から浮かすなど装飾性を高めている。表面の剥離劣化が進んでいるが脚柱部には黒漆、棒状の脚裾部には赤漆を塗布した痕跡が認められる精製品である。

W345は、ケヤキ製の長楕円形プランの双脚盤で、加工は粗く未完成品か。脚高は低い。

W349は、平面形が長方形を呈する盤の隅角片であろう。

W350は、3層から出土した弥生後期前半の大型の箱型容器である。底面の大半が劣化し取り上げ時に碎けて小片と化したので図上復元した。両木口口縁部はL字形に突出する。底面の四隅に突起状の小脚が削り出される。

W445,446は、容器の箱形容器の底部片と考えられ、W445は、高さ2cmの下駄状の短脚をつけた双脚、W446は、高さ3cmほどの突起状の短脚をつけた四脚容器と推定される。

**蓋**（第88・97図，図版35）

平面形は、円形、方形、隅丸方形など多様であるが、容器本体の形状と密接に関係するものと考えられ、円形のものには土器の蓋である可能性が高い。W353には、裏面に円形の焼痕が認められ、火にかけられた甕に使用されたと考えられる。

持ち手は、W354,355のように上面つまみを削り出したもの、W351～353、381のように板面を欠き込みあるいは削り貫いて持ち手つくるもの、W356、358のように側面に把手を削り出したもの、W357のように小孔を設けて紐や別材のつまみを付したと考えられるものなど多様である。用材は、アカガシ亜属が多いが、クスノキ、タブノキ、キハダなども用いられる。

## 9) 楽器

琴尾に突起が残存しており確実に琴の上板と認定できるものが3点あり、この他、線刻が施された薄板で、小型琴の共鳴槽材の可能性を有するものが2点、琴板の一部と推定されるものが1点、鳥形ないしは琴頭の可能性を有する板が1点ある。いずれも破損品で全体を把握できるものはない。

### ① 琴（第89・90・92図，図版36・37・39）

W359,360は槽づくりあるいは箱づくり琴（註1）、W361は板づくり琴と考えられ、いずれもスギを用いる。

W359は、柀目板を用いており厚さは1.6cmほど。琴尾に突起を3本残すもので、図上左側の面は丁寧に表面調整がなされているのでこちらが表と考えられる。側縁部には長さ2.8cm幅8mmの長方形の紐通し孔があり、突起近くに円形小孔が認められ、目釘孔と考えられ、樹皮や目釘を用いて共鳴槽を固定したものと考えられる。板の中途の破損面では故意に折り曲げて割ったようにささくれた状況が認められる（註2）。

W360は、柀目板を用いた小型琴である。厚さは1.2cmほどで7個の突起が削り出されている。両側縁近くに各1個の円形小孔が開けられており、目釘で共鳴槽を固定したものと考えられる。板は中途から両側から削って矢板の先端状に尖らせる。

弥生～古墳時代の琴では、七突起を有するものは比較的少なく、また、小形であることから、実用ではなく形代であった可能性もある。

W361は、柀目板を用いた板作りの琴で楕円形を1本残すのみである。板の厚さは1.4cm程度を測り側面はわずかに中ほどで膨らむ。板の破損面は無理に折り曲げて割られたような裂け目を有しているのはW359と同様である。

表面に線刻画が描かれる。線刻は、刀子状工具の切先を用いて横並びに描かれた3頭の鹿、縦に並べた2本の釣針が判別できる。鹿は横一列に並んでいるが、表現が異なる。

①は体軀、角が写実的に描かれている。最初は頸を長く描いていたが、その上から短く描き直している。角は枝まで子細に表現される。

これに対して②、③は、体軀と角が平行する2条の「U」字線で一体的に描かれており、②では頭部を2本の線を交差させて描き足しているのに対し、③は頭部の表現が見当たらない。

しかし。脚の線は②、③ともに薄く消えかけているものの表現、本来は描かれていたことは確かで、③の頭部も当初は線刻されていた可能性がある。

④は、胴体と後脚とみられる線だけで、頭部を確認できないが、後脚の表現が①に似るので鹿と推定したが、そうであれば①～③とは逆方向に描かれていることになる。

以上4体の鹿のうち、③だけが体軀を削って陰刻されており、頭部や角の表現も他の鹿に比べ精緻であることから、主題であったと考えられる。

鹿と天地逆方向から描かれているのが2本の釣り針⑤、⑥である。縦に2本並べて描かれており、いずれも先端部に返りが描き加えられる。⑤では、当初先端は針の先端が内傾気味に描かれていたのを、上向きに描き直すなど細かな修正がかけられていることは鹿①に共通する。

この他にも⑦鹿群の下に動物ないしは鳥の胴体から頸にかけてとみられる線刻、釣り針の左下には、⑧弧線で体軀を示し、X印の頭部、胴部を直線で補描した四脚動物らしい絵もみとめられ、他に、⑨2個の三角形を合わせた鼓状の線刻なども何かの表現を試みたのかもしれない。

W363、W364は、柀目取りのスギ板で、W359～362に比べ薄い。残存部位に琴の仕口は認められないので、積極的に琴と推定することはできない。しかし、表面に線刻が施されていること、W363には側縁に穿孔痕跡が認められることなど、故意に引き剥いだような破損痕跡が認められることなど、他の琴に類似する特徴が認められることから、琴の部材である可能性がある。琴であれば共鳴槽の側板と考えられる。

W363は、板の中央上部に孔の痕跡が認められ、その右側に胴部を斜線で充填した四肢動物、その左側に動物の胴下半部が認められる。さらに、その左に近接して三角形が描かれ、中ほどに区画線、その下方に外側を斜線、内側を垂線で充填している。想像を逞しく斜線を屋根材、垂線を扉材と見立てると、竪穴住居の正面観にもみえる。

W364は、端部を齋串状に加工している。表面に縦方向の線刻が多く施されるが、具体的に絵画と認められるものはない。

W365は、クスノキの板で、上方から下に向かって直線的にくびれた後に裾に向かって大きく広がっており、左右対称に復元すれば鳥の尻尾のようにみえる。鳥形とも考えられるが、クビレに近い板面に残る方形孔を集弦孔とすれば、鷄尾形の琴である可能性もある。

なお、方形孔の周辺には絃を留めるための特段の仕掛けは見られない。図の右下隅には2個の小円孔が穿たれる。

註1 笠原潔2004『埋もれた楽器 音楽考古学の現場から』春秋社 123頁

註2 中川律子2009「日本の音楽考古学研究の現状と琴研究」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』

## ② 琴板 (第91図, 図版38・39)

W362は、板目取りのスギの板製品で、現存幅8.6cm、厚さ1.1～1.3cmを測る。側縁部に沿って木釘孔が等間隔で認められることから指物製品の一部とみられる。板面の一方(図上右面)は丁寧に磨き加工が施され、平滑に仕上げられているが、反対面は加工痕が明瞭に残り顕著な仕上げ痕跡は認められないので表裏は明白である。

板の表面に刀子の切先を用いて線刻で絵が描かれているのはW361と同じである。鹿、鳥他、動物とみられる線刻画とともに舟、あるいは櫓状の弧線なども認められ、解釈不明の線描も数多く刻み込まれる。

画題が確認できる絵だけを見ても絵が四方からランダムに描かれていることがわかる、また同じ鹿でも描き方が全く異なるものがあることから、複数の描き手によって描かれたものと推定される。

絵の詳細を見てみると、①は頭部が失われているが、背後に角の一部と推定される線が描かれていることから、鹿と判断した。二条の「へ」の字線で躯体を描き、尾部に短い尻尾を加える。後ろ足は3本描かれたとみるべきだろうか。胸には突起が描かれる。②～④は天地逆に描かれた鹿で、いずれも小さく表現方法も簡素である。②は頭上「二」が描かれ角を現したのかもしれない。③の胴部はイチジク形では一本線で頭部は1本線で描く。④は饅頭形で頭部を表す。⑤は頭部が欠損するが、鹿の胴～脚部と推定した。他の鹿が極めて細い線で描かれているのに対し、この鹿だけは胴部を薬研彫り状に「V」字形に深く切り込みを入れ、内部を斜格子で充填しており、位置的にも他の鹿より高い位置に描かれる。鹿の群の中では中心的存在を占めるものであろう。⑥は胴部を斜線で埋めて枝分かれした角を描く。脚から頭部をめぐる弧線は舟を表すのであろうか。⑦は四足動物とみられ、⑧は足が描かれていないが頭部が描かれる。⑨、⑩は、三日月線で体躯を描き長い1、2本足で立つ姿から水鳥を想起させる。これら動物との周りを弧状にめぐる線も多く描かれているが、各モチーフの区画線、あるいは舟を示すものの解釈が分かれるところである。

板は、中途からあたかも折り割られたような痕跡をみせ、上部も目釘孔列あたりで割れるように折損しており、意図的に損壊されたものとみられるのは、W36などと同様である。

さて、この板は打楽器の琴板の一部と推定した。琴板とは6枚の板を木釘で組み合わせた直方体の指物の箱の上面を柳などの木撥で叩いて鋭い音を発する。その起源は明らかにされていないが、現在まで出雲大社、熊野神社、神魂神社の出雲地方の三社に「神寄せ」のために用いられる楽器として伝わり、前2社では現在でも神事で使用されている。当該地方とはなじみが薄いように感られるが、以下の理由を琴板とする根拠として上げておきたい。

当該資料の特徴のひとつは、目釘で合わせ部を固定した指物であることである。四壁の板が留められていれば容器とも考えられるが、小口とみられる短辺部の閉塞痕跡が認められないことから容器の可能性は低い。本来、北部九州では、弥生時代の箱形容器は刳物が多く、当該期の指物製品が稀有であることも留意される。

なお、近隣の元岡・桑原遺跡42次調査で出土した琴は目釘留めで組み上げられており、青谷上寺地遺跡などでも同様に組み上げたものがあることは付記しておく(註1)。

板の木口断面をみると厚さが一様でなく図上右から左に向かって厚みを増している。箱形に

組み上げた場合天板あるいは底板にするには厚みが不均衡で、側板として用いられたと考えられ、厚手となる欠損面側が天板側に当たると考えられる。天板との接合方法は、破損した側縁部の2か所に横長の穿孔痕跡が認められることから樹皮を巻いて接合した可能性がある。現状では幅の確定することはできないが木口が解放された筒形製品となる。

もう一つの特徴は、表面に線刻が施されていることである。多くの鹿がモチーフとして選ばれて描かれる。弥生～古墳時代の西日本域における既知の絵画木板のなかで、本例に類似する資料として元岡・桑原42次(福岡・弥生後期)、姫原西遺跡(島根・弥生後期～古墳前期)、袴狭遺跡(兵庫・弥生終末～古墳)などが知られる。これらに描かれたモチーフとして鹿、鳥、魚、鮫などがあるが、いずれもその中心的な主題として描かれているのは鹿であり、板の組み合わせ時には木釘が用いられている点も当該資料と共通する。

元岡・桑原42次、姫原西遺跡の出土資料は、琴板の可能性が強いとされ、袴座資料についてもその可能性がある。

青谷上寺地資料については「琴状弦楽器」として琴とは一線を描き、上板に弦を張ってそれを棒で叩いて音を発する琴板の祖型的楽器、あるいは指で弾く琴の可能性も指摘されている(註2)。個別に細部を見ると小口部の納め方をはじめ板の組み方や、細部の仕口に異なる点もあるため、さらなる類例の増加を待ちたい。

註1 大塚紀宜編2019『元岡・桑原遺跡群34』福岡市教育委員会

註2 笠原潔2004『埋もれた楽器－音楽考古学の現場から』春秋社 190～199頁

## 10) 祭祀具

当該遺跡の出土木器には、祭祀に用いられたとみられる特殊製品が多くみられる。祭祀具は、広い意味でとれば琴や特殊容器などもその範疇に加えられ本遺跡でも多く出土しているが、既に別項で報告しているので、本項では人物線刻板、動物形、武器形について報告する。

## ① 人物線刻板 (第93図, 図版40)

W366は、人物像が刻まれたクスノキ製の板で、長さ15.1cm、幅10.8cm、厚さ5～6mm。板は平滑ではなく人物が描かれた面に向かってわずかに内反り加工が施されていたことが表面の木目から確認できる。縁には面取りが施され、隅角は丸みをもつ。

人物が描かれた面(以下表面とする)は少し劣化が進行し、小さな亀裂や縮みにより線刻が詳細に読み取れない部分もあるが、人物の輪郭は薬研彫り状にしっかりと彫りこまれている。

顔はやや面長で顎は尖り気味、口は口角を上げ気味に刻み、両眼は切れ長に深く刻み、さらに瞳も彫りこまれている。しかし、鼻は軽く搔き刻みただけで、あたかも下書き後に彫り忘れたかのようなようである。

頬から眉間を通りでこを通過して顔の側面に抜けるX字形の線刻が特徴的である。眉間からでこにかけて二重線となりその間は縦線を充填する。また、口から顎にかけて「川」字状に三条の縦線が刻まれ、さらに両側は斜め下向きの線が加えられる。

これらはいずれも入れ墨を表現したものと考えられる。

頭部に明確な頭髪表現は認められずスキンヘッド状態を呈するが、頭頂部にモヒカン刈り状



のくぼみが認められる。発見当初は傷ではないかと考えたが、窪みの中央に縦に切り込んだような深い傷が認められ、刀子による切り込み跡である可能性が高いと考えられ。これも表現のひとつと考えたい。

胴体は腰が括れた鼓形を呈し、左腕は下に、右腕は水平方向に向けているとみられるが、線刻が薄れてはつきりとは読み取れない。右肩の斜め上に体にㄣ状の線刻が認められることから腕を曲げて手のひらを翳しているか、あるいは戈のような武器を持っていた可能性もある。

裏面は全体を火で炙ったような薄い焼痕があり、左下には複波文が深く刻まれている。この線刻は、炙られた後に刻まれていることが確認できる。

## ② 動物形（第93・94図・図版40, 41）

W367は、鳥形である。アカガシ亜属の板から胴部、長い首、頭部を削り出し、縁の部分は面取りして少し丸みをもたせて立体感を表現するが、後述する2体に対して平面的なつくりである。また、底面は斜めに削がれているので自立できない。鶴や鷺などを模したもののか。

胴から首にかけては細かい表現は認められないが、頭部は表裏ともに小さな目を点状に彫り、口は横一線の刻みが頭部を横断して表現される。嘴の表現はない。

W369は、トネリコを加工した製品である。底部は平底で明確な脚の表現が認められず、うずくまったような状態を表したようにみえる。面長の頭部は体躯の正面ではなく少し右前方に傾けているのが特徴的で鹿と確たる証拠に乏しいが推定した。顔は前方を平坦に面取りし、鼻筋を通した明確な鼻を削り出しその直下に口を小さく刻み顎を突き出す様は、W367によく似ている。胴部に具体的な細部表現はみられないものの、平底の右下から左側面にかけて径2cmほどの円孔が貫通しこれに沿わせて紐を巻いた痕跡のような浅い抉り痕が底から背にかけて認められる。また、前面の胸あたりにも同様の抉ったような浅い溝が削り込まれている。

## ③ 武器形（第95図, 図版41）

W370は、エノキの丸木をミカン割り材の小口側から深い切り込みが入れられていたとみられるが、片方は欠損している。その中ほどに小円孔が穿たれていることから、別材を切込みに嵌め込み、小円孔から目釘を打って留めたものと推定される。中途から断面を菱形に削り下端に削り出された半円板の突出部が特徴的である。類似例として吉野ヶ里遺跡TD II-120があり、半円板を耳とみれば銅矛の形代の可能性がある。

W371は、長さ23.4cm、幅2cm、厚さ1.2cmのアカガシ亜属の板材の先端を鈍く尖らせ、左右両側縁も刃のように薄く加工したものである。断面はレンズ状を呈するが、基部に向かって徐々に幅が窄まり下端付近では断面が長方形となる。先端が切先状を呈することから武器形と考えられ、別材の柄に装着するものと考えられる。大きさは異なるが形状が類似する製品が吉野ヶ里遺跡（TD II-121～123）で出土している。剣形、槍形などが想定される。

W372も側縁部を刃のように薄く削り出したもので断面はレンズ状を呈し、武器形と考えられる。茎部分に明瞭な段をつけていることから剣形と考える。

W373は、樹皮を平坦に鞣したもので、本来は一枚であったものの発掘作業時中途が欠失し2枚に分かれた。出土状況から長さは50cm、幅は20cm以上を測る。資料の上下にそれぞれ径2

mmほどの丸い紐通し穴が2cmほどの間隔で穿たれていた。円孔の一部には打ち込まれた目釘も残っており、別材に貼り付けて固定していたと推測され、上部には紐で綴ったような溝状の痕跡も残っている。用途は不明であるが、紐通し穴の形状から盾の形代の可能性を考えている。

## 11) 雑具

### 鉤（第20図, 第96・97図, 図版42）

丸木材を軸として枝分かれ部から派生する枝木を利用して吊り手をつくりだし、軸の上端付近に紐や縄を結縛して吊り下げる縄掛け部を設けるもので、破損品を含み23点出土している。他遺跡の報告数と比べるとかなり多い出土傾向にあり、当該遺跡における特徴的な資料といえる。

縄掛け部は軸に穿孔を施すA類（W374）と周囲切り欠き溝をめぐるB類（W378）に分かれ、軸部は表裏を削って断面を長方形に削り出したa類（W377）と、丸木のまま使用するb類（W379）がある。

樹種の同定を行った4体（W374・375・376・378・379）はいずれもマツ属の材を用いており、枝が同一部位から放射状に多数派生する樹勢が好まれたものと推察され、いずれも複数の鉤が作り出されている。吊り手の数は2本のものが多いがその方向は一定せず、用途や枝張り具合に応じて臨機応変に加工されたものとみられる。

A類の結縛孔は表裏に面取りが行われ平坦に削り出すなど調整が丁寧であるのに対し、B類は丸木のままできつくりの粗さが目立つなど2者に精粗の差が認められる。元岡・桑原遺跡42・52次調査でも類似製品が出土している。

なお、軸部に石を縛りつけ海中に沈めた碇とする見解もあるが、鉤部の径が細いものが多く脆弱で強度に乏しいのが難点であろう。W24では、吊して火に掛けたために、炙られて焼け焦げた痕跡が認められた。（図版42）あたかも炉の上に吊り下げて使用されたかのようなのである。

### 把手（第97図, 図版50）

W382は、直径1cmほどの棒材を弧状に曲げ、両端に小円孔を設けたもので、籠など提げものの把手と考えられる。

### 火鑽臼（第98図, 図版43）

丸木を裁断、あるいは角柱状に成形し、縁辺に火鑽穴を刻み込んだもので、火鑽穴の側面に予めV字に刻んで火落とし溝とする。W385では工具で数条の細線を並行して数条刻んで複波状文が施されている。また、W386では火鑽穴を頂点として三角形に浅く彫り窪める加飾が認められ、祭祀時の火起こし具として使用されたことをうかがわせる。

なお、W385、387では、残存部位に使用痕跡は認められない。

### 火鑽杵状木器（第98図, 図版43）

細い枝材の樹皮を削り取った軸の基部を鉛筆状に削り出す細かい加工が施されており、先端は黒く焦げその縁辺は摩滅している。火鑽杵の可能性も検討したが、軸部の中位が「く」の字状に屈曲し中途の小枝も切り落とされていないことから、他の用途を検討すべきであろう。

### 腰掛け（第97・98図, 図版42）

いずれも刳物で、隅丸長方形ないしは長楕円形プランの座板の長辺に平行して2枚の下駄脚が踏ん張り気味に削り出される。双脚容器と厳密に区別することは難しいが、座板となる天板

部が通常の盤に比べて著しく厚く、緩やかな窪みを有すること、脚部も厚手に削り出されて頑張なつくりであることなどから腰掛けとした。いずれも脚部を削り出した一木つくりで組み合わせ式のものはない。

W384は、脚部に台形の透かし窓、その両側に縦方向の刻線が施されている。元岡・桑原52次の椅子、惣利遺跡の容器3305、詫田西分貝塚（佐賀市）の脚付容器にも同様の線刻が認められ、共通の装飾施文が北部九州の広範囲に認められることは興味深い。

**わらじ編み状木器**（第55図，図版50）

W181は、板目取りのスギ板の一端に、幅が異なる三本の突起が削り出されており他端は「コ」の字形に成形される。一見すると琴の突起にもみえるが、板厚が厚く突起の又部のつくりも粗雑で琴とは考えにくい。詳しい用途は不明であるが、民俗資料の草鞋編み具の縄掛けに似ることとは興味深い。

## 12) 建築材

**梯子**（第99・100図，図版44）

7点出土し、そのうち6点を図化掲載した。広葉樹の半歳材ないしは柾目板を用いる。樹種に統一性はなく、クスノキ、ヒサカキ、クリ、タブノキ、シロダモが用いられる。規格としては、幅が15cm未満の狭いタイプ（W393）と15～18cmを測る幅広のタイプ（W395）に大別され、段のつくりではステップの下面を斜めに削ぎ落とした波型タイプ（W393）と上下とも直角に削り出して各段を板面から突出させるタイプ（W397）、その中間タイプ（W398）がある。

W393はほぼ完形に近く全形が把握できる。上端は丸く加工し、裏面には高床部に固定するための浅い欠き込みが施される。W397の上端はコの字形に収める。W398は下端の平面が「コ」の字形に成形されている。

**鼠返し**（第101図，図版45）

7枚図示したが、これ以外に、焼けて炭化していたために現地で取り上げることができなかった資料（図版10-c・後期前葉）もある。W399は、隅丸方形で、柱通し穴も同形を示す。W400、401、402の柱通し穴は方形で、一辺が10～13cmを測るが、W403は円形で、復元径が22cmほどを測り、大径の柱に付けられていたことがわかる。

W405も丸柱の通し穴とみられる半円形の欠き込みが残る。径は20cm弱。鼠返しとすれば外形が（長）方形であったと考えられるが、これから推定される外寸は84cm×74cmの大型品となり、組み合わせ式かあるいは別の用途を考えるべきかもしれない。

**柱**（第102・103図，図版46）

図示したのは、いずれも頭部の桁受けを幹の枝分かれした又部を加工してY字形に成形されたもので、クリ、スタジイなど広葉樹が多く、堅穴住居の又柱と考えられる。W406は又部の内側を「コ」の字形に加工し桁材と組み合わせの安定化が図られたとみられる。完形で全長217cm、太さは柱根部付近は13cm、中ほどで12cm、上位で11cm程度を測り、柱根部は一段太く成形される。W407も同様に柱根部を一回り太く削り出すが、全長は159cmと短い。W408はW407とほぼ同じ長さであるが、先端部を杭先状に尖らせる。W409は、下部と中位に中途まで割裁された跡が残っており、柱の切り倒し、ないしは転用に向けての加工痕と考えられる。

W410は、径が18cmを測る大径材で、側面には深さ5cmの断面「コ」の字形の板受け溝が施されている。高床建物柱の中間部材であろう。

**扉**（第105図，図版44）

W424は、モミ属の厚手の板で、幅40cm、厚さは5cm弱を測り、小口部の中ほどに直径4cmほどの円孔が穿たれる。扉板の可能性はあるが、2区の中央部で重機による試掘時に掘り上げたもので、集水遺構などと同様に古墳時代中期に下る可能性が高い。

W425は、全長77cm、厚さ2cmほどのクスノキの板材で、隅には軸とみられる小突起が削り出しが残存していることから扉と推定されるが、再加工が施されたためか他端には軸は認められず、その近くには方形孔が設けられる。板厚が薄いので藪戸板の可能性もある。

W436は、扉の門受け部片で、平面形は中央で窄まる。厚さは6.5cmほどを測り側面中央部に方孔が穿たれる。

**その他の建築材**（第103～107図，図版46・47）

W411は、厚さ10cmの芯持ち材の二方向を削って断面長方形に成形し、両木口に半円の切り込みをいれる。入口の蹴る放材と考えるが、軸受け穴が施されていないので扉のない開放形だった可能性がある。W414は、半裁材の両端近くに一辺5cmほどの方形のほぞ穴が斜めに貫く。ホゾ孔の間隔は上面で53cmを測る。扱首又に掛けられた二重梁材であろうか。

W412は、半裁材の表面に浅い欠き込みが認められる。

W416～419は、板材である。W417,419では、縁に段が認められ板接ぎの仕口かもしれない。

W423は、柾目板で、一端に欠き込みが認められる。

W427～430は、薄い板材で、一定の間隔ごとに方形孔があく。

W432は、クリの板材で、一方の木口に3cm角の柄が削り出され、その反対には板面に8.5×4.5cmの方形孔が設けられる。

W431は、モミの柾目板で短辺断面は弧状に緩やかなカーブを描く。

**13) その他の木製品**（第97～99図，図版48・49）

W442は、梯子を切断、再加工を施し頭部下に抉りねぎ坊主状につくり出したものである。またW452は、丸太材頭部下を抉りやはりねぎ坊主状につくり出している。いずれも下端は切断面取り加工で仕上げしており、製品として完結している。比佐陽一郎、菅波正人は同様の製品について人形の可能性を指摘しており（註1）留意しておきたい。

W443は、全長16cm、径2.6cmの棒材の中途から段を設け、径が1.9cmほどに加工し、一見すると小型の横槌状を呈する。横槌の形代あるいは木栓であろうか。

W451は、長さ18.6cmを測るスギの芯持ち材の両端を笠形に加工し、中央に突帯をめぐらせその両側に幅広の浅い溝をめぐらせる。裏面には断面が2×3cmほどの「コ」の字状に溝が削り込まれ、小ぶりの笠形側には貫通する。詫田西分遺跡（佐賀県神埼市）に酷似する資料が出土しており、石斧の台基部のカバーの可能性（註2）が指摘されている。縄文時代中期の石狩紅葉山49号遺跡（北海道・第26図・註3）では端部を笠型に肥厚させる点が共通するものの、当該資料との組み合わせが推定しうる斧柄例が未確認であることや、両端に笠形の加工を施していること、軟材であるスギが用いられる点など用途を確定するには課題も多い。



W453は、ヤブツバキの芯持ち材を算盤玉状に加工したもので、未製品であるが用途は明らかでない。

W454は、蓋の把手部の剥離片とみられる。天井部には細い溝が十字に切られ縁辺部は鏝状に張り出しており、縁に沿って三方に計5mmほどの小孔が貫通する。容器蓋のつまみであろうか。

W455は、径8～9mmの釘状突起の頭に断面が半扁球状の丸い頭部が削り出されたものである。装飾用具であろうか。

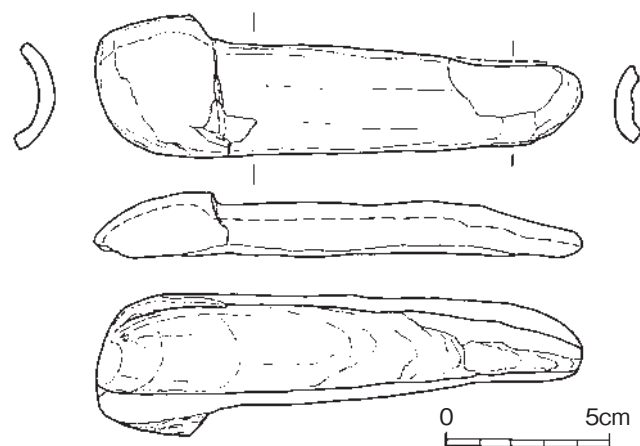
W456は、全長25.2cmの径3.4cmほどのスギを加工した棒材の両端を残して内側に段を設けて径2.5cmほどに一回り細く削る。側面の一方に幅1.7cm、深さ1.4cmの断面「コ」の字形に削り込みを入れ、その両端は蟻溝状に深く抉る。削り込みに向かって木釘が打ち込まれて貫通しており繰り込みに別材を嵌め込んで固定したとみられる。酷似する部材が惣利遺跡（筑前町）でも出土しており（註4）こちらも木釘が残存している。弥生時代に木釘が用いられるのは精製容器や琴などに多く、当該製品も木目が詰まった美しさや両端に削り出された段の境が斜めに削り出されるなどの複雑な加工が認められることから、高級調度品や祭礼具の部材と考えられる。

この用途を推定するうえで、時代は下るものの埴輪や石製模造品の腰掛の座板の木口に付された棒状部材が形態的に類似することは興味深い（註5）。赤堀茶臼山古墳（群馬県）出土の腰掛形埴輪の座板両端に付された棒状部（第27図）は有名である。

現在、弥生時代の腰掛で類似する資料は未確認であるが、下稗田遺跡（行橋市）出土の弥生時代前期の腰掛けは、座板の両端に2条の沈線装飾を施し、木口下面に突起をつくり出すなど（第28図）（註6）、座板の両木口部に装飾を施すなどの点が共通する。

W457は、長さ22cm、径3.3cmほどのニワトコの丸木の内側を削り抜いたものである。一端には突出した枝部を遺し、他端は小口の周縁を斜めに削ぎ先端から8mmほどに細い沈線が一条めぐる。また、図の下端から4cmの位置側面からの小孔が認められる。溝の中を通した別材を目釘等で固定したのだろうか。

W458は、全長60cm、径2.3cmのスギの棒製品で表面が丁寧に加工される。両端の内寄り2cm



第26図 石狩紅葉山遺跡出土石斧カバー実測図（1/3）



第27図 赤堀茶臼山古墳出土椅子形埴輪

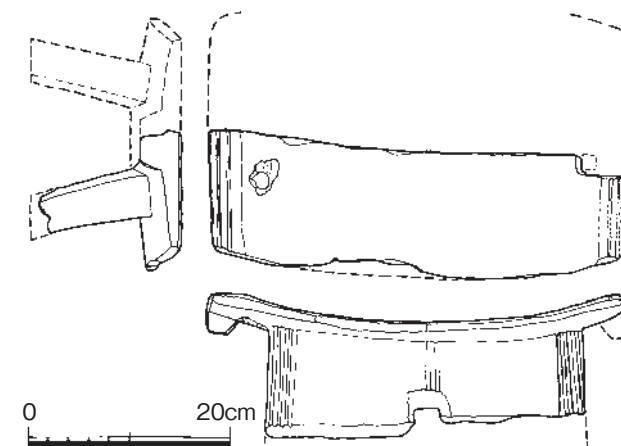
後藤守一1980『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』図版第22より

ほどに1.5×1cmほどの長方形孔を同じ方向に開けておりその間隔は50cmほどを測る。組製品の部材と考えられ、さしたる根拠はないが機織り機の綜統を候補の一つとしてあげておく。

W463は、アカガシ亜属の径2cmほどの丸木を先端に向かって半裁し、先端は段を設けてさらに尖らせ、半裁部の中ほどには幅4cmほどの欠き込みも施される。

W464は、アカガシ亜属材の幅の狭い板の一端がヘラ状に広がるもので、その先端は薄くなり摩滅も認められることから、掘り具として使用されたとみられるが、ヘラ状部に認められるコの字の挟りは、縦断面の形状から鋏の柄穴の痕跡であると考えられ、図の下端は断面が扁六角形を呈することから、三又鋏の中央の刃であったことがわかる。

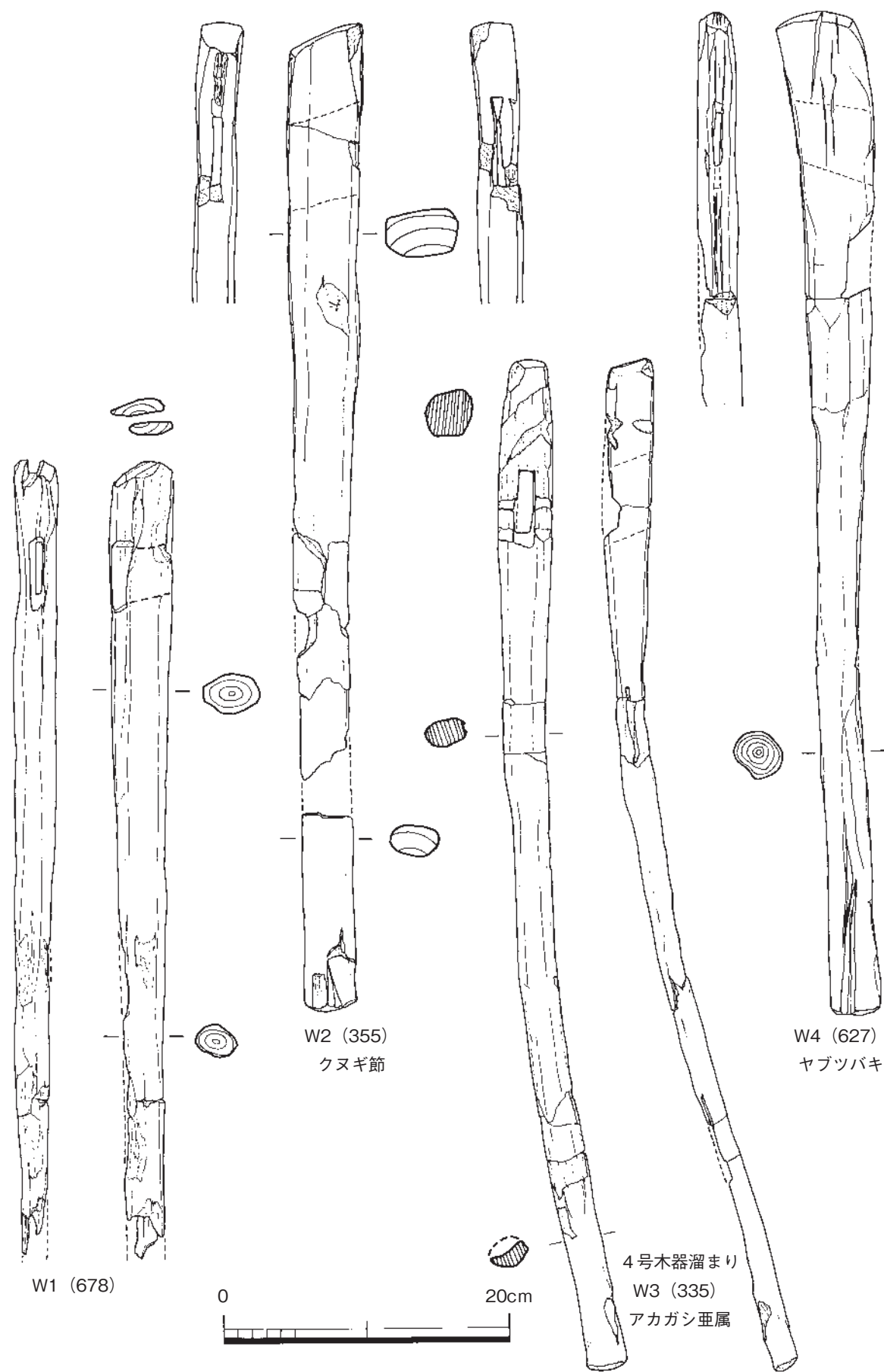
- 註1 比佐陽一郎 菅波正人2009「古代の遺跡から出土する横槌状木製品について～福岡市内の遺跡出土例を中心とした研究ノート～」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集』出土木器研究会
- 註2 天本洋一2009「佐賀県における弥生・古墳時代木製品の動向」『調査研究書第33集』佐賀県立博物館・美術館
- 註3 石橋孝夫 工藤義衛 西方麻由 2005『紅葉山49号遺跡』石狩市教育委員会
- 註4 惣利遺跡出土木器1997（『惣利遺跡Ⅰ（県道調査区図版編1）』夜須町教育委員会
- 註5 塚田良道2007「古墳時代における坐り方と坐具」『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
- 註6 長嶺正秀編1985『下稗田遺跡』下稗田遺跡調査委員会



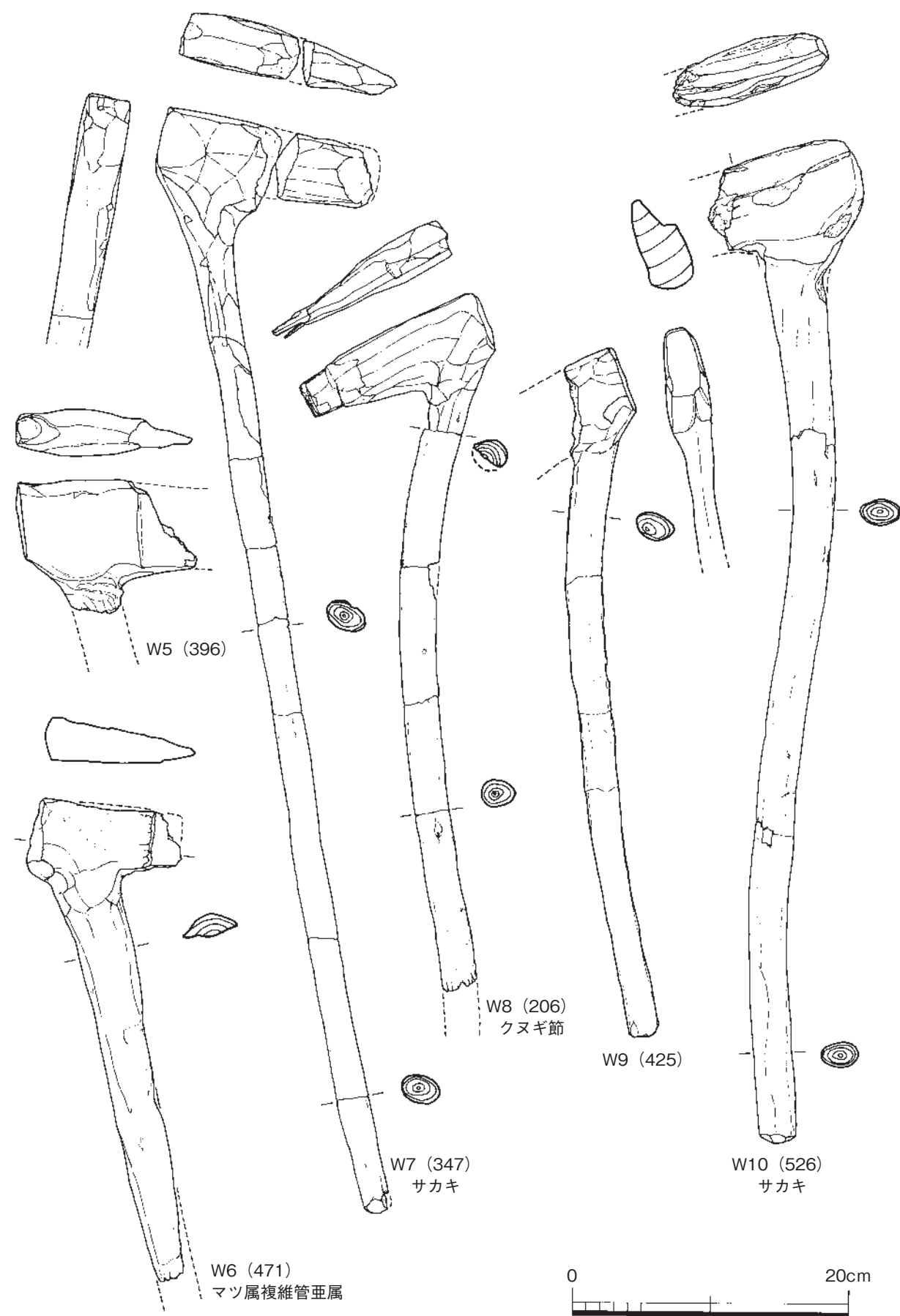
第28図 下稗田遺跡出土弥生時代前期腰掛実測図（1/6）

#### 14) 補遺 葛束

5区の5層上で出土した葛の束（W497・第14図）で、葛を環状に巻き取り水に浸していたものとみられ、現地では、束ねた後に葛の端を束に巻いて結束していたことを確認した（図版56最下段右）。現場で土ごと取り上げて保管していたが、誤って乾燥させてしまった。

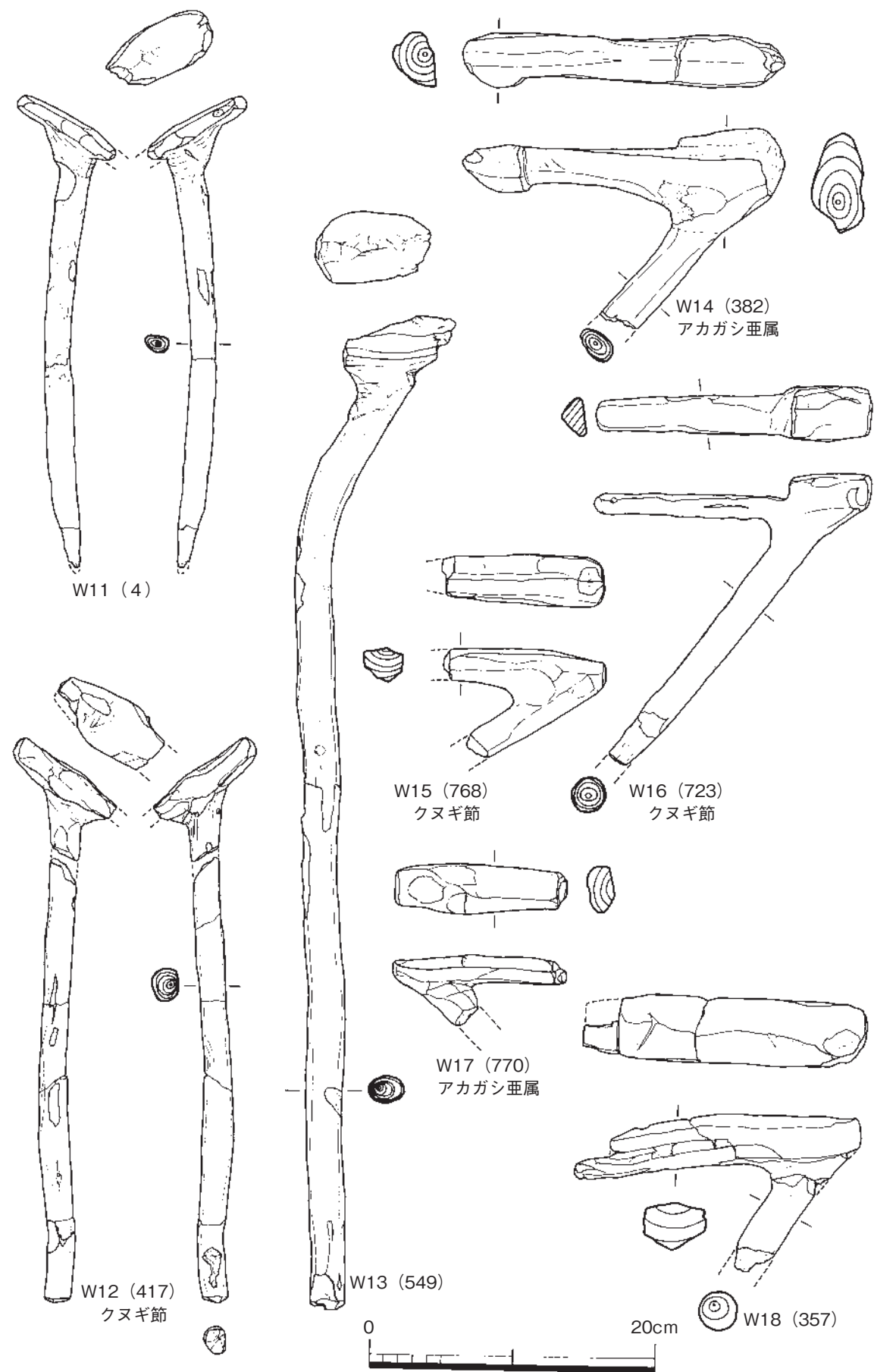


第29図 包含層出土木器1 工具① (1/4)

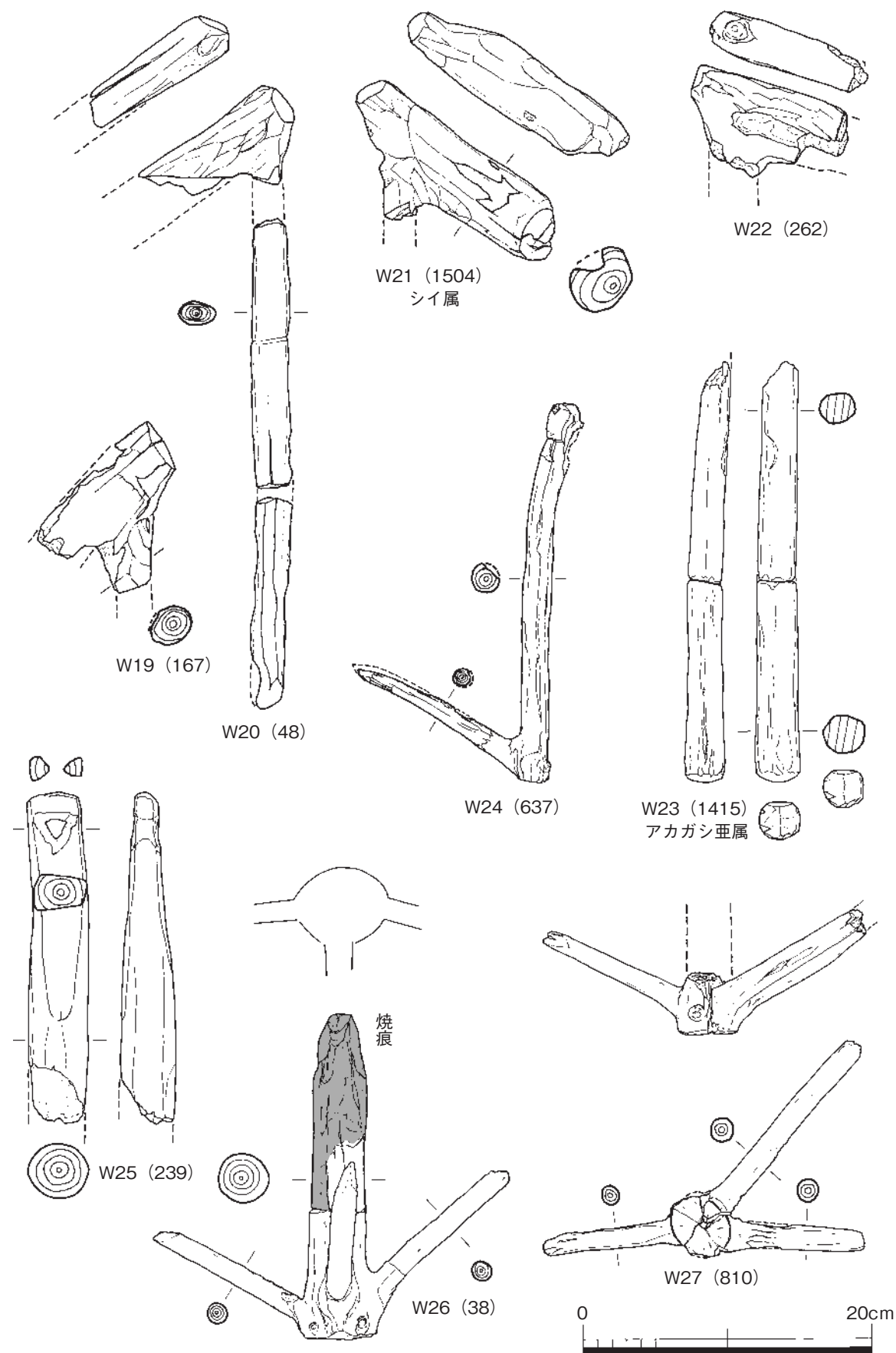


第30図 包含層出土木器2 工具② (1/4)

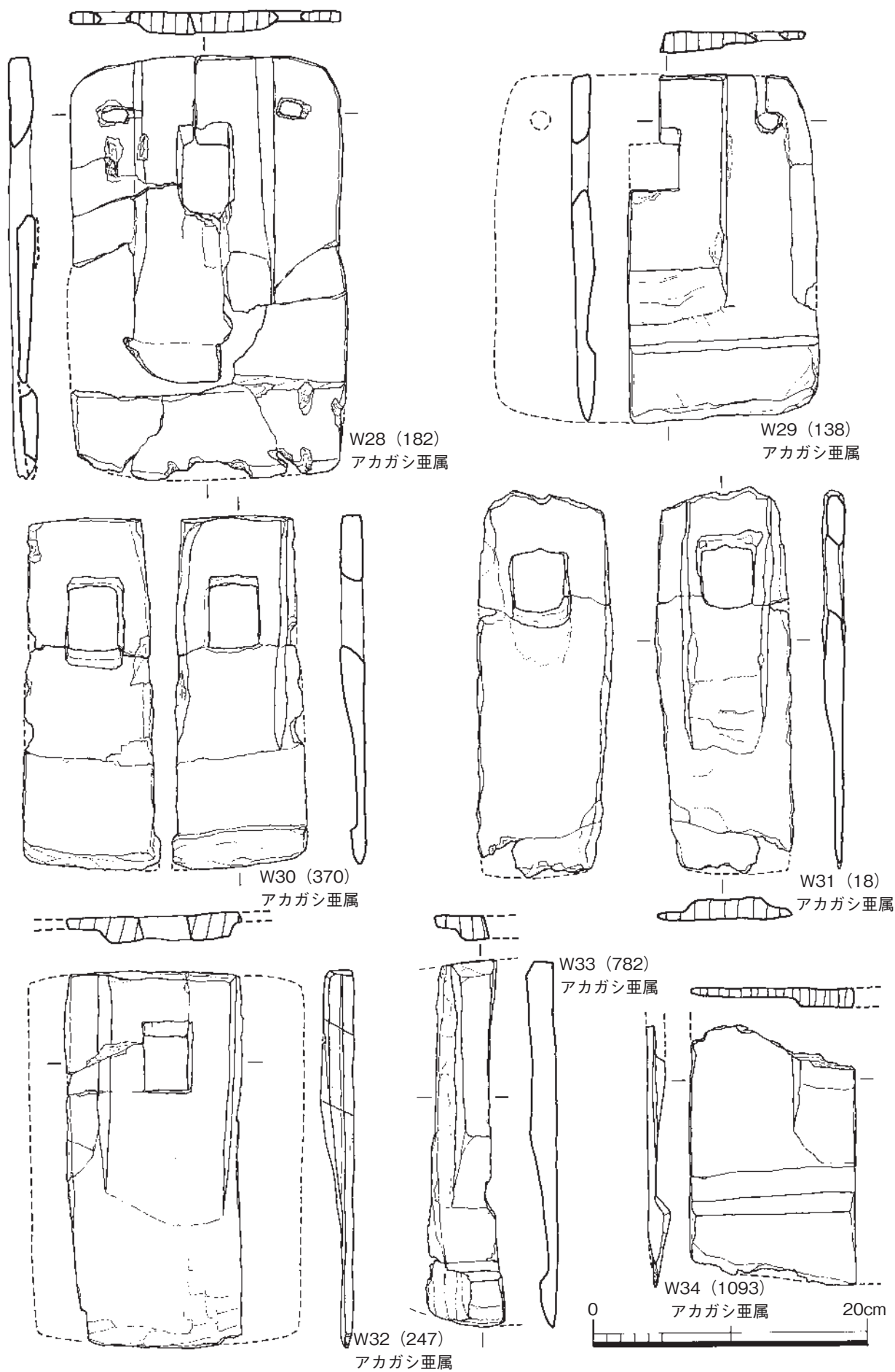




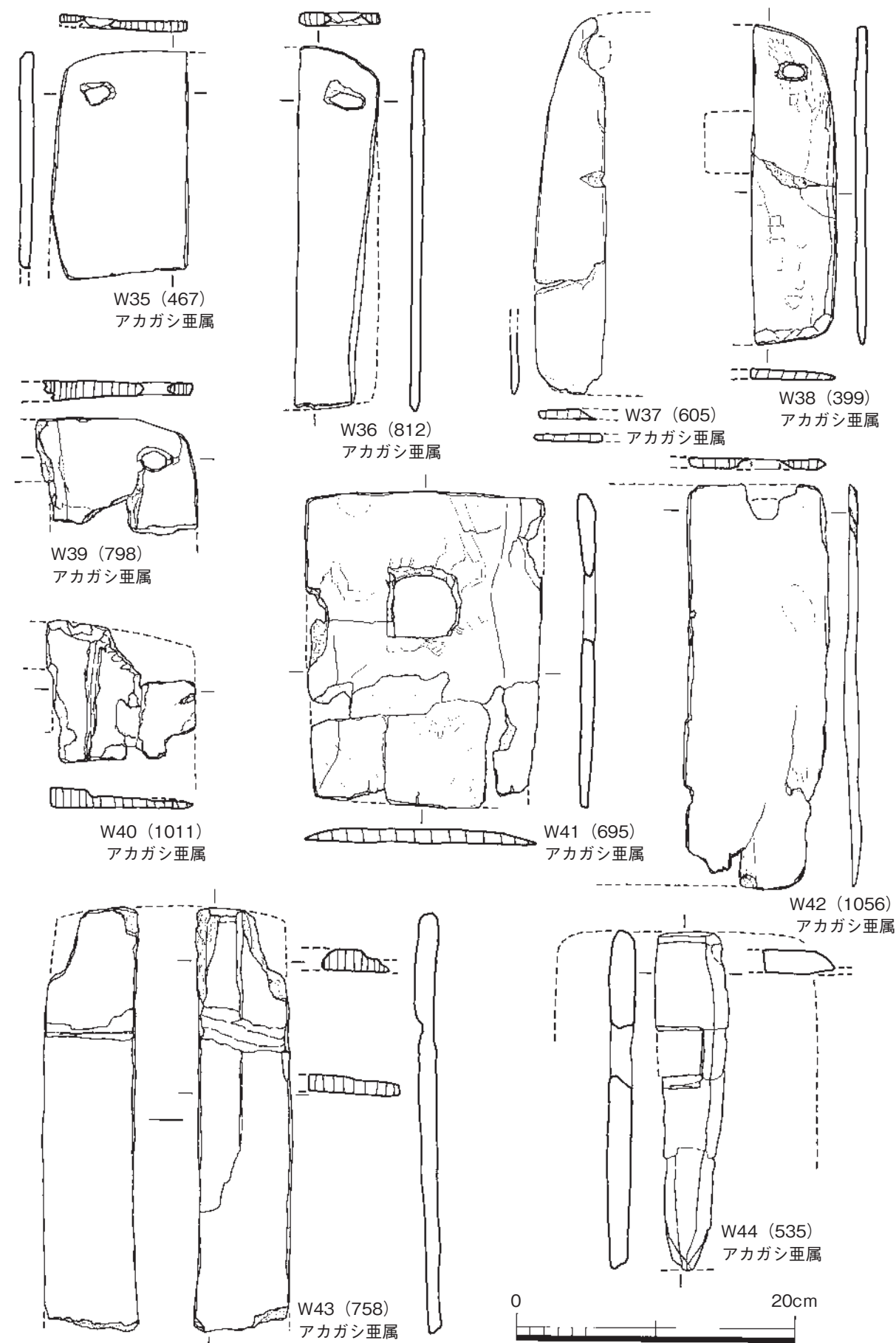
第31図 包含層出土木器3 工具③ (1/4)



第32図 包含層出土木器4 工具④ 雑具① (1/4)

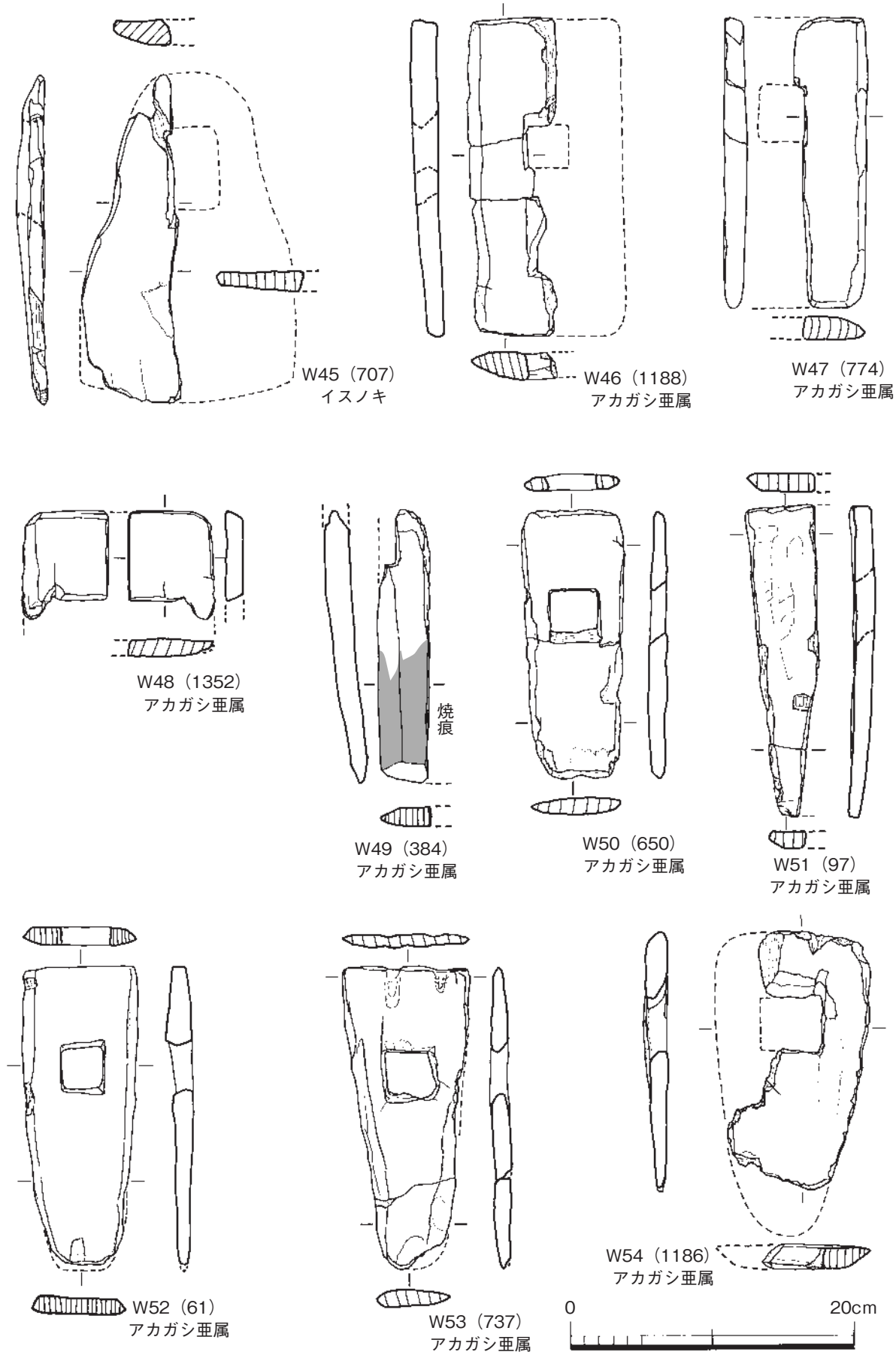


第33図 包含層出土木器5 農具① (1/4)

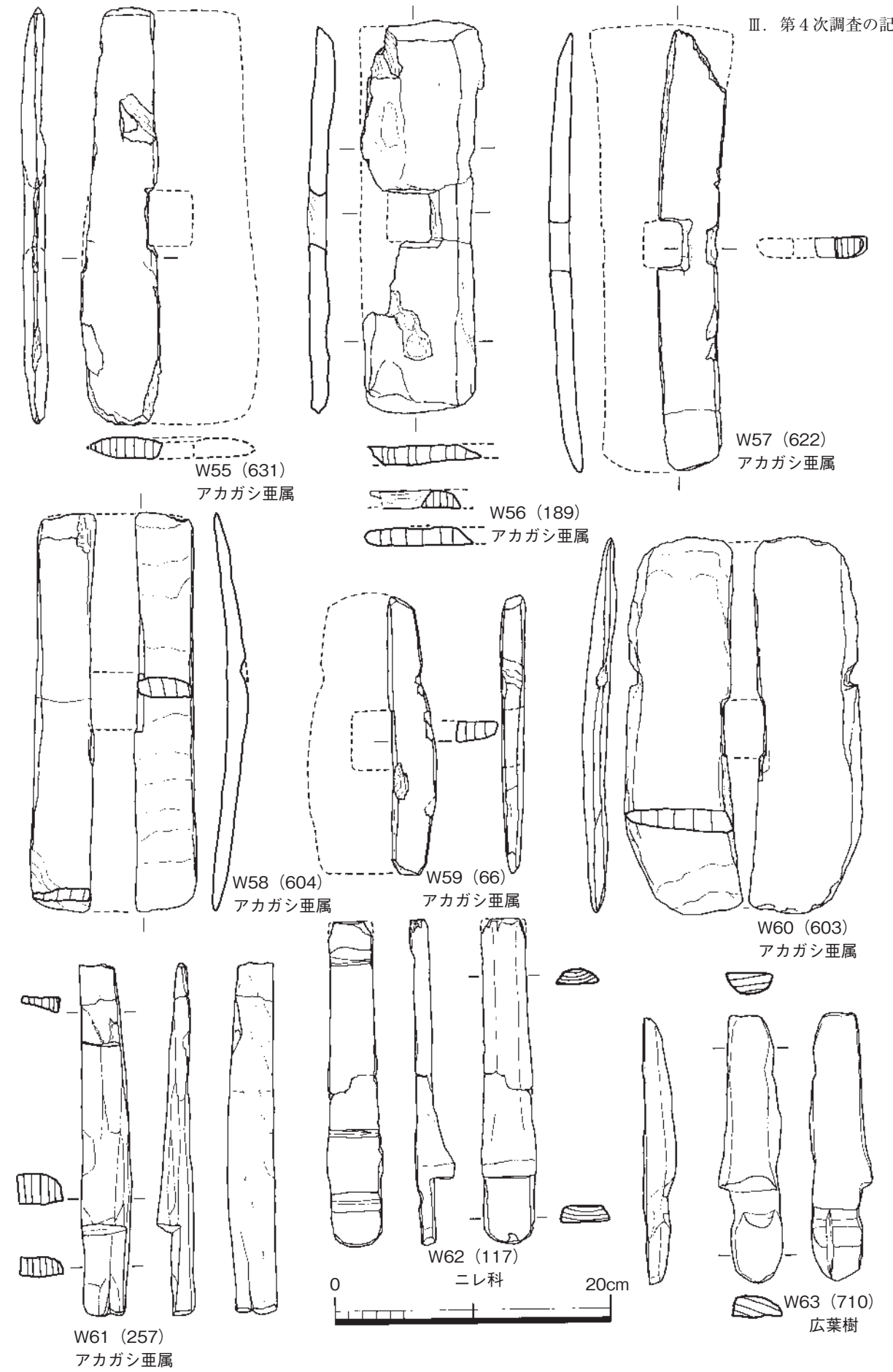


第34図 包含層出土木器6 農具② (1/4)

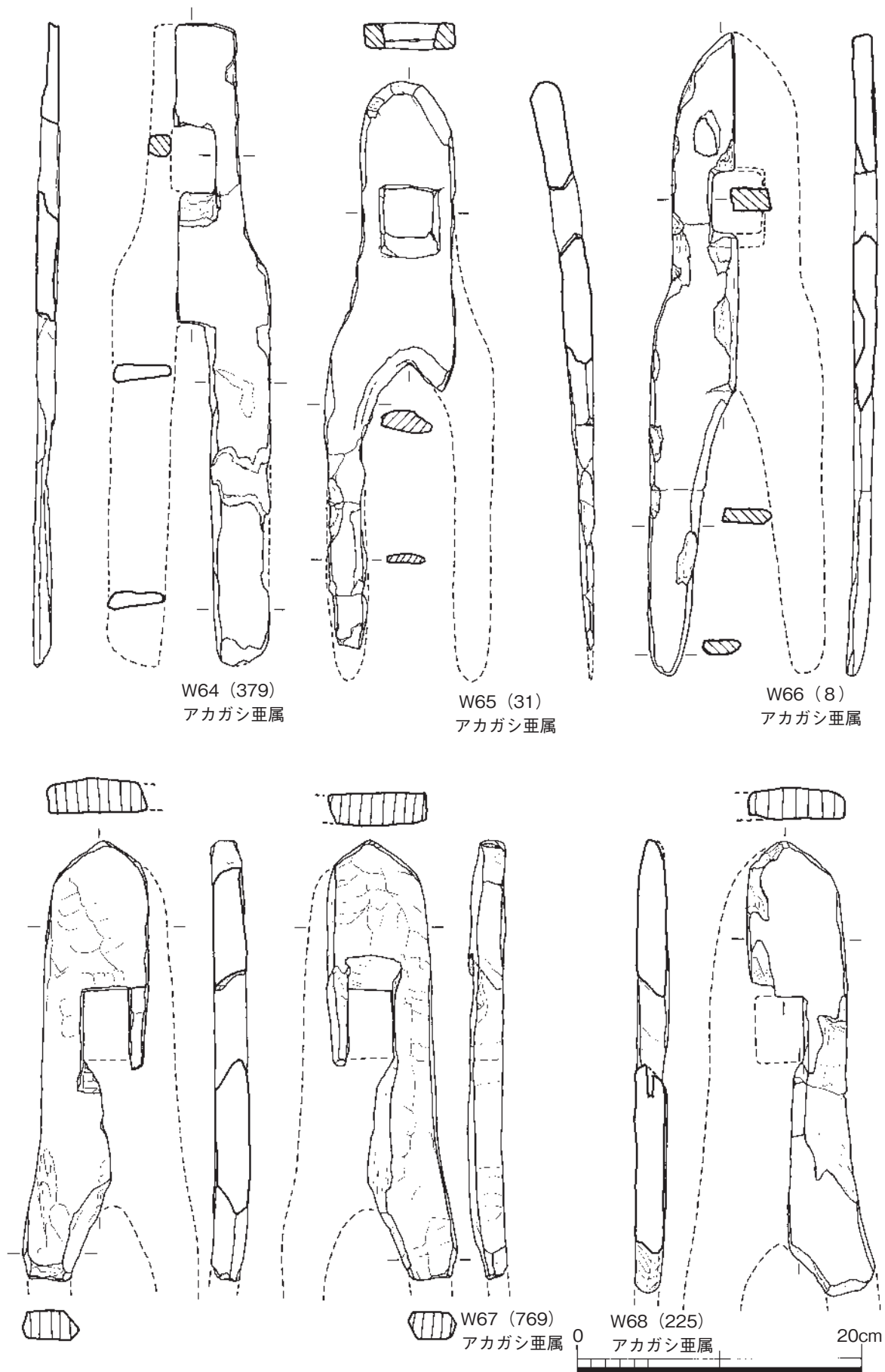




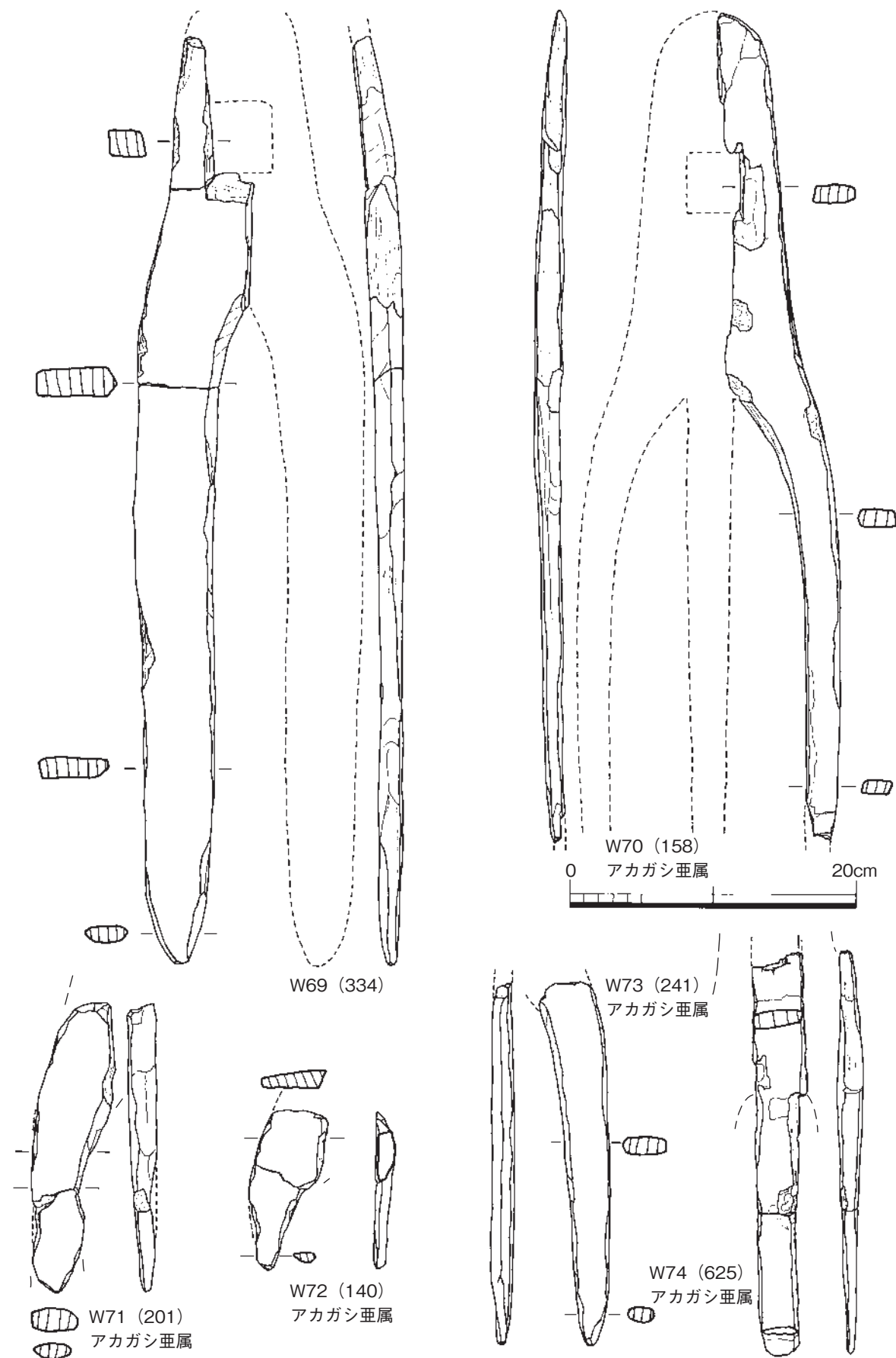
第35図 包含層出土木器7 農具③ (1/4)



第36図 包含層出土木器8 農具④ (1/4)

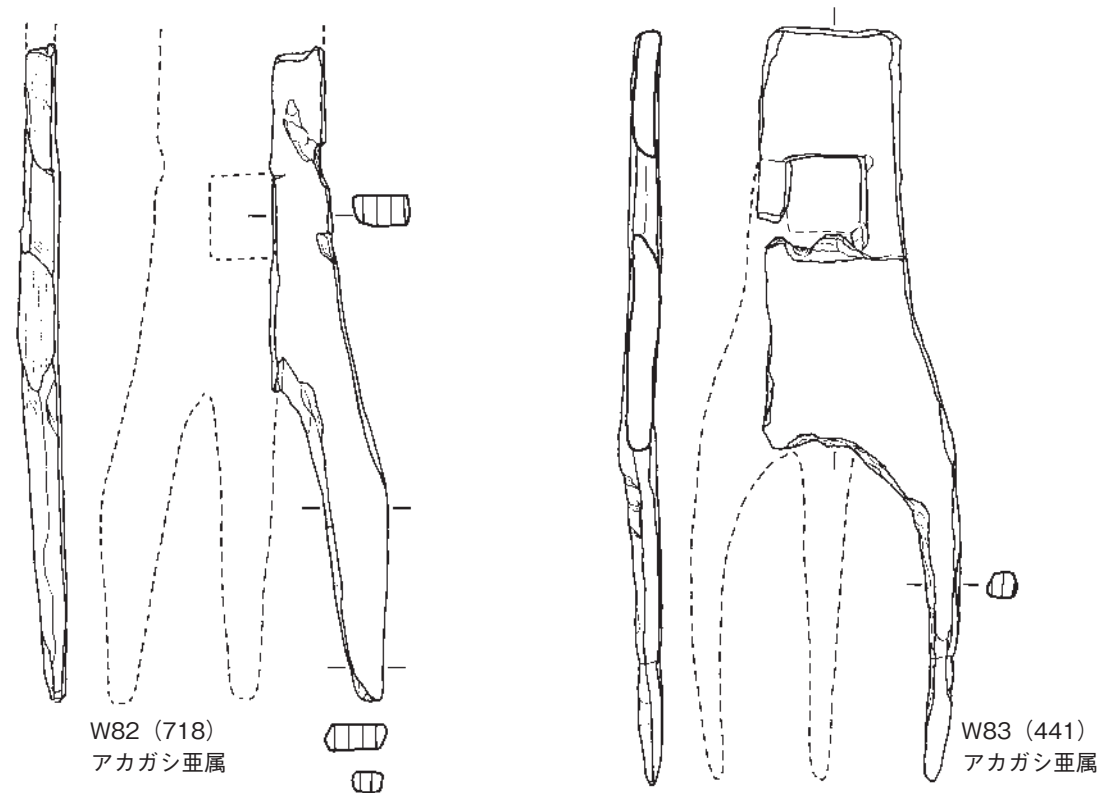
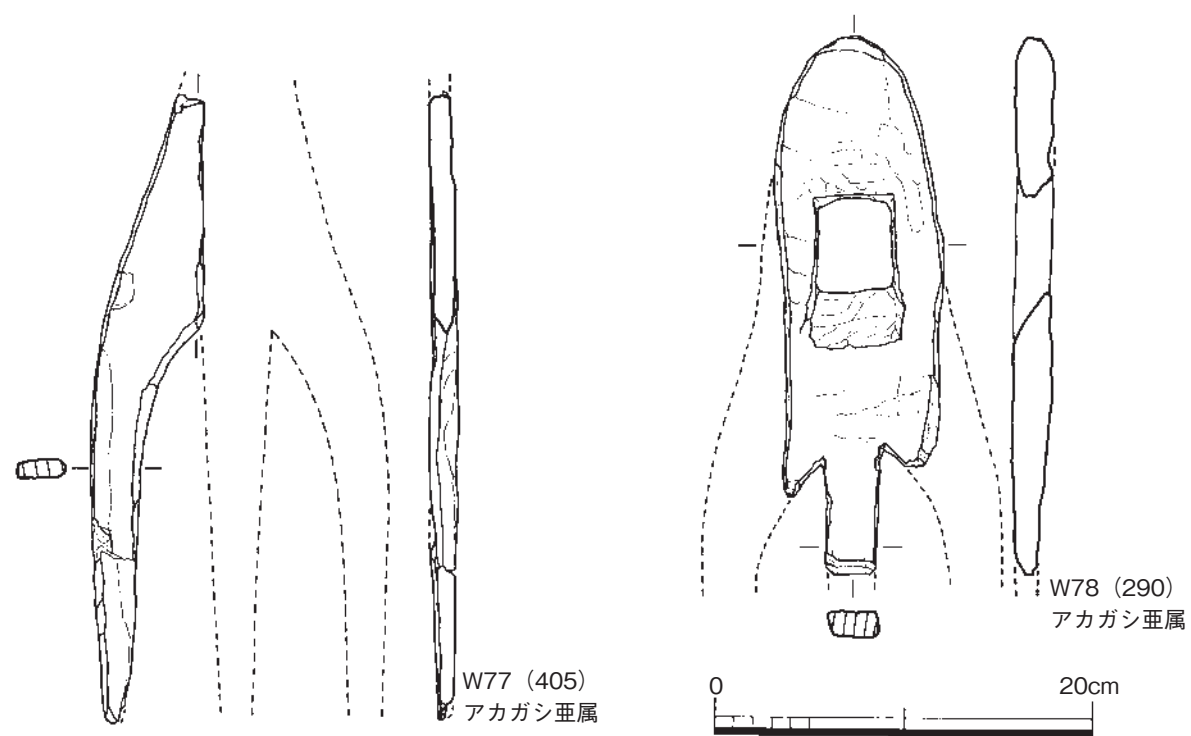
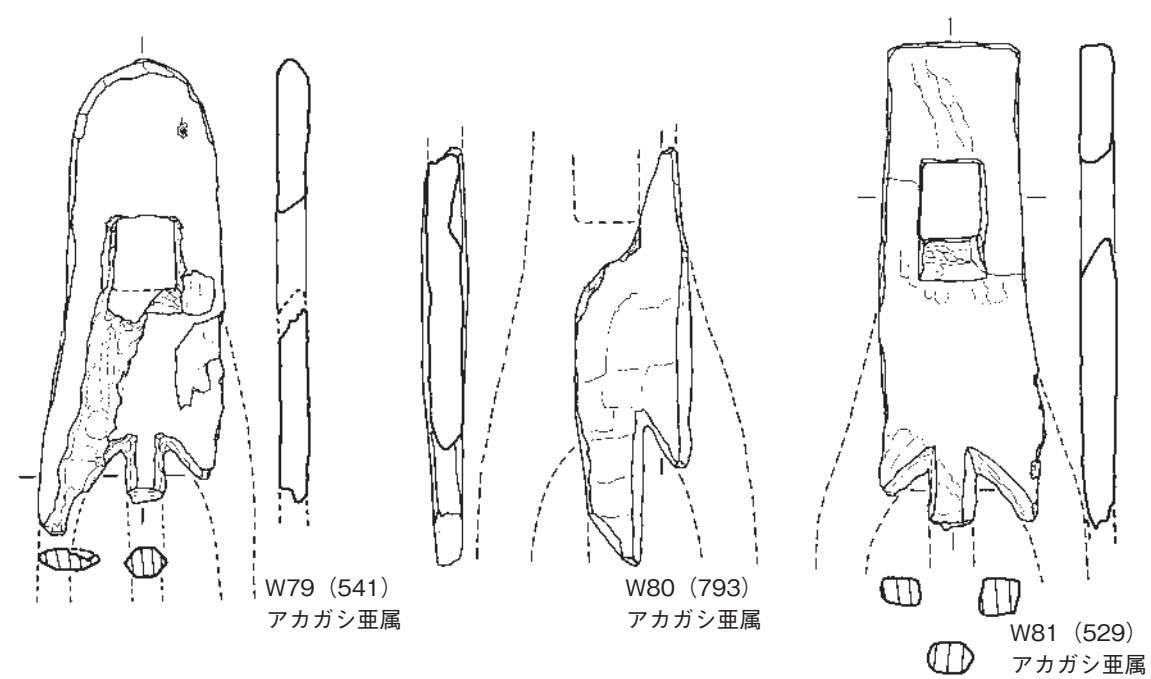
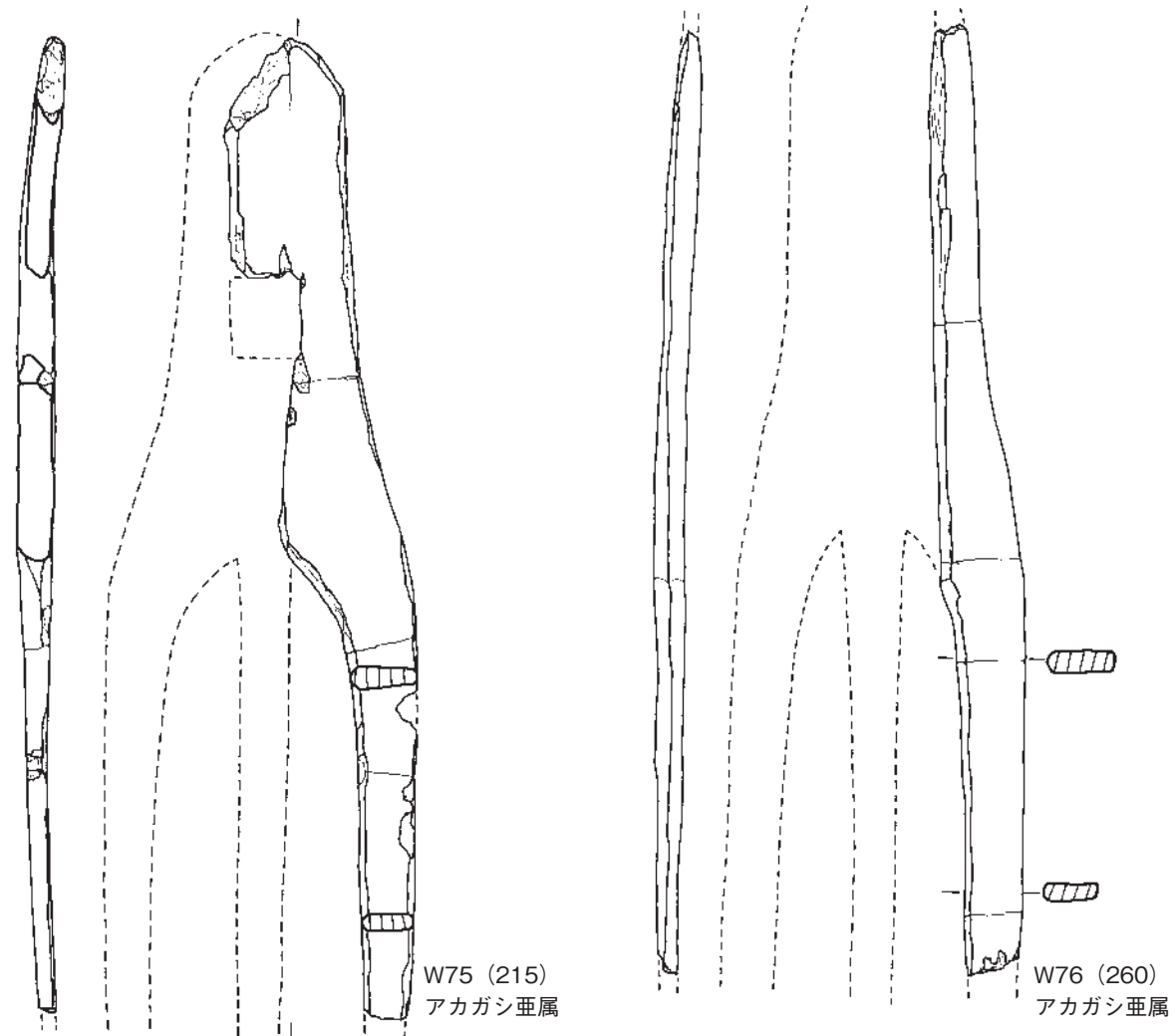


第37図 包含層出土木器9 農具⑤ (1/4)



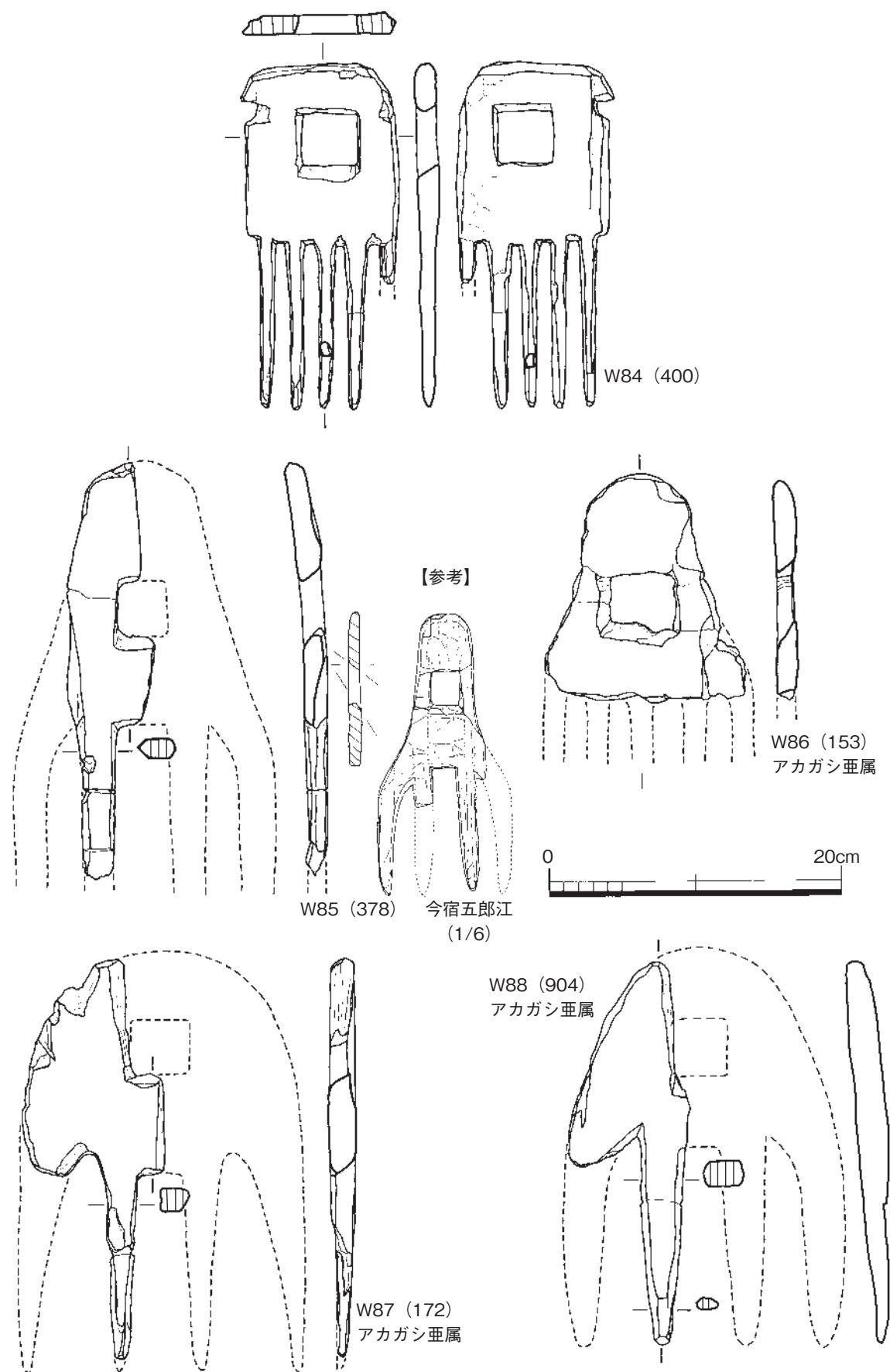
第38図 包含層出土木器10 農具⑥ (1/4)



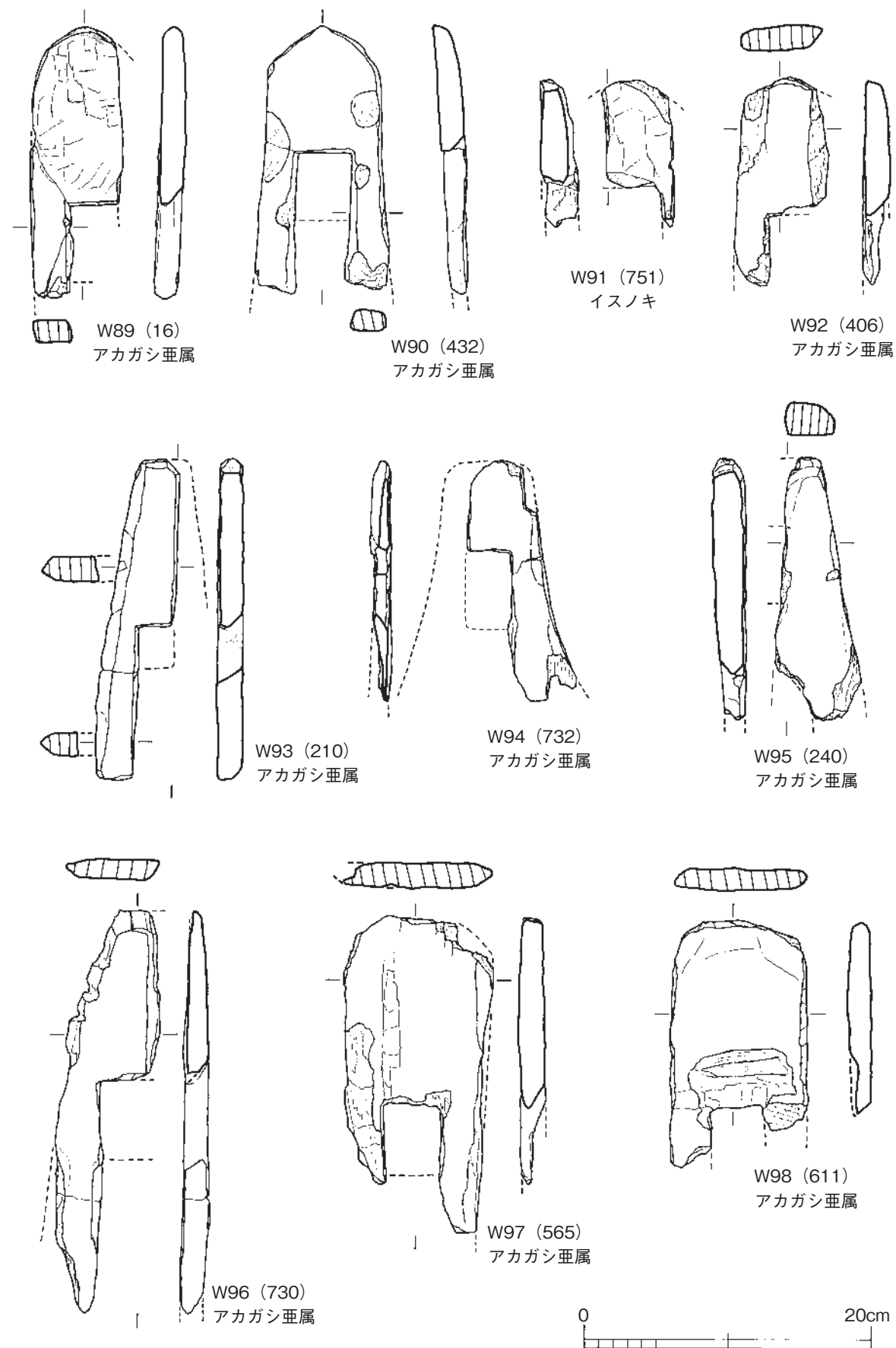


第39図 包含層出土木器11 農具㉞ (1/4)

第40図 包含層出土木器12 農具㉟ (1/4)

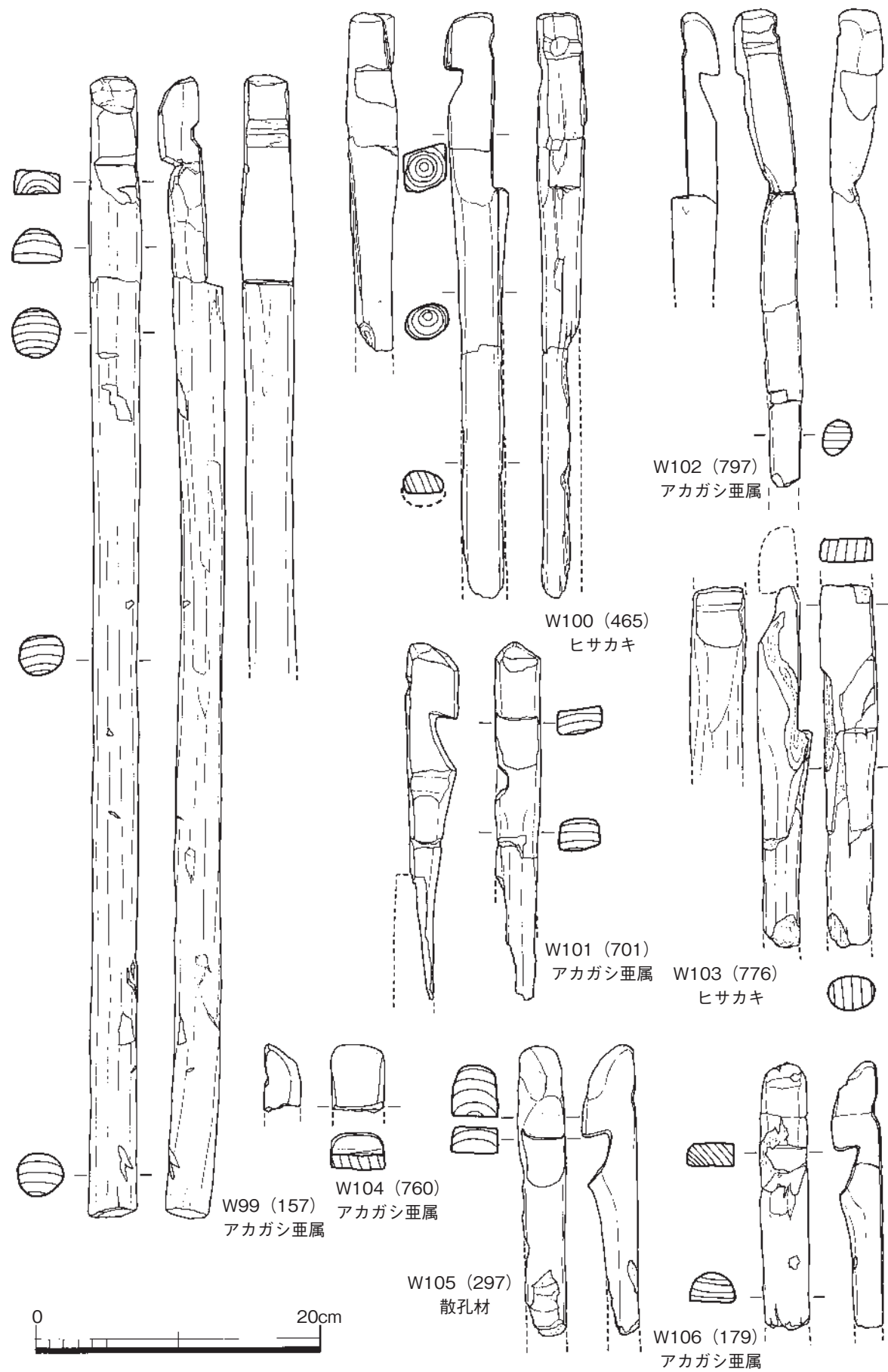


第41図 包含層出土木器13 農具⑨ (1/4)

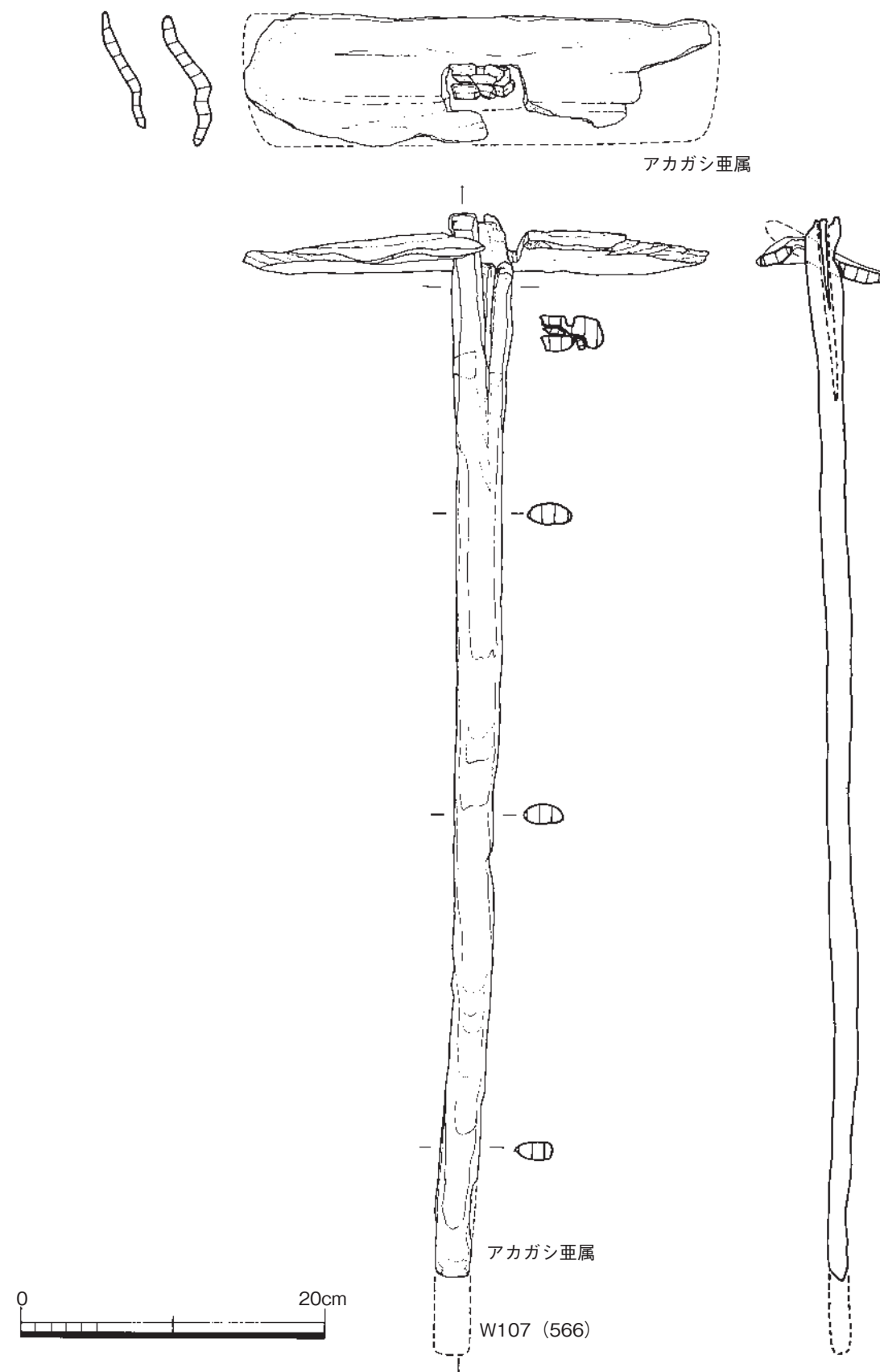


第42図 包含層出土木器14 農具⑩ (1/4)

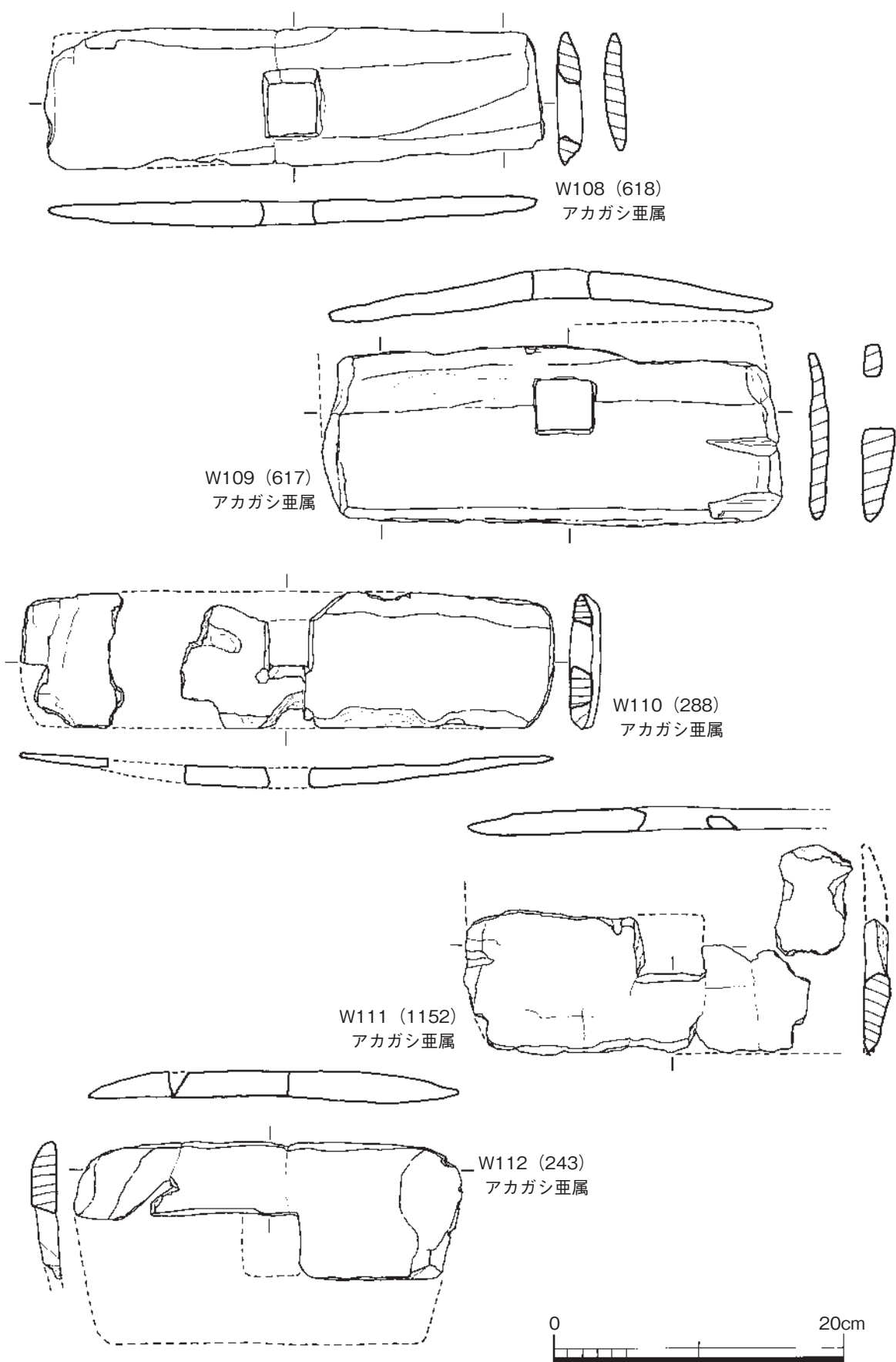




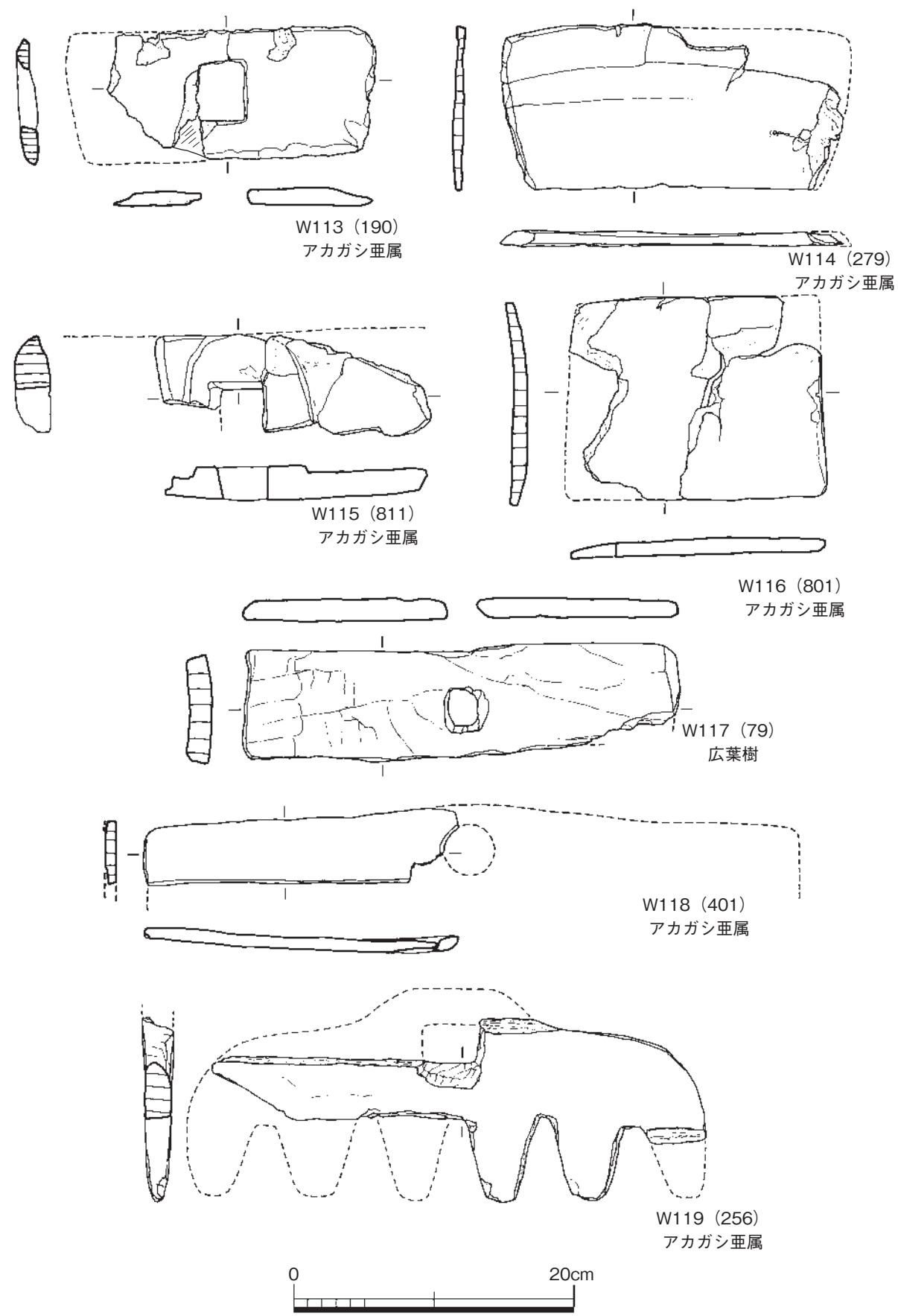
第43図 包含層出土木器15 農具⑪ (1/4)



第44図 包含層出土木器16 農具⑫ (1/4)

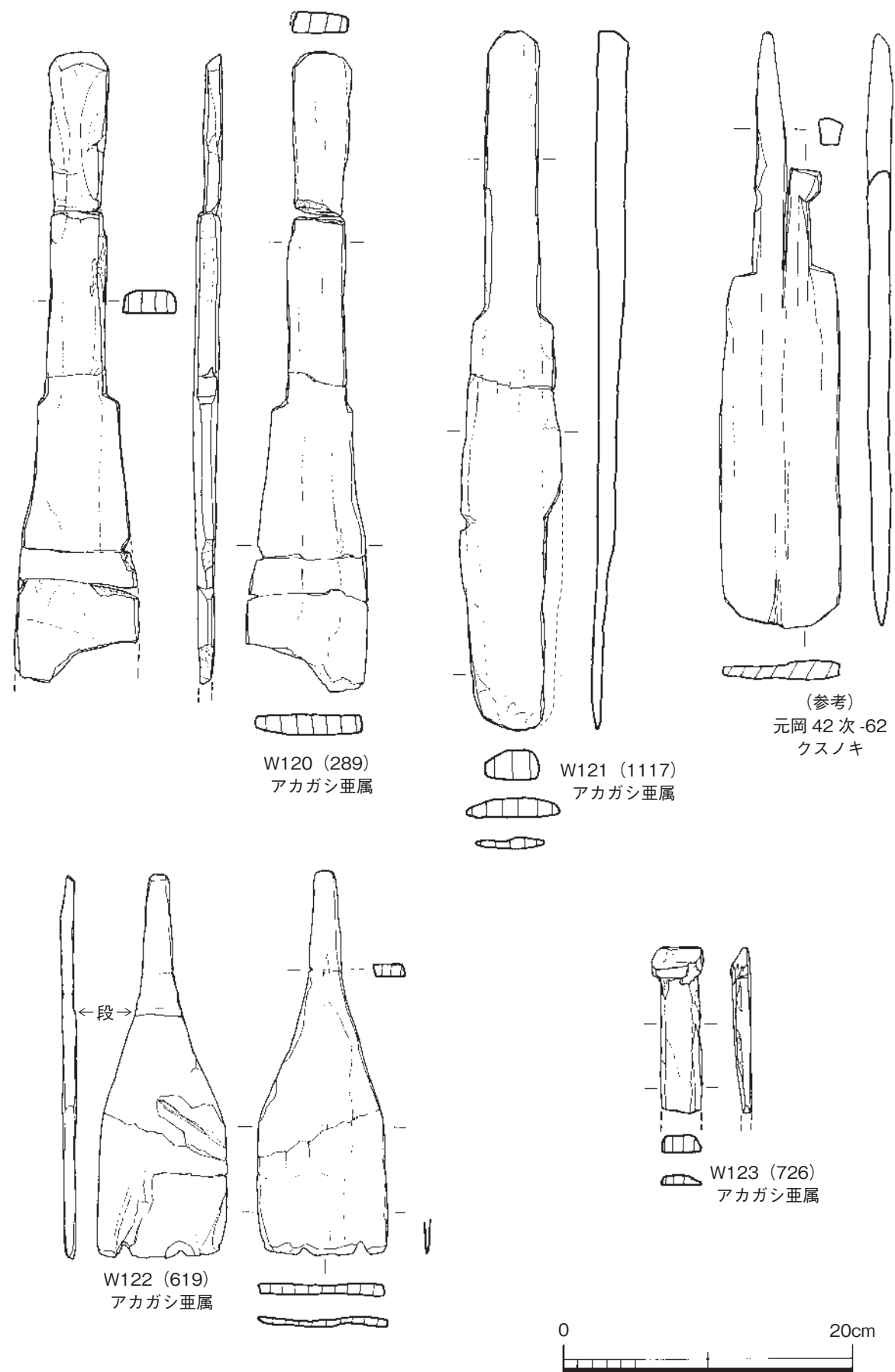


第45図 包含層出土木器17 農具⑬ (1/4)

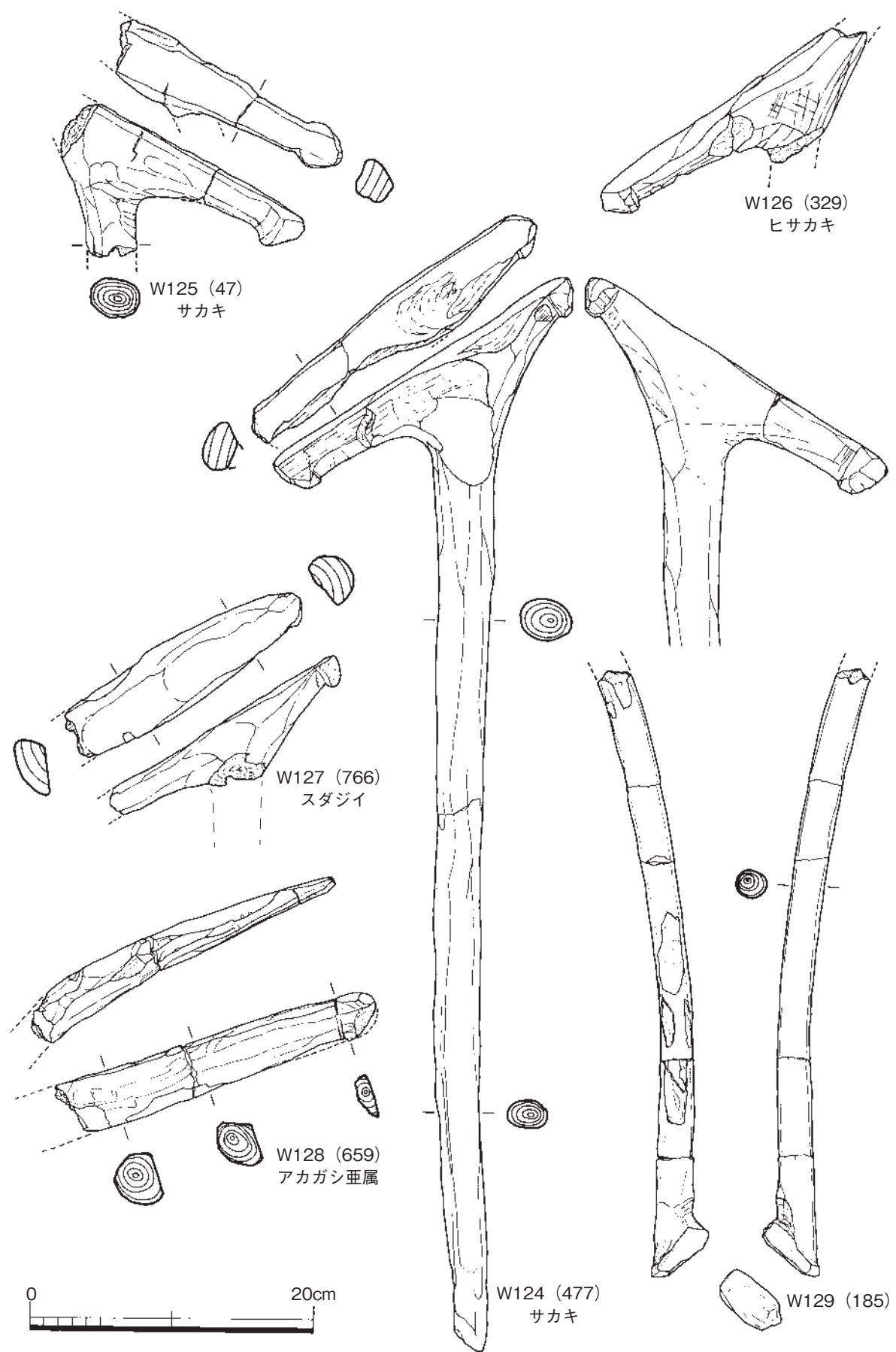


第46図 包含層出土木器18 農具⑭ (1/4)

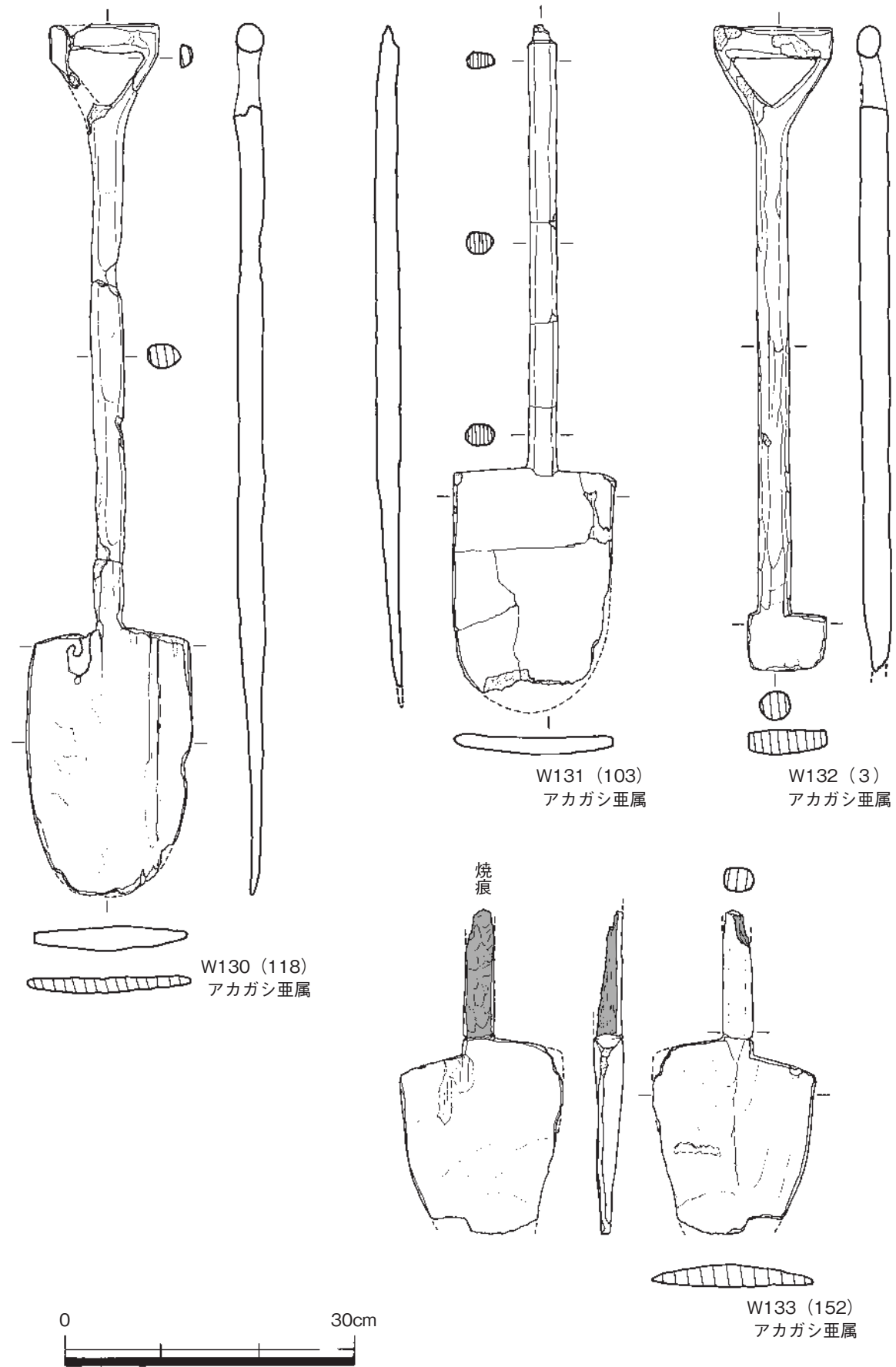




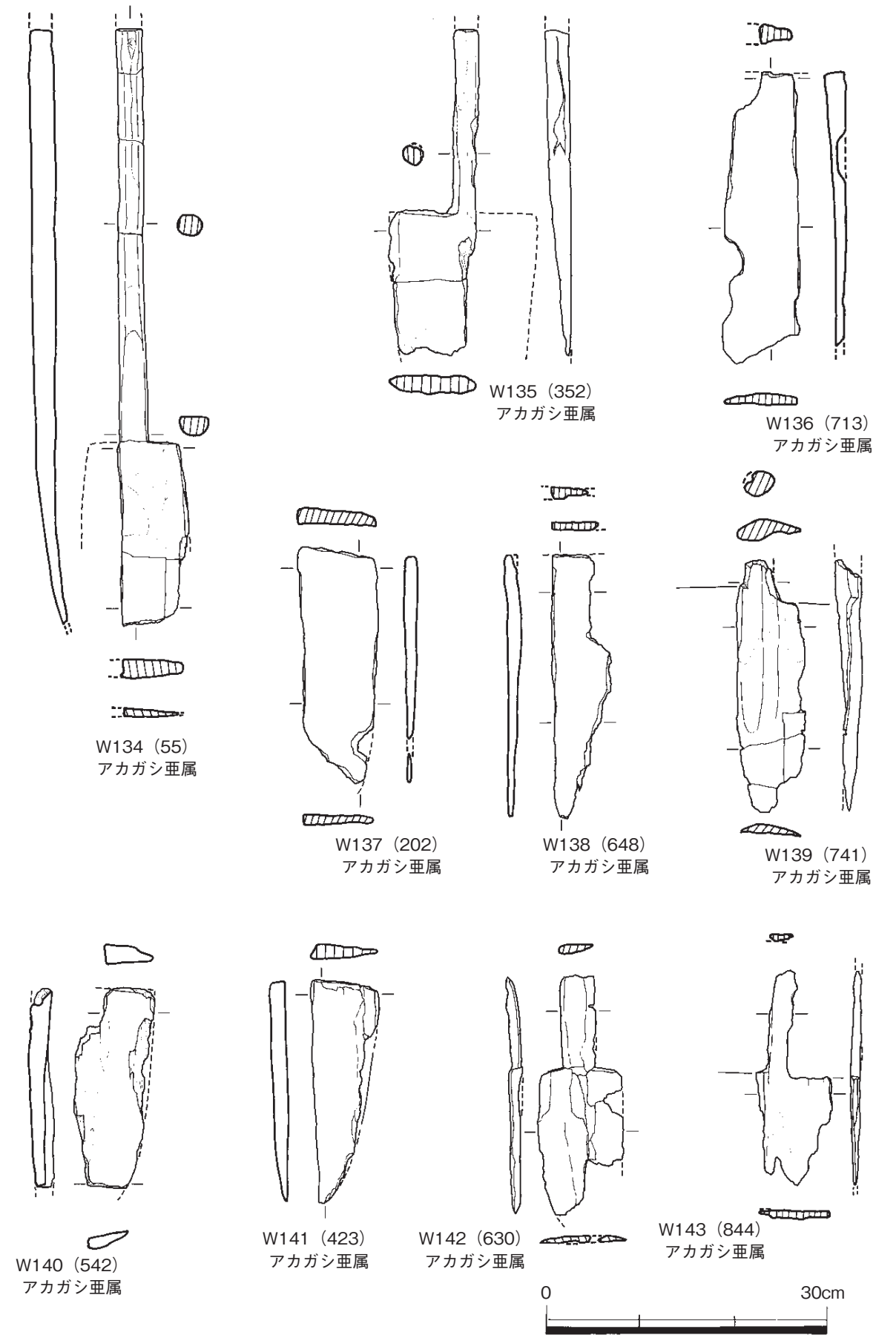
第47図 包含層出土木器19 農具⑮ (1/4)



第48図 包含層出土木器20 農具⑯ (1/4)

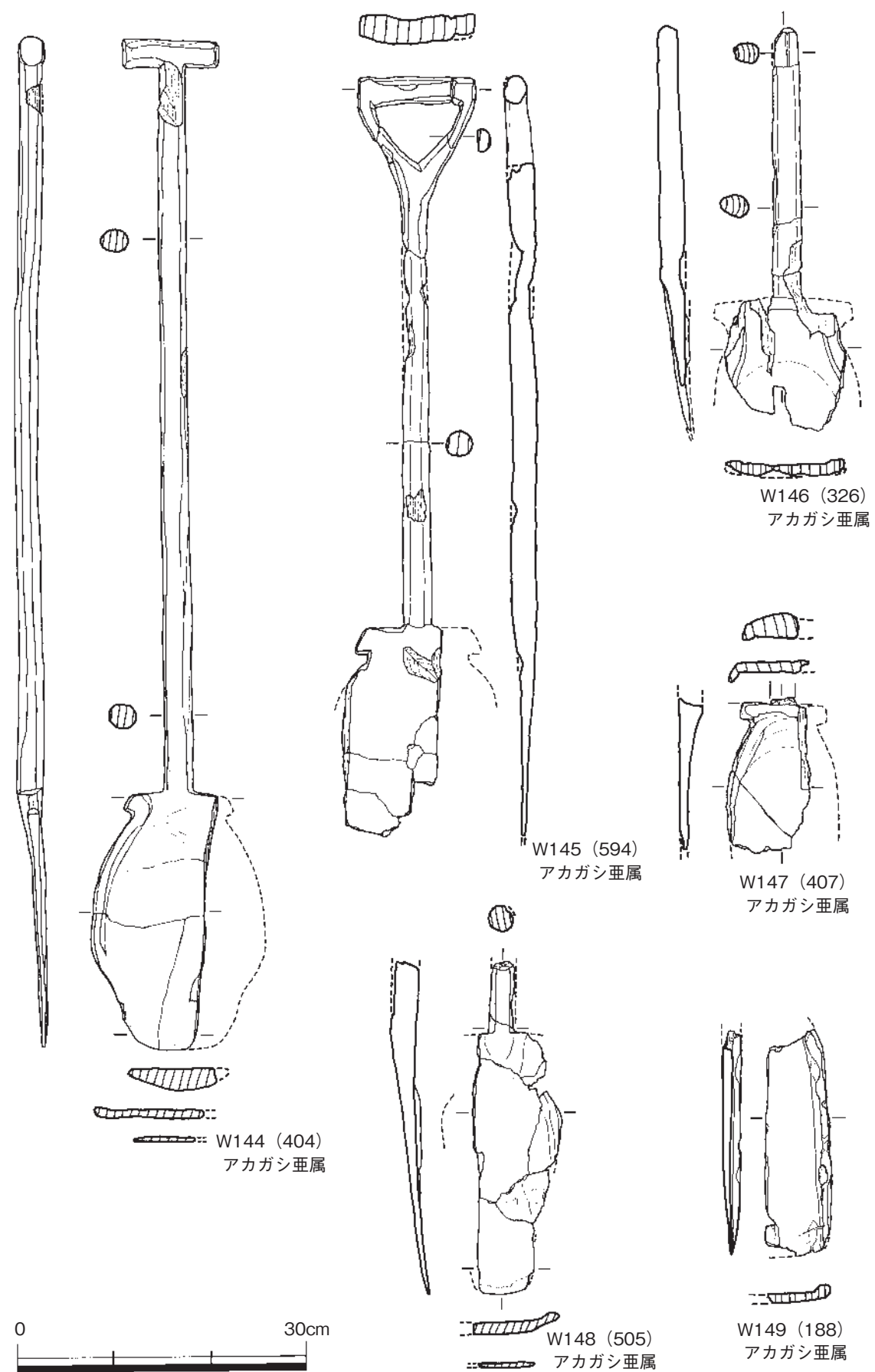


第49図 包含層出土木器21 農具⑰ (1/6)

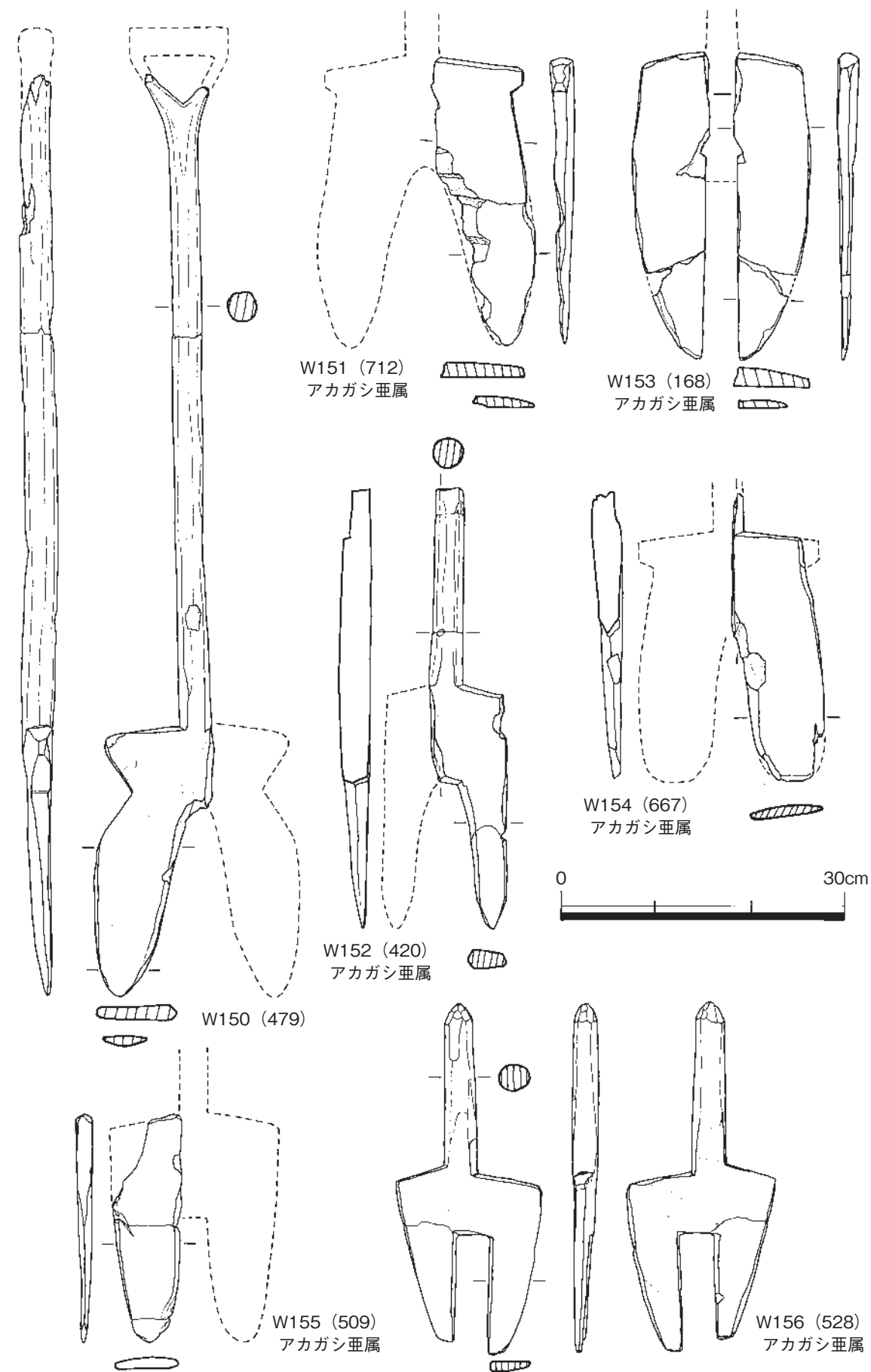


第50図 包含層出土木器22 農具⑱ (1/6)

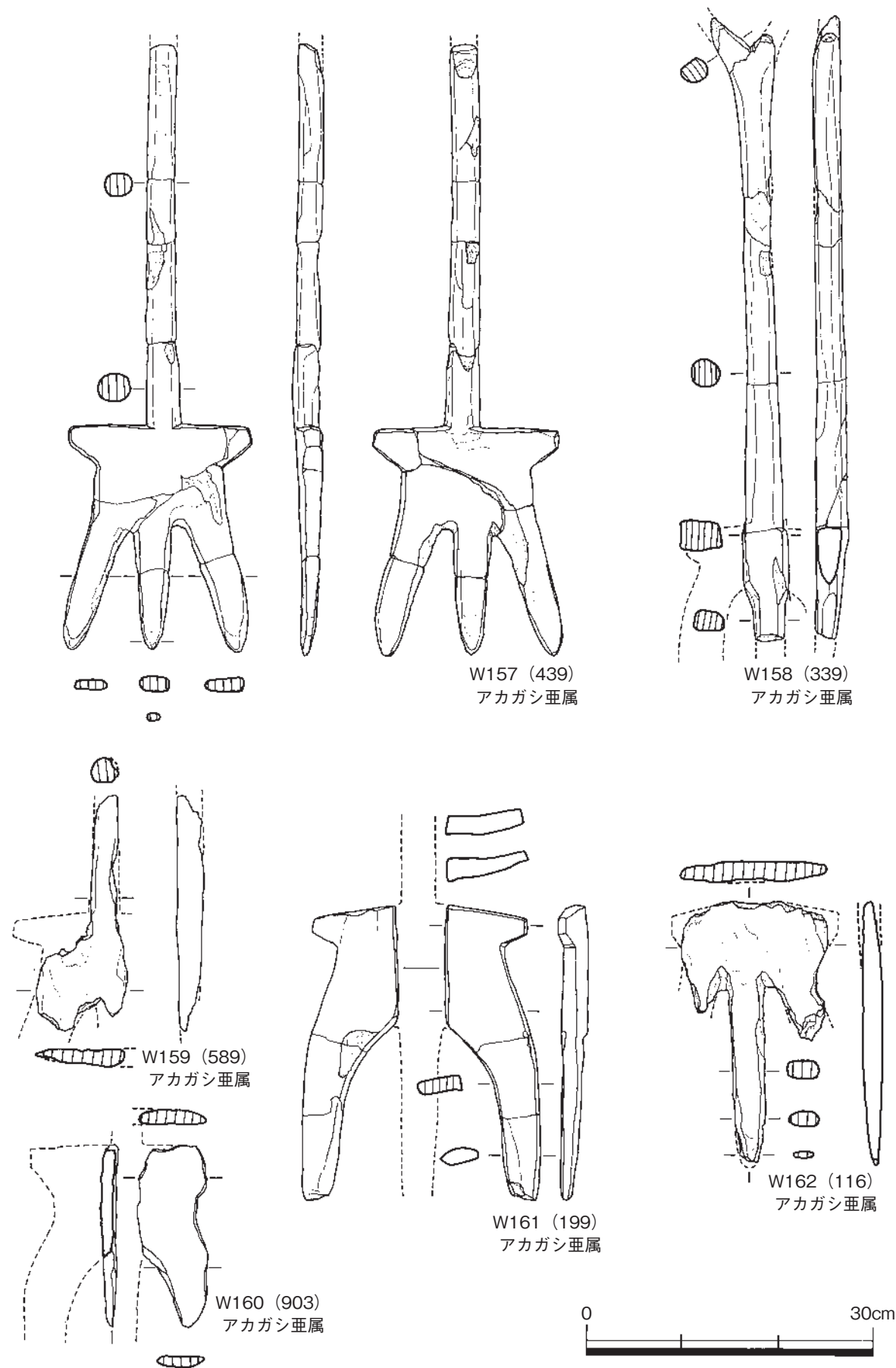




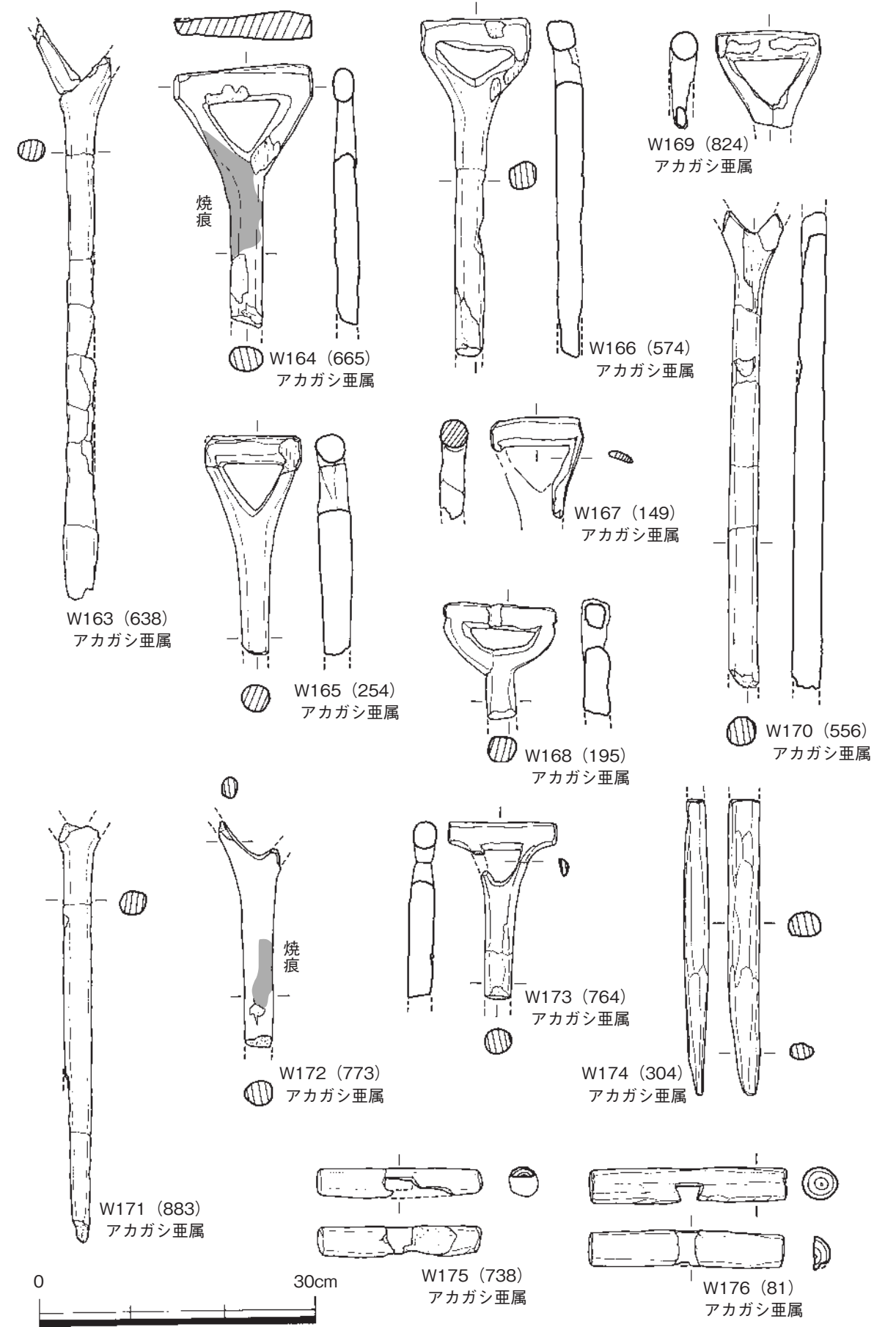
第51図 包含層出土木器23 農具⑩ (1/6)



第52図 包含層出土木器24 農具⑪ (1/6)

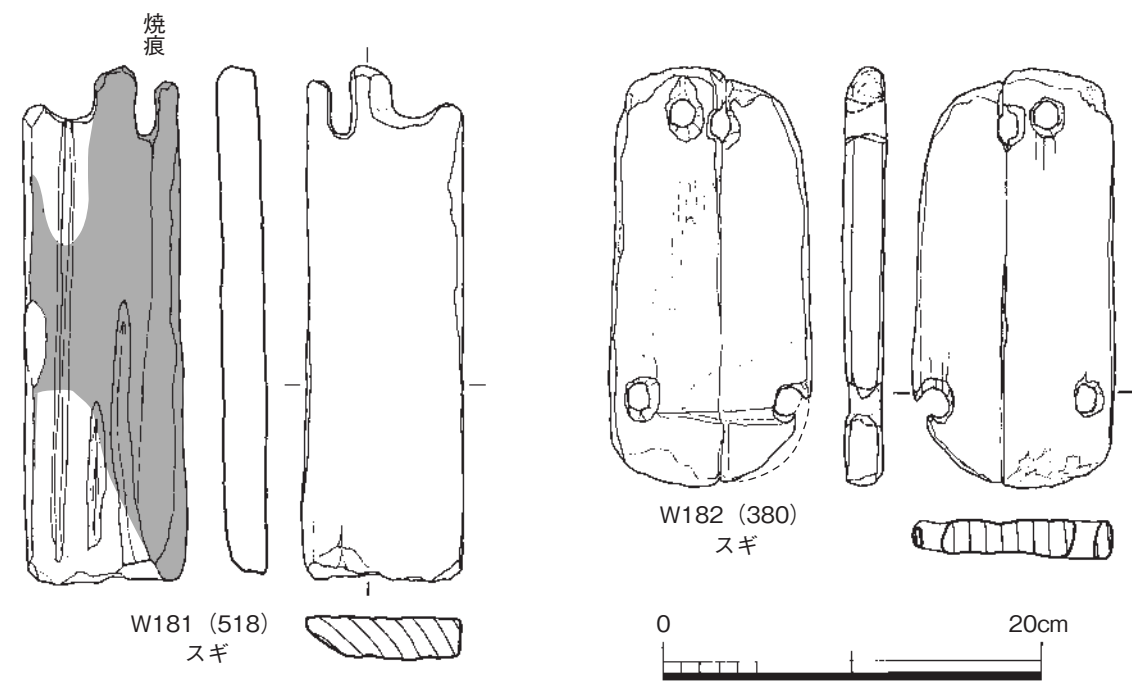
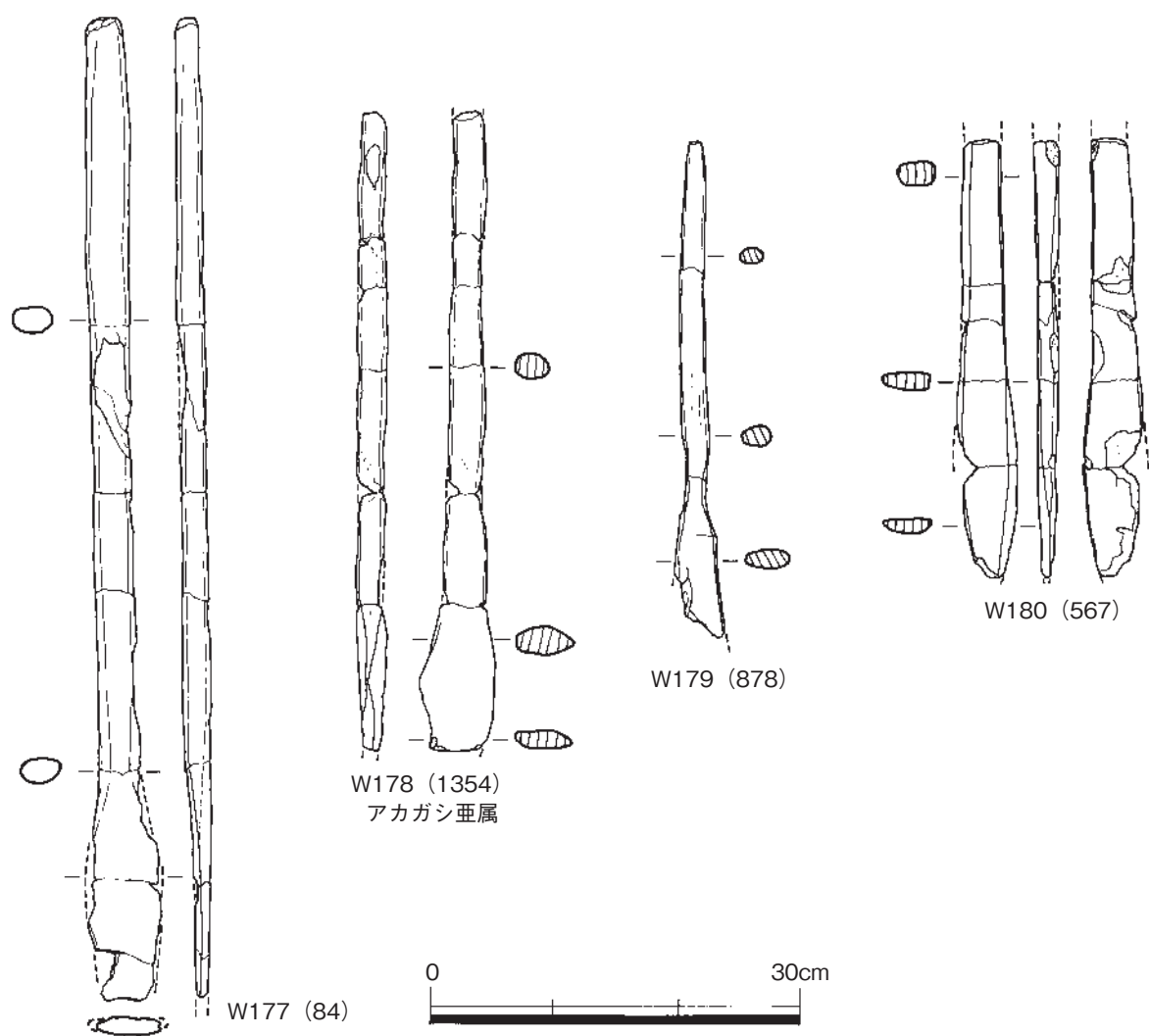


第53図 包含層出土木器25 農具② (1/6)

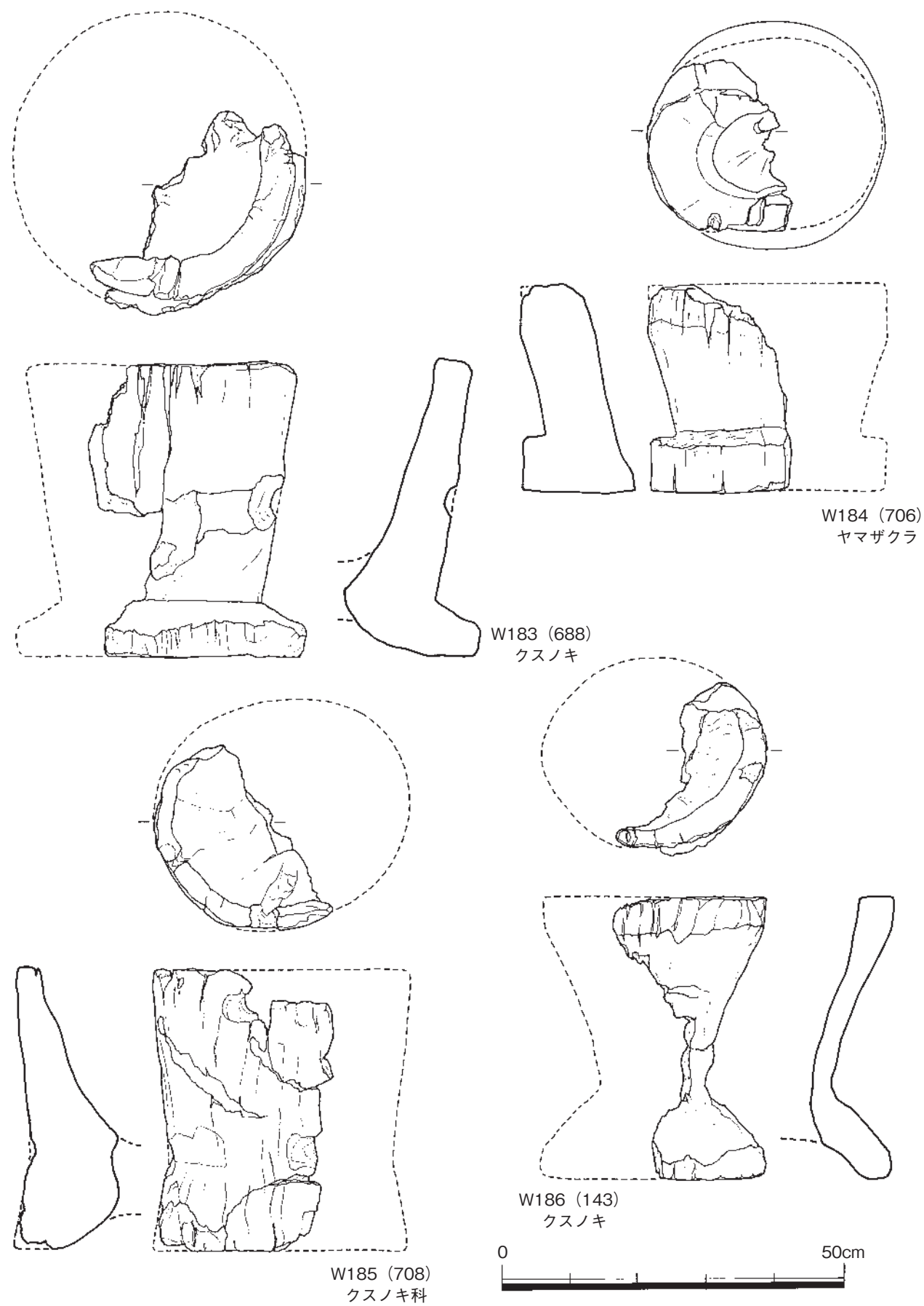


第54図 包含層出土木器26 農具② (1/6)

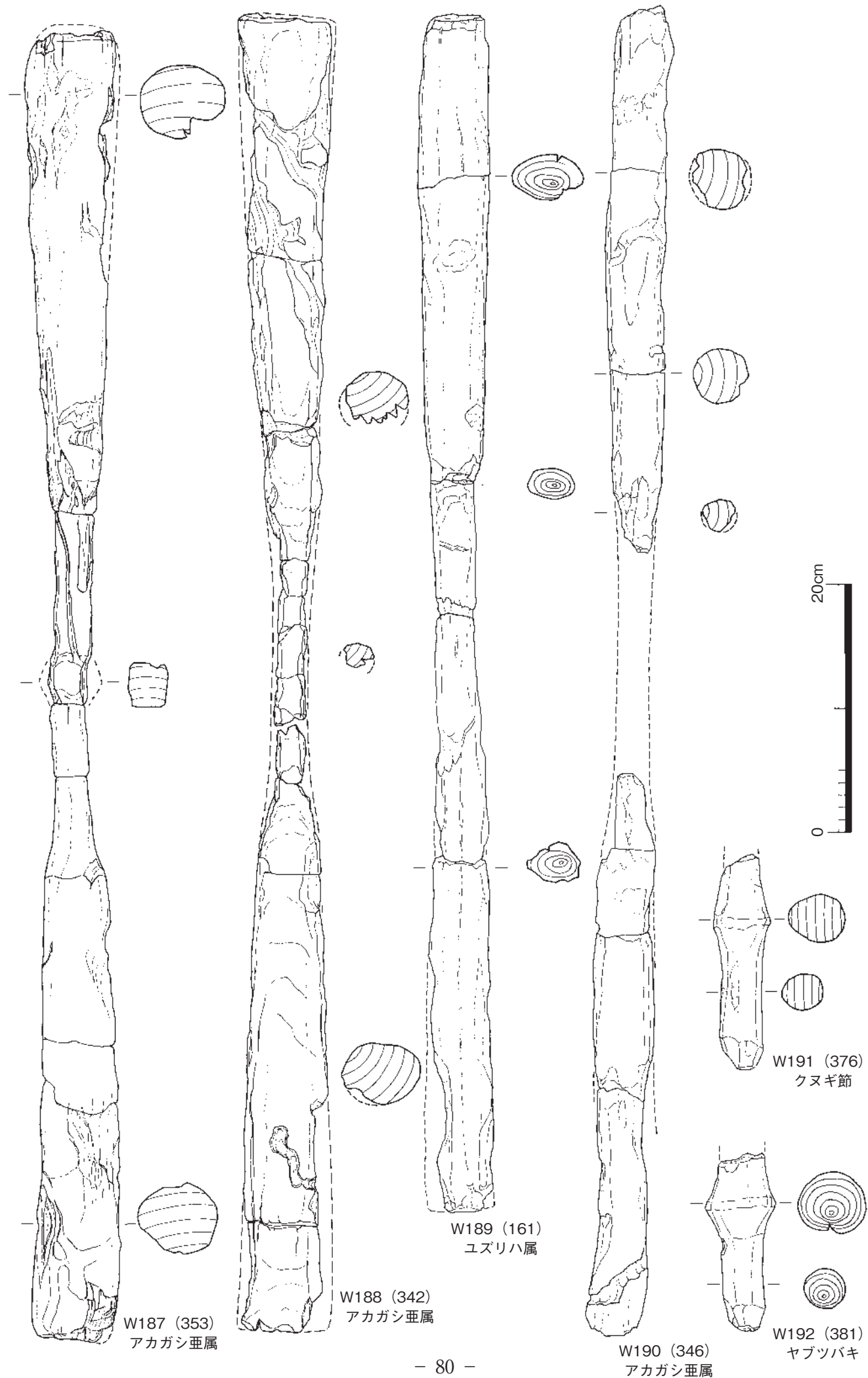




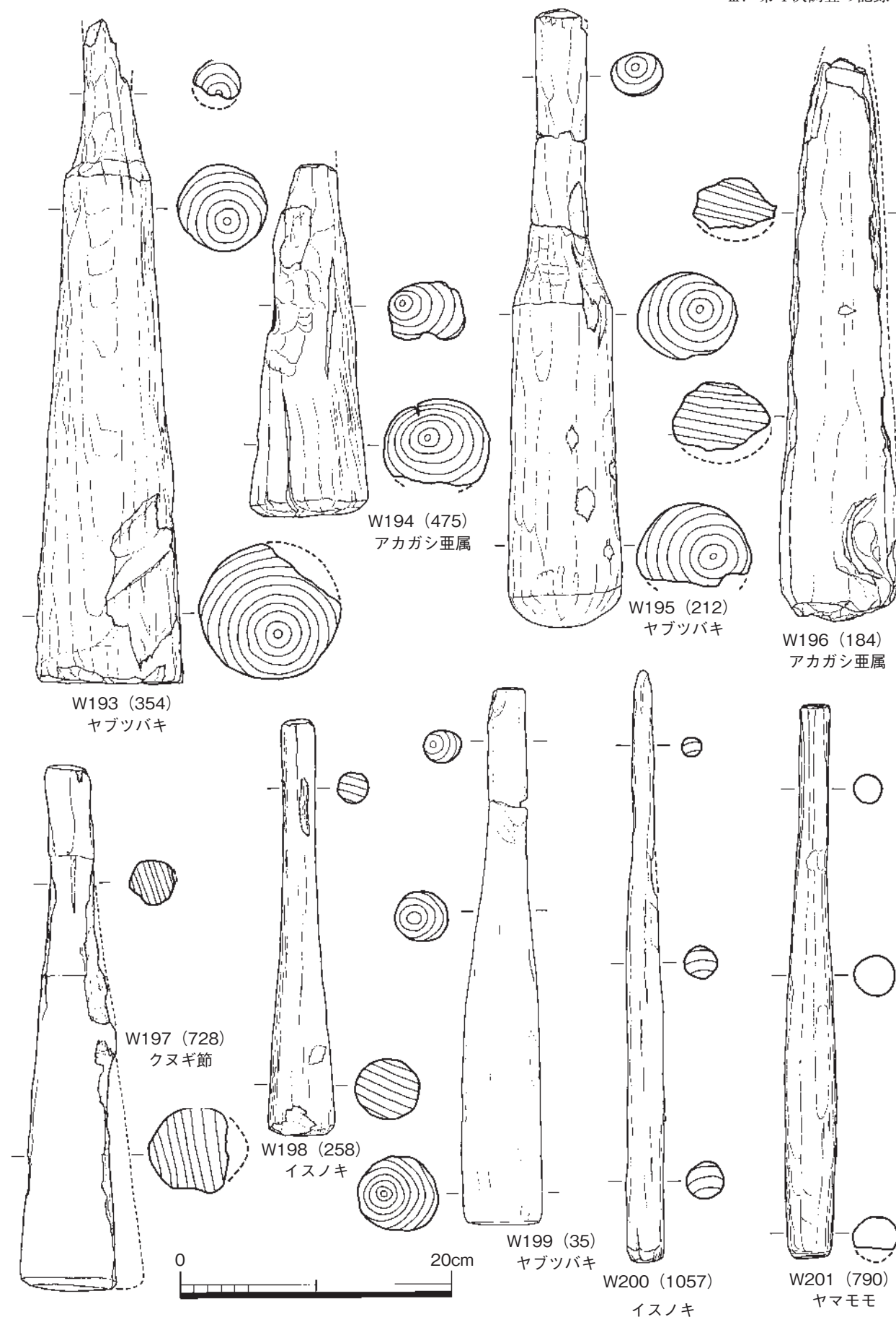
第55図 包含層出土木器27 農具㉓ (1/6, 1/4)



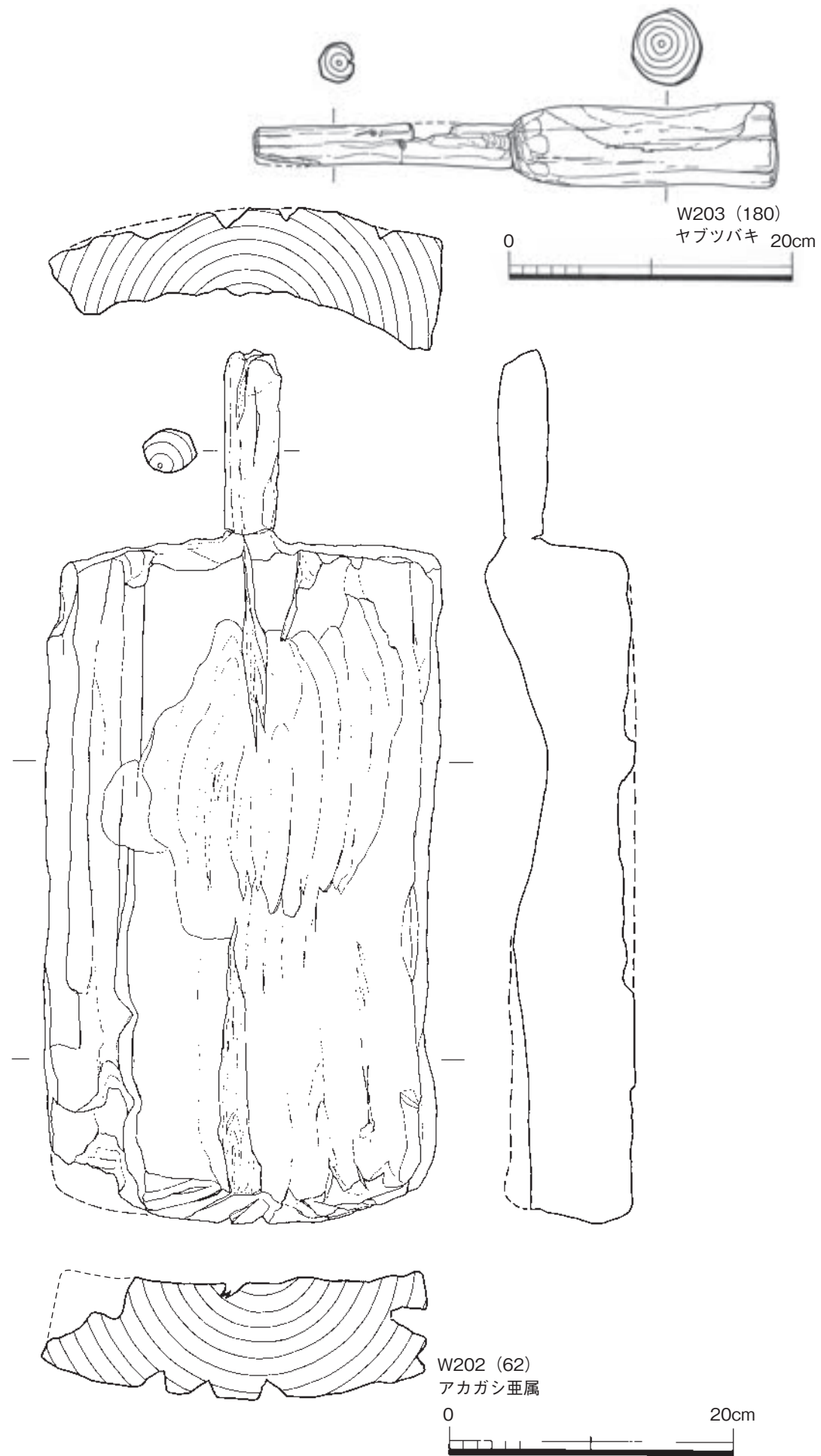
第56図 包含層出土木器28 農具㉔ (1/8)



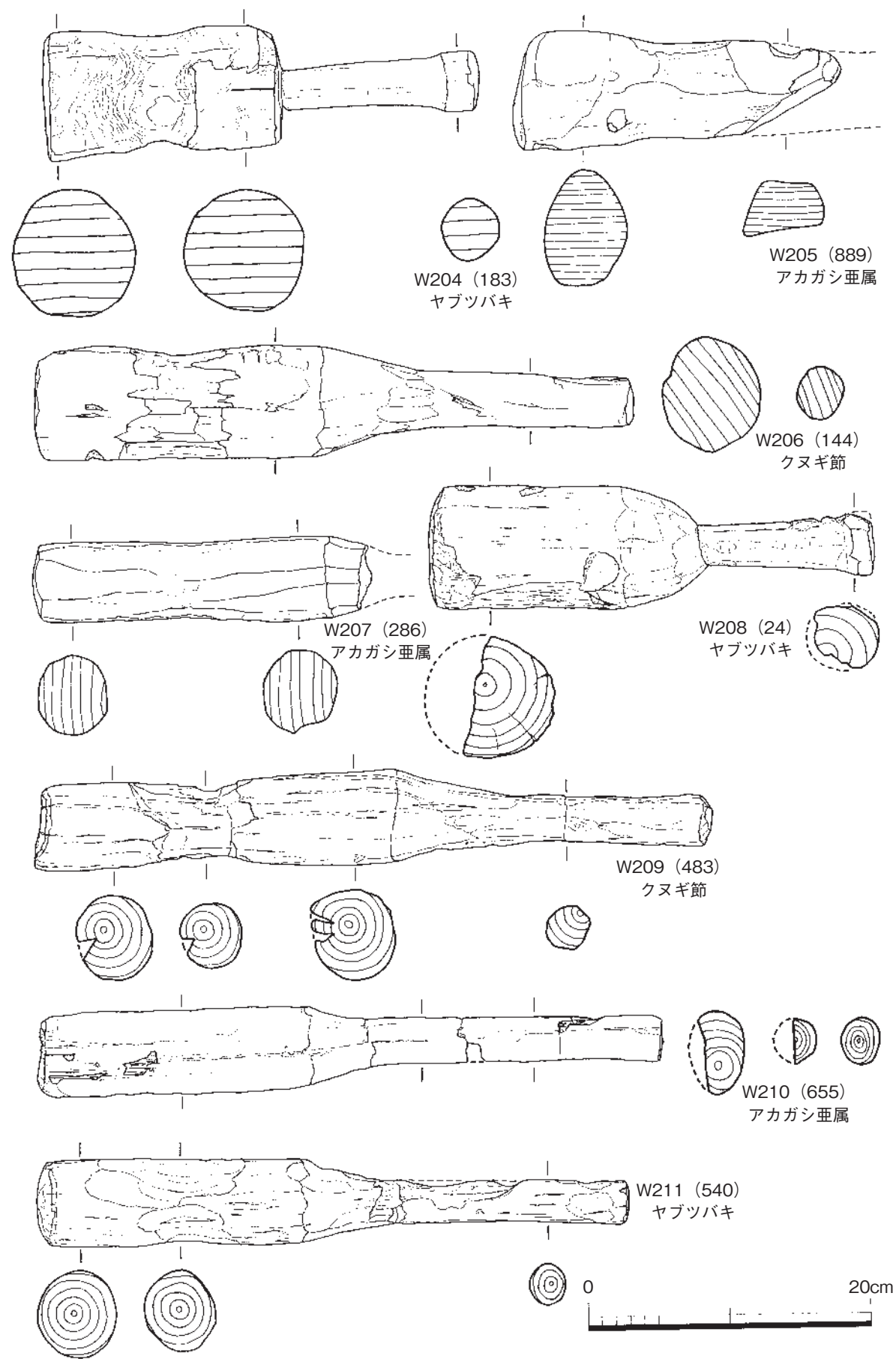
第57図 包含層出土木器29 農具㉔ (1/4)



第58図 包含層出土木器30 農具㉔ (1/4)

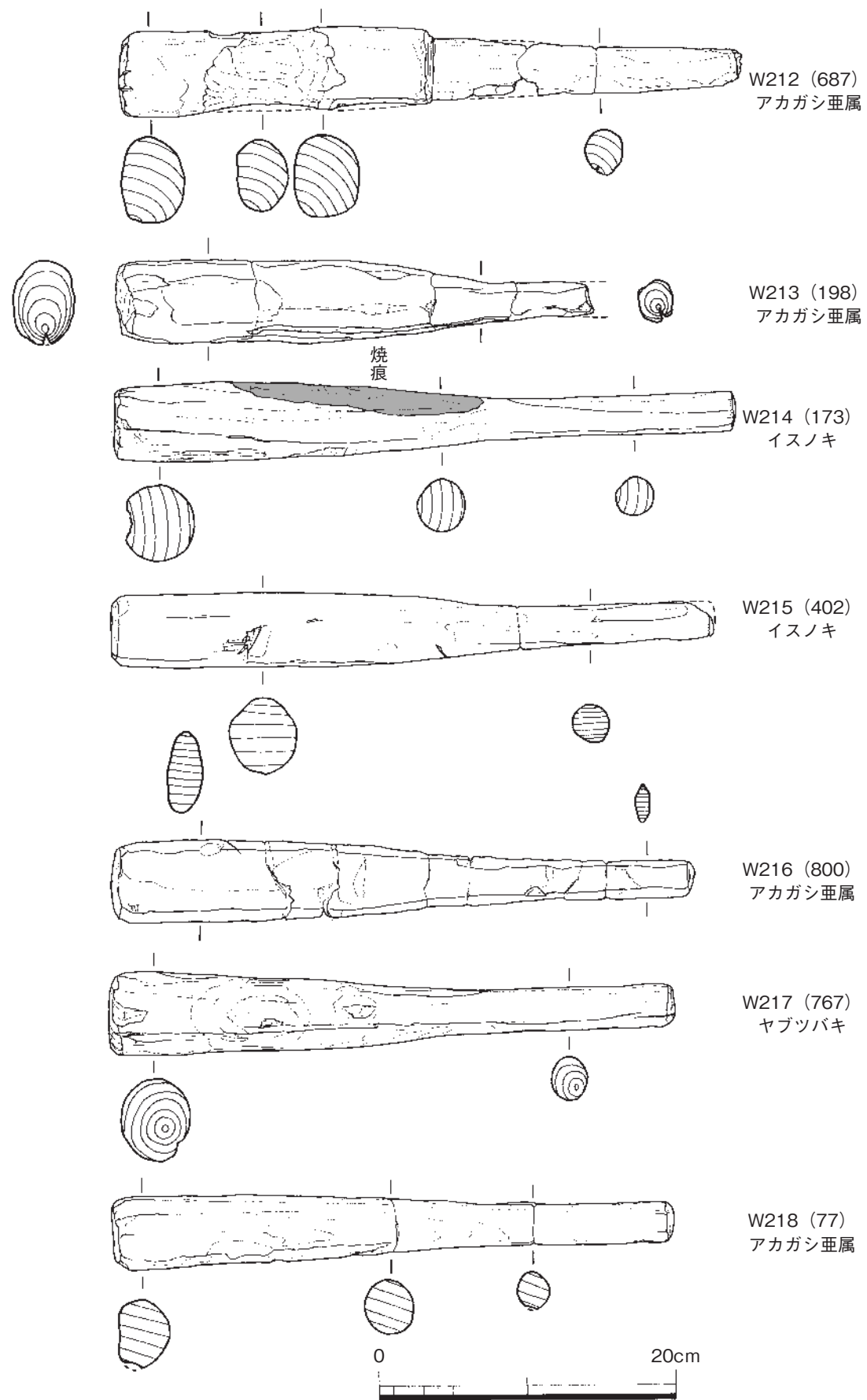


第59図 包含層出土木器31 農具㉗ (1/4)

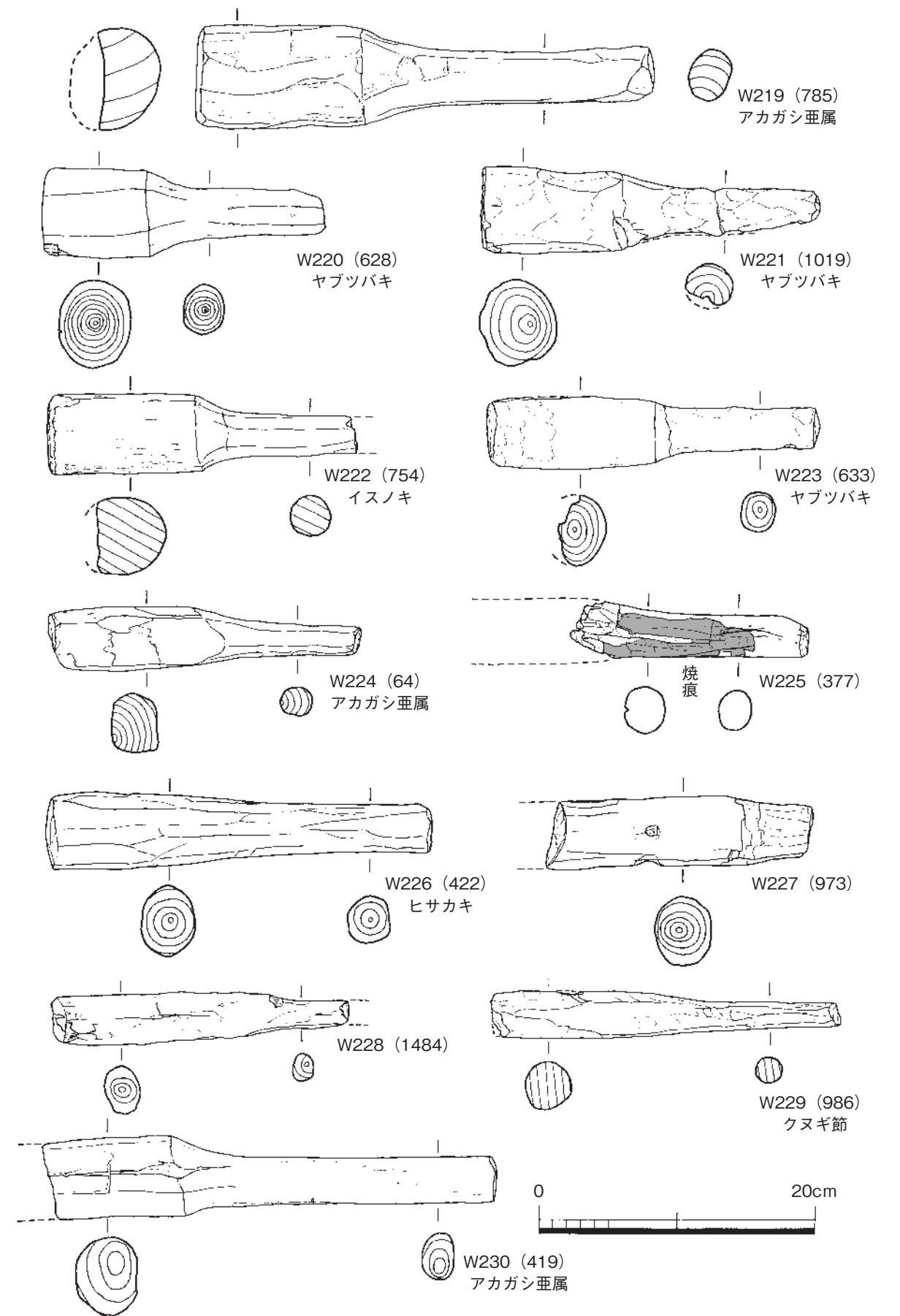


第60図 包含層出土木器32 農具㉘ (1/4)

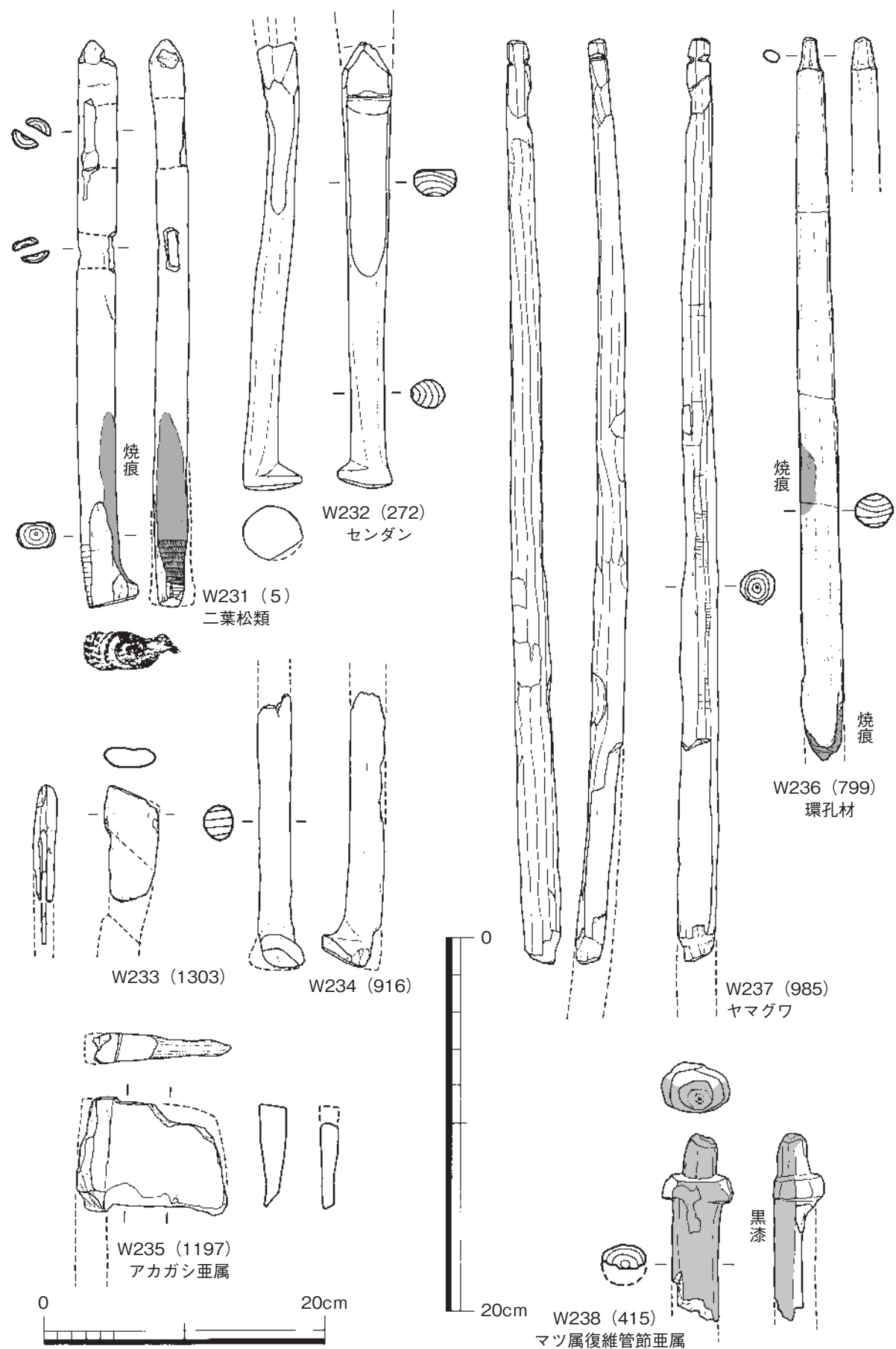




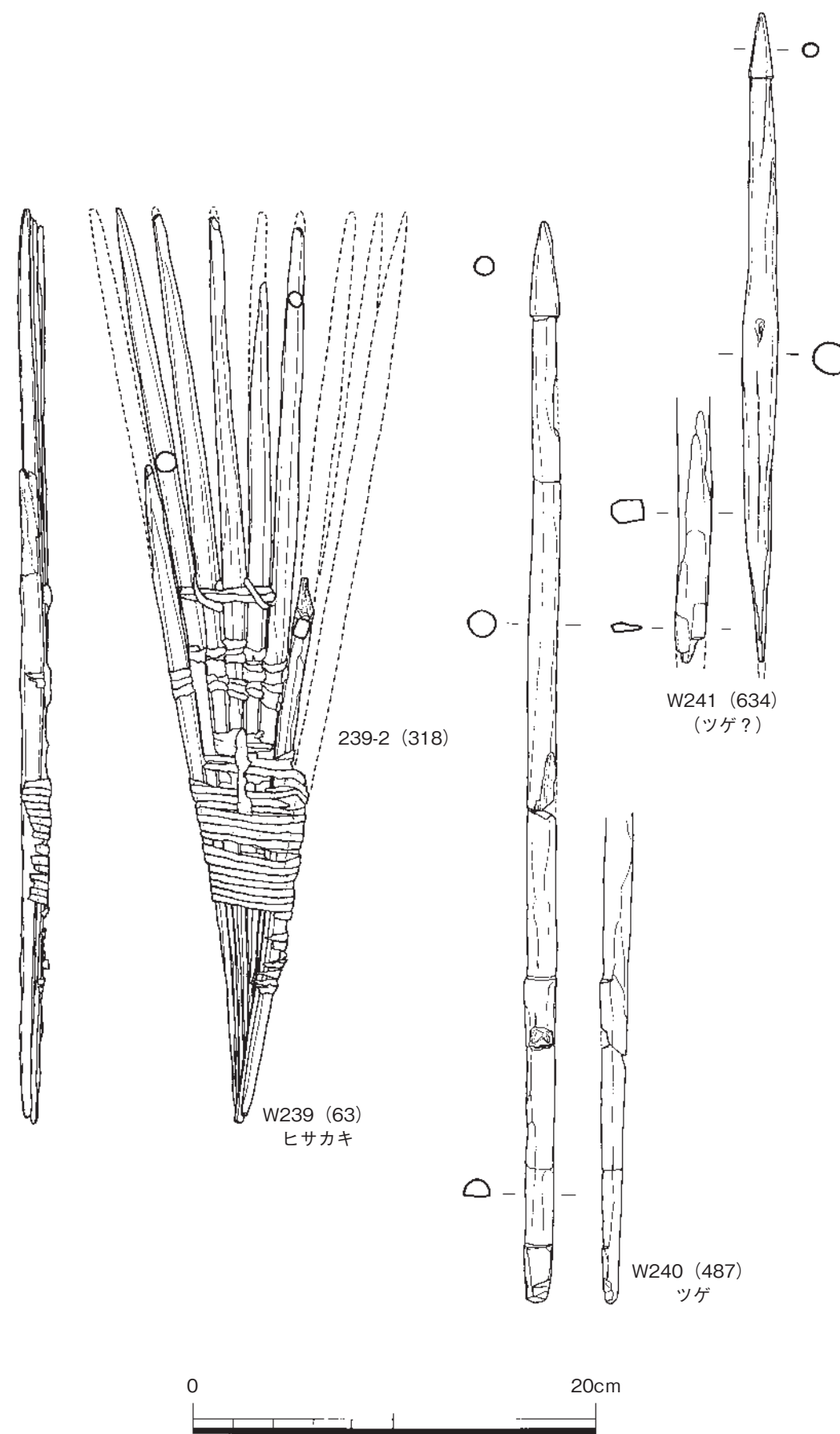
第61図 包含層出土木器33 農具<sup>29</sup> (1/4)



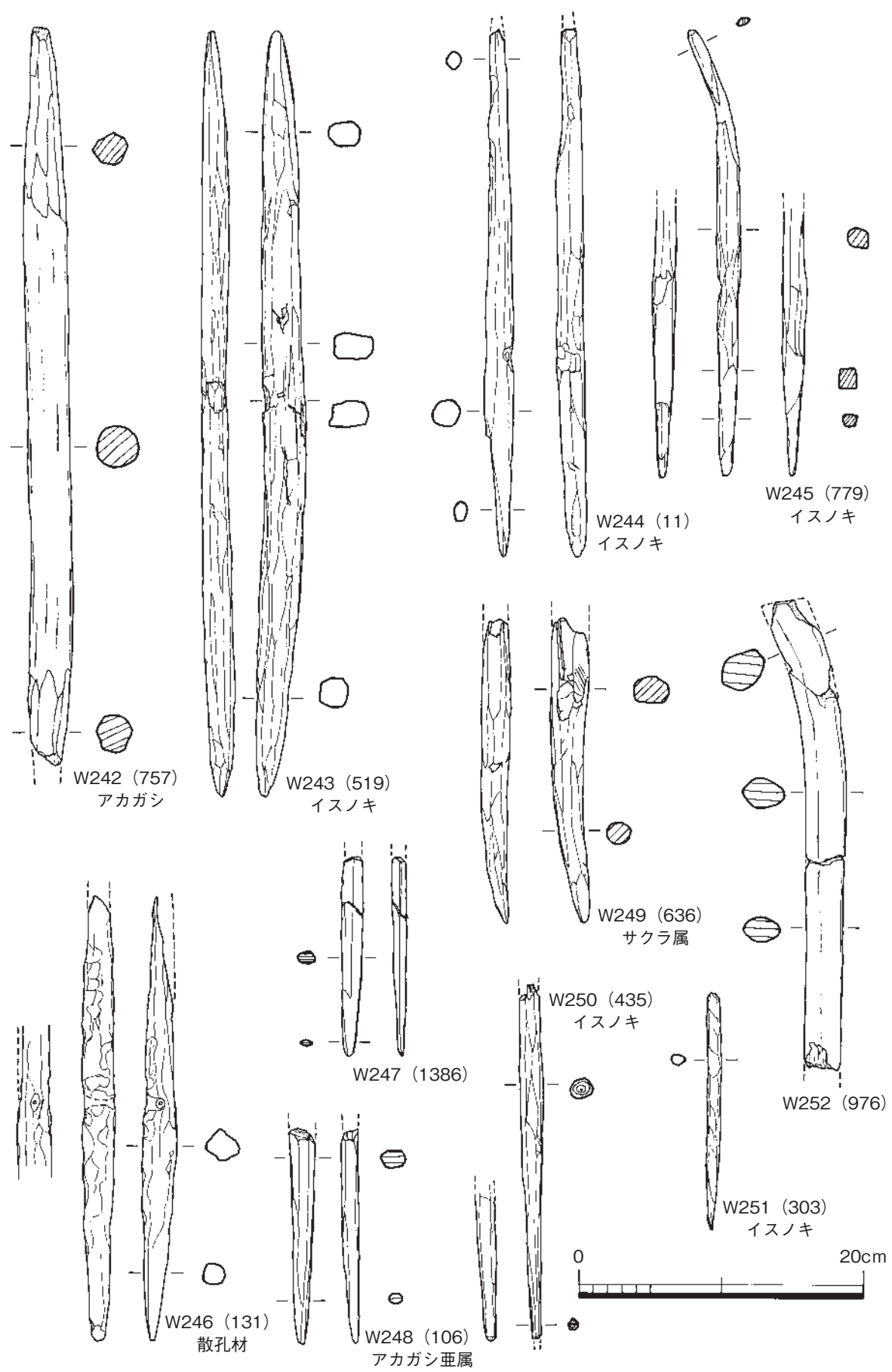
第62図 包含層出土木器34 農具<sup>30</sup> (1/4)



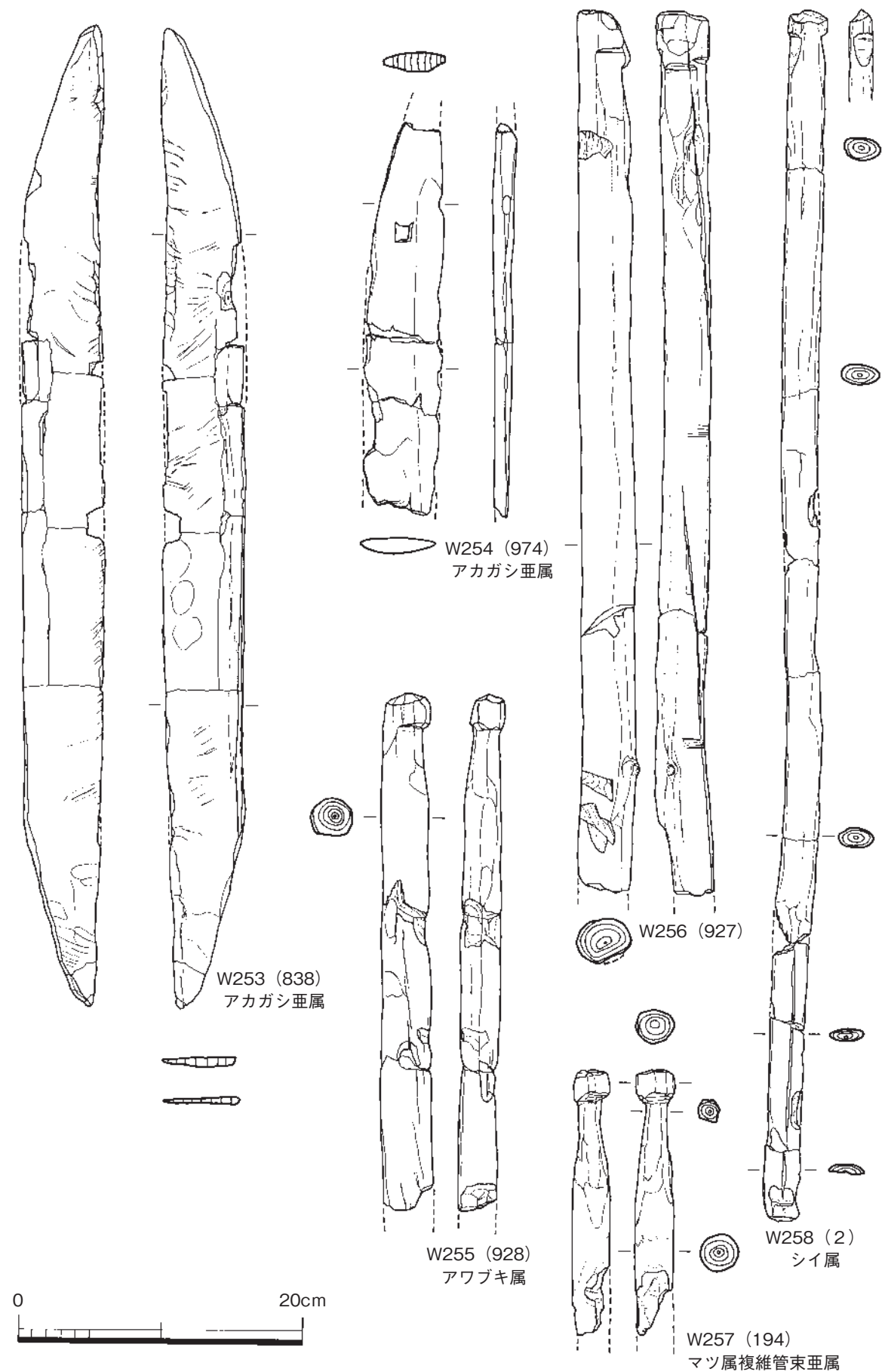
第63図 包含層出土木器35 農具③(1/4) 武器・狩猟具(1/3)



第64図 包含層出土木器36 漁労具①(1/3)

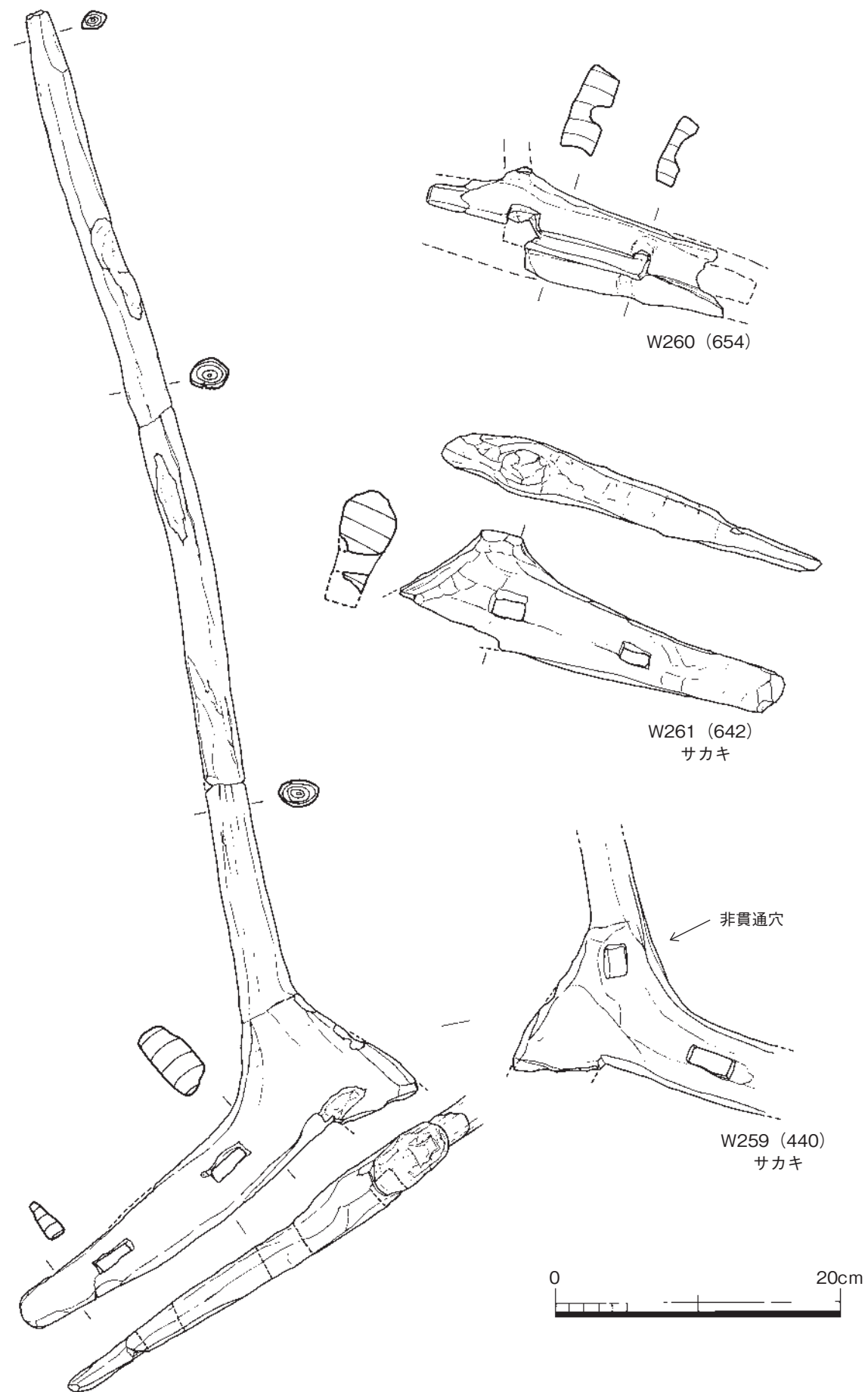


第65図 包含層出土木器37 漁労具② (1/4)

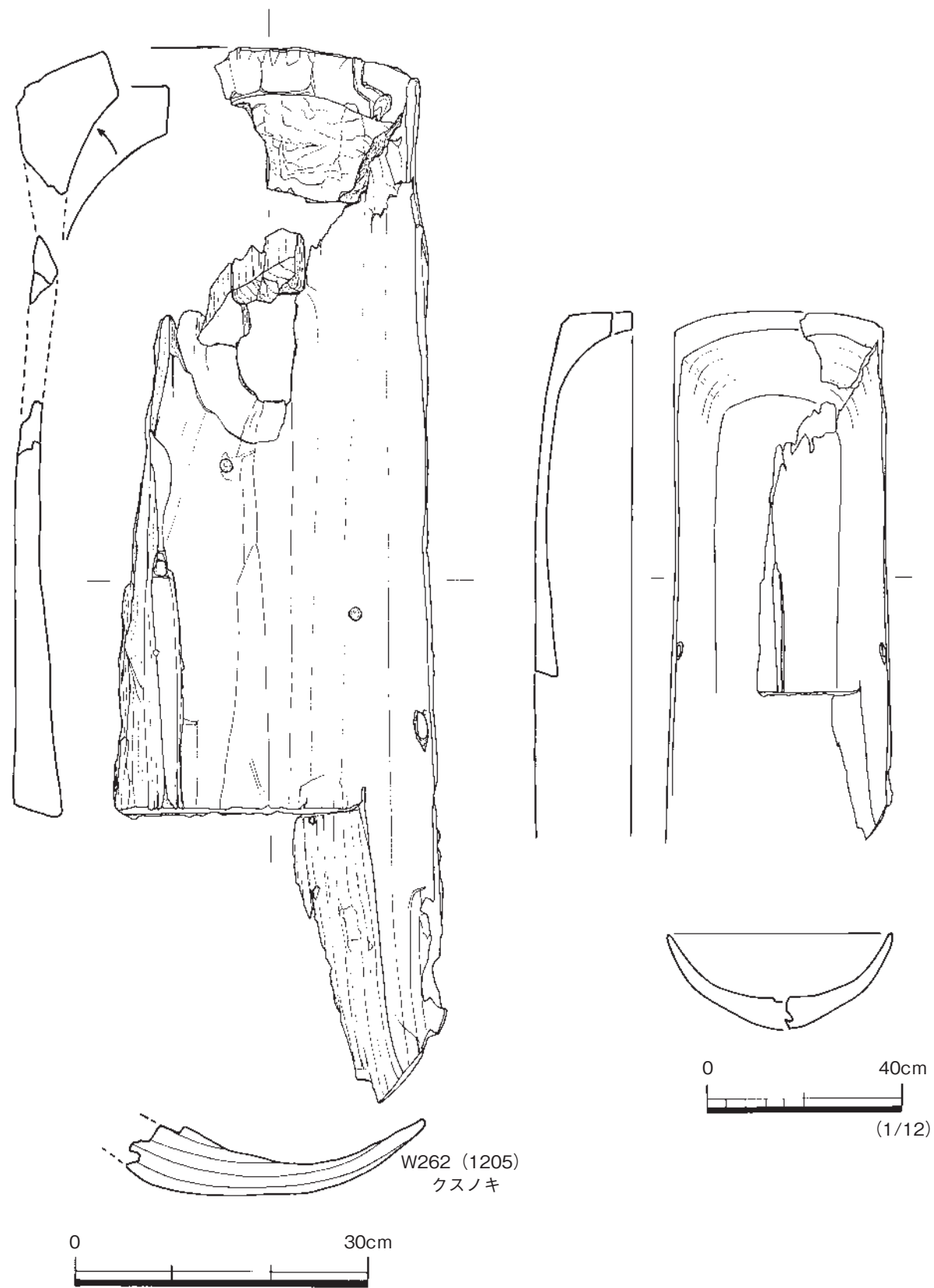


第66図 包含層出土木器38 紡織具 (1/4)

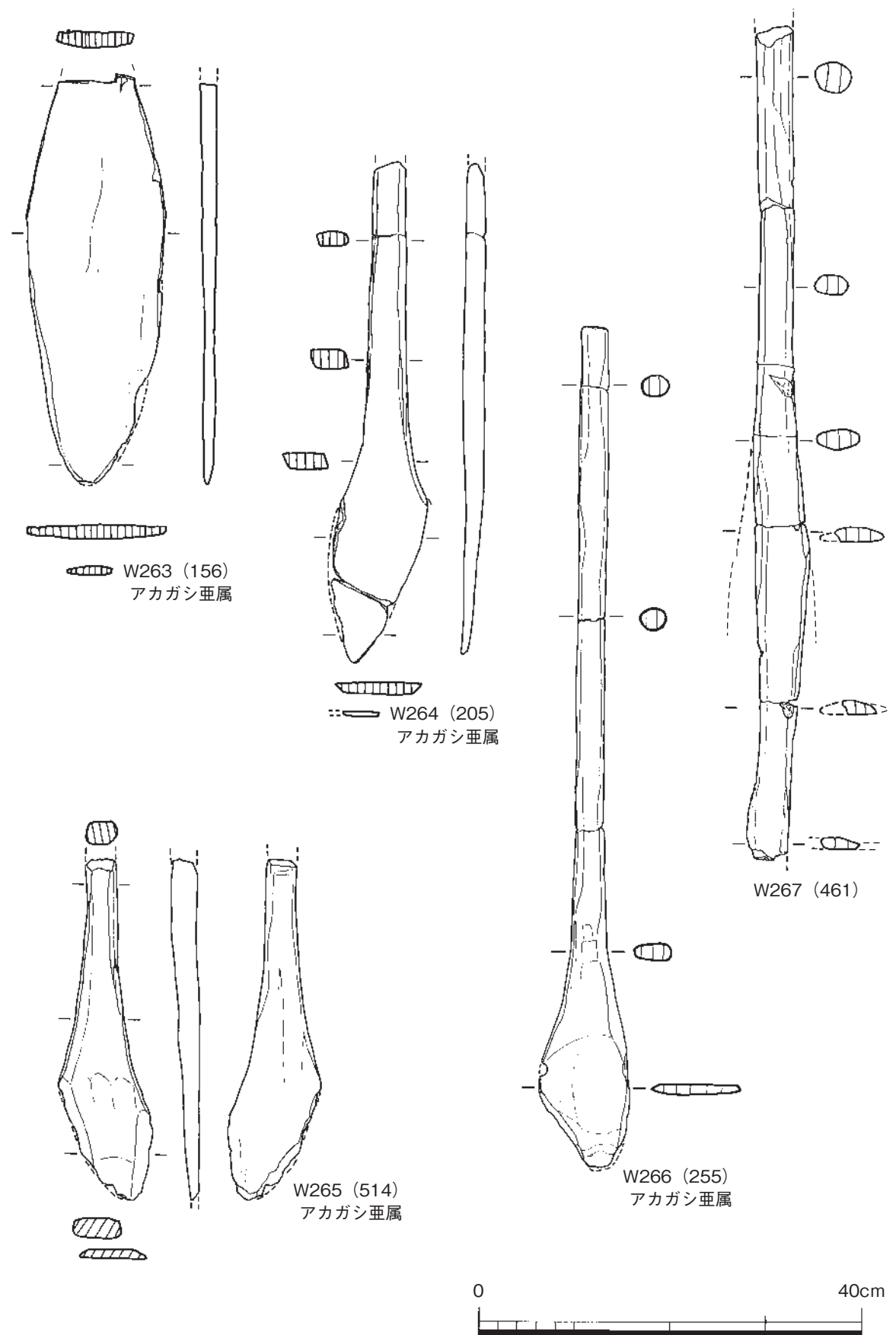




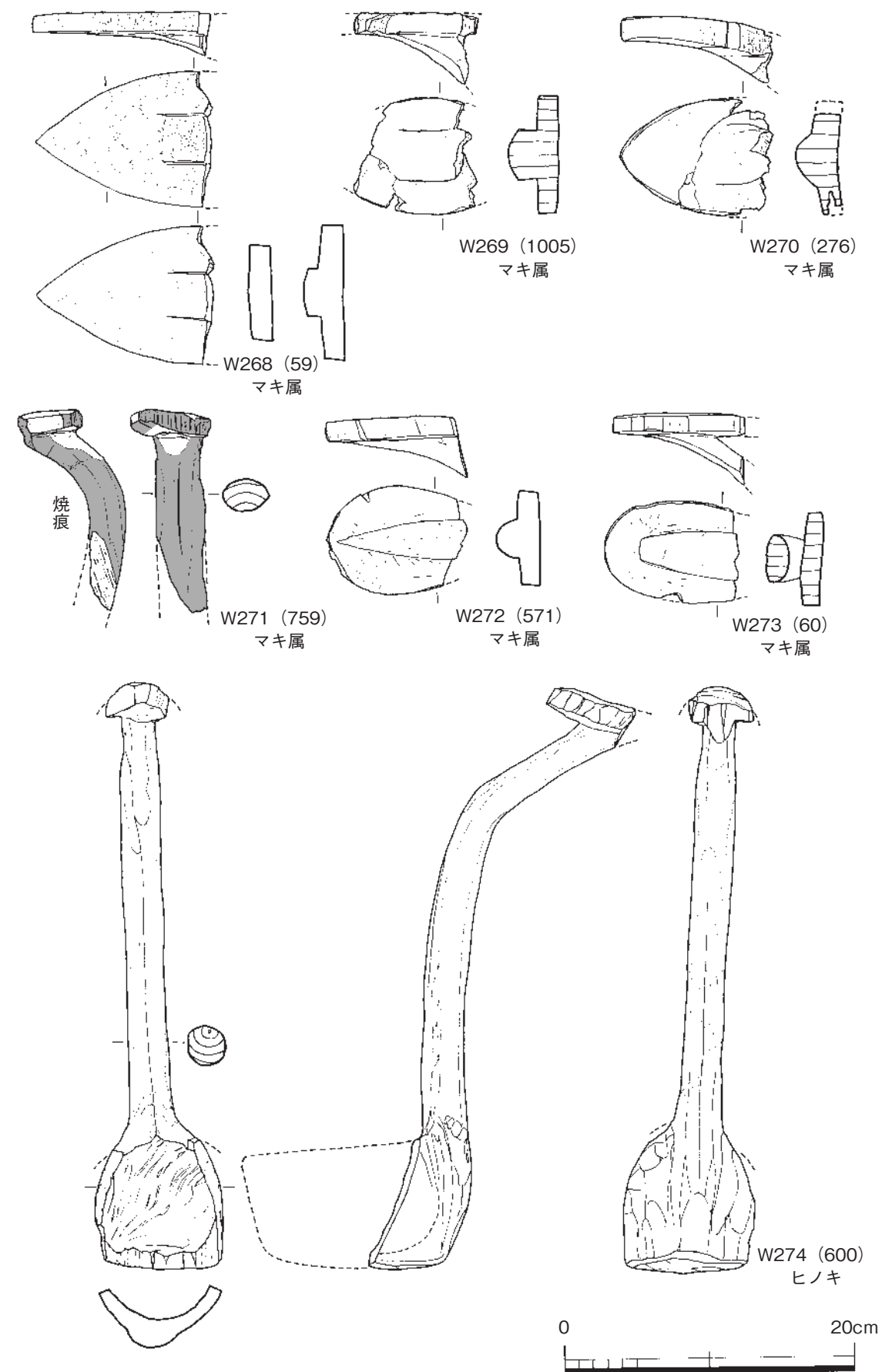
第67図 包含層出土木器39 運搬具① (1/4)



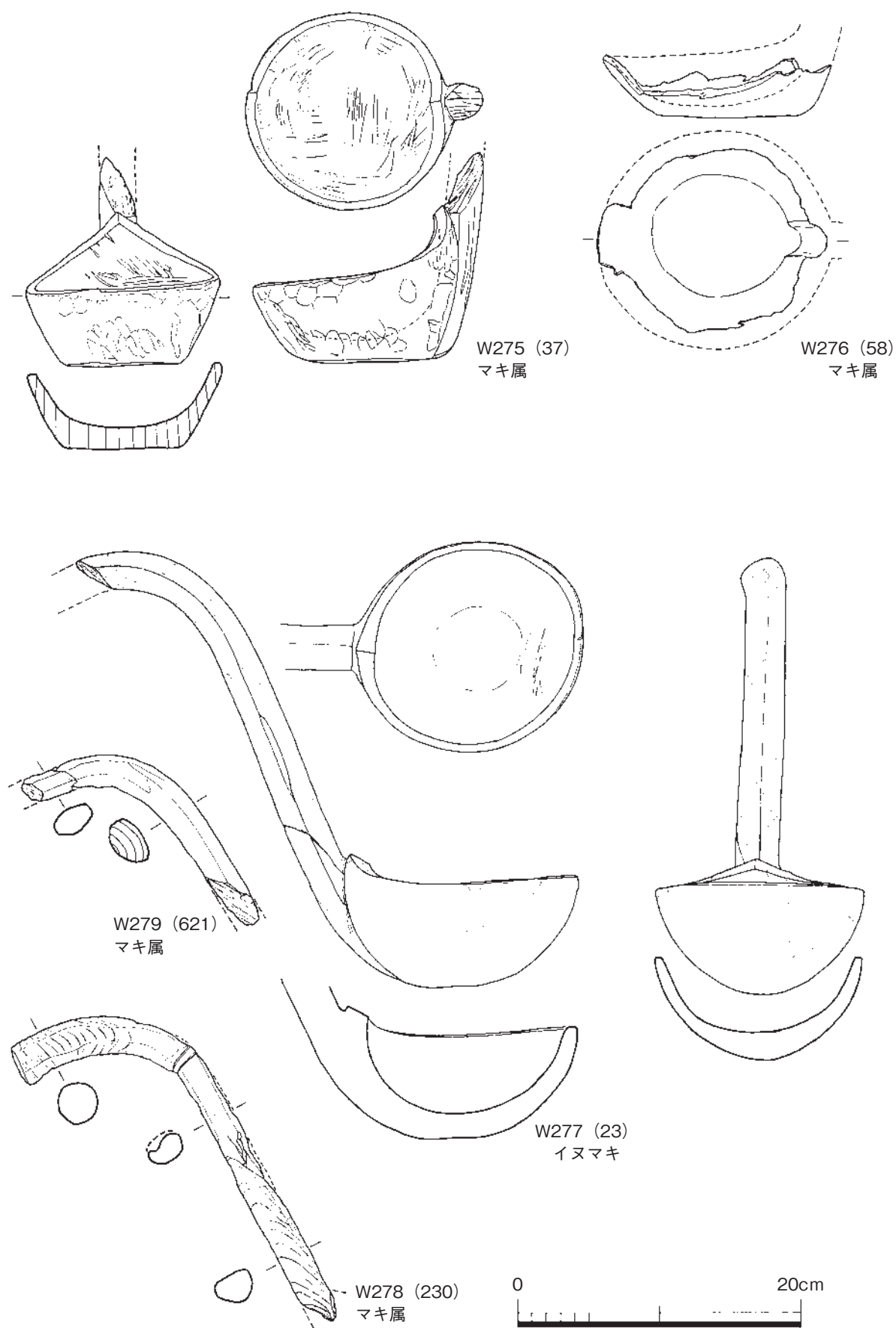
第68図 包含層出土木器40 運搬具② (1/6)



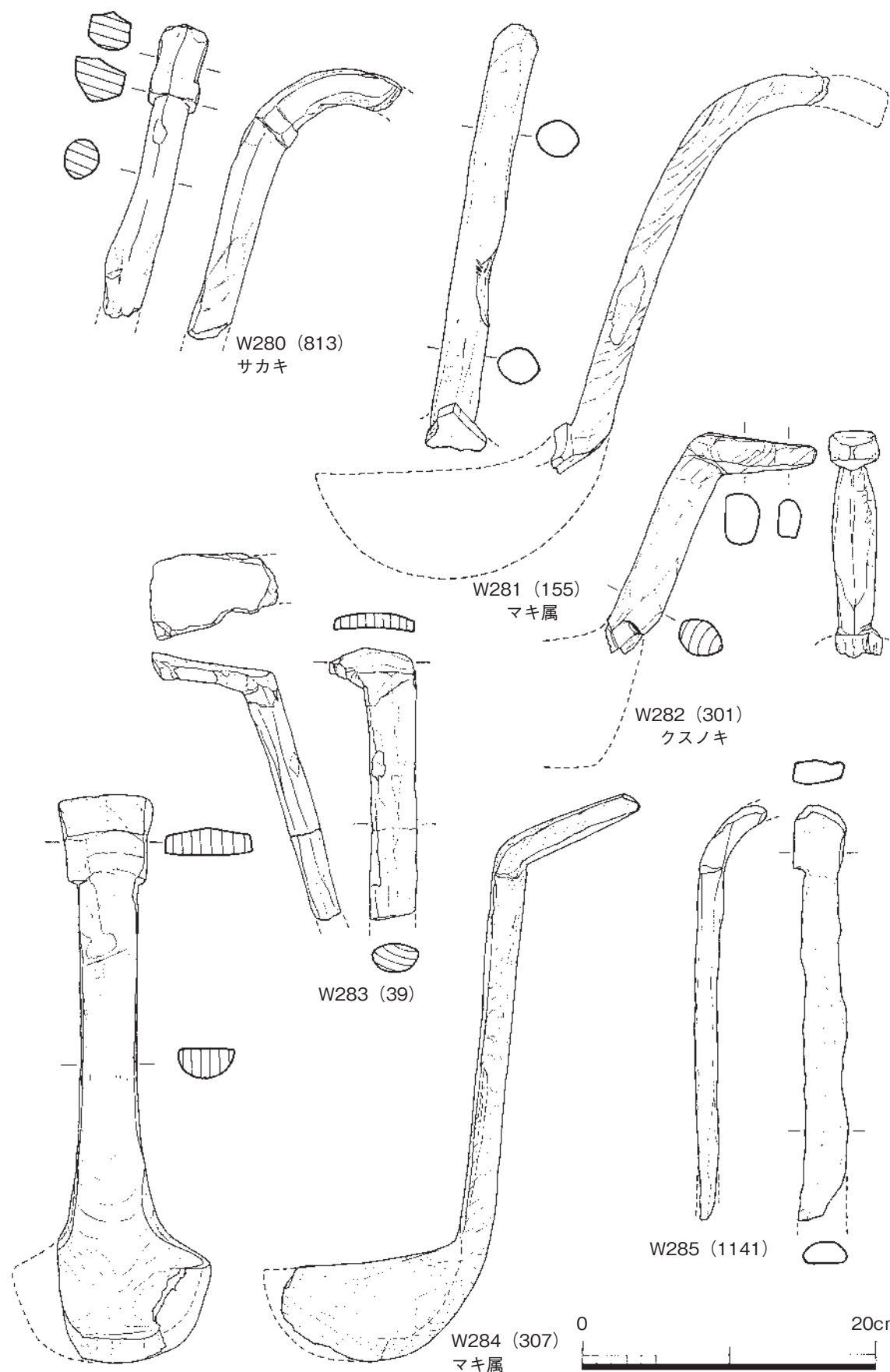
第69図 包含層出土木器41 運搬具③ (1/6)



第70図 包含層出土木器42 食事具① (1/4)

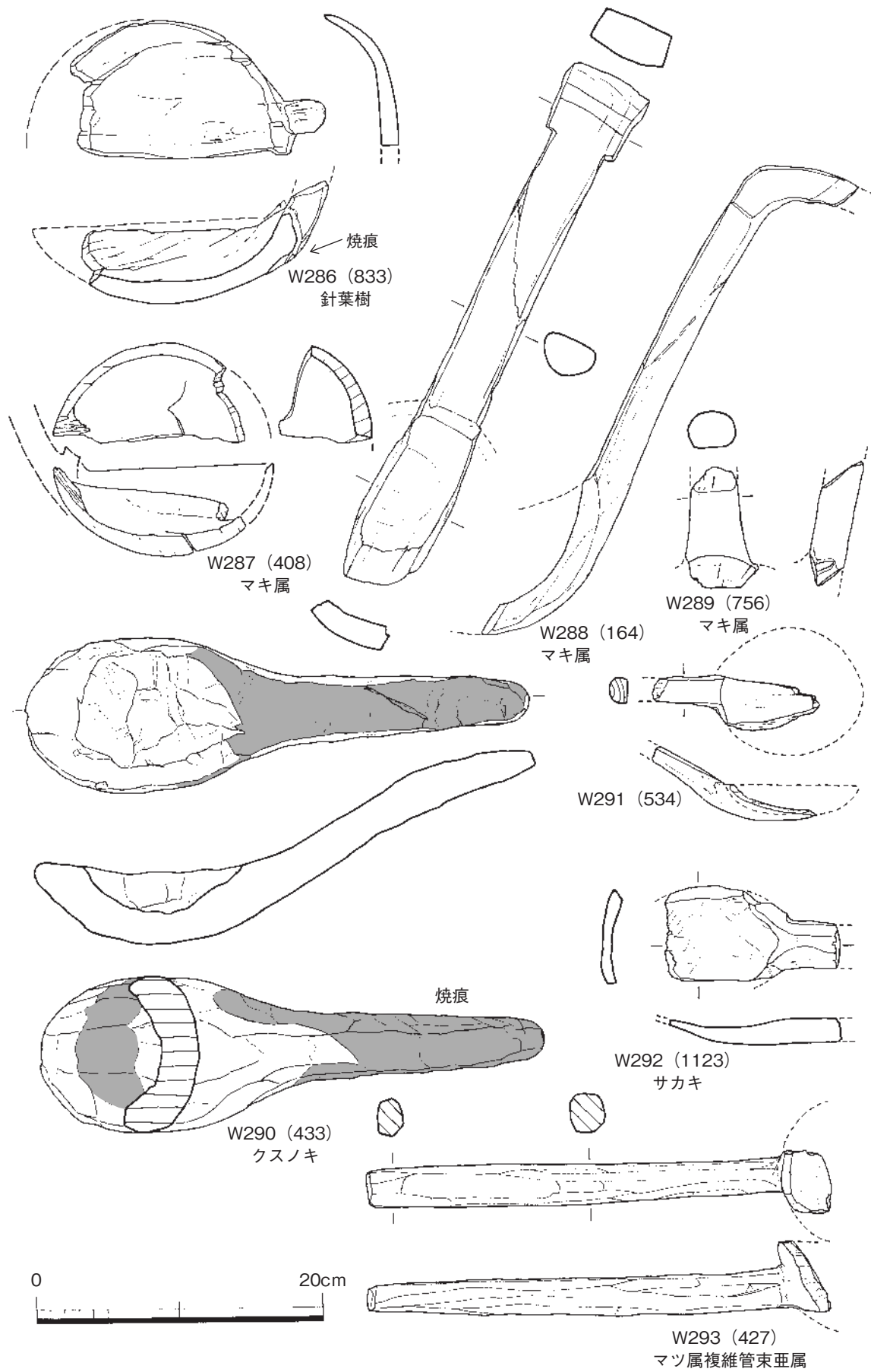


第71図 包含層出土木器43 食事具② (1/4)

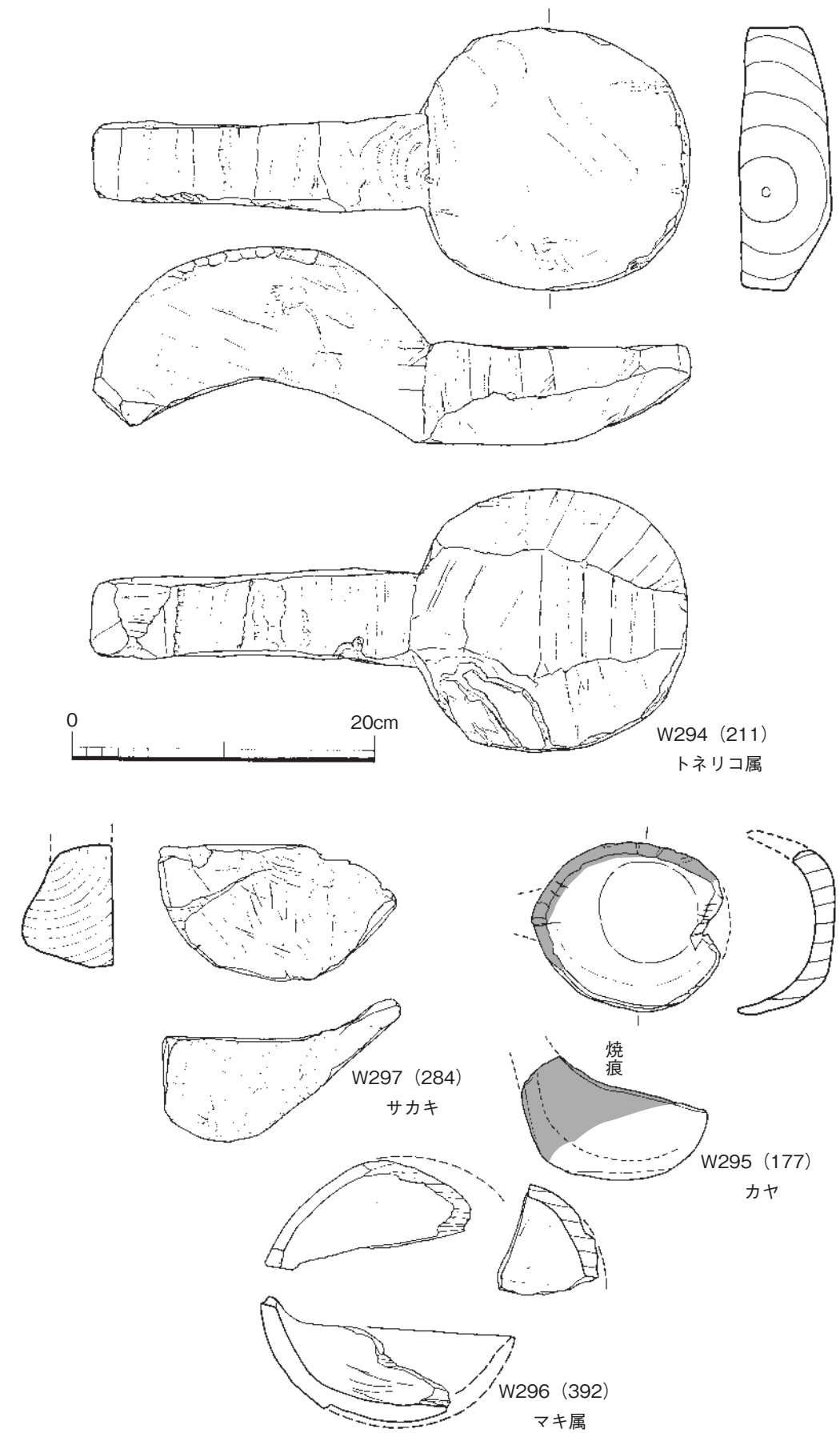


第72図 包含層出土木器44 食事具③ (1/4)

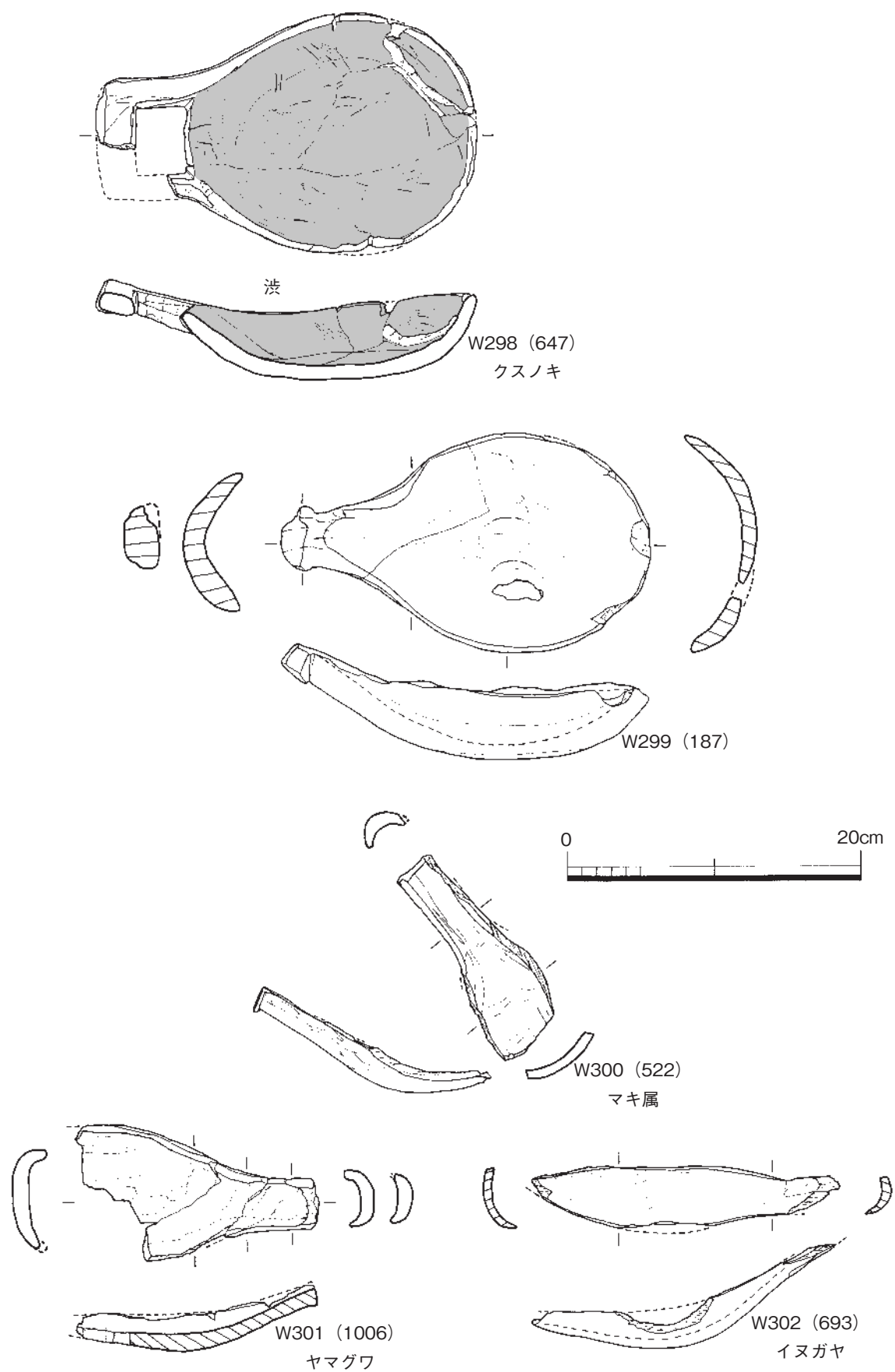




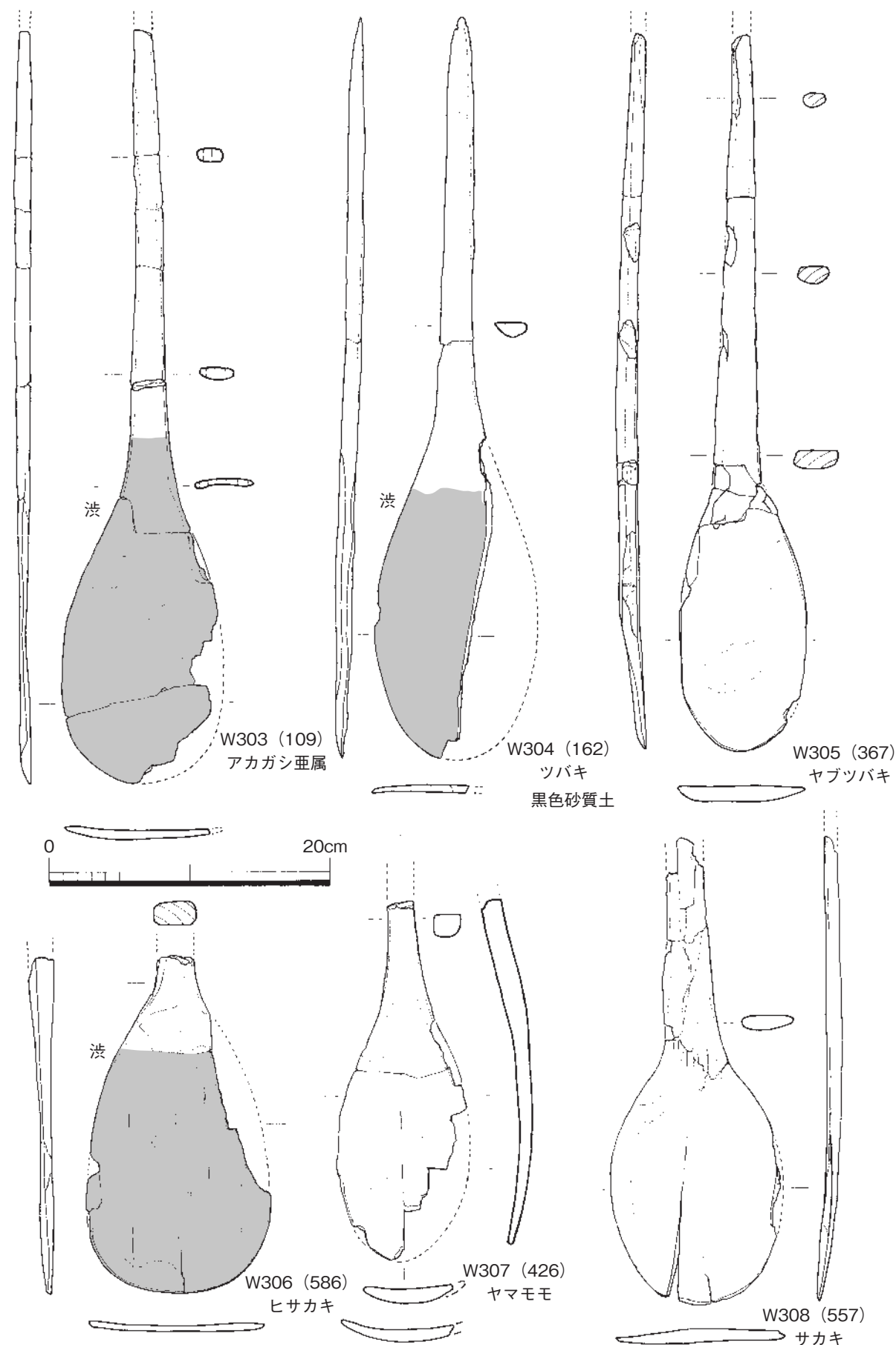
第73図 包含層出土木器45 食事具④ (1/4)



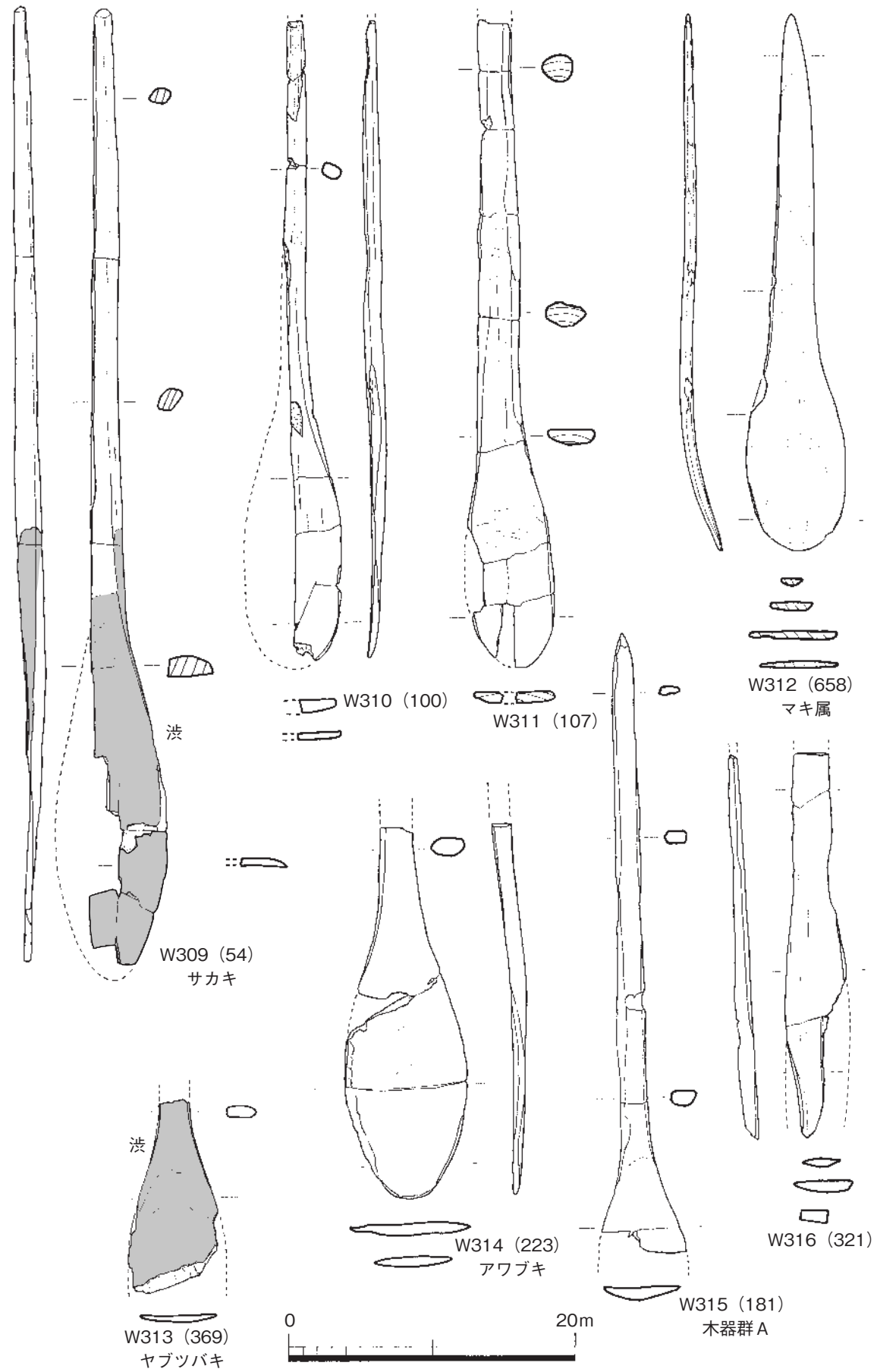
第74図 包含層出土木器46 食事具⑤ (1/4)



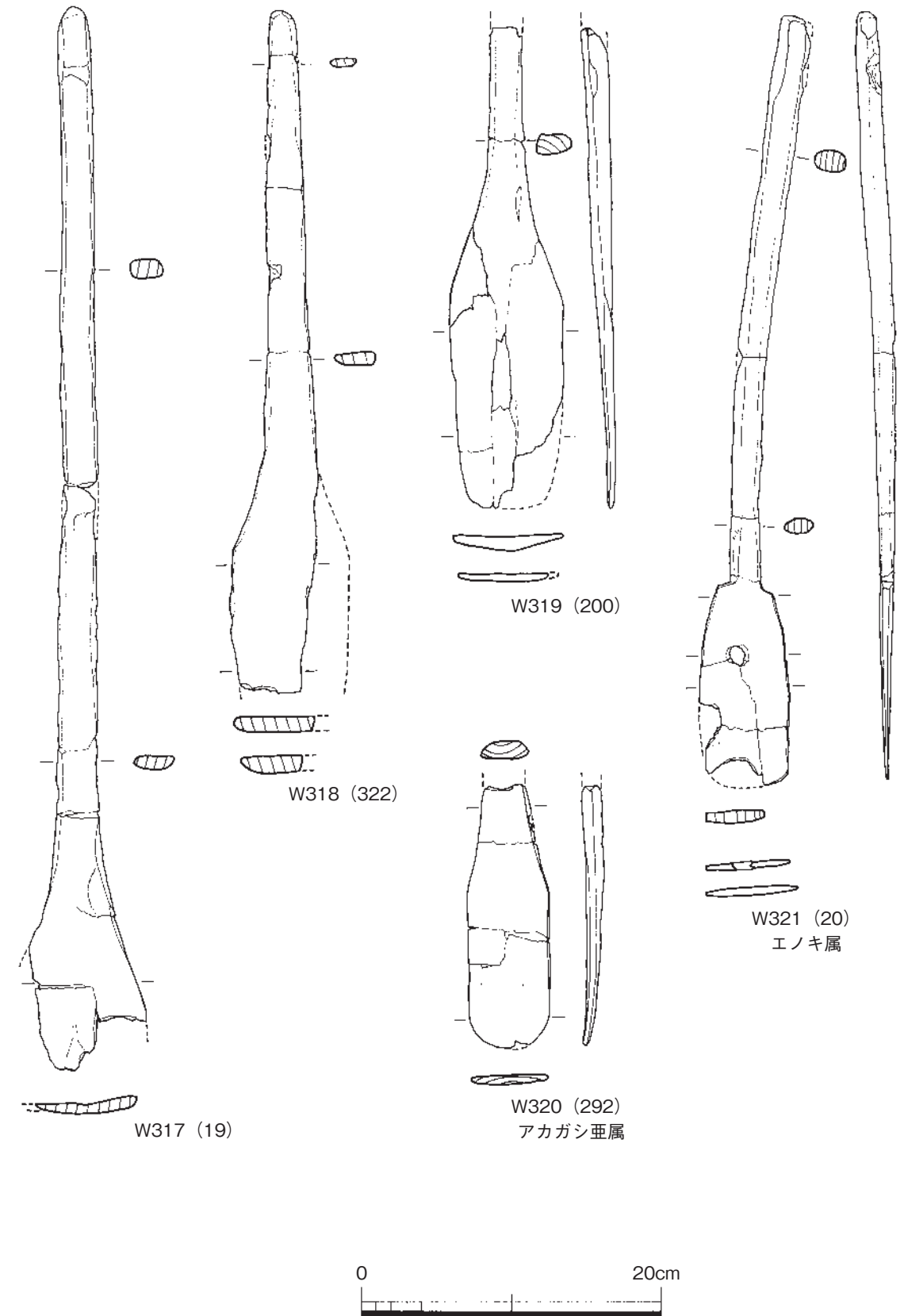
第75図 包含層出土木器47 食事具⑥ (1/4)



第76図 包含層出土木器48 食事具⑦ (1/4)

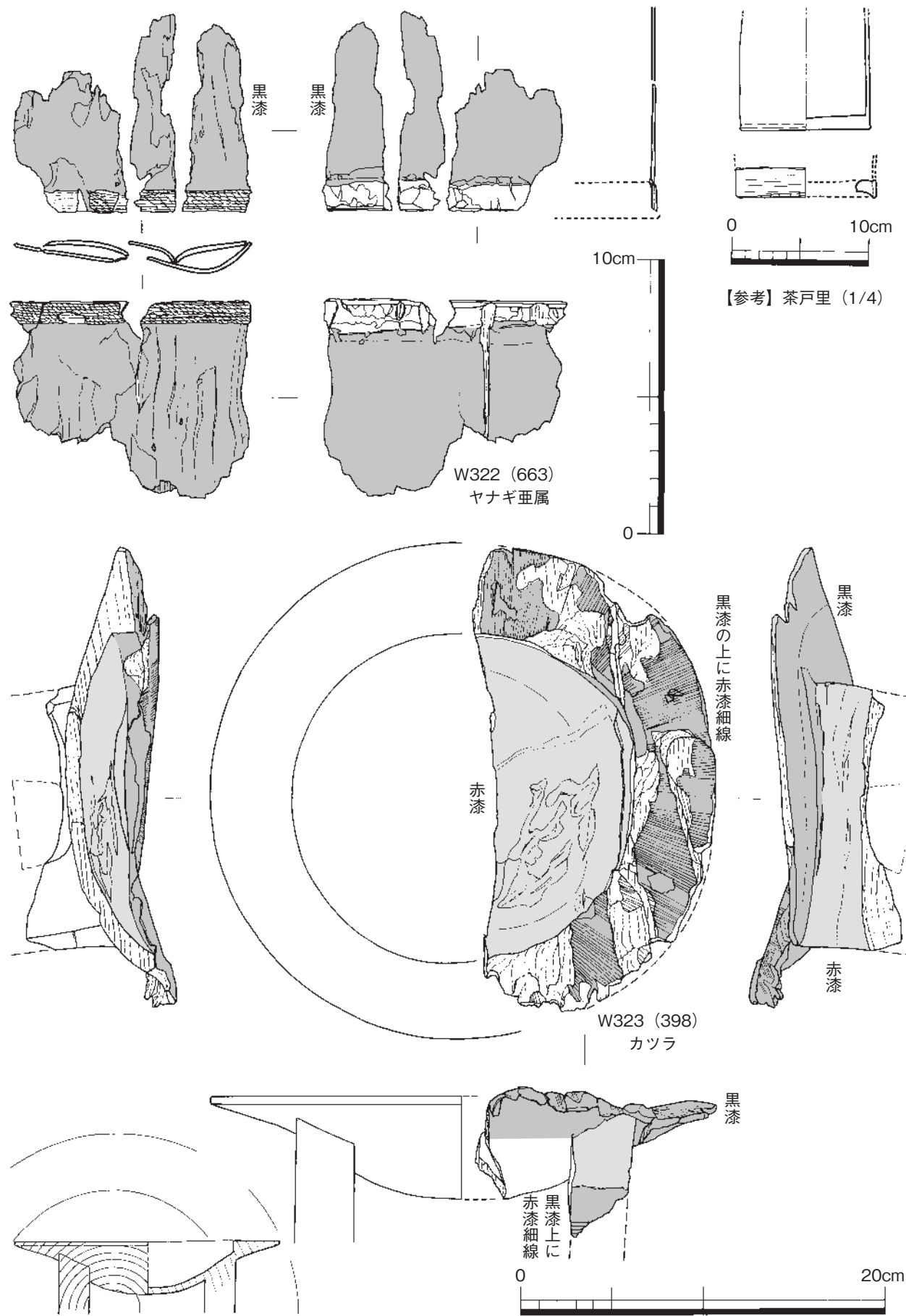


第77図 包含層出土木器49 食事具⑧ (1/4)

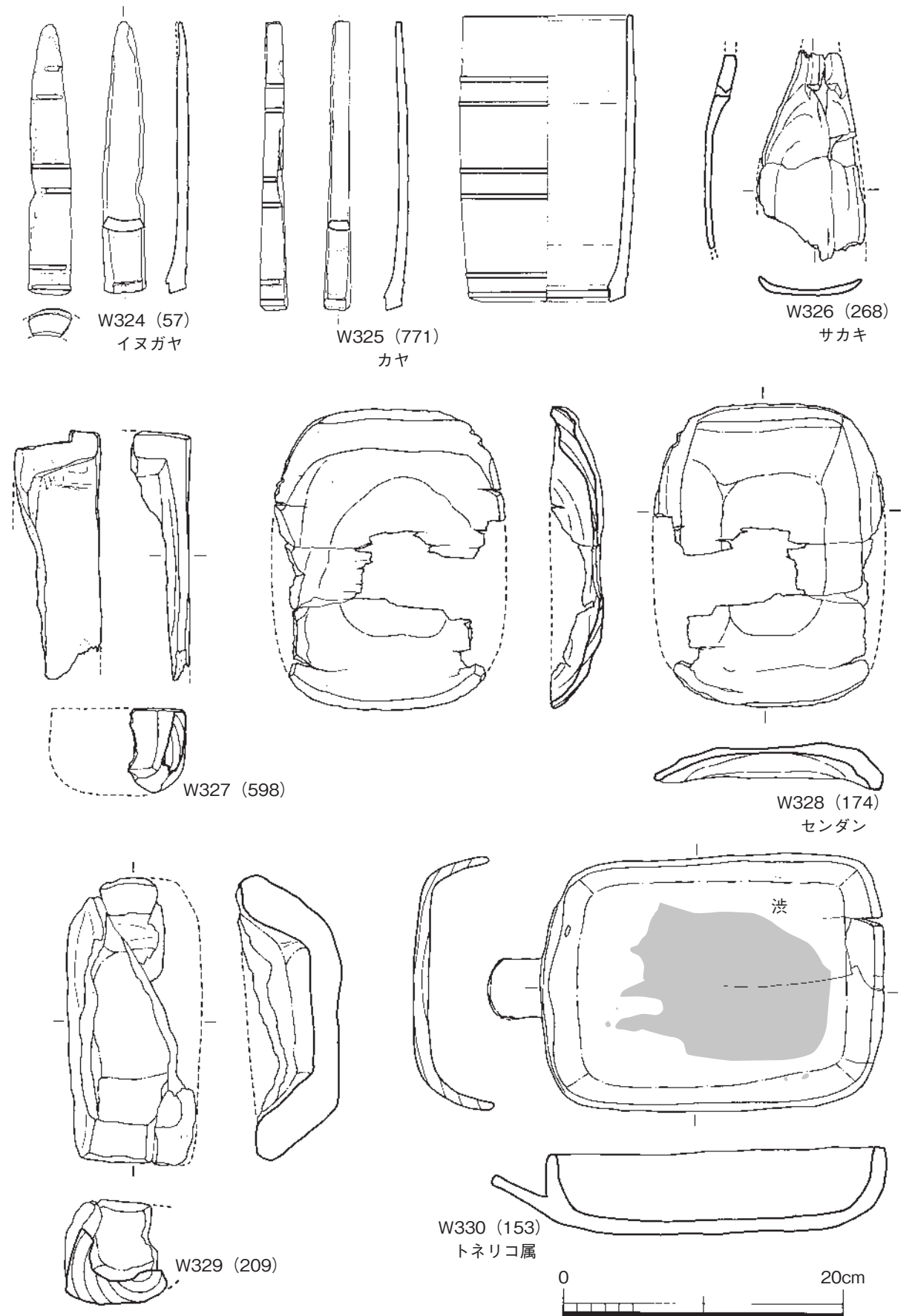


第78図 包含層出土木器50 食事具⑨ (1/4)

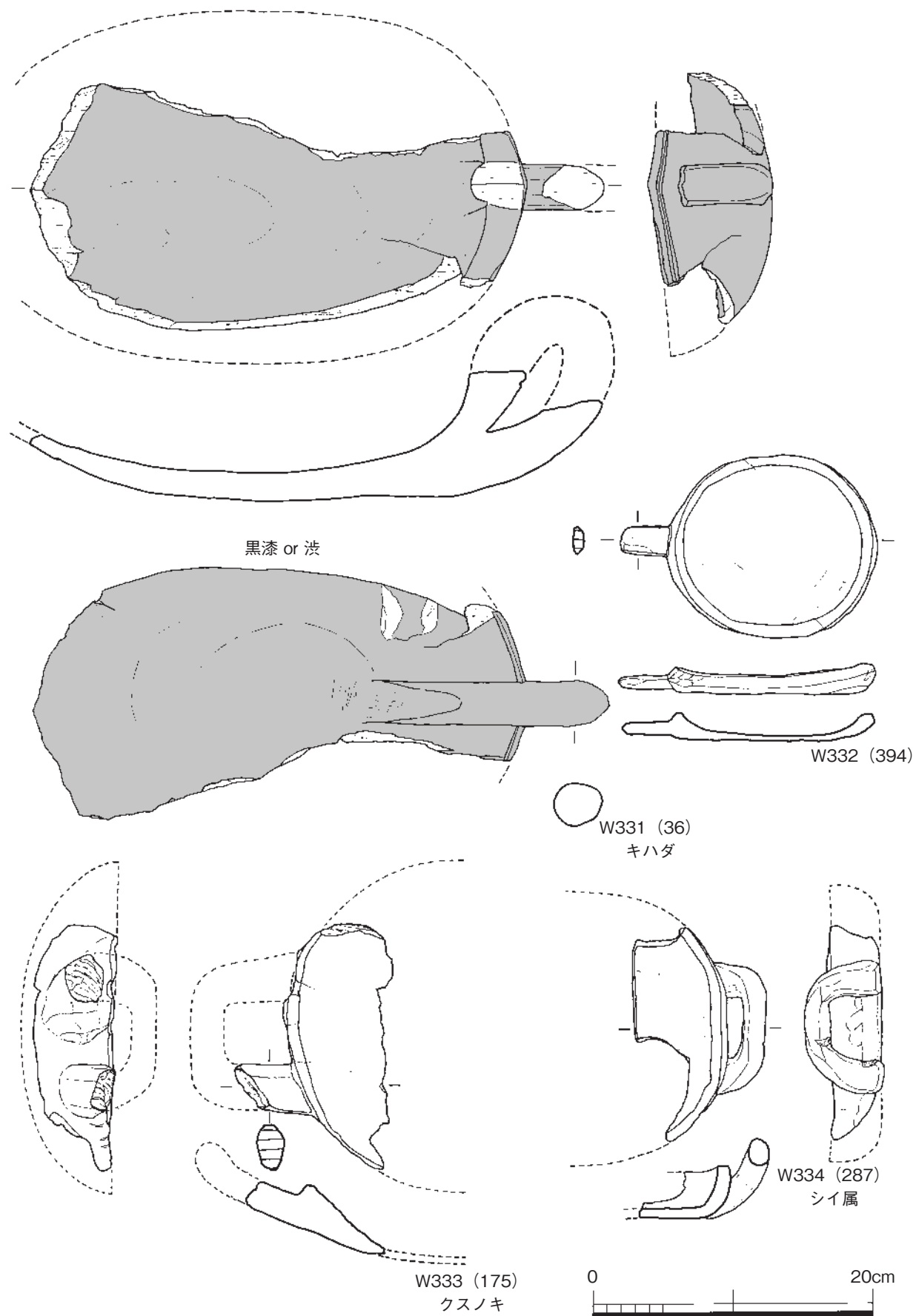




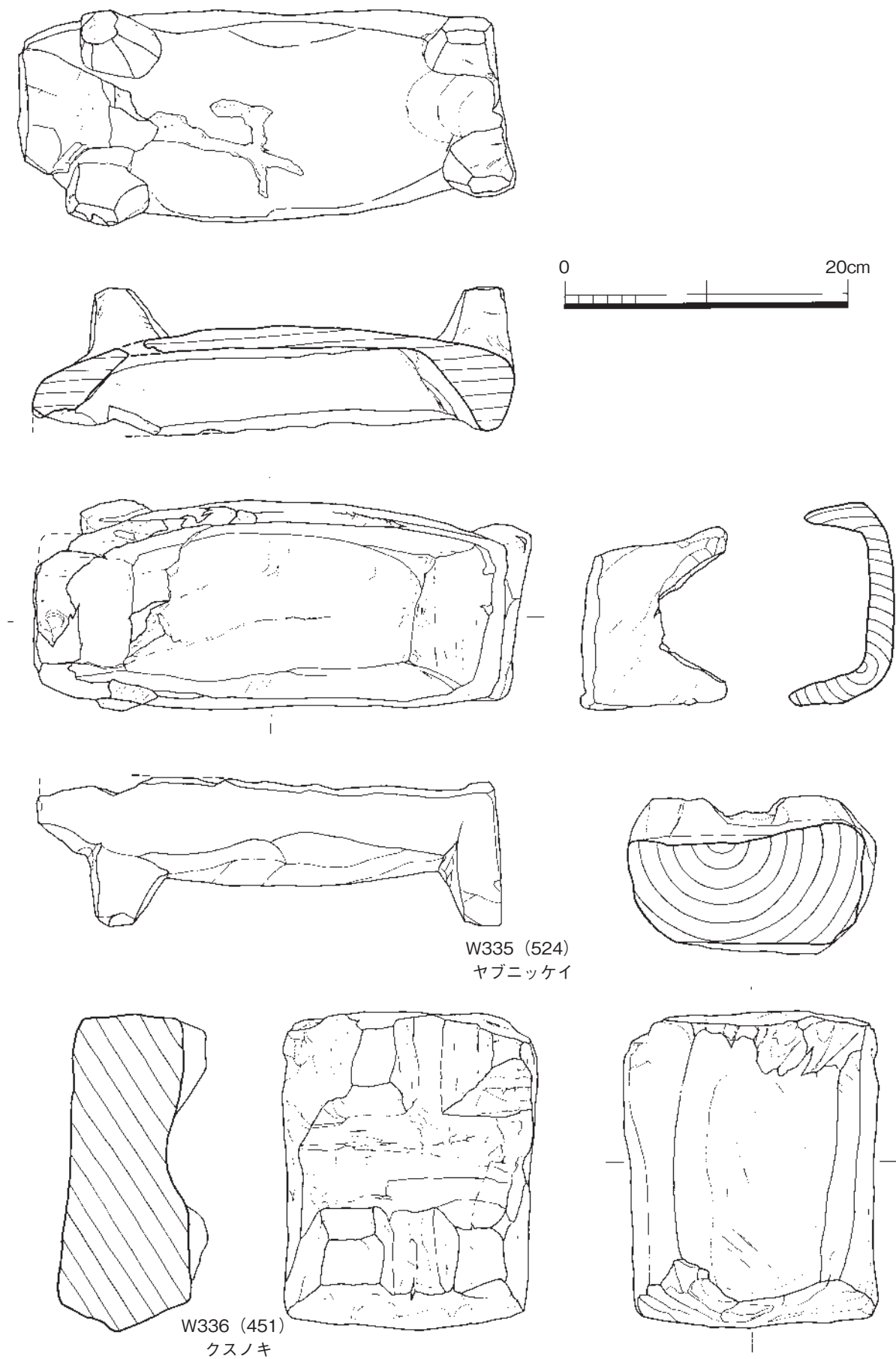
第79図 包含層出土木器51 容器① (1/2, 1/3)



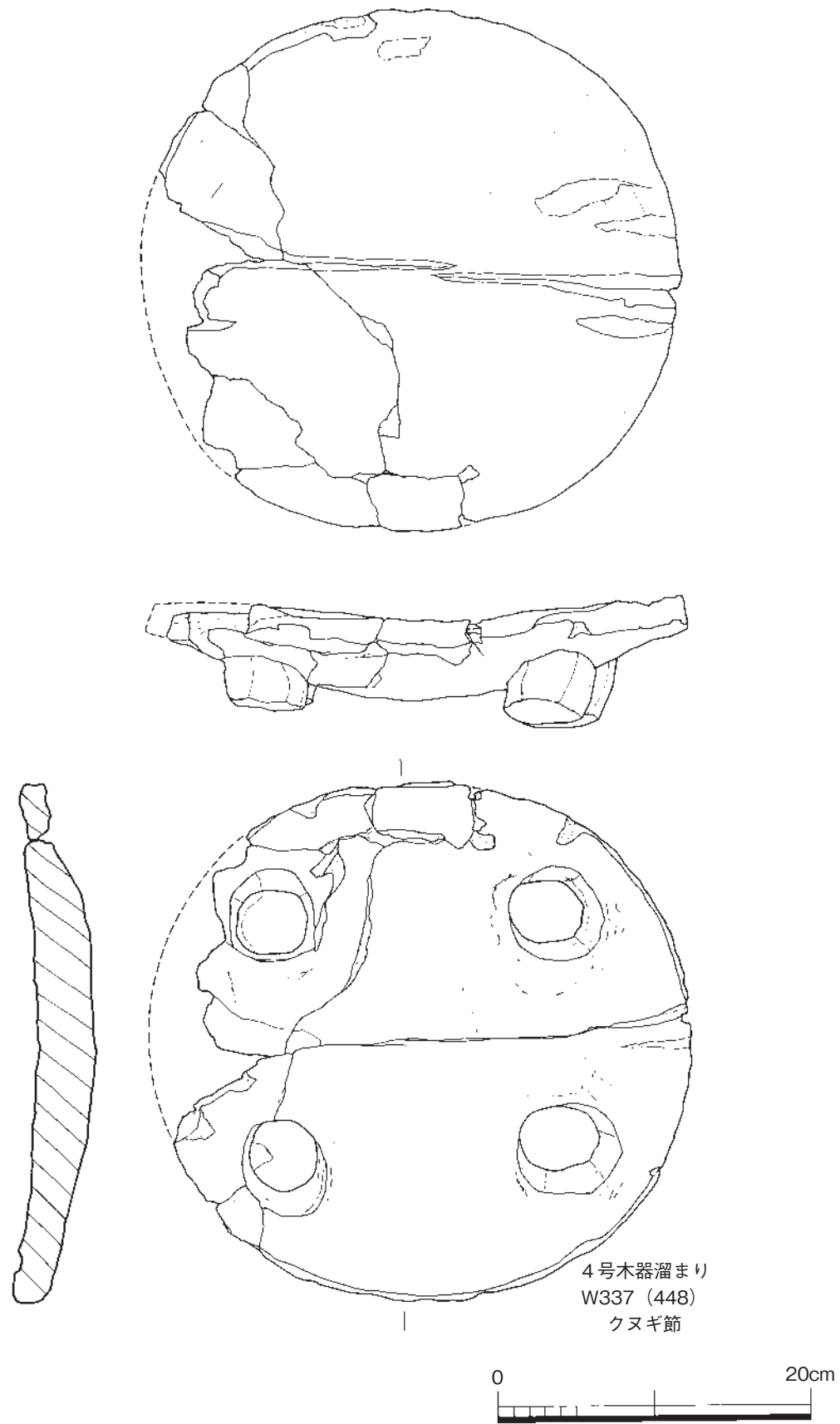
第80図 包含層出土木器52 容器② (1/4)



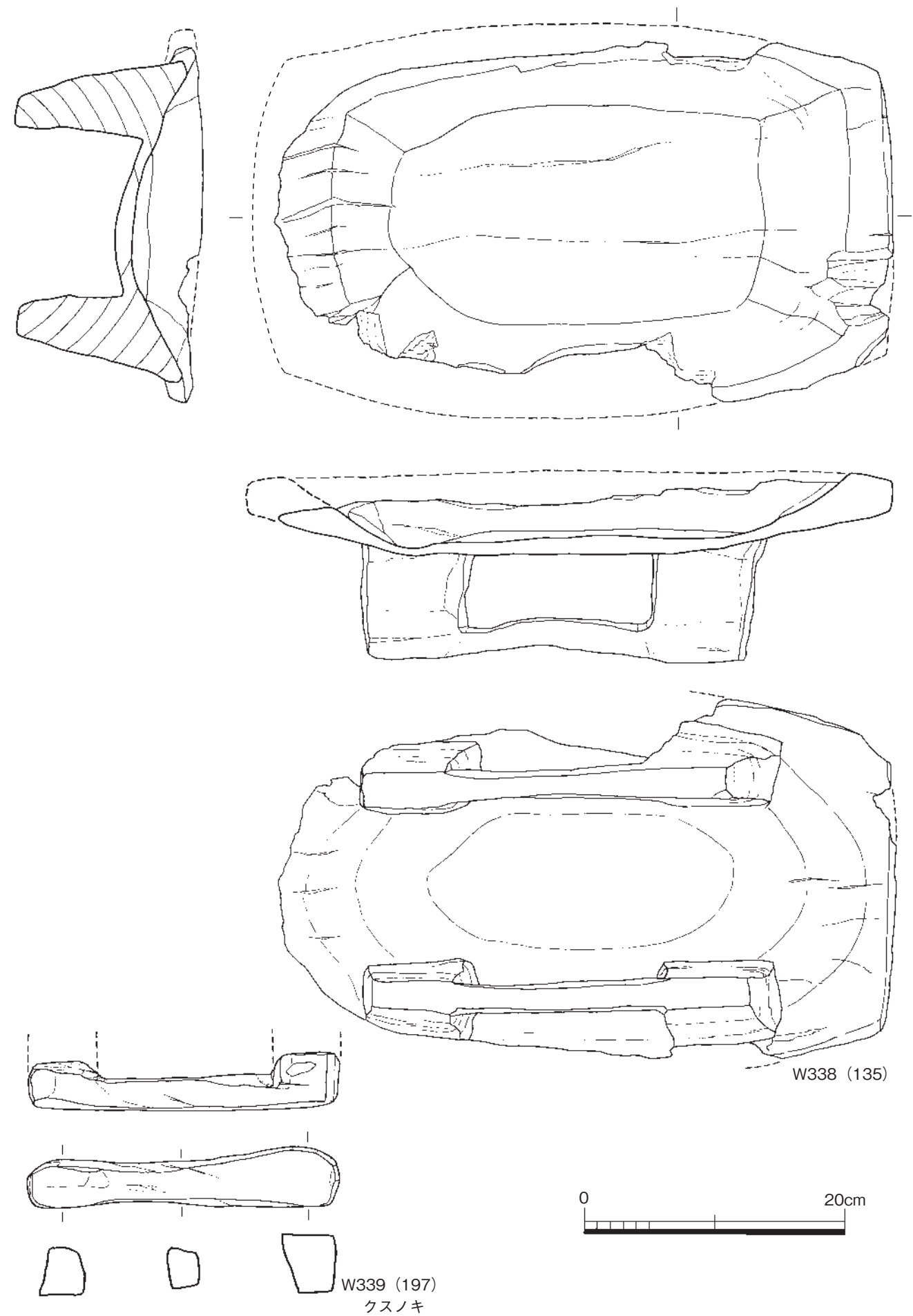
第81図 包含層出土木器53 容器③ (1/4)



第82図 包含層出土木器54 容器④ (1/4)

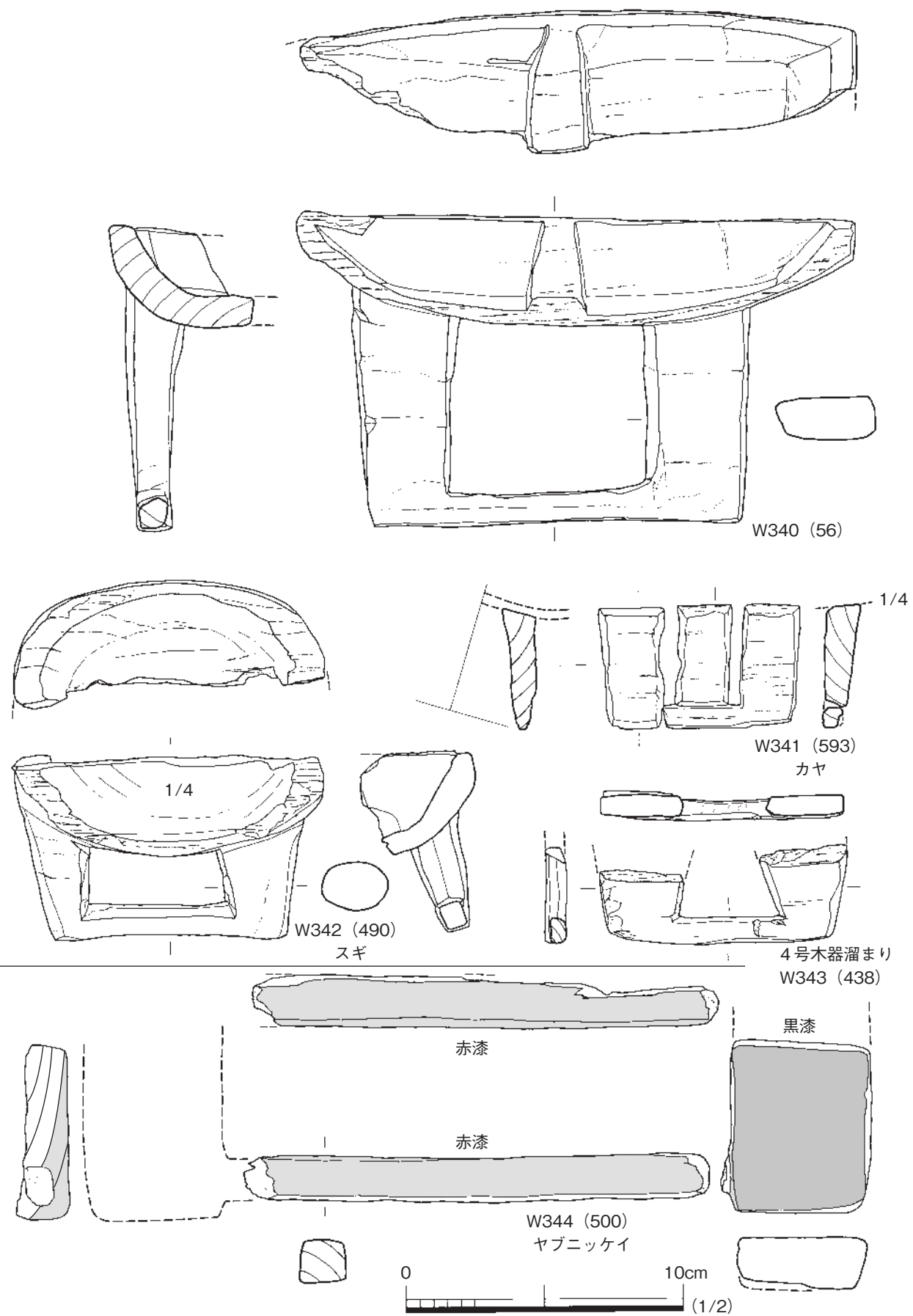


第83図 包含層出土木器55 容器⑤ (1/4)

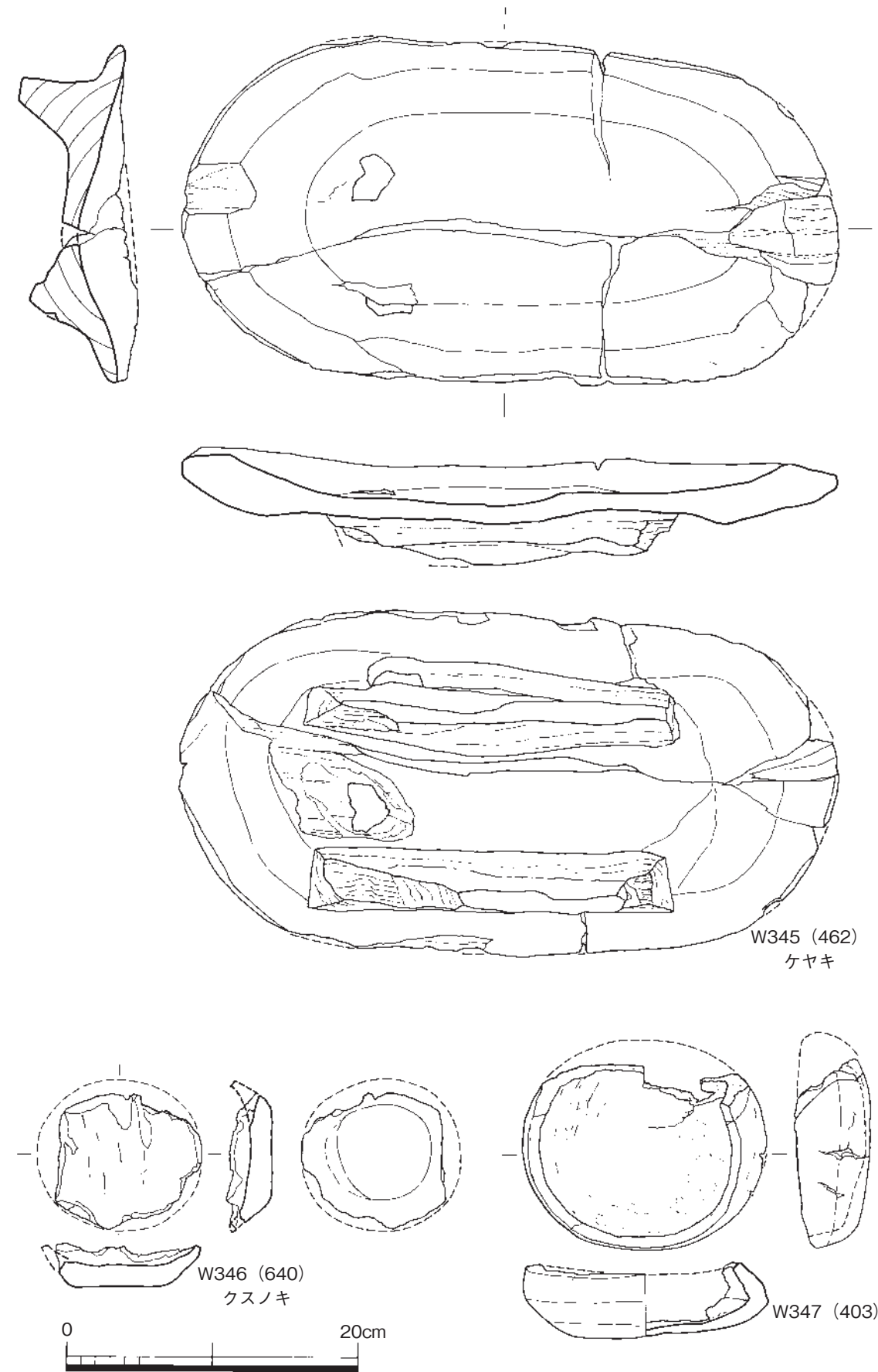


第84図 包含層出土木器56 容器⑥ (1/4)

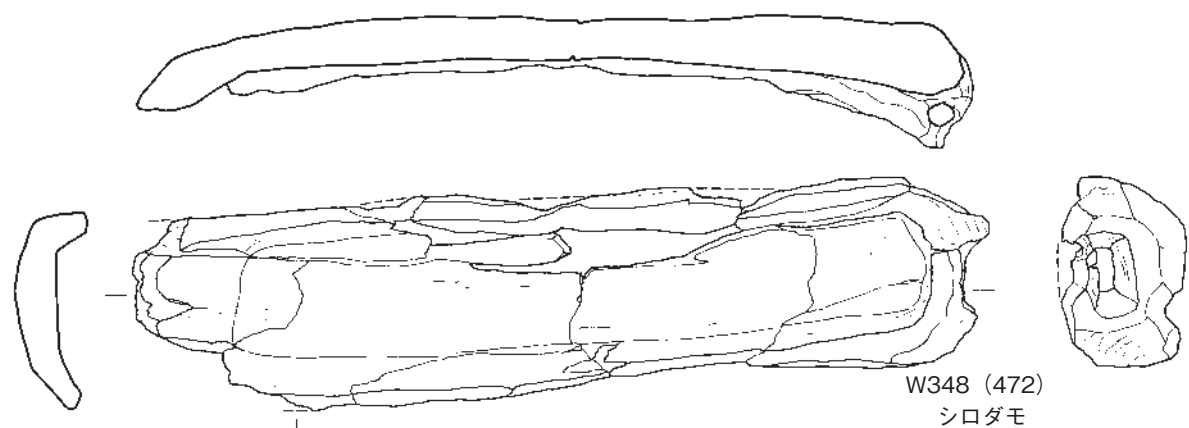




第85図 包含層出土木器57 容器⑦ (1/4, 1/2)

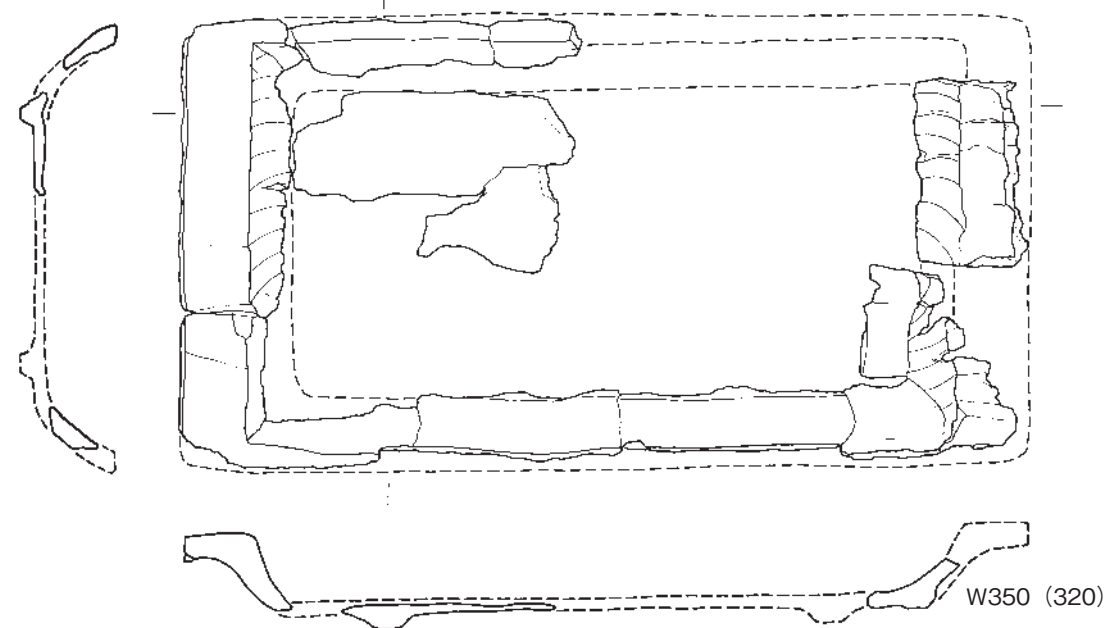


第86図 包含層出土木器58 容器⑧ (1/4)



W348 (472)  
シロダモ

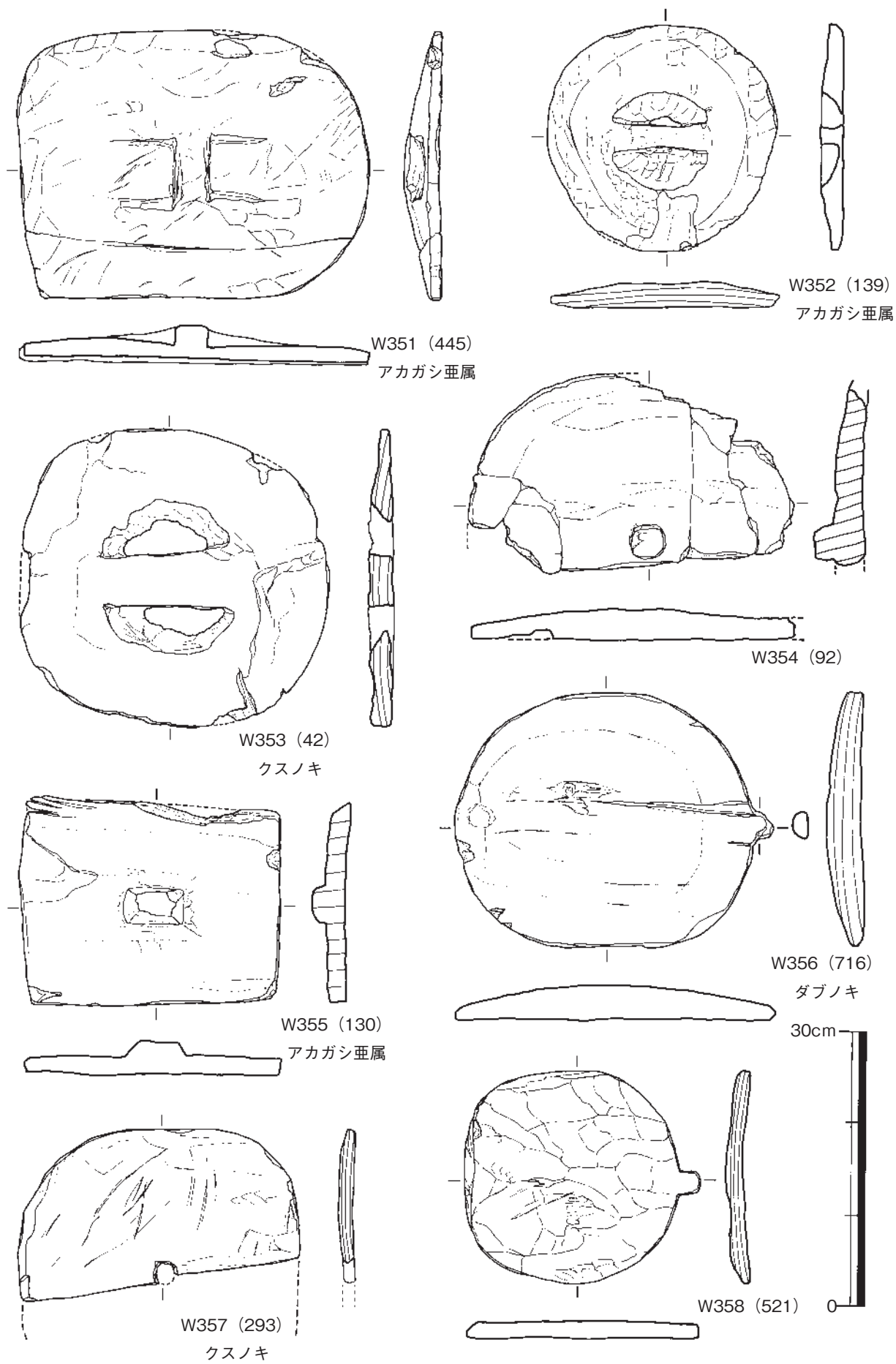
W349 (17)



W350 (320)



第87図 包含層出土木器59 容器⑨ (1/6)



W351 (445)  
アカガシ亜属

W352 (139)  
アカガシ亜属

W353 (42)  
クスノキ

W354 (92)

W355 (130)  
アカガシ亜属

W356 (716)  
ダブノキ

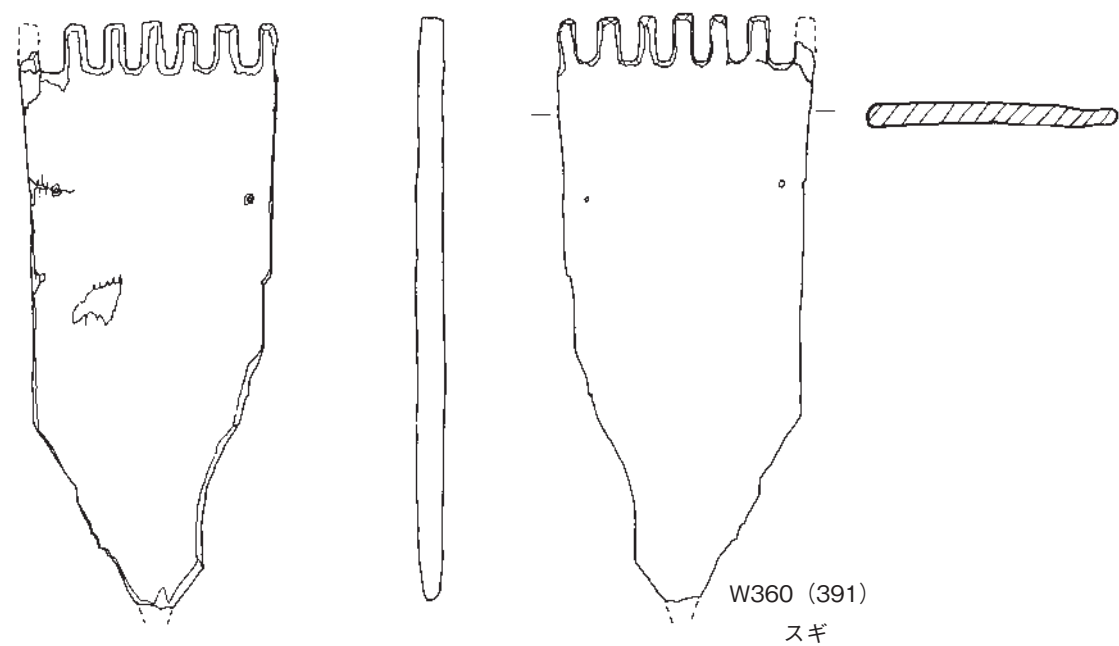
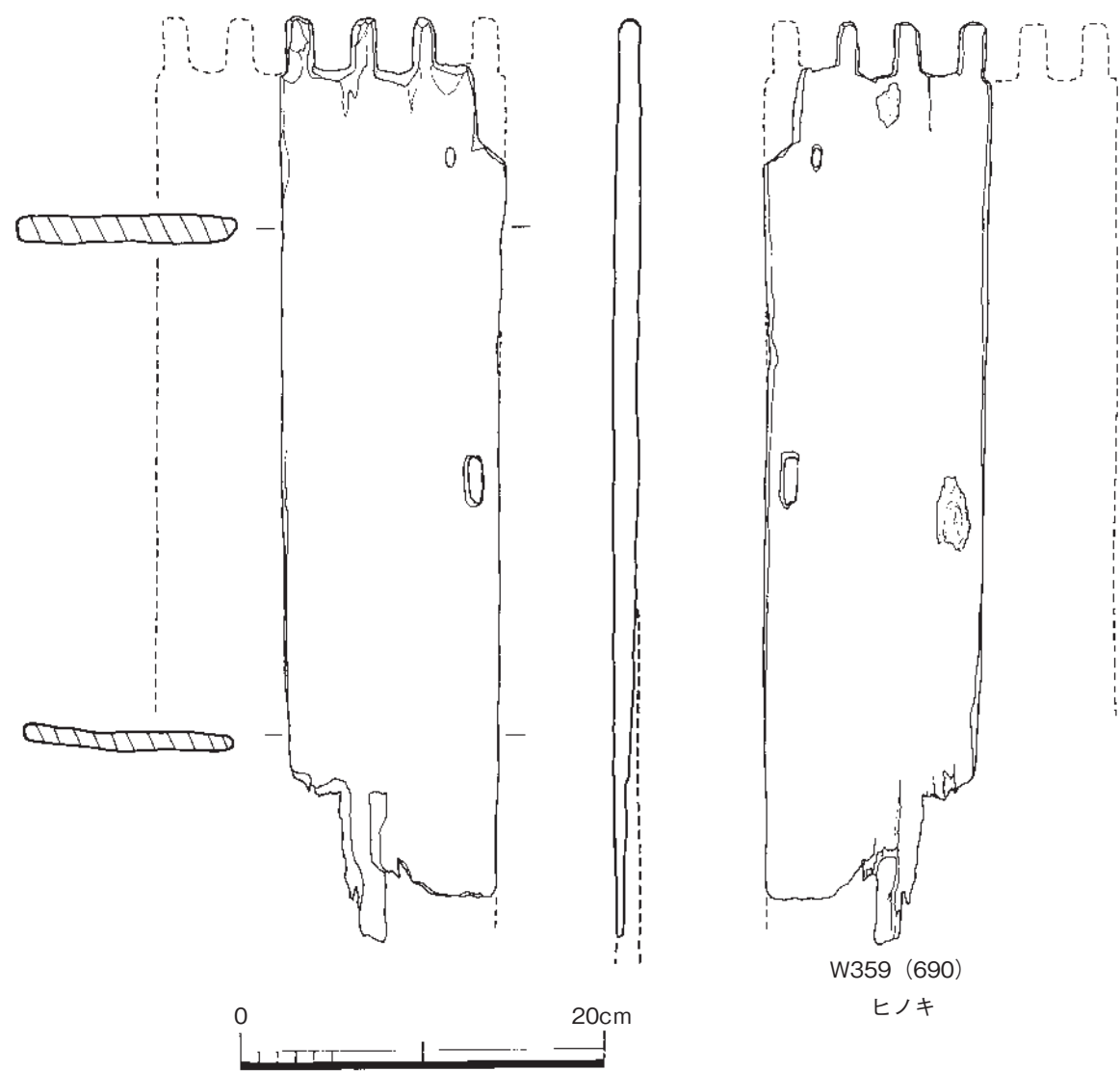
W357 (293)  
クスノキ

W358 (521)

30cm

0

第88図 包含層出土木器60 容器⑩ (1/6)



第89図 包含層出土木器61 楽器① (1/4)

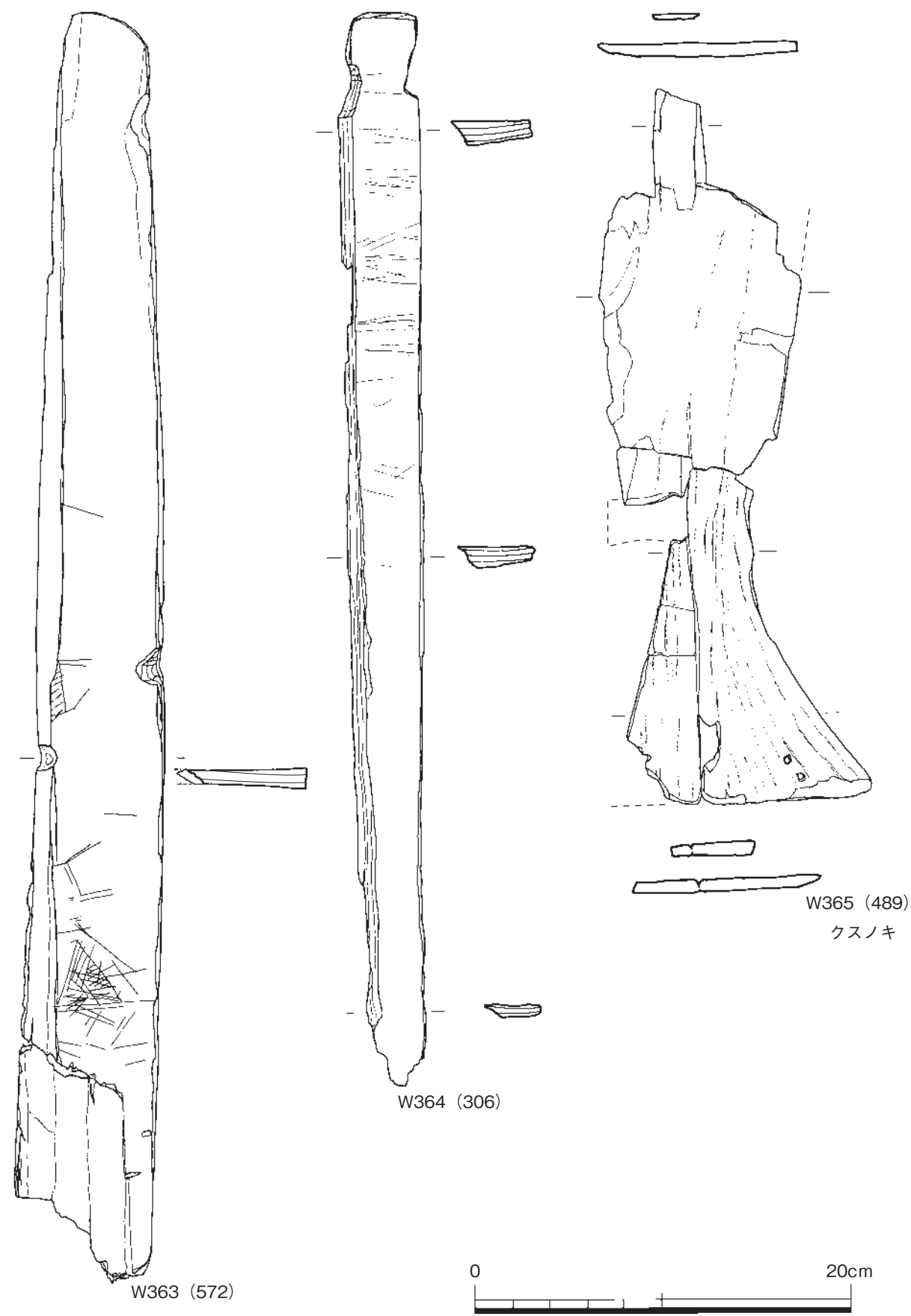


第90図 包含層出土木器62 楽器② (1/2)

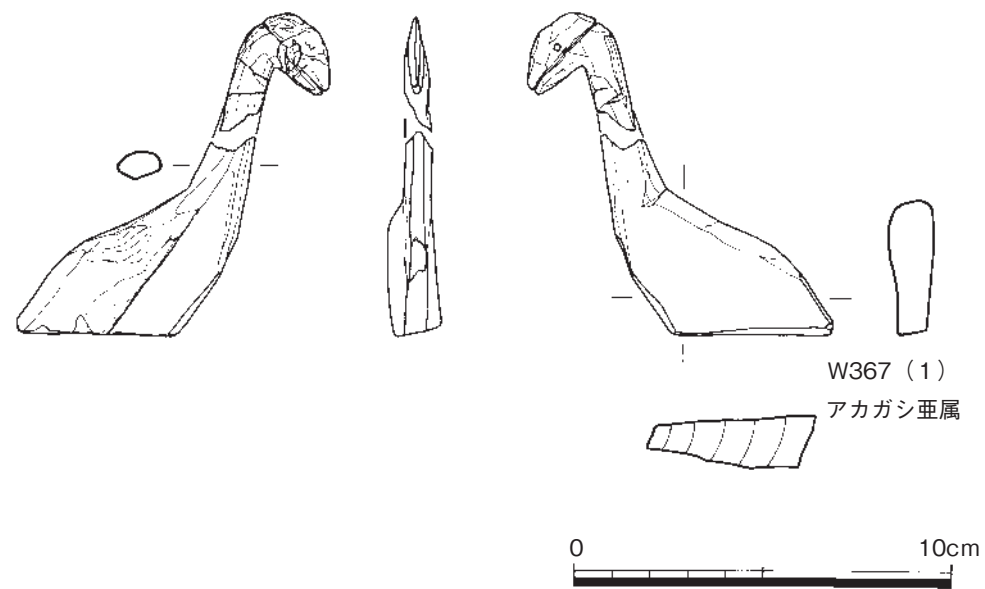
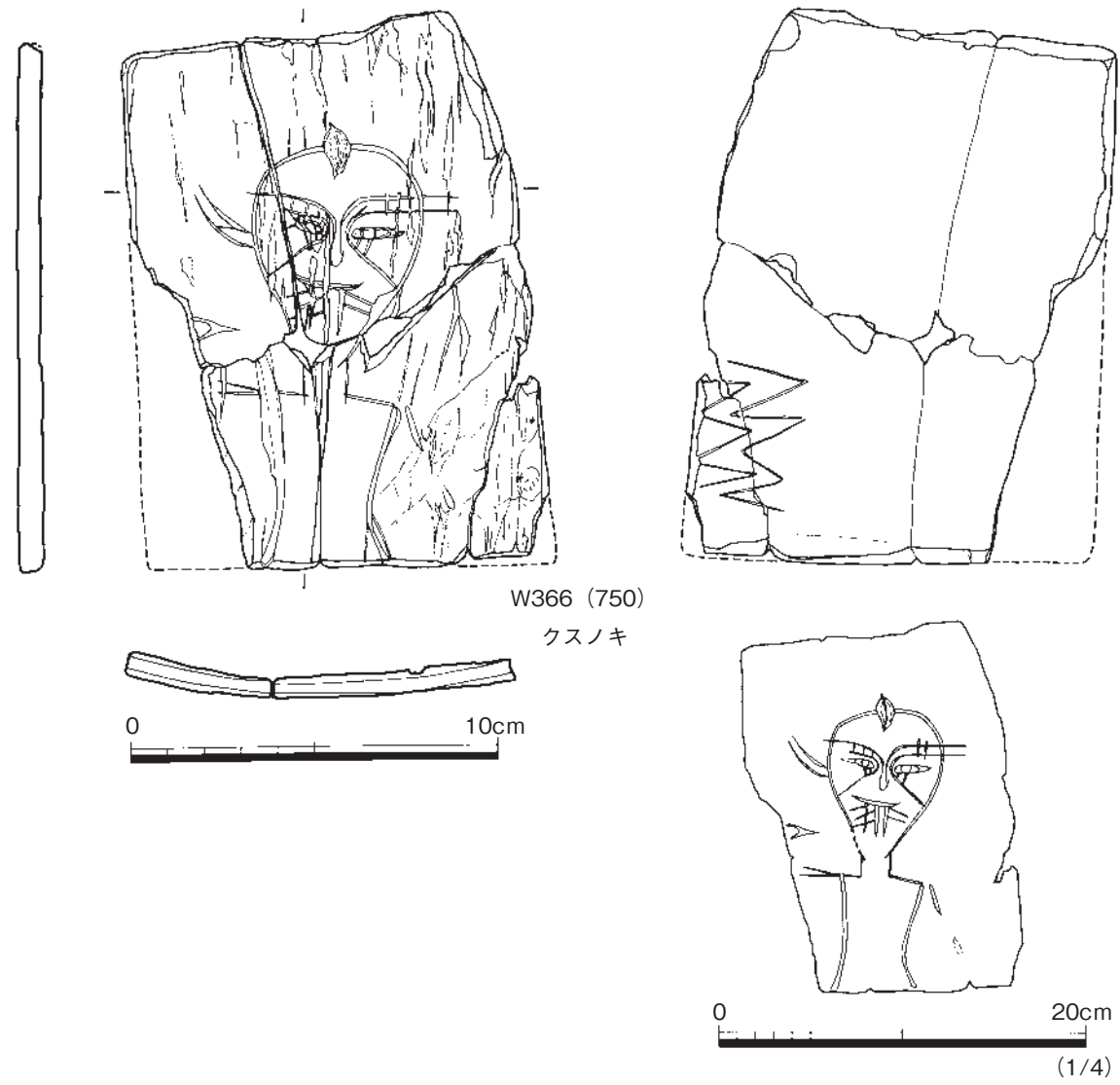




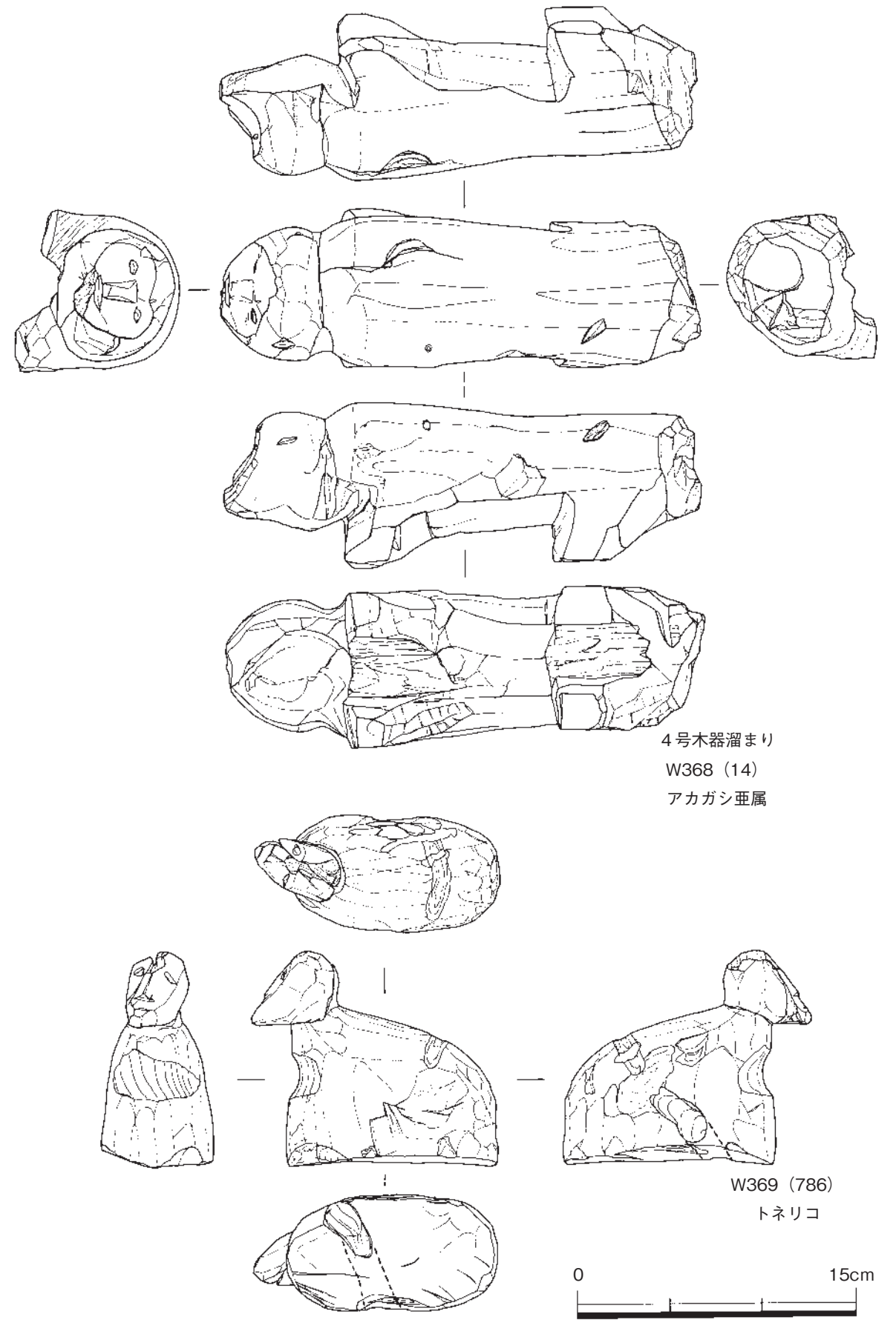
第91図 包含層出土木器63 楽器③ (1/2)



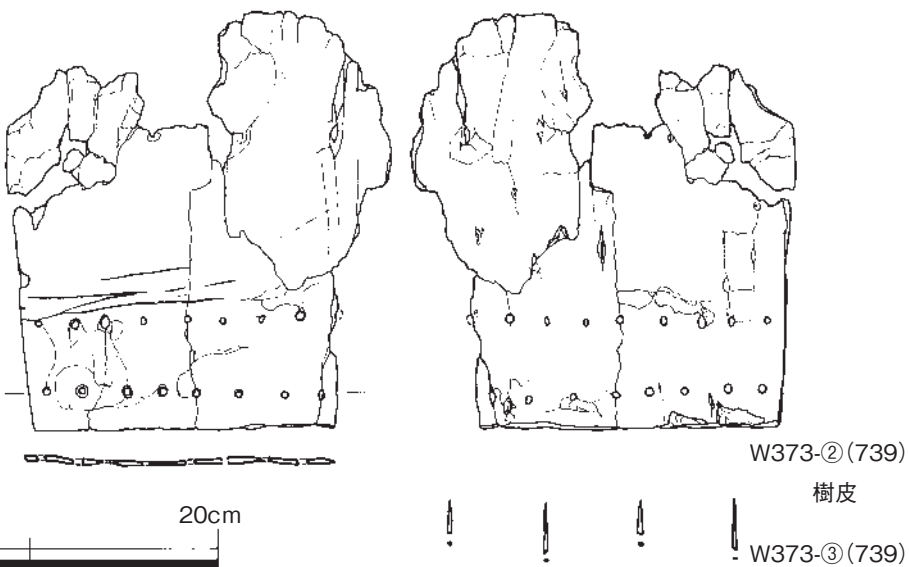
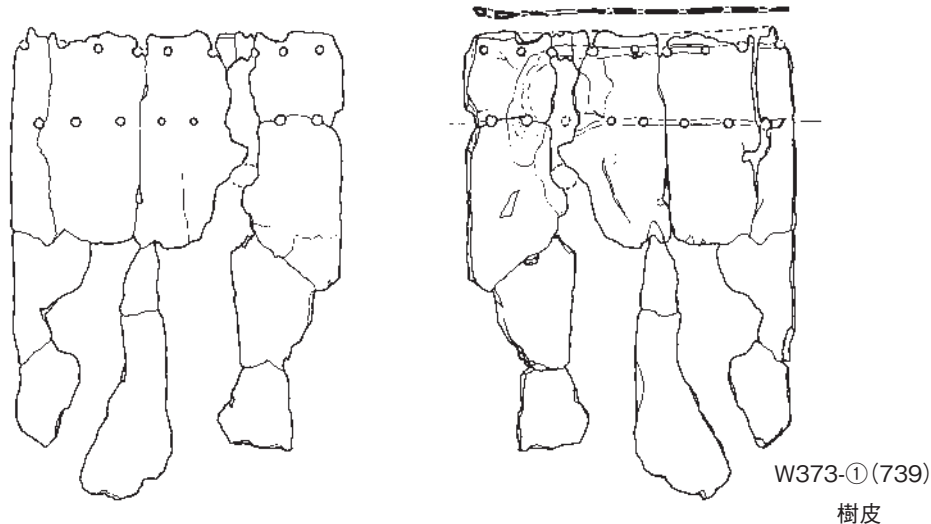
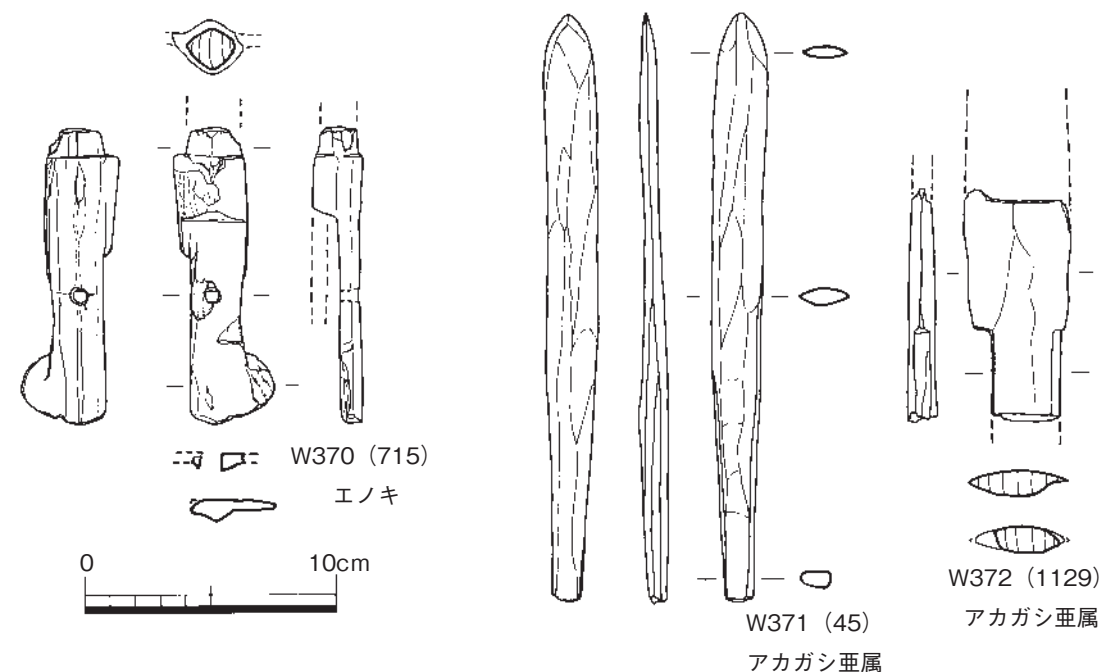
第92図 包含層出土木器64 楽器④ (1/3)



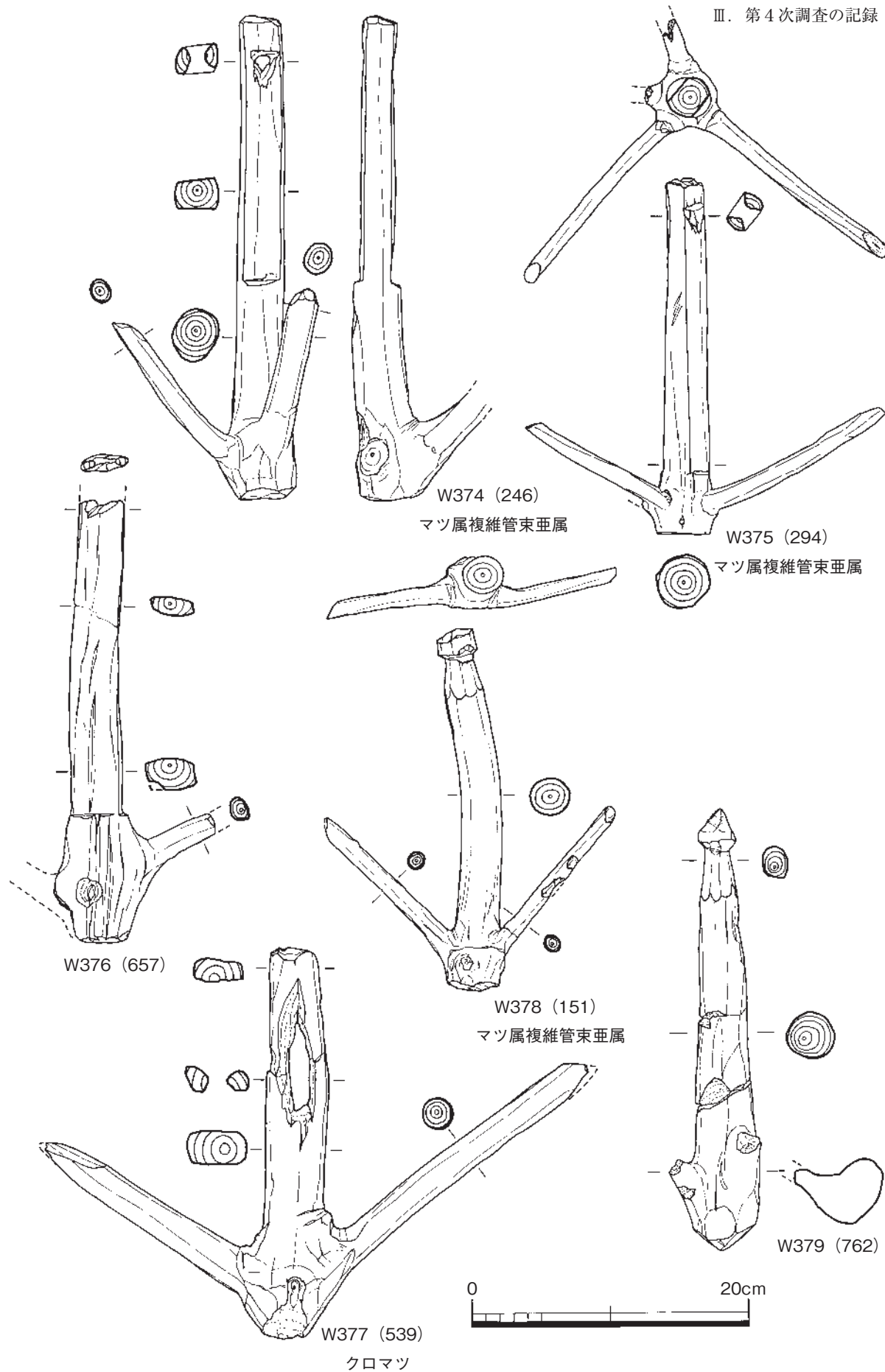
第93図 包含層出土木器65 祭祀具① (1/2)



第94図 包含層出土木器66 祭祀具② (1/3)

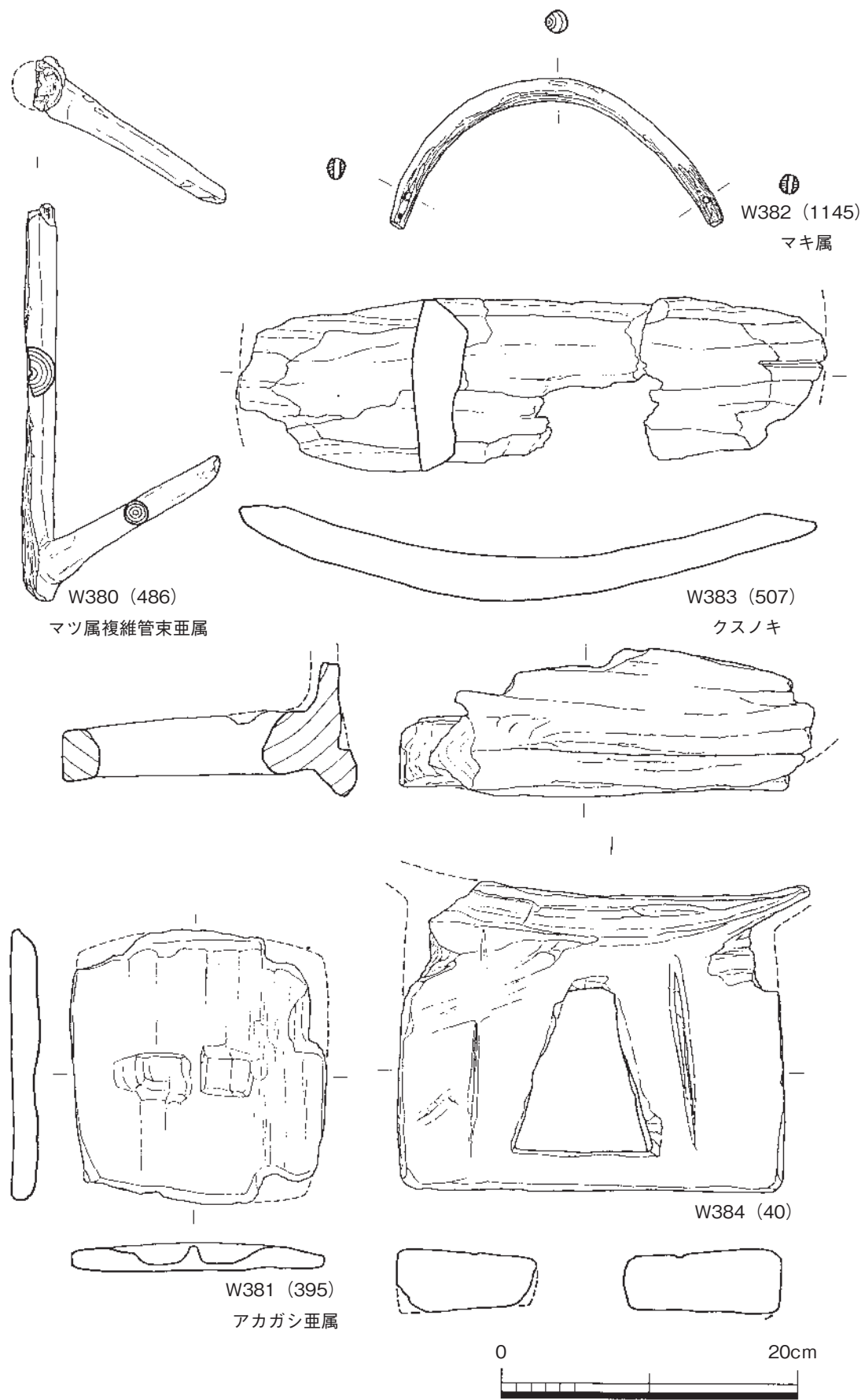


第95図 包含層出土木器67 祭祀具③ (1/3, 1/4)

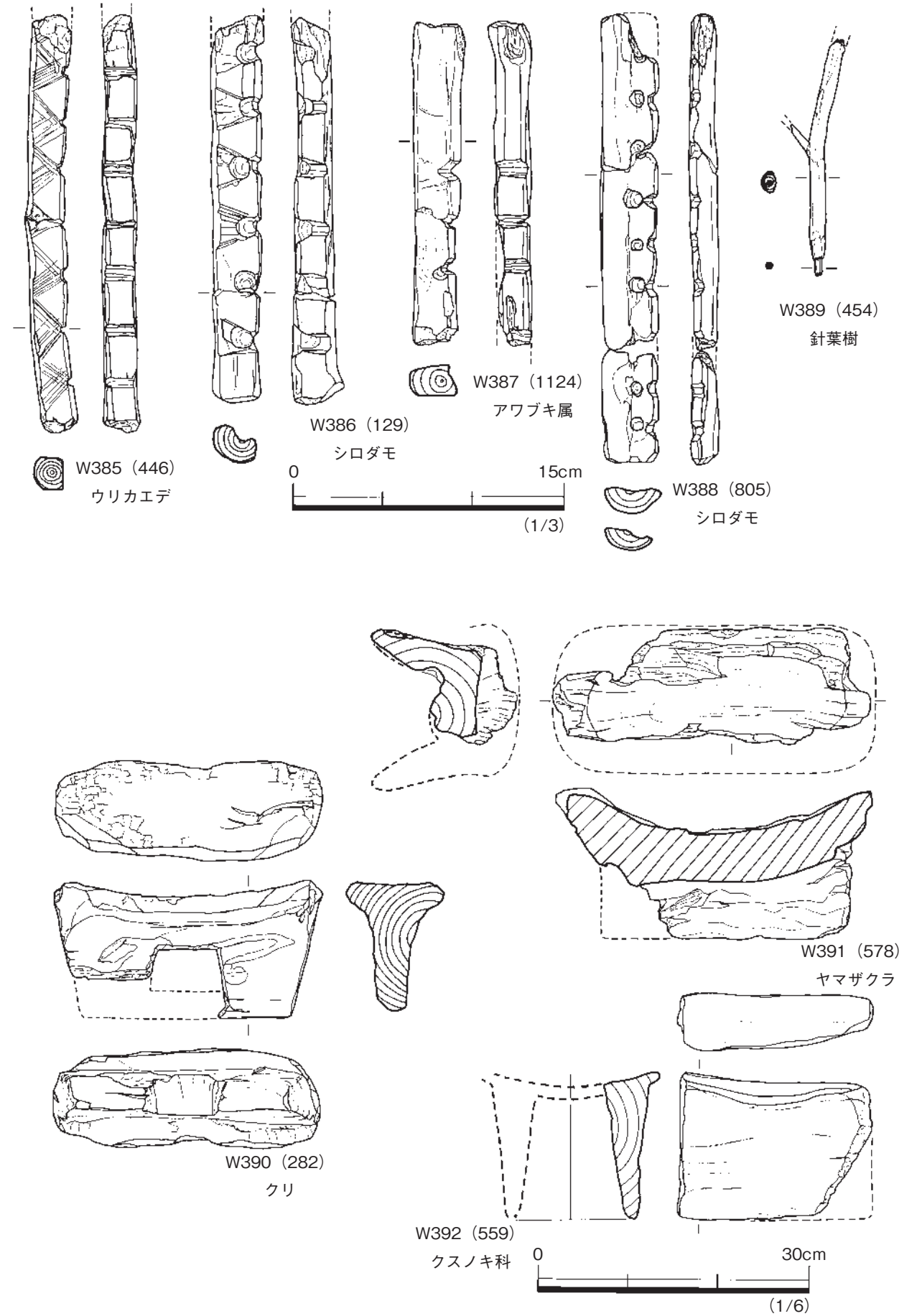


第96図 包含層出土木器68 雑具② (1/4)

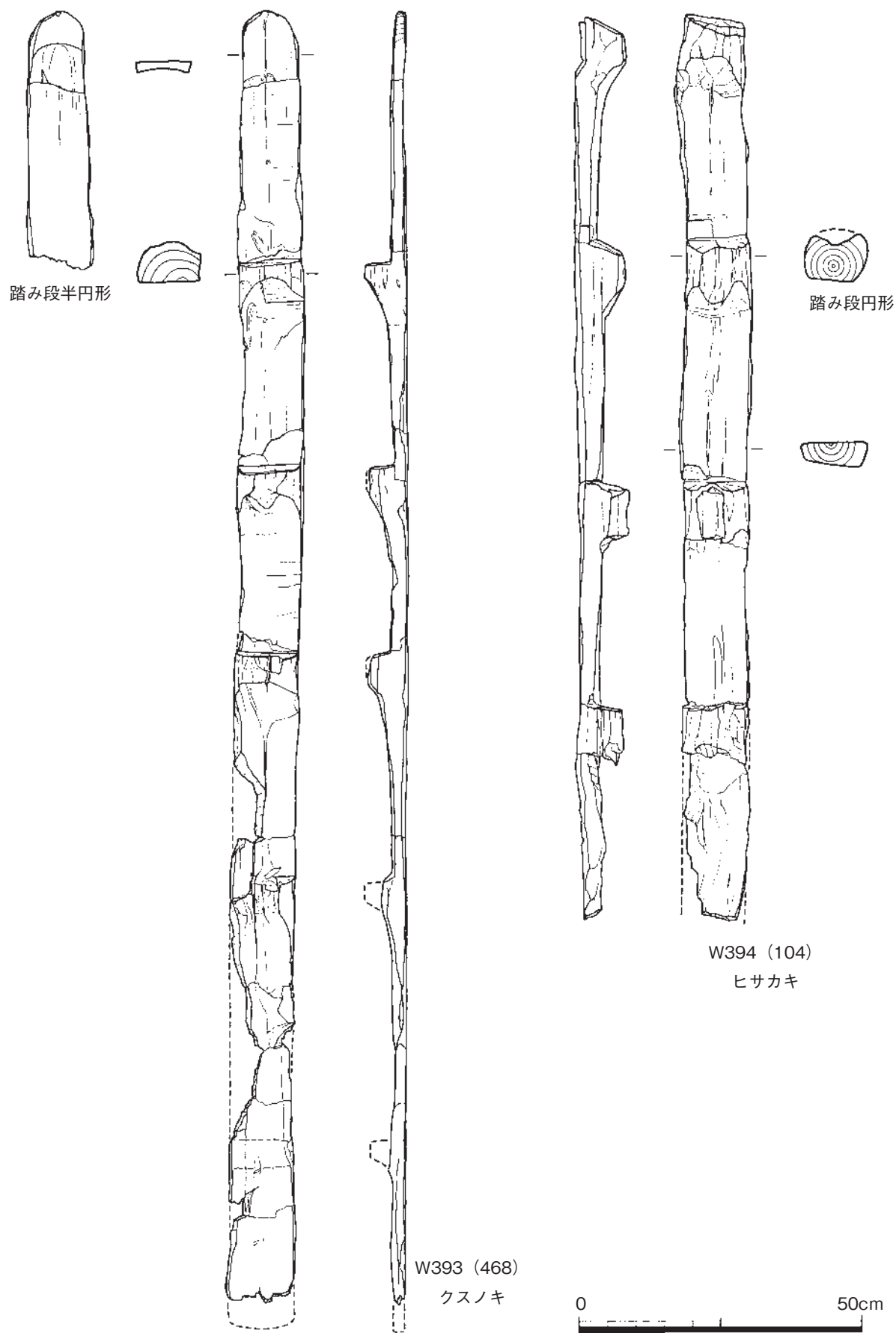




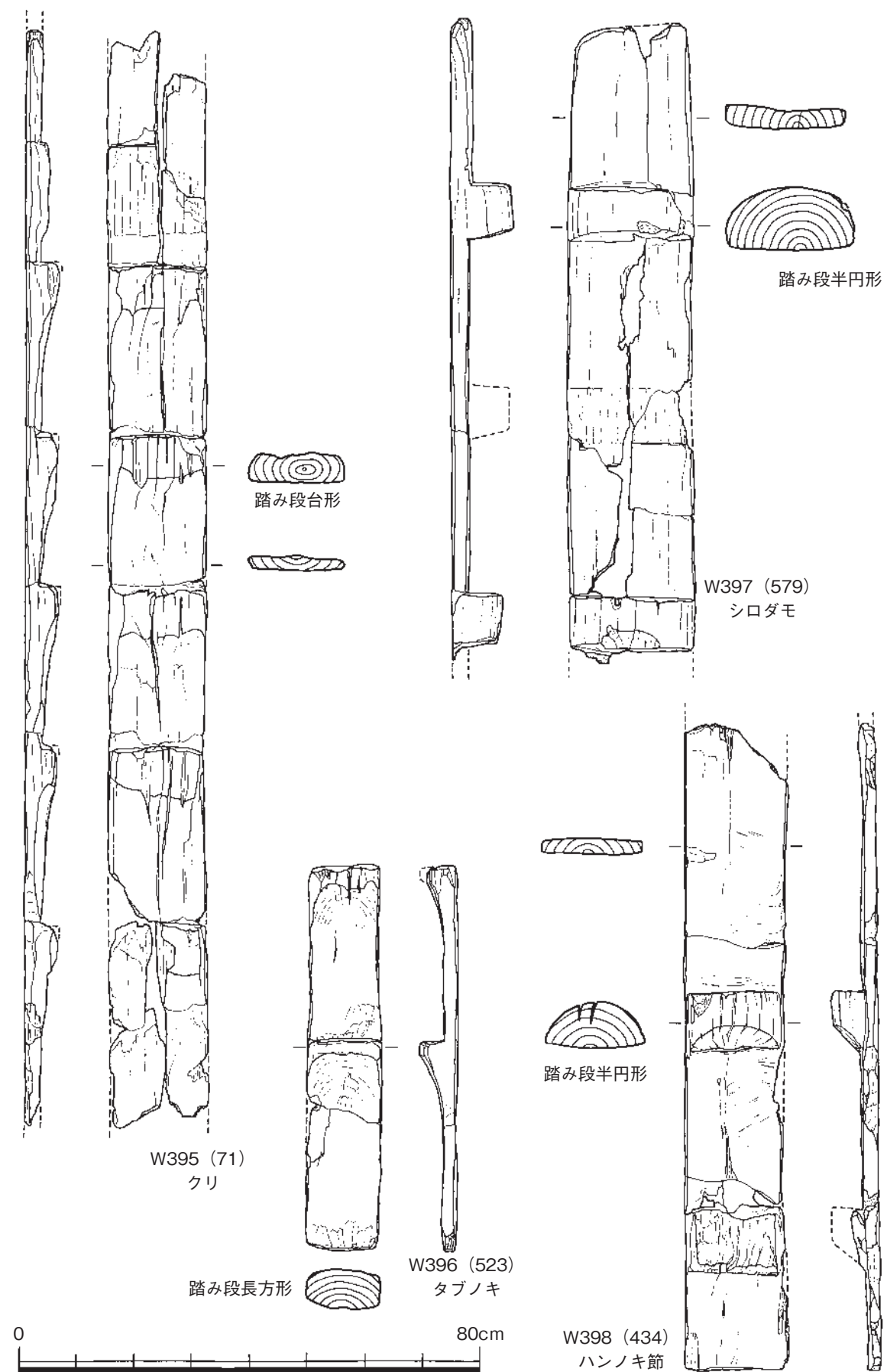
第97図 包含層出土木器69 雑具③ (1/4)



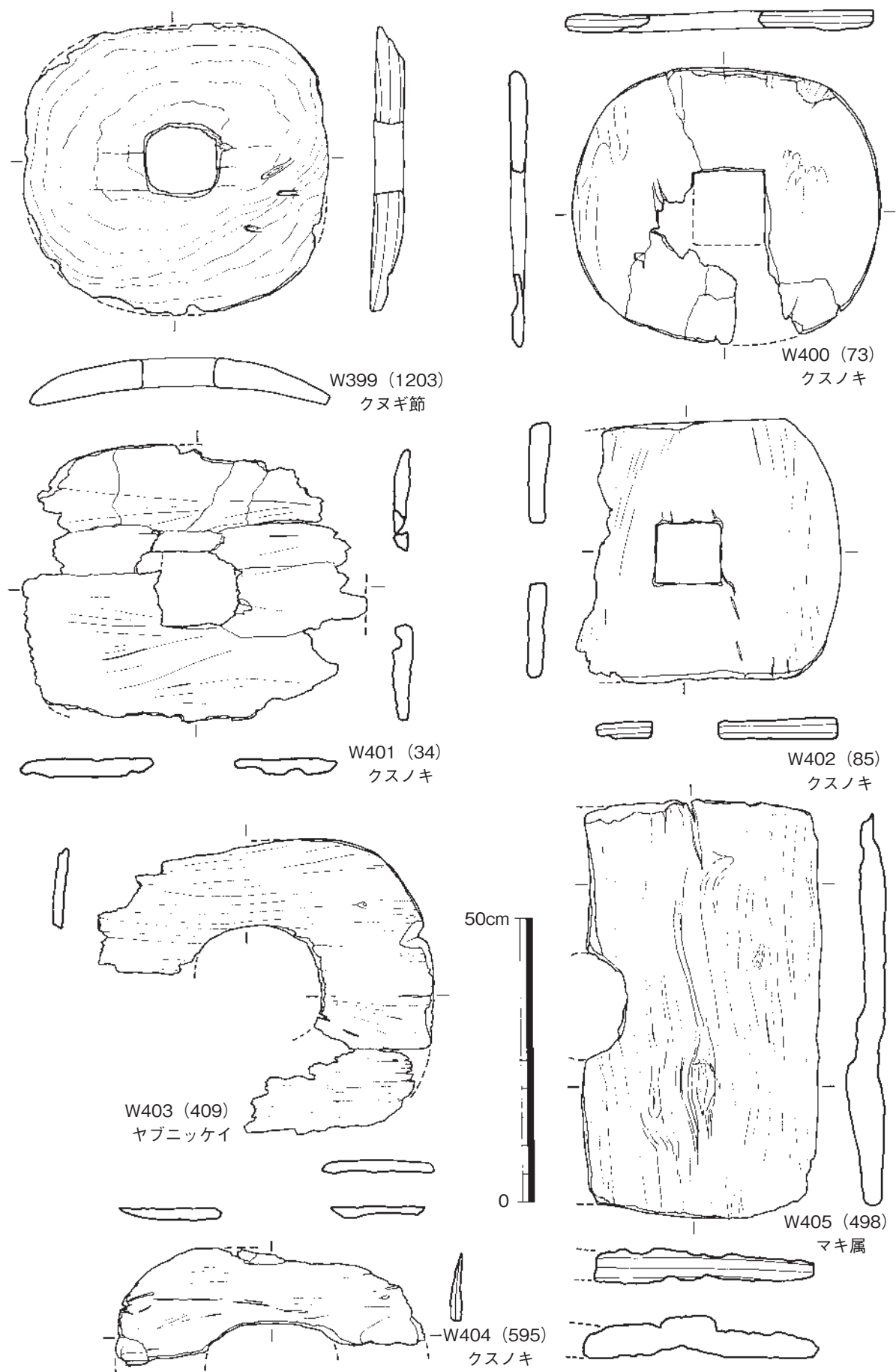
第98図 包含層出土木器70 雑具④ (1/3, 1/6)



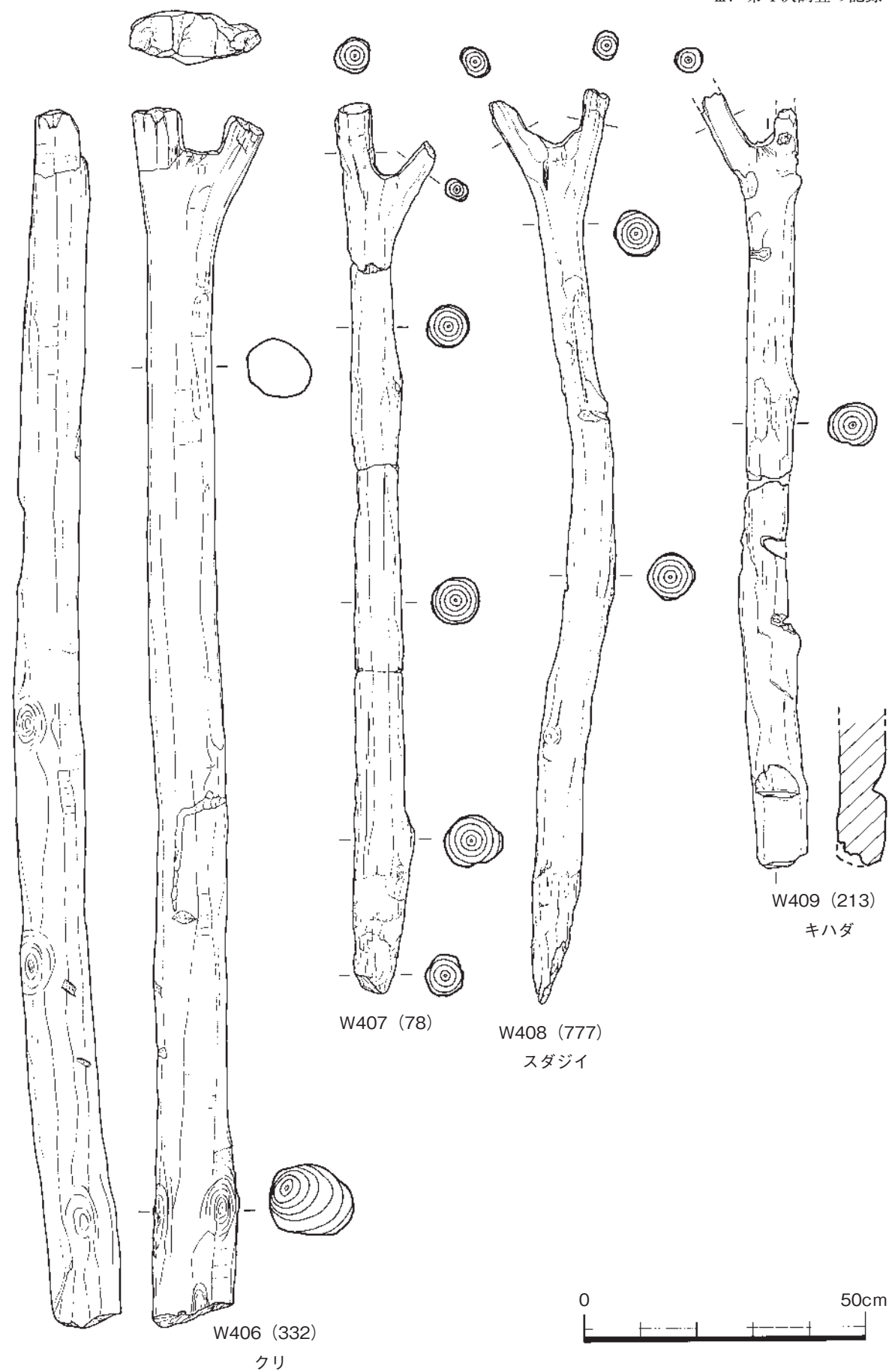
第99図 包含層出土木器71 建築材① (1/10)



第100図 包含層出土木器72 建築材② (1/10)

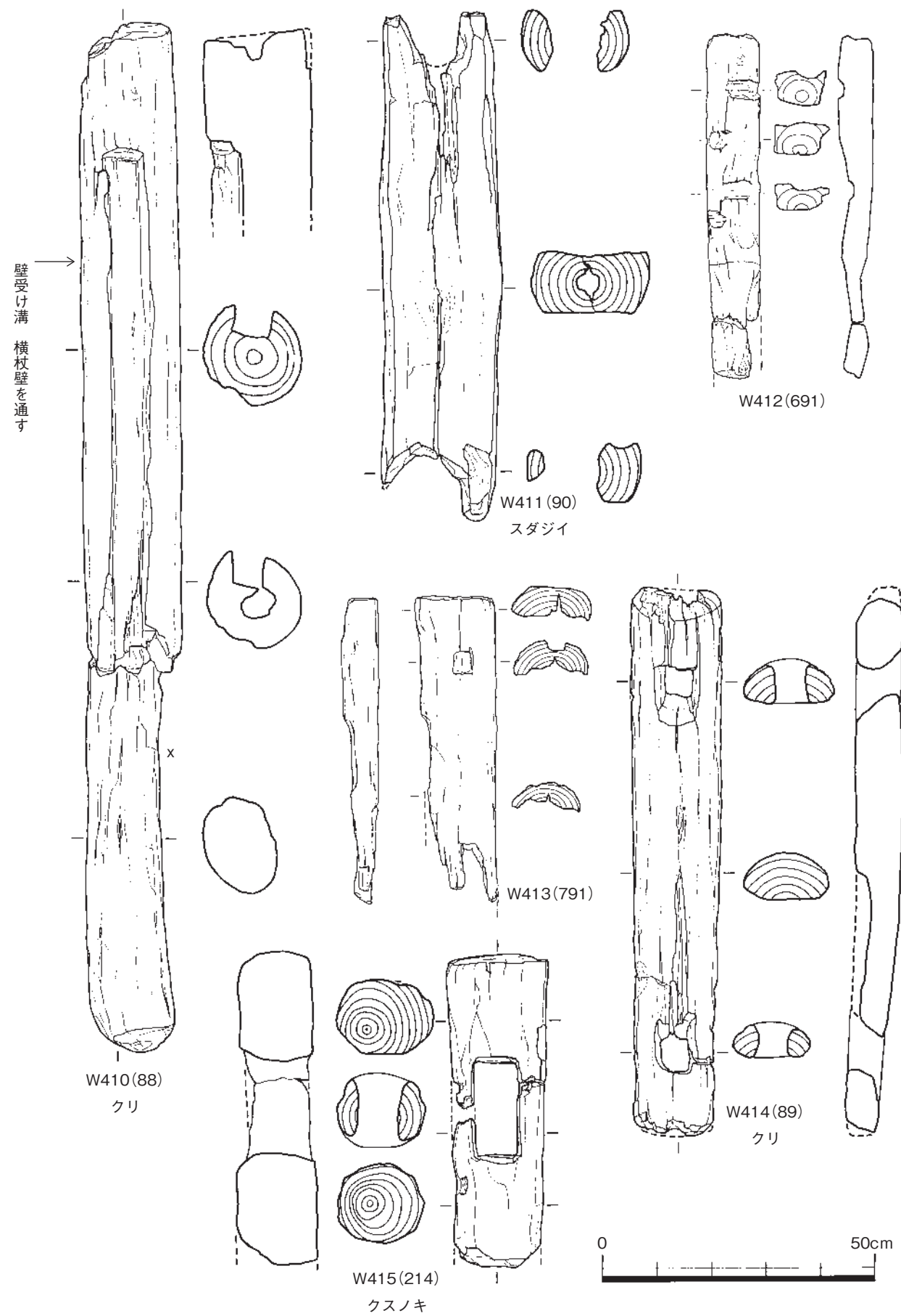


第101図 包含層出土木器73 建築材③ (1/10)

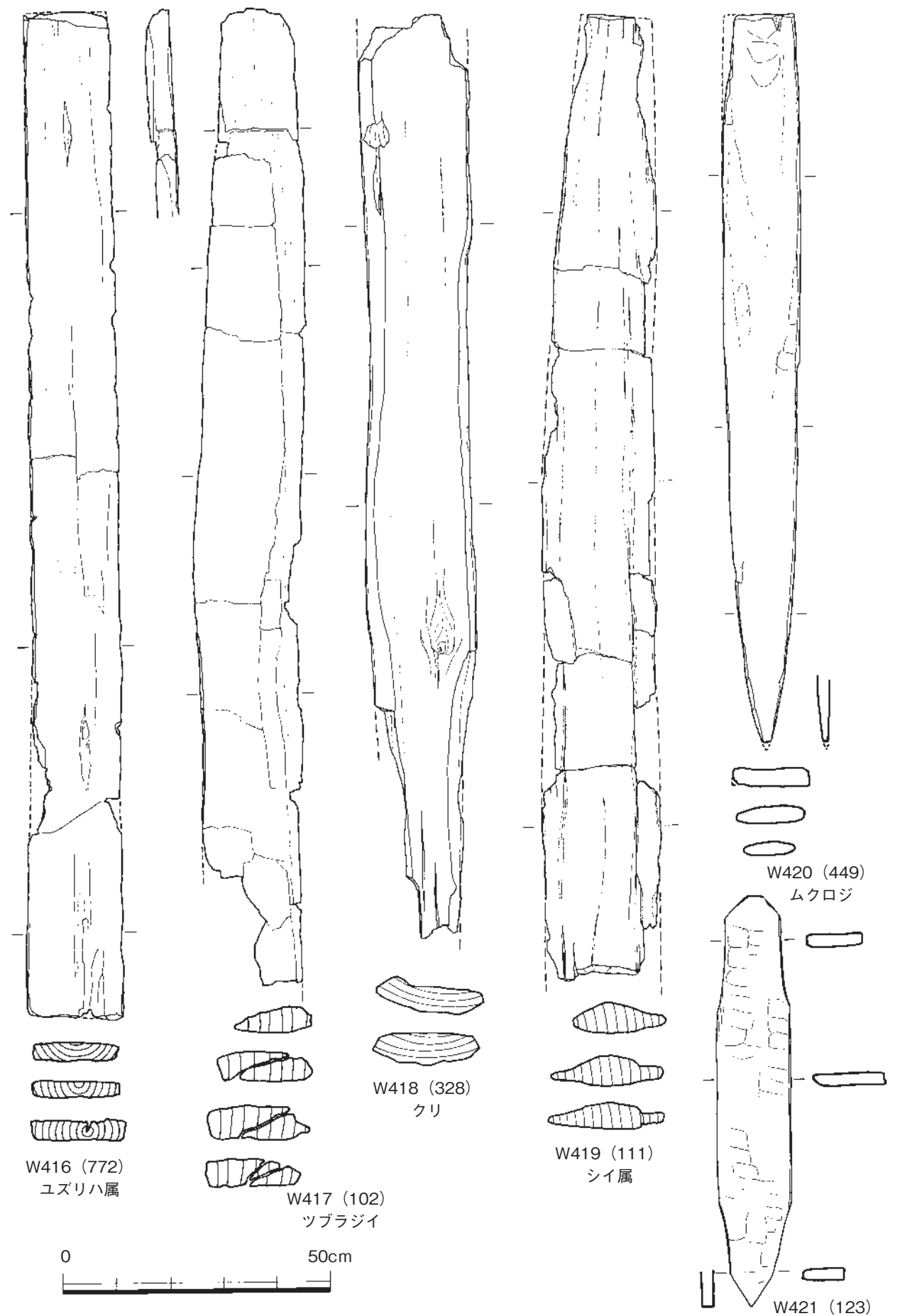


第102図 包含層出土木器74 建築材④ (1/10)

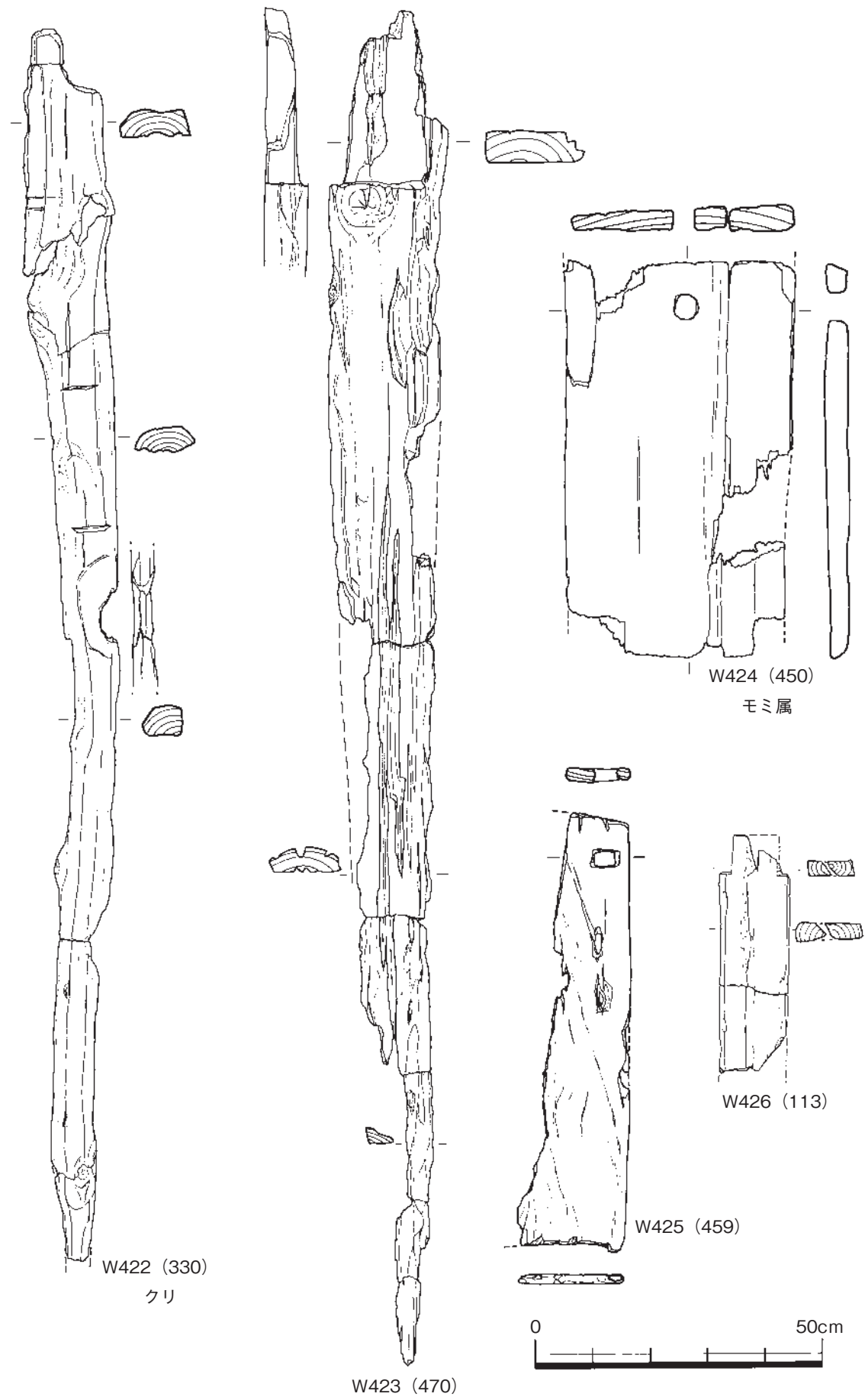




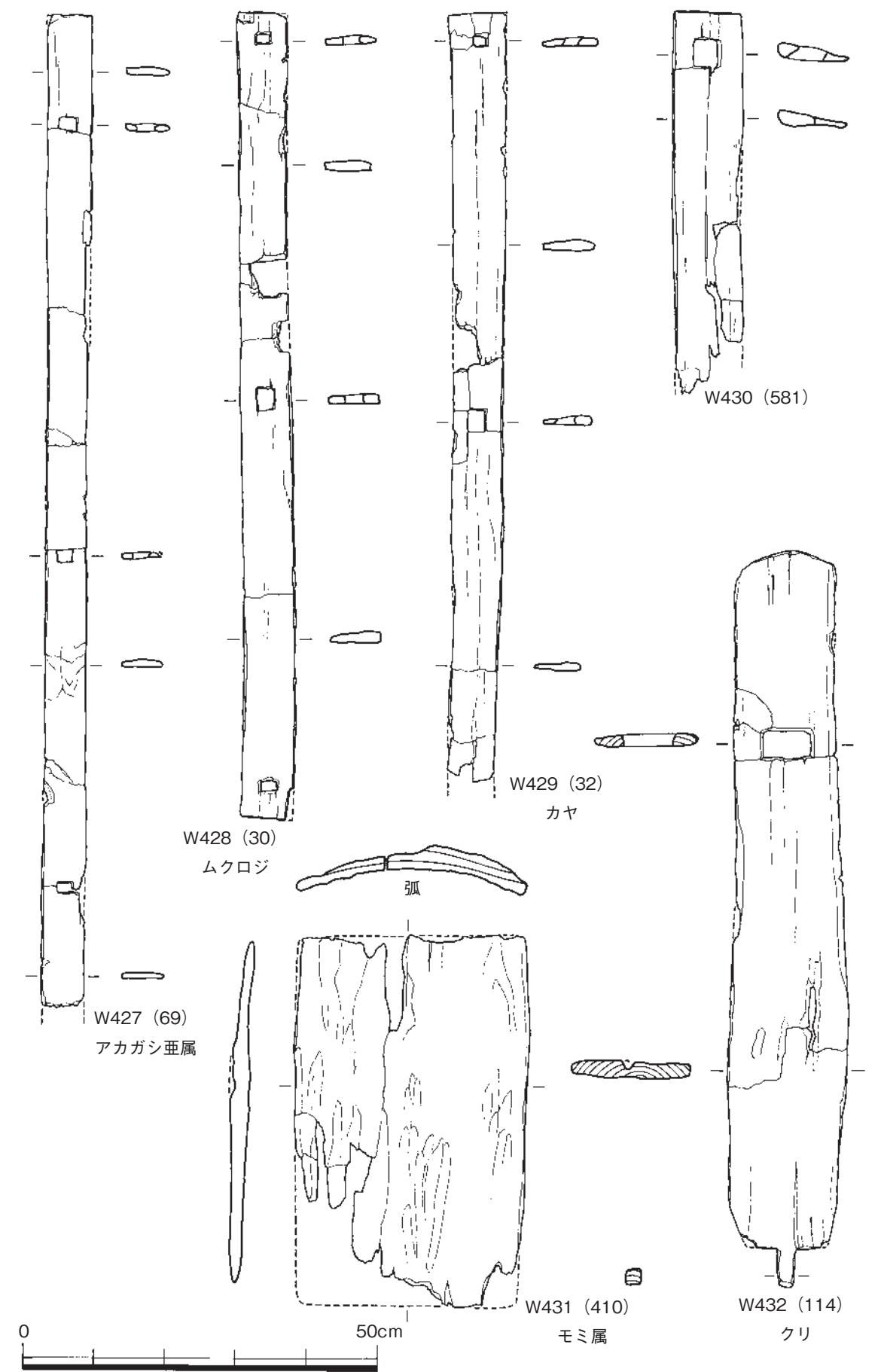
第103図 包含層出土木器75 建築材⑤ (1/10)



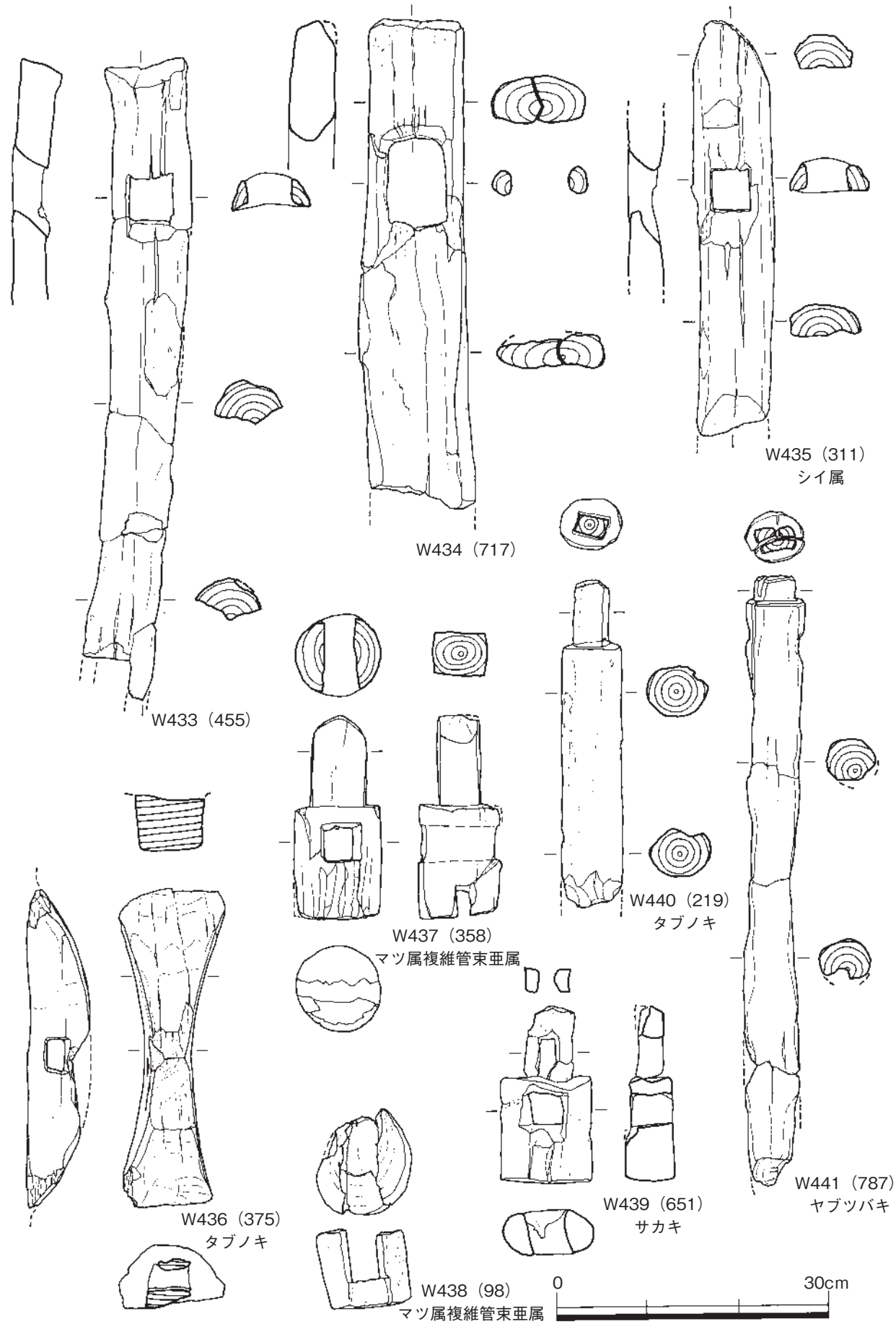
第104図 包含層出土木器76 建築材⑥ (1/10)



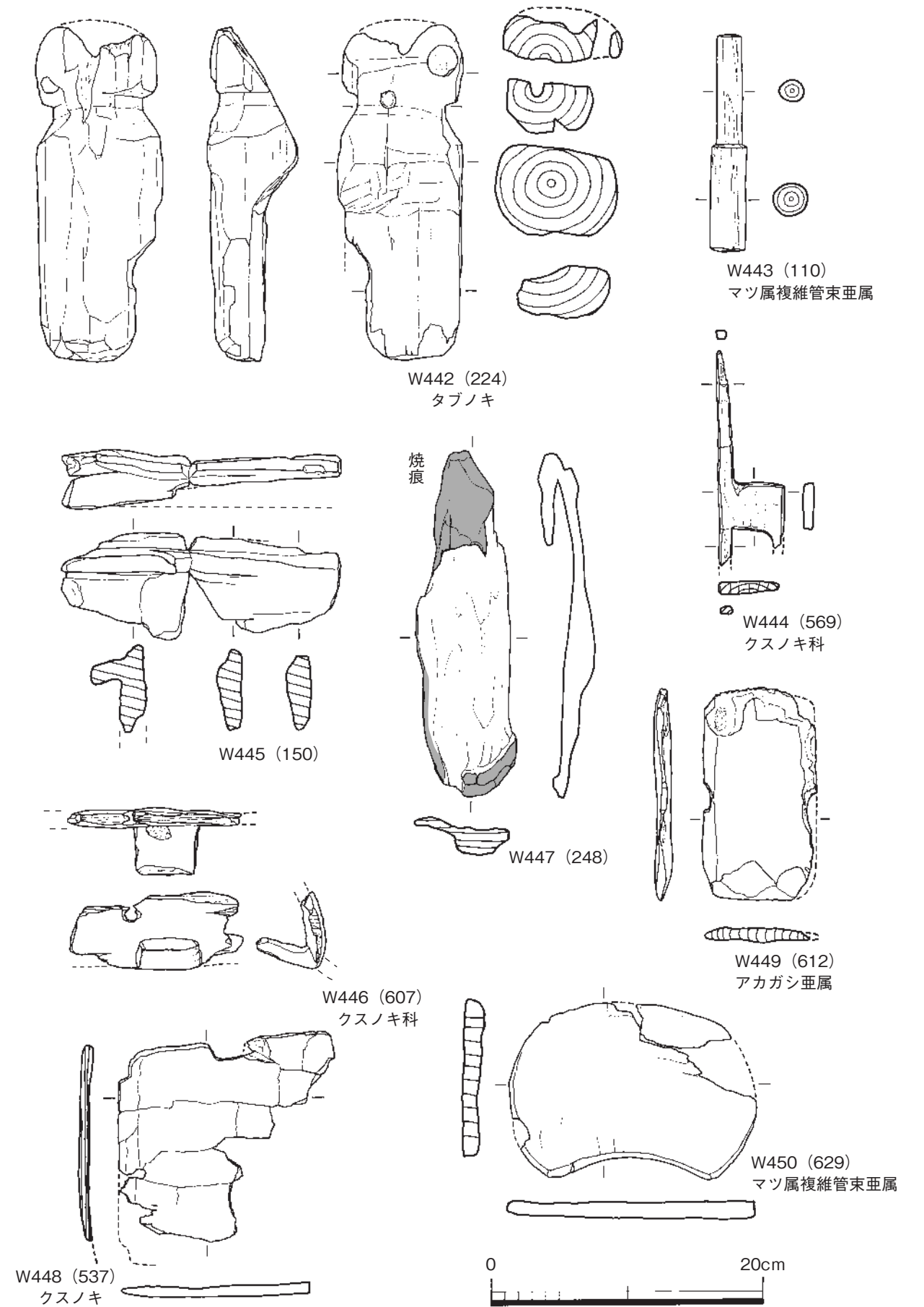
第105図 包含層出土木器77 建築材⑦ (1/10)



第106図 包含層出土木器78 建築材⑧ (1/8)

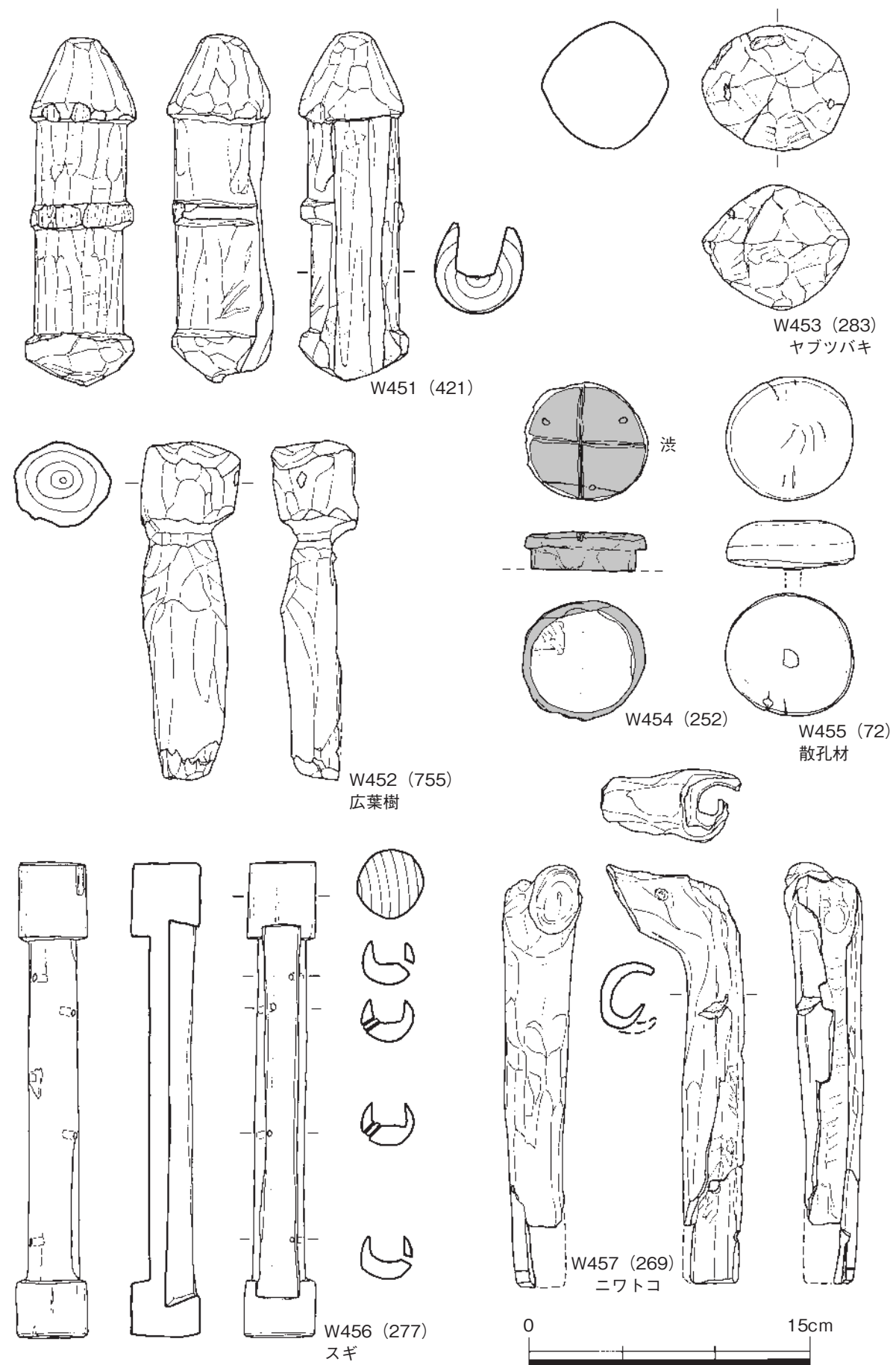


第107図 包含層出土木器79 建築材⑨ (1/6)

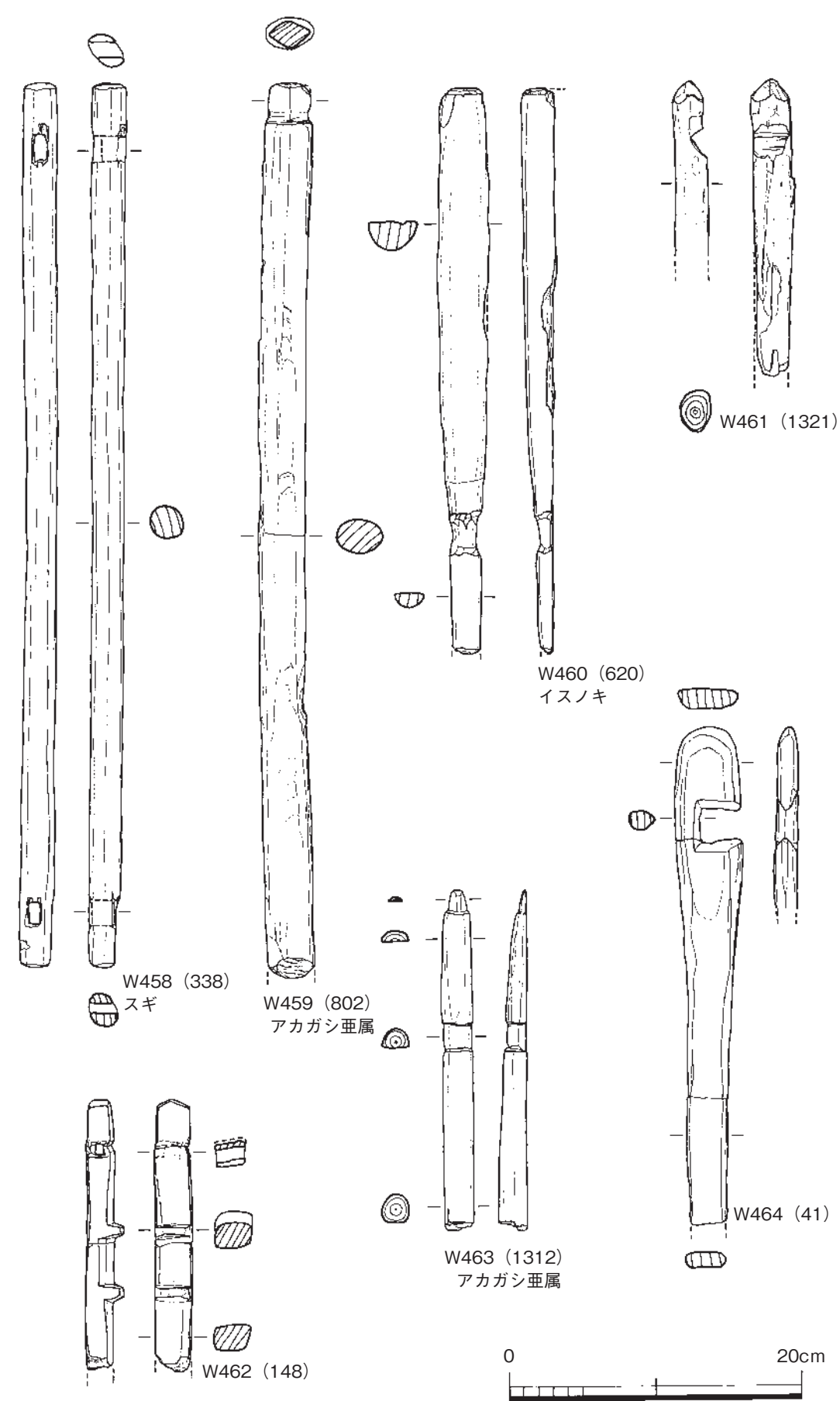


第108図 包含層出土木器80 その他の木器① (1/4)





第109図 包含層出土木器82 その他の木器② (1/3)



第110図 包含層出土木器83 その他の木器③ (1/4)

## 7. 弥生時代後期の遺構、遺物

### (1) 概要

周囲からの土砂の流れ込みによって湧水層の埋没が進み、後期初頭には谷底の湧水がほぼ停止し、谷底での滞水状況は取束に向かっていったと考えられ埋土中の植物遺体の堆積もみられなくなった。しかし、谷底は完全に埋没したわけではなく周囲からの土砂の流れ込みは続いていたことは3、4層の土壌の堆積状況からうかがい知れる(第8図)。谷底付近では少量ながら木器も出土していることから、一部に溜まり状に水場が残存する湿潤な土壌環境が維持され、あるいは、湧水層に達する土壌の掘削も確認された。

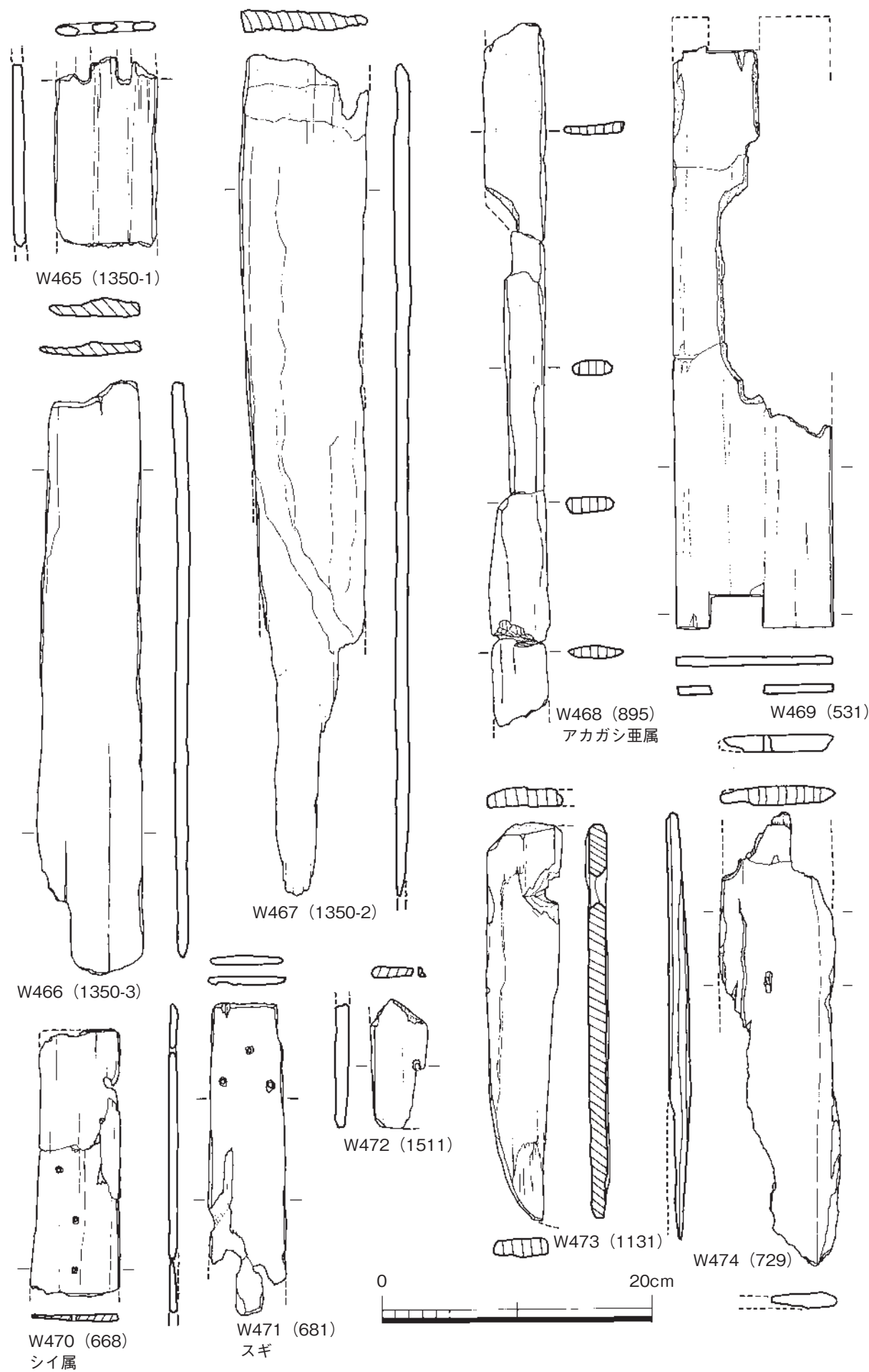
5層上に堆積していた基本土壌は4層(灰色混砂粘土)、3層(灰黒色粘土)で、いずれも土器が密に堆積する遺物包含層を形成していた。それぞれの包含層中の遺物については、的確な層位ごとの取り上げを心掛けたが、地点によっては堆積が薄いところや遺物が密に出土した箇所もあり、取り上げ時に出土層位を取り違えたところも多々あるものと思われる。また、出土土器については、今報告ではその一部にとどまっており、改めて詳細な分析を行う必要がある。

谷部全体の遺物の出土傾向をみると、2～5区のテラス状遺構の周辺に集中して遺物が出土する状況は5層と同様である。また、残存状態が良好な土器が集積された状態で出土する状態が各所で認められ(第113図)、谷部が前代に引き続き祭祀の舞台となった様相がうかがえる。

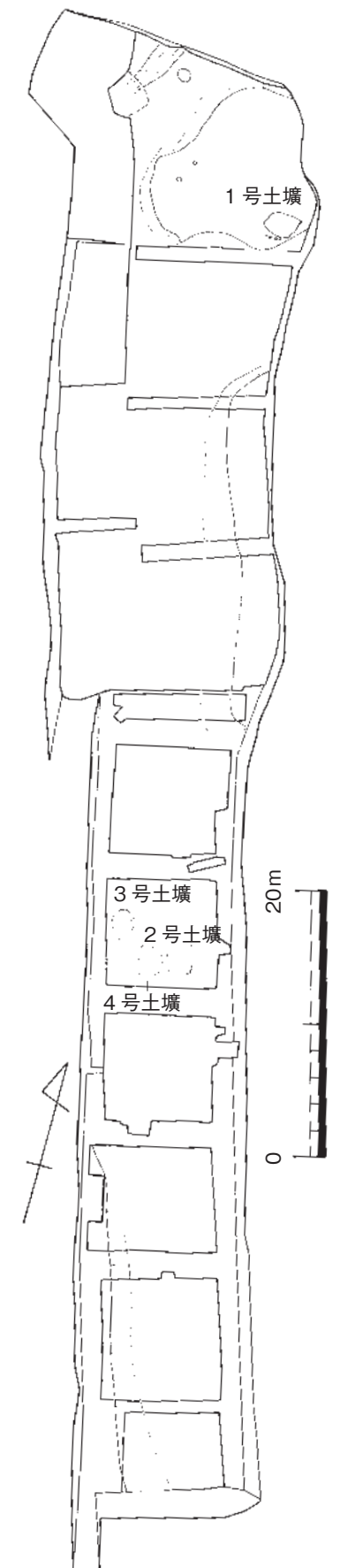
また、6区では当該時期に掘削された土壌を3基検出した(第112図)。土壌はいずれも湧水層まで掘り抜いており2号及び4号土壌からは木器も出土していることから、取水、貯木などの機能を意図したものと考えられる。

1区南東部の微高地の際でも木柵を伴う円形土壌を1基検出した(第111図)。また、4区で検出した1号木器溜まりは、その掘り方を明らかにすることができなかったが、伴出土器から後期前葉の土壌であった可能性が高いことから、この項で報告する。

なお、4～6区にかけての西岸の3層上で青色に発光する粒子の散布が顕著にみられた。サンプルを採取して分析を行ったところ発光の正体がリンによるものと判明したので次章で報告する。動物遺体が岸に堆積したことに起因すると考



第111図 包含層出土木器81 その他の木器④ (1/4)



第112図 弥生時代後期の主要遺構等の配置 (1/500)

えられるが、動物や魚骨等の遺体は確認できなかった。また東岸は未調査となったため、詳細な状況は不明である。

## (2) 4層出土土器 (第113～116図)

甕、壺、鉢では、底部が外反しながら立ち上がるものが基本となるが、外反度は緩やかなものが多い。また、器面の調整に関しては、外面はタテハケ仕上げ内面はナデ仕上げのものが多く、指押さえの痕跡が各所に残る傾向が強い。

P32～39は甕で、P32の口縁部は逆L字で内傾する、P33～36では口縁は「く」の字状に屈曲するがその程度は多様である。P37、38は台付甕の脚台部で、P38は張り付けられた底部が剝離する。P40は精製の鉢で内外面に研磨が施される。P42は脚付鉢で、内外面とも研磨で仕上げる。P43は、口縁部内外面とも丁寧な横研磨が施された精製鉢で、口縁部に環状の把手がつくりだされる。P44～45、47～49は広口壺で、鋤先口縁や頸部と胴部の境界の突帯の有無に違いがあるものの、胴部から頸部にかけての境は不明瞭となり、外面の器面調整がタテハケにとどまる粗雑化する傾向は共通している。P48は、頸部下の突帯に「し」の字形の貼り付け文がある。P51～54は短頸の複合口縁壺で、P52は胴部と頸部に一部粗く研磨が施される。P53と54は大型で器高はほぼ同じであるが、P54のほうに袋状口縁中央に明瞭な稜がつくり出され、胴部も長胴化傾向がみえる。なお、P46は、頸部が打ち欠かれているが、広口壺、複合口縁壺の両方の可能性がある。底部はわずかに膨らみ気味である。

P52、55～57は高坏である。P52は鋤先口縁の先端が若干垂れ気味となり脚部の長さは短めとなる。坏部は内外面とも研磨で仕上げるが脚部はタテハケで終える。一方、P55は、器厚が厚ぼったく外面調整はタテハケで終えるなど作りは粗い。P56、57は坏部が鉢状をなすもので、中ほどに突帯をめぐらす、P57は突帯が断面M字を呈し内外面とも研磨で仕上げていく。

P58、59は器台で、裾部から筒状部にかけての窄まり、筒状部から受け部にかけての反転はいずれもなだらかである。

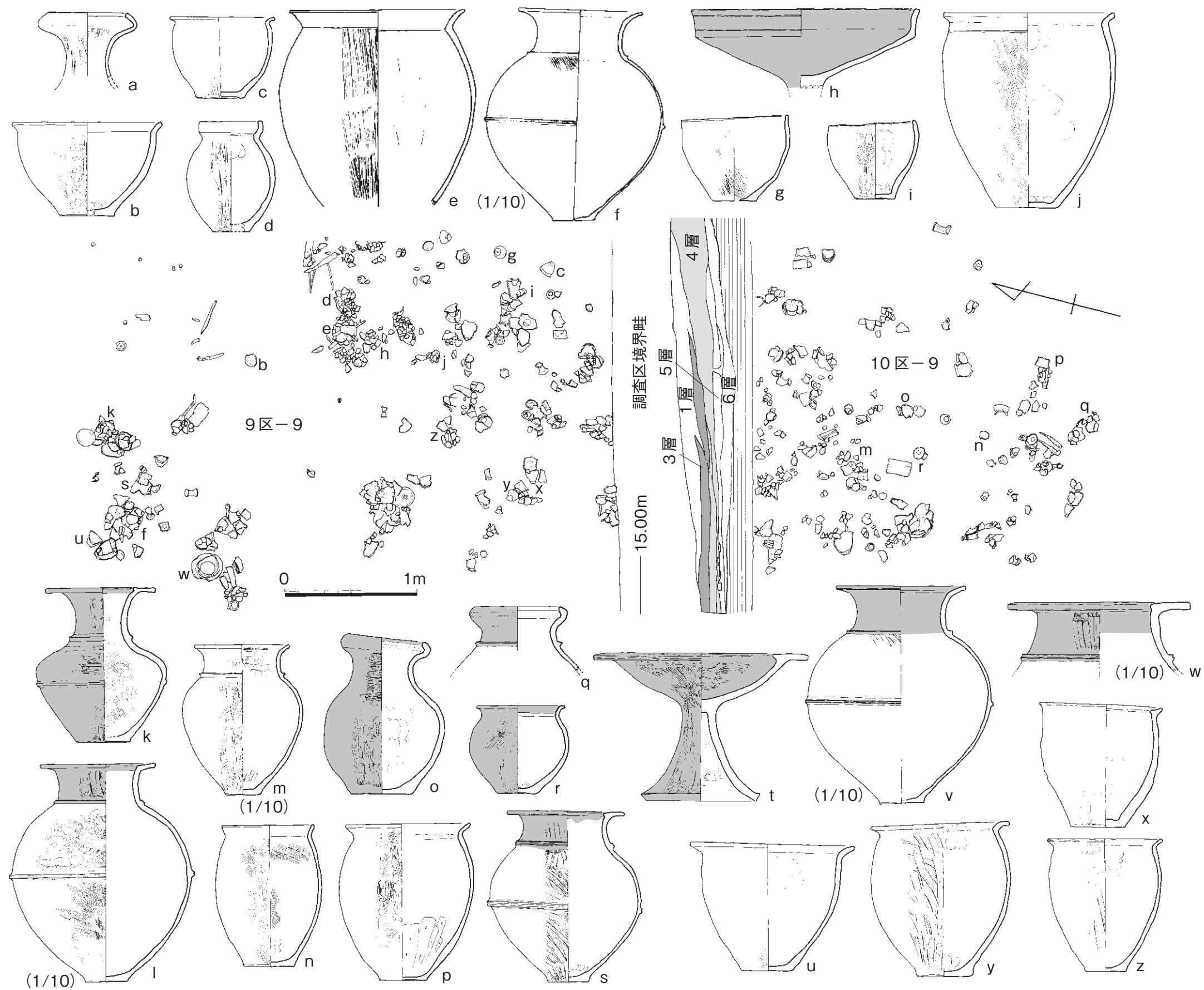
## (3) 3層出土土器 (第117・118図)

甕、壺、鉢の底部は、④層に比べて直線的、あるいは内湾気味に立ち上がるものが増加し、立ち上がりの角が甘くなるものが増加する。また、短頸壺の底部ふくらみが顕著で、レンズ底化するものも認められる。

P64～66は、甕で、胴部から口縁部にかけてのくの字の屈曲は鋭い。P69は大型広口壺で、胴部は独楽形に長胴で、口縁の鋤先口縁は上向きに跳ね上がるものの、端部は垂れ気味である。

P70は、頸部が内傾するものの口縁は上向きに区の字に屈曲反転するもので、胴部外面は縦研磨を密に施す。器壁は厚手。器形は讃岐系の影響を受ける。P71は、精製の小型複合口縁壺で、外面は丁寧な研磨が施され、複合口縁は鋭く内傾する。P72、73は大型複合口縁壺で、④層と同じく、複合口縁部は丸みをもつものと明瞭な稜をつくるものが共存する。P75、76は、短頸壺で、P74は、胴部に丸窓状の円形穿孔が認められる。高坏のうち、P76は鋤先口縁であるが、口縁部は内向きの突出がなく外縁にだらしなく伸びる。坏部は深めで短脚。内外面とも研磨仕上げであるが全体的に厚手である。P77は吉備系の高坏で、坏底部の円盤充填が剝離消





第113図 9・10区土器出土状況 (1/30) と主要土器 (1/6, 1/10)



失している。P78は、坏部が鉢状を呈する。

P82は天井部が、P83は底部がそれぞれ乳頭状に突出する粗製土器で、出土地点は離れているものの、つくりが酷似していることから、セットで使用された土器と考えられ、それぞれ蓋と身であろう。P82は、上に向かってなだらかにふくらみ内外面とも指圧痕が多く残り、P83は、外面に螺旋タタキの痕跡が残される。形状的には製塩土器を想起させるが、外面には顕著な煮沸痕跡は認められず、蓋の存在も不可解である。

#### (4) 2区東部土器溜まり出土土器 (第119・120図)

2区では、後述するように弥生時代後期に谷底が埋没陸化した後、古墳時代中期に貯水池と取水、導水遺構が構築されたため、埋土内からは、弥生時代中期～前期の遺物が入り混じった状態で出土した。

しかし、丘陵部裾の東部では、3層の上面で弥生時代後期前葉の土器に交じって、弥生後期中葉の土器がまとまって出土した。この時期は谷部全体を通してみると土器の出土量が著しく減少する時期で、2区での特徴的な現象といえる。2区の東丘陵には当該時期の竪穴住居や溝などが確認されており、当該時期の集落運営の継続に伴い谷部の利用も継続していたことを示す資料となる。

甕、壺、鉢の底部は、平底の立ち上がりが3、4層土器に比べてますます甘くなり、P89、97、99、104のようにレンズ状に底が膨らむものが増加している。甕はP86～88のような小型のものが増加し、また、内面の調整においてはハケ調整がナデ消さずに残るものもある。

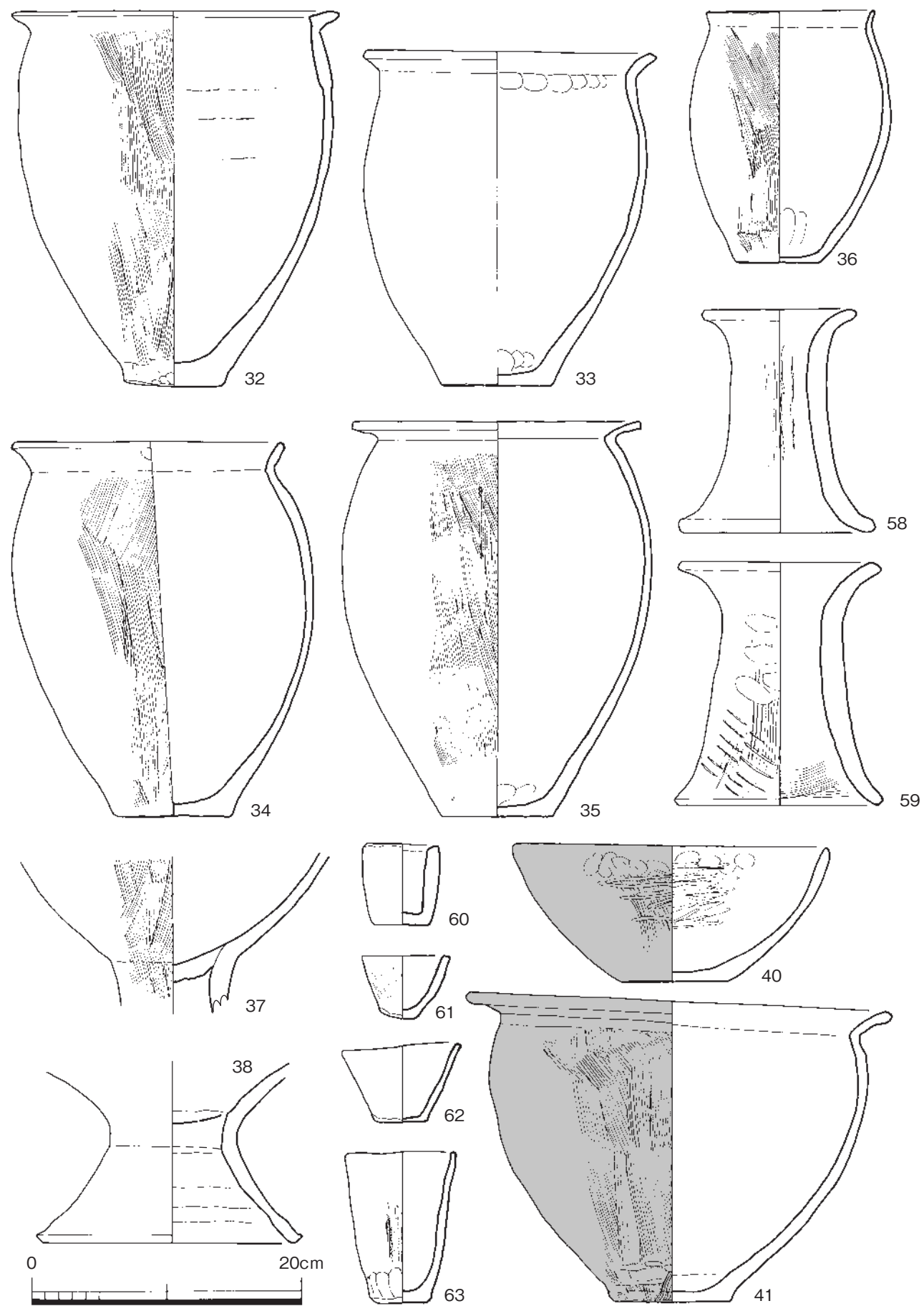
複合口縁壺では、中期からの流れを汲む小型で口縁の屈曲が「く」の字形に内傾するP94～96とともに、大型で球形胴部から頸部にかけて屈曲して大きく外反し、口縁部が鋭く湾内傾するP91、92、93がある。

P101、102は支脚形土器で、外面には粗い螺旋タタキが認められる。

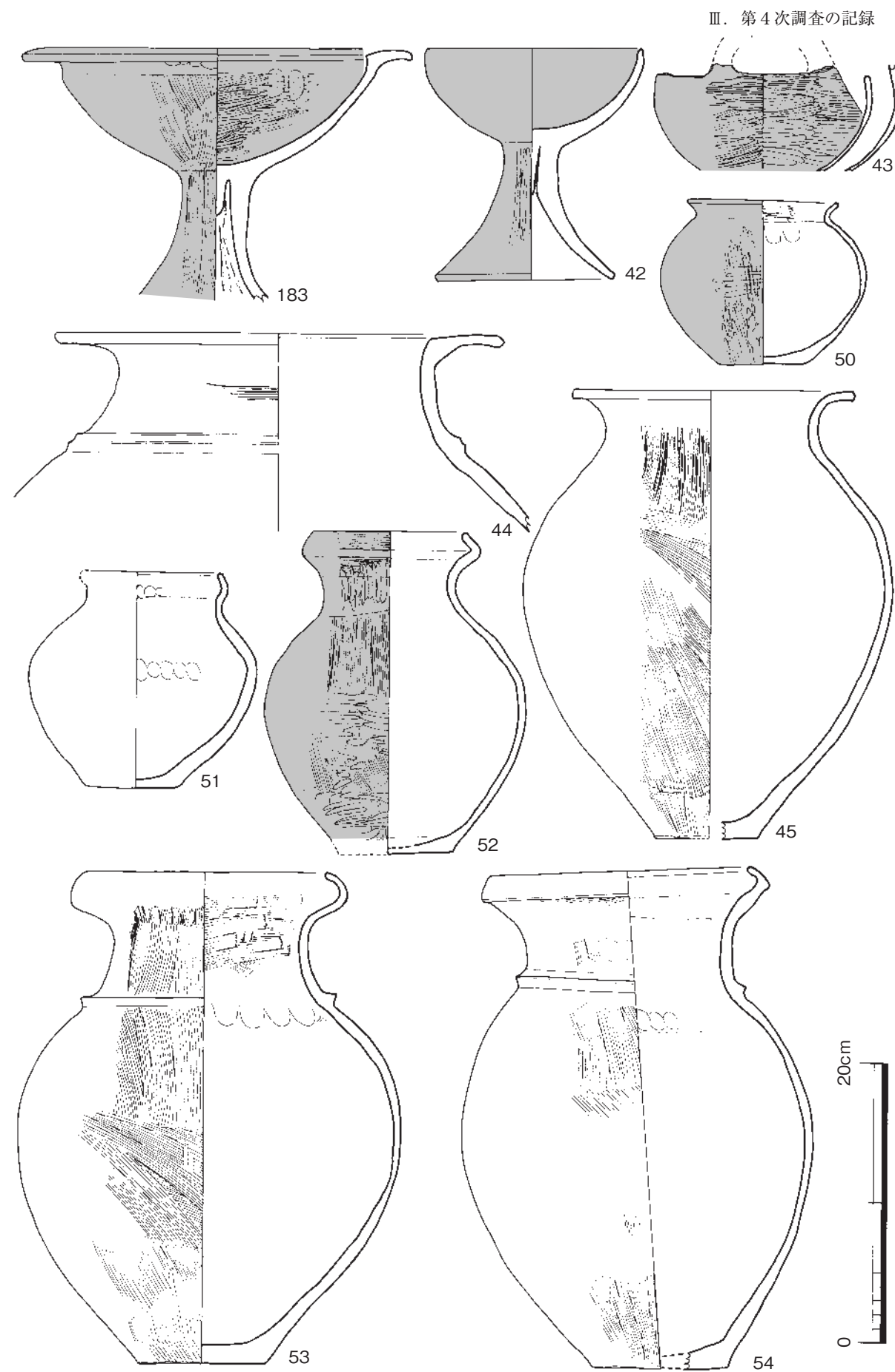
P110は丹塗磨研が施された精製の脚付鉢で、5層に伴うものと考えられる。

器台P111、113では、脚裾から上位に緩やかに窄まるが、受部では鋭く外反し、P113は受け部に打ち欠きが行われている。

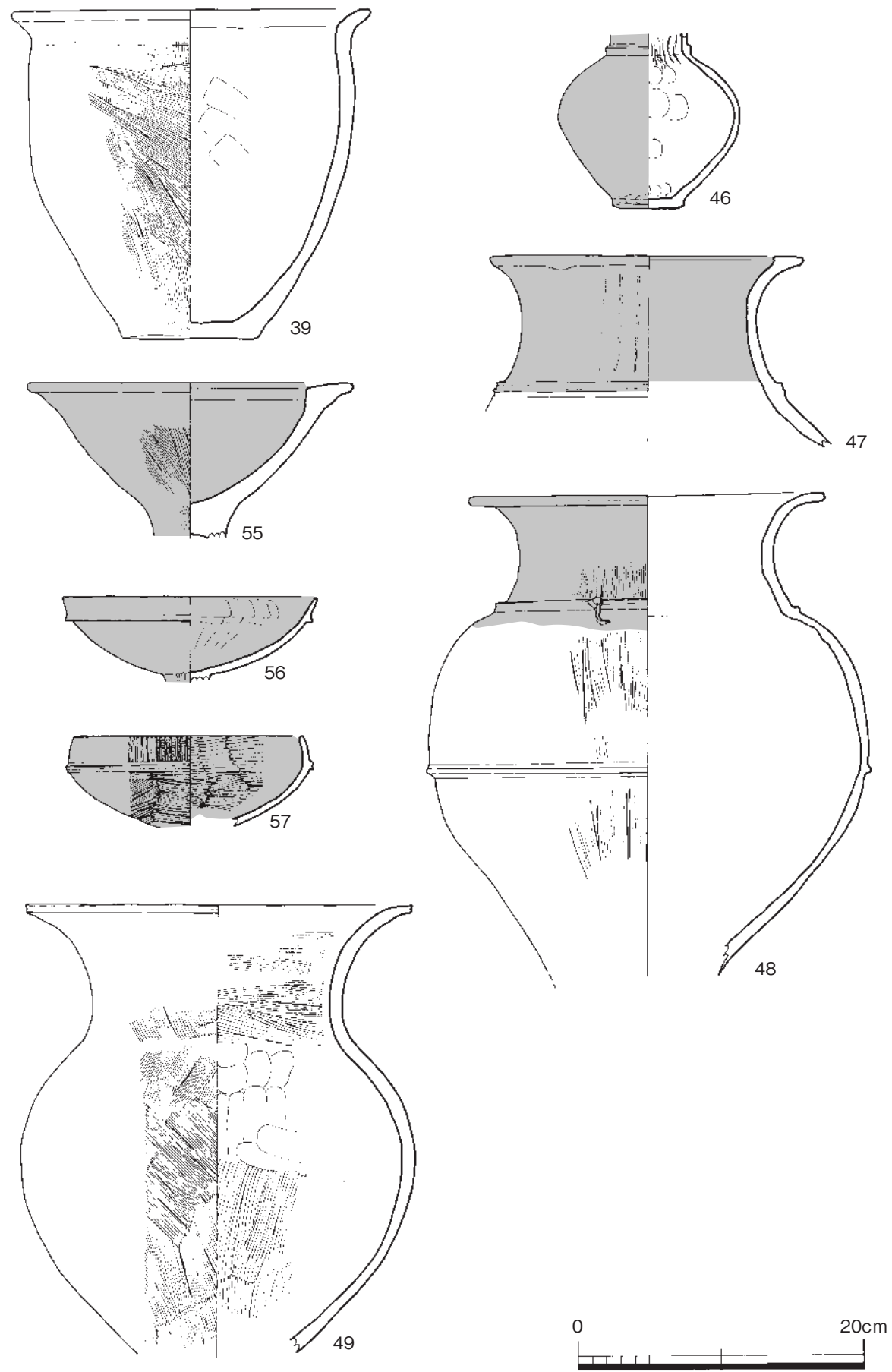




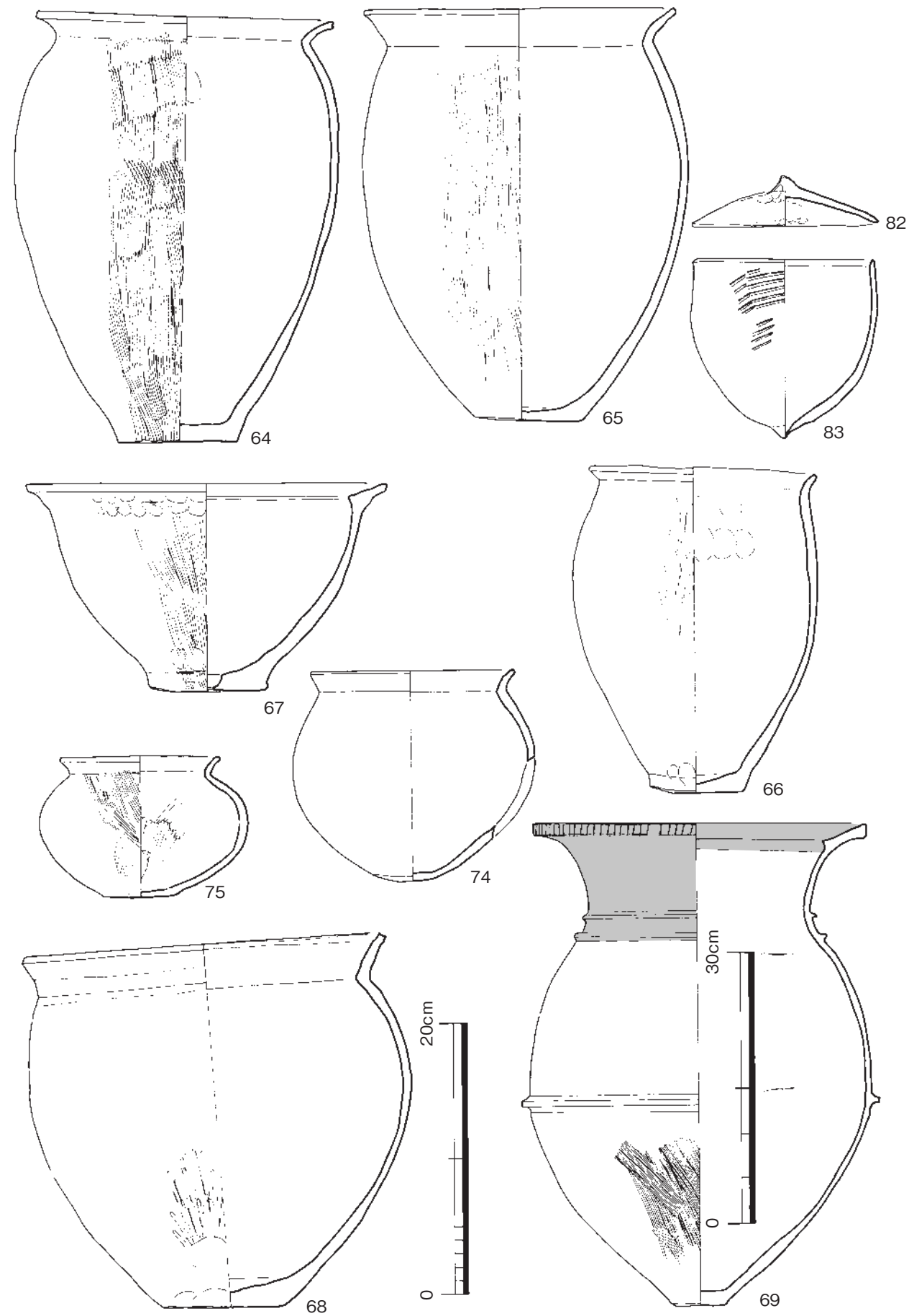
第114図 4層出土土器実測図1 (1/4)



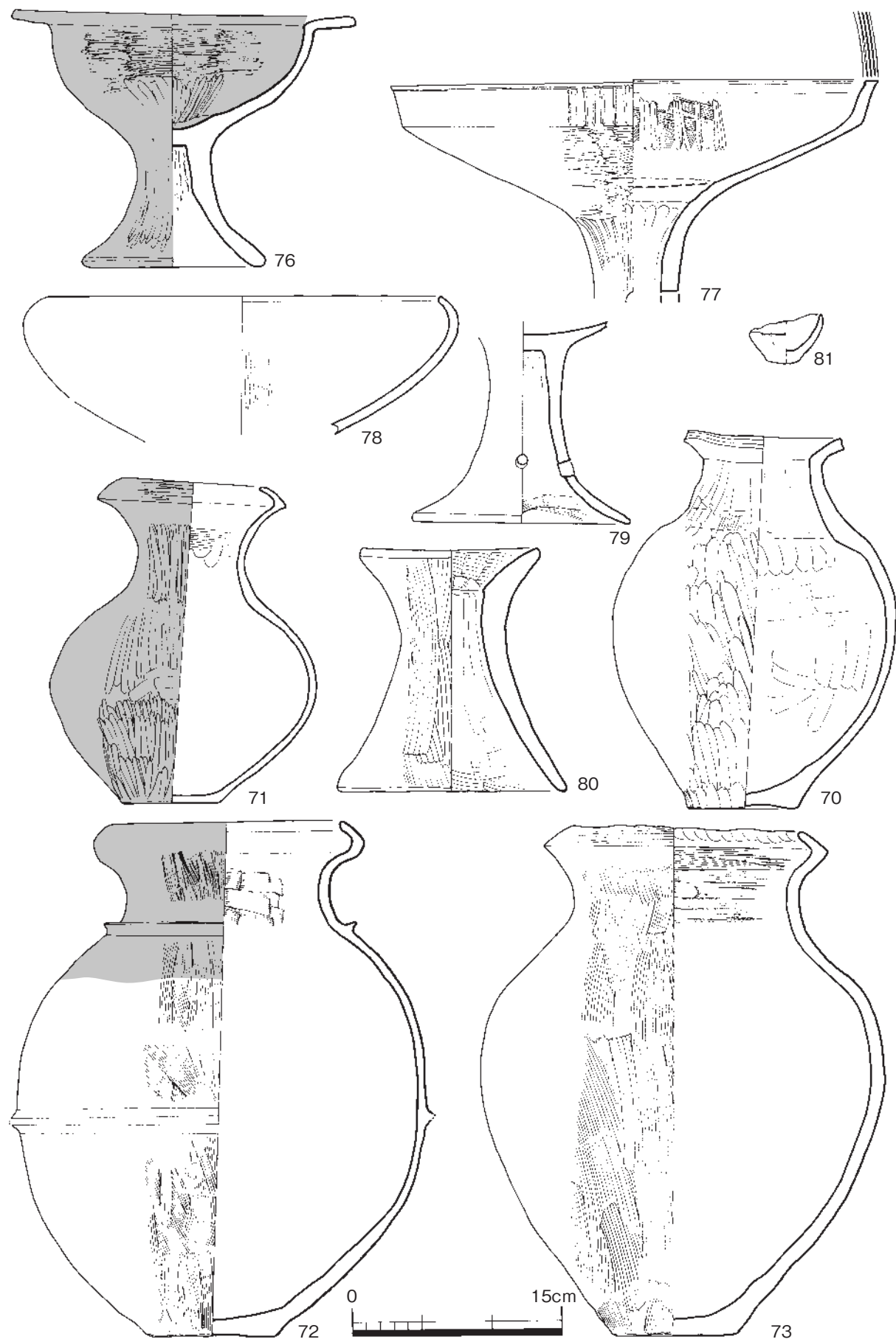
第115図 4層出土土器実測図2 (1/4)



第116図 4層出土土器実測図3 (1/4)



第117図 3層出土土器実測図1 (1/4, 1/8)

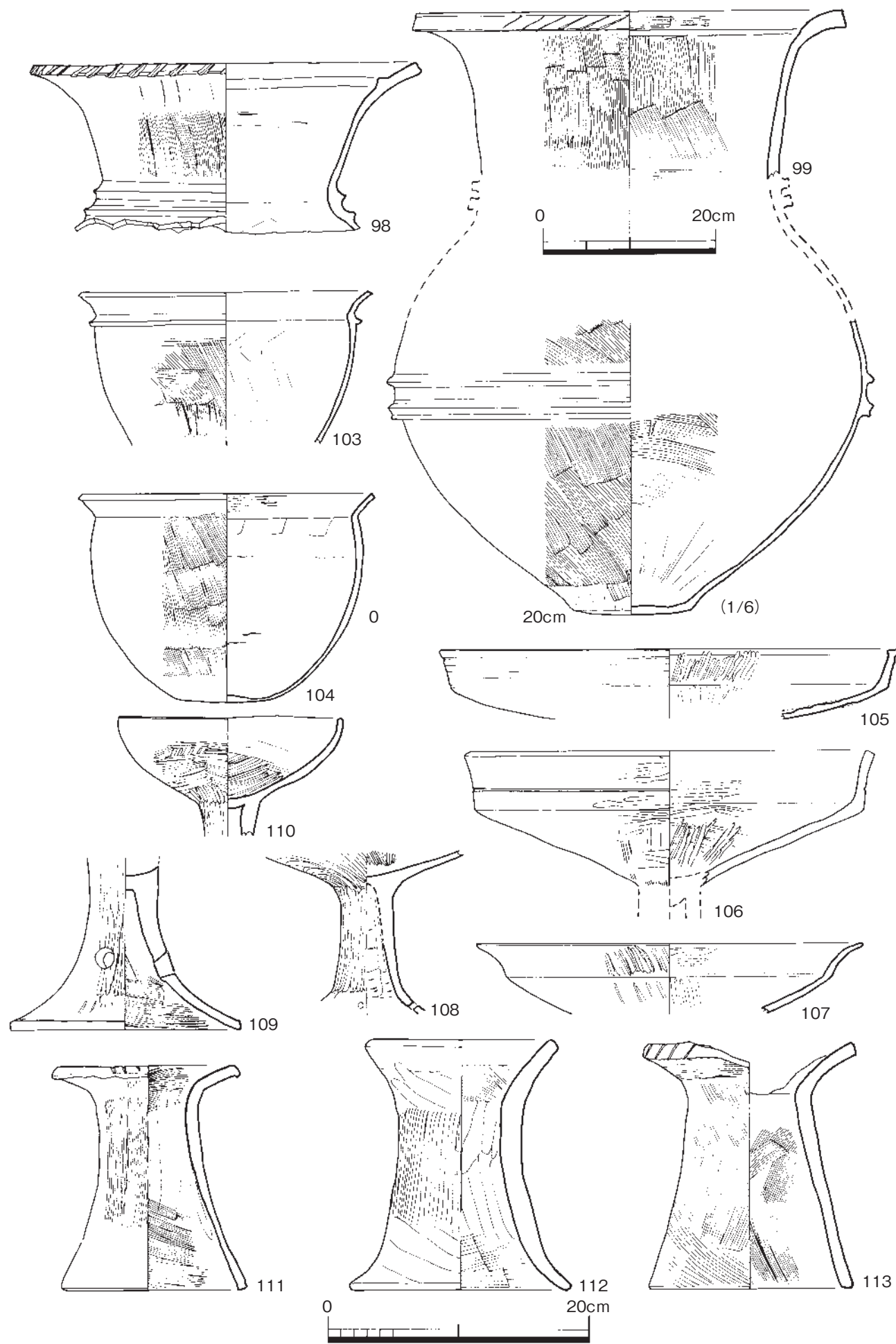


第118图 3層出土土器実測図2 (1/4)



第119图 2区東部土器溜まり出土土器実測図1 (1/4)





第120図 2区東部土器溜まり出土土器実測図2 (1/4, 1/6)

(5) 遺構

1) 1号土壌 (第121図, 図版12-a~c)

1区南東部で東の丘陵部から張り出した微高地の南斜面に掘削された不正楕円形プランの土壌である。概ねN74° Eに主軸を向け、長さ196cm、幅130cm、深さ55cmを測り、断面は播鉢状を呈する。調査時には北側の砂利層からの湧水が豊富であった。

南壁にのみ護岸用の棒杭が打ち込まれていたが、地山が砂利層であったためか杭先は地中深くには達しておらず、谷からの土圧に押されて土壌側に向かって倒れこんでいた。杭の打ち込みは4層上からとみられる。埋土上層から甕複合口縁壺、器台などが出土し、土壌の埋没、埋め戻しに際して祭祀行為が行なわれたと考えられる。器台の出土割合が高いのは興味深い。

下層からは木材片とともにさらえ (W475)、杓子の未製品 (W476)、鋤の柄部 (W477) などが出土した。貯水や貯木を目的としたものと推定される。

土器 (第121図, 図版55)

P114は、長胴の複合口縁壺である。平底の底部の角は丸みをもち内湾気味に胴部に立ち上がり、胴部は丈高の楕円形を呈し頸部は短く外反する。複合口縁は「く」の字状に内湾気味に短く屈曲する。内外面ともナデ仕上げであるがハケ調整の痕跡が残る。

P115は、器台の上半部である。脚部は直線的にすぼまるが受部下で大きく外反する。

木器 (第122図, 図版55)

W475は、A類横鋤である。横長の長方形プランで、中央に方形柄孔を設ける。身の上部には縁に沿って断面方形の低い隆起帯が削り出されており、集積物の受けを意図したものと考えられる。刃部に刃を削り出していないことから土壌などの整地に用いられた可能性は低い。

W476は、横杓子の未製品である。外形の粗加工~整形までを終えた仕上げの前段階である。浅い椀状の掬い部から水平方向に弧を描いて延びる柄が取り付け、頭部はやや幅広に肥厚する。W294よりもさらに加工が進んだ状況を示すもので、同種杓子の製作過程を検討する上で好資料である。また、W294が後期前葉に属する可能性が高いことを示す資料でもある。

W477は鋤柄である。三角形の握部から柄にかけてが残存する。把手部は中央を逆三角形に穿ち持ち手とする。

2) 2号土壌 (第123図, 図版12-d~i)

6区の南で検出した長方形プランの土壌で、N15° Wに主軸を向ける。長さ232cm、幅192cm、深50cmを測り壁面の切り出しは垂直方向に近い。貯水や貯木を目的としたものと推定されるが、井戸とは趣を異にする。

底面は湧水層である砂礫層まで達しており、底面近くの壁面はオーバーハングし、湧水によって壁面が崩落している。調査中も豊富な水量に悩まされた。

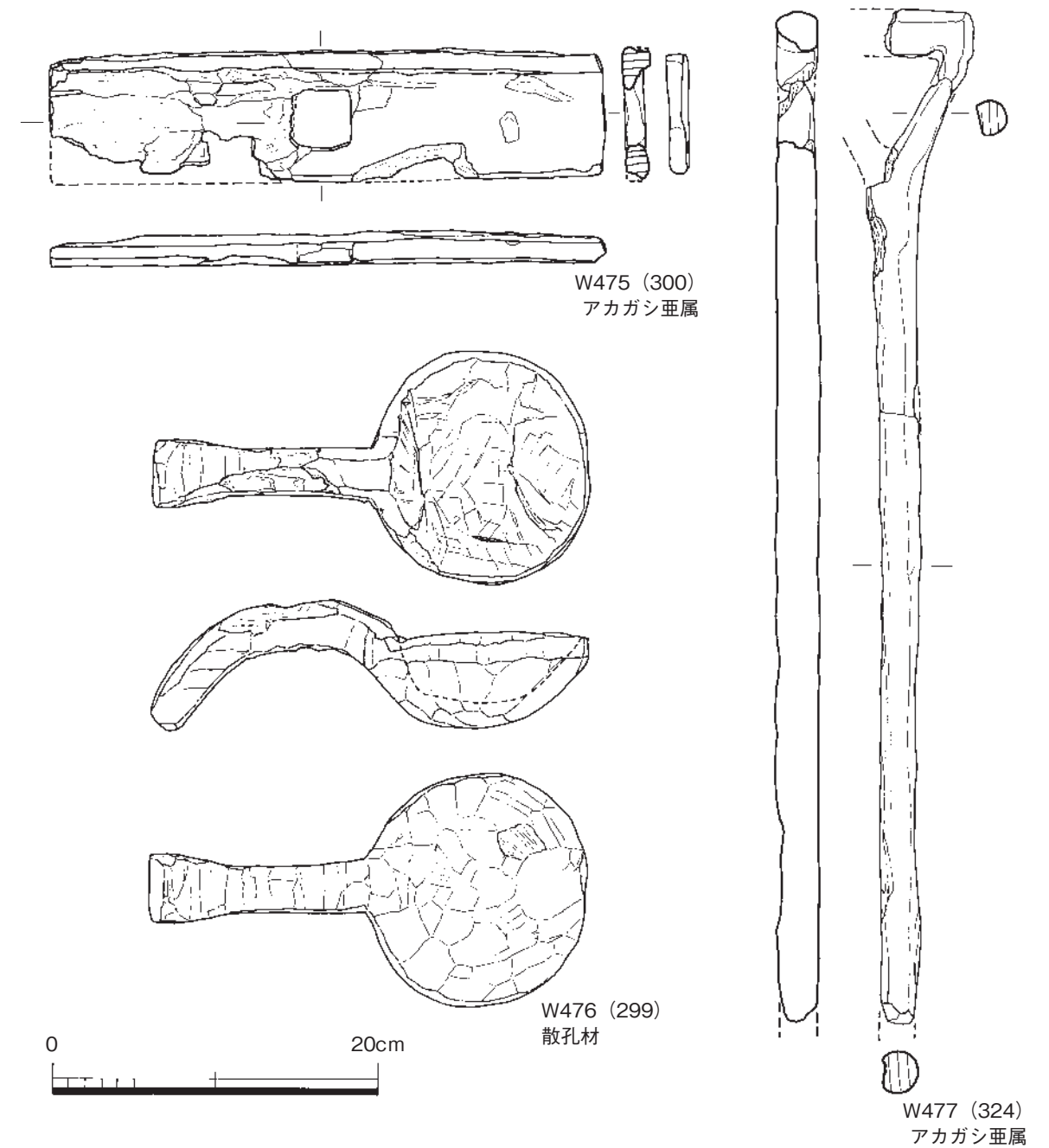
土壌の底から台付鉢、鉢、短頸壺などのミニチュア土器 (P118~121) が出土しており、掘削直後に行われた祭祀に伴うものと考えられ、また上層からは複合口縁壺、甕、器台、鉢、有溝石錘などとともに完形の臼が倒置状態で出土した。

臼底の割れ目に複合口縁壺の胴部が差し込まれ、さらにその隙間から完形の石製紡錘車が出土した (図版12-e)。土器片と石製紡錘車は意図的に嵌め込まれたものと考えられる。また、

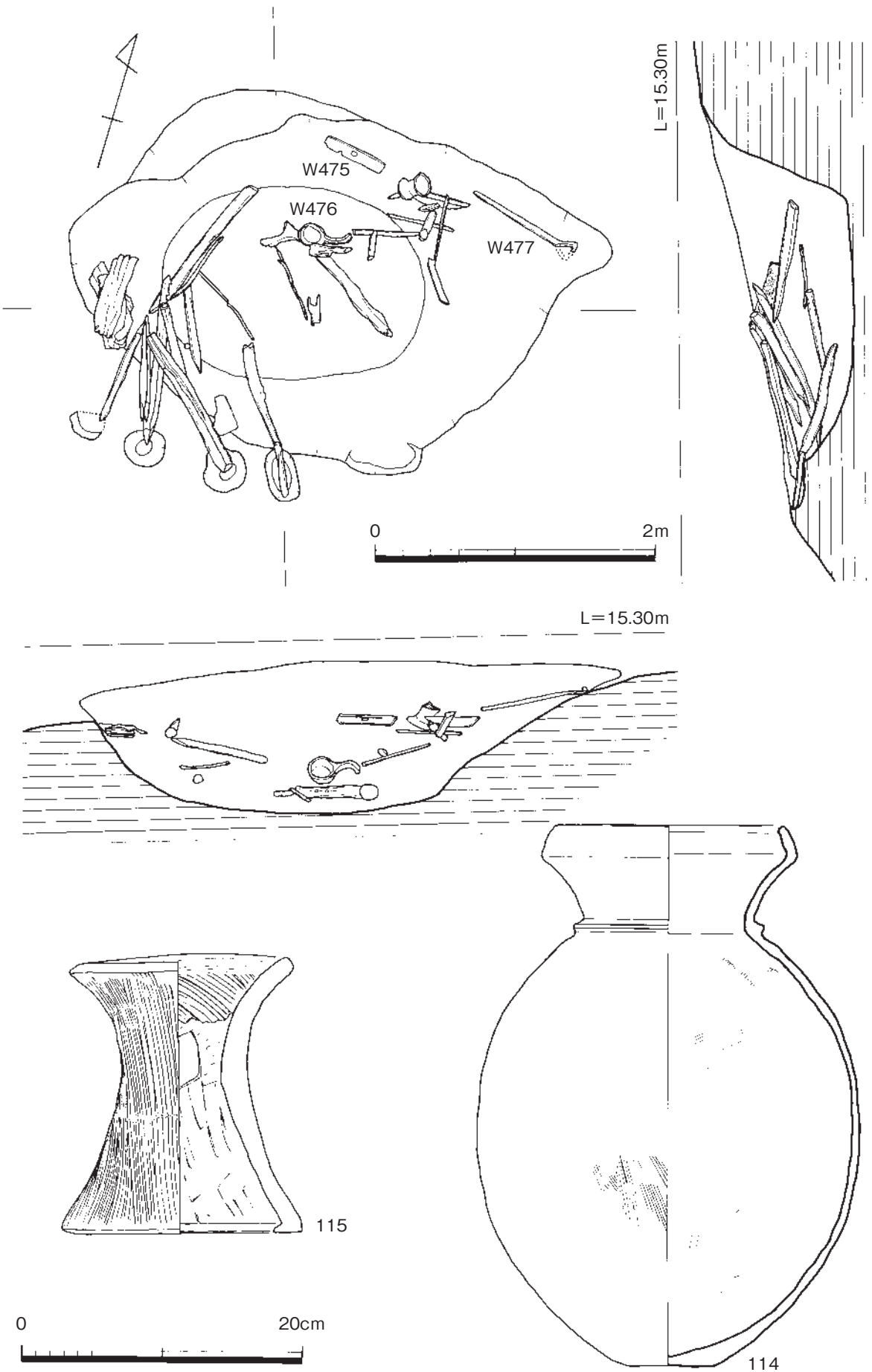
さらにこれらを覆うようにP116、117など多量の土器が周囲から出土しており（図版12-d）、土壌の廃棄に伴う祭祀によるものと考えられる。

**土器**（第123図，図版55）

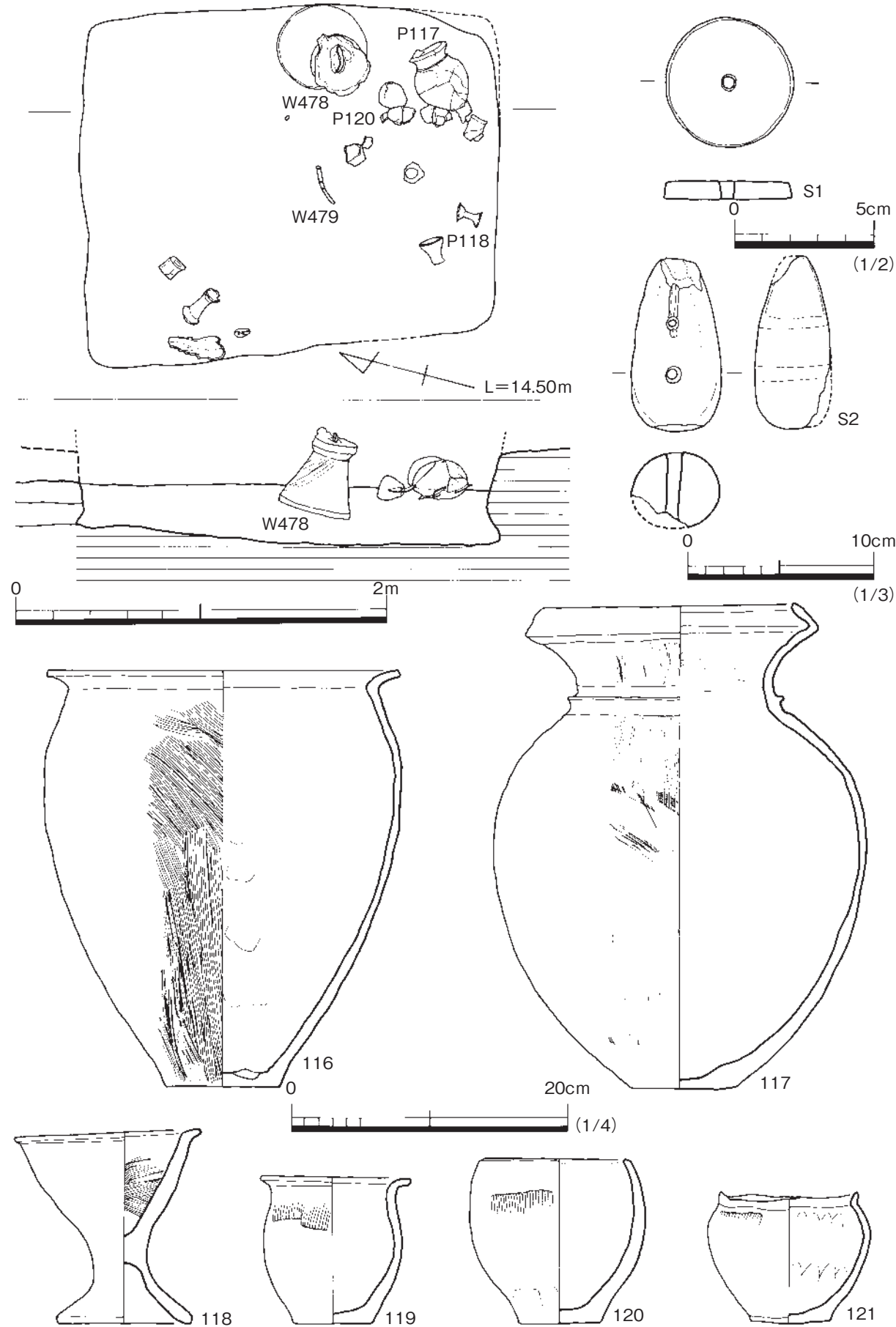
P116は、臼の周囲から出土した甕である。底部から外反ぎみに立ち上がり口縁部は鋭く横に開く。高さは30.0cm、口縁径は25.8cmを測り、胴部最大径にほぼ等しい。外面縦ハケ、内面は板ナデで仕上げる。



第122図 1号土壌出土木器実測図（1/4）



第121図 1号土壌及び出土土器実測図（1/40，1/4）



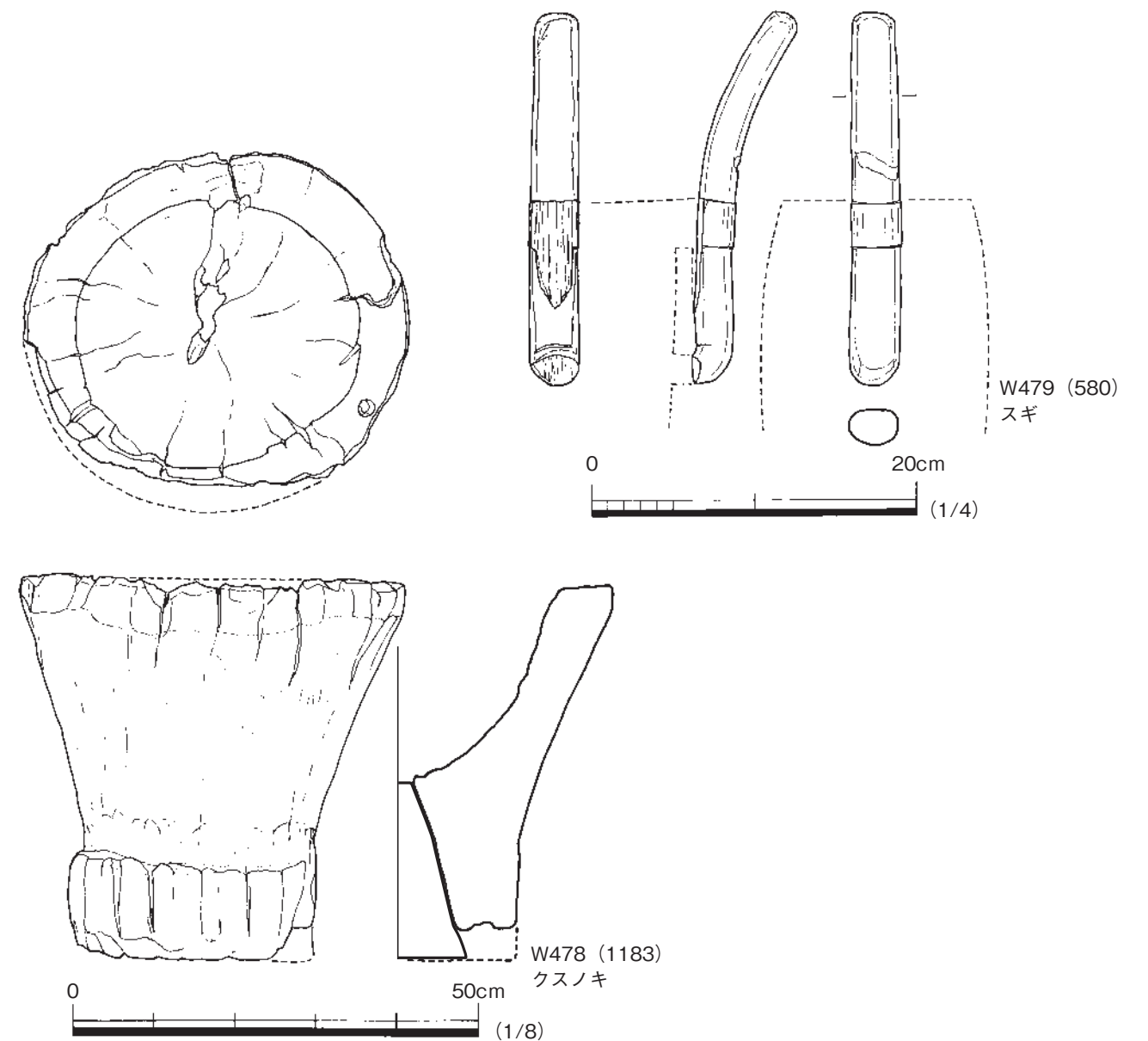
第123図 2号土壌実測図 (1/30) および出土石器実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

P117は、複合口縁壺である。平底でわずかに外反して立ち上がる。やや肩が張る胴部から短く外反する頸部に続き、屈曲部から口縁に向かって鋭く内傾する。

P118~121はミニチュア土器で、ハケ、ナデなど手捏ねでの成形で、磨きなどの精緻な調整は認められない。P118は短単脚で鋤先口縁をつまみ出す。P119は口縁を如意状、P121は、「く」の字状に外反させている。

石器 (第123図, 図版55)

S1は、砂岩(滑石)製の完形の紡錘車で、裏底の破損部の隙間に挟み込まれていた。祭祀儀礼的な意図を感じさせる。径4.6cm 厚0.7cmを測る。



第124図 2号土壌出土木器実測図 (1/4, 1/8)



S2は、結晶片岩製の水滴状の有溝石錘である。長さ9.3cm、幅4.8cm、厚さ4.2cm、重さ228gを測る。縦に2孔が並び、上の孔から頭をめぐるように溝が施される。

**木器** (第124図, 図版55)

W478は、クスノキを縦木取りした芯持ち材の臼で、使用時の姿をよく残している。台部は本来、W143のように裾広がりであったと考えられるが、出土時には周囲が削ぎ落ちた状態であった。また、出土時には上端に5cmほど横に貼りだした一対の方形の把手が残存していたが、現場での作業中に欠失してしまった。

W479は、片手桶状容器の把手でスギ材を用いる。把手は容器体から横に張り出した後に外反しながら延び先端は丸く納める。柄の付根の中ほどにはスリット状の長方形の透かしが設けられ、その上部は口縁部の高さに合わせて帯状に段を削り出す。類似資料が利田柳遺跡(佐賀県神埼市)、今宿五郎江遺跡6次調査でも出土しており、祖型は猫橋遺跡(石川県金沢市)出土の片手桶に類似する形態と考えられる。

**3) 3号土壇** (第125図, 図版13-a)

6区の南で検出した楕円形プランの土壇で断面は逆台形を呈する。N8°Wに主軸を向け、長さ244cm、幅167cm、深さ40cmを測る。南端には短い尾状くぼみ突出する。底面は湧水層に達する。出土土器から弥生時代終末の遺構と考えられる。

土壇埋土の上層から打ち欠かれた複合口縁壺の頸部と脚部を打ち欠いた器台が出土した。

**土器** (第125図, 図版56)

P122は、大型複合口縁壺の頸部で打ち欠き切断されたものである。頸部の屈曲部から口縁にかけて鋭くS字に屈曲する。内外面とも粗いハケとナデで仕上げる。

P123, P124は、器台である。P123は、クビレ部は絞り込んで成形した後に内外面ともタテハケで仕上げる。P124は、前者よりも一回り大きく受部の反転も著しい。脚は内湾気味に踏ん張りぎみである。受部先端は丸みをのこし、斜めの刻み目をめぐらす。

**4) 4号土壇** (第126図, 図版13-b)

6区南で検出した隅丸台形プランの土壇で断面は逆台形を呈する。N9°Wに主軸を向け、長さ161cm、幅122cm、深さ55cmを測り、底面は湧水層に達する。時期の詳細は不明である。

埋土から斧柄未製品(W480)、三又鋏(W481)、又柱(W482)、棒材、原木等が出土した。

**木器** (第128図, 図版56)

W480は、曲り柄斧柄の未製品で、台部は粗割成形段階である。

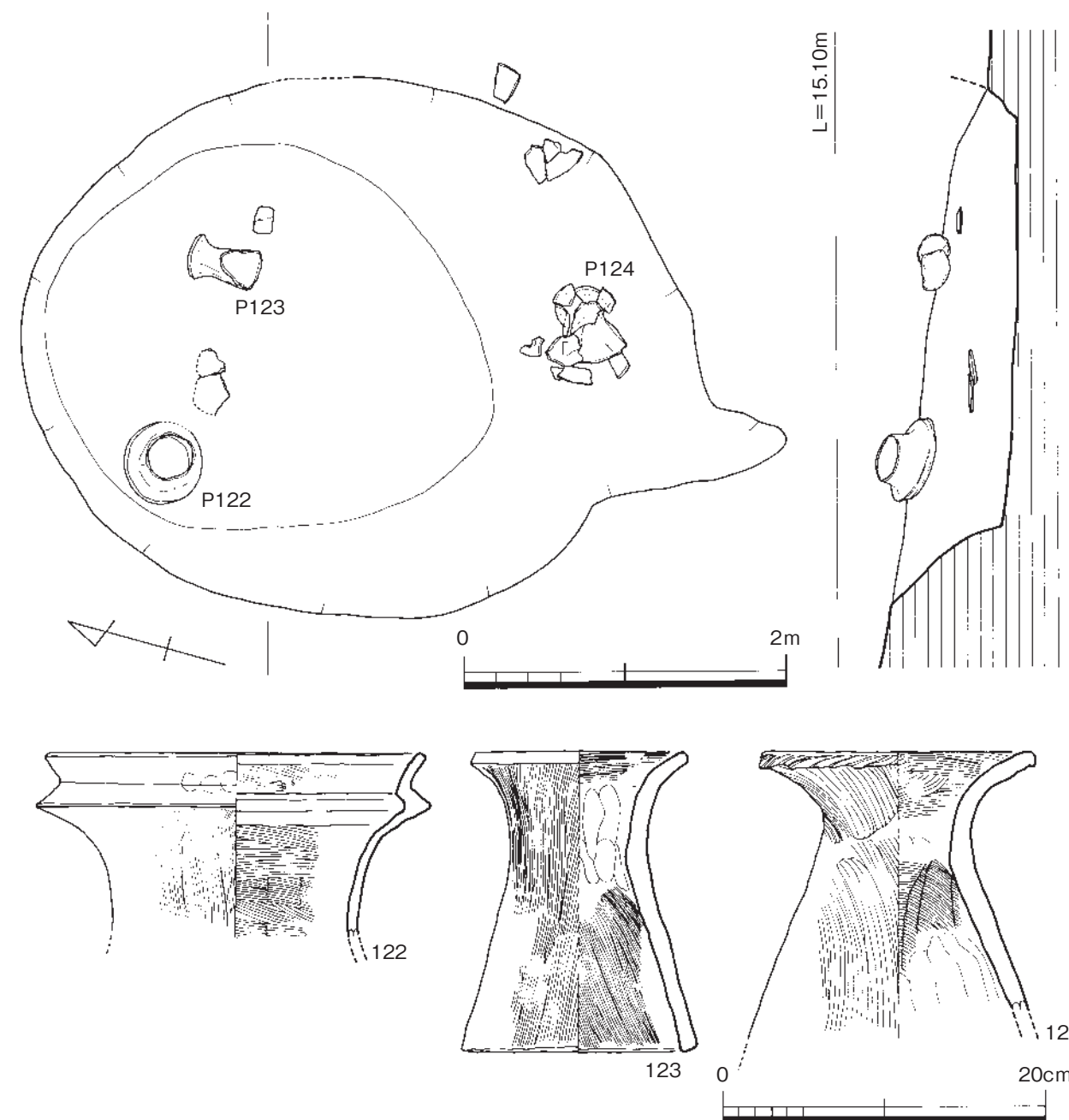
W481は、三又鋏である。身長35.8cm、幅15.1cm、厚さ2.2cmで、側縁の刃部は一度大きく外に開き肩が張る。つくりは粗く左右非対称である。

W482は、建物の柱で先端は二又に分かれる。転用のためか途中で切断されており、残存部も調査中の冠水で一部が流失した。

**5) 3号木器溜まり** (第127図, 図版13)

7区の南土層壁にかかるように植物遺体層中から雑木小枝とともに杵状の木組みを検出し

た。確認のため周囲を掘り広げたところ、2体の木組み製品(W483, 484)が、杵を絡ませた状態で出土した。出土状況を詳細に観察したところ、W483を杵ごと484の杵のなかに潜らせた状態であることを確認した。調査中には度重なる冠水によって部材の一部が流失したことで、現地説明会では、2体がそれぞれの杵の中を通して絡み合うかのように速報したため、2体を組み合わせて使用する案も提示されたが、検出直後の記録写真(図版12-c)によって上記のような出土状態であったことが確認できたので、2体がそれぞれ完結する製品であることが判明した。



第125図 3号土壇 (1/20) および出土土器実測図 (1/4)

なお、後述するようにW483は背負梯子の可能性が高いと考えたが、W484はよく似た組み方をしているものの、背負梯子とするには疑問もあり、現状では背負梯子状木製品と称しておく。このことについては、近年、北部九州を中心に類似する部材が多く出土していることを踏まえ、詳細について改めて報告する予定である。

**背負梯子 (第129・130図, 図版57)**

W483は、背負梯子である。部分によっては木質の劣化が進んではいるものの、組み合わせた状態をほぼ保った状態で出土した。高さ80.6cm、幅41.1cmを測り、左右に縦木、横棧として上から荷棧、中棧、下棧を配し台形状に枠を組む。中棧は荷棧の下21cmに縦木の側面から3.5cm×1.9cmの長方形孔から差し込んでいる。さらにこれと荷棧の間には、縦木の内側に溝を彫って薄い背板をはめ込んでいるが、溝が破損したため一部は枠からからはみ出していた。中棧は枠の補強と背板の固定の両機能を兼ねたものと推定される。

個々の部材について、縦木の上端は柄状に一段と薄く削り端部は丸く整形している。上棧両端の柄穴に縦木を通したあとで、縦木に楔を打ち込んで固定したと推定される。背板が嵌め込まれた位置の外縁はなだらかな弧を描くように削り込まれる。中棧木と下棧木の間は厚みがあり、3個の長方形孔を穿ちそこから内側に向かって浅い溝が穿たれ、孔から外側は一段薄く削り込まれる。下棧木の位置に合わせて5.0cm×2.8cmほどの長方形の柄穴も穿たれている。

荷棧の中央には幅3.0cmほどの挟りを設け、この位置と薄板上縁に挟られた4.0cm×1.5cmの長方形の切り込みの位置を合わせている。薄板の両側縁は表裏ともに縁に向かってさらに薄くなるように削り込まれる一方、下端部縁は一段厚く削り出される。頭部の保護板であろう。使用材は全てアカガシ亜属である。

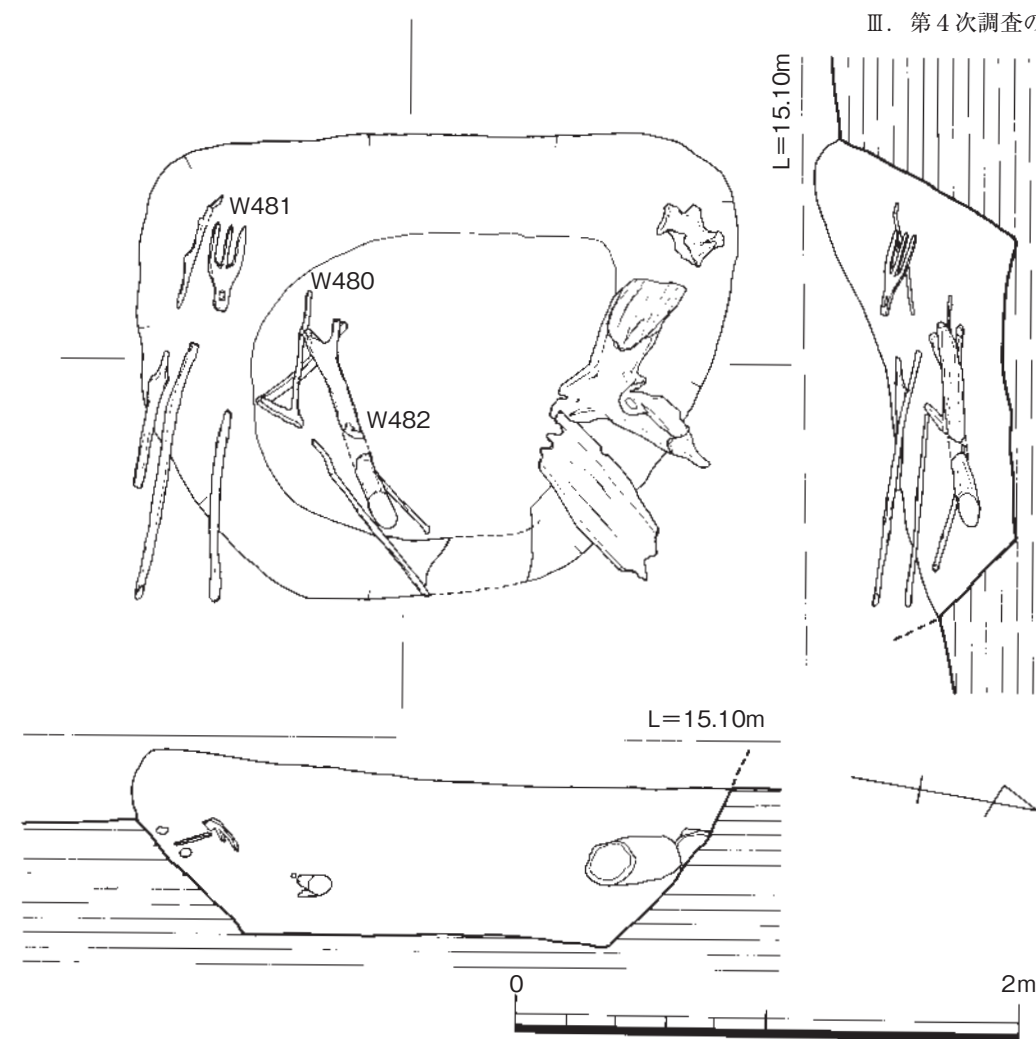
**背負梯子状木製品 (第131図, 図版58)**

W484は、腐朽が進行していたため、縦木、棧木の一部を取り上げることができなかったが、現地で組み合わせ状態が確認できたので、旧形を復元することができる。

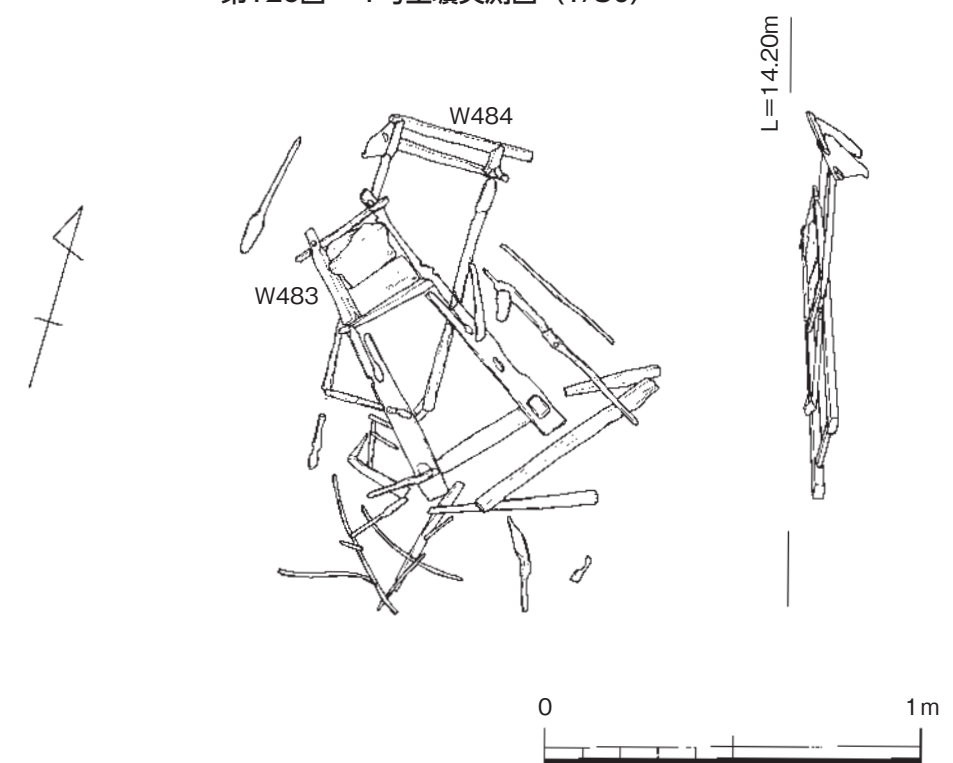
組合せ状態では高さ79.8cm、幅39.6cmを測り、2本の縦木と、3本の棧木で枠を組む。柄と柄穴を用いて組む基本構造は748と同じであるが、構成部材の形状と組み方が異なる。

まず個々の部材をみると、縦木はサカキの枝分かれ部を用い、径1.5cm～2.7cmほどの華奢な枝部を縦木に充て、その根幹の枝分かれ部から幹を板状に削り出している。棧木は「く」の字状を呈する枝分かれ部の基部に1ヵ所、板部の中央付近に1ヵ所、長方形の柄穴を設け棧木を差し込んで組んでいる。板部の柄穴は中途から先端にかけて欠失しているが、板部の本来の形状はW440が参考になるだろう。

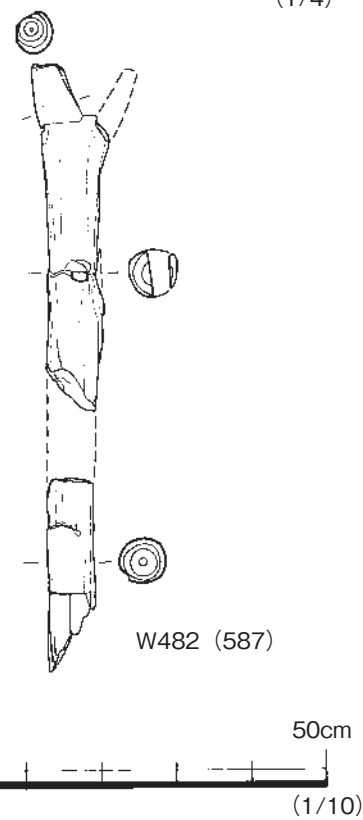
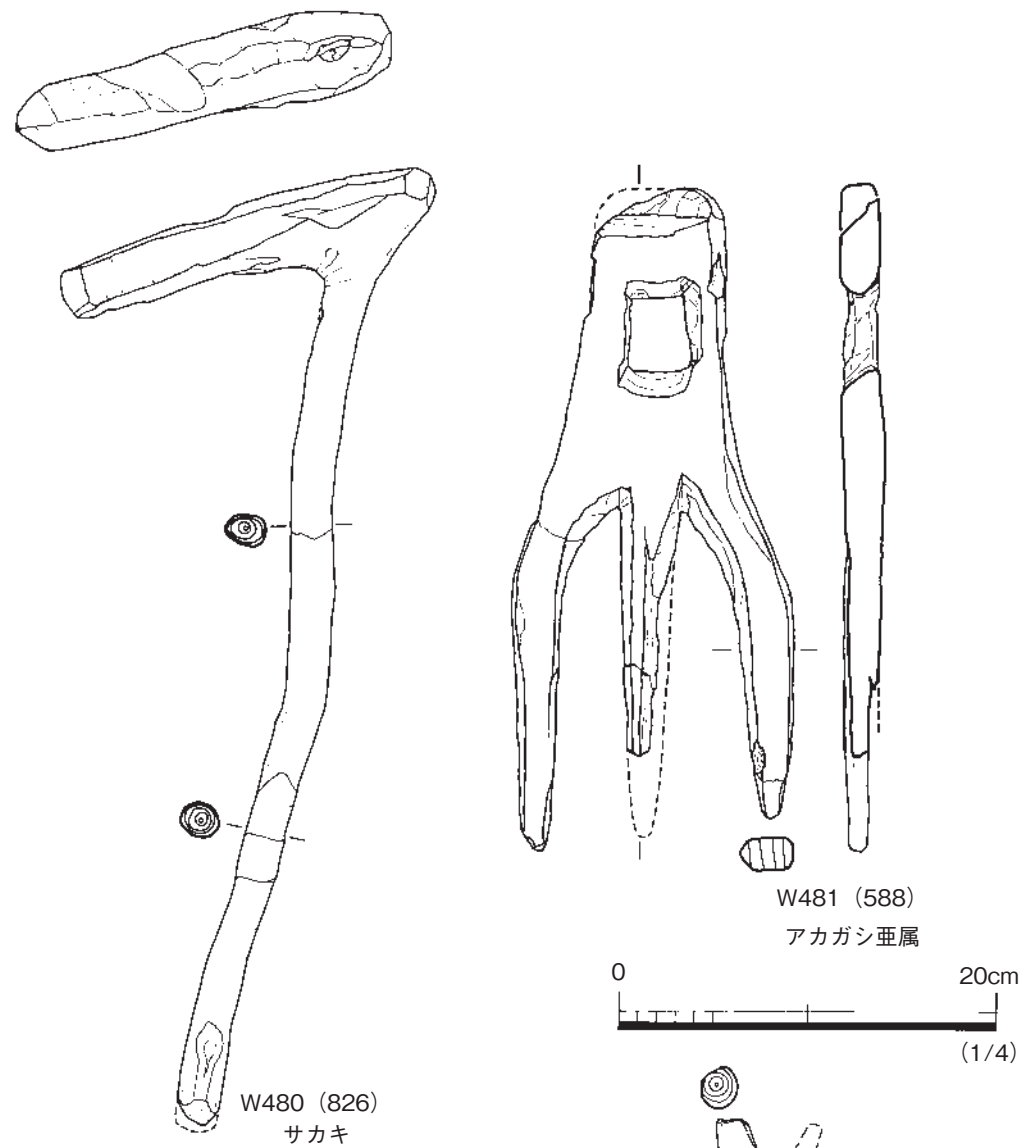
上棧は一端を欠失するが、本来は両端近くに柄穴に設けて縦木を通したのであろう。W483と同様に中央を削り込みの段が施され、これから反転復元すると、棧木の全長は28cmほどに復元される。強化棧木は断面1.6cm×1.4cmの長方形プランを呈する細い材が差し込まれているのに対し、下棧木は幅2.3～3.4cm、厚さ0.8～1.4cmで、中央部が膨らむように加工されている。乾燥によって収縮が進んだためか柄穴と比べると棧木の断面は小さめで柄穴との間に隙間が目立つ。棧木の樹種はアカガシ亜属である。



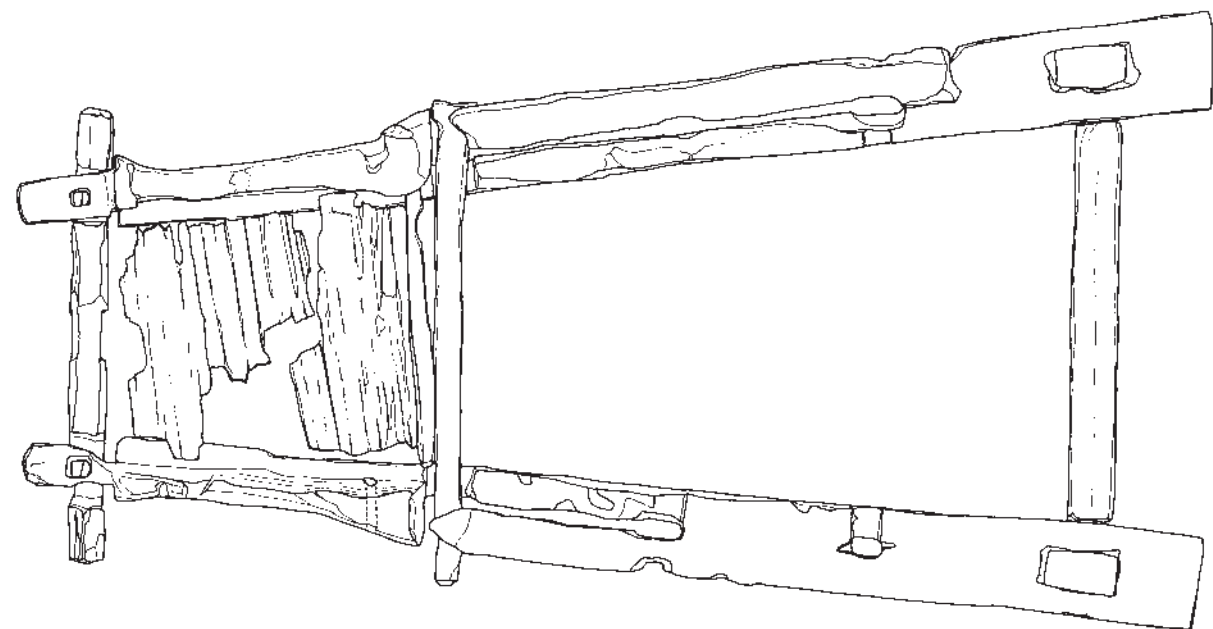
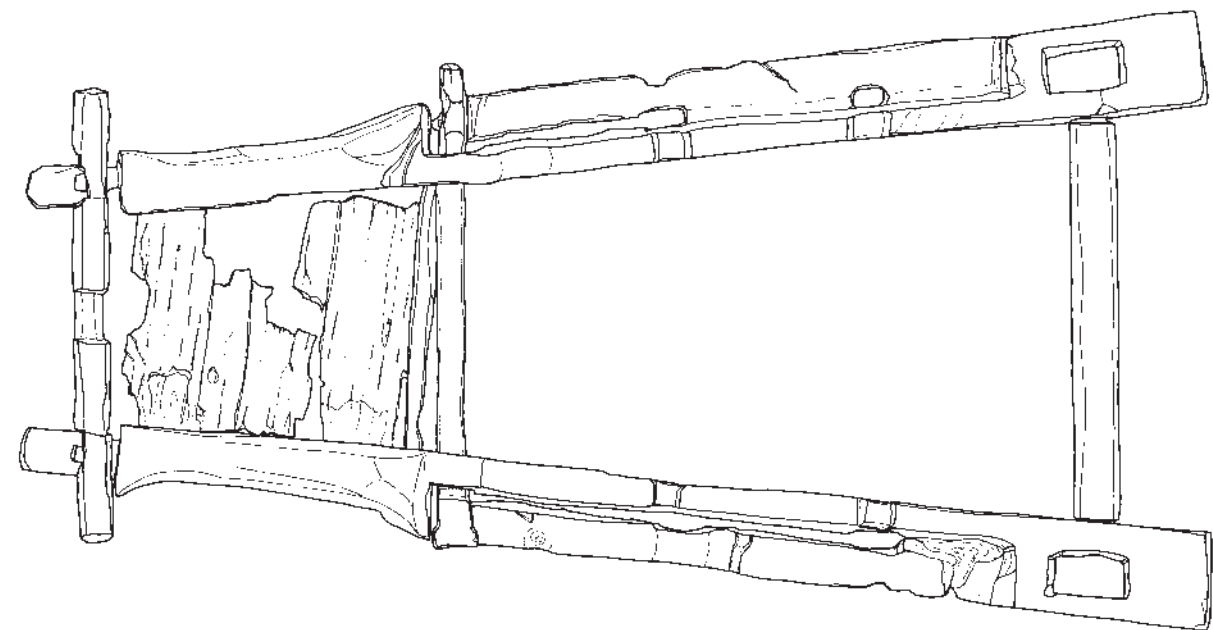
第126図 4号土壙実測図 (1/30)



第127図 3号木器溜まり実測図 (1/20)

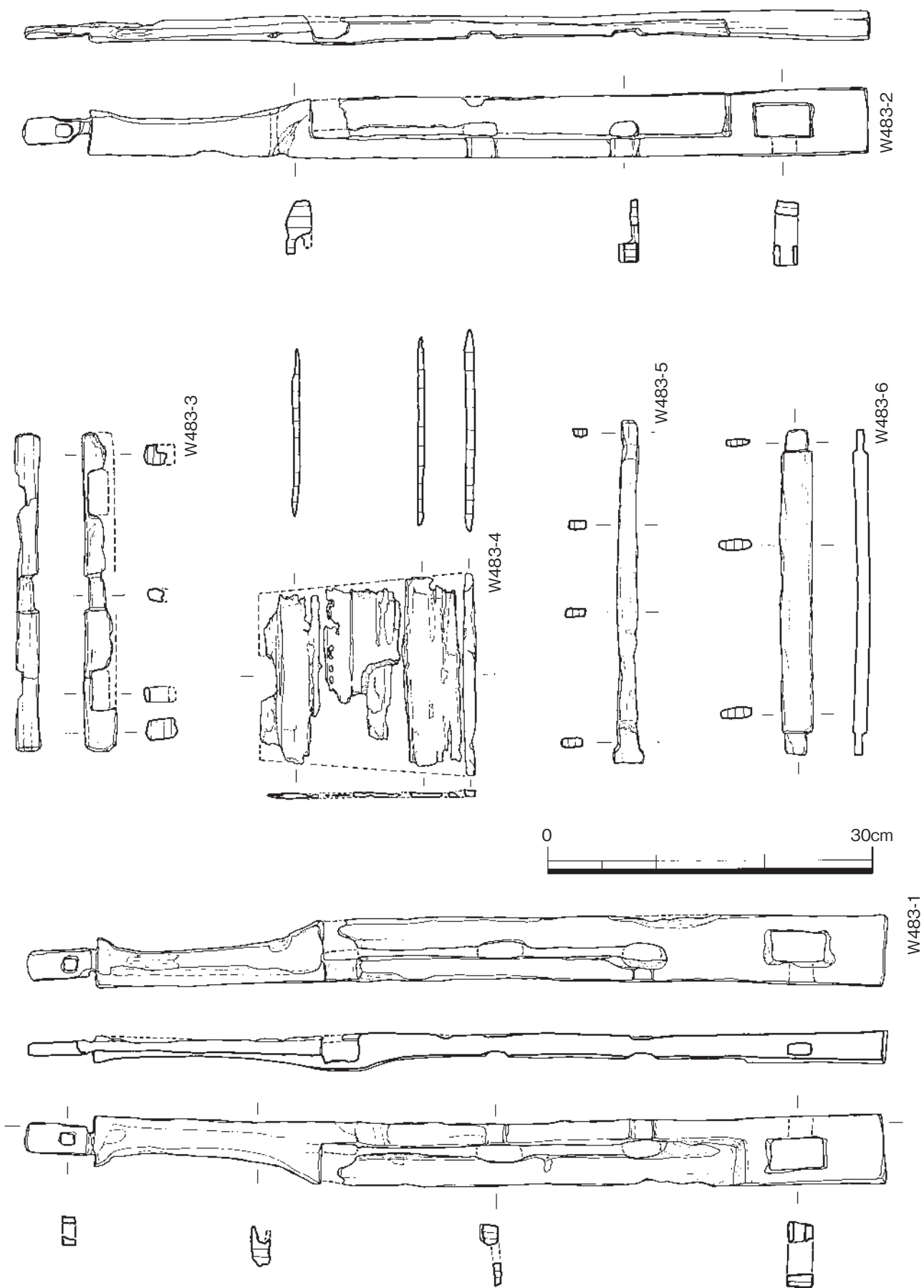


第128図 4号土壌出土木器実測図 (1/4, 1/10)

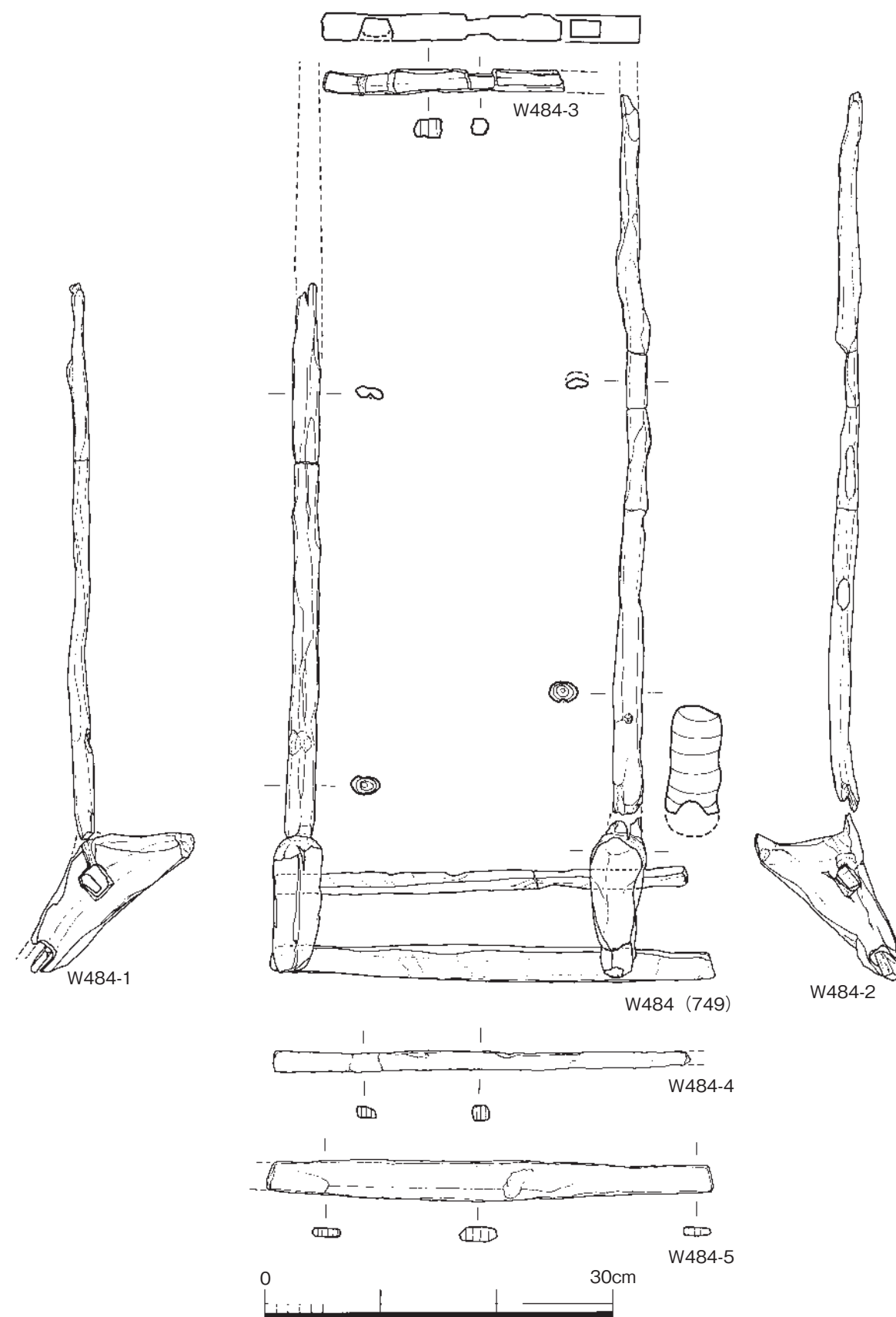


第129図 3号木器溜まり出土背負梯子実測図 (1/5)





第130図 W483背負梯子構成材実測図 (1/5)



第131図 W484背負梯子状木製品および構成材実測図 (1/5)

6) 4号木器溜まり (第132図, 図版14)

4区北西部で検出した木器群である。1m×1.5mの楕円形の範囲に弥生後期前葉の甕、鉢とともに動物形容器 (W337)、動物形 (W368)、斧柄 (W3)、脚付容器の脚部 (W343)、蓋 (W351) などが出土した (図版14 a)。上面からの観察では、土壌の輪部を確認することができなかったが、木器は深さ40cmまで播鉢状に一塊となって堆積していることが明らかとなり、土壌であった可能性が高い。出土した木器の中には完形に近い保存状態が良好なものも多く、動物形は木器群の上面から重ねて置かれるように出土した。祭祀行為による埋納であった可能性もある。

時期的には伴出土器から後期前葉のものであろう。

なお、発掘調査時に5層出土遺物として取り上げていたため、木器は本報告書中でも5層出土遺物中に含めてレイアウトしていることを御容赦いただきたい。

土器 (第132図, 図版58)

P125は、複合口縁壺である。底部からわずかに外反気味に立ち上がる胴部は長胴形で、短い頸部からくの字に屈曲する複合口縁にいたる。底部中央には穿孔が認められる。

P126は小型の甕である。平底からわずかに外反しながら直線的に立ち上がり、肩部から少し内傾した後に口縁下で如意状に屈曲する。外面はタテハケ、内面はナデで仕上げる。P127は鉢で、平底の底部からの外反ぎみに立ち上がるものややあまい。内外面ともにナデで仕上げる。

木器

W3は、板状鉄斧柄で、柄の手元付近は土圧のためか弓なりに湾曲変形している。

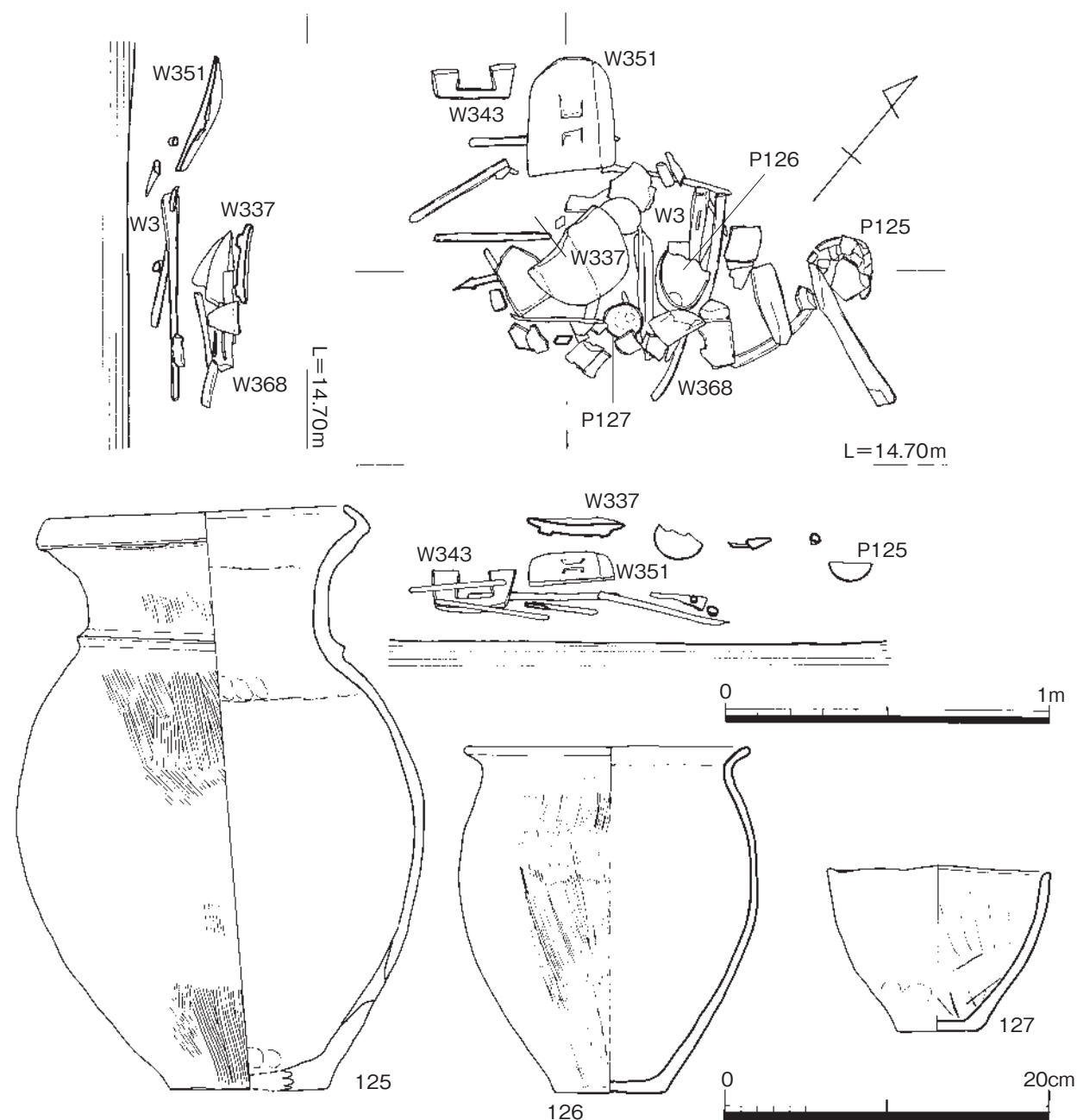
W337は、クヌギ節の柁目材を用いた円形の皿状容器で厚手のつくりである。下面に短い円柱状の脚を4本削り出すが、図上右側の2脚が若干高く、器面がわが意に傾斜し、器に前後があることを想起させる。わずかに内向きに踏ん張るように屈曲させる造形は獣脚を象ったものと考えられる。平面観を重視すれば亀やスッポンなどではなかろうか。

W343は、クヌギ節を用いた双脚の小型容器の脚部で、法量はW342に近い。中央に台形の透かしを施す。

W351は、アカガシ亜属材を用いた横長の容器蓋で、縁の一方は隅丸方形であるが他方は半円形を呈する。断面は中央が浅く山形に盛り上がり、2方向から「コ」の字状に欠き込みを施して把手とする。木製容器の蓋であらう。

W368は、四足動物で、3号木器溜りから他の木製品とともに重ねられて出土した。アカガシ亜属の棒材から加工されている。断面が不正円形の胴部から短い四脚が足元を前に少し投げ出すように造り出されている。首は周囲を掘り込んで玉ねぎ状に削り出し、その前方にでこから眉間にかけて少し彫りが深い。顔面は平滑で、鼻は中央に鼻筋を通して明確に削り出し、その直下に口を刻み、あごはやや張り出している。

肩はやや盛り上がり気味に削り出す。尻尾は、特段の整形はなく、周囲から削り込むだけの簡便な成形に留まっており、全体の加工は粗く研磨などの仕上げは行われていないため、加工痕が明瞭に残る。外見から犬形と考えたが、猪、猿なども候補に上げられる。



第132図 4号木器溜まり実測図 (1/20) および出土土器実測図 (1/4)

## 8. 古墳時代の遺構、遺物

### (1) 概要

2層（黒色粘土層）下に掘り込まれた遺構には古墳時代中期以後の土器が多く出土し、3層上面では古式土師器も多く出土しており、3層上から2層が主に古墳時代前半期の堆積であることがわかる。分布傾向を寄り詳しくみても、1～3区にかけては前期から後期までの土器が出土し、後述する取水、導水遺構の成立・運用期間として考慮する必要がある。しかし、4区以後は古式土師器の出土割合が高く、中期以後の遺物の出土は激減することから、施設の主たる供用空間をある程度へ絞り込むことができる。

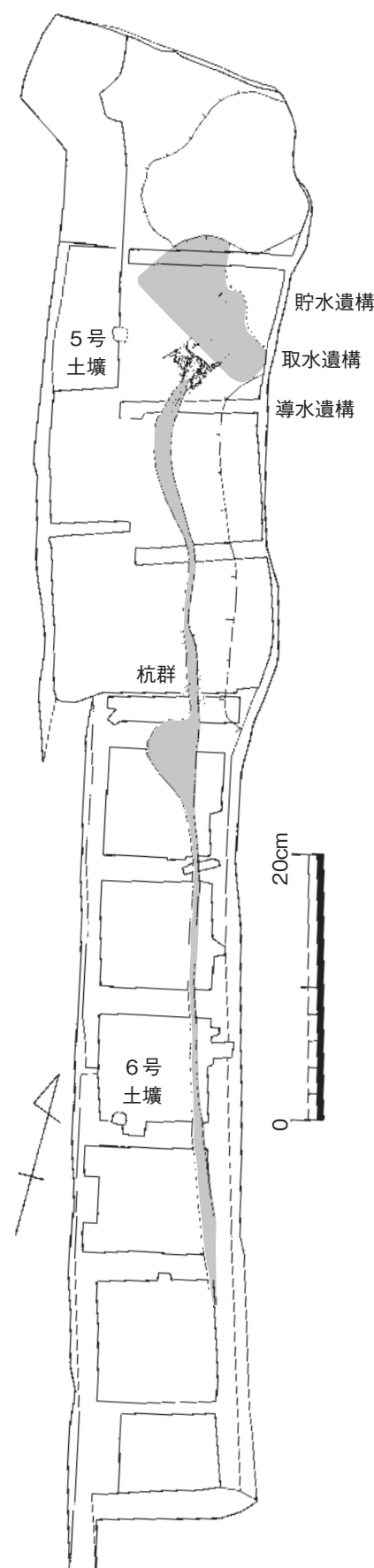
古墳時代の遺構としては、1区～2区で井泉と取水遺構、そこから谷間に水を排水した導水遺構と溝、さらに少し離れた下流に溝を跨いで打設された杭列群（4区）があり、これらは一連の施設と考えられる。この他に方形土壇2基（2区、7区）を検出した。

これらはいずれも、谷底が完全に埋没した後に新たに掘削、利用されたものである。

### (2) 貯水遺構

2区の中央で検出した木組み遺構から北東方向に幅3～7.5m、北西～南東幅南西方向に長さ11.5mほどの範囲で黒色粘土の溜まりを検出した。木組み遺構の対岸は、砂礫層である。表土剥ぎの際に2層の表壁をバックホーで除去すると間もなく黒色粘土の周囲から水が染み出し、瞬く間に一帯が水浸しになるほどであった。黒色粘土の範囲は概ね第12図の編み掛け部の範囲となり、以下の特徴が観察された。

- ア) 2区の中央付近では黒色粘土が深くまで堆積し、3、4層、5層の存在を確認できなかった。
- イ) 他の地区では弥生時代後期の土器が大量に出土したが、2区では当該期土器および5層に伴う、木器の出土量も極めて少なかった（第12図）。
- ウ) 黒色粘土中からは須恵器、土師器壺などが出土し、黒色粘土層の溜まりの周囲から布留式期の大型の土師器甕や壺、高坏、が出土した。
- エ) 2区中央は地山の砂礫層が掘り窪められて周囲よりも低めであった（第10図断面比較参照）。



第133図 古墳時代の遺構配置 (1/500)

上記の状況から、2区では弥生後期前葉に埋没陸化した後、古墳時代前期に湧水に対する祭祀が再開され、さらに中期になると新たに人為的に掘削された貯水遺構が構築されたと推定した。

なお、発掘開始直後の湧水現象の後、その原因を的確に判断することができないまま、土層観察等を設けずに一様に掘り下げたため、遺構の性格について現地で深く検討することができなかったことは、ひとえに担当者の力量不足によるものである。

### 土器 (第134・135図, 図版59, 60)

3層上では谷部の各所から古式土師器が出土しているが、甕は広範囲で出土しているのに対し、P134、140などの大型土器は2区東部に集中する傾向がみられた。また、貯水遺構、取水遺構を中心に須恵器や土師器壺などが出土した。

貯水遺構、取水・導水遺構の構築時期について、古墳時代前期にさかのぼる可能性があるものの、埋土から古式土師器の出土はほとんど認められないことから、古墳時代中期中葉以後に構築、利用された可能性が高いと推定される。

**古式土師器** 甕は、胴部が球形を有するP128、P131と、肩部がやや張った倒卵形を呈するP129、P130がある。いずれも器壁は極めて薄く、外部はタテハケの後に肩部付近に横ハケ、内面はケズリが施される。P131は、山陰系二重口縁壺で胴部は球形を呈し、口縁部の稜はあまい。P132は小型丸底壺で、器壁は極めて薄い。P135は山陰系鼓形器台で、器高が高く、くびれ部の上下にめぐむ稜は鋭い。P136は高坏坏部で、内外面とも口縁部下に縦方向の暗文状の磨きを施す。

P134は大型の直口壺で胴部は扁平気味で内外面ともハケで仕上げ、器壁は厚い。P140は大型の山陰系二重口縁壺で、2区の土器溜り上面で、上から潰されたかのようにまとまって出土した（図版14e）。

壺は、半球形に近いP137と、扁球形のP138、P139などがあり、後者は胎土がきめ細かく細かいハケとナデ調整で仕上げる。

**須恵器** 杯蓋は、口径が小型で稜線がシャープなP141、P142、口径がやや大きめで口唇内面が二段となる143、145、さらに口径が大型化し、口縁部が外に張り出す146、147、天井部との境の稜が溝状と化す151、153等の四類に大別され、坏身の変化もこれに準ずる。概ねTK47～TK10型式期に相応するものと考えられる。

P164は甕で、口の大きな胴部から口縁に向かって斜めに大きく外反し、頸部には反復が小さな櫛描波状文が配される。P166は、須恵器に似せた土師器杯身である。

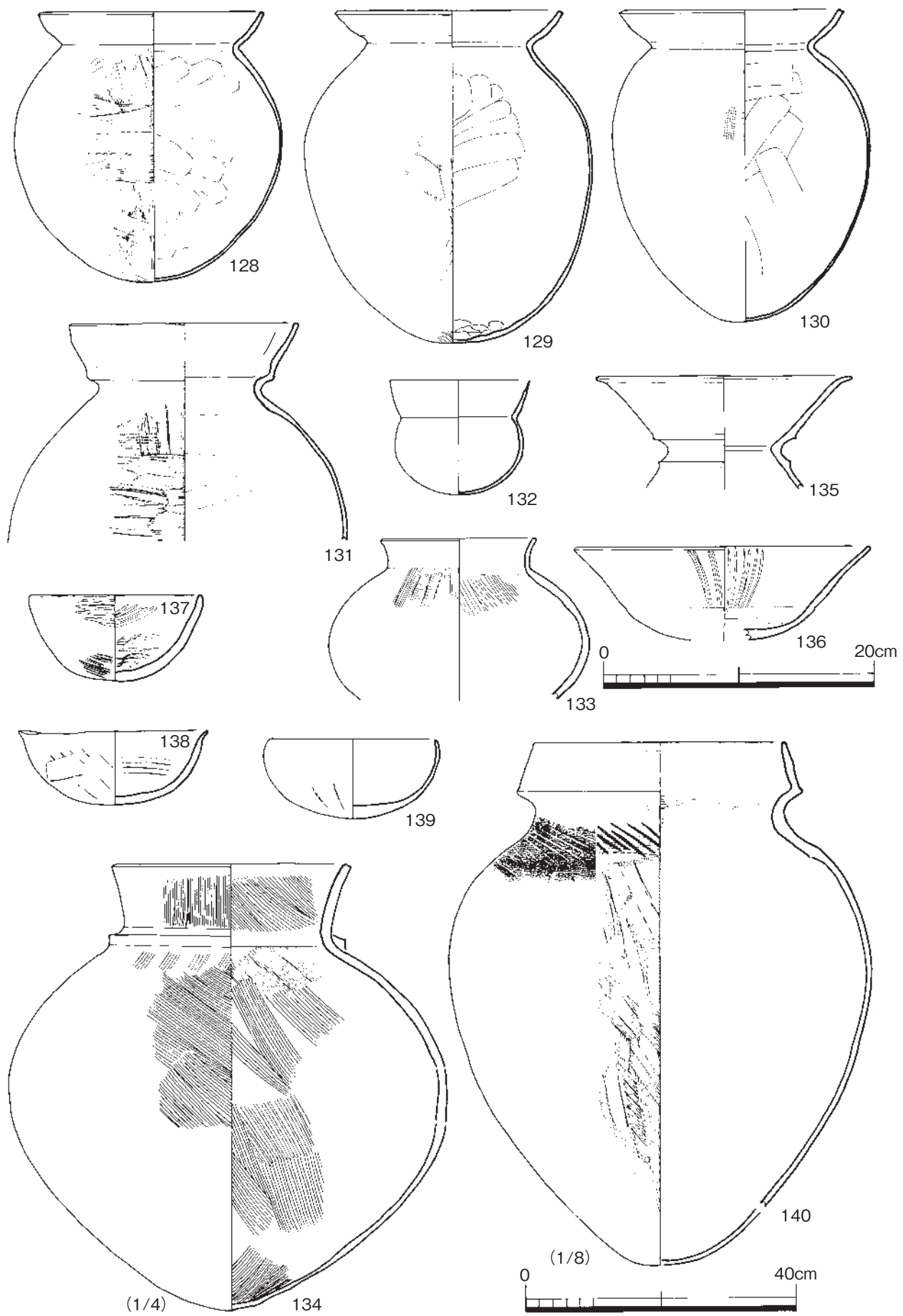
少量であるが奈良時代の須恵器も出土しており上層からの混入と考えられる。P162は、杯身で、扁平つまみが付く。高坏163は、脚柱部に円形透かし孔が施される。P165は広口壺で、口縁部は下方への折り返す。

### (3) 取水遺構・導水遺構 (第133図, 図版15)

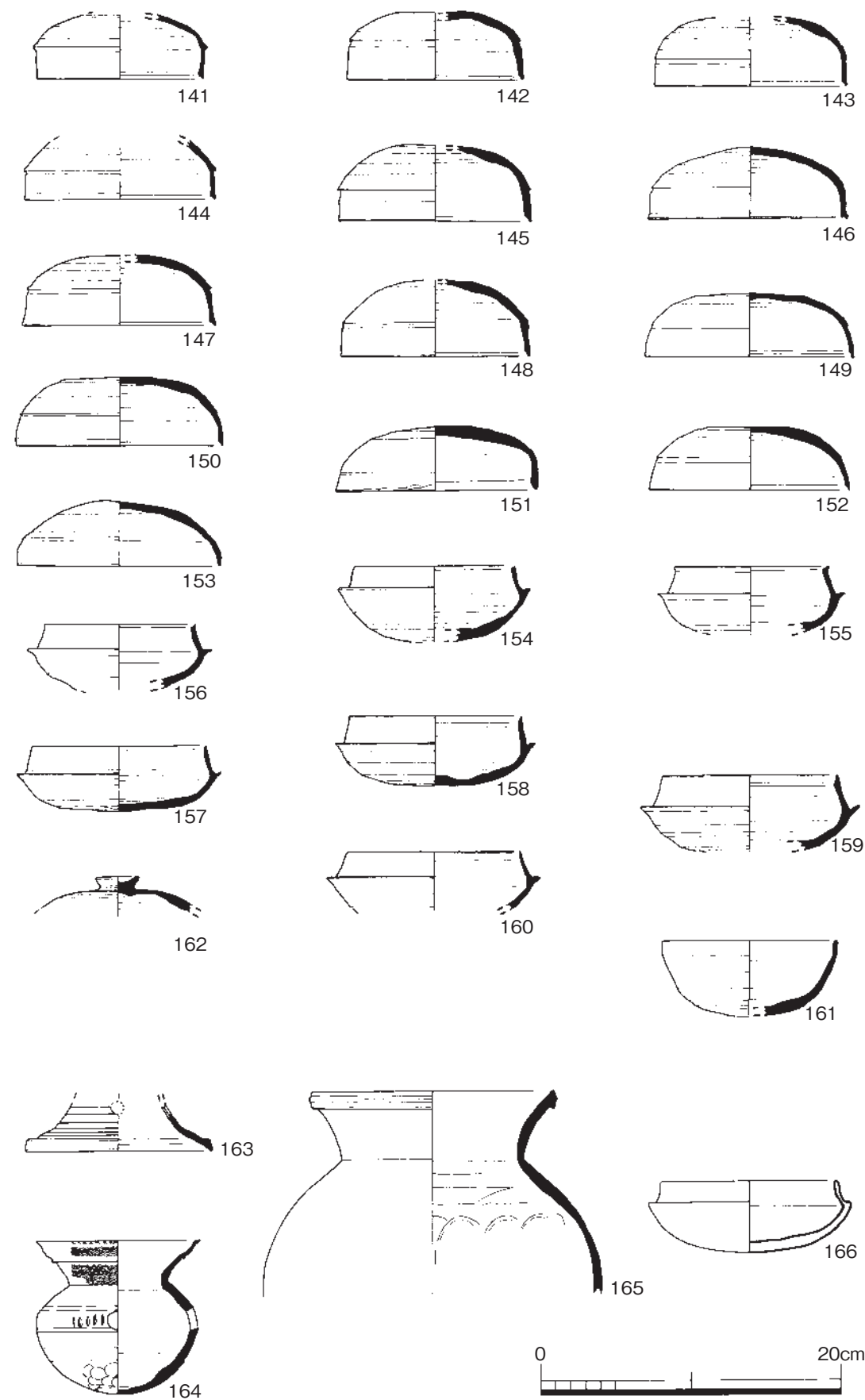
貯水遺構の南端で、取水遺構と、さらに素掘り溝へと接続する導水遺構を検出した。連続する一連の遺構であるため、一括して報告する。

**取水遺構** 灰黒色粘質土層を2.4m四方、深さ70cmほどの範囲を掘り下げ、扉板を転用した

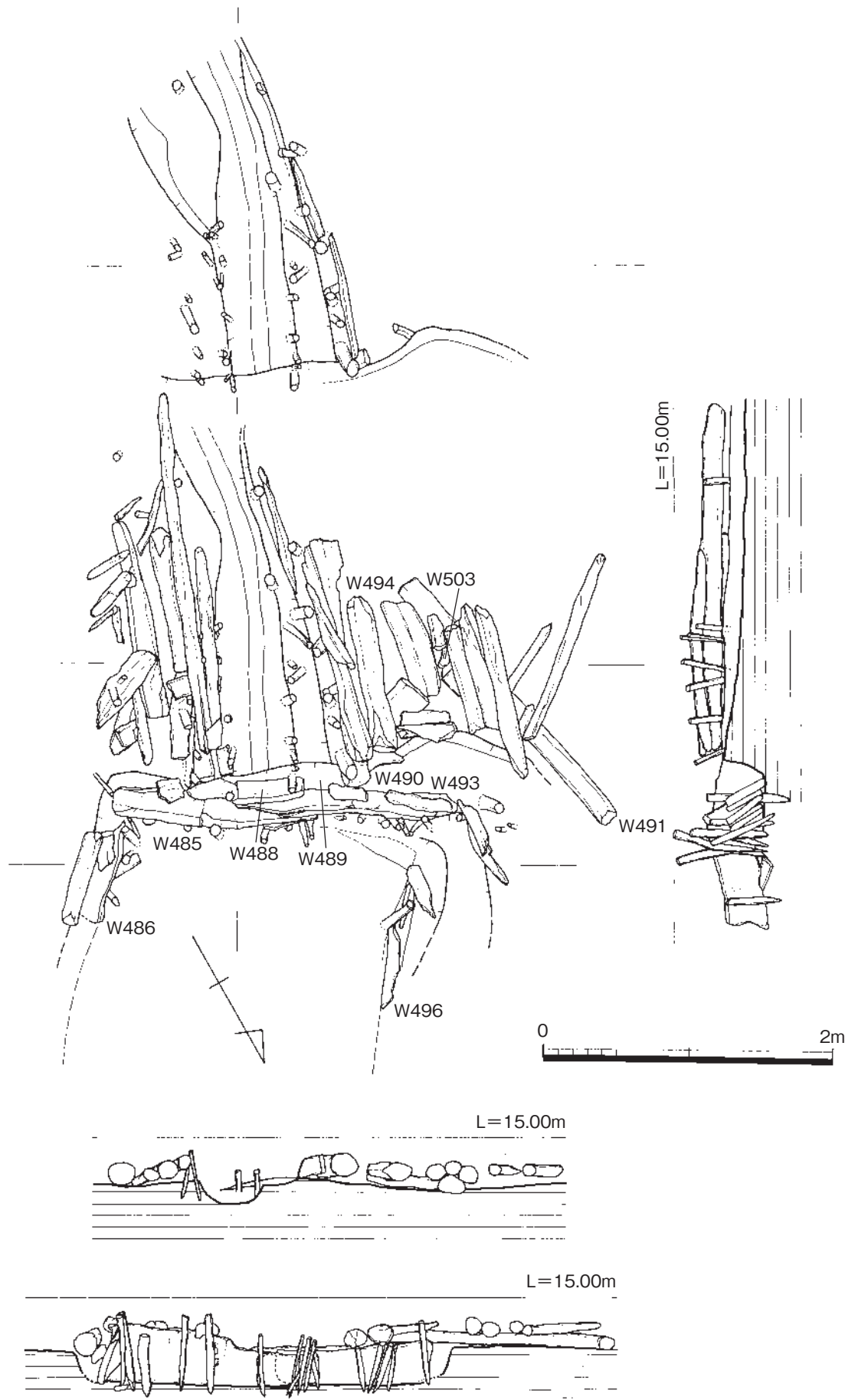




第134図 2層出土土器実測図1 (1/4, 1/8)



第135図 2層出土土器実測図2 (1/4)



第136図 取水・導水遺構実測図 (1/40)

幅広の板を「コ」の字形に組んで護岸し、板の表裏面に小杭を打ち込んで固定したものである。残存する板壁は南辺で2.4m、東辺で0.8m、西辺で1.2mほどであるが、方形の深い掘り込みは板よりもさらに北に向かって延びることが確認されたことから、設置当初は「口」の字形に井桁状に囲っていた可能性もあるが詳細は明らかでない。

板の組み方を詳細に見てみると、縁の高さを丁寧に揃えているわけでもなく、相互の板の合わせ目も隙間がみられるなど概して雑な印象を受けるが、出水口だけは3枚の扉板（W485, 489, 490）を交差するように並べて、その中央に幅40cm、深さ10cmほどの浅いU字形に挟むなど丁寧な板組みがみられた。出水口の南側には長さ60cmほどの関板（W458）を嵌めて、出水口の開閉や水量の調整を行ったとみられる。

**導水遺構** 出水口の南に接して東西2.9m、南北2.7mの範囲に丸太材や板材が南北方向に揃えて敷き詰められていた。丸太材の中には直径が15cmほどの大型材で側面に溝を削り込んだもの（W491）や、刃材部を手斧で面取りして柄や突出部を削り出したものなど大掛かりな仕口を設けた材もあり、高床建物などの大型建築材が転用されたものと考えられる。

木材敷の中央からやや東に寄った位置に、出水口から続く幅1mほどの素掘り水路が設けられ、水路に面して兩岸に棒杭も打ち込まれていた。敷き並べた木材の固定、水路幅の確保・維持が図られたことがうかがえる。

水路の東西断面観察（第123図②）で、高さを離れた2段の流路の痕跡を確認した。西から東に水路の掘り替え、改修が行われた痕跡と考えられる。

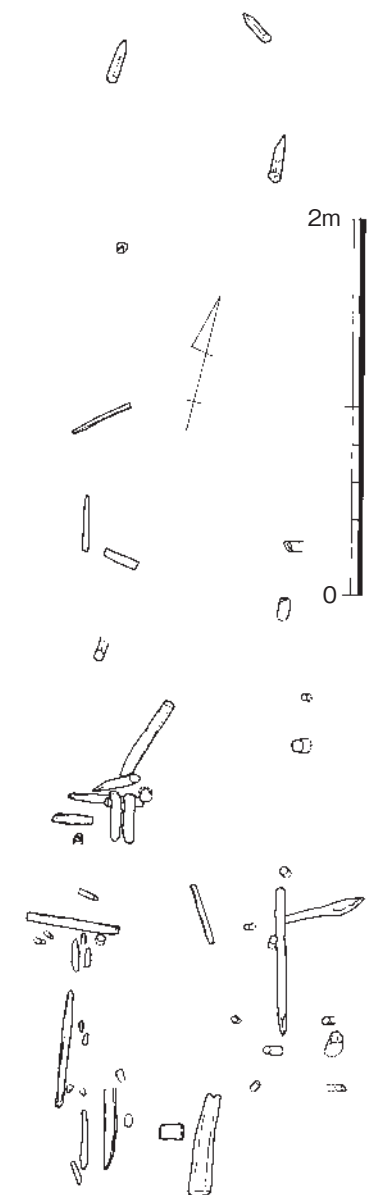
**水路**（第133図）

導水遺構から流れ出た水は断面が浅い「U」字をなす素掘り溝となり、緩やかに蛇行しながら南に延びていたと考えられる（第133図網掛け部）。

4区の中ほどから南にかけて杭群の中を通り抜け、その南では局所的に幅が5mほどに広がり不正半円形の溜まりを形成するものの、その下流では再び浅い水路となって8区の南東隅角で東壁の中に消えた。丘陵に沿ってさらに南に延びるものと推測される。

**(4) 4区杭群**（第137図、図版16）

4区の南東隅台地際で、直径5cm弱の丸木、半裁杭などが2m四方に密に打ち込まれ、杭の間には横木が差し込まれていた。杭の打ち込み状況は、2区の導水遺構内で丸太を固定するために打ち込まれた杭の状況に似ていて、杭先は概ね4層の上面で止まっており、杭頭は③層の上面で腐朽している



第137図 4区杭群実測図 (1/40)

ことから、古墳時代に打設された可能性が高いと考えられる。前述の水路は杭群の中を流れていたことから、この水路を両側から挟んで囲み、作業あるいは儀礼の場として使用されたと考えられる。周辺では古式土師器や須恵器が出土しており、時期的にも取水・導水遺構に近い。

**木器** (第124~126図, 図版61・62)

**建築材** W485, W486, W488~490, W493は扉板と考えられる。W485, W489, W490は取水遺構の南壁、W486は西壁に立てられたものである。W485, W489, W490の側面が斜め方向に削られているのは、排水口を開けた際の加工痕である。

W485, W486, W490は、板の中央部に門受けを削り出した痕跡が残存している。W485は、板高134cm、幅41cmを測り、門受けの長さ46.5cm、幅24cmで上下端に向かって扇形に広がる。この裏側にはクグリ溝も彫られている。残存する軸は3.5cmほどと短く、こちらが下(蹴放し)側と考えられる。

W490は、欠損部位が多いが、門受けから下縁までの長さや断面の厚さがW485とほぼ等しいことから、本来はこれと2枚で一对の扉として使用された可能性がある。

一方、W486, W489は、前者に比べて一回り小さく薄手である。W486は、門受けの基部が残っているので扉板の可能性を残すものの、W489は葦板と考えられる。軸は8cmほどを測り、長めであるため、こちらが上面と考えられる。

W488は、出水口で関板に使用されたと考えられるもので、扉板の再加工品と考えられる。

W491, W492, W494は柱と考えられる。W491は、丸太柱で長さ95cmにわたり深さ7cmほどの板溝が施される。W492では半裁材で、先端の内側に長さ24cmの断面蒲鉾状の瘤状隆起を削り残す。W494の一端には柄が削り出される。W495, W500, W502は板材である。

**容器** W503は、導水施設の足場材の隙間に挟まった状態で出土した。外形を粗く削り出した諸手容器の未成品で、把手、容器本体ともに厚みがあり加工も粗削りである。歪み取りのための水漬け段階であろうか。

(5) 5号土壙 (図版16-c)

2区調査区の西壁にかかる南北長1.5mほどの土壙で排水溝掘削時に断面で確認したため、平面プランの確認は半分程度に留まったが、平面形は6号土壙と同様に隅丸長方形と推測される。調査区の排水溝を掘削した時に須恵器坏が出土しており、この土壙に伴う可能性がある。

(6) 6号土壙 (第141図, 図版16-d・e)

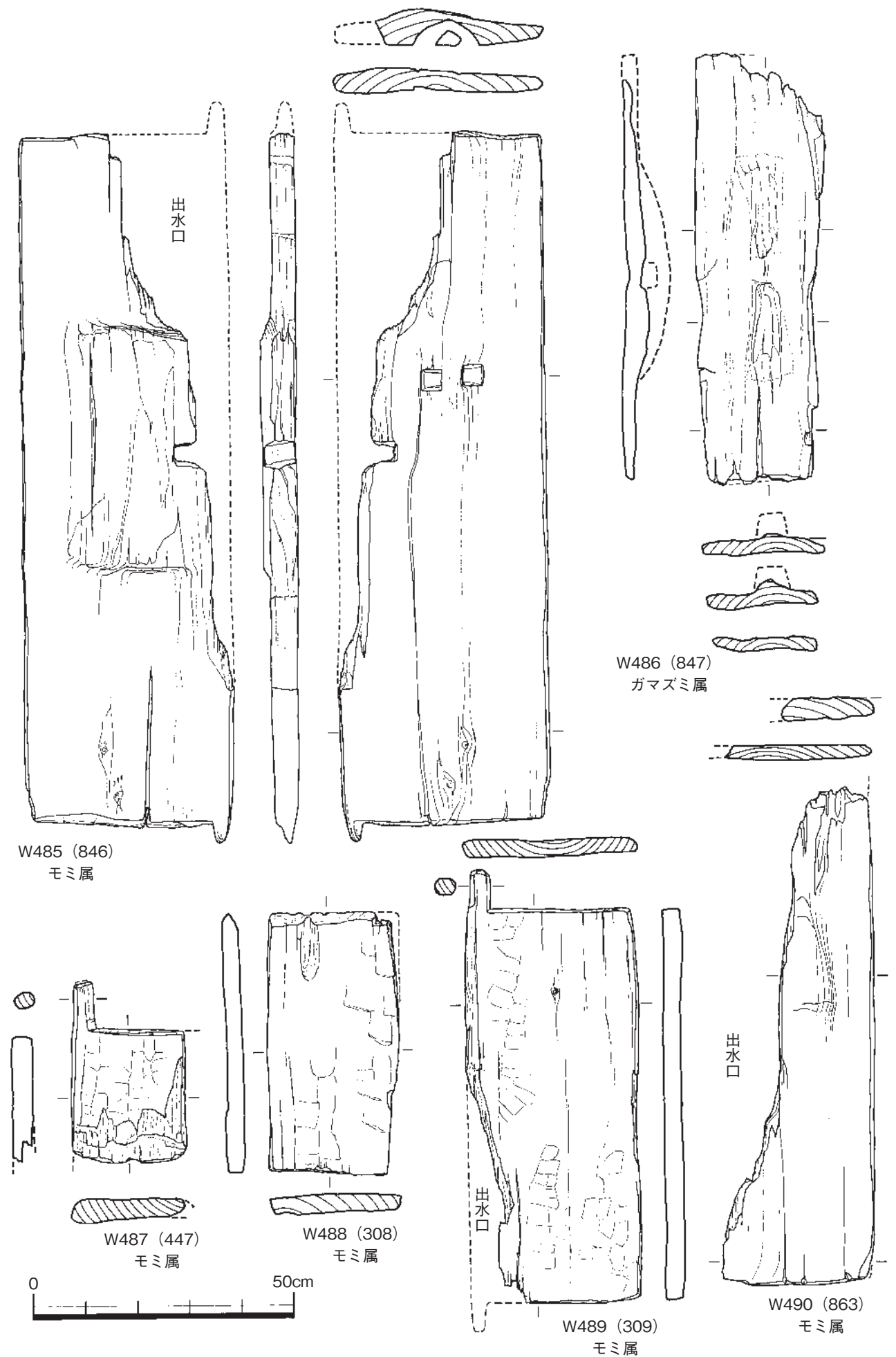
7区の東南隅近くので検出し隅丸長方形プランの小土壙である。主軸はN84°Eに向き、全長154cm、幅92cm、深さ37cmを測る。底面はやや西から東に向かって深みを増す。底面近くから須恵器杯蓋1個、杯身2個、高杯脚片等が出土した。2個の杯身はいずれも3片に割られていた。

**土器** (第141図, 図版60)

P167は坏蓋で、天井部との境の稜線は消え、後円部は外側に開き、口唇部は丸く納める。

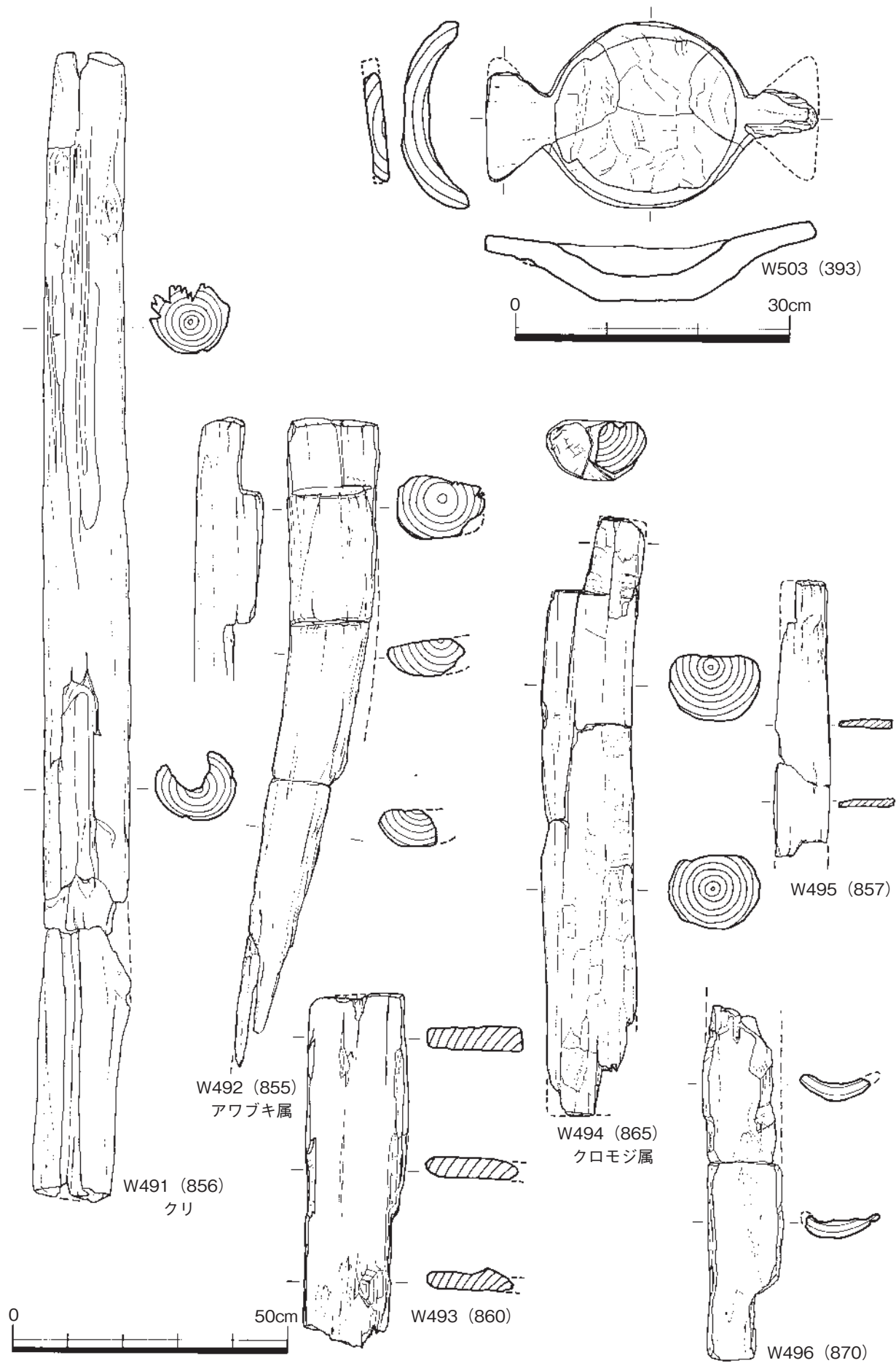
P168, P169は坏身で、底部から受部にわずかに内湾しながら開き、口縁部は低く内反する。

わずかに膨らみ気味である。

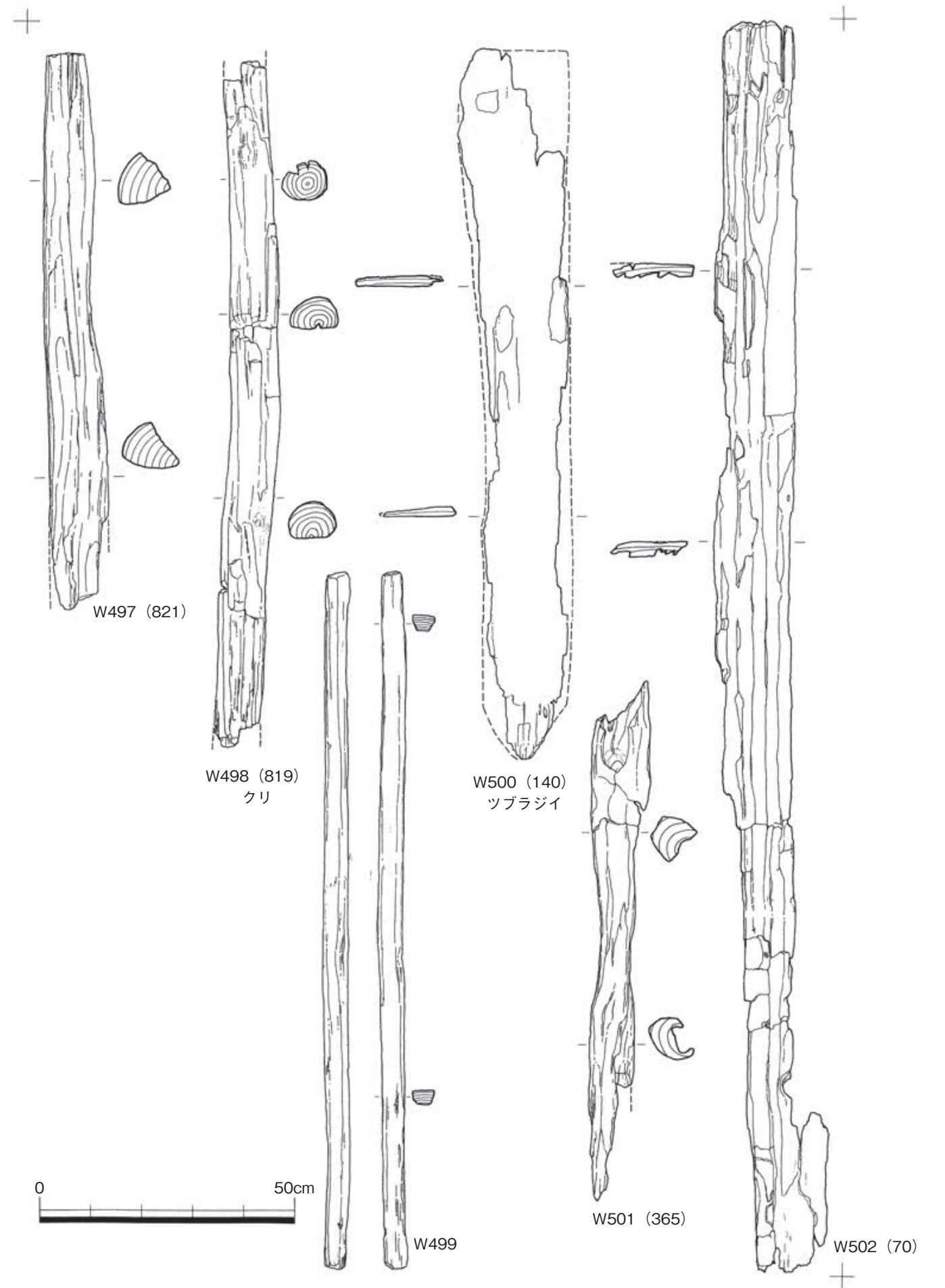


第138図 取水・導水遺構出土木器実測図1 (1/10)

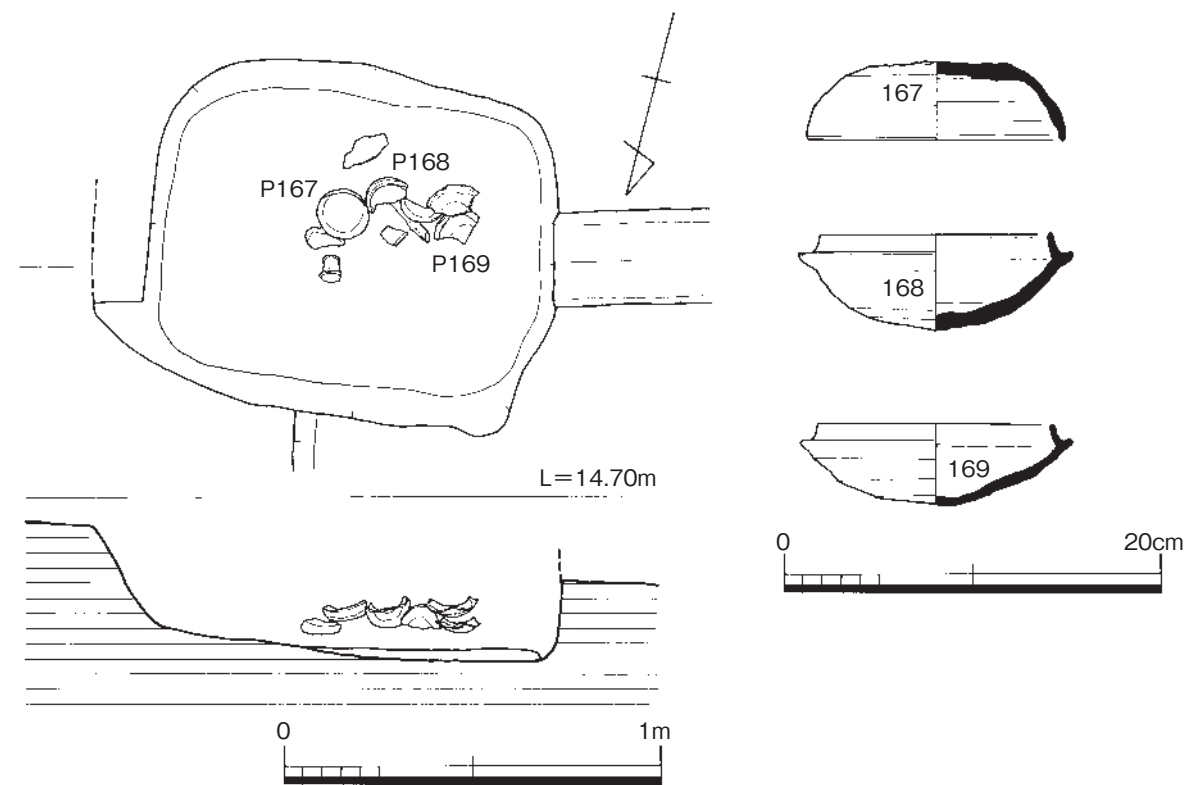




第139図 取水・導水遺構出土木器実測図2 (1/6, 1/10)



第140図 取水・導水遺構他出土木器実測図3 (1/10)



第141図 6号土壌および出土土器実測図 (1/20, 1/4)

## 9. 包含層出土施文土器・土製品・玉・石器・貨泉・骨角器

谷部の包含層からは多量の土器、木器とともに石器、土製品、石器、貨泉などが出土した。

土器では、貝殻による複波文が施されたP170や、連続三角文が施されたP173は他地域に系譜が求められるもので、当該遺跡の他地域との交流圏を探るうえで興味深い。

黒曜石の打製石器、磨製石などは縄文時代、蛤刃石斧、石包丁などは弥生時代の資料と考えられるが、2～4層から出土したものも多く、これらの使用の下限時期を考えるうえで興味深い。また、石包丁では輝緑凝灰岩、いわゆる立岩産の祖割段階の未製品が12点出土していることも合わせて注意が必要であろう。

漁労具では、軽石製の浮子が12点出土していることが目を引く (図版66-S57他)。

### (1) 施文土器 (第143図170～173, 図版63)

P170は、二枚貝の木口を用いて連続する複波文を二段に施している。東九州～中国地方西部系の甕の胴部と考えられる。

P171は、広口壺の頸部片で、表に釣針状の浮文が張り付けられている。

P172は、鋤先口縁を有する丹塗り広口壺片で、口縁の上部に連続する同心円のスタンプ文が押され、その外縁をかすめるように櫛描直線文を上書きする。

P173は、壺の肩部に内部を横向きの沈線を充填した連続する三角文が連続して刻まれる。

### (2) 土製品

#### 鐸形土製品 (第143図174, 図版63)

4区の3層から出土した。各稜線が丸みを帯びた裁頭四角推形を呈するが下半部は欠失している。手捏ねで整形されており内面には指圧による整形痕が明瞭に残る。頭頂部の中央には5×6mm程度の不正円形孔が貫通する。外面は丹塗りで不定方向の磨き痕がかすかに認められるが、摩耗が著しく詳細は不明である。

#### 棒状土製品 (第143図177, 図版63)

D177は、断面が扁平六角形に面取りされた土製品で、残存部は直線的である。ジョッキ形土器の把手の一部であろうか。

#### 鏡形土製品 (第143図178・179, 図版63)

いずれも9区1層から出土した。D178、D179は、不正円形の円盤状土製品で片面の中央をつまみ上げて突出部に小孔を通す。裏面は緩やかに凸面をなす。古墳時代の資料であろう。

#### 匙形土製品 (第143図180, 図版63)

4区4層から出土した。D180は、両端が失われているが、棒状土製品の一端を匙状に押し広げ掬い部がつくられており匙形土製品と推定される。全体的に厚めのつくりである。

#### 土製紡錘車 (第143図181・182, 図版63)

D181は、平滑な土製円盤の中央に焼成前穿孔を施したもの。厚さ1.1cmで重さは16.2gを測る。D182は、土器片を再加工したもので厚さ5mm、重さは3.8gを測る薄手で小形の紡錘車である。



(3) 玉 (第143図, 図版63)

ガラス管玉 (5)

半裁状態で出土した管玉で、長さ1.37cm、径9.6cm、孔径3.8mmを測りずんぐりとしている。色は濁った薄青色を呈する。分析の結果、鉛バリウムガラスであることが判明した。

ガラス小玉 (6~26)

6区の3層上面から1カ所に纏まって21個が出土したが、綴られたものではなく、撒かれたように散乱した状態であった。祭祀儀礼によるものかもしれない。青紺色が20点、赤色が1点で、分析の結果、赤色玉はソーダ石灰ガラス、青紺色玉は1点がソーダ石灰ガラス、他はカリガラスであった。

土製丸玉 (1~4)

粘土を丸めて中央に穿孔した土製品で装身具とみられる。1~3区の2層から3個出土しており、胎土は精良で赤褐色を呈し、古墳時代前~中期の土師器高坏などに用いられた胎土に似ていることからこの時期の所産と考えられる。

(4) 石器

石斧 (第144図S3~5, 図版64・66)

蛤刃石斧が4点、扁平刃石斧片が1点 (図版66補2) 確認されている。S3、補1は玄武岩製の太形蛤刃であるが、S4は砂岩、S5は蛇紋岩製で、いずれも縄文時代の資料である。

砥石 (第144図S7~12, 図版64)

9点が出土している。

S10は、仕様面の中央に縦方向に断面が「U」字を呈する溝が認められ、玉づくり用に用いられた砥石の可能性がある。

磨石 (第144図S13・14, 図版64)

2点を報告する。いずれも扁平な花崗岩の表裏ともに中央部を窪ませて握り部をつくり、縁辺部で用いて使用されたとみられる。

石製紡錘車 (第145図S17~27, 図版64)

10点出土している。S25、27は未製品である。素材は滑石製が多いが片岩製のものもある。

S17には2カ所、S23には3カ所にわたって縁辺を意図的に打ち欠いた痕跡が認められる。

第2表 玉類の計測値および材質一覧

番号	種類	材質	色	径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考	番号	種類	材質	色	径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考
1	丸玉	土製	茶褐	2.1	1.8	-	7.4	古墳時代	14	小玉	カリ	青紺	4.6	2.5	2.0		
2	丸玉	土製	茶褐	2.1	1.7	0.4	6.9	古墳時代	15	小玉	カリ	青紺	4.4	2.9	1.9		
3	丸玉	土製	茶褐	2.1	1.9	0.3	6.8	古墳時代	16	小玉	カリ	青紺	4.4	2.5	1.2		
4	丸玉	土製	茶褐	1.7	1.4	0.25	-	古墳時代	17	小玉	カリ	青紺	4.5	2.4	1.4		
5	管玉	鉛バリ	淡青	1.4	1.0	0.45		巻付け	18	小玉	カリ	青紺	4.4	2.7	1.2		
6	小玉	カリ	青紺	8.6	5.6	3.6			19	小玉	カリ	青紺	4.3	2.6	1.4		
7	小玉	ソーダ	青紺	7.4	4.8	2.1			20	小玉	カリ	青紺	4.4	2.8	1.4		
8	小玉	カリ	青紺	4.6	2.9	1.6			21	小玉	カリ	青紺	4.4	2.7	1.3		
9	小玉	カリ	青紺	4.3	2.8	1.5			22	小玉	カリ	青紺	4.1	2.6	1.3		
10	小玉	カリ	青紺	5.0	2.4	1.8			23	小玉	カリ	青紺	5.0	2.4	1.2		
11	小玉	カリ	青紺	4.8	2.4	2.0			24	小玉	カリ	青紺	5.0	2.1	1.9		
12	小玉	カリ	青紺	4.3	3.0	1.4			25	小玉	カリ	青紺	5.0	2.6	1.4		
13	小玉	カリ	青紺	4.4	2.5	1.3			26	小玉	ソーダ	赤	3.2	1.6	1.1		巻付け

※ 材質表記のうち「鉛バリ」は鉛バリウムガラス、「カリ」はカリガラス、「ソーダ」はソーダ石灰ガラスの略である

石包丁 (第145図S28~39, 図版65)

27点が出土したが、半数近い13点を未製品が占めるのが特徴である。輝緑凝灰岩製の石包丁は14点あり、そのうち7点は未製品であった。板状に打ち割り表裏を研磨した半製品状態で出土しており、この段階の未製品を入手し集落において刃研ぎ穿孔などの仕上げ工程が行われたものとみられる。未製品の多くは2~3層から出土しており、5区とその周辺に集中していることも石包丁の使用下限や祭祀での使用を考えるうえで興味深い。

材質は、他に粘板岩、安山岩、変成岩、砂岩など種類は豊富である。形状も、半円形、隅丸長方形、長楕円形など、大きさとともにばらつきも大きい。また、刃には直線刃と外湾刃の両タイプがみられるなど多様で集落において素材を独自に入手製作したことをうかがわせる。

石錘 (第146図S40~56, 図版65・66)

25点が確認されており、そのうち17点を掲載した。出土層位的には3~4層に集中しており、弥生中期後半~後期前半の資料が多い。

形態は、磨製石錘と打欠石錘に大別される。後者は九州型石錘と呼ばれており、林田和子・中尾篤の分類 (註) の大形のI類 (分銅形)、小形のII類 (紡錘形) が出土している。

I類のうち、下端部が平坦となるIA類が大半を占め、下端部が丸みを帯びたIB類は、S45のみである。長さは4.0~6.3cmまで幅があり、したがって重量も66.5~267gと幅がある。石材は粘板岩、蛇紋岩、滑石等が用いられる。

II類では、長軸方向に一条の溝を有するIIA類が主体となる。長さは6cm、重さは31.4~50.1gを測り、石材は泥岩、粘板岩、結晶片岩、滑石等が用いられる。

打欠石錘は、不正円、楕円形状の板状の花崗岩の側縁に1対ないしは2対の打ち欠きを施し紐かけとして使用するもので、S53は、表裏に打ち欠きによる窪みが施されており、磨石から転用されたものである。

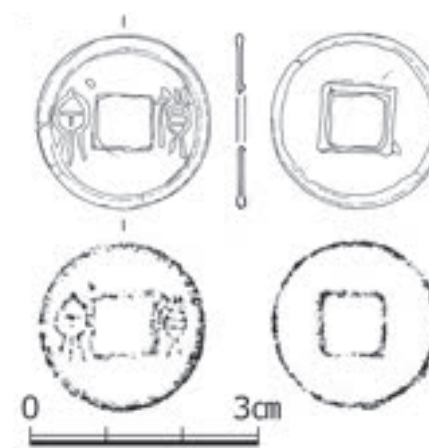
註 林田和子・中尾篤2014「九州型石錘の集成と展望」長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第4号

軽石製浮子 (第146図S56, 図版66)

軽石製で、径が3cmに満たない小型品から7cm近くの大型品まで計13点が出土したが、径が5cmほどの小型品が多い。不正球形、扁球状や棒状を呈する軽石の表面に溝を彫ったり、角を打ち欠くなどして紐をかけ、浮子として使用されたのであろう。

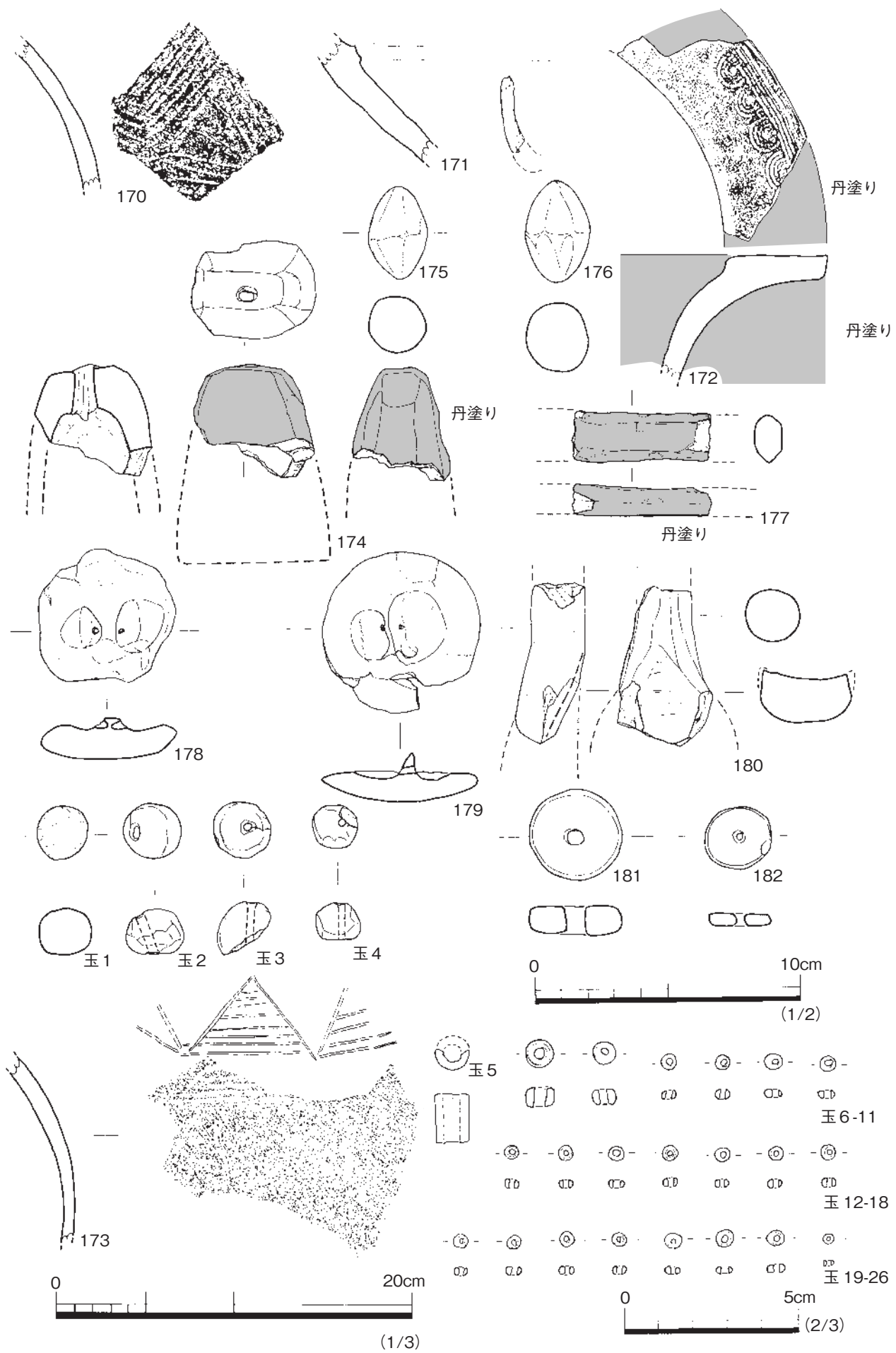
(5) 貸泉 (第142図, 図版66)

4区の3~4層間から出土した。表面は赤銅色で遺存状態は良好である。直径2.27~2.30cm、厚さは1.0mm、縁は幅2.2mm、厚さ1.3~1.6mm。重さは2.78g (表面樹脂塗布後) を測る。中央に6.6×6.8mmの方形孔、裏面に孔郭が鋳出され、「泉」の右上に径1mmの円形付文がある。孔内には鋳張りが残る。



第142図 貸泉実測図および拓影 (1/1)

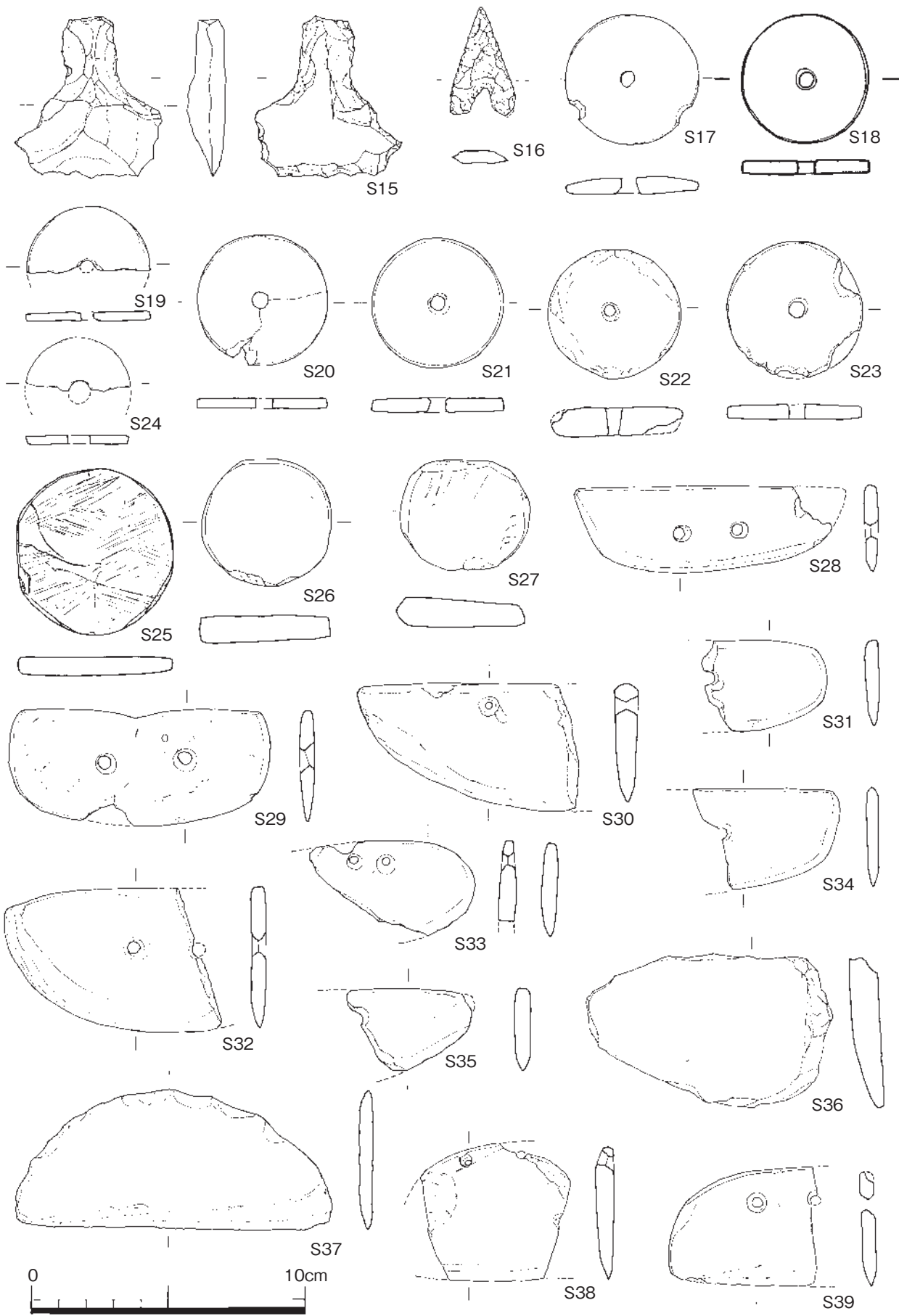




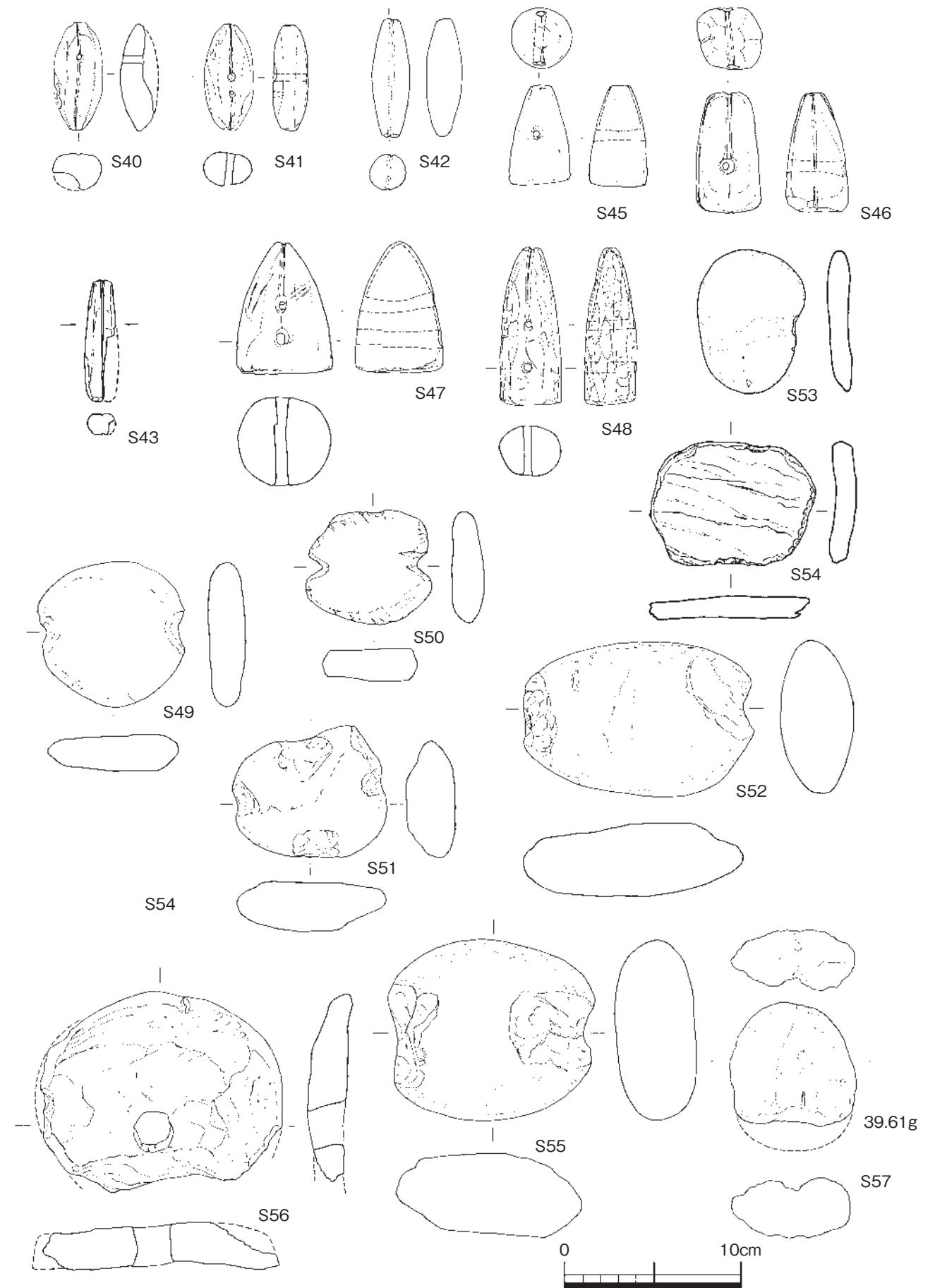
第143図 谷部出土施文土器・土製品・玉実測図 (1/2, 1/3, 2/3)



第144図 含有層出土磨製石斧・砥石・磨石実測図 (1/3)



第145圖 含有層出土打製石器・石製紡錘車・石包丁実測図 (1/2)



第146圖 含有層出土石製漁具実測図 (1/3)

## IV. 自然科学的分析結果

### 1. 上籾子遺跡第4次調査における環境と植生

金原正明（奈良教育大学）、金原正子・金原美奈子（一般社団法人 文化財科学研究センター）

#### I. はじめに

最初に上籾子遺跡第4次調査で出土し採取された種実類の同定を行い、当時の栽培植物等の検討を行う。上籾子遺跡第4次調査では谷部において、時期の把握もでき分析に適する良好な堆積物が累積しており（以下「4谷」と称す。）、その5区と10区の壁面から採取された堆積物に対し、種実同定、花粉分析、珪藻分析を行い、環境と植生の変化を層位的に検討を行う。

#### II. 試料

出土種実資料は、出土した後、水洗され保管された状態で23試料ある。4谷では、5区と10区で計12試料の堆積物である。下部より、黒色砂質土層（6層）（5区試料6、10区試料6）：弥生時代中期後半頃、茶褐色混植物遺体粘質土下層（5層下）（5区試料5、10区試料5）：弥生中期後半～末、茶褐色混植物遺体粘質土上層（5層上）（5区試料4、10区試料4）：弥生中期後半～末、灰黒色砂質粘土層（4層）（5区試料3、10区試料3）：弥生後期初頭～弥生後期前葉、灰黒色粘土層（3層）（10区試料2）：弥生後期前葉～後葉、黒色粘土層（2層）（5区試料2、10区試料1）：古墳時代前期～後期、灰黒色粘土層（1層）（5区試料1）：奈良時代～と続く。なお、層序は柱状模式図を作成して示したが、層序は異ならないが位置は任意な箇所で作成した。

#### III. 種実同定

##### (1) 方法

出土種実は、試料単位に同定を行い、結果を示した。堆積物200cm<sup>3</sup>からは、0.25mm目篩で水洗抽出して検出し同定計数を行った。以下に方法を示す。

1) 試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。2) 試料200cm<sup>3</sup>に水を加え放置し、泥化する。3) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別し抽出する。4) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

なお、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

##### (2) 同定された分類群

樹木8、草本19の計27分類群が同定される。学名、和名および粒数を表1、2に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K.Koch 種子 イヌガヤ科：茶褐色で長楕円形を呈す。表面には顆粒状の隆起がある。断面は両凸レンズ形である。

2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果 マツ科：黒褐色で卵形を呈す。

種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

2) ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z. 核 ヤマモモ科：茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

4) コナラ属 *Quercus* 子葉 ブナ科：炭化しているため黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗が欠落し、属レベルの同定までである。

5) モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科：黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

6) キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科：淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

7) シマサルナシ *Actinidia rufa* Planch. ex Miq. 種子 マタタビ科：暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。マタタビ、サルナシに比べ表面の穴が大きく深い。

8) カキノキ属 *Diospyros* 種子 カキノキ科：黒褐色で非対称的の広倒卵形を呈し、扁平である。直線状の腹面は稜をなす。

[草本]

9) オモダカ属 *Sagittaria* 果実 オモダカ科：淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲の翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定にとどまる。

10) ウキクサ亜科 Lemnaceae 種子 サトイモ科：淡褐白色で長楕円形を呈すが、先端の方がやや細い。長軸に沿って14～16本の肋がある。これらの間に、多数の微細な横溝がある。

11) ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科：黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

12) スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科：茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

13) カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実：黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

14) イボクサ *Aneilema keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科：黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

15) カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科：黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

16) ミゾソバ *Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc. 果実 タデ科：黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

17) アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科：黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

18) ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子：黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

19) タガラシ *Ranunculus scleratus* L. 果実 キンポウゲ科：黄褐色、扁平、ややレンズ状。側面にしわはないが、滑らかではない。

20) ハスノハカズラ *Stephania japonica* Miers 種子 ツヅラフジ科：馬蹄形を呈する。中



中央部の中心に小さい穴を持つ大型凹みがある。凹みの縁は高く、腎臓状楕円形である。全縁は狭翼状の稜になり、中心部の腎臓状楕円形の縁とは互いに連結する隆条が直角に列生する。

- 21) カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科：茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。
- 22) セリ亜科 Apioideae 果実 セリ科：淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。
- 23) キランソウ属 *Ajuga* 果実 シソ科：卵形や狭卵形で側面は横狭卵形。着点は広卵形や広楕円形、腹面の一端（卵の細い方）から中央までを占め、幅広い隆条状の縁で囲まれる。大型の網目模様がある。
- 24) シソ属 *Perilla* 果実 シソ科：茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。
- 25) イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科：黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。
- 26) ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科：淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。藤下がメロン仲間としているものと同じである。
- 27) タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科：淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にいぼ状の突起がある。断面はひし形である。

### (3) 結果と考察

#### 1) 出土種実

出土種実で最も多いのはウリ類種子で1000を超える。ウリ類は藤下(1995ほか)がメロン仲間とするもので、長さが6mm以下の雑草メロン型にあたる。一般にウリ類もモモも明確な縄文時代からの出土はなく、稲作と共に伝播してきたとみなされる栽培植物である。また、ウリ類は1果実に200から300の種子が入るため、果実の個体数は多いとは言えない。他に栽培植物としては、ヒョウタン類(藤下がヒョウタン仲間とするもの)があるが、縄文時代の当初からある栽培植物とみなされるが断片的である。ここでは大形の種実が採取されておる、栽培植物は以上のモモ、ウリ類、ヒョウタン類の3種である。可食植物はヤマモモ、カキノキ属で、マツ属やコナラ属も食べることができる。イヌガヤやマツ属複雑管束亜属はいずれも二次林になる樹木で、カナムグラは人為環境の縁辺や荒地に生育する草本であり、周辺に人為改変された二次的な植生環境が分布していたと考えられる。

#### 2) 水洗抽出試料(0.25mm目篩水洗抽出、堆積物200cm<sup>3</sup>)

下部より、黒色砂質土層(弥生時代中期後半頃)は、5区(試料6)では種実は少ないが水生植物で水田雑草の性格も持つホタルイ属やカヤツリグサ科が出現する。10区(試料6)タガラシが優占して多く、イボクサ、ホタルイ属などが伴われる。いずれも水生植物であり水田雑草の性格をもつ。黒色砂質土層(弥生時代中期後半頃)の時期は、水田雑草の分布する浅い水

域であった。

茶褐色混植物遺体粘質土層下層(弥生中期後半～末の下部)は、5区(試料5)ではタガラシが多く優占しホタルイ属が伴われる。10区(試料5)はイボクサやミゾソバなどの水生植物がわずかに検出される。茶褐色混植物遺体粘質土層下層(弥生中期後半～末の下部)の時期では、5区は水田雑草の分布する浅い水域であるが、10区では種実が少なく、環境の変化が考えられる。

茶褐色混植物遺体粘質土層上層(弥生中期後半～末の上部)は、5区(試料4)では種実は少なくタガラシも出現するが、アカザ属やイヌホウズキの畑作雑草や集落などの人為環境を好む低湿を嫌う草本が検出される。10区(試料4)でも種実は少なく、タガラシやミゾソバなどの水生植物とカナムグラやナデシコ科やカタバミ属の畑作雑草の性格も持ち集落などの人為環境を好む低湿を嫌う草本とが検出される。茶褐色混植物遺体粘質土層上層(弥生中期後半～末の上部)の時期は周囲でやや乾燥した畑地や集落地のような環境が拡大したと推定される。

灰黒色砂質粘土層(弥生後期初頭～前葉)から灰黒色粘土層(弥生後期前葉～後葉期)、黒色粘土(古墳時代前期～後期)、灰黒色粘土層(奈良時代～)は、5区(試料1、2、3)および10区(試料1、2、3)では、ほとんど種実が検出されず、種実の分解される湿ったから乾燥した環境が示唆される。

### IV. 花粉分析

#### (1) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法等をもとにして検討を加えて以下の手順で行った。

1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量。2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎。3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去。4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置。5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理。7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製。8) 検鏡・計数を行う。

検鏡は、生物顕微鏡(Nikon ECLIPSE Ci)によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定を行った。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)および非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

#### (2) 結果

##### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉31、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉29、シダ植物胞子2形態の計66分類群である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200

個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、200個未満であっても50個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉：マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ノグルミ、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、カエデ属、トチノキ、クロウメモドキ科、ブドウ属、カキノキ属、モクセイ科、クサギ属、マンサク科、ハイノキ属、イスノキ属

樹木花粉と草本花粉を含むもの：クワ科－イラクサ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ－ガマズミ属

草本花粉：ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、エノキグサ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属－フサモ属、ササゲ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

シダ植物胞子：単条溝胞子、三条溝胞子

## 2) 花粉群集の特徴と変遷

### ・4谷5区

下部より、黒色砂質土層（弥生時代中期後半頃、試料6）は、草本花粉が多く、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科の出現率が高く、ミズアオイ属やオモダカ属の水田雑草の性格ももつ水生植物が伴われる。樹木花粉では、照葉樹林ないし照葉二次林のシイ属－マテバシイ属とコナラ属アカガシ亜属の照葉樹が多く、二次林となるコナラ属コナラ亜属、クリ、マツ属複維管束亜属の樹木がやや多い。茶褐色混植物遺体粘質土層上下層（弥生中期後半～末、試料5、試料4）では、人為環境に多くなるカナムグラとみられるクワ科－イラクサ科が急増する。樹木花粉では二次林となるエノキ属－ムクノキ（ここではムクノキ）の広葉樹が増加する。黒灰色砂質粘土層（弥生後期初頭～前葉、試料3）ではアブラナ科が増加し、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が増加する。黒色粘土（古墳時代前期～後期、試料2）では、アブラナ科が減少し、樹木のスギが急増する。黒灰色粘土（奈良時代～、試料1）ではクワ科－イラクサ科とアブラナ科が増加し、樹木のスギは低率になる。

### ・4谷10区

下部より、黒色砂質土層（弥生時代中期後半頃、試料6）では、草本花粉が多く、イネ科の出現率が高く、イネ属およびミズアオイ属の水田雑草の性格をもつ草本が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属とシイ属－マテバシイ属の照葉樹が多い。茶褐色混植物遺体粘質土層下層（弥生中期後半～末、試料5、試料4）では、草本花粉は全体に減少するが、樹木と草

本を含み主にカナムグラとみなされる人為環境の縁辺の放棄地に生育するクワ科－イラクサ科が激増する。樹木花粉では二次林を構成するマツ属複維管束亜属が増加し、コナラ属アカガシ亜属は減少する。灰黒色砂質粘土（弥生後期初頭～前葉、試料3）では、乾燥を好みやや乾燥した人為環境に生育するアブラナ科が増加する。灰黒色粘土（弥生後期前葉～後葉、試料2）では、アブラナ科に続き、同様に乾燥を好みやや乾燥した人為環境に生育するヨモギ属とアカザ科－ヒユ科が増加する。黒色粘土（古墳時代前期から奈良時代、試料1）では、イネ科が増加し、アブラナ科やアカザ科－ヒユ科は減少する。

## V. 珪藻分析

### 1. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量。2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置。3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）。4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥。5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製。6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE Ci）によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。結果は表とダイアグラムとして示した。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。なお、現生珪藻のCMB仮説と呼ばれる分類体系も用いられるが、科や属によってすべてを再分類できているわけではなく、混乱を避けるため従来の分類を用いた。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。

### 2. 出現した分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）2分類群、真－中塩性種（海－汽水生種）3分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）132分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図1に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

貧塩性種：*Achnanthes exigua*, *Achnanthes hungarica*, *Achnanthes lanceolata*, *Achnanthes minutissima*, *Amphora copulata*, *Amphora montana*, *Aulacoseira ambigua*, *Caloneis branderii*, *Caloneis lauta*, *Cymbella naviculiformis*, *Diploneis elliptica*, *Diploneis pseudovalis*, *Diploneis subovalis*, *Fragilaria brevistriata*, *Fragilaria capucina*, *Fragilaria construens v. venter*, *Fragilaria parasitica*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Navicula veneta*, *Nitzschia amphibia*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Stauroneis lauenburgiana*, *Surirella angusta*



## (2) 珪藻群集の特徴

地点ごとに珪藻構成と珪藻組成の特徴を記載する。

### 1) 4谷5区

下部より、黒色砂質土層（弥生時代中期後半頃、試料1）では、流水不定性種の*Achnanthes exigua*、優占し、他の流水不定性種と真・好流水性種が主に伴われる。

茶褐色混植物遺体粘質土層上下層（弥生中期後半～末、試料5、試料4）になると、真・好流水性種で中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*が優占し、他の真・好流水性種と流水不定性種が主に伴われる。

黒灰色砂質粘土（弥生後期初頭～前葉、試料3）では、真・好流水性種で沼沢湿地付着生環境種群の*Navicula elginensis*が優占し、陸生珪藻が主に伴われる。

黒色粘土（古墳時代前期～後期、試料2）および黒灰色粘土（奈良時代～、試料1）では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*の陸生珪藻が優占し、主に真・好流水性種が伴われる。

### 2) 4谷10区

下部より、黒色砂質土層（弥生時代中期後半頃、試料6）では*Gomphonema parvulum*などの真・好流水性種、*Fragilaria construens* v. *venter*などの真・好止水性種、*Fragilaria capucina*などの流水不定性種の*Navicula confervacea*が陸生珪藻と多様に出現する。

茶褐色混植物遺体粘質土層下層（バフン層、弥生中期後半～末、試料5、試料4）と灰黒色砂質粘土（弥生後期初頭～前葉、試料3）では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*の陸生珪藻が優占し、主に真・好流水性種と流水不定性種が伴われる。灰黒色粘土（弥生後期後半～古墳前期、試料2）は、*Hantzschia amphioxys*などがわずかに出現する以外は珪藻がほとんど検出されない。

黒色粘土（奈良時代～、試料1）では、陸生珪藻では、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*の出現率が高い。他に、好流水性種の*Gomphonema parvulum*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*、流水不定性種の*Diploneis pseudovalis*、*Rhopalodia gibberula*の出現率が高い。

## V. 環境、植生の変遷とまとめ

4谷の堆積物の分析結果から示唆される環境と植生の変遷を下部よりまとめる。

### 1) 黒色砂質土層（弥生時代中期後半頃）の時期

4谷は5区では不安定な水位の変動のある水域であり、10区ではタガラシが多くやや流れのある安定した池状水域であった。いずれもミズアオイ属やオモダカ属の水田雑草の性格ももつ水生植物が生育していた。周囲は5区のほうが乾燥しイネ科やヨモギ属が分布し、10区では周囲に水田の分布が示唆される。周辺の森林はいずれからもカシ類とシイ類の照葉樹林の分布が主に示唆される。またクリやナラ類の二次林も分布していた。

### 2) 茶褐色混植物遺体粘質土層上下層（弥生中期後半～末）の時期

4谷は、5区でタガラシやミズアオイ属などの水生植物の多い流水域で、10区では流水域か

ら湿地の環境である。周囲では人為環境に多くなるカナムグラとみられるクワ科－イラクサ科が急増し、著しい人為干渉が示される。5区と10区ともカシ類とシイ類の照葉樹が分布するが、5区周辺では特に二次林となるエノキ属－ムクノキ（ここではムクノキ）の広葉樹が増加し、10区ではマツ二次林が増加する。いずれも人為活動の指標となり、周辺での人為活動が活発化する。これら二次林の分布から照葉樹林も二次林化している可能性がある。

### 3) 黒灰色砂質粘土（弥生後期初頭～前葉）の時期

4谷は、5区では水草の繁茂する浅い流水域で、10区は湿地になる。周囲はアブラナ科、カナムグラ類、ヨモギ属、イネ科の繁茂する人為性の高い乾燥した草地が分布する。周辺の森林ではカシ類が減少しシイ類が増加し、照葉二次林の増加が考えられる。他にマツやナラ類、クリの増加もみられ、これら二次林が増加する。

### 4) 灰黒色粘土（弥生後期前葉～後葉）の時期

10区の分析のみであるが、カナムグラ類（クワ科－イラクサ科）が激減し、乾燥を好む人為環境に多いアブラナ科やヨモギ属とアカザ科－ヒユ科が増加する。雑草類の変化があり周囲で土地利用の変化が推定される。

### 5) 黒色粘土（古墳時代前期～後期）の時期

4谷は、5区では湿地、10区では流水域と湿地となる。周囲ではイネ科とヨモギ属が多いが、5区ではカナムグラ類、10区ではヨモギ属がやや多く、いずれも乾燥した草地の環境であった。周辺の森林植生は、5区では、スギが急増し、人為的な増加の可能性もある。10区ではシイ類の二次林が多くなる。

### 6) 灰黒色粘土（奈良時代～）の時期

5区のみ分析であるが4谷は湿地であり、ミズアオイ属などの水生植物が繁茂する。周囲はカナムグラ類、イネ科、アブラナ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科の乾燥を好む人為環境を好む草本が分布する。スギ林はなくなり、シイ類やカシ類の照葉二次林、ムクノキ類やナラ類、マツ、クリの二次林が分布する。

7) 本遺跡では弥生時代中期後半頃よりではあるが、照葉二次林や落葉二次林、アカマツ二次林の二次林化の著しい様相があり、草本でも特徴的にカナムグラや本文ではふれなかったがオオバコ属なども検出され、農耕地以外の継続した改変を伴う土地利用が行われたことが示された。

## 参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131-139.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種，月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15-19.



藤下典之「植物伝播資源の探索・収集から評価・活用まで-Cucumis属植物マイレビュー」『Applied Biological Science』第1巻、1995年

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫. 奈良国立文化財研究所編「藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-」, p.14-15.

中村 純（1967）「花粉分析」. 古今書院, 232p.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録, 5, 60p.

中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村 純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, no.10, p.21-30.

中村 純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 木下正史編「新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法」, 角川書店, p.248-262.

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologishe Untersuchungen uber die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl. 15, p.131-506. Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer · H.Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae,vol.2,no.1-no.4

Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution ( 2 ) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌,6,p.23-45.

小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.

鈴木秀和・南雲保（2013）珪藻類の分類体系（総説）～現生珪藻の属ランクのチェックリスト. 日本プランクトン学会報60（2）. p.60-79.

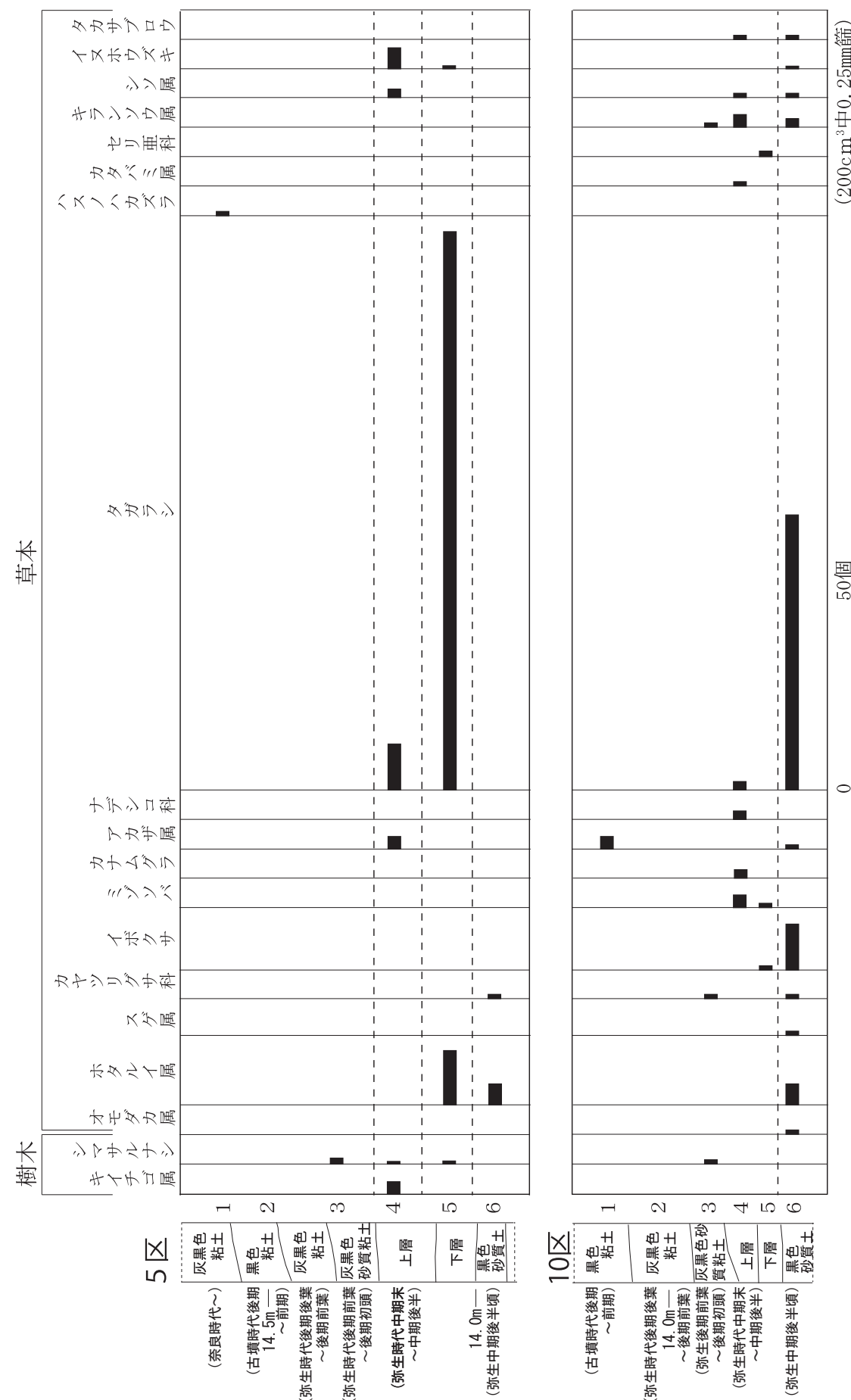


図1 種実定量ダイアグラム

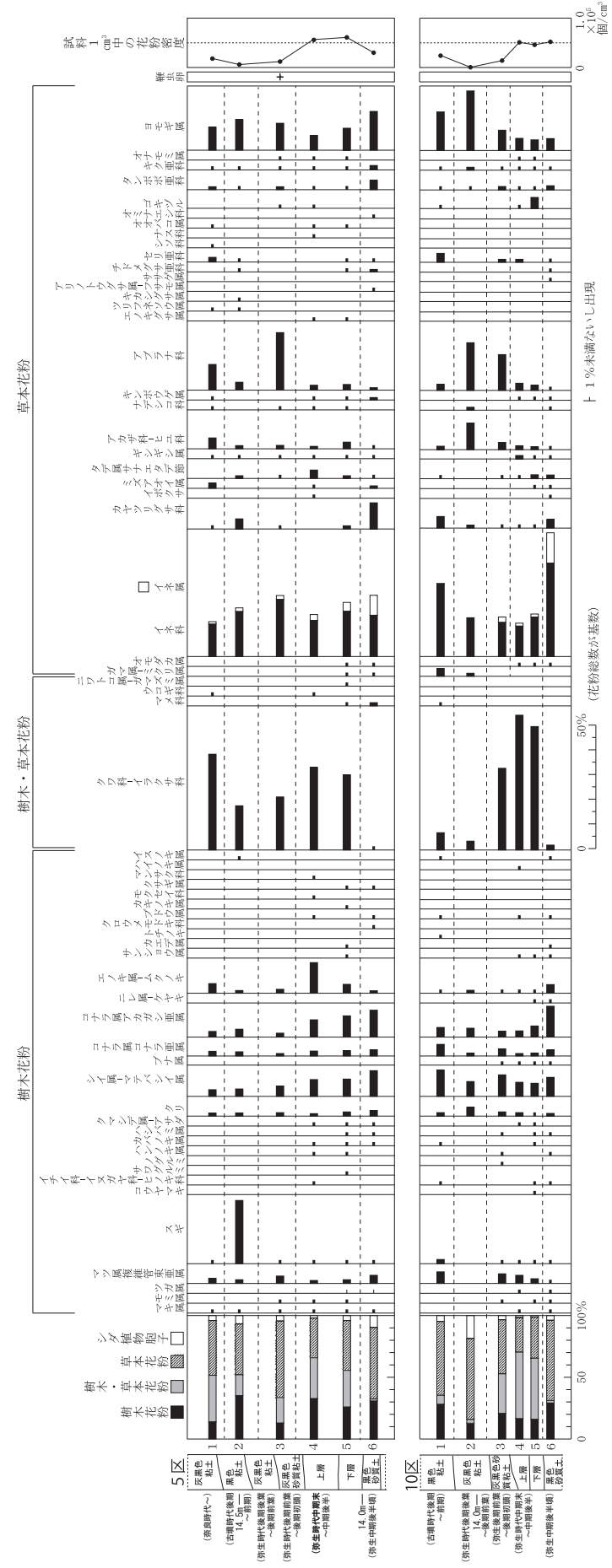


図2 4谷・10区における花粉ダイアグラム

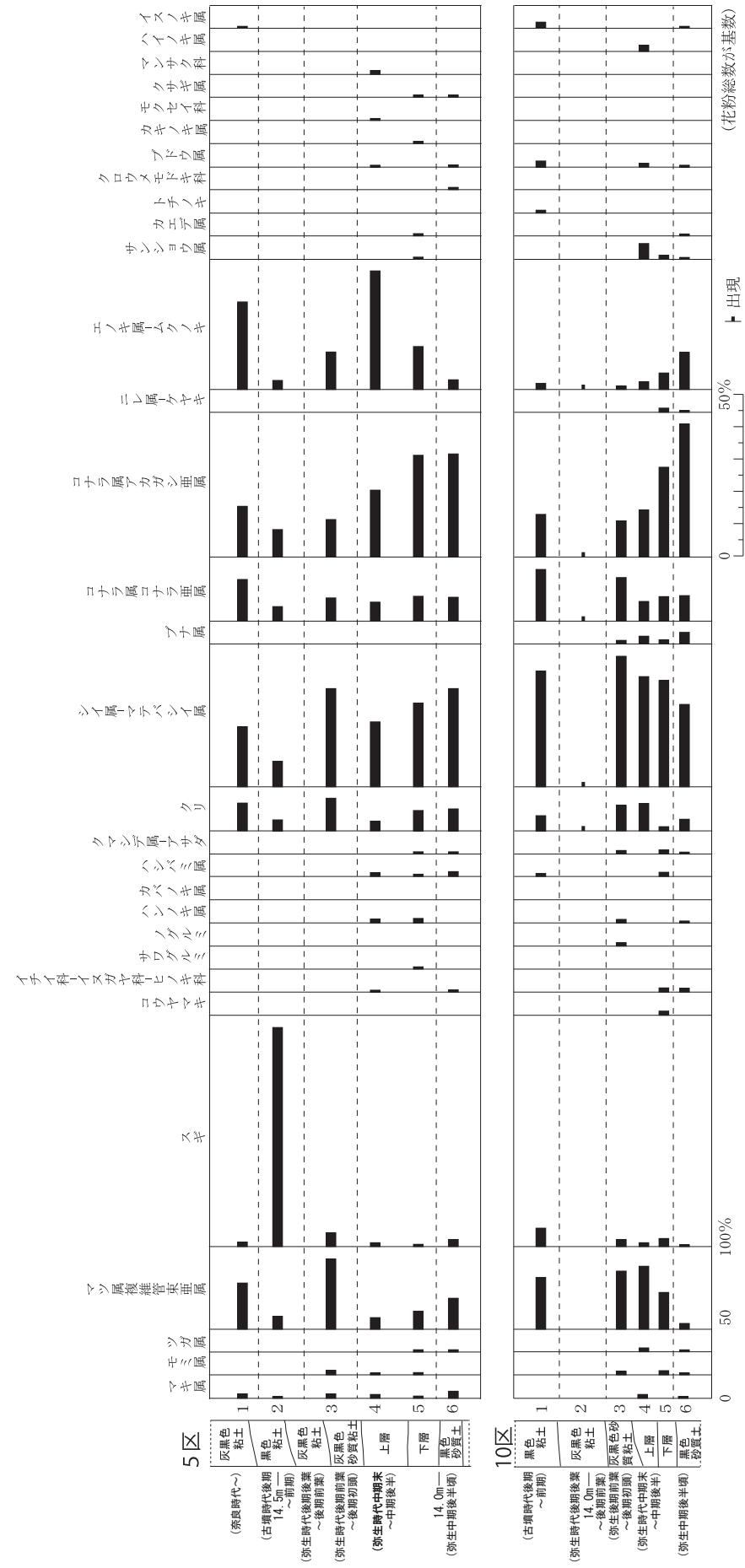


図3 4谷・10区における樹木花粉ダイアグラム

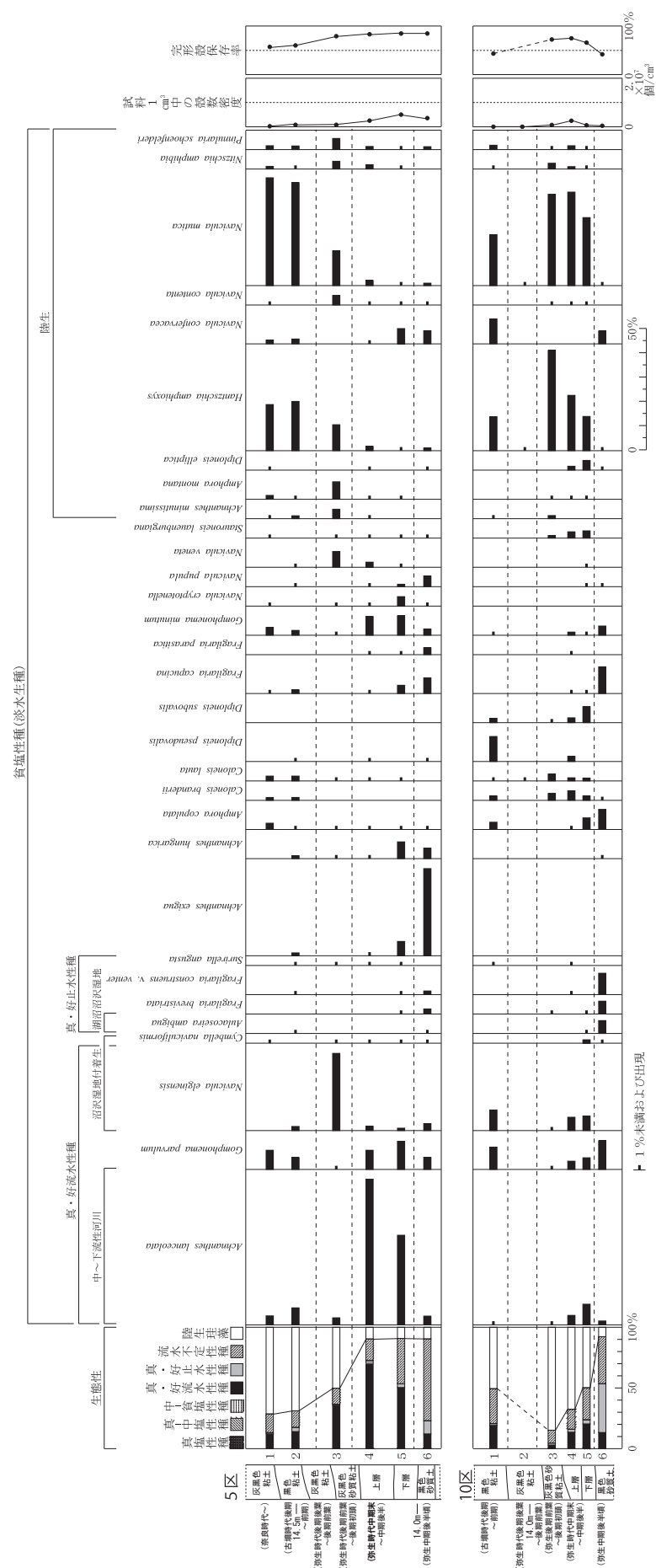


図4 4谷・10区における主要珪藻ダイアグラム

表1 出土種実同定結果

番号	出土地点	出土層	分類群		部位	個数	備考	時代	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
			学名	和名										
8	7-E	黒色粘土層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 半形	1	950210	古墳時代	22.86	16.69	-			
7	7-E	6号土層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 半形	3		弥生後期	28.18	20.79	15.98	23.55	19.93	-
11	9-E	灰黒色粘土層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1		弥生後期	19.55	14.12	11.77			
12	9-E	灰黒色砂質粘土層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2	950223 噛み痕1	弥生後期	25.40	19.22	14.67	24.26	-	14.66
1	1区	1号土層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	940607 (試掘時)	弥生後期前葉						
9	7-E	灰黒色粘土層					950214 土器に巻いてあった物 枝	弥生後期前葉						
14	10-E	灰黒色粘土層	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	イヌガヤ	種子	1		弥生後期前葉						
			<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉	1								
15	10区	灰黒色粘土層下層	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核 半形	1		弥生後期前葉						
			<i>Humulus scandens</i> Merr.	カナムグラ	種子	2								
23	7区?	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	629		弥生中期後半~末						
					破片	(+)								
24	7区?	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	798		弥生中期後半~末						
					破片	(++)								
16	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1		弥生中期後半~末	24.13	10.71	15.02			
			<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子	4								
17	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉 炭化	1		弥生中期後半~末						
18	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 破片	1		弥生中期後半~末	22.55	16.97	-			
19	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1		弥生中期後半~末	21.81	-	13.69			
20	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Humulus scandens</i> Merr.	カナムグラ	種子	2	950322	弥生中期後半~末						
					破片	5								
21	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	-					弥生中期後半~末						
22	不明	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	果皮 破片	1		弥生中期後半~末						
13	10-E	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Humulus scandens</i> Merr.	カナムグラ	種子	3		弥生中期後半~末						
					破片	11								
2	3-W	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	果皮 破片	1	941202	弥生中期後半~末						
3	4-E	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子	1		弥生中期後半~末						
4	5-E	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属維管束重層	毬果	1		弥生中期後半~末						
5	6-E	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉 炭化	1		弥生中期後半~末						
6	6区	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Diospyros</i>	カキノキ属	種子	1		弥生中期後半~末						
10	7-E	茶褐色混植物遺体粘質土層?	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	950207	弥生中期後半~末	27.79	23.21	18.50			

表2 環境と植生の変遷

時代・時期	堆積層	4谷の環境		4谷縁辺から周囲の植生・環境		周辺の樹木と森林植生	
		5区	10区	5区周囲	10区周囲	5区周囲	10区周囲
奈良時代	灰黒色粘土	[湿地]	-	カナムグラ等・イネ科・ヨモギ属・アブラナ科 [乾燥草地]	-	ムクノキ類・シイ類・カシ類・マツ類・コナラ類・クリ [照葉二次林・二次林]	-
古墳後期 古墳前期	黒色粘土		[流水域~湿地]	イネ科・カナムグラ等・ヨモギ属 [乾燥草地]	イネ科・ヨモギ属 [乾燥草地]	スギの増加 (人為?)	
弥生後期後葉	灰黒色粘土	-	[やや乾燥]	-	イネ科・ヨモギ属・アブラナ科・アカザ科-ヒユ科 [乾燥草地]	-	
弥生後期前葉	灰黒色砂質粘土	[浅い流水域]	[湿地]	アブラナ科・ヨモギ属・イネ科・カナムグラ等 [乾燥草地]	カナムグラ等・アブラナ科・ヨモギ属・イネ科 [乾燥草地]	シイ類・マツ類の増加 [照葉二次林・二次林]	シイ類・カシ類・コナラ類・クリ・マツ類 [二次林・照葉二次林]
弥生中期末	茶褐色混植物遺体粘質土上層 茶褐色混植物遺体粘質土下層	タガラシ等 [水生植物の多い流水域]	[流水域~湿地]	カナムグラ等・イネ科 [乾燥草地]	カナムグラ等・イネ科・アブラナ科 [乾燥草地]	カシ類・シイ類・ムクノキ類 [照葉樹林・照葉二次林・二次林]	
弥生中期後半頃	黒色砂質土	[不安定な水域]	タガラシ等 [やや流れのある池状水域]	イネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科・イネ属 [乾燥草地・周囲で水田]	イネ科・イネ属 [周囲で水田]	カシ類・シイ類 [照葉樹林]	カシ類・シイ類 [照葉樹林]





表5 谷5区・10区における珪藻分析結果

分類群	5区						10区					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
貧塩性種 (淡水生種)												
<i>Achnanthes coarctata</i>	1											
<i>Achnanthes exigua</i>		4		4	43	260						
<i>Achnanthes hungarica</i>		4	1	3	50	31						1
<i>Achnanthes lanceolata</i>	7	24	21	426	268	26	1		1	15	43	6
<i>Achnanthes minutissima</i>	1	4	28	1			1		6			
<i>Amphora copulata</i>	5	2	1	4	5	4	8			2	24	31
<i>Amphora fontinalis</i>							2		8	1		
<i>Amphora montana</i>	3	3	52	5	3				3	2	3	
<i>Amphora veneta</i>									4	2	1	
<i>Aulacoseira alpigena-distans</i>						2						
<i>Aulacoseira ambigua</i>		2				4					1	20
<i>Aulacoseira canadensis</i>						1						
<i>Aulacoseira crenulata</i>												1
<i>Aulacoseira granulata</i>						1						
<i>Aulacoseira spp.</i>												7
<i>Caloneis branderii</i>	2	4					5		13	15	9	2
<i>Caloneis hyalina</i>			2									
<i>Caloneis lauta</i>	5	7	1	1	1		1	1	13	5	6	
<i>Caloneis molaris</i>	1		2	1		2	1		3	1	2	2
<i>Caloneis silicula</i>						3				1	3	2
<i>Cocconeis disculus</i>				1						3	1	
<i>Cymbella aspera</i>												
<i>Cymbella cistula</i>											1	2
<i>Cymbella cuspidata</i>											1	1
<i>Cymbella naviculiformis</i>	1		3	3	4	6					7	2
<i>Cymbella silesiaca</i>				2		3			1		1	3
<i>Cymbella subaequalis</i>												1
<i>Cymbella tumida</i>	1				1	1						5
<i>Diploneis elliptica</i>	1			2		1				6	20	1
<i>Diploneis ovalis</i>		1		1						1		
<i>Diploneis pseudovalis</i>		2		1		1	28			8		
<i>Diploneis subovalis</i>							5		3	5	33	
<i>Diploneis yatukaensis</i>					1		1			1		
<i>Diploneis spp.</i>				1			2					
<i>Epithemia adnata</i>						1						
<i>Eunotia bilunaris</i>						10						
<i>Eunotia minor</i>		1				7						3
<i>Eunotia paludosa-rhomboida</i>				1		1			1			1
<i>Eunotia pectinalis</i>	1											3
<i>Eunotia praeurupta</i>					1							
<i>Fragilaria brevistriata</i>					1	15			2		1	20
<i>Fragilaria capucina</i>	1	5		5	25	46				1	1	41
<i>Fragilaria constricta</i>					2	5						7
<i>Fragilaria construens</i>					1							11
<i>Fragilaria construens v. venter</i>		1			2	11				1		33
<i>Fragilaria exigua</i>					1	5						3
<i>Fragilaria parasitica</i>				1	4	20			1			
<i>Fragilaria pinnata</i>												5
<i>Fragilaria vaucheriae</i>						2						
<i>Fragilaria virescens</i>				1								6
<i>Fragilaria spp.</i>												1
<i>Frustulia vulgaris</i>		1	1		2	1						
<i>Gomphonema acuminatum</i>					2							3
<i>Gomphonema angustatum</i>					5						1	1
<i>Gomphonema gracile</i>		3		2	2	4					1	4
<i>Gomphonema grovei</i>					1							
<i>Gomphonema minutum</i>	6	7	3	55	58	19	1			5	4	13
<i>Gomphonema parvulum</i>	15	17	5	56	84	36	25		4	13	24	44
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>				2	7	4						2
<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i>												1
<i>Gomphonema pumilum</i>					1	3						1
<i>Gomphonema truncatum</i>					1							1
<i>Gomphonema spp.</i>					2						1	5
<i>Gyrosigma spp.</i>					1		1				4	1
<i>Hantzschia amphioxys</i>	36	70	77	13	5	8	38	3	189	87	71	1
<i>Melosira varians</i>				1	2							
<i>Navicula americana</i>												1
<i>Navicula bacillum</i>		1				3						1
<i>Navicula clementoides</i>						2						6
<i>Navicula clementis</i>							1			1	1	
<i>Navicula cohnii</i>							1					
<i>Navicula confervacea</i>	3	7		5	46	39	28					20
<i>Navicula contenta</i>	1		28	4	2	2			1	2	2	

分類群	5区						10区					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
<i>Navicula cryptotenella</i>	1			5	2	28						
<i>Navicula cuspidata</i>	3	1				1						2
<i>Navicula elginensis</i>		6	228	13	7	21	23		4	21	30	
<i>Navicula gallica</i>			2	1		1						
<i>Navicula goeppertiana</i>	1											
<i>Navicula kotschyi</i>		1	3	1		1					2	2
<i>Navicula laevisissima</i>					1	18						4
<i>Navicula menisculus</i>					1							
<i>Navicula mutica</i>	84	146	103	15	6	7	57	1	172	147	141	3
<i>Navicula mutica v. ventricosa</i>			2						1		1	
<i>Navicula pseudoacceptata</i>			1			2				1		
<i>Navicula pupula</i>		1		4	7	32					1	2
<i>Navicula trivialis</i>						6						
<i>Navicula veneta</i>		1	47	15	2						1	
<i>Navicula viridula</i>						1						
<i>Navicula spp.</i>				3	1	5					1	
<i>Neidium alpinum</i>				3								
<i>Neidium ampliatum</i>		2	1	1	1	3	2		1	1	1	1
<i>Neidium bisulcatum</i>			1	1			2			1	4	3
<i>Neidium iridis</i>				1								
<i>Nitzschia amphibia</i>	2	1	23	13	2		1		11	4	1	
<i>Nitzschia debilis</i>			2									
<i>Nitzschia dissipata</i>	1						1		2			
<i>Nitzschia nana</i>				2			2			1		
<i>Nitzschia palea</i>		2	4	1	1				2		1	
<i>Nitzschia parvuloides</i>		1		2								
<i>Nitzschia spp.</i>		1	3	1						1		
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>				3							2	1
<i>Pinnularia aestuarii</i>									4		1	
<i>Pinnularia appendiculata</i>									1			
<i>Pinnularia borealis</i>		1	5				2	1	1	2	2	
<i>Pinnularia braunii</i>									1			
<i>Pinnularia brevicostata</i>					1	1						
<i>Pinnularia divergens</i>					1		1					3
<i>Pinnularia gibba</i>					3	3					1	1
<i>Pinnularia hemiptera</i>						1	1				1	6
<i>Pinnularia lagerstedtii</i>			9			1						
<i>Pinnularia microstauron</i>	1				1	2	1				3	
<i>Pinnularia nodosa</i>					2							1
<i>Pinnularia obscura</i>									1			
<i>Pinnularia schoenfelderi</i>	3	5	33	9	3	9	5		4	6	4	
<i>Pinnularia schroederii</i>												1
<i>Pinnularia stomatophora</i>					1							1
<i>Pinnularia subcapitata</i>												1
<i>Pinnularia viridis</i>		1			1	5	2	2		1	6	1
<i>Pinnularia spp.</i>					1	1	2			1	2	
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>										1		
<i>Rhopalodia gibba</i>					2							2
<i>Rhopalodia gibberula</i>					2		2	12	1		2	1
<i>Stauroneis acuta</i>						1		1		1	1	1
<i>Stauroneis anceps</i>								3		1		
<i>Stauroneis javanica</i>	1				1	1		1			1	1
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>	1		6	3	4	1			5	10	15	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>					1	1	1				3	4
<i>Stauroneis smithii</i>					1	1	1				2	
<i>Surirella angusta</i>		3	5	1	1		1					
<i>Surirella ovata</i>		1	1									
<i>Surirella tenera</i>										1		
<i>Synedra ulna</i>					1	1	7					7
中-貧塩性種 (汽-淡水生種)												
<i>Nitzschia levidensis</i>			1									
真-中塩性種 (海-汽水生種)												
<i>Cocconeis scutellum</i>											1	
<i>Nitzschia plana</i>									1		2	
<i>Nitzschia sigma</i>										1	1	
真塩性種 (海水生種)												
<i>Grammatophora oceanica</i>									2			
<i>Paralia sulcata</i>								1				
合計	189	344	718	710	727	724	271	7	458	382	503	374
未同定	1	8	11	5	8	4	13	0	4	10	11	5
破片	143	237	191	146	133	134	372	2	174	131	267	521
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	3.8 × 10 <sup>4</sup>	1.5 × 10 <sup>5</sup>	1.5 × 10 <sup>6</sup>	5.8 × 10 <sup>6</sup>	1.2 × 10 <sup>7</sup>	8.4 × 10 <sup>6</sup>	5.7 × 10 <sup>4</sup>	0.2 × 10 <sup>4</sup>	1.8 × 10 <sup>5</sup>	6.2 × 10 <sup>5</sup>	1.5 × 10 <sup>6</sup>	1.0 × 10 <sup>6</sup>
完形殻保存率 (%)	56.9	59.8	79.2	83.0	84.7	84.5</						

出土種実

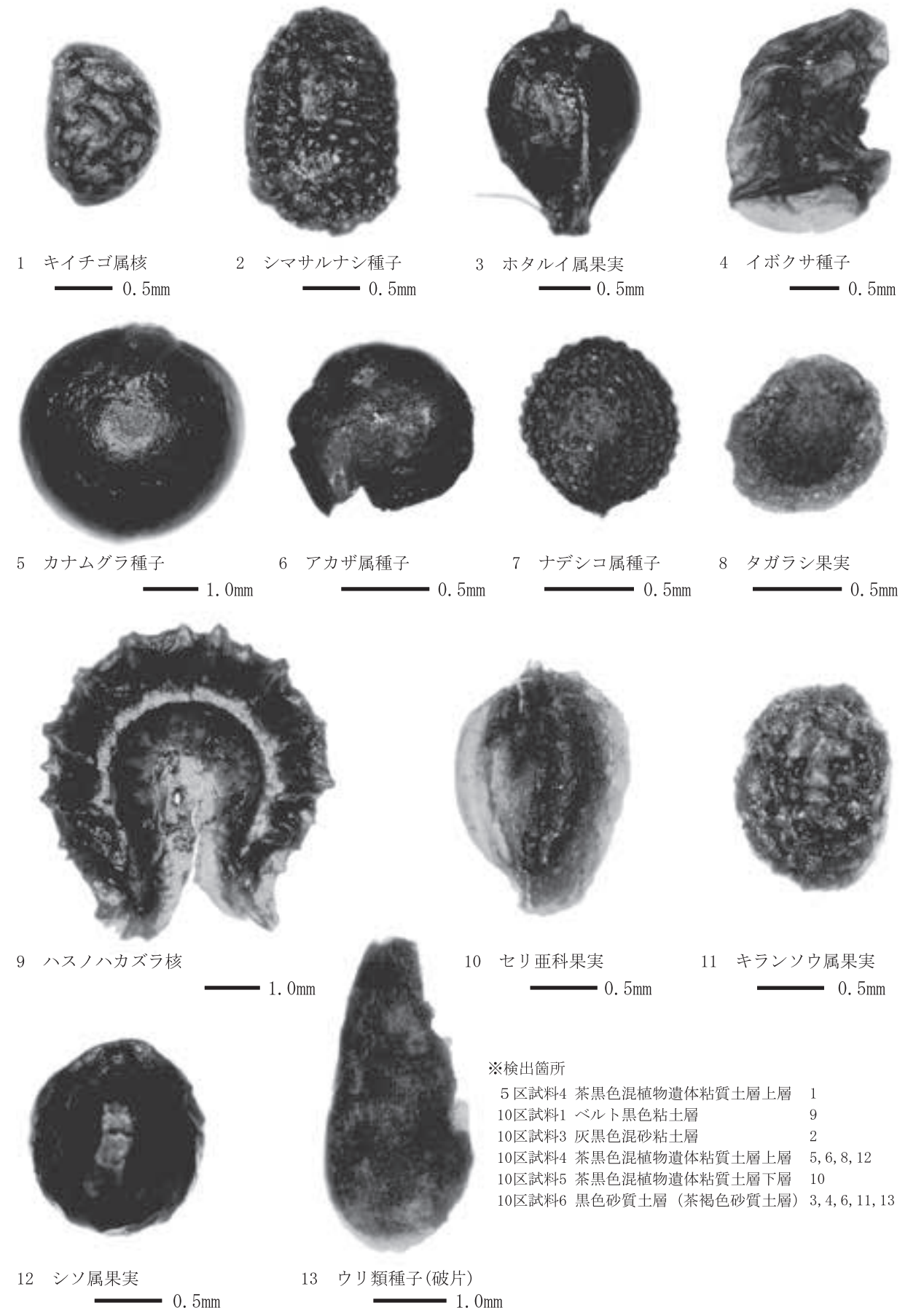
※()内は、検出箇所



図版1

種実(定量)

IV. 自然科学的分析結果

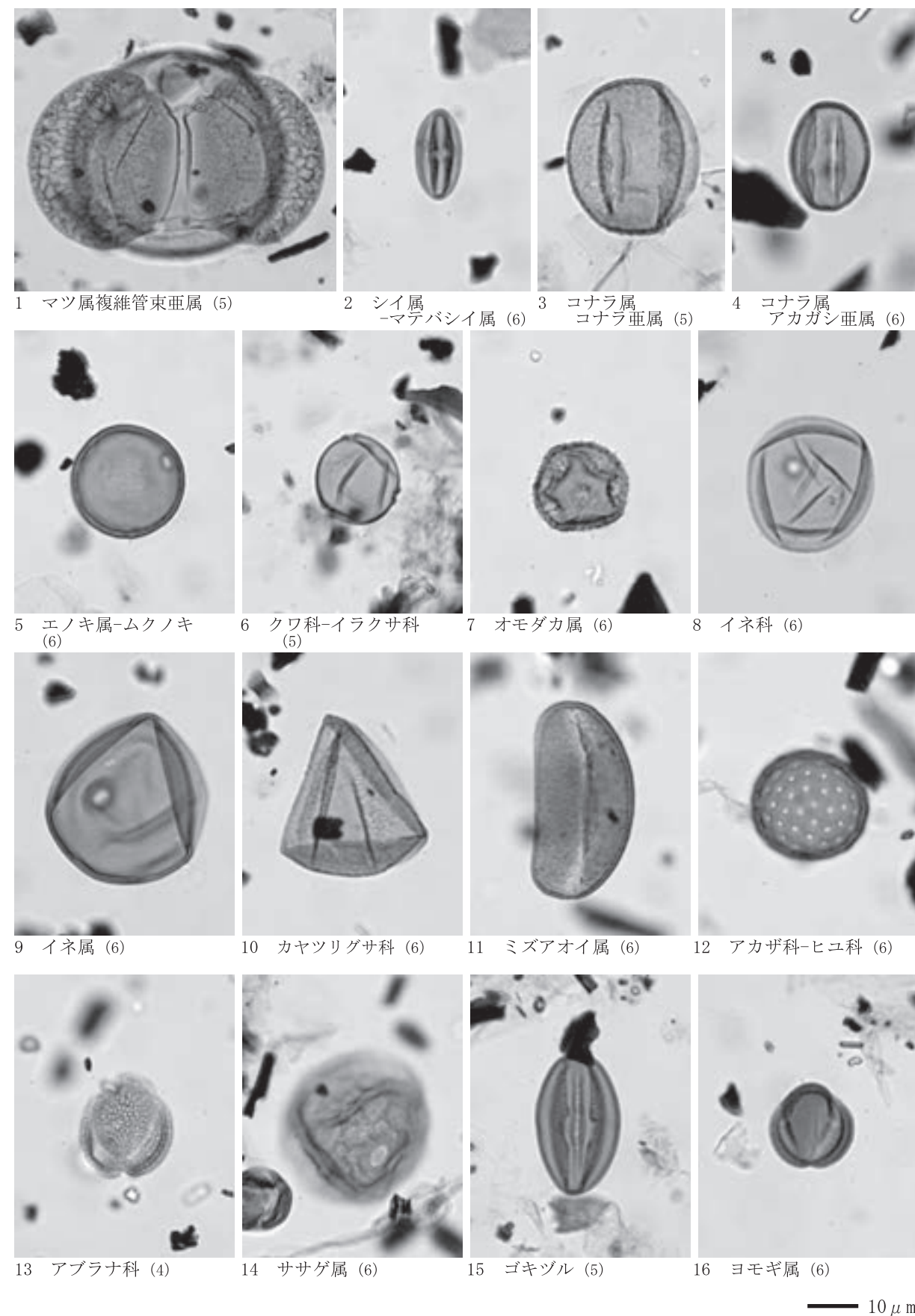


図版2



写真 花粉

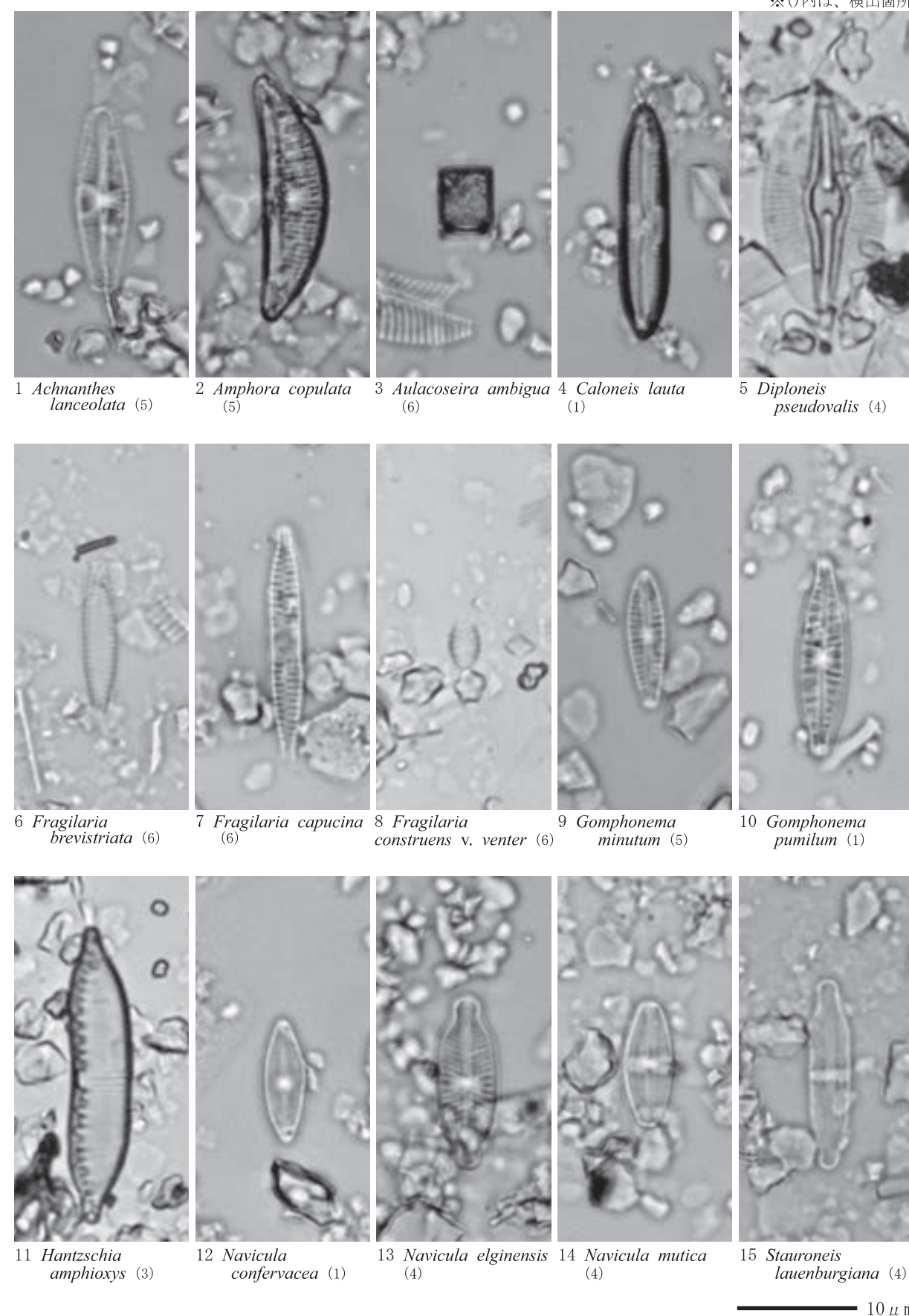
※()内は、検出箇所



図版3

写真 珪藻

※()内は、検出箇所



図版4

## 2. 上籬子遺跡出土木製遺物の樹種同定結果

一般社団法人文化財科学研究センター（金原裕美子）

### (1) 試料

上籬子遺跡からは弥生時代の良好な木製品が多量に出土した。出土した木製品の内、502点について樹種同定が行われており、本報告では3つの分析機関の同定結果を総合して考察を行う。

### (2) 方法

試料はカミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### (3) 結果

結果は、現地で採集した折の一覧表と整理番号順の表として示す。なお、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。同定結果は、同定レベルによって、種、節、亜属、属、科の階級で示した。腐朽や不十分な切片のために階級が大きくなる試料も存在し、その場合は種や属で同定できるものでも、属や科あるいは針葉樹、環孔材、散孔材、広葉樹と同定レベルが大きくなる。

#### 1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。

#### 2) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高ぐらいである。樹脂細胞が多く見られる。

以上の特徴からイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。

#### 3) マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行

はゆるやかで、多くの樹脂細胞が散在して見られる特徴を有する。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。

#### 4) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。

#### 5) クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には極めて緩やかな鋸歯状の肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からクロマツに同定される。クロマツは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で高さ35m、径2mに達する。材は耐朽性、保存性が中庸で水湿によく耐え、広く用いられる。

#### 6) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やかな箇所があり、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。

#### 7) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。



8) ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。

## 9) 針葉樹 conifer

道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。仮道管と単列の放射組織が存在する。

以上の特徴から針葉樹に同定される。なお本試料は小片のうえ保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったため、針葉樹の同定にとどまる。

10) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

11) ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. ヤマモモ科

小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。軸方向柔細胞が散在及び短接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は2～10本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。

以上の特徴からヤマモモに同定される。ヤマモモは本州（関東南部、福井県以西）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。

12) ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothyrsus* カバノキ科

小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の特徴からハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。

13) ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科

小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～30本ぐらいである。放射組織は、平伏細胞から

なる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からハンノキ属に同定される。ハンノキ属には、ハンノキ、ヤシャブシ、ケヤマハンノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。

14) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。

15) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。

16) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の特徴から、ツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。

17) シイ属 *Castanopsis* ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の特徴からシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片のため、広範囲の観察が困難であったので、シイ属の同定にとどめる。

18) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織



型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。

#### 19) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔を示し、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織を示す。

以上の特徴からコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。

#### 20) コナラ属 *Quercus* ブナ科

中型から大型の道管が、1～数列幅で配列する材である。道管は単独で複合しない。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属に同定される。木口の観察が難しいため、環孔材、放射孔材の判断ができず、コナラ属までの同定に留まる。コナラ属には、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属があり、本州、四国、九州の温帯から温帯下部の暖温帯に分布する。

#### 21) エノキ属 *Celtis* ニレ科

年輪のはじめに中型から大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して円形ないし斜線状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部に方形細胞が見られる異性放射組織型で、1～2細胞幅の小型のものと、8～10細胞幅ぐらいで鞘細胞をもつ大型のものからなる。

以上の特徴からエノキ属に同定される。エノキ属にはエゾエノキ、エノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1.5mに達する。

#### 22) ニレ属 *Ulmus* ニレ科

年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

以上の特徴からニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、

本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。

#### 23) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。

#### 24) ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科

年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞の異性放射組織型で、1～6細胞幅である。

以上の特徴よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。

#### 25) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科

小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2～3個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性放射組織型で、2細胞幅である。道管内にチロースが多数存在する。

以上の特徴からカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。

#### 26) クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科

中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の特徴からクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。

#### 27) ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Sieb. クスノキ科

やや小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ

上がったものも存在する。道管の穿孔は単穿孔および数の少ない階段穿孔で、道管の内壁にやや不鮮明ならせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で、1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の特徴からヤブニッケイに同定される。ヤブニッケイは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。

#### 28) タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科

やや小型から中型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、大きく膨れ上がった油細胞が多く存在する。道管の穿孔は単穿孔がほとんどであるが、階段の数が10本以下の階段穿孔も存在する。放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞の中には、しばしば大きく膨れ上がった油細胞がみられる。

以上の特徴からタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。

#### 29) シロダモ *Neolitsea sericea* Koids. クスノキ科

小型でやや薄壁のいくぶん角張った道管が、単独あるいは2個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔、及び階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本以内である。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部の1～2細胞が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の特徴からシロダモに同定される。シロダモは本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径50cmに達する。

#### 30) クロモジ属 *Lindera* クスノキ科

小型の道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔が多いが、階段穿孔も存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部の1～2細胞が方形細胞からなる異性放射組織型で、1～2細胞幅である。少数ではあるが、軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものが見られる。

以上の特徴からクロモジ属に同定される。クロモジ属には、カナクギノキ、クロモジ、アブラチャン、シロモジ、ヤマコウバシ、ダンコウバイなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉または常緑の高木または低木である。

#### 31) クスノキ科 Lauraceae

中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外が不明瞭なため、クスノキ科の同定にとどめる。

#### 32) イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。多室の直立細胞には菱形結晶が見られる。

以上の特徴からイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。

#### 33) サクラ属 *Prunus* バラ科

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

#### 34) ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz. バラ科

小型の丸い道管が、単独あるいは放射方向ないし斜め方向に連なって、ほぼ均一に散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、内壁にらせん肥厚が存在するが、不鮮明である。放射組織は異性放射組織型で、平伏細胞と方形細胞からなるが、両者の区別はつきにくく、1～5細胞幅である。

以上の特徴からヤマザクラに同定される。ヤマザクラは関東以西の本州、四国、九州に分布する。日本特産の落葉高木で高さ15m、径1mに達する。

#### 35) ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本である。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなり、異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の特徴からユズリハ属に同定される。ユズリハ属にはユズリハ、ヒメユズリハ、エゾユズリハなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木または低木である。



36) キハダ属 *Phellodendron* ミカン科

年輪のはじめに大型でやや厚壁の丸い道管が、単独あるいは2個複合して2～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で方形の小道管が、多数集合して斜め方向および接線方向に帯状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は多列の同性放射組織型で、紡錘形を呈する。幅は1～3細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴からキハダ属に同定される。キハダ属には、キハダ、ヒロハノキハダなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。

37) センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科

年輪のはじめに大型の道管が、やや疎に配列する環孔材である。孔圏部外の道管は単独または2～3個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管および中型の道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平服細胞からなる同性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管および中型の道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴からセンダンに同定される。センダンは、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30m、径1mに達する。

38) ツゲ *Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* Rehd. et Wils. ツゲ科

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少ない。放射組織は異性放射組織型でほとんどが1～2細胞幅である。

以上の特徴からツゲに同定される。ツゲは関東以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ10m、径40cm程度に達する。

39) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科

小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性放射組織型で、直立細胞のみからなる単列のものと、2～6細胞幅で上下の縁辺部の1～3細胞高が単列の多列のものからなる。

以上の特徴からモチノキ属に同定される。モチノキ属は常緑または落葉性の高木または低木で、モチノキ、クロガネモチ、イヌツゲなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。なおモチノキは常緑高木で高さ15m、径50cmに達する。

40) カエデ属 *Acer* カエデ科

小型で丸い道管が散在する。道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在するがやや不鮮明になっている。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で1～6細胞幅であ

る。

以上の特徴からカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の特徴からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。

41) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科

大型でやや厚壁の道管が単独ときに2個複合して年輪のはじめに1～2列疎に配列する環孔材である。晩材部では小型で薄壁の角張った道管が数個おもに放射方向に複合して散在する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では数列幅で帯状となって接線方向に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性放射組織型で1～3細胞幅であり、放射組織の外形はいびつである。

以上の特徴からムクロジに同定される。ムクロジは本州（茨城県、新潟県以南）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。

42) アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

小型の道管が、単独ないしその複合部に1～2個の柔細胞をはさんで、放射方向にむかって2～4個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の特徴からアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマハウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

43) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅で、直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。

44) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴からサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。



45) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で1～3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。

46) シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科

小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多く、まれに単穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のもの、6～8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。

以上の特徴からシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木で、通常高さ1～5m、径10cmぐらいであるが、大きいものは高さ10m、径70cmに達する。

47) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。

48) ニワトコ *Sambucus racemose* L. subsp. *Sieboldiana* Hara スイカズラ科

小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個不規則方向に複合して散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少し、年輪界付近ではごく小型の角張った道管が接線方向に配列する傾向を示す。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性放射組織型で1～5細胞幅である。不完全な鞘細胞が見られる。

以上の特徴からニワトコに同定される。ニワトコは、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の低木または小高木である。

49) ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は数十本である。放射組織は異性放射組織型で、1～10個の直立細胞からなる単列のもの、1～4細胞幅で、細長い紡錘形の多列のものからなる。

以上の特徴からガマズミ属に同定される。ガマズミ属には、ガマズミ、ゴマキ、サンゴジュなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の小高木で通常高さ10m、径30cmぐらいである。

## 50) 環孔材 ring-porous wood

年輪のはじめに大型の道管が配列する。道管や放射組織が存在する。

以上の特徴から環孔材に同定される。

## 51) 散孔材 diffuse-porous wood

小型の道管が散在する。放射組織が存在することがろうじて確認できた。

以上の特徴から散孔材に同定される。なお本試料は、保存状態が悪いため、広範囲の観察が困難であることから、散孔材の同定にとどめる。

## 52) 広葉樹 broad-leaved tree

道管と放射組織が存在する。

以上の特徴から広葉樹に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であることから、広葉樹の同定にとどめる。

## 53) 樹皮 bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。

以上の特徴から、樹皮に同定される。

## (4) 考察

同定の結果、502点を総合した上籴子遺跡の木製品は、コナラ属アカガシ亜属219点、クスノキ33点、マキ属26点、ヤブツバキ20点、マツ属複維管束亜属16点、スダジイ3点、ツブラジイ3点、シイ属10点、サカキ17点、イスノキ13点、スギ12点、クリ10点、コナラ属クスギ節11点、シロダモ8点、ヒサカキ属10点、モミ属7点、ヤブニッケイ4点、クスノキ科6点、ヤマダウ4点、タブノキ4点、カヤ4点、キハダ属2点、アワブキ属4点、センダン3点、ムクロジ3点、トネリコ属3点、イヌガヤ2点、クロマツ2点、ヒノキ2点、ヤマモモ2点、エノキ属2点、クロモジ属2点、ヤマザクラ3点、ユズリハ属2点、ヤナギ属1点、ハンノキ属ハンノキ節1点、ハンノキ属1点、コナラ属1点、ニレ属1点、ケヤキ1点、カツラ1点、サクラ属1点、ツゲ2点、モチノキ属1点、カエデ属1点、シャシャンボ1点、ニワトコ1点、ガマズミ属1点、針葉樹3点、環孔材2点、散孔材5点、広葉樹5点、樹皮2点であった。

鋤(二又鋤)、鍬(又鍬、広鍬、平鍬、狭鍬、鍬柄)、泥除け、えぶり、斧柄、堅杵、横槌などの工具や農耕具は、コナラ属アカガシ亜属が最も多く、他にコナラ属クスギ節、イヌガヤ、マツ属複維管束亜属、シイ属、ニレ属、クスノキ、イスノキ、ユズリハ属、センダン、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ属が利用されている。コナラ属アカガシ亜属は堅硬な材であり広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降は特に農耕具を中心に用いられる傾向にある材である。

本報告でもその傾向が強く見られ、農耕具206点の内164点がコナラ属アカガシ亜属である。コナラ属アカガシ亜属を含めいずれの材も粘り気があり、強度の強い良材であり、日常的な耕作に使用されても折れにくく、農耕具に適材である。

なお、コナラ属クスギ節、ヤブツバキ、イヌガヤ、マツ属複維管束亜属は強靱で弾力に富んだ材である。またクスノキ、イスノキ、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ属は切削・加工は困難であるが、耐朽性も高く、農具に向いており、堅硬であることから柄、堅杵、横槌などの重みを利用して打つ道具に適材である。センダンは強さおよび重さはともに中庸で、木目が明瞭で加工性が良く、建築材などにも用いられる。弾性は心許ないが斧柄に用いることは可能である。ニレ属は重硬なハルニレ、強さ中庸なオヒョウなどが考えられるが、切削性や寸法安定性は不良である。ユズリハ属には精密で強さ中庸からやや重硬なユズリハがあり、福井県鳥浜貝塚では斧柄で用いられるなど堅杵に適材である。臼にはクスノキ、ヤマザクラが利用されており、いずれの樹種も粘り気があり強度が強く耐水・保存性が高く、虫害にも強いいため、臼に適材である。なお、わらじ編み、田下駄にはスギが用いられており、板状の木製品にはよく見られる用材である。

弓、刺突具、ヤス状組製品、網杵部材などの狩猟・漁撈具にはマツ属複維管束亜属、ヤマグワ、イスノキ、ツゲ、ヒサカキ属などの比較的径の小さな木材が利用されている。ヤマグワは堅硬で靱性に富み弓にも適した材質であるが弓に用いられるのはややめずらしく、弥生時代前期の雀居遺跡で飾り弓などが見られる。マツ属複維管束亜属、イスノキ、ツゲは耐朽・保存性が高く、ヒサカキ属は耐潮性がある材であり、刺突具、ヤス状組製品、網杵部材などに適材である。

布巻具、緯打具などの紡織具にはマツ属複維管束亜属、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、アワブキ属が利用されている。いずれの樹種も比較的耐朽性のある樹木で、杭や道具柄などの棒状の木製品に利用される木材であり、布巻具、緯打具に適材である。

背負子、櫂、舟などの運搬具にはコナラ属アカガシ亜属、クスノキ、サカキが利用されている。いずれの樹種も堅硬で強靱であり、また耐朽性もあり力の加わる背負子や櫂に適材である。特に保存性の高いクスノキは舟に用いられている。

杓文字、杓子、匙、ヘラ状木製品などの食事具にはイヌガヤ、マキ属、スギ、ヒノキ、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属、ヤマグワ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ属、トネリコ属が利用されている。いずれも堅硬で強靱で、比較的耐朽性のあるものが選定されている。なお、柄を含め杓子類は51点の内21点がマキ属であり、杓子には恣意的にマキ属を用いている。

蓋、桶状容器、把手付容器、脚付容器、舟形槽などの容器にはコナラ属アカガシ亜属、カヤ、マキ属、マツ属複維管束亜属、ヤナギ属、シイ属、ケヤキ、カツラ、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモ、クスノキ科、キハダ属、センダン、トネリコ属が利用されている。コナラ属アカガシ亜属、カヤ、マキ属、マツ属複維管束亜属、カツラ、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモは堅硬で耐朽性が高く、またキハダ属はやや軽軟である。いずれの樹種も水湿に強く、クスノキは槽や舟に利用される例などもあり、容器に適材である。またセンダンはケヤキに似るがやや劣り、耐朽・保存性は比較的良い材であり、適材と言える。一方でヤナ

ギ属、シイ属は耐朽・保存性の低い材であり、容器には適していないが、建築材にも利用される木材である。なお、九州ではシイ属が多様に用いられる傾向があり、シイ属を用いたと考えられる。

琴にはスギ、ヒノキが用いられており、いずれも加工が容易で板状木製品によく利用される木材である。琴に利用される木材としてはよく見られる用材である。

火鋸臼、鉤、案、腰掛などの雑具にはマキ属、クロマツ、マツ属複維管束亜属、クリ、クスノキ、クスノキ科、ヤマザクラ、カエデ属、アワブキ属が用いられている。火鋸臼にはカエデ属、アワブキ属の耐朽・保存性は中庸で堅硬な材を用い、鉤、針などにはマキ属、クロマツ、マツ属複維管束亜属の強靱で耐朽・耐湿性に優れた針葉樹を用い、案、腰掛、イスにはクリ、クスノキ、ヤマザクラなどの重硬で耐朽・耐湿性に優れた材を用いている。

剣形、矛形、舟形、鳥形、人物線刻板、木偶などの祭祀具にはコナラ属アカガシ亜属、エノキ属、クスノキ、トネリコ属が利用されている。コナラ属アカガシ亜属、クスノキは耐朽・保存性に優れており水湿に良く耐える材で、エノキ属は強靱で耐朽・保存性は中庸である。その一方でトネリコ属は硬いが耐朽・保存性の低い材である。祭祀具には多くは耐朽性に優れた水湿に耐える樹種を選定して用いているが、トネリコ属のような耐朽・保存性の低い材も用いられている。なお、祭祀具に針葉樹が見られないことはめずらしい。

扉、鼠返し、梯子などの建築材にはカヤ、マキ属、モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、クリ、スタジイ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属クスギ節、ヤマグワ、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモ、クロモジ属、ユズリハ属、キハダ属、ムクロジ、ヤブツバキが利用されている。カヤ、マキ属、マツ属複維管束亜属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属クスギ節、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモ、クロモジ属は耐朽性が高く水質に良く耐える材で、水湿の影響がある柱や礎板などの建築材に利用される傾向がある。またクスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモ、クロモジ属は同じクスノキ科に属しており、芳香が強く防腐・防虫作用があり、鼠返しや梯子のあるような貯蔵用の建物に利用されたのはその効果が期待されてのことだろう。扉に用いられたモミ属は保存性が低いが高い防虫効果があるだけでなく、調湿・消臭効果もあり、また軽い材であることから扉に選定されたと考えられる。また、クリ、スタジイ、シイ属はタンニンが多いことから防虫作用だけでなくカビを防ぐ効果があり、湿気の高い地域では建築材として重宝される材である。他にスギは加工が容易で広汎な用途の材で板材によく用いられ、ヤマグワ、ユズリハ属、ヤブツバキは堅硬で折れにくい材であり、キハダ属は軽軟な材だが水湿に強い材で、ハンノキ属ハンノキ節は耐朽性は中庸な材で器具などに利用される。ムクロジはやや軽軟だが脆弱な材であり建築材には用いられない材である。建築材には耐朽性が高く船材に利用されるような特に水湿に良く耐える材や、防虫作用や防カビ効果のある材が多く選定されている。

用途の不明な木製品の中には上記の樹種の他にヤマモモ、ハンノキ属、ツブラジイ、コナラ属、モチノキ属、シャシャンボ、ニワトコ、ガマズミ属が利用されている。ヤマモモはあまり大きく成長しないが堅硬で建築材や器具などに利用され、ハンノキ属は耐朽・保存性、切削・加工性ともに中庸な材で挽物の器などに利用され、ツブラジイは耐朽・保存性は低いが九州では防腐作用から建築材によく利用され、コナラ属、シャシャンボ、ガマズミ属は堅硬で強靱な



材であり、モチノキ属はやや堅硬な材で器具などに利用され、ニワトコは柔らかい材で寄木や木象嵌などの小細工物に利用される。ニワトコは利用された例が少ないが、他の樹種は建築材や道具柄などの用途に用いられたと考えられる。

同定された樹種は温帯から温帯下部の暖温帯、暖帯に分布する樹木である。最も多いコナラ属アカガシ亜属は西南日本に分布する照葉樹林を構成する主要高木であり、陽当たりの良い山野に生育する。またヤマモモ、クスノキ、イスノキ、サカキは山林内に生育し、照葉樹林の構成要素である。山林にはコナラ属クスギ節、クリ、ツブラジイ、スギ、ヒノキ、キハダ属、シロダモ、クロモジ属、モチノキ属、ガマズミ属が生育し、山林内の肥沃な深層ではモミ属、緩傾斜な適潤地にはマキ属、少し拓けた石灰岩地などではツゲが自生し、陽当たりの良い林縁にはヤマザクラが、山野ではニワトコが生育していた。排水のよい斜面地ではサクラ属が、適潤な谷間や河川沿いではカヤ、イヌガヤ、ヤナギ属、エノキ属、ヤマグワ、カツラ、カエデ属、ムクロジが、河辺周辺の水湿のある低地ではハンノキ属ハンノキ節およびハンノキ属、ニレ属、ケヤキ、トネリコ属が生育していた。そこから海に向かう沿岸平野にはクスノキ、ヤブツバキが、海岸沿いにはより耐塩性の高いスタジイ、ヤブニッケイ、タブノキ、センダン、ユズリハ属、シャシャンボが、海沿いの砂地には海岸林としてクロマツ（マツ属複維管束亜属）が生育していた。なお、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属クスギ節、クリ、スタジイ、ツブラジイ、シイ属、アワブキ属は二次林要素または二次林構成要素でもある。

本遺跡で利用された樹木は遺跡周辺の山林やそれに伴う河川や沿岸平野、そして海岸沿いから採取されており、地域的な流通によってもたらされたと考えられる。耐朽性が高く水湿に耐える強靱で堅硬な樹種が利用されており、その中でも農耕具にはコナラ属アカガシ亜属、杓子にはマキ属、容器にはクスノキなどの耐湿性のある樹種を選材していた。貯蔵用の建物には防腐・防虫作用があるクスノキ、タブノキなどのクスノキ科を意図して用いたものと考えられる。また他に建築材に見られるクリ、スタジイやモミ属にも防腐・防虫作用があり、これらも貯蔵用の建物に利用されたと推定される。他の木製品の用途を見ても、強靱さや耐朽性など木材の性質を理解した上での選材であることがよくわかる。なお、本遺跡ではコナラ属アカガシ亜属の利用が最も多い傾向がある。

#### 参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48。  
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100。

表1 上籬子遺跡出土木器の樹種同定

挿図番号	整理番号	品名	学名	和名	同定機関
1	678	斧柄（直柄縦）	unknown	未同定	
2	355	斧柄（直柄縦）	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
3	335	斧柄（直柄縦）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
4	627	斧柄（直柄縦）	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
5	396	斧柄（膝柄縦）	unknown	未同定	
6	471	斧柄（膝柄縦）	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	2
7	347	斧柄（膝柄縦）	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
8	206	斧柄（膝柄縦）	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	1
9	425	斧柄（膝柄縦）	unknown	未同定	
10	526	斧柄（膝柄縦）	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
11	4	斧柄（膝柄横）	unknown	未同定	
12	417	斧柄（膝柄横）	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
13	549	斧柄（膝柄横）	unknown	未同定	
14	382	斧柄（膝柄横）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
15	768	斧柄（膝柄横）	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
16	723	斧柄（膝柄横）	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
17	770	斧柄（膝柄横）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
18	357	斧柄（膝柄横）	unknown	未同定	
19	167	斧柄（未）	unknown	未同定	
20	48	斧柄（未）	unknown	未同定	
21	1504	斧柄（未）	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
22	262	斧柄（未）	unknown	未同定	
23	1415	柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
24	637	鉤	unknown	未同定	
25	239	鉤	unknown	未同定	
26	38	鉤	unknown	未同定	
27	810	鉤	unknown	未同定	
28	182	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
29	138	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
30	370	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
31	18	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
32	247	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
33	782	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
34	1093	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
35	467	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
36	812	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
37	605	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
38	399	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
39	798	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
40	1011	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
41	695	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
42	1056	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
43	758	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
44	535	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
45	707	平鋏（広）	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
46	1188	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
47	774	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
48	1352	平鋏（広）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
49	384	平鋏	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
50	650	平鋏（狭）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
51	97	平鋏（狭）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
52	61	平鋏（狭）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
53	737	平鋏（狭）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
54	1186	平鋏（狭）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
55	631	平鋏（諸手）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
56	189	平鋏（諸手）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
57	622	平鋏（諸手）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
58	604	平鋏（諸手）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
59	66	平鋏（諸手）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
60	603	平鋏（諸手）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
61	259	鋏柄（直柄）	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
62	117	鋏柄（直柄）	<i>Ulmus</i>	ニレ属	1
63	710	鋏柄（直柄）	broad-leaved tree	広葉樹	2
64	379	二又鋏	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
65	31	二又鋏	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
66	8	二又鋏	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1



67	769	二又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
68	225	二又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
69	334	二又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
70	158	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
71	201	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
72	140	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
73	241	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
74	625	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
75	215	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
76	260	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
77	405	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
78	290	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
79	541	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
80	793	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
81	529	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
82	718	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
83	441	三又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
84	400	六又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
85	378	四又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
86	153	五又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
87	172	四又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
88	904	四又鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
89	16	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
90	432	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
91	751	鋹	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
92	406	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
93	210	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
94	732	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
95	240	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
96	730	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
97	565	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
98	611	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
99	157	鋹柄 (直柄)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
100	465	鋹柄 (直柄)	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	2
101	701	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
102	797	鋹柄 (直柄)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
103	776	鋹柄 (直柄)	<i>Eurya</i>	ヒサカキ	2
104	760	鋹柄 (直柄)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
105	297	鋹柄 (直柄)	diffuse-porous wood	散孔材	2
106	179	鋹柄 (直柄)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
107	566	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
108	618	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
109	617	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
110	288	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
111	1152	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
112	243	えぶり	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
113	190	えぶり	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
114	279	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
115	811	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
116	801	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
117	79	さらえ	broad-leaved tree	広葉樹	1
118	401	さらえ	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
119	256	えぶり	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
120	289	曲り柄鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
121	1117	曲り柄鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
122	619	曲り柄鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
123	726	曲り柄鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
124	477	鋹柄 (曲り柄)	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
125	47	鋹柄 (曲り柄)	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	1
126	329	鋹柄 (曲り柄)	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	2
127	766	鋹柄 (曲り柄)	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ	2
128	659	鋹柄 (反り柄)	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	コナラ属アカガシ亜属	4
129	185	鋹柄 (曲り柄)	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	コナラ属アカガシ亜属	4
130	118	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
131	103	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
132	3	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
133	152	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
134	55	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1

135	352	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
136	713	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
137	202	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
138	648	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
139	741	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
140	542	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
141	423	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
142	630	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
143	844	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
144	404	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
145	594	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
146	326	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
147	407	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
148	505	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
149	188	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
150	479	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
151	712	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
152	420	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
153	168	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
154	667	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
155	509	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
156	528	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
157	439	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
158	339	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
159	439	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
160	903	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
161	199	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
162	116	鋹	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
163	638	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
164	665	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
165	254	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
166	574	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
167	149	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
168	195	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
169	824	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
170	556	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
171	883	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
172	773	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
173	764	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
174	304	鋹柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
175	738	鋹柄把手	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
176	81	鋹柄把手	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
177	200	掘り棒	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
178	1354	掘り棒	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
179	878	掘り棒	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4
180	567	掘り棒	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
181	518	わらじ編み?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	2
182	380	田下駄	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	2
183	688	白	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
184	706	白	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz.	ヤマザクラ	2
185	708	白	Lauraceae	クスノキ科	2
186	143	白	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
187	353	堅杵	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
188	342	堅杵	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
189	161	堅杵	<i>Daphniphyllum</i>	ユズリハ属	1
190	346	堅杵	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
191	376	堅杵	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
192	381	堅杵	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
193	354	堅杵	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
194	475	堅杵	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
195	212	堅杵	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
196	184	堅杵	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
197	728	堅杵	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
198	258	堅杵	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	1
199	35	堅杵	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
200	1057	堅杵	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
201	790	堅杵	<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	2
202	62	作業台	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1

203	180	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
204	183	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
205	889	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
206	144	横植	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	1
207	286	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
208	24	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
209	483	横植	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
210	655	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
211	540	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
212	687	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
213	198	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
214	173	横植	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	1
215	402	横植	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
216	800	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
217	767	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
218	77	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
219	785	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
220	628	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
221	1019	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
222	754	横植	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
223	633	横植	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
224	64	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
225	377	横植	unknown	未同定	
226	422	横植	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	2
227	973	横植	unknown	未同定	
228	1484	横植	unknown	未同定	
229	986	横植	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	2
230	419	横植	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
231	5	鎌柄	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	3
232	272	鎌柄	<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	1
233	1303	鎌柄	unknown	未同定	
234	916	鎌柄	unknown	未同定	
235	1197	木鎌?	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
236	799	弓	ring-porous wood	環孔材	2
237	985	弓	<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ	2
238	415	弓	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
239	63	組み合せ式ヤス	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	3
240	487	組み合せ式ヤス	<i>Buxus microphylla</i> S. et Z. var. <i>japonica</i> R. et W.	ツゲ	3
241	634	組み合せ式ヤス	<i>Buxus microphylla</i> S. et Z. var. <i>japonica</i> R. et W.	ツゲ?	3
242	757	ヤス	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
243	519	ヤス	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
244	11	ヤス	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	1
245	779	ヤス	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
246	131	ヤス	diffuse-porous wood	散孔材	1
247	1386	ヤス	unknown	未同定	
248	106	ヤス	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
249	636	ヤス	<i>Prunus</i>	サクラ属	2
250	435	ヤス	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
251	303	ヤス	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
252	976	柄	unknown	未同定	
253	838	緯打具	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
254	974	緯打具	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
255	928	布巻具	<i>Meliosma</i>	アワブキ属	2
256	927	布巻具	unknown	未同定	
257	194	布巻具	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
258	2	布巻具	<i>Castanopsis</i>	シイ属	1
259	440	背負梯子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
260	654	背負梯子	unknown	未同定	
261	642	背負梯子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
262	1205	舟	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
263	156	權	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
264	205	權	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
265	514	權	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
266	255	權	unknown	未同定	
267	461	權	unknown	未同定	
268	59	杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
269	1005	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
270	276	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1

271	759	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
272	571	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
273	60	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
274	600	縦杓子	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ	2
275	37	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
276	58	縦杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
277	23	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	3
278	230	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
279	621	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
280	813	斜め杓子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
281	155	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
282	301	斜め杓子	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
283	39	斜め杓子	unknown	未同定	
284	307	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
285	1141	斜め杓子	unknown	未同定	
286	833	斜め杓子	conifer	針葉樹	2
287	408	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
288	164	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
289	756	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
290	433	斜め杓子	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
291	534	匙	unknown	未同定	
292	1123	匙	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
293	427	横杓子	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
294	211	横杓子	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	3
295	177	斜め杓子	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ	1
296	392	斜め杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
297	284	斜め杓子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	1
298	647	片口	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	3
299	187	片口	unknown	未同定	3
300	522	片口	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
301	1006	片口	<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ	2
302	693	片口	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	イスガヤ	2
303	109	杓文字状杓子	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
304	162	杓文字状杓子	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	3
305	367	杓文字状杓子	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
306	586	杓文字状杓子	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	2
307	426	杓文字状杓子	<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.	ヤマモモ	2
308	557	杓文字状杓子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
309	54	杓文字状杓子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	1
310	100	杓文字状杓子	unknown	未同定	
311	107	杓文字状杓子	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
312	658	杓文字状杓子	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
313	369	杓文字状杓子	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
314	223	杓文字状杓子	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
315	181	杓文字状杓子	unknown	未同定	
316	321	杓文字状杓子	unknown	未同定	
317	19	杓文字状杓子	unknown	未同定	
318	322	杓文字状杓子	unknown	未同定	
319	200	杓文字状杓子	unknown	未同定	
320	292	杓文字状杓子	unknown	未同定	
321	20	杓文字状杓子	<i>Celtis</i>	エノキ属	1
322	663	黒漆塗容器	<i>Salix</i>	ヤナギ属	3
323	398	漆塗脚付容器	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc.	カツラ	3
324	57	桶状容器	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	イスガヤ	1
325	771	桶状容器	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ	3
326	268	把手付容器	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	1
327	598	把手付容器	unknown	未同定	
328	174	皿形容器	<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	1
329	209	箱形容器	unknown	未同定	
330	513	把手杯容器	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	3
331	36	把手付容器	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
332	394	把手付容器	unknown	未同定	3
333	175	把手付容器	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
334	287	把手付容器	<i>Castanopsis</i>	シイ属	1
335	524	動物形容器	<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb.	ヤブニツケイ	3
336	451	動物形容器	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
337	448	動物形容器	unknown	未同定	
338	135	双脚容器	unknown	未同定	



339	197	双脚容器	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
340	56	双脚容器	unknown	未同定	
341	593	双脚容器	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ	2
342	490	双脚容器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	2
343	438	双脚容器	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
344	500	双脚容器	<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb.	ヤブニッケイ	2
345	462	双脚容器	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ	2
346	640	皿形容器	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
347	403	アワビ形容器	unknown	未同定	3
348	472	舟形容器	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
349	17	箱形容器	unknown	未同定	
350	320	箱形容器	unknown	未同定	
351	445	蓋	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
352	139	蓋	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
353	42	蓋	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
354	92	蓋	unknown	未同定	
355	130	蓋	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
356	716	蓋	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ	2
357	293	蓋	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
358	521	蓋	unknown	未同定	
359	690	琴	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ	2
360	391	琴	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	3
361	689	線刻琴	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	3
362	178	線刻琴	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	3
363	572	琴?	unknown	未同定	3
364	306	琴?	conifer	針葉樹	4
365	489	板	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
366	750	人物線刻板	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	3
367	1	鳥形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
368	14	木隅	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
369	786	木隅	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	3
370	715	矛形	<i>Celtis</i>	エノキ属	2
371	45	槍形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
372	1129	剣形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
373	739	楯形?	bark	樹皮	3
374	246	鉤	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
375	294	鉤	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
376	657	鉤	unknown	未同定	
377	539	鉤	<i>Pinus thunbergii</i> Parl.	クロマツ	2
378	151	鉤	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
379	762	鉤	unknown	未同定	
380	486	鉤	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
381	395	鉤	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
382	1145	把手	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
384	40	腰掛け	unknown	未同定	3
385	446	火鑽臼	<i>Acer</i>	カエデ属	3
386	129	火鑽臼	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	1
387	1124	火鑽臼	<i>Meliosma</i>	アワブキ属	2
388	805	火鑽臼	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
389	454	用途不明品	conifer	針葉樹	2
390	282	腰掛け	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
391	578	腰掛け	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz.	ヤマザクラ	2
392	559	腰掛け	Lauraceae	クスノキ科	2
393	468	梯子	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
394	104	梯子	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	1
395	71	梯子	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
396	523	梯子	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ	2
397	579	梯子	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
398	434	梯子	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i>	ハンノキ属ハンノキ節	2
399	1203	鼠返し	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節	
400	73	鼠返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
401	34	鼠返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
402	85	鼠返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
403	409	鼠返し	<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb.	ヤブニッケイ	2
404	595	鼠返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
405	498	鼠返し	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
406	332	柱	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	2
407	78	柱	unknown	未同定	

408	777	柱	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スタジイ	2
409	213	柱	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
410	88	柱	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
411	90	柱	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スタジイ	1
412	691	柱	unknown	未同定	
413	791	柱	unknown	未同定	
414	89	梁	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
415	214	柱	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
416	772	板	<i>Daphniphyllum</i>	ユズリハ属	2
417	102	板	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ	1
418	328	板	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	2
419	111	板	<i>Castanopsis</i>	シイ属	1
420	449	建築材(矢板)	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	2
421	123	建築材(矢板)	unknown	未同定	
422	330	-	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	2
423	1118	板	unknown	未同定	
424	450	扉板	<i>Abies</i>	モミ属	2
425	459	扉板	unknown	未同定	
426	113	板	unknown	未同定	
427	69	板	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
428	30	板	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	1
429	32	板	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ	1
430	581	板	unknown	未同定	
431	410	板	unknown	未同定	
432	114	板	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	1
433	455	建築材	unknown	未同定	
434	717	建築材	unknown	未同定	
435	311	建築材	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
436	375	扉材	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ	2
437	358	建築材	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
438	98	建築材	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
439	651	建築材	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
440	219	建築材	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ	1
441	787	建築材	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	2
442	224	建築材	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ	1
443	110	その他	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
444	569	その他	Lauraceae	クスノキ科	2
445	150	双脚容器	unknown	未同定	
446	604	双脚容器	Lauraceae	クスノキ科	1
447	248	その他	unknown	未同定	
448	537	その他	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
449	612	その他	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
450	629	その他	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
451	421	その他	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	3
452	755	その他	broad-leaved tree	広葉樹	2
453	283	その他	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	1
454	252	その他	unknown	未同定	
455	72	その他	diffuse-porous wood	散孔材	1
456	277	その他	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	1
457	269	その他	<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>sieboldiana</i> Hara	ニワトコ	1
458	338	その他	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	2
459	802	その他	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
460	620	その他	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ	2
461	1321	その他	unknown	未同定	
462	148	加工品	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
463	1312	柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
464	41	へら状	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
465	1350	板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	2
466	1350-3	板	unknown	未同定	
467	1350-2	板	unknown	未同定	
468	895	加工品	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
469	531	板	<i>Abies</i>	モミ属	2
470	668	板	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
471	681	板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	1
472	1511	板	unknown	未同定	
473	1131	板	unknown	未同定	
474	729	板	unknown	未同定	
475	300	えぶり	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2



476	299	杓子	ring-porous wood	環孔材	3
477	324	鋤	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
478	1183	白	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	3
479	580	杓子柄	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	2
480	826	斧柄	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
481	588	三又鋸	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
482	587	建築材(柱)	unknown	未同定	
483	748	背負梯子	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
484-1	749	背負梯子	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	3
484-2	749	背負梯子	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	3
485	846	扉板	<i>Abies</i>	モミ属	2
486	847	扉板	<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	2
487	447	扉板	<i>Abies</i>	モミ属	2
488	308	扉板	<i>Abies</i>	モミ属	2
489	309	扉板	<i>Abies</i>	モミ属	2
490	863	扉板	<i>Abies</i>	モミ属	3
491	856	その他	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	2
492	855	その他	<i>Meliosma</i>	アワブキ属	2
493	860	板	unknown	未同定	
494	865	板	<i>Lindera</i>	クロモジ属	2
495	857	板	unknown	未同定	
496	877	板	unknown	未同定	
497	821	その他	unknown	未同定	
498	819	その他	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	2
499	-	その他	unknown	未同定	
500	126	器種不明	unknown	未同定	
501	365	器種不明	unknown	ツブラジイ	1
502	-?	器種不明	unknown	未同定	
503	393	諸手容器	unknown	未同定	
	13	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	25	-	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スタジイ	1
	28	-	<i>Castanopsis</i>	シイ属	1
	29	-	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1
	44	鋤	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	49	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	50	-	<i>Quercus</i>	コナラ属	1
	51	-	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	1
	68	-	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ	1
	70	-	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
	70-2	-	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1
	80	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	87	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	105	-	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ	1
	112	-	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	1
	125	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	133	-	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	1
	136	-	<i>Castanopsis</i>	シイ属	1
	137	-	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
	154	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	166	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	176	-	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1
	192	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	204	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	208	鋸?	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	217	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	257	-	<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1
	270	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	278	(所在不明)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1
	305	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	315	-	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	333	-	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
	341	-	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
	371	-	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
	372	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	373	-	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
	383	-	diffuse-porous wood	散孔材	2
	386	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	388	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2

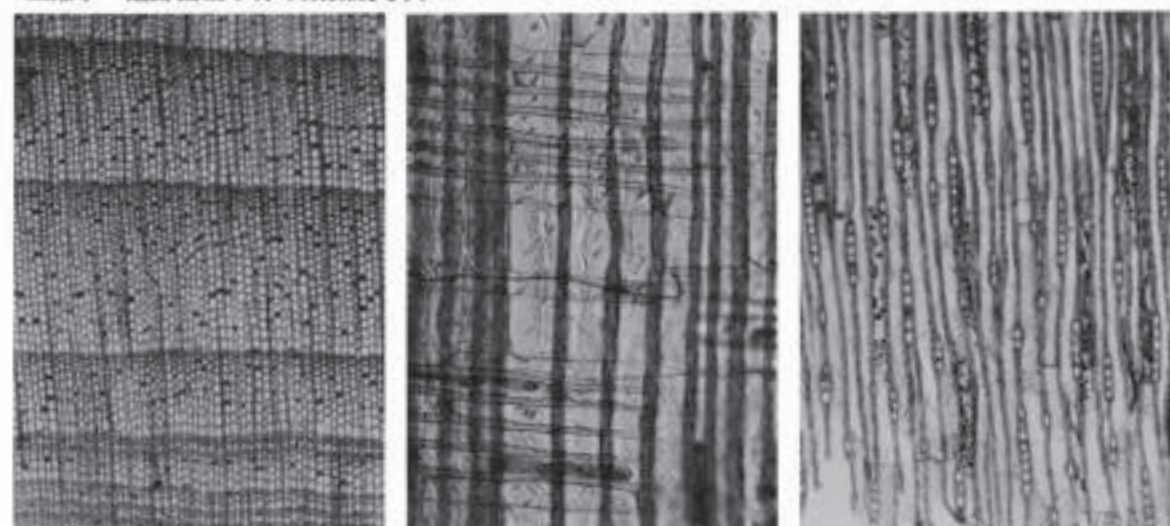
	390	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	397	-	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	2
	424	-	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
	428	-	<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ	2
	429	-	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	2
	442	-	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
	444	-	<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	2
	456	-	<i>Meliosma</i>	アワブキ属	2
	457	-	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
	469	梯子	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	493	-	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	2
	495	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	502	ネズミ返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	510	-	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
	525	加工品	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz.	ヤマザクラ	2
	553	-	bark	樹皮	2
	561	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	577	-	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	2
	584	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	601	建築材	<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ	2
	602	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	610	又鋸	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	646	-	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャシャンボ	2
	652	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	653	-	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
	656	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	670	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	671	-	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
	682	斧柄	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	2
	696	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	697	-	Lauraceae	クスノキ科	2
	699	矢板	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
	705	-	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
	731	ネズミ返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	734	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	743	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	745	ネズミ返し	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	765	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	816	-	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2
	818	-	<i>Lindera</i>	クロモジ属	2
	822	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	823	-	<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb.	ヤブニッケイ	2
	831	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	840	-	Lauraceae	クスノキ科	2
	851	-	<i>Pinus thunbergii</i> Parl.	クロマツ	2
	879	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	907	-	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	933	-	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
	978	-	<i>Ilex</i>	モチノキ属	2
	987	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	995	-	broad-leaved tree	広葉樹	2
	1051	-	<i>Neolitsea sericea</i> Koids.	シロダモ	2
	1092	-	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	1094	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	1095	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	1127	-	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2
	1128	-	diffuse-porous wood	散孔材	2
	1142	-	unknown	未同定	
	1151	刀形	<i>Castanopsis</i>	シイ属	2
	1189	-	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ	2
	1194	-	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ	2
	1319	-	bark	樹皮	2
	1384	針状製品	<i>Podocarpus</i>	マキ属	2
	1496	-	broad-leaved tree	広葉樹	2

※同定機関：1.一般社団法人文化財科学研究センター、2.環境考古研究所、3.公益財団法人元興寺文化財研究所、4.岡部裕俊

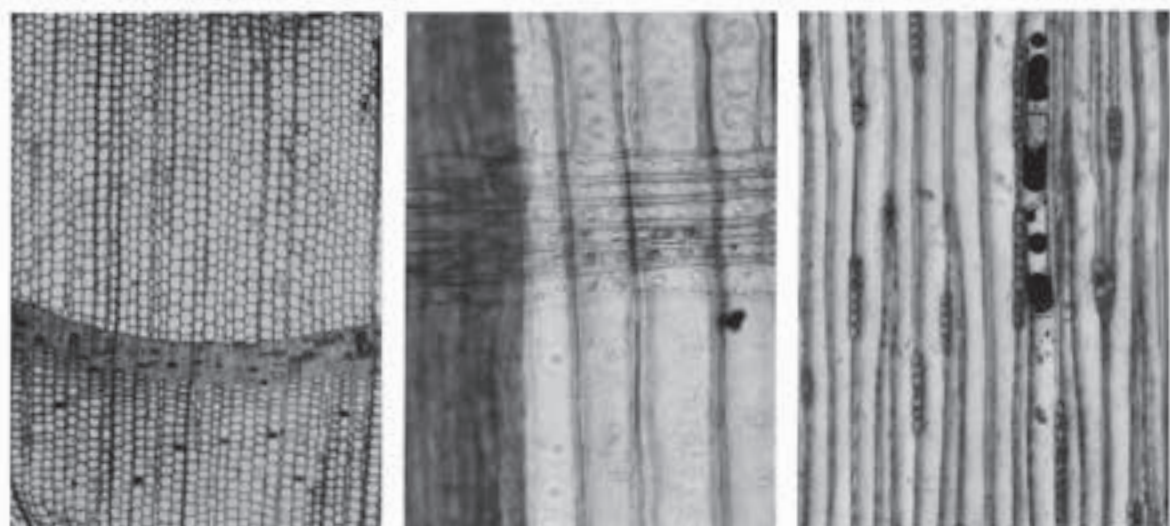




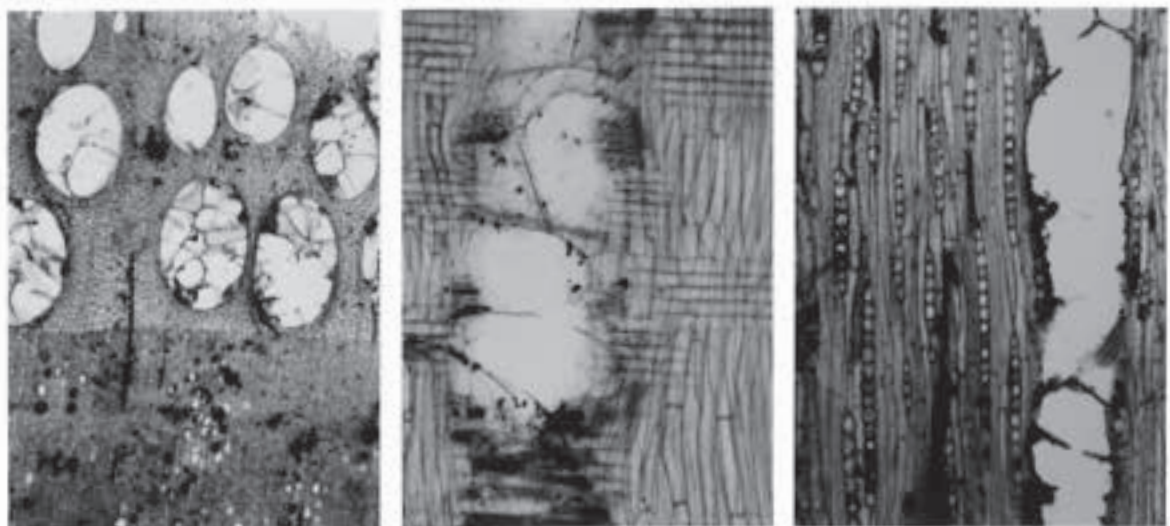
上鑑子 遺跡出土木材の顕微鏡写真I



横断面 :0.5mm  
1. 498 マキ属  
放射断面 :0.1mm  
接線断面 :0.2mm



横断面 :0.5mm  
2. 681 スギ  
放射断面 :0.1mm  
接線断面 :0.2mm

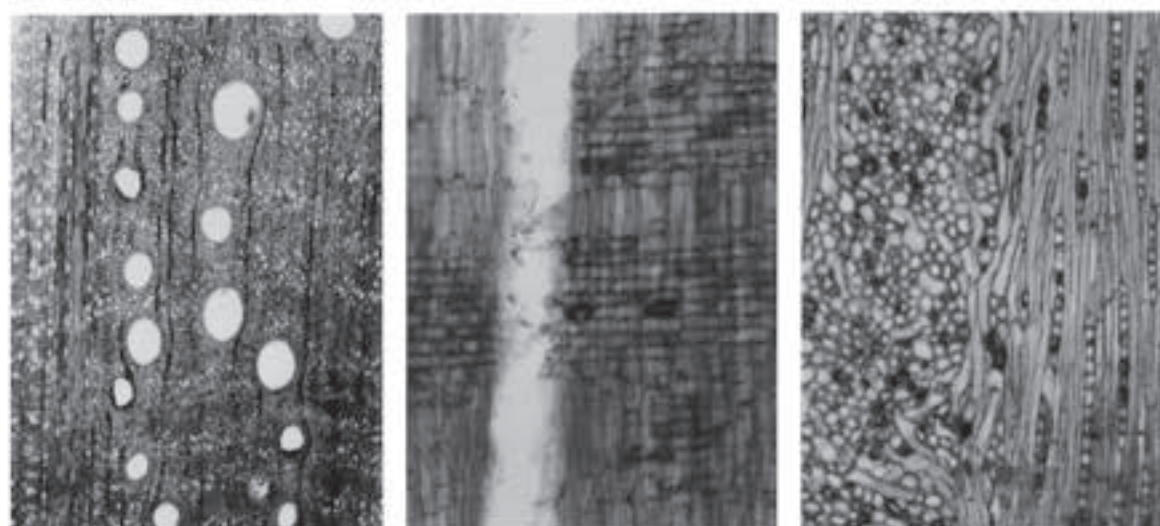


横断面 :0.5mm  
3. 328 クリ  
放射断面 :0.2mm  
接線断面 :0.2mm

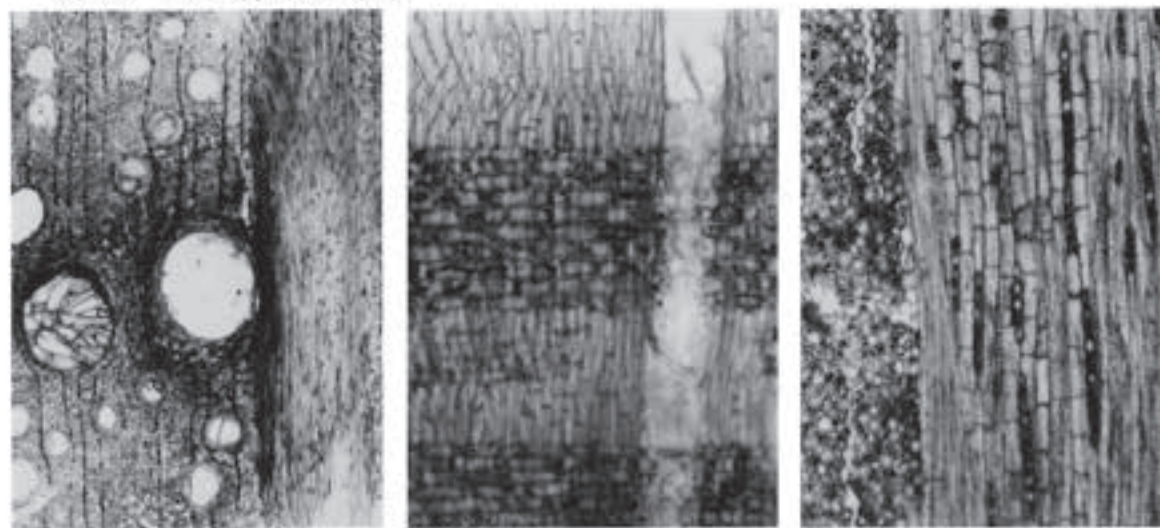
上鑑子 遺跡出土木材の顕微鏡写真II



横断面 :0.5mm  
4. 819 スゲジイ  
放射断面 :0.2mm  
接線断面 :0.2mm



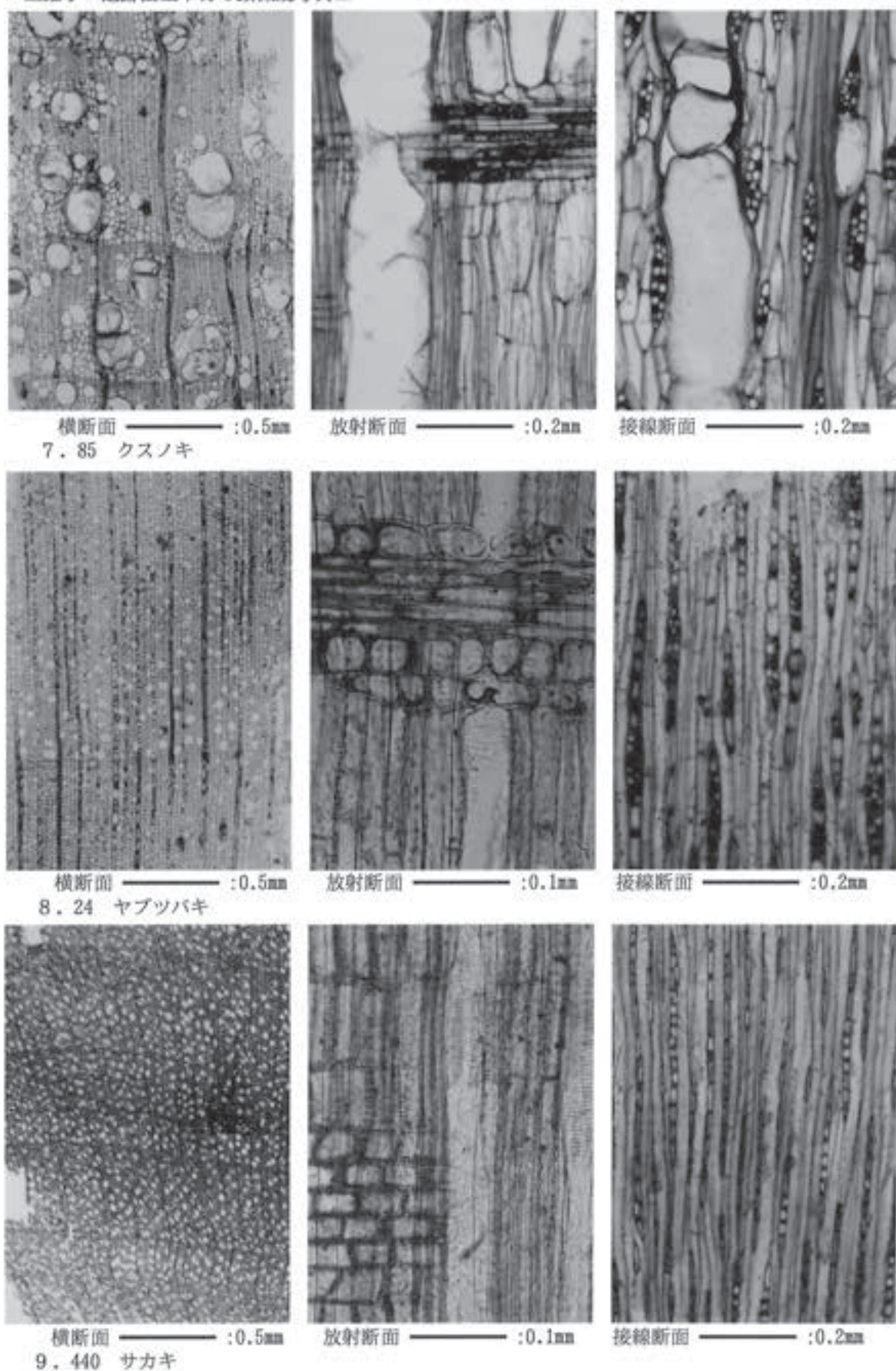
横断面 :0.5mm  
5. 342 コナラ属アカガシ亜属  
放射断面 :0.2mm  
接線断面 :0.2mm



横断面 :0.5mm  
6. 144 コナラ属クヌギ節  
放射断面 :0.2mm  
接線断面 :0.2mm



上鑑子 遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅲ



### 3. 木製品表面塗装膜断面観察結果

(公財) 元興寺文化財研究所

上鑑子遺跡出土木製品のうち、表面に塗膜が観察された資料について極微量の試料採取して樹脂に包埋したのち、試料断面を研ぎ出し、金属顕微鏡で観察し、写真撮影を行なった。

#### 1. 使用機器

- ・電子マイクロアナライザー (EPMA) (株堀場製作所製 EMAX2000)
- ・フーリエ変換型赤外分光光度計 (FT-IR) (日本電子(株)製 JIR-6000)
- ・金属顕微鏡 (株オリンパス製 BH2-UMA)

#### 2. 分析試料と結果

##### 1 W304 杓文字状木製品

木胎本体の漆様塗料 (下地層、塗膜層の確認はできない) を顕微鏡観察で確認した (写真1)。そこでFT-IR分析を行なった結果、図1に示すように漆の特征的なピークは観察できなかった。漆以外のなんらかの有機物 (シブ、および漆様など) が塗布されている可能性は高いが、木部に沈着し、木部との分離が困難であるため、同定できなかった。

##### 2 W323 漆塗脚付容器

木胎の上に、①炭粉下地-②漆層 (透明感強い) -③色漆層 (厚さ50 $\mu$ m~100 $\mu$ m) が観察された (写真2)。

③色漆層に使用されている顔料を、EPMA分析を行なった。図2に示すようにFe (鉄) のピークが強く認められ、ベンガラ (酸化第2鉄) の可能性が高い。また、顕微鏡観察の結果、③色漆層からは一部パイプ状外型を呈するベンガラが確認された。

##### 3 W322 黒漆塗容器

木胎の下に①炭粉下地-②漆層 (透明感強い) -③黒い漆層が観察された (写真3)。なお、漆層 (透明感強い) は数層に別れる可能性がある。

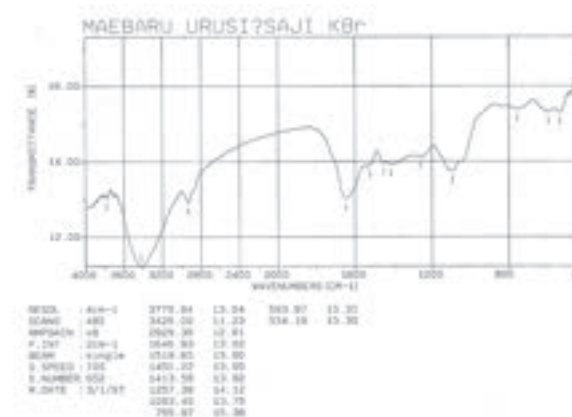


図1 FT-IRチャート

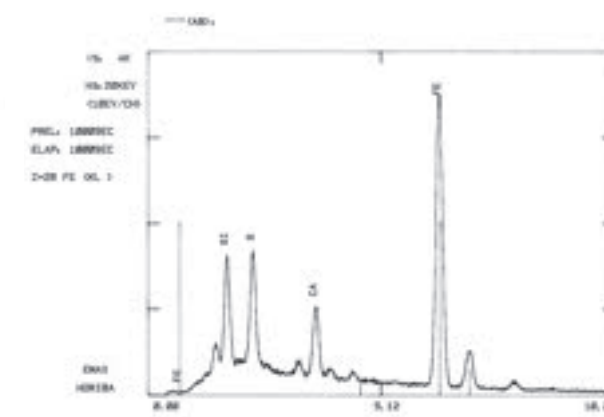
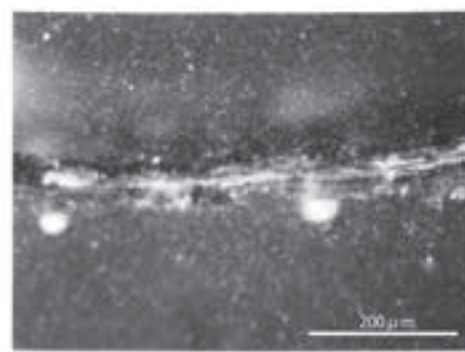
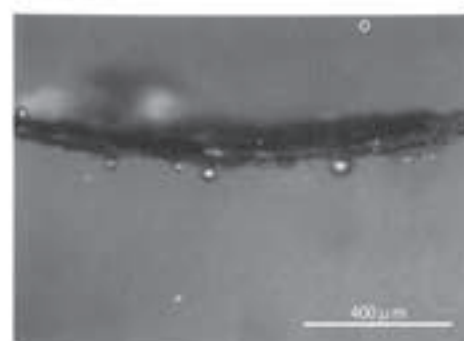


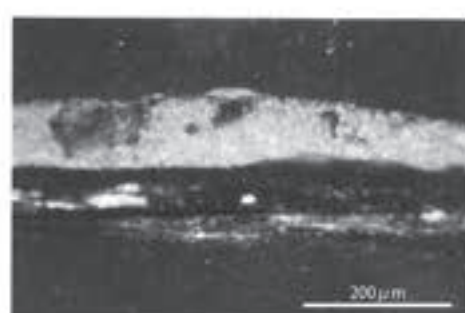
図2 EPMAチャート



## 1 杓文字状木製品 (写真1)

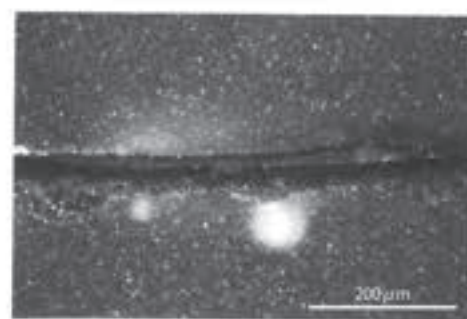
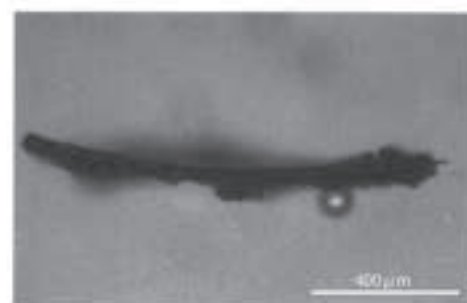


## 2 W323 漆塗脚付容器 (写真2)



③色漆層  
②漆層  
①炭粉下地  
(木胎)

## 3 W322 黒漆塗袋 (写真3)



## 4. 糸島市上鑑子遺跡 4次調査出土ガラス資料の保存科学的調査

比佐陽一郎 (福岡市文化財活用課)

## 1. はじめに

上鑑子遺跡4次調査で出土したガラス製品について、保存科学的調査を行った。

近代以前のガラスは珪素を主成分とする珪酸塩ガラスであるが、近年の理化学機器を用いた調査によって、融剤や着色剤等から幾つかに分類され、それぞれの系譜や変遷が明らかにされてきている(肥塚ほか2010)。このように考古資料など文化財に対する理化学的手法を用いた調査は保存科学的調査と呼ばれている。

今回対象としたのは、上鑑子遺跡4次調査で出土した淡青色の管玉1点、青紺色の小玉20点、赤色の小玉1点の計22点である。出土した層位などから弥生時代後期前半のものと考えられている。なお小稿は、2001年当時に行った調査結果に基づき、2021年時点で内容を執筆している。

## 2. 調査方法

調査は法量の計測と、みかけの比重測定、顕微鏡による観察、蛍光X線分析による材質調査を行った。比重測定はガラスの種類を推定する手がかりとなるが、今回は材質分析を行っているため、あくまで参考値という扱いである。顕微鏡観察では、特に小玉類について気泡の流れから製作技法の推定が可能となる。

材質調査のための蛍光X線分析は、試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。詳細な調査を行うには、風化部分を取り除いて、更に標準資料を用いた校正から成分の定量値を求める必要があるが、今回は非破壊で実施したこともあり定性分析のみに止めている。材質調査は、基礎ガラスの種類や着色剤の推定を行い、時代的な位置づけや系譜関係を知る手がかりを得ることを目的としている。調査機器は福岡市埋蔵文化財センターのものを使用した。装置の仕様と分析条件は次のとおり。

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置(エダックス社製/Eagle μ probe) / 対陰極：モリブデン(Mo) / 検出器：半導体検出器 / 印加電圧・電流：20kV(一部40kV)・任意 / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲：0.3mm φ / 測定時間：約300秒

## 3. 調査の結果

## (1) 比重測定と顕微鏡観察

資料の寸法、重量、見かけの比重は一覧表に示すとおりである。小玉類の比重は2.00~2.81と2.5前後の数値を示しているのに対し、管玉は3.43とやや突出した高い数値となっている。この結果から管玉は鉛珪酸塩系のガラス、また小玉類はアルカリ珪酸塩系のガラスであることが予測された。

青紺色の小玉はいずれも透明度が高いが、No.2を除く全点は鮮やかな色調であるのに対し、No.2の1点は黒緑がかった濃厚な色調で、他と異なる印象を受ける。また、この1点のみ両小

表 上籬子遺跡出土ガラス玉一覧

No.	形状	色調	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	水中重量(g)	比重	分類
1	小玉	青紺色	8.70	5.80	3.20	0.504	0.215	2.34	カリガラス
2	小玉	青紺色	7.15	4.80	1.92	0.338	0.134	2.52	ソーダ石灰ガラス
3	小玉	青紺色	4.55	3.00	1.28	0.079	0.029	2.72	カリガラス
4	小玉	青紺色	4.20	2.85	1.37	0.066	0.025	2.64	カリガラス
5	小玉	青紺色	5.00	2.55	1.40	0.070	0.030	2.33	カリガラス
6	小玉	青紺色	4.85	2.45	1.83	0.063	0.024	2.63	カリガラス
7	小玉	青紺色	4.40	3.10	1.35	0.073	0.029	2.52	カリガラス
8	小玉	青紺色	4.55	2.50	1.44	0.067	0.025	2.68	カリガラス
9	小玉	青紺色	4.65	2.55	1.89	0.063	0.023	2.74	カリガラス
10	小玉	青紺色	4.60	3.00	1.61	0.073	0.028	2.61	カリガラス
11	小玉	青紺色	4.30	2.50	1.36	0.059	0.023	2.57	カリガラス
12	小玉	青紺色	4.65	2.40	1.33	0.059	0.021	2.81	カリガラス
13	小玉	青紺色	4.50	2.65	1.32	0.068	0.026	2.62	カリガラス
14	小玉	青紺色	4.30	2.60	1.28	0.065	0.024	2.71	カリガラス
15	小玉	青紺色	4.35	2.90	1.54	0.060	0.022	2.73	カリガラス
16	小玉	青紺色	4.40	2.75	1.11	0.065	0.029	2.24	カリガラス
17	小玉	青紺色	4.10	2.70	1.21	0.058	0.021	2.76	カリガラス
18	小玉	青紺色	5.00	2.40	1.14	0.076	0.029	2.62	カリガラス
19	小玉	青紺色	5.10	2.10	1.84	0.064	0.023	2.78	カリガラス
20	小玉	青紺色	5.15	2.50	1.63	0.073	0.031	2.35	カリガラス
21	小玉	赤色	3.30	1.80	1.22	0.026	0.013	2.00	ソーダ石灰ガラス (高Al)
22	管玉	淡青色	9.55	13.70	3.80	1.319	0.385	3.43	鉛バリウムガラス

註) 管玉は半裁状態で欠損し、片側小口も破断面であることから、残存部分の最大値を示す。

径と長さは全てノギスによる計測。

孔径は、管玉はノギスで計測し、小玉類はキーエンスビデオマイクロスコープVH-6300の計測機能を用い、50倍にて計測。

口面が研磨されたように平坦になっている点も看取される。いずれの資料も気泡が孔の長軸方向に並行して並んだり、伸びたりする状況が観察されており、引き伸ばした管ガラスを小割りして再加熱し、小玉に整形されたのと想定される（小瀬1987）。

赤色の小玉は不透明で気泡は見られないが、小口面には同心円状に、側面には孔の方向に平行する色の異なる筋が観察されることから、青紺色の小玉と同様の製作技法と考えられる。

管玉は半裁された状態で欠損し、片側の小口は破断面となっていることから、本来はもう少し長かった可能性がある。透明度の低い濁った色調を呈し、外表面は全体にざらついている。実体顕微鏡を用いた観察では孔の内部には絞った様な皺状の深い溝が観察される他、長軸方向の破断面には斜め方向に、また小口方向の破断面には幾重にも孔を取り巻くような円形の細かい筋が観察された。これらは心材に半熔融状態のガラスを巻き付けて製作した際の痕跡と考えられる。

## (2) 材質分析

蛍光X線分析は全ての資料に対して行ったが、結果は色調や形態に基づく当初の分類に対応するものであったので、1点ずつの結果は一覧表に収め、詳細は分類ごとの全体的な傾向として以下に記す。また分析のチャートも紙幅の関係から、それぞれの代表的なものを掲載するに止める。基礎ガラスの分類は肥塚隆保氏らの研究成果（肥塚ほか2010）に準じる。

### ①青紺色小玉

肉眼観察に準じて組成からも二種類のガラスに分類された。No.2を除く19点は、ケイ素（Si）を中心に、カリウム（K）が特徴的に検出されることから、二成分系のカリガラスの特徴を示している。他にマンガン（Mn）、鉄（Fe）が強いピークとして認められるほか、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、コバルト（Co）、銅（Cu）といった元素が微弱な

がら検出されている。

No.2の1点は、カルシウムがカリウムのピークを上回っている状況から、ソーダ石灰ガラスと考えられる。この種のガラスの特徴であるナトリウム（Na）は見られないが、これには風化の影響が想定される。他にマグネシウム（Mg）、アルミニウム、チタン、マンガン、鉄、コバルト、銅、鉛（Pb）といった元素のピークが認められる。アルミニウムは定量値を算出していないが、色調の特徴と合わせて低い部類に属すると考えられる。

青紺色の色調はコバルトによるもので、鉄やマンガンはその不純物とされるが、カリガラスではマンガンが鉄と同じ程度強く検出されるのに対して、ソーダ石灰ガラスではマンガンが鉄のピークを大きく下回るという相違点が指摘できる。

### ②赤色小玉

ケイ素、カルシウムの他、ナトリウムが微弱ながら明瞭なピークとして認められることから、基礎ガラスはソーダ石灰ガラスと考えられる。色調の特徴などから高アルミナタイプと考えられるが、定量値を算出していないため断定はできない。他にマグネシウム、カリウム、チタン、マンガン、鉄、銅、といった元素が見られる。先行研究では赤色の色調は銅コロイドによるものとされている。

### ③淡青色管玉

主成分ケイ素の他、バリウム（Ba）、鉛の強いピークが見られ、基礎ガラスが鉛バリウムガラスであることを示している。この他にアルミニウム、カリウム、カルシウム、鉄、銅といった元素のピークが認められる。この内、銅は淡青色の色調に関与するものと考えられる。

## 4. まとめ

青紺色カリガラスの小玉は、類例も多く、糸島市でも三坂七尾遺跡の墳墓副葬の一括資料(430点)や、井原堺D地点2号甕棺墓出土の71点が挙げられる（比佐ほか2001・2003）。また、井原ヤリミヅ2582、2583番地の複数の墳墓等から出土した3,000点を超える青紺色小玉の内、63点の分析を行い、同種のガラスであることを確認している（比佐2006）。ここでは同じ材質、色調の管玉も5点出土している。福岡市内でも多くの事例があり、北部九州の弥生時代に通有の資料といえる。これに対して同じ青紺色の小玉でソーダ石灰ガラスに分類された資料では、マンガンのピークは低く、同じような色調でもコバルト鉱石の産地、更にはガラスそのものの産地が異なる可能性を示している。不確定ではあるが、マグネシウムのピークが比較的強めに検出される特徴などと合わせると、大賀克彦、田村朋美氏による分類のSⅢB、低アルミナ、植物灰を用いた中東や中央アジアを起源とするガラスにあたる可能性が考えられる（Oga、Tamura2013）。

赤褐色のガラス玉は、ムチサラ（mutisalah）と呼ばれ、インドを起源として、その後、東南アジアに伝播したとされる（肥塚2003）。日本では弥生時代後期以降に見られるようになるが、出現当初の出土例で見ると青色系統に比べてその数は限られる。糸島市や福岡市及び周辺では、三雲仲田I-16地区にて管玉が1点（柳田ほか1981）、福岡市今宿五郎江遺跡4次調査で小玉と



管玉が1点ずつ見られる（榎本1996）。他、奴国域では、福岡市博多区南八幡遺跡9次調査で管玉が1点あり、定性分析であるが本例と同様の結果を示している（比佐ほか2000）。また春日市須玖唐梨遺跡で小玉数点が見られる（春日市1994）。弥生時代終末期以降、古墳時代前期にかけては事例が増加し、三雲遺跡の加賀石 I-22・23地区で小玉が1点（柳田1980）、平原遺跡で小玉90点以上（柳田ほか2000）、福岡市西新町遺跡14次調査では、住居址出土の一括資料に85点が含まれる（比佐2005）。

鉛バリウムガラスは中国漢代に盛行したガラスである。この種のガラスで作られた製品は弥生時代の北部九州には類例が多く、これらを再加工するのに用いられたとされる鑄型なども出土している。鉛同位体比分析がおこなわれた例では、いずれも鉛の産地が中国であることを示しており、中国で製造された製品を輸入したり、日本で再加工したともの考えられている（肥塚1996）。器種を見ると、璧やそれを転用した垂飾、勾玉、管玉、丸玉等多岐にわたっている（江本1983・望月1983）。

私見ではあるが、北部九州で見られる鉛バリウム製の管玉については、大きく次のように分類される。

(I)：長さ1cm強、太さ5mm程度、全体に太さが均一で緑色を呈するもの（出土事例：飯塚市立岩遺跡、那珂川市安徳台遺跡、福岡市上月隈遺跡、大分県日田市吹上遺跡など）。

(II)：長さ3cm程度、太さ6mm前後で中央がやや太くなったエンタシス状の形状で、淡青緑色を呈するもの（出土事例：糸島市三雲番上遺跡、同平原遺跡、福岡市今宿五郎江遺跡、長崎県平戸市中野ノ辻遺跡など）。

(III)：長さの傾向は不明ながら太さが1cm前後、全体に均一な太さで淡青色を呈するもの（福岡市元岡・桑原遺跡）。なお佐賀県吉野ヶ里遺跡や同宇木汲田遺跡で見られるような青色が鮮やかで長尺のものを含む事例がこのタイプになる可能性があるが、そうなると（III）は太さや長さのバリエーションがかなり幅広くなる。

これらは風化の仕方がそれぞれ異なり、(I)は形状を保ちながら白色に風化、(II)は表層から溶けたよう表面が凸凹になったり、孔の周囲を残してやせ細るように風化、(III)は肉眼で見ると限りあまり風化が見られないといった特徴が認められる。もちろんこれらは埋蔵環境に起因する可能性もあるが、器形や色調の特徴と風化の状況に相関が認められることから、別の要因に依存する可能性も考えられる。

以上の記述は今回の分析結果に基づく類例の提示などにとどまったが、糸島市ではこれまで弥生時代を中心に多くのガラス資料が出土し、材質分析も進んでいる（岡部2014）。上籬子遺跡4次調査の資料も、周辺の類例も含めた検討によって歴史的な位置づけが行われることを期待したい。本調査結果がその一助になれば幸いである。

#### 参考文献

- 榎本義嗣（編）1996『今宿五郎江遺跡Ⅲ－第4次調査報告－・徳永A遺跡Ⅲ－第3次調査報告－・丸隈山遺跡Ⅰ－第1次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集 福岡市教育委員会  
江本義理1983「ガラス製品の材質について」『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集 福岡県教育委員会

岡部裕俊2014「糸島地方出土の弥生時代ガラス集成」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』第9号 糸島市立伊都国歴史博物館

春日市教育委員会（編）1994『奴国の首都・須玖岡本遺跡』吉川弘文館

肥塚隆保1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号 財団法人古代学協会

肥塚隆保2003「日本出土ガラスの考古科学研究－古代ガラス材質とその歴史的変遷－」『考古科学の総合的研究 研究成果報告書』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター  
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』11／平成22年（566号）第一法規株式会社

小瀬康行1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学会

比佐陽一郎・片多雅樹・北村幸子・肥塚隆保2000「南八幡遺跡9次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査について」『南八幡遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第641集 福岡市教育委員会

比佐陽一郎・片多雅樹2001「三坂七尾遺跡出土ガラス資料の材質調査」『三坂七尾遺跡 福岡県前原市大字三坂字七尾所在遺跡の調査報告』前原市文化財調査報告書第77集 前原市教育委員会

比佐陽一郎・片多雅樹2003「前原市井原遺跡出土ガラス資料の材質調査」『三雲・井原遺跡Ⅲ 八龍・三雲塚・宮ノ下・井原塚地区の調査』前原市文化財調査報告書第82集 前原市教育委員会

比佐陽一郎2005「西新町遺跡14次調査出土ガラス小玉の調査」『西新町遺跡Ⅵ－福岡県福岡市早良区西新町所在西新町遺跡第14・15次調査報告書－』福岡県文化財調査報告書第200集 福岡県教育委員会

比佐陽一郎2006「前原市三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ2582、2583番地出土ガラス玉の調査について」『三雲・井原遺跡 県道瑞梅寺池田線拡幅工事に伴う文化財調査報告書』前原市文化財調査報告書第92集 前原市教育委員会

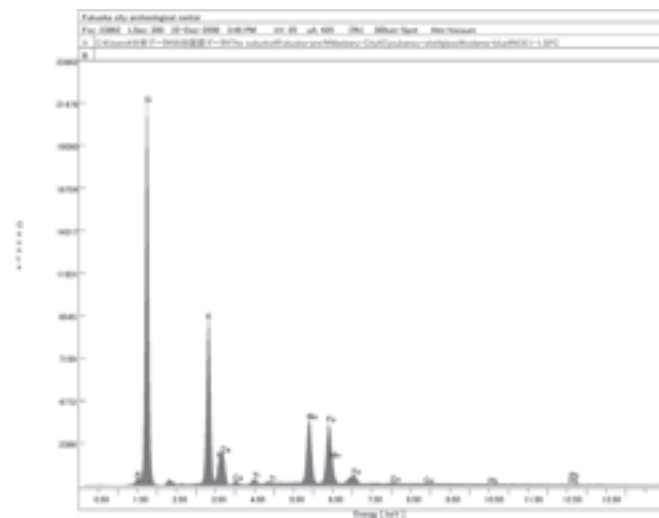
望月明彦1983「ガラスのICP分析」『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集 福岡県教育委員会

柳田康雄（編）1980『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第58集 福岡県教育委員会

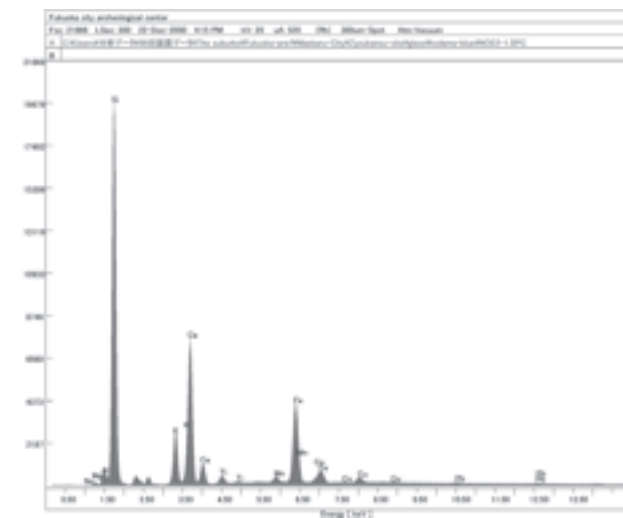
柳田康雄・小池史哲（編）1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集 福岡県教育委員会

柳田康雄・角浩行編2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集 前原市教育委員会

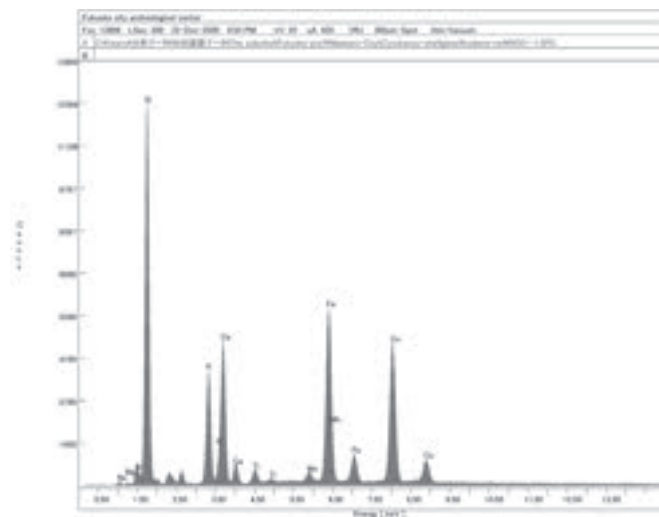
Katsuhiko Oga and Tomomi Tamura2013「Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere:Chemical compositions,chronologies,provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yoyoi-Kofun periods (3rd Century BCE-7th Century CE)」『Journal of INDIAN OCEAN ARCHAEOLOGY』Number 9,2013



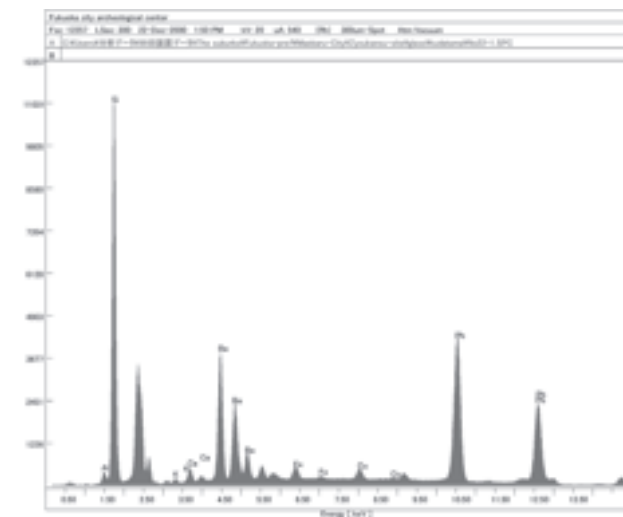
No.01 カリガラス



No.02 ソーダ石灰ガラス (低Alタイプ)



No.21 ソーダ石灰ガラス (高Alタイプ)

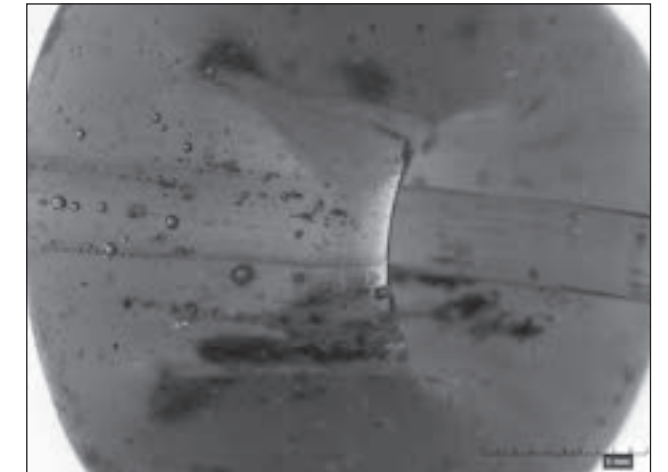


No.22 鉛バリウムガラス

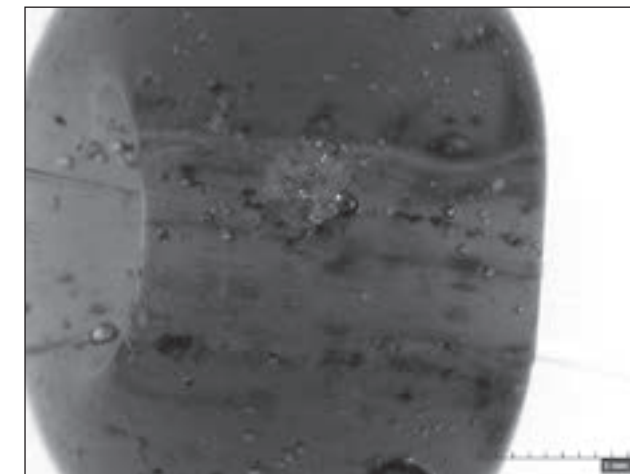
ガラス玉の蛍光X線分析結果



No.05 小口面 (透過光)



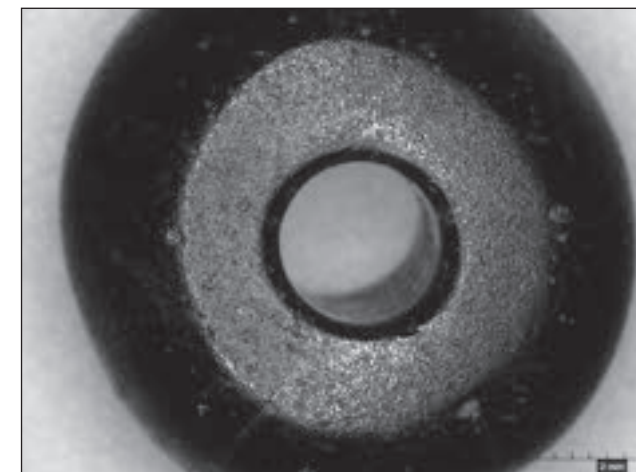
No.05 側面 (透過光)



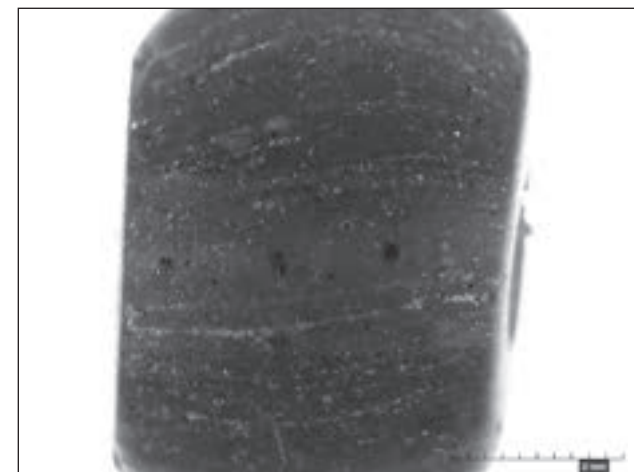
No.09 側面 (透過光)



No.21 小口面 (透過光)

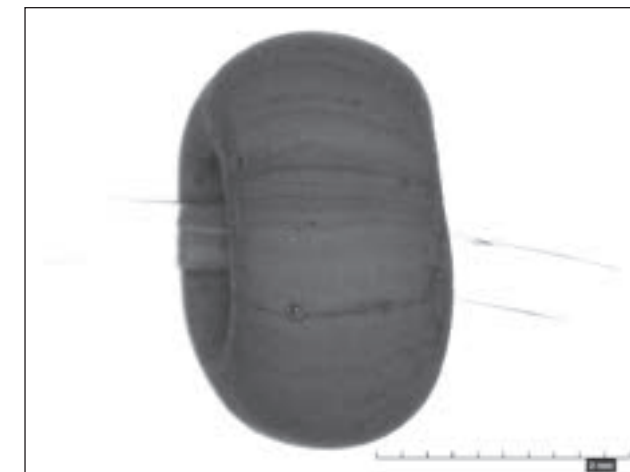


No.02 小口面 (落射光)

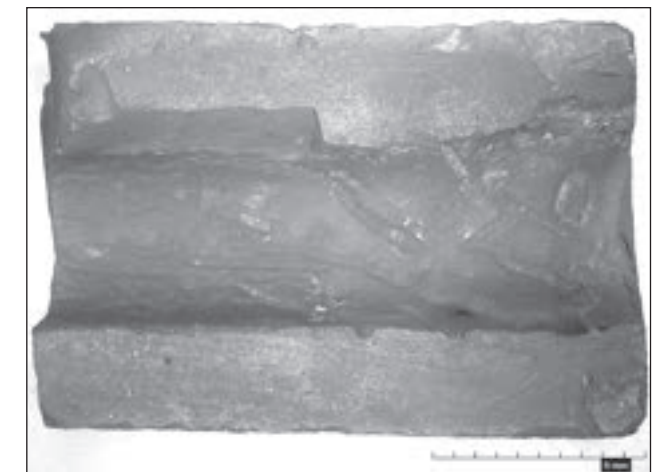


No.02 側面 (透過光)

ガラス玉のデジタルマイクロスコープ画像



No.21 側面 (透過光)



No.22 内面 (落射光)

ガラス玉のデジタルマイクロスコープ画像



## 5. 上籬子遺跡出土青色遺物の分析結果

(財)九州環境管理協会

### 1. 分析試料

分析試料は上籬子遺跡第4次調査における谷部第6区西3層上で検出した青色物質である。

### 2. 分析方法

#### (1) 分析装置

分析は日本電子社製電子マイクロアナライザー (Electron Probe Micro Analyzar : EPMA) を用いて行った。

#### (2) 分析の概要

試料から青色部を抽出し、金蒸着処理後、走査型電子顕微鏡写真 (scanning electron Microscope : SEM) により形状を観察し、EPMAによって画分析を行った。

### 3. 分析結果

SEM像及びEPMAの分析結果 (画像処理) を図に示す。分析の結果、以下に示す元素の存在が確認された。

試料名	確認された元素
色遺物	O, C, P, Fe, V, Ca, Si, Mn

確認された8元素のうち鉄 (Fe) 酸素 (O) リン (P) カルシウム (Ca) の存在率が高かった。これらの元素の化合物が発色に関与しているものと推定される。

(平成9年3月)

第3表 出土土器・土製品観察表①

挿図	番号	地区	層位	時期	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 (表のみ)	焼成	備考
17	1	4	5	2	甕	—	24.5	—	石・長	灰褐色	良好	1号木器溜まり
17	2	4	5	2	高坏	—	22.0	—	精良	黄褐色	やや軟	1号木器溜まり 丹塗磨研
17	3	4	5	2	甕	—	—	9.5	石・長	灰褐色	良好	1号木器溜まり
20	4	3	5	—	甕	—	23.7	—	花崗岩大粒	黒褐色	良好	夜臼式甕片 表面に貝殻状痕
20	5	3	5	2	甕蓋	9.1	(6.4)	—	石・長	良好	良好	
20	6	4	5	2	甕	28.0	22.7	8.0	花崗岩小粒	淡い	良好	
20	7	4	5	2	甕	—	29+	—	精良	淡褐色	良好	丹塗、暗文状研磨の上に黒塗り
20	8	3	5	2	甕	33.4	31.5	8.8	花崗岩小粒	黄褐色	良好	
20	9	5	5	2	甕	48.2	42.2	9.3	石・長	淡黄褐色	良好	
20	10	3	5	2	甕	—	28.6	—	石・長	暗黄褐色	良好	外面黒塗り
20	11	2	5	2	鉢	8.4	14.8	5.6	精良	黄褐色	良好	試掘時に4区から出土、丹塗磨研
20	12	4	5	2	鉢	8.9	17.8	6.9	精良	灰褐色	良好	丹塗磨研
21	13	4	5	2	広口壺	—	19.0	—	精良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
21	14	4	5	2	広口壺	32.0	26.2	8.2	石・長	灰褐色	良好	丹塗磨研
21	15	3	5	2	袋状口縁壺	—	10.8	—	石・長	淡灰褐色	良好	丹塗磨研
21	16	3	5	2	袋状口縁壺	—	12.6	—	精良	黄褐色	良好	丹塗磨研
21	17	4	5	2	袋状口縁壺	—	9.0	—	精良	黄灰褐色	良好	丹塗磨研
21	18	8	5	2	袋状口縁壺	22.1	7.7	5.3	精良	淡黄灰褐色	良好	丹塗磨研
21	19	4	5	2	短頸壺	7.5	8.4	4.2	石・長	暗黄褐色	良好	丹塗磨研
21	20	4	5	2	短頸壺	14.2	14.2	7.7	精良	明黄褐色	硬質	丹塗磨研
21	21	5	5	2	脚付短頸壺	—	15.0	—	精良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
21	22	4	5	2	高坏	—	26.8	—	精良	白灰褐色	やや軟	丹塗磨研
21	23	4	5	2	高坏	—	28.0	—	精良	黄褐色	良好	丹塗磨研
21	24	4	5	2	高坏	—	—	—	精良 石	黄褐色	良好	外来系高坏 3・4層からの混入か?
21	25	4	5	2	盃形	6.3	7.5	4.4	精良	明褐色	良好	
21	26	9	5	2	盃形	4.1	6.3	3.1	良好	黄褐色	良好	
21	27	5	5	2	盃形	5.6	9.1	3.4	石・長	淡茶褐色	良好	
21	28	4	5	2	盃形	6.3	8.0	4.3	石・長	淡黄褐色	良好	
21	29	5	5	2	盃形	4.2	6.0	2.0	石・長	黒褐色	良好	
21	30	6	5	2	器台	(13.4)	—	—	石・長	淡黄褐色	良好	外面丹塗磨研 黒線描あり、墨か?
21	31	8	5	2	器台	18.4	11.5	12.7	石・長	暗赤褐色	良好	丹塗磨研
113	a	9	3	3	複合口縁壺	(10.0)	17.5	—	良	淡黄灰色	良好	
113	b	9	3	3	鉢	14.0	21.8	8.0	良	淡褐色	良好	
113	c	9	3	3	鉢	12.4	18.4	7.1	良	淡黄褐色	良好	
113	d	9	3	3	複合口縁壺	16.7	9.3	5.4	良	淡黄褐色	良好	
113	e	9	3	3	甕	—	25.2	—	良	淡茶褐色	良好	
113	f	9	3	3	広口壺	49.5	29.4	10.0	良	淡灰褐色	良好	
113	g	9	3	3	鉢	12.6	15.8	6.5	良	淡赤褐色	良好	
113	h	9	3	3	高坏	—	34.5	—	良	灰白色	良好	坏部に2条の沈線 丹塗磨研
113	i	9	3	3	鉢	11.4	12.8	6.0	良	暗黄褐色	良好	
113	j	9	3	3	甕	29.9	25.8	8.9	良	淡黄褐色	良好	
113	k	9	4	3	広口壺	49.6	26.1	9.5	良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
113	l	9	4	3	広口壺	23.3	16.6	7.8	良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
113	m	10	4	3	広口壺	34.2	21.4	8.2	良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
113	n	10	4	3	甕	21.2	13.7	7.5	良	明褐色	良好	
113	o	10	4	3	複合口縁壺	23.5	11.5	8.9	良	淡褐色	良好	丹塗磨研
113	p	10	4	3	甕	23.9	18.5	6.9	良	明褐色	良好	
113	q	10	4	3	複合口縁壺	—	12.8	—	良	淡黄灰色	良好	丹塗磨研
113	r	10	4	3	短頸壺	13.2	13.3	5.8	良	明黄褐色	良好	
113	s	9	4	3	広口壺	38.7	26.6	9.3	良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
113	t	9	4	3	高坏	22.3	32.9	16.9	良	明黄褐色	良好	丹塗磨研
113	u	9	4	3	鉢	19.0	24.8	7.9	良	淡黄褐色	良好	
113	v	10	4	3	広口壺	49.5	29.2	10.0	良	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
113	w	9	4	3	広口壺	—	42.2	—	良	黄灰色	良好	丹塗磨研
113	x	9	4	3	甕	18.5	18.3	8.2	良	暗黄褐色	良好	
113	y	9	4	3	甕	22.9	20.7	8.5	良	淡赤褐色	良好	
113	z	9	4	3	甕	30.5	26.1	9.1	良	淡黄褐色	良好	
114	32	7	4	3	甕	28.1	24.1	7.3	石・長	淡白灰褐色	良好	
114	33	3	4	3	甕	24.9	21.3	7.9	石・長	黒褐色	良好	
114	34	3	4	3	甕	27.9	19.6	8.1	石・長	黒褐色	良好	
114	35	6	4	3	甕	29.5	21.6	8.4	良質	黒褐色	良好	
114	36	3	4	3	甕	18.8	12.2	6.3	石・長	暗黄褐色	良好	
114	37	4	4	3	台付甕	—	—	—	石・長	淡黄褐色	良好	
114	38	3	4	3	台付甕	—	—	19.5	石・長	淡黄褐色	良好	底部は剥離欠損
116	39	4	4	3	甕	23.0	24.8	9.1	石・長	淡赤褐色	良好	
114	40	3	4	3	鉢	10.2	23.1	7.8	石・長	淡褐色	良好	丹塗磨研
114	41	3	4	3	鉢	22.2	31.7	8.5	石・長	淡褐色	良好	丹塗磨研
115	42	6	4	3	台付鉢	16.6	15.3	12.7	石・長	淡褐色	良好	丹塗磨研
115	43	3	4	3	把手付鉢	—	15.6	—	—	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
115	44	7	4	3	広口壺	—	32.3	—	精良	淡白黄褐色	良好	
115	45	4	4	3	広口壺	32.2	19.8	7.2	石・長	淡黄褐色	良好	
116	46	9	4	3	複後口縁壺	(12.2)	—	5.2	石・長	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
116	47	5	4	3	広口壺	22+	—	—	長	淡灰黒	やや軟	
116	48	7	4	3	広口壺	33.9+	25.0	—	石・長	淡黄灰褐色	良好	肩部に鈎針状浮文、丹塗磨研



第4表 出土土器・土製品観察表②

挿図	番号	地区	層位	時期	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 (表のみ)	焼成	備考
116	49	9	4	3	広口壺	—	26.8	—	石・長	淡褐色	良好	1号木器溜まり
115	50	4	4	3	短頸壺	11.8	10.7	6.1	石・長	灰褐色	良好	1号木器溜まり、丹塗磨研
115	51	5	4	3	複合口縁壺	15.6	15.6	6.5	石・長・雲	明褐色	良好	1号木器溜まり
115	52	3	4	3	複合口縁壺	23.2	27.9	8.0	石・長	明褐色	良好	丹塗磨研
115	53	5	4	3	複合口縁壺	35.2	17.2	9.0	石・長	灰褐色	良好	
115	54	4	4	3	複合口縁壺	35.7	18.5	9.6	石・長	淡黄褐色	良好	
116	55	7	4	3	高坏	—	22.6	—	石・長	乳褐色	良好	丹塗磨研
116	56	4	4	3	高坏	—	17.8	—	精良	乳褐色	良好	丹塗磨研
116	57	4	4	3	高坏	—	15.9	—	精良	乳褐色	良好	丹塗磨研
114	58	5	4	3	器台	16.7	10.8	13.8	長	淡黄褐色	良好	
114	59	3	4	3	器台	18.0	15.3	15.7	石・長	明白黄褐色	良好	
114	60	10	4	3	盃形	6.1	5.8	4.1	良質	淡明黄褐色	良好	
114	61	8	4	3	盃形	4.7	6.7	2.7	精良	淡黄褐色	良好	
114	62	10	4	3	盃形	5.7	8.9	3.7	石・長	灰褐色	良好	
114	63	3	3	3	盃形	11.3	8.2	3.7	石・長	淡黄褐色	良好	
117	64	6	3	3	甕	31.6	21.7	8.8	石・長	黒褐色	良好	
117	65	5	3	3	甕	30.5	22.8	8.0	石・長	黒褐色	良好	
117	66	5	3	3	甕	24.1	16.6	7.0	石・長	暗褐色	良好	
117	67	5	3	3	鉢	15.4	26.5	8.6	石・長	灰褐色	良好	底部穿孔
117	68	6	3	3	鉢	26.9	26.1	8.1	石・長	茶褐色	良好	
117	69	4	3	3	大形広口壺	71.5	49.4	7.0	石・長	淡橙褐色	良好	胴下部に穿孔、丹塗磨研
118	70	7	3	3	広口壺	27.2	11.0	8.0	石・長	明茶褐色	良好	讃岐系?
118	71	4	3	3	複合口縁壺	23.4	10.3	7.0	石・長	明褐色	良好	丹塗磨研
118	72	9	3	3	複合口縁壺	37.5	16.6	9.5	石・長	淡黄褐色	良好	丹塗磨研
118	73	3	3	3	複合口縁壺	36.8	16.4	8.6	石・長	明褐色	良好	
117	74	5	3	3	短頸壺	15.6	15.0	3.3	石・長	淡黄褐色	良好	胴部に丸窓穿孔
117	75	3	3	3	短頸壺	10.5	11.7	5.5	石・長	明橙灰色	良好	
118	76	8	3	3	高坏	18.1	24.2	12.7	精良	桃褐色	良好	丹塗磨研
118	77	6	3	3	高坏	—	34.9	—	石・長	赤褐色	良好	口唇部に沈線 吉備系
118	78	5	3	3	高坏	—	28.2	—	石・長	淡黄褐色	良好	
118	79	4	3	3	高坏	—	—	15.7	長	淡茶褐色	やや軟	
118	80	5	3	3	器台	17.3	12.5	16.0	長・雲	黄灰褐色	良好	
118	81	8	3	3	盃形	3.6	5.4	2.0	石。長	黄褐色	良好	
117	82	5	3	3	尖底甕蓋	3.7	—	13.7	石・長	黒褐色	良好	
117	83	5	3	3	尖底甕	13.2	13.0	—	石・長	橙褐色	やや軟	
119	84	2	2	3	甕	—	26.4	—	長・石	黒褐色	良好	
119	85	2	2	3	甕	—	28.1	—	石・長	暗茶褐色	良好	
119	86	2	2	3	甕	—	16.8	—	石・長	灰褐色	良好	
119	87	2	2	3	甕	17.1	12.0	5.8	石・長	暗褐色	良好	
119	88	2	2	3	甕	18.3	14.2	6.4	石・長	淡茶褐色	良好	
119	89	2	2	3	甕	22.0	13.1	(6.5)	石・長	暗褐色	良好	
119	90	2	2	3	台付甕	—	—	14.0	石・長	淡黄褐色	良好	
119	91	2	2	3	複合口縁壺	—	23.2	—	石・長・閃	淡灰褐色	良好	
119	92	2	2	3	複合口縁壺	—	20.9	—	石・長	淡茶褐色	良好	
119	93	2	2	3	壺	—	—	7.0	石・長	暗灰褐色	良好	頸部丹塗か? 飛沫付着
119	94	2	2	3	複合口縁壺	—	9.4	—	石・長・雲	淡褐色	良好	
119	95	2	2	3	複合口縁壺	19.5	8.7	6.4	石	褐色	良好	
119	96	2	2	3	複合口縁壺	—	—	7.7	石・長	黄褐色	良好	
119	97	2	2	3	広口壺	28.2	20.4	6.0	長	茶褐色	やや不良	
120	98	2	2	3	広口壺	—	43.8	—	石・長	黄褐色	良好	
120	99	2	2	3	大形広口壺	(69)	49.5	55.6	石・長	淡灰褐色	良好	頸部下に打ち欠き
119	100	2	2	3	鉢	8.2	12.0	6.3	石・長	暗黄褐色	良好	
119	101	2	2	3	支脚	9.4	5.4	9.9	石・長	暗褐色	良好	
119	102	2	2	3	支脚	11.0	6.3	12.8	石・長	赤褐色	良好	
120	103	2	2	3	鉢	—	33.4	—	石・長	灰褐色	良好	
120	104	2	2	3	鉢	—	33.4	—	石・長・閃	暗茶褐色	やや軟	
120	105	2	2	3	高坏	—	29.8	—	石・長	白灰褐色	良好	坏部に凹線、口唇部に沈線
120	106	2	2	3	高坏	—	35.4	—	石・長	淡灰褐色	良好	
120	107	4	2	3	高坏	—	30.9	—	石・長	暗桃褐色	良好	坏部内外面丹塗り、吉備系
120	108	2	2	3	高坏	—	—	—	石・長	暗黄褐色	良好	
120	109	2	2	3	高坏	—	—	17.3	石・長・閃	淡灰白色	良好	
120	110	2	2	3	台付鉢	—	17.4	—	石・長	褐色	良好	
120	111	2	2	3	器台	17.4	13.4	14.4	石・長	暗赤褐色	良好	
120	112	2	2	3	器台	19.2	14.8	17.0	石・長	淡灰褐色	良好	
120	113	2	2	3	器台	19.1	15.4	15.4	石・長	灰褐色	良好	
121	114	1	3	3	複合口縁壺	39.1	16.3	6.2	石・長	淡黄褐色	良好	1号土壺
121	115	1	3	3	器台	19.9	16.0	17.1	石・長	淡黄褐色	良好	1号土壺
123	116	6	3	3	甕	30.1	25.3	8.1	良質	暗茶褐色	良好	2号土壺
123	117	6	3	3	複合口縁壺	34.8	18.3	7.5	石・長	淡赤褐色	良好	2号土壺
123	118	6	3	3	高坏	14.0	413.5	9.5	石・長	灰褐色	やや軟質	ミニチュア土器
123	119	6	3	3	鉢	10.8	10.7	5.7	石・長	淡茶褐色	やや軟質	ミニチュア土器
123	120	6	3	3	鉢	11.9	8.7	6.0	石・長	黄灰褐色	良好	2号土壺 ミニチュア土器
123	121	6	3	3	鉢	9.5	9.8	5.8	石・長	茶褐色	良好	2号土壺 ミニチュア土器
125	122	2	2	3	複合口縁壺	—	22.8	—	石・長	淡黄褐色	良好	3号土壺 胴部打ち欠き
125	123	6	2	3	器台	18.6	13.5	14.6	花崗岩粒	淡茶褐色	良好	3号土壺 脚部打ち欠き
125	124	6	2	3	器台	—	17.1	—	花崗岩粒	淡茶褐色	良好	3号土壺

第5表 出土土器・土製品観察表③

挿図	番号	地区	層位	時期	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 (表のみ)	焼成	備考
132	125	4	4	4	複合口縁壺	35.7	18.5	9.6	石・長	黄灰褐色	良好	4号木器溜まり
132	126	4	4	4	甕	21.5	17.4	6.7	石・長	黄灰褐色	良好	4号木器溜まり
132	127	4	4	4	鉢	10.2	13.7	5.0	石・長	黄灰褐色	良好	4号木器溜まり
134	128	2	1	5	甕	20.0	16.7	—	石・長	白灰褐色	良好	
134	129	6	1	5	甕	24.6	16.3	—	石・長	淡黄褐色	良好	
134	130	3	1	5	甕	23.1	15.8	—	石・長	淡黄褐色	良好	
134	131	1	1	5	二重口縁壺	—	18.5	—	石・長	淡黄灰褐色	良好	
134	132	4	1	5	小型丸底壺	8.5	10.4	—	長	淡茶褐色	やや不良	
134	133	2	1	5	広口壺	—	11.6	—	石・長	淡黄灰褐色	良好	
134	134	2	1	5	直口壺	33.0	16.7	—	長	褐色	良好	
134	135	2	1	5	鼓形器台	—	18.9	—	石・長	淡黄褐色	良好	
134	136	6	1	5	高坏	6.9	20.6	—	石・長	淡黄褐色	良好	
134	137	2	1	5	塊	—	12.6	—	精良	明黄褐色	良好	
134	138	2	1	5	塊	5.8	13.8	—	雲	明黄褐色	良好	
134	139	2	1	5	塊	6.5	12.1	—	精良	明茶褐色	良好	
134	140	6	1	5	二重口縁甕	77.3	37.3	—	石・長	淡黄褐色	硬質	
135	141	2	1	5	坏蓋	4.4	11.1	—	石・長	淡青灰色	堅緻	
135	142	2	1	5	坏蓋	4.5	11.8	—	石・長	青灰色	堅緻	
135	143	2	1	5	坏蓋	4.7	12.7	—	石・長	青灰色	堅緻	
135	144	2	1	5	坏蓋	—	12.7	—	石・長	暗青灰色	堅緻	
135	148	2	1	5	坏蓋	5.2	12.8	—	石・長	暗青灰色	堅緻	
135	146	2	1	5	坏蓋	4.8	13.2	—	石・長	暗青灰色	堅緻	
135	147	2	1	5	坏蓋	—	12.7	—	石・長	暗青灰色	堅緻	
135	148	2	1	5	坏蓋	5.1	12.6	—	石・長	淡青灰色	堅緻	
135	149	2	1	5	坏蓋	4.3	13.4	—	石・長	青灰色	堅緻	
135	150	5	1	5	坏蓋	4.6	13.7	—	長	青灰色	堅緻	
135	151	2	1	5	坏蓋	4.3	13.4	—	石・長	暗青灰色	堅緻	
135	152	2	1	5	坏蓋	4.3	13.9	—	長	明青灰色	堅緻	
135	153	3	1	5	坏蓋	13.5	4.3	—	精緻	灰黒色	堅緻	
135	154	2	1	5	坏身	(5.2)	10.6	—	精緻	青灰色	堅緻	
135	155	2	1	5	坏身	(4.8)	10.2	—	精緻	明青灰色	堅緻	
135	156	2	1	5	坏身	—	10.1	—	精緻	明青灰色	堅緻	
135	157	2	1	5	坏身	4.4	11.6	—	精緻	明青灰色	堅緻	
135	158	2	1	5	坏身	4.6	11.5	—	精緻	明青灰色	堅緻	
135	159	2	1	5	坏身	—	11.6	—	石・長	青灰色	堅緻	
135	160	2	1	5	坏身	—	11.5	—	精緻	青灰色	堅緻	
135	161	3	1	5	坏身	5.1	11.6	—	精良	暗青灰色	堅緻	
135	162	2	1	5	坏蓋	—	—	—	精良	灰黒色	堅緻	
135	163	2	0	6	高坏	—	—	12.4	精良	灰白色	堅緻	上層からの混入か?
135	164	2	1	5	甕	10.2	11.0	—	精緻	暗青灰色	堅緻	
135	165	2	1	5	壺	—	16.0	—	精緻	暗青灰色	堅緻	
135	166	2	1	5	坏身	4.9	11.6	—	石・長	淡赤褐色	良好	
141	167	7	1	5	坏蓋	4.1	13.5	—	石・長	淡青灰色	堅緻	6号土壺
141	168	7	1	5	坏身	5.0	12.3	—	長	青灰色	堅緻	6号土壺
141	169	7	1	5	坏身	4.2	12.4	—	長	淡青灰色	堅緻	6号土壺
143	170	3	4層	5	広口壺	—	—	—	石・長	明黄褐色	良好	

第6表 木器観察表凡例

分類	26頁第1表に掲げる本書における木器分類
挿図	本報告書の挿図番号
番号	本報告書の木製品の遺物番号 未は本書中の未報告資料 本文中の「W」は省略
取上	発掘調査時における遺物の取り上げ番号 博物館では取り上げ番号に従い収納
地点	各部の調査区分による出土地点 (9ページ第7図地区割に対応・1区～10区)
層位	各部の基本層位に対応 (8ページ基本層位 1層～6層)
サンプル	1/環境考古研究所・文化財保存科学センター 2/元興寺文化財研究所 観察1 環境考古研究による目視観察所見
樹種	1/環境考古研究所 環境考古研究所 元/元興寺文化財研究所 観察はアカガシ亜属のアカガシ亜属/アカガシ マツ属観音堂東亜属/マツ 以下の樹種は略称で記載 アカガシ亜属/アカガシ マツ属観音堂東亜属/マツ
長さ(高さ)	資料の全長 全高 欠損部がある場合は現状値を ( ) 書き
幅	資料の最大幅 欠損部がある場合は現状値を ( ) 書き
台部長	手拵、背負椅子状製品において、台部の長さ 欠損部がある場合は現状値を ( ) 書き
厚さ	資料の最大厚さ 欠損部がある場合は現状値を ( ) 書き
台部幅	手拵、背負椅子状製品において、台部の幅
奥行	容器、杓子等において容器、抱い部の奥行 欠損部がある場合は現状値を ( ) 書き
木取	資料の木取り 板目 縦木 横木等 (「取り」を省略)
時期	層位をもとに遺物の時期を記載 1 (1期・弥生中期中葉)、2 (2期弥生中期後葉)、3 (3期・弥生後期前半)、4 (4期・弥生後期後半)、5期 (古墳中期～後期) に分類
備考	個別遺構名、留意点、詳細計測値等を記載
保存処理機関	保存処理実施機関 各機関名は以下のとおり略称で記載 元/元興寺文化財研究所 京科/京都科学 直/前原市 (現糸島市)
保存処理年度	保存処理実施年度を記載 H/平成
保存処理方法	保存処理方法を記載 脂肪/脂肪酸エステル ラクチ/ラクチトール PEG/ポリエチレングリコール 凍結/真空凍結乾燥

第7表 出土木器観察表①

分類	挿図番号	取上	地点	層位	サンプル	樹種同定	長さ	幅	最大厚	木取	時期	備考	年度	機関	方法
直柄縦拵柄	29	1	678	7-8	5	-	(54.3)	4.3	2.9	榎目	2 A類	装着角度75度 装着孔4.8×0.6cm	H19 (2007)	直	PEG
直柄縦拵柄	29	2	355	4	5	1クヌギ節	70.2	5.2	2.7	榎目	2 A類	装着角度71度 装着孔6.0×0.9cm	H11 (1999)	元	脂肪酸
直柄縦拵柄	29	3	335	4	4	観察 アカガシ	70.8	3.3	3.8	榎目	3 A類	4号木器溜まり 装着角度68度 装着孔5.6×1.3cm	H10 (1998)	元	脂肪酸
直柄縦拵柄	29	4	627	7	5	1 ヤブツバキ	70.1	5.6	2.8	榎目	2 A類	装着角度81度 装着孔4.1～5.1×0.2～0.3cm	H10 (1998)	元	脂肪酸
分類	挿図番号	取上	地点	層位	サンプル	樹種	柄長	台部長	台部幅	木取	時期	備考	年度 <td>機関</td> <td>方法</td>	機関	方法
膝柄縦拵柄	30	5	396	4	5	-	(10.6)	12.4	3.3	枝分	2 B1類	台部角度67度 鋳造鉄拵	H16 (2004)	京	ラクチ
膝柄縦拵柄	30	6	471	5	5	1マツ	(36.3)	10.9	3.1	枝分	2 B2類	装着部幅4.0cm 台部角度72度 袋状鉄拵	H13 (2001)	元	PEG
膝柄縦拵柄	30	7	347	4	5	1サカキ	81.2	16.1	3.7	枝分	2 B1類	台部角度68度 鋳造鉄拵	H10 (1998)	元	脂肪酸
膝柄縦拵柄	30	8	206	4	5	1クヌギ節	(50.4)	14.5	3.1	枝分	2 B2類	台部角度53度 袋状鉄拵	H10 (1998)	元	脂肪酸
膝柄縦拵柄	30	9	425	4	5	-	50.2	(5.0)	3.1	枝分	2 B類	台部角度60度	H14 (2002)	元	PEG
膝柄縦拵柄	30	10	526	6	5	1サカキ	72.6	12.4	3.8	枝分	2 B1類	台部角度73度	H13 (2001)	元	PEG
膝柄横拵柄	31	11	4	4	5	-	33.1	(7.8)	4.8	枝分	2 C類	台部角度61度	H12 (2002)	元	脂肪酸
膝柄横拵柄	31	12	417	5	5	1クヌギ節	39.4	8.2	4.1	枝分	2 C類	台部角度53度	H13 (2001)	元	PEG
膝柄横拵柄	31	13	549	6	5	-	69.6	8.2	5.4	枝分	2 膝柄横拵	台部角度76度	H19 (2007)	直	PEG
膝柄横拵柄	31	14	382	4	5	1(アカガシ)	(17.3)	22.5	3.7	枝分	2 C類	膝柄横拵 台部角度52度 装着部破損? 装着面有段 先端に亀頭状隆起	H13 (2001)	元	PEG
膝柄横拵柄	31	15	768	4	5	1クヌギ節	(11.1)	11.3+	3.5	枝分	3 C類	1号木器溜まり 台部角度31度 袋状鉄拵	H14 (2002)	直	PEG
膝柄横拵柄	31	16	723	7	5	1クヌギ節	(26.5)	19.4	3.8	枝分	2 C類	角度52度 装着面有段	H13	元	PEG
膝柄横拵柄	31	17	770	4	5	1アカガシ	(6.4)	(12.5)	3.5	枝分	2 C類	1号木器溜まり 台部角度42度	H14 (2002)	直	PEG
膝柄横拵柄	31	18	357	4	5	-	(13.3)	19.9	4.6	枝分	2 B2類	膝柄横拵 板状鉄拵 角度49度 装着部長2.5cm	H12 (2000)	元	PEG
膝柄横拵柄	32	19	167	3	5	-	(11.5)	(12.0)	2.7	枝分	2 B類	未製品 台部角度42度	H16 (2004)	京	ラクチ
膝柄横拵柄	32	20	48	4	5	1	(45.4)	(12.0)	3.7	枝分	2 B類	未製品 台部角度55度	H12 (2000)	元	PEG
膝柄横拵柄	32	21	1504	不明	5	1シイ属	100	18.3	5	枝分	2 B類	未製品 台部角度52度	H16 (2004)	直	PEG
膝柄横拵柄	32	22	262	1	5	-	12.0	(12.0)	3	枝分	2 B類	未製品 台部角度71度	H17 (2005)	直	PEG
柄	挿図番号	取上	地点	層位	サンプル	樹種	長さ	幅	厚さ	木取	時期	備考	年度 <td>機関</td> <td>方法</td>	機関	方法
柄	32	23	1415	5	5	(アカガシ)	(29.1)	3.1	2.4	榎目	2 小片		H17 (2005)	直	PEG
鉤	挿図番号	取上	地点	層位	サンプル	樹種	高さ	幅	奥行	木取	時期	備考	年度 <td>機関</td> <td>方法</td>	機関	方法
鉤	32	24	637	5	-	-	26.7	4.4	4.0	丸木	2 時期		H17 (2005)	直	PEG
鉤	32	25	239	2	5	-	24.3	3.9	2.1	丸木	2 時期	吊り部に削り込み段 細手	H17 (2005)	直	PEG
鉤	32	26	38	4	5	-	(22.5)	24.5	-	丸木	2 時期	建築材群 吊り部に面取り 三角孔	H18 (2006)	直	PEG
鉤	32	27	810	4	5	-	4.2+	4.7	-	丸木	2 時期	鉤爪3本 南杭列	H18 (2006)	直	PEG
分類	挿図番号	取上	地点	層位	サンプル	樹種	長さ	幅	最大厚	木取	時期	備考	年度 <td>機関</td> <td>方法</td>	機関	方法
平鉄	33	28	182	4	5	観察 アカガシ	30.8	20.0	1.6	榎目	2 時期	2 広鉄A I a類 泥除装着孔 柄孔角度35度	H10 (1998)	元	脂肪酸
平鉄	33	29	138	3	5	観察 アカガシ	25.4	(13.7)	1.5	榎目	2 時期	2 広鉄A I a類 泥除装着孔 柄孔角度39度	H12 (2000)	元	PEG
平鉄	33	30	370	4	5	観察 アカガシ	25.4	9.9	1.7	榎目	2 時期	2 広鉄A I a類 柄孔角度50度	H10 (1998)	元	脂肪酸
平鉄	33	31	18	4	5	観察 アカガシ	27.8	9.7	1.5	榎目	2 時期	2 広鉄A I b類 柄孔角度43度	H12 (2000)	元	脂肪酸
平鉄	33	32	247	4	5	- (アカガシ)	27.5	(13.0)	2.4	榎目	2 時期	2 広鉄A I b類 柄孔角度60度	H13 (2001)	元	PEG
平鉄	33	33	782	5	5	1 アカガシ	26.7	(5.7)	2.0	榎目	2 時期	2 広鉄A I a類	H14 (2002)	直	PEG
平鉄	33	34	1093	5	5	観察 アカガシ	(18.9)	(12.0)	(1.35)	榎目	2 時期	2 広鉄A I a類 泥除具装着孔	H17 (2005)	直	PEG
平鉄	34	35	467	-	-	- (アカガシ)	(16.3)	(9.8)	0.7	榎目	2 時期	2 広鉄A類 泥除具装着孔	H14 (2002)	直	PEG
平鉄	34	36	812	-	-	- (アカガシ)	26.2	(5.7)	(0.8)	榎目	-	2 広鉄A類 泥除具装着孔	H16 (2004)	直	PEG
平鉄	34	37	605	6	5	観察 アカガシ	(27.3)	(5.2)	(0.9)	榎目	2 時期	2 広鉄A類 泥除具装着孔	H16 (2004)	直	PEG
平鉄	34	38	399	4	5	1 アカガシ	23.0	(8.0)	(0.8)	榎目	2 時期	2 広鉄A類 泥除具装着孔	H12 (2002)	直	PEG
平鉄	34	39	798	4	5	観察 アカガシ	(8.3)	(11.6)	(1.5)	榎目	2 時期	2 広鉄A I類 泥除具装着孔	H14 (2004)	直	PEG
平鉄	34	40	1011	4	5	1 アカガシ	(10.2)	(10.7)	1.5	榎目	2 時期	2 広鉄A類	H16 (2004)	直	PEG
平鉄	34	41	695	9	5	観察 アカガシ	22.8	17.0	1.4	榎目	2 時期	2 広鉄A II a類 柄孔角度69度	H13	元	PEG

第8表 出土木器観察表②

分類	挿入番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	台部長	台部幅	木取	時期	備考	H16 (2004)	直	PEG
平鉄	34	42	1056	5	5	(アカガシ)	29.0 (30.4)	(10.2)	(1.0)	榎目	1 広鉄A II a類 泥除装着孔 2 広鉄A I b類 柄孔隆起 再加工の途中?	H16 (2004)	直	PEG
平鉄	34	43	758	-	5	観察 アカガシ	(6.8)	1.6	榎目	2 広鉄A I b類 柄孔隆起 再加工の途中?	H18 (2006)	直	PEG	
平鉄	34	44	535	4	53	1 イスノキ	24.3 (5.3)	1.8	榎目	2 広鉄A類 柄孔角度52度	H16 (2004)	直	PEG	
平鉄	35	45	707	9	5	観察 アカガシ	23.2 (6.8)	2.1	榎目	2 広鉄A類 柄孔角度52度	H16 (2004)	直	PEG	
平鉄	35	46	1188	3	5	観察 アカガシ	22.6 (6.2)	1.9	榎目	2 広鉄A II b類 柄孔角度65度	H14 (2002)	直	PEG	
平鉄	35	47	774	4	5	観察 アカガシ	20.5 (5.2)	1.4	榎目	2 広鉄A II b類 柄孔角度47度	H18 (2006)	直	PEG	
平鉄	35	48	1352	-	5	観察 アカガシ	(7.6)	(6.1)	1.3	榎目	× 柄孔角度50度	H17 (2005)	直	PEG
平鉄	35	49	384	4	5	観察 アカガシ	(19.4)	(3.6)	1.8	榎目	2 側縁に刃	H16 (2004)	直	PEG
平鉄	35	50	650	8	5	観察 アカガシ	18.8 (7.1)	1.3	榎目	2 狭鉄 柄孔角度49度	H11 (1999)	元	PEG	
平鉄	35	51	97	3	5	観察 アカガシ	(22.3)	(4.9)	1.5	榎目	2 狭鉄? 動掘い部厚?	H14 (2002)	直	PEG
平鉄	35	52	61	3	5	1 アカガシ	21.0 (8.1)	1.4	榎目	2 狭鉄	H11 (1999)	元	PEG	
平鉄	35	53	737	9	5	観察 アカガシ	23.3 (9.0)	1.3	榎目	2 狭鉄 柄孔角度60度	H14 (2002)	直	PEG	
平鉄	35	54	1186	3	5	観察 アカガシ	(18.3)	(10.1)	1.6	榎目	2 狭鉄 柄孔角度60度	H17 (2005)	京	ラクチ
平鉄	36	55	631	-	5	観察 アカガシ	30.4 (5.7)	(5.7)	1.6	榎目	2 諸手鉄 広鉄	H17 (2005)	京	ラクチ
平鉄	36	56	189	4	5	観察 アカガシ	28.5 (9.0)	(9.0)	1.5	榎目	2 諸手鉄 側縁にも刃 えぶりにも使用か?	H14 (2002)	直	PEG
平鉄	36	57	622	7	5	1 ニレ属	32.0 (5.0)	(5.0)	1.5	榎目	2 諸手鉄	H13 (2001)	元	PEG
平鉄	36	58	604	6	5	観察 アカガシ	28.9 (4.4)	(4.4)	1.4	榎目	2 諸手鉄	H17 (2005)	京	ラクチ
平鉄	36	59	66	4	5	観察 アカガシ	20.3 (3.1)	(3.1)	1.3	榎目	2 諸手鉄 東部に挟り 鉄製刃先装着?	H14 (2002)	直	PEG
平鉄	36	60	603	7	5	観察 アカガシ	27.2 (8.3)	(8.3)	1.8	榎目	2 諸手鉄 広鉄	H14 (2002)	直	PEG
直柄鉄柄	36	61	259	1	5	観察 アカガシ	25.6 (3.5)	2.7	榎目	2 ソケット 泥除具装着溝 稜溝	H12 (2000)	元	脂肪酸	
直柄鉄柄	36	62	117	3	5	1 ニレ属	23.7 (4.0)	4.0	2.9	榎目	2 ソケット 泥除具装着溝 稜溝	H10 (1998)	元	脂肪酸
直柄鉄柄	36	63	710	4	5	1 広葉樹	19.5 (4.5)	4.5	2.4	板目	1 ソケット 粗製 稜溝	H14 (2002)	直	PEG
二又鉄	37	64	379	3	5	観察 アカガシ	45.2 (6.7)	(6.7)	1.5	榎目	2 柄孔角度45度	H11 (1999)	元	脂肪酸
二又鉄	37	65	31	4	5	1 アカガシ	(39.9)	(9.2)	2.0	榎目	2 柄孔角度32度	H12 (2000)	元	脂肪酸
二又鉄	37	66	8	3	5	1 アカガシ	(45.3)	(6.2)	1.7	榎目	1 柄孔角度49度	H11 (1999)	元	脂肪酸
二又鉄	37	67	769	4	5	観察 アカガシ	(30.9)	(8.9)	2.3	榎目	3 2号木器溜まり 柄孔角度35度	H14 (2002)	直	PEG
二又鉄	37	68	225	3	5	観察 アカガシ	(31.9)	(9.0)	2.2	榎目	2 二又鉄の半裁片 柄孔角度42度	H19 (2007)	直	PEG
二又鉄	38	69	334	4	5	観察 アカガシ	(65.0)	(8.3)	2.5	榎目	2 柄孔角度46度	H12 (2000)	元	PEG
三又鉄	38	70	158	3	5	1 アカガシ	(57.7)	(9.2)	(2.0)	榎目	1 柄孔角度40度	H12 (2000)	元	脂肪酸
三又鉄	38	71	201	2	5	観察 アカガシ	(20.2)	(5.8)	(2.0)	榎目	2 二又鉄の列部	H18 (2006)	直	PEG
三又鉄	38	72	140	3	5	観察 アカガシ	(11.2)	(5.6)	(1.2)	榎目	2 柄孔角度	H16 (2004)	直	PEG
三又鉄	38	73	241	1	5	観察 アカガシ	(25.2)	(5.1)	(1.3)	榎目	2 柄孔角度	H14 (2002)	直	PEG
三又鉄	38	74	625	7	5	観察 アカガシ	(28.4)	(3.6)	1.3	榎目	2 三又鉄	H16 (2004)	直	PEG
三又鉄	39	75	215	2	5	1 アカガシ	(52.5)	(12.0)	2.0	榎目	1 柄孔角度46度	H14 (2002)	直	PEG
三又鉄	39	76	260	1	4	観察 (アカガシ)	(50.8)	(4.8)	1.5	榎目	3	H16 (2004)	京	ラクチ
三又鉄	39	77	405	4	5	観察 アカガシ	(33.5)	(6.0)	1.2	榎目	2	H14 (2002)	直	PEG
三又鉄	39	78	290	4	5	観察 アカガシ	(28.5)	(8.9)	2.2	榎目	2 柄孔角度35度	H14 (2002)	直	PEG
三又鉄	40	79	541	6	5	観察 アカガシ	(25.1)	(9.7)	1.7	榎目	2 柄孔角度43度	H17 (2005)	京	ラクチ
三又鉄	40	80	793	4	5	観察 アカガシ	(22.2)	(6.1)	1.9	榎目	2	H17 (2005)	京	PEG
三又鉄	40	81	529	6	5	観察 アカガシ	25.9 (8.8)	1.9	榎目	2 柄孔角度35度	H13 (2001)	元	PEG	
三又鉄	40	82	718	7	5	観察 アカガシ	(34.8)	(6.1)	1.8	榎目	2	H14 (2002)	直	PEG
三又鉄	40	83	441	2	2-5	観察 アカガシ	(39.7)	10.3	1.6	榎目	2-5 取水遺構 柄孔角度37度	H13 (2001)	元	PEG
六又鉄	41	84	400	4	5	観察 アカガシ	(23.7)	(10.6)	1.4	榎目	1 柄孔角度60度 広鉄の転用	H10 (1998)	元	脂肪酸
四又鉄	41	85	378	4	5	観察 アカガシ	(28.7)	(6.0)	1.8	榎目	1 柄孔角度42度	H14 (2002)	直	PEG
五又鉄	41	86	153	3	5	観察 アカガシ	(15.8)	(13.6)	1.5	榎目	2 柄孔角度37度	H14 (2002)	直	PEG
四又鉄	41	87	172	4	5	観察 アカガシ	(27.4)	(9.8)	1.8	榎目	2 2号木器溜まり 柄孔角度62度	H14 (2002)	直	PEG
四又鉄	41	88	904	3	5	1 アカガシ	(26.4)	(8.2)	2.1	榎目	2 柄孔角度47度	H17 (2005)	京	ラクチ
鉄	42	89	16	4	5	観察 アカガシ	(18.7)	(9.2)	1.7	榎目	1 頭部	H14 (2002)	直	PEG

第9表 出土木器観察表③

分類	挿入番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	台部長	台部幅	木取	時期	備考	H14 (2002)	直	PEG
鉄	42	90	432	5	5	1 アカガシ	(18.7)	(9.3)	1.8	榎目	2 頭部 柄孔角度40度	H14 (2002)	直	PEG
鉄	42	91	751	9	5	1 イスノキ	(10.3)	(5.1)	1.9	榎目	2 頭部	H18 (2006)	直	PEG
鉄	42	92	406	4	5	観察 アカガシ	(14.6)	(6.5)	1.7	榎目	2 頭部	H16 (2004)	直	PEG
鉄	42	93	210	2	5	観察 アカガシ	(22.4)	(5.8)	1.7	榎目	1 頭部 柄孔角度47度	H16 (2004)	直	PEG
鉄	42	94	732	10	5	観察 アカガシ	(16.7)	(7.5)	(1.4)	榎目	2 頭部 柄孔角度34度	H16 (2004)	直	PEG
鉄	42	95	240	3	5	観察 アカガシ	(18.4)	(6.0)	(2.1)	榎目	2 三又鉄の頭部?	H16 (2004)	直	PEG
鉄	42	96	730	7	5	観察 アカガシ	(28.2)	(7.3)	(1.8)	榎目	1 頭部 柄孔角度48度	H16 (2004)	直	PEG
鉄	42	97	565	6	5	観察 アカガシ	(22.1)	(10.3)	1.8	榎目	2 頭部	H16 (2004)	直	PEG
直柄鉄柄	42	98	611	7	5	観察 アカガシ	(17.3)	(9.5)	1.6	榎目	2 頭部	H16 (2004)	直	PEG
直柄鉄柄	43	99	157	3	5	(アカガシ)	79.8 (3.7)	3.7	3.4	榎目	2 直柄鉄柄	H10 (1998)	元	脂肪酸
直柄鉄柄	43	100	465	5	5	1 ヒサカキ	(41.1)	3.6	4.0	榎目	1 直柄鉄柄	H10 (1998)	元	脂肪酸
直柄鉄柄	43	101	701	9	5	1 アカガシ	(25.1)	3.1	3.7	榎目	1 直柄鉄柄	H14 (2002)	直	PEG
直柄鉄柄	43	102	797	7-8	5	観察 アカガシ	(33.4)	3.2	3.2	榎目	1 直柄鉄柄	H14 (2002)	直	PEG
直柄鉄柄	43	103	776	6	5	1 ヒサカキ	(25.3)	3.9	3.8	榎目	2 直柄鉄柄	H15 (2003)	直	PEG
直柄鉄柄	43	104	760	4	5	1 アカガシ	(4.7)	3.7	2.6	榎目	2 直柄鉄柄基部 実測済	H18 (2006)	直	PEG
直柄鉄柄	43	105	297	1	4	1 散孔材	(20.3)	3.3	3.7	榎目	1 直柄鉄柄 泥除具装着	H14 (2002)	直	PEG
直柄鉄柄	43	106	179	2	5	観察 アカガシ	(18.7)	3.4	3.7	榎目	1 直柄鉄柄 泥除具装着	H17 (2005)	京	ラクチ
さらえ柄	45	107	566-1	6	5	元 アカガシ	30.5 (8.8)	8.8		榎目	1 えぶりA類 柄、稜付き 柄孔角度125度	H7 (1995)	元	PEG
さらえ柄	45	107	566-2	6	5	元 アカガシ	70.3 (4.9)	4.9		榎目	2	H7 (1995)	元	PEG
さらえ柄	45	108	618	7	5	観察 アカガシ	9.6 (34.2)	34.2	1.8	榎目	1 えぶりA類 柄孔角度120度	H11 (1999)	元	脂肪酸
さらえ柄	45	109	617	7	5	1 (アカガシ)	12.5 (31.6)	31.6	2.0	榎目	1 えぶりA類	H10 (1998)	元	脂肪酸
さらえ柄	45	110	288	4	5	観察 アカガシ	9.3 (36.4)	36.4	1.4	榎目	2 えぶりA類 柄孔角度65度	H13 (2001)	元	PEG
さらえ柄	46	111	1152	-	5	観察 アカガシ	(14.5)	(26.5)	1.8	榎目	2 えぶりB類 柄孔角度57度	H16 (2004)	直	PEG
さらえ柄	45	112	243	4	5	観察 アカガシ	(9.4)	26.6	1.9	榎目	2 えぶりB類	H14 (2002)	直	PEG
さらえ柄	46	113	190	4	5	観察 アカガシ	(9.3)	(19.1)	1.2	榎目	2 えぶりB類	H14 (2002)	直	PEG
さらえ柄	46	114	279	4	5	観察 アカガシ	(11.8)	(24.3)	1.1	榎目	2 えぶりB類 未製品	H14 (2002)	直	PEG
さらえ柄	46	115	811	4	5	(アカガシ)	(7.6)	(19.4)	2.5	榎目	2 えぶりA類 柄孔隆起	H16 (2004)	直	PEG
さらえ柄	46	116	801	5	5	観察 アカガシ	14.4 (18.0)	18.0	1.5	榎目	えぶりB類 未製品	H14 (2002)	京	ラクチ
さらえ柄	46	117	79	3	5	1 広葉樹	8.0 (31.2)	31.2	1.7	榎目	2 えぶりA類 不整形柄孔 厚手	H11 (1999)	元	PEG
さらえ柄	45	118	401	-	-	1 アカガシ	(5.2)	(22.4)	(1.0)	榎目	えぶりA類 凹形柄孔	H16 (2004)	直	PEG
えぶり	45	119	256	4	5	観察 アカガシ	(13.1)	(33.2)	(2.2)	榎目	3 さらえ 柄孔角度130度	H11 (1999)	元	脂肪酸
曲り柄鉄柄	47	120	289	4	5	観察 アカガシ	(44.4)	(8.5)	1.5	榎目	2 曲がり柄鉄柄 軸部長24.3cm	H14 (2002)	直	PEG
曲り柄鉄柄	47	121	1117	-	5	観察 アカガシ	49.1 (7.1)	7.1	2.3	榎目	2 曲がり柄鉄柄	H14 (2002)	直	PEG
曲り柄鉄柄	47	122	619	-										



第10表 出土木器観察表④

50	135	352	4	5	観察	アカガシ		(34.9)	(9.1)	(2.6)	榎目	2 握い部A類	形状は不詳	H16 (2004)	元	PEG
50	136	713	7	5	観察	アカガシ	(31.0)	(8.2)	(8.2)	2.2	榎目	2 握い部片	形状は不詳	H16 (2004)	直	PEG
50	137	202	2	5	観察	アカガシ	25.2+	(6.2)	(1.5)	1.4	榎目	2 握い部片	形状は不詳 実測済 未報告	H18 (2006)	直	PEG
50	138	648	7	5	1	アカガシ	(28.2)	(6.2)	(1.5)	榎目	2 握い部片	形状は不詳	H16 (2004)	直	PEG	
50	139	741	9	5	観察	アカガシ	(27.0)	(7.1)	(2.8)	2.8	榎目	2 握い部片	形状は不詳	H18 (2006)	直	PEG
49	140	542	6	5	1	アカガシ	(21.4)	(8.5)	(2.2)	榎目	2 握い部A類		H18 (2006)	直	PEG	
50	141	423	5	5	観察	アカガシ	(23.9)	(7.3)	(1.7)	榎目	2 握い部A類		H16 (2004)	直	PEG	
50	142	630	7	5	観察	アカガシ	(52.4)	(8.9)	(1.5)	榎目	2 握い部幅が狭い		H16 (2004)	元	PEG	
50	143	844	-	5	1	アカガシ	(22.9)	(8.0)	(1.2)	榎目	2 握い部A類		H18 (2006)	直	PEG	
51	144	404	4	5	元	アカガシ	105.1	(13.3)	(2.8)	2.8	榎目	2 把手B類	握い部B2類 握い部先端に段	H7 (1995)	元	脂肪酸
51	145	594	7	5	観察	アカガシ	(79.0)	(14.2)	(2.7)	榎目	2 把手A類	握い部B類		H12 (2000)	元	脂肪酸
51	146	326	2	5	(アカガシ)	41.7	(12.5)	(2.7)	榎目	2.7	榎目	2 握い部B2類 柄先端再加工	H14 (2002)	直	PEG	
51	147	407	5	5	(アカガシ)	(16.2)	(8.6)	(2.5)	榎目	2.5	榎目	2 潤縁に段を設ける	H14 (2002)	直	PEG	
51	148	505	5	5	(アカガシ)	(34.0)	(9.2)	(2.6)	榎目	2.6	榎目	2 握い部B2類	H18 (2006)	京	ラクチ	
51	149	188	4	5	(アカガシ)	(23.1)	(6.7)	(1.3)	榎目	(1.3)	榎目	2 握い部B2類	H18 (2006)	直	PEG	
52	150	479	5	5	1	アカガシ	(97.7)	(12.6)	(3.7)	榎目	3.7	榎目	2 把手A類	H13 (2001)	元	PEG
52	151	712	7	5	観察	アカガシ	(30.2)	(11.5)	(2.6)	榎目	2.6	榎目	2 二又鋤A類	H16 (2004)	京	ラクチ
52	152	420	5	5	(アカガシ)	(46.4)	(8.2)	(3.0)	榎目	(3.0)	榎目	2 二又鋤B類	H13 (2001)	元	脂肪酸	
52	153	168	3	5	観察	アカガシ	(32.3)	(8.2)	(2.3)	榎目	(2.3)	榎目	2 二又鋤B類 平鋤A類の再加工転用	H14 (2002)	直	PEG
52	154	667	8	5	(アカガシ)	(30.4)	(8.5)	(3.1)	榎目	(3.1)	榎目	2 二又鋤A類	H17 (2005)	京	ラクチ	
52	155	509	5	5	(アカガシ)	(24.0)	(7.3)	(1.8)	榎目	(1.8)	榎目	2 二又鋤B類 平鋤A類の再加工転用?	H16 (2004)	直	PEG	
52	156	528	6	5	観察	アカガシ	36.8	15.6	2.8	2.8	榎目	2 二又鋤B類 平鋤A類を再加工	H11 (1999)	元	脂肪酸	
53	157	439	4	5	観察	アカガシ	(64.6)	(19.6)	(3.0)	榎目	3.0	榎目	2 三又鋤A類	H10 (1998)	元	脂肪酸
53	158	339	4	5	観察	アカガシ	(65.8)	(7.8)	(3.4)	榎目	3.4	榎目	2 三又鋤A類 把手A類	H16 (2004)	元	PEG
53	159	589	×	×	(アカガシ)	(24.6)	(9.5)	(2.6)	榎目	(2.6)	榎目	2 三又鋤A類	H16 (2004)	京	ラクチ	
53	160	903	3	5	(アカガシ)	(19.2)	(7.4)	(1.6)	榎目	(1.6)	榎目	2 三又鋤A類	H16 (2004)	直	PEG	
53	161	199	4	5	(アカガシ)	(30.9)	(10.0)	(2.7)	榎目	(2.7)	榎目	2 三又鋤A類	H14 (2002)	直	PEG	
53	162	116	3	5	(アカガシ)	(27.2)	(15.3)	(2.3)	榎目	(2.3)	榎目	2 三又鋤A類	H14 (2002)	直	PEG	
54	163	638	7	5	(アカガシ)	(62.3)	(8.1)	(2.7)	榎目	(2.7)	榎目	2 把手A類	H17 (2005)	京	ラクチ	
54	164	665	8	5	(アカガシ)	(28.6)	14.8	2.5	榎目	2.5	榎目	2 把手A類	H13 (2001)	元	PEG	
54	165	254	1	5	(アカガシ)	(23.7)	10.4	3.5	榎目	3.5	榎目	2 把手A類	H15 (2003)	京	ラクチ	
54	166	574	6	5	(アカガシ)	(36.6)	11.7	3.1	榎目	3.1	榎目	2 把手A類	H15 (2003)	京	ラクチ	
54	167	149	4	5	(アカガシ)	(11.0)	9.9	3.0	榎目	3.0	榎目	2 把手A類	H14 (2002)	直	PEG	
54	168	195	2	5	(アカガシ)	(12.6)	12.3	2.7	榎目	2.7	榎目	2 把手C類	H14 (2002)	直	PEG	
54	169	824	3	5	(アカガシ)	(10.6)	11.3	3.0	榎目	3.0	榎目	2 握部は逆三角形	H16 (2004)	京	PEG	
54	170	556	6	5	(アカガシ)	(52.5)	(6.6) +	(5.4)	榎目	(5.4)	榎目	2 把手A類	H16 (2004)	直	PEG	
54	171	883	3	5	(カシ)	(44.5)	(4.2)	(2.5)	榎目	(2.5)	榎目	2 把手A類	H16 (2004)	直	PEG	
54	172	773	4	5	1	アカガシ	(24.1)	6.5	2.5	榎目	2.5	榎目	2 把手A類	H16 (2004)	直	PEG
54	173	764	4	5	(アカガシ)	(19.0)	11.6	2.6	榎目	2.6	榎目	2 把手A類 握りは両端に張り出す	H13 (2001)	元	PEG	
54	174	304	3	5	観察	アカガシ	(31.7)	3.3	2.6	榎目	2.6	榎目	2 着柄鋤の着柄部か? 再加工?	H14 (2002)	直	PEG
54	175	738	9	5	(アカガシ)	17.8	3.3	3.1	榎目	3.1	榎目	2 握い部B1a類 柄穴結合	H16 (2004)	直	PEG	
54	176	81	3	5	(アカガシ)	21.5	4.0	4.0	榎目	4.0	榎目	2 把手B1b類 蟻溝結合	H12 (2000)	元	脂肪酸	
55	177	84	3	5	(アカガシ)	(79.0)	(6.0)	(2.3)	榎目	(2.3)	榎目	2 握い部は小型で柳葉形	H13 (1999)	元	脂肪酸	
55	178	1354	-	-	(アカガシ)	(51.4)	6.2	2.4	榎目	2.4	榎目	2 握い部は柳葉形で小型	H16 (2004)	京	ラクチ	
55	179	878	3	5	(アカガシ)	(40.3)	(4.2)	1.7	榎目	(1.7)	榎目	2 握い部は柳葉形で小型	H18 (2006)	直	PEG	
55	180	567	6	5	1	アカガシ	(35.4)	(4.6)	1.6	榎目	1.6	榎目	2 握い部は柳葉形で小型	H16 (2004)	元	PEG
55	181	518	5	5	1	スギ	27.3	8.3	2.2	榎目	2.2	榎目	2 小口部的一端にわらじ編み状の3突起	H13 (2001)	元	PEG
55	182	380	3	5	1	スギ	22.1	10.7	2.1	榎目	2.1	榎目	2 4[の紐返し孔	H11 (1999)	元	脂肪酸

第11表 出土木器観察表⑤

56	183	688	9	5	1	クスノキ		43.5	(31.5)	(17.6)	丸木	2 握部の深さ28cm以上 台部内面上げ底	H15 (2003)	元	PEG
56	184	706	9	5	1	ヤマザクラ	31.0	(25.3)	(21.2)	丸木	2	握部の深さ18cm以上	H14 (2002)	直	PEG
56	185	708	9	5	1	クスノキ	41.6	41.4	37.2	丸木	2	握部の深さ26cm以上	H15 (2003)	元	脂肪酸
56	186	143	3	5	1	クスノキ	41.8	28.4	15.2	丸木	2	握部の深さ24cm以上 台部内面上げ底加工	H18 (2006)	直	PEG
57	187	353	4	5	観察	アカガシ	106.2	7.2	-	榎材	2	握り部に退化した算盤玉状突起	H10 (1998)	元	脂肪酸
57	188	342	4	5	1	アカガシ	107.3	7.5	-	榎材	2	握部先端は平坦	H16 (2004)	直	PEG
57	189	161	3	4	1	ユズリハ属	95	5.5	-	芯持材	3		H12 (2000)	元	PEG
57	190	346	4	4	1	アカガシ	(105.7)	4.7	-	榎材	3		H16 (2004)	直	PEG
57	191	376	4	5	1	クスギ節	(17.2)	(4.5)	-	榎材	2	握り部のみ 再加工痕 算盤玉状突起	H16 (2004)	京	ラクチ
57	192	381	4	5	1	ヤブツバキ	(14.2)	(5.7)	-	芯持材	2	握り部のみ 再加工痕 算盤玉状突起	H16 (2004)	直	PEG
58	193	354	4	5	1	ヤブツバキ	(48.8)	10.8	-	芯持材	2	握り部境に段 握部先端は平坦	H14 (2002)	京	ラクチ
58	194	475	5	5	1	アカガシ	26.0	8.7	-	芯持材	2	握部先端は隅丸	H11 (1999)	元	脂肪酸
58	195	212	2	5	1	ヤブツバキ	45.5	8.3	-	芯持材	2	横鋳に転用? 握部先端に加工痕	H12 (2000)	元	PEG
58	196	184	3~4	5	1	アカガシ	(41.6)	8.8	-	榎材	2	握部先端は隅丸	H16 (2004)	京	ラクチ
58	197	728	7	5	1	クスギ風	38.8	7.0	-	榎材	2	再加工品 握部先端は平坦	H15 (2003)	京	PEG
58	198	258	1	4	1	イスノキ	30.8	4.8	-	榎材	3	握部先端は磨滅し隅丸 片手杵	H15 (2003)	京	ラクチ
58	199	35	4	5	1	ヤブツバキ	39.9	6.0	-	芯持材	2	横鋳転用品?	H15 (2003)	直	PEG
58	200	1057	5	5	1	イスノキ	43.5	2.7	-	割	2	細型 握部先端が隅丸 二摩耗	H16 (2004)	直	PEG
58	201	790	10	5	1	ヤママモ	40.8	3.8	-	榎材	2	細型 握部先端が隅丸に磨滅 片手杵?	H13 (2001)	元	PEG
59	202	62	3	5	1	アカガシ	61.6	28.0	10.6	板目	3	作業台 把手長13.3cm 径3.9cm	H11 (1999)	元	PEG
59	203	180	2	2~5	1	ヤブツバキ	38.3	5.7	-	芯持材	2	B1類	H12 (2000)	元	PEG
60	204	183	2	5	1	ヤブツバキ	30.7	9.1	-	榎材	2	A1類	H10 (1998)	元	脂肪酸
60	205	889	3	5	観察	アカガシ	23.0	8.4	5.8	榎材	2	A類	H16 (2004)	直	PEG
60	206	144	3	5	1	クスギ節	42.4	8.0	-	榎材	3	B2類 榎部に顕著な使用痕 堅杵の掛失転用?	H11 (1999)	元	脂肪酸
60	207	286	4	5	観察	アカガシ	24.0	5.9	-	榎材	2	B2類 榎部に使用痕	H16 (2004)	直	PEG
60	208	24	3	5	1	ヤブツバキ	31.3	8.7	-	芯持材	2	A2類 小口部に磨耗痕 堅杵からの転用?	H11 (1999)	元	脂肪酸
60	209	483	5	5	1	クスギ節	47.7	6.5	-	芯持材	2	B2類 榎部に深い使用痕 堅杵から掛失に転用?	H11 (1999)	元	脂肪酸
60	210	655	8	5	1	アカガシ	44.3	6.0	-	芯持材	2	B1類 榎部に使用痕 小口部も磨滅 堅杵の転用?	H13 (2001)	元	PEG
60	211	540	6	5	1	ヤブツバキ	41.7	6.2	-	芯持材	2	B1類 榎部に使用痕 小口部に磨滅 堅杵の転用?	H15 (2003)	元	PEG
61	212	687	9	5	1	アカガシ	41.8	5.8	-	榎材	2	B2類 榎部に使用痕 小口には磨滅痕 堅杵転用?	H15 (2003)	京	ラクチ
61	213	198	4	5	観察	アカガシ	32.2+	5.7	-	芯持材	2	B2類 榎部に使用痕 小口には磨滅痕 堅杵転用?	H14 (2002)	直	PEG
61	214	173	4	5	1	イスノキ	42.0	5.3	-	榎材	2	B2類 榎部に焼痕	H14 (2002)	直	PEG
61	215	402	4	5	1	イスノキ	40.6	5.0	-	榎材	2	B2類	H14 (2002)	京	PEG
61	216	800	4	5	1	アカガシ	39.2	5.6	-	榎材	2	B3類 土圧により圧縮変形	H15 (2003)	直	PEG
61	217	767	4	3	1	ヤブツバキ	38.2	5.7	-	芯持材	2	B3類 2号木器溜まり	H16 (2004)	直	PEG
61	218	77	3	5	1	アカガシ	37.7	5.0	-	榎材	2	B3類	H12 (2000)	元	脂肪酸
62	219	785	10	5	1	アカガシ	33.2	7.5	-	榎材	2	C1類	H14 (2002)	直	PEG
62	220	628	7	5	1	ヤブツバキ	20.5	6.5	-	芯持材	2	C1類	H16 (2004)	元	PEG
62	221	1019	4	5	1	ヤブツバキ	24.5	6.4	-	芯持材	2	C2類	H16 (2004)	直	PEG
62	222	754	4	5	1	イスノキ	(22.4)	5.9	-	榎材	2	C1類 小口に磨滅痕 堅杵転用?	H16 (2004)	京	ラクチ
62	223	633	8	5	1	ヤブツバキ	24	-	-	芯持材	2	C1類	H16 (2004)	元	PEG
62	224	64	3	5	観察	アカガシ	22.6	4.6	-	榎材	2	D類 榎部欠失 表面に焼痕跡	H14 (2002)	直	PEG
62	225	377	4	5	-	-	(17.2)	(4.1)	-	榎材	2	榎部欠失 表面に			

第12表 出土木器観察表⑥

挿図番号	取上地点	層位	樹種	高さ	幅	挿い部幅	木取部	時期	備考	材質	2.3	2.8	40.3	2.8	2.3	削材	2.着方形孔2孔	柄頭に突起	沈線+刻み目裝飾	H8 (1996)	元	PEG
63	231	5	4	5	5	1 センダン	(32.7)	3.5	2.7	削材	2.3	2.8	40.3	2.8	2.3	削材	2.着方形孔2孔	柄頭に突起	沈線+刻み目裝飾	H8 (1996)	元	PEG
63	232	272	1	5	5	1 センダン	(84)	3.5	2.7	削材	2.3	2.8	40.3	3.5	2.7	削材	2.柄頭にL字突起肥厚			H10 (1998)	元	脂肪酸
63	233	1303	7	5	5	-	(19.7)	4.2	3.9	削材	1.6	4.9	(8.4)	3.5	1.6	削材	1.装着孔幅0.3~0.4cm			H17 (2005)	直	PEG
63	234	916	4	5	5	-	(8.3)	10.7	2.0	榎目	2.0	10.7	(8.3)	2.0	3.5	削材	1.柄頭にL字突起肥厚			H17 (2005)	直	ラクチ
63	235	1197	3	5	5	観察 アカガシ	(51.4)	(2.9)	-	榎目	-	(2.9)	(8.3)	2.0	2.0	榎目	2.木鏝状製品			H17 (2005)	直	PEG
63	236	799	4	5	5	1 環孔材	(49.0)	2.1	1.8	丸木	1.8	2.1	(49.0)	2.1	1.8	丸木	2.丸木弓 端部を削ぐ弓頭 破損面に焼痕			H13 (2001)	元	PEG
63	237	985	4	5	5	1 ヤマクワ	100	3.8	3.6	丸木	3.6	3.8	100	3.8	3.6	丸木	1.丸木弓 側面に刻みを施す弓頭			H10 (1998)	元	脂肪酸
63	238	415	5	5	5	1 マツ	45.6	(9.6)	(1.6)	細材	(1.6)	(9.6)	45.6	(9.6)	(1.6)	細材	2.組み合わせたヤス 2.39-2 (318) も同一部材か			H7 (1995)	元	PEG
64	239	63	3	5	5	元 ヒサカキ	54.3	1.7	1.4	削材	1.4	1.7	54.3	1.7	1.4	削材	2.組み合わせたヤス部材			H8 (1996)	元	PEG
64	240	487	5	5	5	元 ツゲ?	(32.2)	1.8	-	削材	-	1.8	(32.2)	1.8	-	削材	2.組み合わせたヤス部材			H8 (1996)	元	真空
64	241	634	7	5	5	1 アカガシ	(53.6)	2.9	-	削材	-	2.9	(53.6)	2.9	-	削材	2.太径 両端を先削ぎ 鋸?			H16 (2004)	直	PEG
65	242	757	4	5	5	1 アカガシ	34.0	3.0	1.8	削材	1.8	3.0	34.0	3.0	1.8	削材	中央断面楕円形 両端を先削ぎ 鋸?			H14 (2002)	直	ラクチ
65	243	519	5	5	5	1 イスノキ	57.4	2.2	2.0	削材	2.0	2.2	57.4	2.2	2.0	削材	2.断面方形加工 先端先削ぎ			H16 (2004)	直	PEG
65	244	11	4	5	5	1 イスノキ	31.6	1.7	1.6	削材	1.6	1.7	31.6	1.7	1.6	削材	2.角材加工 中途で折れ 2.面からへら状先削ぎ			H16 (2004)	直	PEG
65	245	779	8	5	5	1 イスノキ	(31.5)	2.3	2.3	削材	2.3	2.3	(31.5)	2.3	2.3	削材	2.先端先削ぎ 他端は折損中ほどに小円孔			H17 (2005)	直	PEG
65	246	131	3	5	5	1 散孔材	(14.0)	1.5	1.1	削材	1.1	1.5	(14.0)	1.5	1.1	削材	へら状先削ぎ			H16 (2004)	直	PEG
65	247	1386	-	-	-	-	(15.0)	1.8	1.2	削材	1.2	1.8	(15.0)	1.8	1.2	削材	2.先端部に先削ぎ			H18 (2006)	直	PEG
65	248	106	3	5	5	1 アカガシ	21.5	2.6	2.6	削材	2.6	2.6	21.5	2.6	2.6	削材	太径 先端を先削ぎ 軽く反る			H16 (2004)	直	PEG
65	249	636	1	5	5	1 サクラ属	25.2	1.7	1.3	削材	1.3	1.7	25.2	1.7	1.3	削材	へら状先削ぎ			H7 (1995)	元	PEG
65	250	435	5	5	5	1 イスノキ	16.7	1.1	0.7	丸木	0.7	1.1	16.7	1.1	0.7	丸木	2.先端先削ぎ 軸部に螺旋状圧痕 紐縛り痕跡			H16 (2004)	直	PEG
65	251	303	3	5	5	1 イスノキ	6.3	6.3	(2.1)	榎目	(2.1)	6.3	6.3	(2.1)	榎目	5.鉄柄			H17 (2005)	直	PEG	
65	252	976	6	5	5	-	68.9	5.7	0.7	榎目	0.7	5.7	68.9	5.7	0.7	榎目	2.織打具			H7 (1995)	元	PEG
66	253	838	4	5	5	(アカガシ亜属)	27.4+	5.4	1.4	榎目	1.4	5.4	27.4+	5.4	1.4	榎目	2.織打具			H16 (2004)	直	PEG
66	254	974	4	5	5	観察 アカガシ	(36.7)	3.3	2.8	丸木	2.8	3.3	(36.7)	3.3	2.8	丸木	2.建築材群下 布巻具			H16 (2004)	元	PEG
66	255	928	4	5	5	1 アフツバキ	(61.3)	3.7	-	丸木	-	3.7	(61.3)	3.7	-	丸木	2.建築材群下 布巻具? 縛痕跡?か所			H15 (2003)	元	PEG
66	256	927	4	5	5	-	(18.8)	2.7	-	芯持材	-	2.7	(18.8)	2.7	-	芯持材	2.布巻具			H14 (2002)	直	PEG
66	257	194	2	5	5	1 マツ	83.8	2.6	1.6	丸木	1.6	2.6	83.8	2.6	1.6	丸木	1.布巻具? 断面円形も土圧変形			H12 (2000)	直	PEG
66	258	2	4	5	5	1 シイ属	90.2	30.3	3.5	又別れ部	3.5	30.3	90.2	30.3	3.5	又別れ部	2			H10 (1998)	元	脂肪酸
67	259	440	4	5	5	1 サカキ	x	(22.1)	(2.6)	枝分節	(2.6)	(22.1)	x	(22.1)	(2.6)	枝分節	2			H16 (2004)	京	PEG
67	260	654	8	5	5	-	27.9	8.0	4.0	枝分節	4.0	8.0	27.9	8.0	4.0	枝分節	2			H16 (2004)	京	PEG
67	261	642	7	5	5	1 サカキ	(106.0)	33.0	19.3	半截	19.3	33.0	(106.0)	33.0	19.3	半截	2			H11 (1999)	元	PEG
68	262	1205	6	6	6	1 クスノキ	(42.5)	14.2	(1.7)	榎目	(1.7)	14.2	(42.5)	14.2	(1.7)	榎目	2			H14 (2002)	元	PEG
69	263	156	3	5	5	1 アカガシ	(52.0)	(9.8)	(2.2)	榎目	(2.2)	(9.8)	(52.0)	(9.8)	(2.2)	榎目	2			H13 (2001)	元	PEG
69	264	205	4	5	5	1 アカガシ	(35.5)	(9.6)	(2.6)	榎目	(2.6)	(9.6)	(35.5)	(9.6)	(2.6)	榎目	2			H17 (2005)	京	ラクチ
69	265	514	5	5	5	1 アカガシ	87.7	9.6	2.4	榎目	2.4	9.6	87.7	9.6	2.4	榎目	2			H12 (2000)	元	脂肪酸
69	266	255	1	5	5	元 アカガシ	(86.6)	(6.1)	(3.3)	榎目	(3.3)	(6.1)	(86.6)	(6.1)	(3.3)	榎目	2			H13 (2001)	元	PEG
69	267	461	5-E	5	5	-	90.2	30.3	3.5	又別れ部	3.5	30.3	90.2	30.3	3.5	又別れ部	2			H10 (1998)	元	脂肪酸
70	268	59	3	5	5	1 マキ属	(21)	(12.1)	(9.4)	芯持ち	(9.4)	(12.1)	(21)	(12.1)	(9.4)	芯持ち	2			H12 (2000)	直	脂肪酸
70	269	1005	4	5	5	1 マキ属	(48)	(8.7)	(8.0)	芯持ち	(8.0)	(8.7)	(48)	(8.7)	(8.0)	芯持ち	2			H16 (2004)	直	PEG
70	270	276	3	5	5	1 マキ属	(4.5)	(10.5)	(8.0)	芯持ち	(8.0)	(10.5)	(4.5)	(10.5)	(8.0)	芯持ち	2			H14 (2002)	直	PEG
70	271	759	4-W	4	4	1 マキ属	(13.4)	(7.5)	(5.5)	縦木	(5.5)	(7.5)	(13.4)	(7.5)	(5.5)	縦木	2			H18 (2006)	直	PEG
70	272	571	6	5	5	1 マキ属	(4.4)	(9.5)	(7.3)	榎目	(7.3)	(9.5)	(4.4)	(9.5)	(7.3)	榎目	2			H13 (2001)	元	脂肪酸
70	273	60	3	5	5	1 マキ属	(4.4)	(9.1)	(6.9)	芯持ち	(6.9)	(9.1)	(4.4)	(9.1)	(6.9)	芯持ち	2			H14 (2002)	京	ラクチ
70	274	600	7	5	5	1 ヒノキ	(40.4)	(17.7)	(8.8)	芯持材	(8.8)	(17.7)	(40.4)	(17.7)	(8.8)	芯持材	2			H12 (2000)	元	脂肪酸
71	275	37	4	5	5	1 マキ属	(14.4)	(16.5)	(13.7)	芯持材	(13.7)	(16.5)	(14.4)	(16.5)	(13.7)	芯持材	2			H11 (1999)	元	脂肪酸
71	276	58	4	5	5	1 マキ属	(4.3)	(16.2)	(12.9)	芯持材	(12.9)	(16.2)	(4.3)	(16.2)	(12.9)	芯持材	2			H16 (2004)	直	PEG

第13表 出土木器観察表⑦

挿図番号	取上地点	層位	樹種	長さ	幅	最大厚	木取部	時期	備考	材質	H7 (1995)	元	PEG									
71	277	23	3	5	5	イスママキ	30.5	(36.0)	14.7	芯持材	14.7	30.5	(36.0)	14.7	芯持材	2			H7 (1995)	元	PEG	
71	278	230	1	5	5	1 マキ属	(27.8)	(12.1)	(2.8)	芯持ち	(2.8)	(12.1)	(27.8)	(12.1)	(2.8)	芯持ち	2			H14 (2002)	直	PEG
71	279	621	7	5	5	1 マキ属	(17.2)	(9.9)	(3.5)	芯持ち	(3.5)	(9.9)	(17.2)	(9.9)	(3.5)	芯持ち	2			H18 (2006)	直	PEG
72	280	813	-	-	-	1 サカキ	(20.6)	(10.1)	(3.5)	縦木	(3.5)	(10.1)	(20.6)	(10.1)	(3.5)	縦木	-			H16 (2004)	直	PEG
72	281	155	3	5	5	1 マキ属	(29.4)	(14.8)	(4.2)	芯持ち	(4.2)	(14.8)	(29.4)	(14.8)	(4.2)	芯持ち	1			H18 (2006)	直	PEG
72	282	301	3	5	5	1 クスノキ	(15.2)	(14.2)	(3.5)	縦木	(3.5)	(14.2)	(15.2)	(14.2)	(3.5)	縦木	2			H16 (2004)	元	PEG
72	283	39	4	5	5	-	(18.4)	(12.6)	(5.7)	縦木	(5.7)	(12.6)	(18.4)	(12.6)	(5.7)	縦木	2			H16 (2004)	直	PEG
72	284	307	4	5	5	1 マキ属	38.4	(23.8)	(10.4)	芯持材	(10.4)	(23.8)	38.4	(23.8)	(10.4)	芯持材	1			H10 (1998)	元	脂肪酸
72	285	1141	1	1-3	5	-	28.2	5.0	3.6	芯持ち	3.6	5.0	28.2	5.0	3.6	芯持ち	2			H17 (2005)	直	PEG
73	286	833	6	5	5	1 針葉樹	(8.0)	(13.8)	10.2	芯持ち	10.2	(13.8)	(8.0)	(13.8)	10.2	芯持ち	2			H18 (2006)	直	PEG
73	287	408	5	5	5	1 マキ属	(7.2)	(13.2)	(7.7)	芯持ち	(7.7)	(13.2)	(7.2)	(13.2)	(7.7)	芯持ち	2			H16 (2004)	直	PEG
73	288	164	2	5	5	1 マキ属	(32.0)	(26.8)	(6.4)	芯持ち	(6.4)	(26.8)	(32.0)	(26.8)	(6.4)	芯持ち	2			H12 (2000)	元	脂肪酸
73	289	756	4	5	5	1 マキ属	(8.5)	(3.8)	(5.0)	縦木	(5.0)	(3.8)	(8.5)	(3.8)	(5.0)	縦木	1			H16 (2004)	直	PEG
73	290	433	5	5	5	1 クスノキ	12.5	35.5	10.9	芯持材	10.9	35.5	12.5	35.5	10.9	芯持材	2			H13 (2001)	元	脂肪酸
73	291	534	4	5	5	-	(11.9)	(3.7)	(5.2)	縦木	(5.2)	(3.7)	(11.9)	(3.7)	(5.2)	縦木	3			H17 (2005)	京	ラクチ
73	292	1123	4	5	5	1 サカキ	(12.3)	(6.7)	(2.0)	縦木	(2.0)	(6.7)	(12.3)	(6.7)	(2.0)	縦木	2			H16 (2004)	直	PEG
73	293	427	5	5	5	1 マツ	(5.2)	(32.9)	(4.3)	枝	(4.3)	(32.9)	(5.2)	(32.9)	(4.3)	枝	2			H16 (2004)	直	PEG
74	294	211	2	4	4	元 トネリコ属	13.0	39.3	17.0	芯持材	17.0	39.3	13.0	39.3	17.0	芯持材	3			H15 (2003)	元	脂肪酸
74	295	177	2	5	5	1 カヤ	(7.8)	(12.3)	11.0	芯持材	11.0	(12.3)	(7.8)	(12.3)	11.0	芯持材	2			H15 (2003)	元	PEG
74	296	392	2	5	5	1 マキ属	7.3	(13.0)	6.9	縦木	6.9	(13.0)	7.3	(13.0)	6.9	縦木	2			H16 (2004)	直	PEG
74	297	284	3	5	5	1 サカキ	(9.1)	(15.8)	(9.2)	縦木	(9.2)											

第14表 出土土器観察表⑧

分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考	H7 (1995)	元	真空
高杯形容器	79	323	398	3	6	元カッタ	(13.5)	(25.2)	(6.2)	榿木		1 漆高杯形双脚容器 脚部に台形透かし孔	H7 (1995)	元	真空
半鳥系容器	80	324	57	4	5	1 イソガヤ	(3.0)	(25.2)	(19.2)	榿木		2 胴部に6条に削り出し筋帯	H11 (1999)	元	脂肪酸
半鳥系容器	80	325	771	4	5	元カヤ	(2.0)	(20)	20.5	榿木		2 胴部に7条に削り出し筋帯	H8 (1996)	元	脂肪酸
把手付容器	80	326	268	4	5	1 サカキ	(7.5)	(15.0)	2.4	榿木		1 舟形小形容器? 杓子?	H18 (2006)	直	PEG
把手付容器	80	327	598	7	5	-	(4.2)	(17.7)	(6.1)	榿木		2 箱形容器小口部口縁が横に突出	H18 (2006)	直	PEG
皿形容器	80	328	174	3	5	1 センダン	(16.4)	(21.5)	3.7	榿木		2 隅丸方形皿状容器	H12 (2000)	元	PEG
箱形容器		329	209	2	5	元 アカガシ	(9.2)	20.3	7.5	榿木・ 芯持ち		2 箱舟形容器 未製品?	H12 (2000)	元	PEG
把手付容器	80	330	513	5	5	元 トネリコ	18.1	28.1	6.0	榿木		2 舌状片把手付き箱形容器	H8 (1996)	元	脂肪酸
把手付容器	81	331	36	4	5	1 キハダ	(40.4)	(40.4)	(8.6)	榿木		2 漆塗り環状片手盤状容器	H11 (1999)	元	脂肪酸
把手付容器	81	332	394	2	5	-	18.3	13.0	2.2	榿木		2 片手把手付き皿状容器	H7 (1995)	元	脂肪酸
把手付容器	81	333	175	4	5	1 クスノキ	(11.2)	(17.5)	(5.2)	榿木		2 環状双手円形容器	H16 (2004)	元	PEG
把手付容器	81	334	287	4	5	1 シイ属	(9.5)	(15.2)	(5.5)	榿木		2 環状双手円形容器	H12 (2000)	元	脂肪酸
動物形容器	82	335	524	5	5	元 ヤブニッケイ	35.0	35.0	15.1	榿木		2 獣脚状四脚容器 芯持ち	H7 (1995)	元	脂肪酸
動物形容器	82	336	451	5	5	1 クスノキ	22.0	17.9	10.5	榿木		2 四脚容器未成品 芯持ち	H13 (2001)	元	脂肪酸
動物形容器	83	337	448	4	4	元 クスギ	33.0	33.0	8.2	榿木		3 4号木器溜まり 獣脚状四脚盤	H9 (1997)	元	脂肪酸
動物形容器	84	338	135	3	5	-	(46.6)	(27.6)	14.2	榿木		2 流線形双脚容器 四角形透かし孔盤	H9 (1997)	元	PEG
動物形容器	84	339	197	4	5	1 クスノキ	(18.0)	(3.5)	(3.3)	榿木		2 双脚容器	H14 (2002)	直	PEG
動物形容器	85	340	56	4	5	-	40.1	(10.2)	22.0	榿木		2 双脚透かし孔容器 削り出し仕切り	H9 (1997)	元	脂肪酸
動物形容器	85	341	593	7	5	1 カヤ	(14.6)	(8.3)	(2.6)	榿木		2 四脚容器未成品 方形透かし孔未切断 芯持ち	H16 (2004)	京	脂肪酸
動物形容器	85	342	490	5	5	1 スギ	22.2	(8.8)	13.2	榿木		2 楕円家双脚容器 台形透かし孔	H13 (2001)	元	脂肪酸
動物形容器	85	343	438	4	5	1 クスノキ	(27.2)	(22.5)	(3.3)	榿木		3 双脚容器脚部 台形透かし孔 芯持ち	H18 (2006)	直	PEG
動物形容器	85	344	500	5	5	1 ヤブニッケイ	(22.5)	(22.5)	(6.2)	榿木		2 漆塗りに平行する楕円状脚部 中央に四角形透かし孔	H14 (2002)	京	脂肪酸
動物形容器	86	345	462	5	5	1 ケヤキ	45	23.3	8.1	榿木		2 漆塗りに平行する楕円状脚部 中央に四角形透かし孔	H13 (2001)	直	PEG
動物形容器	86	346	640	7	5	1 クスノキ	(9.1)	(10.0)	(3.0)	榿木		2 中朝りが浅い皿状	H14 (2002)	直	PEG
動物形容器	86	347	403	4	5	-	16.7	(12.7)	5.2	榿木		2 アロヒ形容器 芯持ち	H9 (1997)	元	脂肪酸
動物形容器	87	348	472	5	5	1 シロダモ	(68.3)	(8.3)	18.0	榿木		2 舟形容器	H12 (2000)	元	脂肪酸
動物形容器	87	349	17	4	5	-	(33.8)	(16.8)	3.4	榿木		2 舟形容器	H14 (2002)	直	PEG
動物形容器	87	350	320	3	5	-	66.2	35.4	7.6	榿木		3 長方形箱形容器 (槽) 芯持ち	H16 (2004)	元	PEG
分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考			
蓋	88	351	445	4	5	元 アカガシ	38.1	29.1	4.0	榿目		3 4号木器溜まり 流線形 中央に方形の刻み溝み	H7 (1995)	元	脂肪酸
蓋	88	352	139	3	5	観察 アカガシ	24.8	24.3	2.7	榿目		2 円形 中央に2個の半円形の陰刻溝み	H12 (2000)	元	脂肪酸
蓋	88	353	42	3	5	1 クスノキ	33	32.5	2.7	榿目		2 円形 中央に2個の半円形把手 芯持ち	H8 (1996)	元	脂肪酸
蓋	88	354	92	3	6	-	35.5	(21.8)	3.4	榿目		1 円形 中央に削り出しの円形溝み	H14 (2002)	元	脂肪酸
蓋	88	355	130	3	5	観察 アカガシ	28.6	22.8	4.0	榿目		2 方形 中央に長方形の削り出し溝み	H12 (2000)	元	脂肪酸
蓋	88	356	716	7	5	1 タブノキ	34.4	28.0	4.2	榿目		2 円形 側面に削り出しの片把手	H13	元	PEG
蓋	88	357	293	4	5	1 クスノキ	(30.1)	(18.3)	2.1	榿目		1 円形 側面に削り出しの片把手	H16 (2004)	直	PEG
蓋	88	358	521	5	5	1 -	25.0	22.9	1.9	榿目		2 円形 側面に削り出しの片把手	H13 (2001)	元	PEG
琴	89	359	690	8	5	1 ヒノキ	(50.9)	(12.3)	(1.4)	榿目		2 6弦突起? 箱づくり	H10 (1998)	元	脂肪酸
琴	89	360	391	4	5	元 スギ	(30.7)	(37.0)	1.3	榿目		2	H7 (1995)	元	脂肪酸
琴	90	361	689	8	5	元 スギ	(37.0)	(10.7)	1.3	榿目		2	H8 (1996)	元	脂肪酸
琴	91	362	178	2	5	元 スギ	(39.8)	8.6	1.4	榿目		2	H8 (1996)	元	脂肪酸
琴	92	363	572	6	5	-	(68.6)	(7.4)	1.2	榿目		1 琴側面材? 破損面に楕円形孔痕 線刻	H8 (1996)	元	脂肪酸
琴	92	364	306	3	5	(針葉樹)	(57.3)	(4.3)	(1.4)	榿目		2 一端に糸串状に挟り再加工 琴の脚板?	H10 (1998)	元	脂肪酸
琴	92	365	489	5	5	1 クスノキ	(37.9)	(14.2)	0.9	榿目		2 琴頭 鳥形?	H10 (1998)	元	脂肪酸
人物線刻板	93	366	750	9	5	元 クスノキ	15.1	(11.6)	0.7	榿目		2 人物線刻板	H7 (1995)	元	脂肪酸
分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考			
動物形	93	367	1	3	5	元 アカガシ	8.6	8.3	1.5	榿目		1 鳥形	H8 (1996)	元	脂肪酸

第15表 出土土器観察表⑨

分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期 <th>備考</th> <th>H7 (1995)</th> <th>元</th> <th>真空</th>	備考	H7 (1995)	元	真空
動物形	94	368	14	4	5	元 アカガシ	8.8	25.4	8.7	判材		3 4号木器溜まり 大形	H7 (1995)	元	脂肪酸
動物形	94	369	786	10	5	元 トネリコ	11.4	13.1	6.2	榿目		1 座位の鹿形か?	H7 (1995)	元	脂肪酸
武器形	95	370	715	7	5	元 エノキ	(11.8)	4.0	2.1	榿目		1 袋部があり才形基部 対部断面菱形 根鉢で柄と接合か? 目釘痕	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	371	45	4	5	元 アカガシ	(30.3)	3.0	1.2	榿目		1 剣形?	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	372	1129	4	5	1 アカガシ	(12.4)	5.7	1.7	榿目		2 剣形?	H14 (2002)	直	PEG
武器形	95	373-①	739a	9	5	樹皮	(25.1)	(17.5)	0.4	樹皮		2 片面の目釘孔間に紐綴り痕跡	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	373-②	739b	9	5	樹皮	(22.3)	(20.2)	0.5	樹皮		2 片面の目釘孔間に紐綴り痕跡	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	373-③	739c	9	5	-	1.8+	0.25	-	-		2 黒色顔料 (漆?) が付着	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	373-④	739d	9	5	-	2.6+	0.25	-	-		2 黒色顔料 (漆?) が付着	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	373-⑤	739e	9	5	-	1.8+	0.35	-	-		2 黒色顔料 (漆?) が付着	H8 (1996)	元	脂肪酸
武器形	95	373-⑥	739f	9	5	-	2.6+	0.25	-	-		2 黒色顔料 (漆?) が付着	H8 (1996)	元	脂肪酸
分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考			
鈎	96	374	246	4	5	1 マツ	34.8	14.8	13.5	丸木		2 軸部頭に2面の面取り 紐通し孔 鈎爪2本	H10 (1998)	元	脂肪酸
鈎	96	375	294	×	×	1 マツ	25.6	26.3	(18.2)	丸木		× 軸部頭に2面の面取り 紐通し孔 鈎爪4本	H15 (2003)	直	PEG
鈎	97	376	657	8	5	-	(32.0)	(11.6)	(4.0)	丸木		2 軸部表裏2面取り 上部に穿孔 鈎2本	H18 (2006)	直	PEG
鈎	96	377	539	6	5	1 クロマツ	28.0	39.8	2.5	丸木		2 上部に長さ6cm、幅1.5cmの紐と押し孔 枝2本残存	H11 (1999)	元	脂肪酸
鈎	96	378	151	4	5	1 マツ	26.2	20.7	3.8	丸木		2 軸頭部に葱坊主状の紐掛け 鈎爪2本	H11 (1999)	元	脂肪酸
鈎	96	379	762	4	5	-	32.0	(6.6)	(4.7)	丸木		2 軸頭部に葱坊主状の紐掛け 鈎爪2本	H18 (2006)	直	PEG
鈎	97	380	486	5	5	1 マツ	26.9	(13.4)	(3.4)	丸木		2 半分欠失 鈎爪2本	H16 (2004)	元	PEG
蓋	97	381	395	4	5	観察 アカガシ	18.3	17.2	2.0	榿目		2 方形蓋 上面に陰刻で溝み	H14 (2002)	直	PEG
把手	97	382	1145	4	5	1 マキ属	22.3	10.0	1.4	丸木		丸を曲げ 両端に紐通し小孔	H14 (2002)	直	PEG
分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考			
腰掛け	97	383	507	5	5	(クスノキ)	39.7	(11.7)	(5.8)	榿木		2 案の座部?	H19 (2007)	直	PEG
腰掛け	97	384	40	4	5	-	(27.6)	(10.2)	21.0	榿木・ 芯持ち		2 双脚案 台形透かし孔 両脇に刻線裝飾	H14 (2002)	元	PEG
分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考			
火鑽白	98	385	446	5	5	元 ウリカエデ	22.7	2.2	1.8	木取 角・芯 持ち		2 火鑽白 側面に線刻 火鑽孔は未穿孔	H7 (1995)	元	脂肪酸
火鑽白	98	386	129	3	5	1 シロダモ	21.3	2.8	2.8	丸木		2 火鑽白 火鑽孔径1.1~1.2cm	H11 (1999)	元	脂肪酸
火鑽白	98	387	1124	4	5	1 アフロキ属	17.6	2.7	2.0	丸木		2 火鑽白 火鑽孔3穴	H14 (2002)	直	PEG
火鑽白	98	388	805	4	5	1 シロダモ	24.7	3.1	1.5	半裁		2 火鑽白 火鑽孔径0.8~1.0cm 火鑽孔に磨擦痕	H13 (2001)	元	脂肪酸
用途不明品	98	389	454	5	5	1 針葉樹	(17.0)	1.5	-	丸木		5 先端を杓状に先削き加工 先端に磨痕	H13 (2001)	元	PEG
分類	挿図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	厚み	木取	時期	備考			
腰掛け	98	390	282	3	5	1 クリ	29.3	11.1+	-	榿木・ 芯持ち					



第16表 出土木器観察表⑩

鼠返し	101	399	1203	1~2	5	クスノキ	節	長さ	又部幅	柱径	木取	時期	備考	H11 (1999)	元	脂肪酸
鼠返し	101	400	73	3	5	1クスノキ		53.6	51.2	5.0	板目	2	2 方形孔11.6×12.7	H13 (2001)	元	脂肪酸
鼠返し	101	401	34	4	5	1クスノキ		44.8	54.4	3.2	板目	1	1 方形孔12.9×12.7cm	H13 (2001)	元	脂肪酸
鼠返し	101	402	85	3	5	1クスノキ		58.9	52.0	3.3	板目	2	2 方形孔13.4×13.7cm	H12 (2002)	元	PEG
鼠返し	101	403	409	4	5	1ヤブニッケイ		46.8	46.6	3.9	板目	2	2 方形孔10.8×11.6cm	H12 (2002)	元	脂肪酸
鼠返し	101	404	595	7	5	1クスノキ		58.9	52.0	2.3	板目	2	2 円形孔径24.9cm	H16 (2004)	京	PEG
鼠返し	101	405	498	5	5	1マキ属		59.5	(20.7)	2.3	板目	2	2 円形孔径22cm以上	H15 (2003)	京	ラクチン
挿入	102	406	332	4	5	1クリ		73.8	42.3	7.0	板目	2	2 円形孔径18.6cm以上	H12 (2000)	元	脂肪酸
又柱	102	407	78	3	5	-		216.0	23.0	12.7	丸木	2	2 又部に桁受け加工	H19 (2007)	京	PEG
又柱	102	408	777	5	5	1スタジイ		158	17.5	10.0	丸木	2	2 又部に桁受け加工 柱根炙り	H13 (2001)	元	PEG
又柱	102	409	213	2	5	1キハダ		161.8	20.3	8.2	丸木	2	2 又部に桁受け加工 柱根先削ぎ炙り	H16 (2004)	直	PEG
挿入	102	409	213	2	5	1キハダ		137.5	17.9	9.0	丸木	2	2 又部に桁受け加工 側面に欠き込み	H15 (2003)	京	ラクチン
分類	挿入	番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	又部幅	柱径	木取	時期	備考				
柱	103	410	88	3	4	1クリ		188.5	(往)	17.5	丸木	2	2 側面に幅6.5cm、深さ5.0cm、長さ99cmにわたり断面方形の板溝	H13 (2001)	元	PEG
柱	103	411	90	3	5	1スタジイ		93.2	21.7	11.0	角	2	2 断面長方形 両小口に半円形の抉り 榫板?	H12 (2000)	元	PEG
柱	103	412	691	8	5	-		63.2	10.0	6.4	角	2	2 断面長方形 両小口に半円形の抉り 榫板?	H18 (2006)	元	PEG
柱	103	413	791	4	5	-		(56.2)	14.9	7.0	半裁	2	2 表面に4.2cm×3.5cmの窪み 側面に抉り	H19 (2007)	直	PEG
梁	103	414	89	3	5	1クリ		99.3	16.5	8.7	半裁	2	2 サスを固定する素材	H11 (1999)	元	PEG
柱	103	415	214	2	5	1クスノキ		(57.0)	18.7	13.5	丸木	2	2 160×80cmの長方形貫孔	H17 (2005)	京	ラクチン
板	104	416	772	5	5	1ユズリハ属		188.5	18.0	3.8	板目	2	2 板継ぎ加工?	H18 (2006)	直	PEG
板	104	417	102	3	5	1ツブラジイ		(182.5)	20.0	6.3	板目	2	2 板継ぎ加工?	H16 (2004)	直	PEG
板	104	418	328	4	5	1クリ		(136.9)	17.0	4.5	板目	2	2 板継ぎ加工?	H17 (2005)	京	ラクチン
板	104	419	111	3	5	1シイ属		(144.5)	17.8	4.9	板目	2	2 板継ぎ加工?	H19 (2007)	直	PEG
矢板	104	420	449	3	5	1ムクロジ		136	14.5	3.9	板目	5	5 矢板	H18 (2006)	直	PEG
矢板	104	421	123	3	5	-		76.5	14	2.8	板目	2	2 矢板	H14 (2002)	京	ラクチン
板	105	422	330	4	5	1クリ		213.4	15.5	5.0	板目	×	×	H10 (1998)	元	PEG
板	105	423	470	×	×	-		235	21	7.5	板目	×	×	H19 (2007)	直	PEG
扉	105	424	450	2	1	1モミ属		(69.3)	(40.8)	4.7	板目	5	5 試験時堀上げ	H16 (2004)	京	ラクチン
扉	105	425	459	5	5	-		(76.9)	(19.8)	1.8	板目	2	2 榫付板	H16 (2004)	京	ラクチン
板	105	426	113	3	5	-		(41.7)	12.5	3.7	板目	2	2 榫付板	H18 (2006)	直	PEG
板	106	427	69	3~4	5	1アカガシ		(139.7)	6.3	1.2	板目	2	2 方形孔2カ所	H11 (1999)	元	脂肪酸
板	106	428	30	4	5	1ムクロジ		114.0	7.2	1.8	板目	2	2 方形孔	H12 (2000)	元	脂肪酸
板	106	429	32	4	5	1カヤ		(108.2)	8.2	1.8	板目	2	2 方形孔	H13 (2001)	元	脂肪酸
板	106	430	581	4	5	-		(54.3)	9.9	2	板目	2	2 榫付板	H16 (2004)	元	PEG
板	106	431	410	4	5	-		65.3	41.3	4.3	板目	2	2 榫付板	H16 (2004)	京	PEG
板	106	432	114	3	5	1クリ		103.7	16.6	2.3	板目	2	2 榫付板	H11 (1999)	元	脂肪酸
その他	107	433	455	5	5	-		(70.5)	9.0	4.9	半裁	2	2 榫付板	H12 (2000)	元	PEG
その他	107	434	717	7	5	-		(53.0)	11.8	(5.0)	半裁	2	2 榫付板	H14 (2002)	京	ラクチン
その他	107	435	311	5	5	1シイ属		46.4	8.8	3.6	板目	2	2 柄穴4.1×4.4cm 斜め貫通 W41.4に似る	H14 (2002)	京	ラクチン
扉	107	436	375	4	5	1タブノキ		34.7	11.5	6.9	板目	2	2 扉把手	H13 (2001)	元	PEG
柱	107	437	358	4	5	1マツ		22.4	9.6	9.5	丸木	2	2 W439と同形	H14 (2002)	京	ラクチン
柱	107	438	98	3	5	1マツ		(9.0)	(11.8)	(9.7)	丸木	2	2 W437,439と同形か? 土庄により変形	H14 (2002)	直	PEG
柱	107	439	651	8	5	1サカキ		19.7	10.2	5.5	丸木	2	2 W437と同形 土庄により変形	H11 (1999)	元	PEG
その他	107	440	219	2	5	1タブノキ		(36.1)	(6.6)	(5.8)	丸木	2	2 榫付板	H14 (2002)	元	PEG
その他	107	441	787	5	5	1ヤブツバキ		24.5	9.1	6.5	丸木	2	2 榫子の取付材?	H13 (2001)	直	PEG
その他	108	442	224	2	5	1タブノキ		16.1	2.7	2.8	丸木	2	2 榫あるいは釘?	H12 (2000)	元	PEG
その他	108	443	110	3	5	1マツ		16.1	2.7	2.8	丸木	2	2 榫あるいは釘?	H14 (2002)	京	ラクチン

第17表 出土木器観察表⑪

その他	108	444	569	6	5	1クスノキ科		(15.9)	4.9	0.5	板目	2	2	H14 (2002)	直	PEG
双脚容器	108	445	150	4	5	-		(20.4)	(7.8)	(4.4)	横木	2	2	H18 (2006)	直	PEG
双脚容器	108	446	607	6	5	1クスノキ科		(12.8)	(5.6)	(5.1)	横木	2	2	H10 (1998)	元	PEG
その他	108	447	248	4	5	-		25.4	(7.2)	(4.4)	板目	2	2	H19 (2007)	直	PEG
その他	108	448	537	6	5	1クスノキ		(14.5)	(16.5)	0.8	板目	2	2	H16 (2004)	直	PEG
その他	108	449	612	7	5	1アカガシ		14.8	14.4	0.7	板目	2	2	H10 (1998)	元	脂肪酸
その他	108	450	629	8	5	1マツ		13.3	9.8	1.1	板目	2	2	H15 (2003)	京	ラクチン
その他	109	451	421	5	4	1スギ		18.5	5.8	5.3	丸木	2	2	H7 (1995)	元	脂肪酸
その他	109	452	755	3	5	1広葉樹		(17.8)	5.4	4.6	丸木	2	2	H14 (2002)	京	ラクチン
その他	109	453	283	3	5	1ヤブツバキ		6.8	7.5	-	縦木	2	2	H12 (2000)	元	脂肪酸
その他	109	454	252	6	5	-		6.3	-	2.0	-	2	2	H12 (2000)	元	PEG
その他	109	455	72	3	5	1散孔材		6.7	6.5	(2.6)	板目	2	2	H12 (2000)	元	PEG
その他	109	456	277	3	5	1スギ		25.1	3.7	3.7	芯去り	2	2	H12 (2000)	元	脂肪酸
その他	109	457	269	4	5	1ニワトコ		22.5	4.0	7.2	枝分	2	2	H11 (1999)	元	脂肪酸
その他	110	458	338	4	5	1スギ		60.2	2.2	2.2	芯去り	2	2	H13 (2001)	元	PEG
その他	110	459	802	3	5	観察	アカガシ	(61.2)	3.2	2.8	2.8	2	2	H19 (2007)	直	PEG
その他	110	460	620	7	5	1クスノキ		(38.7)	3.6	2.2	2.2	2	2	H16 (2004)	京	ラクチン
その他	110	461	1321	6	5	-		20.4	2.8	2.7	丸木	2	2	H17 (2005)	直	PEG
その他	110	462	148	4	5	1アカガシ		(18.4)	2.6	2.7	芯去り	2	2	H12 (2000)	元	脂肪酸
その他	110	463	1312	3	4	1アカガシ		(23.2)	2.2	1.9	丸木	2	2	H14 (2002)	京	ラクチン
その他	110	464	41	4	5	観察	アカガシ	34.1	4.6	1.4	板目	2	2	H14 (2002)	直	PEG
その他	111	465	1350①		5	-		(44.0)	12.5	1.1	板目	2	2	H16 (2004)	直	PEG
その他	111	466	1350③		5	-		(14.1)	7.5	0.8	板目	2	2	H16 (2004)	京	ラクチン
その他	111	467	1350②		5	-		(62.0)	9.2	1.6	板目	2	2	H16 (2004)	京	ラクチン
その他	111	468	895	3	5	観察	アカガシ	(52.1)	4.5	1.5	板目	2	2	H16 (2004)	直	PEG
その他	111	469	531	5	4	1モミ属		板目	43.4	11.7	0.8	2	2	H16 (2004)	京	ラクチン
その他	111	470	668	8	5	1シイ属		板目	6.7	6.5	0.5	2	2	H16 (2004)	京	ラクチン
その他	111	471	681	9	5	1スギ		23.1	5.7	0.6	板目	2	2	H18 (2006)	直	PEG
その他	111	472	1511	5	5	-		(9.5)	(4.2)	1.0	板目	3	3	H16 (2004)	直	PEG
その他	111	473	1131	4	5	-		(29.4)	5.2	1.3	板目	2	2	H17 (2005)	直	PEG
その他	111	474	729	7	5	-		(33.6)	8.3	1.6	板目	2	2	H18 (2006)	直	PEG
えぶり	122	475	300	1	5	観察	アカガシ	8.1	33.9	2.0	板目	2	2	H12 (2000)	元	脂肪酸
横杓子	122	476	299	1	4	元	環孔材	26.8	14.3	7.9	縦木	3	3	H7 (1995)	元	脂肪酸
分類	挿入	番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	最大厚	木取	時期	備考				
鋤	122	477	324	1	5	(アカガシ)		(62.6)	(6.4)	(2.8)	板目	2	2	H14 (2002)	直	PEG
臼	124	478	1183	6	3	元	クスノキ	40.6	(47.5)	(40.7)	丸木	3	3	H7 (1995)	元	脂肪酸
把手付容器	124	479	580	4	4	1スギ		22.7	4.1	6.5	縦木	3	3	H14 (2002)	直	PEG
分類	挿入	番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	最大厚	木取	時期	備考				
膝柄横杓子	128	480	826	6	4	1サカキ		(52.1)	20.5	4.7	板目	2	2	H10 (1998)	元	脂肪酸
三又鉄	128	481	588	6	4	観察	アカガシ	35.1	14.8	2.3	板目	3	3	H11 (1999)	元	脂肪酸
柱	128	482	587	6	4	-		(91.0)	(10.5)	6.4	丸木	3	3	H19 (2007)	直	PEG
背負梯子	131	483	748	7	4	元	-	78.8	40.7	2.3	板目	3	3	H7 (1995)	元	脂肪酸
背負梯子	131	483-1	748-1	7	4	元	アカガシ	79.1	6.6	3.1	板目	3	3	H7 (1995)	元	脂肪酸
背負梯子	131	483-2	748-2	7	4	元	アカガシ	78.1	6.0	2.8	板目	3	3	H7 (1995)	元	脂肪酸

第18表 出土木器観察表⑫

分類	押図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	木取	時期	備考	年代	分析
背負梯子	131	483-3	748-3	7	4	アカガシ	294	3.2	2.2			H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	131	483-4	748-4	7	4	元 アカガシ	200	18.6	0.5	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	131	483-5	748-5	7	4	元 アカガシ	318	2.9	0.6	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	131	483-6	748-6	7	4	元 アカガシ	301	3.0	1.1	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	129	484	749	7	4	-	(76.9)	38.3	13.0	3	3号木器溜まり 組み状態保存 梯子形	H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	129	484-1	749	7	4	元 サカキ	(59.1)	(17.4)	4.2	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	129	484-2	749	7	4	元 アカガシ	(76.0)	(16.1)	4.7	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	129	484-3	749	7	4	元 アカガシ	(27.4)	2.4	2.1	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	129	484-4	749	7	4	元 アカガシ	(35.3)	2.9	1.3	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
背負梯子	129	484-5	749	7	4	元 アカガシ	(38.4)	3.3	1.3	3		H7 (1995)	元 脂肪酸
扉板	138	485	846	2	1	1 モミ属	(136.6)	40.4	7.0	5	取水遺構 扉板を囲い板に転用	H11 (1999)	直 PEG
扉板	138	486	847	2	1	1 ガマズミ属	(82.8)	(25.0)	(5.1)	5	取水遺構 扉を囲い板に転用	H14 (2002)	元 PEG
扉板	138	487	447	2	1	1 モミ属	(34.7)	21.9	4.2	5	取水遺構 扉を囲い板に転用	H15 (2003)	直 ラクチ
扉板	138	488	308	2	1	1 モミ属	50.6	25.3	3.7	5	取水遺構 扉を囲い板に転用	H16 (2004)	直 PEG
扉板	138	489	309	2	1	1 モミ属	(83.0)	33.0	3.2	5	取水遺構 扉板を囲い板に転用	H13 (2001)	元 PEG
扉板	138	490	863	2	1	1 モミ属	(95.2)	29.7	4.5	5	取水遺構 扉板を囲い板に転用	H15 (2003)	京 ラクチ
その他	139	491	856	2	1	1 クリ	209.1	15.6	-	5	取水遺構	-	-
その他	139	492	855	2	1	1 アワブキ属	(95.3)	13.5	9.7	5	取水遺構 厚さ5cmの板の一端に削り出し突起	H17 (2005)	京 ラクチ
板	139	493	860	2	1	-	(64.4)	(18.8)	(4.3)	5	取水遺構 扉板の囲い板転用 板面に把手痕跡	H18 (2006)	元 PEG
板	139	494	865	2	1	1 クロモジ属	108.7	16.7	13.5	5	取水遺構 扉を囲い板に転用	H14 (2002)	京 ラクチ
板	139	495	857	2	1	-	50.4	10.0	1.6	5	取水遺構 実測済 未掲載	H17 (2005)	元 PEG
板	139	496	870	2	1	-	64.4	13.7	5.3	5	取水遺構	H17 (2005)	直 PEG
その他	140	497	821	2	1	1 クリ	(108)	(11.5)	10.0	5	取水遺構	-	-
その他	140	498	819	2	1	1 クリ	(133.0)	10.0	10.0	5	取水遺構	H18 (2006)	元 脂肪酸
その他	140	499		2	1	-	136.0	5.0	4.9	5	取水遺構	-	-
その他	140	500		2	1	-	138.9	21.5	2.1	5	取水遺構	H14 (2002)	京 PEG
板	140	500	126	3	5	1 ツブラジイ		132.3	20.7	2.2		H18 (2006)	直 PEG
その他	140	501	365	2	1	-	(102.2)		11.1				
板	140	502		3	1	-	246	15	3.0	5	取水遺構	H18 (2006)	京 PEG
把手付容器	140	503	393	2	1	-	36.1	20.4	8.7	5	取水遺構 諸手容器未製品	H7 (1995)	元 真空
加工品	-	未報告	7	3	5	-	51.7	5.7		2	樹皮付き丸木	H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	13	4	5	1 (アカガシ)	36.0	2.2		2	棒状 鉄刃片?	H17 (2005)	直 PEG
蓋	-	未報告	15	4	5	(アカガシ)	24.0	13.0	1.7	2		H18 (2006)	京 ラクチ
杭	-	未報告	22	3	5	-	100	3.7		2		H17 (2005)	直 PEG
棒製品	-	未報告	25	3	5	1 スダジイ	210.5	5.5		2		H17 (2005)	直 PEG
棒製品	-	未報告	28	3	5	1 シイ属	136.0	3.6		2		H17 (2005)	直 PEG
柱	-	未報告	29			1 ハンノキ属	157	7.0		2		-	-
加工品	-	未報告	43	4	5	(アカガシ)				2	板状	H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	44	4	5	観察 アカガシ				2		H16 (2004)	直 PEG
鉤	-	未報告	49	-	-	1 アカガシ亜属	13.0	22.0	3.0		鉤爪3本	未	-
加工品	-	未報告	50	4	5	1 コナラ属	26	1.8	1.5	2	棒状	H16 (2004)	直 PEG
加工品	-	未報告	51	4	5	1 ヒサカキ属	19.0	2.7		2		H17 (2005)	直 PEG
斜め杓子	-	未報告	65	4	5	-	9.6	6.5		2	芯持ち	H17 (2005)	直 PEG
建築材	-	未報告	68	3	5	1 ツブラジイ	173.0	15.0	3.5	2		未	-
建築材	-	未報告	70	3	5	1 マツ	241.5	7.7	2.4	2		未	-
加工品	-	未報告	70-2			1 マツ				2		未	-
杓文字状杓子	-	未報告	75	3	5	-	11.7	8.0		2	構い部のみ	H17 (2005)	直 PEG

第19表 出土木器観察表⑬

分類	押図番号	取上	地点	層位	樹種	長さ	幅	高さ	木取	時期	備考	年代	分析
加工品	-	未報告	80	3	5	観察 アカガシ	10.3	7.0		2		H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	82	3	1	針葉樹?	8.0	10.3		5		H19 (2007)	直 PEG
加工品	-	未報告	87	3	6	観察 (アカガシ)	22.0	11.8	2.2	1		H17 (2005)	直 PEG
建築材	-	未報告	105	3	5	1 ツブラジイ	279.0	12.3	5.0	2		未	-
棒製品	-	未報告	112	3	5	1 クスノキ	130.0	6.0		2		H19 (2007)	直 PEG
棒製品	-	未報告	121	3	5	-	85	5.5	1.5	2		H16 (2004)	直 PEG
加工品	-	未報告	125	3	5	観察 アカガシ	18	5.2	1.7	2		H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	133	3	5	1 シロタモ	71.5	5.8		2		H17 (2005)	直 PEG
柱	-	未報告	136	3	5	1 シイ属	198.0	11.0		2		未	-
加工品	-	未報告	137	-	5	キハダ				2		未	-
加工品	-	未報告	141	3	5	(アカガシ)				2		未	-
加工品	-	未報告	142	3	5	-				3		未	-
杓子	-	未報告	145	4	5	-	12.3	6.3		3		H17 (2005)	直 PEG
杭	-	未報告	147	4	5	-	34.4	7.8		4	板状	H17 (2005)	直 PEG
杭?	-	未報告	154	3	4	観察 アカガシ	21.6	2.3		3		H17 (2005)	直 PEG
杓文字状杓子	-	未報告	159	3	5	-				5		H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	160	3	5	-	57	17	2.5	5	5片 未接合	H17 (2005)	直 PEG
容器	-	未報告	163	3	5	-	16.2	4.8		2		H19 (2007)	直 PEG
鋤?	-	未報告	166	3	5	観察 アカガシ	17.7	6.5		2	構い部片?	H7 (1995)	直 PEG
杓子	-	未報告	169	3	5	-	16.0	5.5		2		H19 (2007)	直 PEG
加工品	-	未報告	176	4	5	1 マキ属	9.1	5.6		2		H17 (2005)	直 PEG
三又鉄	-	未報告	191	4	5	(アカガシ)	50.5	3.0		2	大型三又鉄刃部の再加工品	H18 (2006)	直 PEG
加工品	-	未報告	192	4	5	観察 アカガシ	16.1	17.2		2		H17 (2005)	直 PEG
建築材	-	未報告	196	2	5	-	20.2	12.8		2		H19 (2007)	直 PEG
えぶり	-	未報告	204	2	5	観察 アカガシ	21.8	6.5		2		H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	208	4	5	観察 アカガシ	18.0	10.5		2		H19 (2007)	直 PEG
加工品	-	未報告	217	2	5	観察 アカガシ	33.8	3.9		2		H17 (2005)	直 PEG
板	-	未報告	226	3	5	-	32.6	6.8		2		H19 (2007)	直 PEG
平鉄	-	未報告	247	4	5	観察 アカガシ	27.5	(12.9)		2		未	-
加工品	-	未報告	253	3	5	(クスノキ)	30.5	18.5		2	白、舟の破材?	H19 (2007)	直 PEG
加工品	-	未報告	257	1	4	1 キハダ	40.5	3.2		3	棒材	H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	261	2	5	-	12	7.5	3.0	2		H19 (2007)	直 PEG
加工品	-	未報告	267	1	4	-	38.7	3.4		4		H19 (2007)	直 PEG
加工品	-	未報告	270	1	4	観察 アカガシ	19.5	2.9		3		H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	274	-	-	-				2		H16 (2004)	直 PEG
杓子	-	未報告	291	4	5	1 クスノキ	32.7			2	芯持ち	H17 (2005)	直 PEG
鉤	-	未報告	302	3	5	-				2	鉤爪2本 爪先ソギ	H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	305	3	5	観察 アカガシ	10.0	4.0		2		H17 (2005)	直 PEG
杭	-	未報告	313	-	-	-	37			-		H16 (2004)	直 PEG
加工品	-	未報告	315	-	-	1 クスノキ	32.9	23.7		-		未	元 脂肪酸
棒製品	-	未報告	331	4	5	-				2		H19 (2007)	直 PEG
建築材	-	未報告	333	4	5	1 シイ属	21.0	6.8		2		未	-
板	-	未報告	340	4	5	-	193	11.5		2		H19 (2007)	直 PEG
建築材	-	未報告	341	4	5	シイ属	200.0	12.8	2.3	2		未	-
杭	-	未報告	368	3	5	-				2	先ソギ	H16 (2004)	直 PEG
容器	-	未報告	371	4	5	1 マキ属	2.0	19.0		2		H17 (2005)	直 PEG
加工品	-	未報告	372	2	4	観察 アカガシ	5.5	5.0	0.6	3		H17 (2005)	直 PEG
横杓子	-	未報告	373	4	5	1 マキ属				2	焼痕	H17 (2005)	直 PEG

第20表 出土木器観察表⑭

板	- 未報告	374	4	5	-	-	320	180	1.5	板目	2 端部に3×10cmの方形孔	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	383	4	5	観察	散孔材	180	4.5		縦木	2 祝詞あるいは楕円形容器?	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	386	4	5	観察	アカガシ	70	3.5		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	388	-		観察	アカガシ	44	4.2		板目	-	H17 (2005)	直	PEG
杓子	- 未報告	389	4	5	-	(マキ属)	3.8	4.0		縦木	2 柄頭	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	390	4	5	観察	アカガシ	8.2	3.5		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
杓子	- 未報告	397	4	5	1	ヒサカキ	14.2	8.2		縦木	5	H17 (2005)	直	PEG
杓文字状杓子	- 未報告	416	4	5	-	(アカガシ)	27.4	3.0		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	424	5	5	1	マツ	34.4	4.6		丸木	2 軸頭部に方形孔 2面取り	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	428	5	5	1	ヤマグラ	24	10		板目	2	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	429	5	5	1	ヒサカキ	45.4	6.6		半裁	2	H15 (2003)	直	PEG
建築材	- 未報告	442	2	1	1	シイ属	18.5	13.6		角	5 芯持ち 基部先ソギ	H17 (2005)	直	PEG
板返し	- 未報告	444	2	1	1	センダン	19.5	16.0	1.6	板目	5	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	453	5	5	-	(クスノキ)	48.4	20.5		板目	2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	456	5	5	1	マキ属	12.0	6.5		縦木	2	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	457	5	5	1	アワブキ属					2	未	-	-
梯子	- 未報告	469	-	5	1	クスノキ					2	H10 (1998)	元	-
杓子	- 未報告	480	5	5	-	-	31.0	100		丸木	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	493	-		1	クリ	25.5	9.0	1.6		2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	495	-	5	-	(カシ?)					2	未	-	-
加工品	- 未報告	497	5	5	-	(カスラ)					2	未	-	-
カズラ束	- 未報告	502	5	5	1	クスノキ	46.5	32.5		板目	2 菱形、鼠返しか? 未確定	自然乾燥	-	-
鼠返し	- 未報告	510	5	6	1	マツ	39.0	17.5		半裁	1 丸木の又柱の半裁転用か?	H18 (2006)	京	ラクチ
加工品	- 未報告	512	5	5	-	-	36.0	10.8		半裁	2 再加工	H19 (2007)	直	PEG
杓子	- 未報告	515	5	5	-	(スギ)	29.5	8.5		板目	2	H19 (2007)	直	PEG
建築材	- 未報告	525	6	5	1	ヤマザクラ	6.6		1.9		2	H13 (2001)	元	PEG
加工品	- 未報告	546	6	5	-	-	23.0	9.6	1.7	板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	553			1	樹皮					2	未	-	-
加工品	- 未報告	554	6	5	-	-	43.0	3.3			2	H19 (2007)	直	PEG
建築材	- 未報告	560	6	5	-	-	57.7	9.0	7.2	角	2 芯持ち 斜め通し孔	H18 (2006)	京	ラクチ
杓文字状杓子	- 未報告	561	6	5	観察	アカガシ	16.2	4.0		縦木	2 先端先ソギ 凹孔	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	564	6	5	-	-	35.5	3.5			2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	577			1	ムクロジ					2	未	-	-
加工品	- 未報告	583	-		-	-	43.0				2	H19 (2007)	直	PEG
杭	- 未報告	584	6	5	観察	アカガシ	18	4		板目	2	未	-	-
柱	- 未報告	601	7	5	1	ヤマグラ	36.0	4.0		丸木	2 又柱の転用品	H14 (2002)	直	PEG
加工品	- 未報告	602	6	4	観察	アカガシ	26.7	7.0			4 2号土壙	H14 (2002)	直	PEG
杭	- 未報告	608	7	5	-	-	40.0		1.5	丸木	5 2号土壙 先ソギ	H16 (2004)	直	PEG
杓文字状杓子	- 未報告	610	6	5	観察	アカガシ	(61.0)	(3.0)		板目	5 2号土壙	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	623	7	5	-	-	34.0	4.5			5 2号土壙	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	641	7	5	-	シヤシヤンボ				-	5 2号土壙	H19 (2007)	直	PEG
建築材	- 未報告	646	7	5	観察	アカガシ	136.5	5.5		丸木	2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	652	-		観察	アカガシ	19.0	14.8		板目	2	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	653	-		サカキ	22.0	22.0	5.0	2.2	縦木	表面に焼痕	H17 (2005)	直	PEG
杓文字状杓子	- 未報告	656	8	5	アカガシ	15.0	10.0			板目		H17 (2005)	直	PEG
皿状容器	- 未報告	662	6	5	-	-	55.5	5.0				H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	670	8	5	観察	アカガシ	22.5	13.2		板目	えぶりの未製品?	H17 (2005)	直	PEG

第21表 出土木器観察表⑮

加工品	- 未報告	671	-		1	マキ属				板目	2	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	672	7		-	(アカガシ)	30.5	4.2			2	H19 (2007)	京	ラクチ
匙	- 未報告	679	9	5	-	サカキ	100	5.0		横木	2	H17 (2005)	直	PEG
棒製品	- 未報告	682	9	5	-	-	55	3.0		丸木	2	H14 (2002)	直	PEG
杭	- 未報告	692	8	5	-	-	122			丸木	2 先ソギ	H16 (2004)	直	PEG
容器	- 未報告	694	9	5	-	-	53.2				2 器壁厚5mm 楕円形桶?	H17 (2005)	直	PEG
建築材	- 未報告	696	9	5	-	(カシ)	22.0	4.0		板目	2 先ソギ	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	697	9	5	1	クスノキ科	7.0	10.0	1.8	板目	2 表面に焼痕	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	699	9	5	1	シロダモ-	31.7	13.7	3.7	板目	2 先ソギ	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	700	9	5	-	(アカガシ)	13.8	2.4		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
柱	- 未報告	705			1	シロダモ	43.4	5.2		半裁	先ソギ	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	709	9	5	-	(アカガシ)	22.3	2.2		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	711	7	5	-	-	22.0	21.0			2	H19 (2007)	直	PEG
鼠返し	- 未報告	731	10	5	1	クスノキ	42.0	13.5			2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	734	9	5	観察	アカガシ	20.0	9.4		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	743	10	5	観察	アカガシ		9.4			2	未	-	-
鼠返し	- 未報告	745	8-9	5	1	クスノキ	27.0	45.5		板目	2	未	-	-
加工品	- 未報告	747	9	5	-	-	5.6	11.0		枝分れ	2 膝柄杓柄	未	-	-
加工品	- 未報告	753	-		-	-	11.5	32.0			-	H17 (2005)	直	PEG
皿状容器	- 未報告	761	4	5	-	(マキ?)	19.0	2.3		横木	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	765	4	5	観察	アカガシ	15.2	2.2		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	775	4	5	観察	カシ科	9.5	2.0	0.8	板目	2	H19 (2007)	直	PEG
建築材	- 未報告	780	5	5	-	-	21.0	6.5		角	2 芯素材 転用加工	H19 (2007)	直	PEG
柱	- 未報告	781	5	5	-	-	26.0	7.0		板目	2	H19 (2007)	直	PEG
杓文字状杓子	- 未報告	783	5	5	-	-	16.0	2.5		横木	2 小形杓子	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	784	6	5	-	(アカガシ)	31.4	2.8		板目	2 一端先ソギ	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	789	5	5	-	(マツ)	20.6	3.7			2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	796			-	-	11.6	18.6		丸木	2 鉤爪3本 先端先ソギ	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	803	3	5	-	(アカガシ)	15.8	2.0	1.9	板目	2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	807	4	5	-	(アカガシ)	16.7	1.8		板目	2	H19 (2005)	直	PEG
脚付容器	- 未報告	808	4	5	-	-	12.2	11.2		-	2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	809	4	5	1	マツ	3.8	8.5		板目	2 1号木器溜まり	H17 (2005)	元	-
加工品	- 未報告	816	-		-	-					2	未	-	-
加工品	- 未報告	818	2	1	1	クロモジ属	87	9	7	丸木	5 方形欠き込み 7×4cm	H19 (2007)	直	PEG
板	- 未報告	820	2	1	-	-	29.0	8.3	1.3	-N5915		未	-	-
加工品	- 未報告	822	1	4	観察	アカガシ	5.6	1.9		板目4	4	H17 (2005)	直	PEG
柱	- 未報告	823			1	ヤブニッケイ			1.5			H16 (2004)	京科	ラクチ
加工品	- 未報告	828	5	5	-	-	9.0	6.5			2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	831	4	5	観察	アカガシ	10.0	4.5			2	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	832	4	5	-	(カシ)	832	6.3			2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	837	6	5	-	(クスノキ)	25.0	47.0		板目	2	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	840	-	5	1	クスノキ科	33	25.5	8.5	板目	2	H18 (2006)	直	PEG
板製品	- 未報告	851	2	1	1	クロマツ				縦木	5	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	867	2	5	-	-	66.0	4.8		丸木	5	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	879	3	5	観察	アカガシ	9.1	6.5	1.1	板目	2	H16 (2004)	直	PEG
加工品	- 未報告	882	3	5	-	-	20.0	11.2		板目	2	H17 (2005)	直	PEG
加工品	- 未報告	885	3	5	-	-	35.5	3.0	2.0	板目	2 表面加工 両端切断加工	H19 (2007)	直	PEG
加工品	- 未報告	890	3	5	-	(アカガシ)	25.5	3.8	2.0	板目	2 柄?	H19 (2007)	直	PEG







第26表 出土石器観察表

番号	地区	層位	時期	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材種	備考
1	6	2号土壙	4	紡錘車	4.6	4.6	0.7	28.7	変成岩	白底の隙間に嵌入
2	6	2号土壙	4	石錘	9.3	4.8	4.2	208.0	スカルフォルス変成岩	土壙の底部から出土
3	4	4	2	磨製石斧	14.0	7.9	4.5	912.0	玄武岩	基部は折損後に再加工
4	4	-	2	磨製石斧	8.4	6.1	3.8	291	砂岩	基部は欠損
5	4	-	2	磨製石斧	8.5	5.5	3.2	196.0	酸性凝灰岩	縄文時代
6	2	5	2	砥石	21.0	6.7	2.8	538.6	泥岩	
7	6	1	1	砥石	5.9	2.4	2.6	74.5	粘板岩	4面使用
8	6	5	5	砥石	14.9	6.0	2.7	443.7	粘板岩	4面使用
9	2	5	5	砥石	8.7	4.6	4.6	287.6	細粒砂岩	4面使用
10	4	5	5	砥石	6.3	6.8	5.2	280.4	砂岩	筋砥石?
11	2	1	1	砥石	6.7	5.8	3.9	92.2	砂岩	5面使用
12	2	1	1	砥石	15.6	9.4	5.5	806.1	砂岩	3面使用
13	-	廃土	-	磨石	9.8	9.6	5.3	865.5	凝灰岩	握り部を敲打加工
14	8	廃土	-	磨石	12.1	10.4	4.1	792.8	玄武岩	握り部を敲打加工
15	1	4	-	石匙	6.0	5.4	1.4	30.1	安山岩	
16	8	4	-	打製石鏃	4.0	2.9	0.5	2.4	安山岩	
17	4	-		紡錘車	4.8		0.7	24.0	滑石	周縁2ヵ所に欠き込み
18	3	-		紡錘車	4.8	4.4	0.7	25.7	変成岩	
19	6	5		紡錘車	4.4	2.3	3.5	6.8	変成岩	半折品
20	2	3		紡錘車	4.8		4.0	17.9	変成岩	
21	2	-		紡錘車	4.7		0.6	25.0	変成岩	
22	4	4		紡錘車	4.9		1.1	40.3	滑石	厚手
23	3	1		紡錘車	5.0		0.6	23.4	滑石	周縁に複数の欠き込み
24	2	1~3		紡錘車	3.8	1.9	0.3	6.8	滑石	半折品
25	5	4		紡錘車	6.1	5.7	0.7	49.5	変成岩	未製品
26	3	4		紡錘車	4.7	4.7	1.0	39.8	変成岩	未製品
27	3	4		紡錘車	4.8	4.5	0.7	36.6	変成岩	未製品
28	8	1		石包丁	3.2	9.4	0.5	24.2	粘板岩	一端に割れ
29	4	6		石包丁	4.2	9.5	0.6	36.3	安山岩	刃部に割れ
30	5	5		石包丁	4.7	8.0	0.9	39.2	輝緑凝灰岩	半折品
31	10	5		石包丁	3.3	4.5	0.6	8.7	変成岩	半折品
32	4	5		石包丁	5.3	7.8	0.6	41.0	輝緑凝灰岩	半折品
33	2	1		石包丁	3.5	5.8	0.6	17.3	輝色凝灰岩	背部に欠き込み 半折品
34	4	5		石包丁	3.7	5.3	0.4	12.1	変成岩	半折品
35	4	3		石包丁	3.0	4.7	0.6	11.0	粘板岩	半折品
36	7	5		石包丁	5.5	9.0	1.1	62.9	輝色凝灰岩	未製品
37	4	6		石包丁	5.1	11.5	0.5	5.0	砂岩	未製品 直線刃
38	2	3		石包丁	5.0	5.5	0.7	27.7	輝緑凝灰岩	両端折れ
39	6	1		石包丁	4.4	5.4	0.6	22.3	輝緑凝灰岩	半折品
40	2	4		石錘	4.4	2.0	1.5	31.4	粘板岩	小型
41	4	5		石錘	4.3	1.9	1.4	50.1	蛇紋岩	小型
42	6	4		石錘	4.3	1.9	1.4	35.2	滑石	小型
43	4	3~4		石錘	6.8	1.6	1.1	158.0	粘板岩	小型
44										欠番
45	6	5		石錘	5.7	3.5	3.2	66.5	細砂砂岩	
46	4	4		石錘	6.7	3.6	3.5	144.3	緑色変成岩	
47	5	3		石錘	7.4	5.4	5.0	267	スカルフォルス変成岩	
48	4	5		石錘	8.9	3.4	2.9	134.1	砂質片岩	
49	6	3		石錘	8.2	8.1	2.1	236.0	変成岩	打ち欠き
50	7	4		石錘	6.4	7.1	1.9	127.0	変成岩	打ち欠き
51	6	1		石錘	8.6	7.4	2.8	272.0	凝灰岩	打ち欠き
52	3	5		石錘	12.9	8.9	4.5	716.0	玄武岩	打ち欠き
53	2	4		石錘	8.2	6.1	1.4	346.0	滑石	打ち欠き 土器群中
54	5	3		石錘	9.3	6.9	1.5	92.3	変成岩	打ち欠き
55	6	3		石錘	10.2	11.7	4.6	785.0	花崗岩	打ち欠き
56	6	1		石錘	13.6	13.6	2.6	535.0	砂質片岩	打ち欠き
57	5	1		浮子	7.1	7.2	3.2	39.6	軽石	

## V. まとめ

### 1. 谷部における土地利用の変遷

#### (1) 谷部利用の開始 縄文時代～弥生時代早期

調査地点周辺での人々の営みは縄文時代にさかのぼる。石斧、石鏃、石匙など縄文系の石器が出土し、調査地一帯が当該期の活動空間に取り込まれていたことが明らかとなった。寺浦遺跡、荻浦遺跡群など近隣の遺跡においても磨製石斧や打製石鏃などの出土が報告されていることから、将来、活動の拠点となる集落などの確認も期待される。

弥生時代早期の遺物として夜臼式土器片が1点出土しているが、他に遺物、遺構は確認していないことから当該期の生活の主たる空間であったとは考えにくい。しかし、多久川下流域では、多久元多久遺跡や荻浦坂ノ下遺跡において弥生時代前期末～中期初頭の竪穴住居、板付Ⅱ式土器や石器などが出土し、東側の篠原東遺跡では同期の集落も調査されていることから、周辺での今後の調査に注視する必要がある。

#### (2) 弥生時代中期後半～中期末

谷部の利用が本格化するの、弥生中期後半である。谷底を広範囲に掘削整地した土地利用が開始される。最下層6層では水田雑草の草本花粉の検出が特徴的とされ、水田としての利用も想定できるが、その期間は極めて短かったか、近隣の低地に水田が存在したことが要因である可能性が高い。

その後の土地利用については溜井（池）などの貯水施設の可能性も指摘された（註）が、堤土手や柵列など谷を堰き止めた遺構、・施設は検出しておらず、埋土中に大量に投棄された遺物が出土する状況も鑑みると、当該機能の想定は難しい。北から南に向かってなだらかに傾斜する谷底の地形に大きな変化がないこともこのことを裏付ける。

一方、2区～5区では東から張り出した自然地形を利用し、その周囲を掘削して方形のテラス状遺構を作り出した。その上面には平坦面が削り出されていたとみられ、あたかも水辺に仕立てた舞台の景観を呈していたものと推定される。

谷底の地形測量によってテラス状遺構の周囲が少し深めでフラットになるように整地され、北裾では湧水をうながす深堀りもあり、これらによって一定量の湛水が確保され、このことが後の厚い植物遺体層の形成にもつながったと考えられる。

さて、このテラスの周囲から出土した土器には丹塗磨研土器の割合が高く、これらの多くは破碎、部分欠損、穿孔など意図的な破碎行為を伴っているものが多い。出土土器は、甕、広口壺、袋状口縁壺、高坏、鉢が主体で、内外面に丹塗りが施された盃形土器も出土している。また、木器では動物形や動物を意識した脚付容器などが含まれること。琴、琴板では意図的な破壊行為の痕跡が認められ、さらに線刻が施された状況は何らかの祭祀的行為をうかがわせるものとも考えられる。これらの遺物の集積は、まさにこのテラス状遺構が祭祀の主催場であったことを示すものと考えられる。

近隣の元岡・桑原遺跡第42・52次調査地点でも谷底から土器や木器が大量に出土し、水に係る祭祀の場であったことをうかがわせる。その様相において上鍾子遺跡との類似性も多く認められ、当該地域の弥生時代中期～後期における集落での祭祀のあり方を考えるうえで貴重な成果といえる。

（註）吉留秀敏2014「北部九州弥生時代における溜池」の出現とその背景－元岡・桑原遺跡群42・52次調査から－』『大阪府立狭山池博物館研究報告8』



### (3) 弥生時代後期前葉

谷部は弥生時代後期を迎えるころには埋没し陸化したが、当初は完全に干地化したわけではなく比較的湿潤な土壤環境も維持されたであろうことは、少量ではあるが木器が出土していることからもうかがうことができる。

この時期においても谷間における祭祀は継続されたとみられ、4層～3層では大量の土器が出土し、底部・胴部穿孔、口縁部の打ち欠きなどが施されたものが多い。

平面分布としては3区～5区に集中しており、前代に続き方形テラス状遺構を中心に祭祀が行われたと考えられるが、6区～10区にかけても土器が一塊となって廃棄された土器溜まりが認められることから、祭祀の範囲は谷間の広範囲に拡大したと推定される。

6区に相次いで掘削された土壙群は、貯水・貯木などの実用的な用途以外にも祭祀的な性格も考慮すべきかもしれない。2号土壙では、底面からミニチュア高坏、鉢が出土し、また、上層からは壺、甕などの土器とともに天地逆に置かれた臼と、その底に壺片で被覆された完形の石製紡錘車の出土は、祭祀の一端と感じさせる。

4～6区の西岸では青色の結晶質の物質を検出した。分析の結果、主成分が鉄(Fe)、酸素(O)リン(P)、カルシウム(Ca)であったことから動物、魚貝類の骨が集中して堆積していたと推測され、祭祀との関連性においても興味深い。

### (4) 弥生時代後期後半

2区東部では顕著な3～4層の土器包含層を明確に把握することができず、代わって後期後半の土器が集中して出土した。谷部において当該時期の土器がまとまって出土したのはこの地点のみである。土器98・99・113に顕著な打ち欠き行為が認められるものがあり、祭祀の後に廃棄されたと考えられる。

また、土器溜まり周辺からは後期前半の複合口縁壺、高坏片、横杓子未製品(W294)、その直上から古墳時代前期の土師器も出土している。同地区の東壁では2層からの掘り込まれた土壙も認められることから、古墳時代中期以後の貯水・取水・導水遺構の存在も絡み、調査時に把握できなかった弥生時代後期～古墳時代前期の祭祀遺構が存在した可能性もあり、ここから出土した遺物の取り扱いには慎重さが求められる。

なお、1号土壙は実際に大きな護岸杭を打ち慎重な管理が行われていること、横杓子の未製品が出土していることから、貯水以外にも祭祀、貯木などが目的であった可能性もある。

### (5) 古墳時代前期

2層(黒色粘土層)下で谷間の広範囲から古式土師器が出土しているものの量的には少量で甕の出土割合が高く、地面に据え置かれた状態を推定させるものもある。谷部では当該期の遺構を確認することはできなかったが、丘陵部では第3次調査地点を含めて当該期の住居跡が検出されていることから、この時期においても祭祀が断続的に行われていた可能性がある。

### (6) 古墳時代中期～後期

2区の中央で貯水遺構(湧水池)が掘削され、これを源とする取水・導水施設が確認された。扉板を転用加工した取水口から下流側に大径の建築材を敷き並べて平面プランの形となる足場を設け、その中央に素掘り水路が流れる。扉板など貴重な建築部材を使用した遺構は、洗い場、作業場などの日常作業とは異なり集落において特別な意味を有する施設であったと考えられる。

また4区で検出した杭群もその中央を水路が貫流していたことから、こちらも簡易な類似施設であった可能性がある。

近年、近畿地方を中心に、古墳時代に湧水などを導水して祭祀に用いたと考えられる遺構の確認例が増加している。これらの多くは木製槽や木樋などを用いた大規模なもので、この様相を再現した取水・取水埴輪、囲形埴輪、家形埴輪の存在も注目度を増している。これらの施設は、有力氏族や集団が構築したと考えられており水に関する祭祀施設であったとする説が有力である。当該遺構はこれらを範とし、地方で展開した祭祀の一樣相と考えることもできる。

貯水遺構とその周囲から須恵器や土師器碗が集中して出土した。須恵器臚(164)はほぼ完形であるが、口縁部が打ち欠かれ、土師器碗(137)には内外面に黒色顔料の塗布、線描が施されていることなどから祭祀に使用されたと考えられる。須恵器の埋納が確認された5号、6号土壙も祭祀的行為の一端を示すものであろう。

なお、出土須恵器はTK47～TK10型式であることから、概ね5世紀後葉～6世紀中葉が祭祀の期間と考えられる。

## 2. 出土遺物

### (1) 土器

5層出土土器のうち壺、高坏では丹塗磨研土器の割合が高く、これらが3～5区に集中して出土している状況は、方形テラス状遺構の性格を考えるうえで示唆的である。須玖Ⅱ式が中心であるが、逆L字口縁と「く」の字状に反転するものが混在し一定の時間幅が認められる。土壤の堆積状況も考慮するとテラス状遺構の周囲では浚渫が繰り返し行われたと推定され弥生時代中期末まで方形テラス状遺構と水場の維持が図られたことがうかがえる。

3～4層は高三瀦式期に相当するが、外来系土器が目を引く。高坏においては坏部の周縁が直立し上端部に面を作り出す吉備の中期後半～後期初頭の影響を受けた大型高坏(113図-h・77・106・107)が出土しており、糸島地方では三雲鬼木Ⅱ-13地点、同深町-15地点(註1)、今宿五郎江第4次調査(註2)などでも出土している。弥生時代後期前葉における当地と東部瀬戸内海沿岸地域との交流をうかがわせる資料である(註3)。元岡・桑原42・52次調査や今宿五郎江遺跡においても同様に瀬戸内海沿岸地域の影響を受けた土器の出土が報告されている(註4)が、高坏に限定的に表れている傾向は興味深い。また、長頸壺(78)は吉備、讃岐地方の影響が想定され、高坏(78)は豊前地方の高坏との関係が推定される資料として留意される。また、楽浪土器2点(図版66-補4)の出土も追加報告しておく。

弥生時代後期の土壙から出土した土器では、複合口縁壺とともに器台の出土割合が高いことは留意される。また、3～4層から出土した土器にも器台が多く含まれ、口縁部や底部の打ち欠き例も多いことから、祭祀に用いられたと考えられる。器台の使用頻度の高さは当該地方における祭祀での土器利用の特徴のひとつといえるだろう。

なお、今回は土器の報告は限定的であったため、器種ごとの量的な出土傾向については整理時点での状況を感覚的に述べることでしかできていないので、別途その報告の必要があると考える。

註1 柳田康雄 小池史哲1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会



註2 榎本義嗣 屋山洋1996『今宿五郎江遺跡Ⅲ 徳永A遺跡 丸隈山遺跡群』福岡市教育委員会

註3 常松幹雄2002「九州地方の土器」『考古資料大観2 弥生時代古墳時代土器Ⅱ』小学館

註4 森本幹彦2019「日本列島各地の外來系弥生土器」『元岡・桑原遺跡群34』福岡市教育委員会

## (2) 木器

本遺跡の出土品のなかでは大量に出土した木器が特筆される。大半は弥生時代中期後半～末のもので、まさにこの地に伊都国が成立した前後の時期に相当する。出土地点が集落本体に近いことから生活の広範囲にわたる資料が出土しており、また、3～5区のテラス状遺構の周囲出土した木器の中には祭祀に用いられた可能性が高いものが多い。

木器は、その素材の性格上、他器種、用途への転用が容易である。今回の出土資料でも鋏の再加工転用、堅杵から横槌への転用など様々な転用が確認され、弥生人の木器の利用実態を知るうえで興味深い。

また、弥生時代の木器が大量に出土した割には未製品の出土数は少なく、出土例としては工具、食事具、容器に限定されたことも当該遺跡の特徴の一つといえるだろう。

当該地方で弥生時代中期～後期の木器がまとまって出土した遺跡は、深江遺跡群、今宿五郎江遺跡、元岡遺跡42・52次調査などが知られるが、これら集落の活動の開始時期は弥生時代中期後半～後期を中心とし上籬子遺跡の集落の経営時期とも重なっている。単に木器の製作・使用時期の重複に留まらず当概地域の地低地部開発の本格的な開始時期や集落の成立、引いては伊都国成立期の地域様相を考えるうえでも留意すべきと考える。

古墳時代の取水・導水遺構では建築資材の土木用材への転用が顕著であった。貴重な建築資材を惜しげもなく使用した姿に集団における施設への思いの強さを感じ取ることができる。

**工具** 斧柄のうち鉄斧用と考えられるものが多く、関節的ながら当地における弥生時代中期後半の工具の鉄器化の様相を知る好資料である。このことは当該遺跡からの石斧の出土数が少ないこととも符合し、対する石包丁は未製品も含め後期前半まで継続して出土していることは、当該集落における用途別の鉄器普及のプロセスを知る上でも興味深い。

**農具** 鋏は、中期後半以後は方形柄孔を穿った直柄鋏が浸透し円形柄孔の鋏がほぼ消失したことが周辺地域と同様の傾向にあることが確認された。又鋏も周辺地域と大差ないものの、平鋏は平面形が長方形の「糸島型」が主流である点が特徴である。なお、福岡平野と境を接する今宿五郎江遺跡では「吊鐘型」の割合が高いが、弥生時代後期を主体とすると考えられていることから、時期差ととらえるか地域差であるのかさらなる検討が必要であろう。

曲柄鋏は平鋏の身部が3点、小形のバチ鋏が1点出土した。柄は膝柄4点、反柄1点が確認され、いずれも平鋏用とみられる。糸島地方のこれまでの調査で今宿五郎江遺跡、元岡・桑原遺跡でも出土が報告されており、当該地方において一定の割合で使用されていたことがわかる。いずれも平鋏のうち刃幅が狭い狭鋏で中央が膨らむナスビ状を呈し軸部が幅広の板状を呈することが共通する。曲柄鋏は弥生時代中期に山陰、中部地方において出現・拡散されるとされてきたが、曲柄鋏出現のプロセスを考えるうえで興味深い。

**漁労具** 組み合わせ式や単体のヤス、モリ状刺突具などが出土した。他に九州型石錘、軽石製の浮子なども出土していることから漁労活動も活発であったことがうかがえる。これら製品の多くは完形品であることから、土器や木器と同様に祭祀に用いられた可能性がある。

**運搬具** 舟材と櫂（弥生時代中期後半～中期末）は、漁労具と合わせ海上交通、漁労活動の実態を探る上での好資料である。

組み合わせ式の背負梯子は、弥生～古墳時代を通じて使用形態を保った状態で出土した唯一の例であり、2種が同時に出土したことでその構造の差異を知ることができ、また新たな課題も見いだされた。これらの機能の推定にはなお慎重な検討を望む見解も記されており（註）、さらなる検討が必要であろう。

（註）織野英史1995「上籬子遺跡出土背負梯子形木製品について」『民具マンスリー』284 神奈川県日本常民文化研究所

**食事具** 大型杓子は縦柄杓子、斜柄杓子、横杓子が出土している。縦柄、斜柄杓子の形状にはバリエーションがある。柄頭にみられる突起状の削り出しは縦柄杓子と斜柄杓子では形状が異なっており、掬い部の平底と丸底の形状差とともに用途や製作時期差の相違を予見させる。

また、3層に伴う柄が「く」の字に湾曲する横杓子W294、W476との明確な形状差もまた、相互の層位の一定の時間経過を反映したものと理解することができる。

**容器** 容器W322、W324、W325は、胴部にエンタシス上に膨らみを持つことが特徴で、里田原、今宿五郎江遺跡出土容器とも共通する。既に知られている漆塗容器蓋（註）とともに朝鮮半島に系譜をもつもので、かの地との交流の深さを示す資料といえる。

四脚を削り出した容器のうちW335、W337は、四脚動物を意識したもので、祭祀に用いられた器物と考えられる。これら意匠や祭祀の出自も興味深い。

（註）岡部裕俊20018「伊都国歴史博物館所蔵の弥生～古墳時代木器」『伊都国歴史博物館紀要13』

**楽器** 琴、琴板と推定される板材が複数枚出土しているが、いずれも破損品であり全体を把握できる資料がないことは惜しまれるが、これらは祭祀儀礼に伴い意図的に破壊されたものである可能性が高いと考えられ、その残存形態も祭祀の様相を示す資料として価値がある。

**祭祀具** 本遺跡において注目を集めた資料のひとつに人物、動物線刻板の出土があげられる。銅鐸、土器を中心とする絵画資料の新たな画材として木器が注目されるとともに、北部九州においては弥生時代中期の絵画研究においても資料増加の一端も担うこととなった。

人物線刻板は、人物が刻まれた面の裏側が炙られ、その後、複合鋸歯文が彫られていることから、使用時の時間経過、情景をイメージすることができる。

鹿をはじめとする様々な線刻は琴や琴板などの楽器に施されている。元岡42・52次調査でも、線刻琴、琴板が出土し、さらに動物形の土製品や人形などが出土している状況も上籬子遺跡と類似しており、当該地域に共通する祭祀具であったと考えられる。

また、描かれたモチーフの描き手は複数であったと考えられることから、祭祀における具体的行為の様相をうかがわせる貴重な資料である。

**建築材** 5層から堅穴住居の柱、梁材、高床建物の構成材である刻み梯子、形態の異なる鼠返しが多く出土している。この他の材を含めて丘陵部で検出した堅穴住居、高床式建物などの遺構の調査成果との相互検証も期待される。

## (3) 石器

石包丁は未製品の出土数が多いことには留意しておきたい。集落において細部調整が行われていたことを示すとともに祭祀で使用された可能性もある。



石錘、浮子の出土、また、石碇と考えられる大型の平石も出土しており、当該遺跡の生業における漁業の占める比重の高さを示す資料といえる。九州型石錘の出土も留意しておきたい。

#### (4) 貨泉・装身具

貨泉は4区の3～4層間から出土したが、共伴する高三瀞式前半期の土器の暦年代を推定するうえで好資料といえる(註1)が、その出土状況も興味深い。同層の7区ではガラス小玉が一塊となって出土し、意図的に置かれたものと推定された。

ガラス小玉は糸島地方の弥生時代後期社会において墳墓の副葬品として出土することが多く、かたや貨泉も三坂七尾遺跡では弥生時代後期の土壙墓に副葬される例があり、出土状況から一定のステイタスを示す副葬品として扱われたと考えられる。

一方、今宿五郎江遺跡第12次調査では、井泉木柵の裏込めから石錘、鉄鎌などとともにガラス小玉、貨泉が出土し、祭祀的な意図のもとに埋め込まれた可能性が指摘されており(註2)、当該遺跡においてもガラス玉や貨泉などが祭祀的な性格を帯びて投棄された可能性があり、当該地域における中国銭貨の用途を考えるうえでも興味深い。

(註) 1 寺澤薫2003「時は銭なり」『初期古墳と大和の考古学』学生社

森岡秀人2003「貨幣」『東アジアと日本の考古学Ⅲ 交流と交易』同成社

(註) 2 加藤隆也2010『今宿五郎江 8』18頁 福岡市教育委員会



貨泉X線透過写真

### 3. おわりに

最後に当該集落における生業形態・対外的な交流活動について谷部の出土遺物からみてみよう。

弥生時代中期後半～末では農耕具が多く出土し、石包丁も相当数出土していることから、農業とくに水稲耕作に従事していたことは想像に難くない。5層の土壌の花粉分析によれば、近郊において水田耕作が行われていたとする報告もこのことを裏付ける。

他方、木製農耕具は土木具として周辺一帯の開発にも駆使されたであろうことも想定され、集落や谷部のテラス状方形区画の造成などにも利用されたものと考えられる。

一方、舟、櫂、ヤス、石錘、浮子など海上交通や漁労活動に関する資料も豊富に出土していることから、活動にも従事していたことがわかる。また、3～4層では豊前・瀬戸内系の土器も認められ、弥生時代後期前葉にはこれらの地域との交流にも関与していたことが想定される。これと似た様相は三雲・井原遺跡や今宿五郎江遺跡でも認められ、瀬戸内海沿岸地域と伊都国との活発な交流をうかがわせる。

なお、海を介した活動を想定した場合、上鑑子遺跡は今宿五郎江遺跡などの臨海型の集落とは立地環境が異なり、古加布里湾に面した旧多久川河口から2.5kmほど奥まって位置することは留意しておく必要がある。遺跡からは海を直接的に臨むことができず、本来は海を基盤とした生活には不向きな立地環境といえ、集落の成立背景については改めて検討しなければならない。

また、糸島地方では上鑑子遺跡と同様に弥生時代中期後半に一定規模を有する集落が突如として出現する傾向が強い。今宿五郎江遺跡、元岡桑原遺跡、深江井牟田遺跡などはその典型であり、伊都国成立期の地域様相を考えるうえで留意すべきであろう。

## 図 版



発掘調査中の上鑑子遺跡(手前中央の三角地)越しに可也山をのぞむ(1994年9月 南東から)